東京大学東アジア藝文書院2021年度報告書

のぞみを開く

2021

The Annual Report of

East Asian Academy for New Liberal Arts

東京大学東アジア藝文書院2021年度報告書

のぞみを開く

2021

The Annual Report of

East Asian Academy for New Liberal Arts

EAA | 東京大学東アジア藝文書院

EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS, UTokyo

目　次

ご挨拶 …… 3

2021 年度の年次活動報告に当たって …… 5

歳時記 …… 7

時系列INDEX …… 8

活動報告 春（～6月）…… 15

活動報告 夏（7月～9月）…… 143

活動報告 秋（10月～12月）…… 237

活動報告 冬（1月～3月）…… 337

資料集 …… 427

2021 年度EAA開講科目リスト …… 428

2021 年度プログラム生属性リスト …… 429

2021 年度EAAメンバーおよび連携教員リスト …… 430

EAA刊行物リスト …… 432

EAAラジオリスト …… 434

EAAメディア関連リスト …… 435

RESEARCH UNIT別INDEX …… 436

TOPIC別INDEX …… 438

ご挨拶

中島隆博
東アジア藝文書院院長

2021 年度もまた、2020 年度に引き続き、新型コロナウィルスに翻弄された一年となりました。しかし、昨年度と異なり、ロシアのウクライナ侵攻という現実の戦争が勃発し、世界を取り巻く危機はさらに深まってしまいました。この危機の構造を明らかにし、わたしたちの社会的想像を根本から変えることが求められています。

東アジア藝文書院は、その多様な活動を通じて、歴史を振り返り、現在を洞察し、未来を構想するということを続けて参りました。その記録をこのように皆さまにお届けできることを、院長として心より感謝申し上げます。

この 1 年間は、価値について掘り下げて考えた時間でした。「空気の価値化」が東大とダイキン工業との間の協創における重要な柱なのですが、東アジア藝文書院では、価値そのものを問い直す試みを中心に据えて参りました。その上で、わたしたちは、人間のあり方の刷新に繋がる人間的価値と、社会のあり方の刷新に繋がる社会的価値を考えなければならないと考えるようになりました。

人間的価値に関して言えば、従来の人間中心主義的な人間観すなわち 19 世紀のヒューマニズムを見直す必要があります。その代わりに、人間以外の生物や自然環境とエコロジカルな共生を行い、思いやりやケアにもとづく連帯を作り上げ、人間がより人間的になっていくことに価値を見出すべきではないでしょうか。それは、従来の人間観を象徴的に示している Human Being すなわち存在という神に伸びていくような概念に貫かれた人間観から、Human Co-becoming すなわち他者とともに人間的になっていくような変容する人間観への転換を意味します。

社会的価値は、そうした Human Co-becoming としての人間観に基づきながら、複数の人間がともにその生を豊かにしうるようなものです。それは、宇沢弘文先生の言う社会的共通資本（教育や医療さらには社会的インフラや自然環境）のように、市場に任せてはいけない共通財に加えて、ESG 投資やインパクト投資さらには無形資産のように、市場においても尊重されるべき価値を含みます。

この社会的価値を実現するためには、社会的価値に関する意志決定の仕組みを整備しなければなりません。それはまさに民主主義のアップデートに関する問題なのです。ここで、わたしたちはどのような社会を望むのか、そしてそのためにはどのような社会的価値を優先するのかについて、民主的な熟議がなされる必要があるのです。

東アジア藝文書院では、こうした問いを、多方面から粘り強く考えて参りました。ボン大学とニューヨーク大学とともに、学部生と一緒に Winter Institute で考えたことはとりわけ印象に残っています。それ以外にも、数多くの座談会やシンポジウム、ワークショップ、ダイアローグ等々を行ってきました。また、ダイキン工業の皆さまとも昨年度に引き続き、さまざまなチャンネルを通じて、議論を深めることができました。これらの思考や討議こそが、民主主義のアップデートを支えるものなのです。

わたしたちが開いたのぞみを、是非多くの方々にもご覧いただきまして、ご意見を賜ることができましたら実に幸いです。

2022 年 3 月 8 日

2021年度の
年次活動報告に当たって

石井 剛
東アジア藝文書院副院長

2019年に発足した東アジア藝文書院（EAA）は、最初の3年をプロジェクトの第1期と位置づけております。2021年度はその最終年度です。北京大学とのジョイントプログラムとしてスタートしたEAAの活動は、学部教育プログラム「東アジア教養学」を計画通りに設立したことをのぞくと、それ以外のほとんどが予期せぬ展開となりました。英語、中国語、日本語の3言語を駆使して東アジアから新しい普遍に向かう知的想像力を育む、そのために東アジアを研究の対象ではなく関与の対象として、そこに根ざしながらよりよき世界を構想すること。これらが当初抱いていた理念の骨子でした。それがこの3年間でどのように発展していったか、簡単に振り返ってみたいと思います。

2019年度の出発点には「世界」と「人間」を問い直すこと――「世界人間学」――が課題となりました。世界哲学、世界史学、世界文学、そして社会・環境・健康という四つのカテゴリーがリサーチ・ユニットを形成し、「世界」の中にありながら「世界」そのものを創造している存在である「人間」が、今日の諸条件においていかに新しい人間へと自らを変容させていくべきかを探究することが中心的な課題となりました。2020年度に直面したCOVID-19パンデミックは奇しくもこの問いをより喫緊の課題として捉え直す契機となりました。2021年度には、世界人間学として取り組むべき具体的な課題に「価値」という概念があることに思い至り、ボン大学やニューヨーク大学とも協働しながら新しい探索が始まりました。

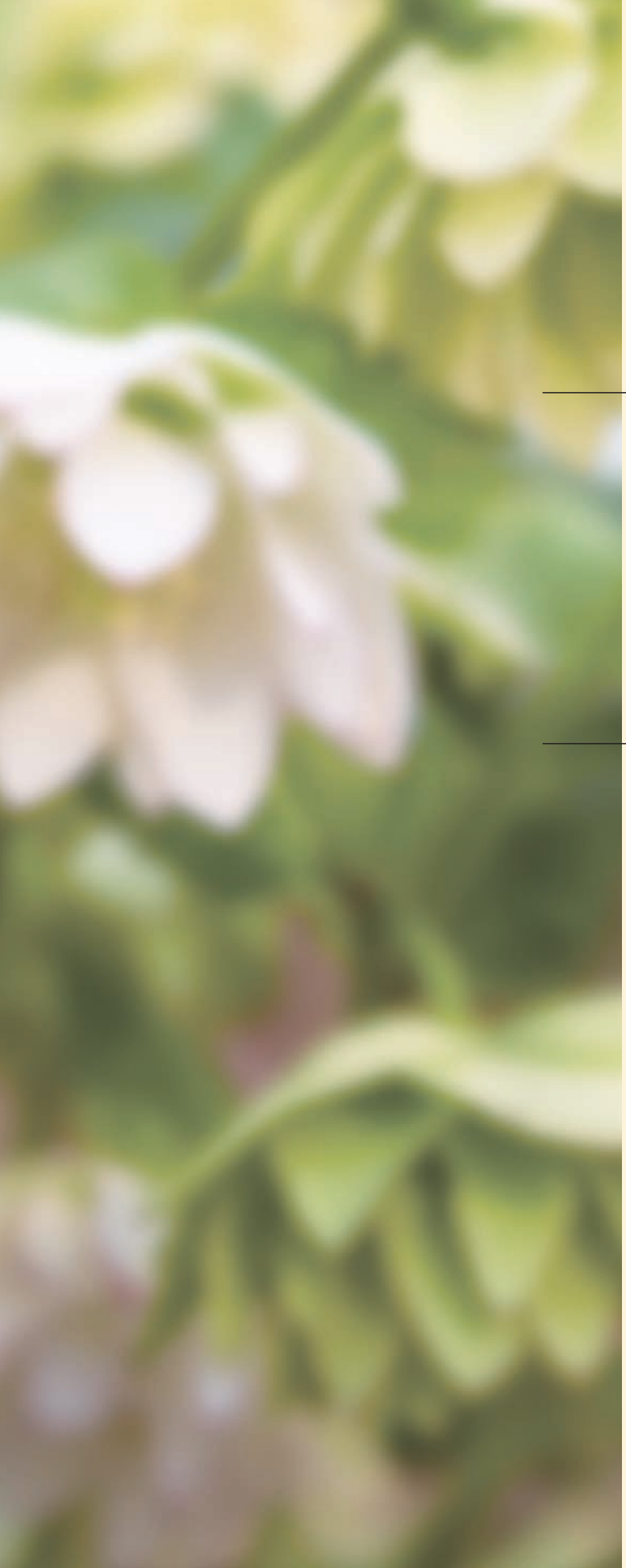
「書院」という名称には、研究と教育が相補的に関わることで新しい学問を生みだすという考えが込められています。この3年の実践を通じて、「書院」は学問が営まれる場として特別な響きを持つ象徴へと変わっていきました。パンデミックに起因するテレコミュニケーションの拡大は、学問における身体の重要さを再確認させてくれました。これは寝食を共にした伝統的書院への再評価を一気に高めることであったと思います。国際的に最先端の研究者たちと問いを共有していく機会が大きく削がれてしまったことはきわめて残念でしたが、その一方で、制作（テクネー）と知識（エピステーメー）を統合する知としての「藝」を試みるチャンスが到来しました。具体的な例として一高プロジェクトが挙げられます。これには映像制作ワークショップと藤木文書アーカイヴという活動がセットになっており、これらが両輪となって、技術、身体、言語が総合的に作用しながら、知が生産され、蓄積され、参照と利用が可能なものへと成長を遂げていくプロセスをわたしたちは経験しました。

そして、最も重要なこととして特筆すべきは、新しい学問が行われる「場」について、わたしたちのビジョンが明確になったことです。これにはダイキン工業株式会社との協創関係が決定的な役割を果たしました。すなわち、学問の場は、市場価値では測りがたい抽象的な価値――それは人間のあらゆる活動を条件づけるものです――を探究する場として固有の価値を持ち、かかる価値の探究のためにこそ、大学と産業社会との協働が要請されるということです。来るべき「書院」は、社会に開かれ、社会と共に、世界と人間のよりよい未来に向かう智慧を養う場として機能すべきである。そのような確信を得たのがこの 3 年間の大きな成果でした。

研究、教育、社会連携が三位一体となった新たな学問の「場」として、EAA という種子は弾けんばかりにに大きく膨らんでいます。今後の数年間を通じて、それはどのように芽吹き、成長していくことになるでしょうか。いまからわくわくしながらその未来を楽しみにしています。

さまざまなかたちでご支援をくださった方々への感謝の念はことばに尽くせないほどです。どうぞこれからも学問への「のぞみ」を共にし、温かいご支援を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

2022 年 3 月 10 日



2021年度活動報告

歳時記
さ い じ き

時系列 ● INDEX

活動報告 ● 春 （～6月）

活動報告 ● 夏 （7月～9月）

活動報告 ● 秋 （10月～12月）

活動報告 ● 冬 （1月～3月）

時系列 INDEX

日時	活動内容	該当頁
活動報告書 ● 春（～6月）		
2020.12.28	第 3 回『天下的当代性』を読む会	16
2021.3.16	第 1 回「部屋と空間プロジェクト」研究会	18
2021.3.17	EAA 国际研讨会〈一高中国留学生与 101 号馆历史〉	20
2021.3.20	第 5 回 日中韓オンライン朱子学読書会	25
2021.3.21	第 9 回 痛みの研究会	26
2021.3.22	EAA Wokrshop “Identity and Movements”	28
2021.3.25	連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」 第 2 回 世界における日本哲学を再考する	30
2021.3.29	話す／離す／花す (12)	34
2021.3.31	The 5th EAIHN Online Seminar	35
2021.3.31	第 8 回 EAA ダイアローグ 宮本久雄氏×中島隆博氏	37
2021.4.01	EAA キックオフトーク「価値と価値化を問う」	39
2021.4.02,03	YCAM 訪問記 ホー・ツーニェン「ヴォイス・オブ・ヴォイド――虚無の声」	41
2021.4.06	藤木成彦氏インタビュー：「藤木文書」調査へ向けて	43
2021.4.09	第 1 回 学術フロンティア講義	46
2021.4.12	第 22 回〈現代作家アーカイヴ〉文学インタヴュー　松浦寿輝氏	47
2021.4.15	EAA フェローからの便り：ケンブリッジからの報告	49
2021.4.16	第 2 回 学術フロンティア講義	51
2021.4.17	第 15 回 石牟礼道子を読む会	54
2021.4.23	第 3 回 学術フロンティア講義	58
2021.4.24	〈経験〉を見つめ直すための哲学――メルロ＝ポンティと考える身体・他者・言語	60
2021.4.27	第 16 回 石牟礼道子を読む会	63
2021.4.27	東アジア教養学「世界歴史と東アジアⅢ」中江兆民『三酔人経綸問答』を読む	64
2021.4.30	連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」 第 3 回 哲学の領域横断的対話を求めて	65
2021.4.30	第 4 回 学術フロンティア講義	71
2021.5.06,07,14	International Conference “Reality and Fiction in Philosophy and Literature”	73
2021.5.07	第 5 回 学術フロンティア講義	75
2021.5.08	第 1 回 東アジア仏典講読会	78
2021.5.10,17	東アジア教養学「世界歴史と東アジアⅢ」幸徳秋水『廿世紀之怪物帝国主義』を読む	79
2021.5.14	北京大学元培学院 东亚研究联合项目宣讲会 东大方代表致辞	80
2021.5.17	映像制作メモランダム (1)	83
2021.5.18	第 17 回 石牟礼道子を読む会	84

日時	活動内容	該当頁
2021.5.21	第 1 回 EAA 沖縄研究会	87
2021.5.21	第 6 回 学術フロンティア講義	89
2021.5.22	第 6 回 日中韓オンライン朱子学読書会	91
2021.5.23	話す／離す／花す (13)	93
2021.5.25	第 18 回 石牟礼道子を読む会	94
2021.5.28	第 7 回 学術フロンティア講義	96
2021.5.29	第一次电影评说会 芙蓉镇的主人公	98
2021.5.31	連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」 第 4 回 中世と近世のあわい	101
2021.5.31	映像制作メモランダム (2)	104
2021.6.01	映像制作メモランダム (3)	105
2021.6.03	第 2 回「部屋と空間プロジェクト」研究会	106
2021.6.04	映像制作メモランダム (4)	108
2021.6.04	第 1 回 EAA 若手研究者研究会	108
2021.6.04	第 8 回 学術フロンティア講義	110
2021.6.08	「藤木文書アーカイヴ」プロジェクト始動――歴史に直に触れることから	113
2021.6.10	映像制作メモランダム (5)	115
2021.6.11	第 2 回 EAA 沖縄研究会	116
2021.6.11	第 9 回 学術フロンティア講義	119
2021.6.12	新作能「沖宮」視察――石牟礼道子原作の能舞台を見て	121
2021.6.12	第 2 回 東アジア仏典講読会	122
2021.6.15	第 19 回 石牟礼道子を読む会	123
2021.6.15	東アジア教養学「世界歴史と東アジアⅢ」 鶴見俊輔『戦時期日本の精神史：1931 ～ 1945 年』を読む	125
2021.6.18	第 10 回 学術フロンティア講義	127
2021.6.21,28	東アジア教養学「世界歴史と東アジアⅢ」 伊波普猷「 古琉球の政教一致を論じて経世家の宗教に対する態度に及ぶ」を読む	129
2021.6.24	藤木文書アーカイヴ・レクチャー 丹羽みさと氏「駒場博物館の一高資料の整理とその活用法について」	131
2021.6.25	第 11 回 学術フロンティア講義	133
2021.6.26	EAA Workshop “Cinema and Ideology”	135
2021.6.28	EAA-NUS Seminar “Expectation on the family: Policies to encourage filial support in Asia”	138
2021.6.29	第 20 回 石牟礼道子を読む会	139

活動報告書 ● 夏（7～9月）

2021.7.02	第 12 回 学術フロンティア講義	144
2021.7.05	第 21 回 石牟礼道子を読む会	146
2021.7.08	第 6 回 EAA ブックトーク	147
2021.7.09	第 13 回 学術フロンティア講義	149
2021.7.10	第 3 回 東アジア仏典講読会	151

日時	活動内容	該当頁
2021.7.10	田仲一成先生へのインタビュー：一高から教養学部への過渡期について	153
2021.7.12	第 9 回 EAA ダイアローグ 高橋哲哉氏×中島隆博氏	156
2021.7.12,19, 29	東京カレッジ主催（EAA 共催）シンポジウム・シリーズ「人文社会科学の未来」	158
2021.7.12	第 22 回 石牟礼道子を読む会	146
2021.7.13	工藤康氏へのインタビュー：昭和 23 年、一高最後の入学生として	159
2021.7.14	EAA セミナー「東アジアからの批評理論」合同発表会	162
2021.7.16	第 7 回 日中韓オンライン朱子学読書会	164
2021.7.17	2021 年紹興元培フォーラム（EAA 分科会）	165
2021.7.19	映像制作メモランダム (6)	167
2021.7.21	映像制作メモランダム (7)	168
2021.7.22	連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」 第 5 回 世界哲学における「尊厳」概念	169
2021.7.22,26	連続討論会――ラファエル・リオジエ『男性性の探究』をめぐって	176
2021.7.24	GSI Caravan Project “Conditions of Sovereignty” The 1st Workshop	178
2021.7.29	第 3 回「部屋と空間プロジェクト」研究会	181
2021.7.30	第 3 回 EAA 沖縄研究会	183
2021.8.02	The 6th EAIHN Online Seminar	185
2021.8.04	「藤木文書アーカイヴ」共同発表会	186
2021.8.05	第 5 回 EAA 座談会「「人間」を価値化する」	188
2021.8.10	第 23 回 石牟礼道子を読む会	190
2021.8.12	EAA Global Lecture Series The 1st lecture “Approaches to researching Somali poetry” By Dr. Martin Orwin	192
2021.8.14	第 6 回 ジャーナリズム研究会	194
2021.8.23	近世ヨーロッパの文化と東アジア研究会 東アジアへの西欧の知の伝播の研究 2021 年度第 1 回 公開研究会	197
2021.8.25	連続講義「東亜経典与世界漢学」	198
2021.8.26	第 2 回 EAA 若手研究者研究会	199
2021.8.26	話す／離す／花す (14)	201
2021.8.28	旧制高等学校記念館「第 25 回夏期教育セミナー」	202
2021.8.28	第 8 回 日中韓オンライン朱子学読書会	203
2021.8.31	第 24 回 石牟礼道子を読む会	205
2021.9.02	[EAA Book Review-05] Nobuo TSUJI, *Revolutionary Artists in Eighteenth-Century Kyoto: Shohaku, Jakuchu, Okyo and Others*	207
2021.9.02	第 1 回 EAA 批評研究会	209
2021.9.05	EAA Summer Institute 2021 Day 0	211
2021.9.06	EAA Summer Institute 2021 Day 1: Prof. Maki Sato and Ms. Meng Tianyu Lectures	212
	EAA Summer Institute 2021 Day 1: Prof. Naoko Ishii Lecture	213
2021.9.07	EAA Summer Institute 2021 Day 2: Student Presentations	215
2021.9.09	ウェブサイトのこと	217

日時	活動内容	該当頁
2021.9.09	国立中山大学中文系連続シンポジウム 「文化横断的漢学の共生プラットフォーム（跨文化漢學的共生平台）」	219
2021.9.10	第 4 回「部屋と空間プロジェクト」研究会&第 7 回 EAA ブックトーク	220
2021.9.11	第 4 回 東アジア仏典講読会	223
2021.9.13	藤木文書アーカイブ・東大文書館訪問――森本祥子氏の手引きのもとに	225
2021.9.14	第 25 回 石牟礼道子を読む会	205
2021.9.14	EAA シンポジウム「明治日本における東アジア哲学の起源」	226
2021.9.15	EAA セミナー「デジタル資本主義と価値革命」	228
2021.9.25	第 9 回 日中韓オンライン朱子学読書会	230
2021.9.27	EAA セミナー「「文化」をめぐる対立と「人民＝ピープル」の不在――コロナ禍への対応をめぐって」	231
2021.9.27	第 10 回 EAA ダイアローグ　國分功一郎氏×王欽氏	233
2021.9.28	第 26 回 石牟礼道子を読む会	234
2021.9.29	空気と空間と人づくり	235

活動報告書 ● 秋（10～12月）

2021.10.04	EAA ユース卒業生の訪問	238
2021.10.05	EAA Global Lecture Series The 2nd lecture “Interactive Analysis, Language Barriers and Medical Consultations” By Dr. Shuangyu Li	239
2021.10.05	第 4 回 EAA 沖縄研究会	241
2021.10.14	EAA Workshop “From Input to Asset: Human Capital Revisited”	243
2021.10.16	東京大学 GSI キャラバンプロジェクト「主権の諸条件」第 2 回 ワークショップ	244
2021.10.16	第 5 回 東アジア仏典講読会	246
2021.10.19	第 27 回 石牟礼道子を読む会	248
2021.10.21	The 7th EAIHN Online Seminar	251
2021.11.01	文庫化記念公開シンポジウム『近代世界の公共宗教』再読	252
2021.11.02	ダイキンアレス青谷訪問の記	254
2021.11.04	EAA シンポジウム「コロナ禍における藝術の理論と実践」	257
2021.11.06	東京大学 GSI キャラバンプロジェクト「主権の諸条件」第 3 回 ワークショップ	260
2021.11.10	[EAA Book Review-06] Bunri Usami, *Chinese History of Art Theory*: *Philosophical Discourses*	263
2021.11.12	第 2 回 EAA 批評研究会	265
2021.11.13	中島隆博『危機の時代の哲学――想像力のディスクール』書評会	268
2021.11.14	EAA 国際ワークショップ「石牟礼道子を読む――世界と文学への問い」	269
2021.11.19	第 5 回 EAA 沖縄研究会	273
2021.11.19	第 23 回〈現代作家アーカイヴ〉文学インタヴュー 町田康氏	274
2021.11.20	日本におけるスピノザ受容をめぐるワークショップ（2）	276
2021.11.22	連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」 第 6 回 世界哲学と宗教	278
2021.11.24	『conception - こもり -』上映会	279
2021.11.25	映像制作メモランダム（8）	282

日時	活動内容	該当頁
2021.11.26	第 1 回 オンライン連続講座「知の継承（バトン）」	283
2021.11.26	第 1 回 EAA「民俗学×哲学」研究会	286
2021.11.26	映像制作メモランダム (9)	287
2021.11.27	東京大学 GSI キャラバン・プロジェクト 「群島と太洋の思想史――太平洋のグローバル・ヒストリー」第 9 回研究会	289
2021.11.29	石牟礼道子を読む会・寄り道編「染めと織りのワークショップ」	290
2021.11.30	映像制作メモランダム (10)	293
2021.12.02	第 5 回「部屋と空間プロジェクト」研究会	294
2021.12.04	近世ヨーロッパの文化と東アジア研究会 東アジアへの西欧の知の伝播の研究 2021 年度第 2 回 公開研究会	296
2021.12.06	The 8th EAIHN Online Seminar	297
2021.12.07	EAA ワークショップ「再興する書院――アジアからの新たなリビング・ラーニング・コミュニティ」	299
2021.12.08	話す／離す／花す (15)	301
2021.12.09	EAA Global Lecture Series The 3rd lecture “Green with Milk & Sugar: When Japan Filled America’s Tea Cups” By Dr. Robert Hellyer	303
2021.12.10	From *Seele* to Mind: A Sociological Study of Knowledge On the Rationalization of Psychoanalysis	304
2021.12.10	悦びの記＃ 1	306
2021.12.10	第 6 回 EAA 沖縄研究会	307
2021.12.11	第 6 回 東アジア仏典講読会	308
2021.12.14	高山花子『モーリス・ブランショ――レシの思想』合評会	309
2021.12.15	Why do we hate each other ? —Understanding hatred through historical perception gaps	310
2021.12.16	Graduate Students Conference: Good Life, Emotions, and the Senses in Asian Philosophy (Day 1)	312
2021.12.17	Graduate Students Conference: Good Life, Emotions, and the Senses in Asian Philosophy (Day 2)	314
2021.12.17	第 2 回 EAA「民俗学×哲学」研究会	316
2021.12.18	東京大学 GSI キャラバンプロジェクト「主権の諸条件」第 4 回 ワークショップ	318
2021.12.18	『渦動する象徴――田辺哲学のダイナミズム』書評会	320
2021.12.20	EAA Global Lecture Series The 4th lecture “The Nonhuman in African Philosophy” By Prof. Alena Rettová	321
2021.12.22	第 1 回 EAA 研究会「東アジアと仏教」	323
2021.12.23	第 3 回 EAA 批評研究会	325
2021.12.25	第 10 回 日中韓オンライン朱子学読書会	327
2021.12.27	「部屋と空間プロジェクト」シンポジウム	328
2021.12.28,29	第 28 回石牟礼道子を読む会	333

活動報告書 ● 冬（1月～3月）

2022.1.08	ホー・ツーニェン「百鬼夜行」＆「旅館アポリア」視察	338
2022.1.11	話す／離す／花す (16)	340
2022.1.14	悦びの記＃ 2	341
2022.1.14	第 3 回 EAA「民俗学×哲学」研究会	342

日時	活動内容	該当頁
2022.1.14	第 7 回 EAA 沖縄研究会	343
2022.1.18	第 29 回石牟礼道子を読む会	344
2022.1.19	悦びの記# 3	346
2022.1.19	鵬程万里 05：RA 任期を終えて 高原智史	347
2022.1.24	第 1 回 EAA 連続ワークショップ「中国近代文学の方法と射程」 張潔宇氏講演「魯迅の雑文をどのように理解すべきか」	349
2022.01.25	映像制作メモランダム (11)	350
2022.01.26	EAA シンポジウム「仏教と哲学の対話」	352
2022.1.26	岩津航『レトリックの戦場――加藤周一とフランス文学』公開合評会	356
2022.1.28	第 4 回 EAA 批評研究会	361
2022.1.29	第 7 回 東アジア仏典講読会	364
2022.2.02	第 30 回 石牟礼道子を読む会	366
2022.2.03	第 6 回「部屋と空間プロジェクト」研究会	367
2022.2.06	EAA 沖縄研究会シンポジウム：「琉球」再考	369
2022.2.06	悦びの記# 4	371
2022.2.07	第 2 回 オンライン連続講座「知の継承 (バトン)」	372
2022.2.07	映像制作メモランダム (12)	375
2022.2.08	The 9th EAIHN Online Seminar	376
2022.2.08	連続公開イベント 第 1 回 フランスにおけるジェンダー論争	378
2022.2.08	話す／離す／花す (17)	380
2022.2.09	Winter Institute Day 1, Prof. Maria Adele Carrai	381
	Winter Institute Day 1, Prof. Noburu Notomi	383
	Winter Institute Day1, Prof. Aimee van Wynsberghe	384
2022.2.10	Winter Institute Day 2, Prof. Xudong Zhang	385
	Winter Institute Day 2, Prof. Takahiro Nakajima	386
	Winter Institute Day 2, Prof. Markus Gabriel	387
2022.2.11	EAA シンポジウム「死から生の価値を問い直す」	388
2022.2.12	第 8 回 東アジア仏典講読会	390
2022.2.17	EAA ワークショップ 女性のいない民主主義と「K- フェミニズム」文学の越境 ――日本における『82 年生まれ、キム・ジヨン』の翻訳受容現象を中心に	392
2022.2.18	悦びの記# 5	394
2022.2.22	連続公開イベント 第 2 回 フランス・カトリック教会と性的スキャンダル	395
2022.2.25	第 4 回 EAA「民俗学×哲学」研究会	396
2022.2.27	リベラルアーツとしての映画制作とは？ ――東京大学東アジア藝文書院『籠城』制作チームトーク	398
2022.3.01	連続公開イベント 第 3 回 フランスにおける宗教的状況の特殊性	401
2022.3.03	EAA Workshop “From Manners to Rules: Explaining More Legalistic Approaches to Governance in Japan and South Korea”	402
2022.3.03	文運日新 02：離任にあたって――前野清太朗	404
2022.3.03	鵬程万里 06：RA 任期を終えて 丁乙	405

日時	活動内容	該当頁
2022.3.04	東京大学 GSI キャラバン・プロジェクト 「群島と大洋の思想史――太平洋のグローバル・ヒストリー」第 11 回研究会	407
2022.3.04	文運日新 03：離任にあたって――田村正資	408
2022.3.04	鵬程万里 07：RA 任期を終えて 小手川将	409
2022.3.04	鵬程万里 08：RA 任期を終えて 宮田晃碩	410
2022.3.07	2021 Autumn Semester PKU Exchange Report	412
2022.3.07	文運日新 04：離任にあたって――佐藤麻貴	414
2022.3.07	文運日新 05：離任にあたって――片岡真伊	415
2022.3.07	鵬程万里 09：RA 任期を終えて 日隈脩一郎	416
2022.3.08	The 10th EAIHN Online Seminar	417
2022.3.09	第 2 回 EAA 研究会「東アジアと仏教」	418
2022.3.09	第 24 回〈現代作家アーカイヴ〉文学インタヴュー 川上弘美氏	419
2022.3.09	人文社会科学系組織連絡会議共同シンポジウム「人文社会科学の構想力」	421
2022.3.09	第 5 回 EAA 批評研究会	
2022.3.11	第 5 回 EAA「民俗学×哲学」研究会	
2022.3.11	近世ヨーロッパの文化と東アジア研究会 東アジアへの西欧の知の伝播の研究 2021 年度第 3 回公開研究会	
2022.3.11	第 2 回 EAA 連続ワークショップ「中国近代文学の方法と射程」 程凱氏講演「“社会史視野”如何深入一部作品――以柳青的《种谷记》为例」	
2022.3.11	第 8 回 EAA 沖縄研究会	423
2022.3.16	東京大学 GSI キャラバン・プロジェクト 「「小国」の経験から普遍を問いなおす」国際ワークショップ	425
2022.3.16	シンポジウム「書院内部の学問と芸術」	
2022.3.17	「価値と現代社会―価値を問い直す」座談会	
2022.3.19	第 9 回 東アジア仏典講読会	
2022.3.20	第 7 回 ジャーナリズム研究会	
2022.3.22	【展覧会】もうひとつの一高 ――戦時下の一高留学生課長・藤木邦彦と留学生たち（～ 6 月 24 日）	
2022.3.24	EAA NOZOMI Collection 刊行記念若手研究者座談会	
2022.3.26	第 6 回 EAA「民俗学×哲学」研究会	
2022.3.26,27, 30,31	映画『籠城』上映会	
2022.3.28	EAA ワークショップ「政府と与党の関係における日韓比較 『立法前協議の比較政治――与党内不一致 と日韓の制度』（木鐸社、2021 年）を手がかりにして」	
2022.3.29	第 7 回「部屋と空間プロジェクト」研究会&第 8 回 EAA ブックトーク	
2022.3.29	『東アジアにおける哲学の生成と発展』書評会	
2022.3.30	未来哲学研究所 第 4 回シンポジウム オンライン開催 霊魂論の未来――情念・鎮魂・他者	
2022.3.31	EAA 座談会「時代の危機と哲学――回帰する亡霊に向き合う」	

2021年度活動報告

春～6月

第3回『天下的当代性』を読む会

2020年12月28日

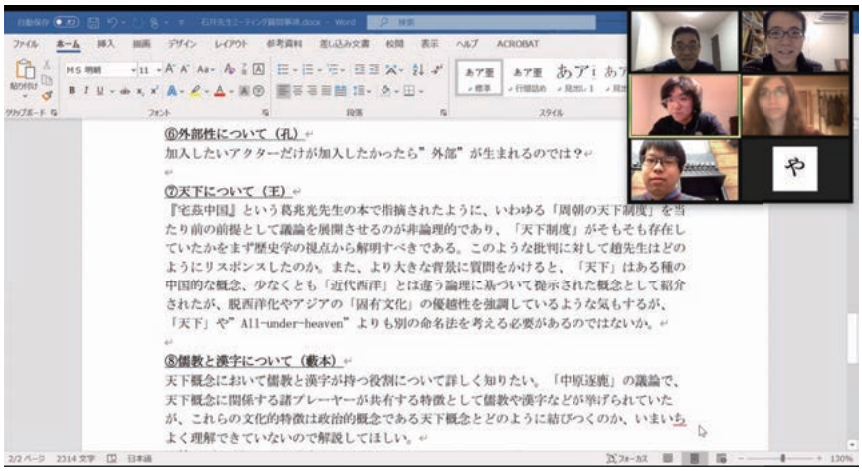
2020 年 12 月 28 日（月）15 時より、第 3 回『天下的当代性』を読む会が Zoom 上で開催された。当日の参加者は、石井剛氏（EAA 副院長）、ヴィクトリヤ・ニコロヴァ氏（総合文化研究科修士課程）、および孔徳湧氏、王嘉蔚氏、籔本器氏と報告者の円光門（以上 4 名は EAA ユース）の計 6 名である。

前 2 回で趙汀陽『天下的当代性――世界秩序的実践与想像』（中信出版集団、2016 年）を読み終えたため、第 3 回となる今回は、各参加者が本書全体に関する疑問点を提示し、石井氏からコメントをいただくという会になった。

まず円光が、趙汀陽の提唱する「天下」概念に基づいた世界秩序と、実際の中国共産党／政府が掲げる外交政策との関連性はどこまであるのかという疑問を提起した。石井氏は両者の関連性については不明確であるとした上で、もし関連があるとすれば、それは「学問と政治の距離関係をどう認識すべきか」という問題につながるものだと述べた。一般的に、哲学者が政府の政策を正当化する議論を展開することは、「学問と政治の癒着」として批判的な文脈で語られることが多い。だが石井氏によれば、学問と政治の関係は、前者が後者に取り込まれているか否かといった二分法で捉えきれるものではなく、より複雑なものである。『孟子』の中に、学問の役割は「王者の師となる」（為王者師）ことであるという一節があるが、この「王者」というのは、ただ 1 つの「国家」ではなくそれら全てを含めた「天下」を代表する者である。顧炎武は『日知録』の中で、国家は滅びても天下が滅びるわけではないとして両者を明確に区別した。つまり、学者が貢献すべき対象は前者ではなく後者なのである。このように考えると、趙汀陽が「天下」概念に基づいた世界秩序を提唱したことは、たしかに中国政府の外交政策に関わるものではあるかもしれないが、それを志向するのは中国という一国家に限られるものでは決してないのではないかと、石井氏は語った。

次に孔氏が（1）趙汀陽は「天下」を全てが内部化された外部性なき世界であると定義するが、外部性を排除している時点でそうした外部性を持つことにはならないだろうか、（2）「天下」は中心を持たない秩序だとされているが、そもそも中心なき秩序というものは可能であるのかという 2 点を質問した。石井氏は第 1 の問いに対し、「天下」はそれをより高次から

上段：左から順に石井剛氏（EAA 副院長）・円光門氏（EAA ユース）
中段：左から順にヴィクトリヤ・ニコロヴァ氏（総合文化研究科修士課程）・孔徳湧氏（EAA ユース）
下段：王嘉蔚氏・籔本器氏 (EAA ユース)



説明し得るようなメタ的な原理を持たない、いわば神学的な議論であるため、内部性が外部性によって規定されるといったようなカール・シュミットやミシェル・フーコーによく見られる議論とは全く異なるレベルに位置しているのだと答えた。第 2 の問いに関しては、たしかに中心の克服というのは難しい問題であり、日本においても、「近代の超克」や高山岩男『世界史の哲学』（岩波書店、1942 年）で展開された議論が「無」という概念を持ち出して中心を克服しようと試みたものの、結果的に失敗している。このように、中心を理論的に克服すること自体はできないかもしれないが、「天下」というのは常に革命の可能性を内包した、支配者の永続性を否定するシステムであるから、こうした可能性を担保していくことが、中心の持つ弊害をうまくなだめていく方法なのかもしれないと石井氏は述べた。

最後に籔本氏が、「天下」における漢字の役割とはどういうものかと尋ねた。具体的には、人が漢字を通じて世界を記述する際、人の精神が世界を見るのと同時に漢字もまた世界を見るのであり、故に漢字は「天下」が創造される際の重要な要素であるという議論が本書 196-197 頁でなされているが、これはどのような意味なのかという質問である。石井氏は、本書の「倉頡が文字を造った時、鬼神が夜に泣いた」という王充『論衡』が引用された箇所（本書 181 頁）に着目し、漢字が発明されたことで鬼神が泣いたのは、人間が文字を手にしたことでもはや魔術に惑わされることがなくなったからであると解説した。その上で、人間が漢字を使用する様子を趙汀陽が「摂魂」（魂を食らう）という言葉で表現したことを石井氏は指摘し、漢字を書くということは、魂＝魔術的なものを食らうような仕方で客観的な世界を記述することであると説明した。すなわち、漢字を用いる人間は、魂＝魔術的なものを食らうことによって、鬼神を斥けることで、自らが魔術を司る鬼神となったのである。こうして人間が得た魔術とは、歴史を記述することで世界を創造することのできる能力のことだと石井氏は語る。つまり「天下」という世界は、漢字が存在してこそ成立するものなのだ。

これに対してニコロヴァ氏は、歴史を記述することで世界を創造するという機能は、漢字だけでなく文字全般について言えることではないか、漢字とその他の文字の差異はどこにあるのかと尋ねた。石井氏いわく、漢字とアルファベットの決定的な差異は表意文字と表音文字の差にあるが、20 世紀初頭までは、アルファベットのような表音文字とは音、すなわち発話者の声によって表される文字であるため、声＝ロゴスに合致する論理的な文字だとされてきたのに対し、表意文字である漢字は音と切り離された形で表されるため、ロゴス的、論理的ではない文字だとされてきた。中国が近代化する過程で漢字廃止論を唱えた呉稚暉や銭玄同は、まさにこうした議論の提唱者である。このように声が文字に優位するという考え方は後にジャック・デリダによって「ロゴス中心主義」として批判される

ようになるが、趙汀陽が漢字の強みであるとするのは、まさに漢字が音と切り離されているという点である。つまり、漢字は音と切り離されているからこそ、高い包摂性を持つのであり、異なる音声の言語を用いる民族も漢字を通じて共通のコミュニケーション媒体を持つことができるのである。このようにして、漢字の存在が異なる民族を結び付け、包摂的で外部性のない世界、すなわち「天下」を可能にすると趙汀陽は論じているのではないかと、石井氏は最後に述べた。

以上の質疑応答をもって、第3回『天下的当代性』を読む会は終了した。ご多忙にもかかわらずお越しいただいた石井氏には深く感謝を申し上げたい。EAAユース第1期生が中心となって発足したこの読書会は今回でひとまずの区切りを迎えるが、今後もさまざまな書物について学生間で議論する場をつくっていきたいと考えている。

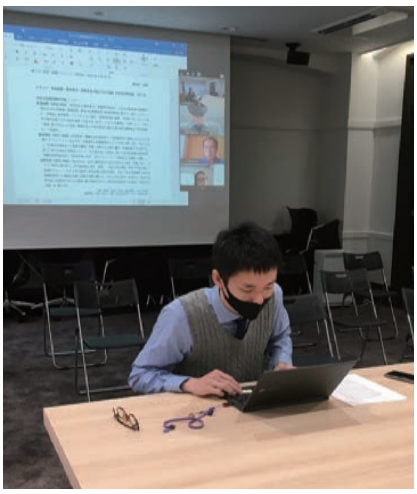
報告者:円光門(EAAユース)

第1回「部屋と空間プロジェクト」研究会

2021年3月16日

「部屋」とは何か。東アジア藝文書院は、「書院」という「部屋」の中で、日々研究活動を展開している。同じ場所を共有し、志を同じくした者が集い、学ぶ場である。とはいえ、コロナ禍の現状では「書院」に集うことは難しい。そこで私たちは、在宅勤務を始め、私たちの「部屋」にこもり、オンラインで研究に取り組み、仲間たちと交流している。

「部屋と空間プロジェクト」研究会は、我々にとって最も身近な「空間」である「部屋」という概念を手掛かりに、EAAメンバーの関心に共通する点を取り込みながら、「部屋」に関する様々な文献を皆で読み進め、何か新しい学問を提示できないかという思いで発足したものである。前野清太朗氏(EAA特任助教)の提案した「空間プロジェクト」が基盤にあり、高山花子氏(EAA特任助教)の「部屋」というアイディアに啓発を受け、若澤佑典氏(EAAフェロー)に、様々な「部屋」に関わる文献を紹介してもらった上で、3月16日(火)11時より第1回研究会(EAAセミナールームとZoomのハイブリッド方式)が開催された。

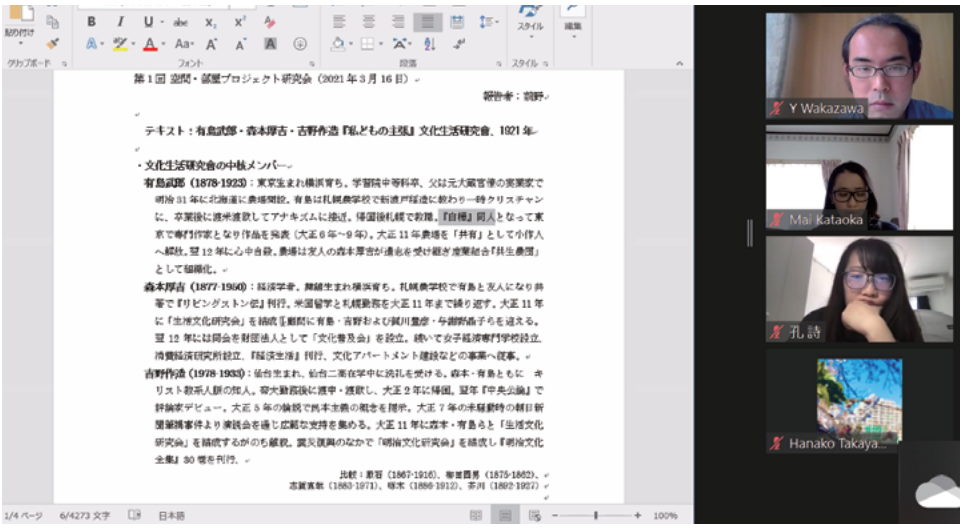


前野清太朗氏(EAA特任助教)

第1回研究会は前野氏が報告を担当し、大正時代の住宅論として、有島武郎・森本厚吉・吉野作造著『私どもの主張』(文化生活研究會、1921年)より、吉野作造の論考を取り上げた。参加者は前野氏、高山氏、若澤氏、田中のほか、片岡真伊氏(EAA特任研究員)、孔詩氏(人文社会系研究科)が参加した。

報告ではまず、文化生活研究会の中核メンバーについての説明があった。有島武郎(1878-1923)は、札幌農学校で新渡戸稲造に教わり一時クリスチャンとなり、卒業後に渡米渡欧してアナキズムに接近した。帰国後札幌で教職につく。『白樺』同人となって作品を発表した。

森本厚吉(1877-1950)は、札幌農学校で有島と友人になり、共著で『リビングストン傳』を刊行した。大正11年に「文化生活研究会」を結成し顧問に有島・吉野らを迎える。翌12年には「文化普及会」を設立した。続いて女子経済専門学校設立、消費経済



研究所設立、『経済生活』 刊行、文化アパートメント建設などの事業に従事した。

吉野作造（1978-1933）も、森本・有島同様、キリスト教系の知識人である。帝大勤務後に渡中・渡欧し、大正 2 年に帰国した。大正 5 年の論説で民本主義の概念を提示し、大正 7 年の米騒動時の朝日新聞筆禍事件より、演説会を通じ広範な支持を集める。大正 11 年に森本・有島らと「文化生活研究会」を結成するがのち離脱する。

前野氏はまず、『私どもの主張』の「はしがき」を紹介した。「はしがき」は「森本→吉野→有島」の順で掲載されている。冒頭の森本の文章が主張するのは、国民が「精神的にも物質的にも生活の不安に泣いて」いるということであり、森本は、それらを乗り越えて「新社会を建設」することを目指すという。合理化・能率化と精神的自由が同時に目指されているのである。

続いて、明治末年から大正 10 年代までの政治・社会事象が確認された。吉野作造はこの間、「日本の国体の学理的解明」「頑迷思想の撲滅」「国民生活の安定・充実」を綱領に、たびたび講演会を開いており、1921 年設立の「文化生活研究会」もそれに近い路線をとる。報告では会誌『文化生活研究』の初回の掲載文にどのようなものがあったかについても紹介された。

そして、吉野による『私どもの主張』掲載の 3 講演について紹介した。「政治家のあたま」は、民本主義的な主張の延長として市民的存在の育成を企図するものである。「誤られたる本分論」では、我々の生活には物質面・精神面双方の改造が必要であり、これこそが文化生活研究の原因であると論じる。この改造に際して吉野は「本分々々と言って人の活動の自由を阻止」せずに、「其本分を尽した上で、其余力を以て様々なことをやる」べきだとする。「社会主義の新旧二派」では、物質的生活をきちんと充足させた上で、「各々みな天稟を発揮して社会の進歩に貢献する」という人間観によるのが「新しい社会主義」とする。これは、一種のベーシックインカム論でもあるだろう。

そして、前野氏から以下のような論点が提示された。有島・森本の議論に移るに先立って、「合理的」「経済的」に込められた好意的なニュアンスを我々は意識する必要がある。「合理的」「経済的」な文化生活が、「communal」なレベルの恩恵を与えるものとして構想されているのではないか。そしてこうした文化生活は、一方で、民本主義的に「government」を経由すべきものと意義づけられつつも、知識人の「individual」な意思として実現される側面もあるのではないだろうか。

また、報告では、吉野の論旨からやや外れるが「空間」問題と関連して、「朝鮮の共同墓地問題」や、住宅難を解決するために、庭園などをただ壊してしま

うのではなく、あくまでも公衆が楽しめるような空間として生かせないかという記述もあった。これは、共同炊事場などを備えた生活共同空間としての「集合住宅」構想、すなわち1920年代の文化アパートメント（文化普及会）、同潤会アパートメント（同潤会）などにもつながるものであろう。

以上の報告を受け、参加者から様々な質問やコメントが寄せられた。吉野の主張は、物質面（住宅や家庭生活の合理化）からの生活の充実を志向する森本にも共通する態度であるが、文化・自然と生活の結合から生活の充実を志向する有島とは、かなり異なる議論のように見える。森本や有島の論考とどのような関連を持ちうるのだろうか。これについては今後の研究会でさらなる検討が必要であろう。

また会誌「文化生活研究」に掲載された様々な論考は、テーマが多岐に及んでおり（育児法や音楽、栄養論、園芸、衛生など）、一見バラバラにしか見えない問題意識を抱えた執筆者たちが目指した理想である「文化生活」とは一体何なのだろうか。また、この雑誌は、一体どのような読者層を想定し、誰に向かって何を語りかけようとしているのだろうか。

EAAは30年後の世界に向かい様々な研究・教育上の取り組みを行っている。おそらく吉野たちも、30年後あるいは100年後の世界に向かって「文化生活」を主張した。彼らの理想とする世界を実現するために、彼らが注目したのが「明日の私の生活」である。それは具体的には、文化アパートメントなどの住宅構想であり、「合理的」な家庭経営であり、つまるところ、主に「部屋」という「空間」の中で日々繰り広げられる「生活」の改善である。吉野らが「生活」に注目したのはなぜなのだろうか。次回も続けて、大正の住宅論を取り上げながら、この問題について考えていきたい。

報告者:田中有紀（東洋文化研究所）

EAA国际研讨会

一高中国留学生与101号馆历史

2021年3月17日

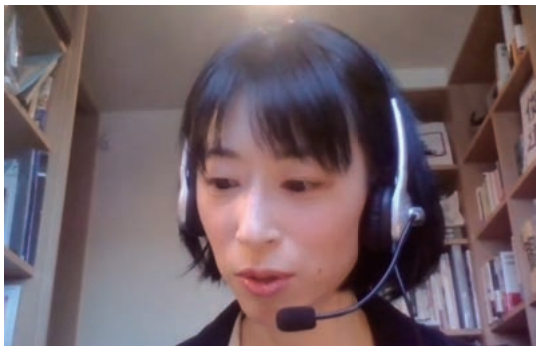
2021年3月17日，我们藉由Zoom网络会议召开了EAA国际研讨会“一高中国留学生与101号馆历史”。本次研讨会作为教养学部创立70周年纪念活动之一，原定于2020年3月21日召开，以纪念EAA策划的同名展览。但由于COVID-19疫情蔓延，被迫延期，有幸在一年后的今天得以顺利召开。本次会议采用全程线上的形式，受到了广泛关注，主要来自日中两国的一百余名观众旁听了本次会议，堪称盛会。

会议由石井刚（EAA副院长）主持，太田邦史（东京大学）首先致开幕词。太田教授称，旧制第一高等学校（以下简称“一高”）的教养教育，奠定了今天东京大学教养学部教育的基础，并回顾了其个人对于明寮（驹场寮之一）的回忆等。

在中岛隆博（EAA院长）致辞后，报告人宇野瑞木（EAA特聘研究员）对本次会议的主旨进行了说明。EAA驹场办公室所在的101号馆，在一高时代曾是专为中国留学生教育课程“特设高等科”所建的教学楼。鉴于101号馆的这段历史，EAA在2019年3月启动了“一高项目”，先后着手整理“藤木文书”（1943-1945年前后有关一高留学生的待整理资料群）、策划101号馆大厅展览。由于COVID-19的影响，2020年度则致力于相关资料的网络公开。

随后，由大里浩秋（神奈川大学）以《中国人留学日本史所感》为题作主旨演讲。大里教授自20世纪90年代起研究中国留学生史，是日本该领域的领军人物。大里教授首先讲述了自己60年代求学驹场时出入101号馆和明寮的记忆，以及藉由鲁迅《藤野先生》一文走上这条研究道路的经过。接着依据东京大学文书馆所藏的“支那留学关系”、“留学生关系”、“留学生关系文件”等史料，介绍了20世纪20年代东京

太田邦史（东京大学大学院综合文化研究科长、教养学部长）



宇野瑞木（EAA 特聘研究员）

帝国大学在“对支文化事业”之下开始接收中国留学生时，与外务省、文部省所进行的交涉，以及面向留学生的“内地”修学旅行、研修旅行的实施情况（-1938 年），并指出九一八事变后“满洲国”留学生与“中华民国”留学生的差别待遇有所加深。此外，大里教授还介绍了当时校方有关学生的调查记录，为我们剖析与东京帝国大学密不可分的一高的情形，提供了宝贵的视角。

第二位主旨演讲人汪婉（北京大学 / 东京大学）以《留学驹场的体验——开放的东大》为题，讲述了其 1989 年至 1996 年就读于综合文化研究科的体会，回顾了在中国史学者并木赖寿研究室的回忆，以及各国留学生、研究生众多的驹场富有国际特色的氛围。演讲人通过自身的体验，认为驹场的学问的特征在于国际化、综合化、跨学科化，留学生与驹场教师的交流对其人格的培养起到了重要作用。其硕士论文研究服部宇之吉等在京师大学堂师范馆的教育活动，后出版了博士论文《清末中国对日教育视察研究》（汲古书院、1998），此后则主要研究中国教育改革的实情，以及追求“国民教育”的学制如何向地方延展等课题。在回顾了其研究背景后，演讲人指出中国向日本派遣留学生、日本接收留学生的意义根据时代的变化亦大为不同，阐述了相互派遣留学生在今天为增进中日两国的相互理解、相互尊重起到的作用，以及今后东京大学就如何面向亚洲的问题交出答卷的重要性。在提问环节，观众提出现在的国际通用语言英语的运用问题，引发了有关在留学期间学习当地语言的意义的讨论，足见本主旨演讲为思考大学国际化的未来提供了契机。

稍作休息，会议进入专题讨论环节：“特设预科 · 特设高等科与当时的中国留学生”。

韩立冬（北京语言大学）首先以《一高中国留学生教育制度的变迁》为题进行了特别演讲。“一高计划”在筹划“一高中国留学生与 101 号馆历史展”时，着重参考了演讲人所著的《近代日本的中国留学生预备教育》（北京语言大学出版社、2015 年）一书。演讲的开头梳理了一高特设预科 · 高等科的沿革，将一高接收留学生的历史分为四个阶段：（1）特设预

大里浩秋（神奈川大学名誉教授）

汪婉（北京大学国际战略研究院理事 / 东京大学全球咨询委员会委员）

韩立冬（北京语言大学汉语国际学部汉语学院教师）

田村隆（东京大学大学院综合文化研究科副教授）

科成立之前接收中国留学生的情况（1899-1921 年）、(2)“五校特约”下的特设预科（1908-1922 年）、(3)编入“对支文化事业”后的特设预科（1923-1932 年）、(4)“对支文化事业”下的特设高等科（1932-1945 年），并在此基础上分析了在各时期日中两国局势与制度变迁的影响下，报考与入学人数、生源质量的变化等。提问环节则讨论了特设高等科三年课程均独立在外，不与日本学生同班，在此情况下日中两国学生在课外活动等场合进行了何种程度的交流的问题。

接下来由四名报告人分别作研究报告。首先是田村隆（东京大学）的报告——《狩野亨吉文书中的清国留学生资料》。“狩野亨吉文书”由曾任一高校长（明治 31 年 -39 年）的狩野亨吉所遗留的校务文书、书信、日记、讲义等资料构成，现藏于驹场博物馆。田村副教授自 2017 年起运用科学研究费补助金项目，对“狩野亨吉文书”进行了长期的调查研究，并于去年秋天公开了“第一高等学校关系文书”、“清国留学生关系文书”的电子版。该档案的公开属于东京大学数字档案计划的一部分。报告人进而以“清国留学生关系文书”为例，重点展示了利用该档案的研究成果。值得注意的是，狩野亨吉是一高最初接收中国留学生时的校长。1899 年，来自浙江省的 8 名中国留学生作为旁听生入学一高，从狩野起草的入学典礼致辞的草稿中可见“尤应注意善邻之道，不可有缺”等句。此外，夏目金之助（漱石）担任了当时的英语考试监考，其同僚杉敏介则是《我是猫》中“津木针助”的原型。报告人还介绍了当时的课程表及授课教师名单，以及新建成的“朵寮”出现在谷崎润一郎的小说中等情况，展示了融会各种同时代资料，为文学研究服务的可能性。

第二位报告人萨日娜（上海交通大学）《服部宇之吉与京师大学堂的留学生派遣事业》回顾了清末中国反省甲午战争与洋务运动的失败，以“日式教育”为中国教育原型、开办京师大学堂的历史。1902 年，京师大学堂步入正轨，聘请服部宇之吉（1867 年 -1939 年）任“总教习”。萨日娜教授通过比较东京大学驹场图书馆所藏的部分未公开的服部相关史料与北京大学所藏史料，指出服部在京师大学堂除授课

萨日娜（上海交通大学科学史与科学文化研究院教授）

高原智史（东京大学大学院综合文化研究科博士后期课程 / EAA 研究助理）

孙安石（神奈川大学教授）

石井刚（EAA 副院长）

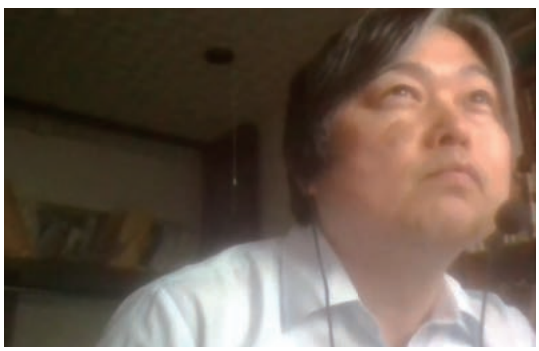
外，还作为师范馆正教习与总教习，参与指导了师范馆整体的管理运作。经由京师大学堂留学生派遣事业派遣赴日的留学生回国后为 20 世纪初的中国理科教育现代化作出了贡献。综合参照日中两国史料研究数学学科现代化的方法，亦可用于探究其他学科的现代化过程。而留日归国学生牵头设立的中国数学会译定欧美科学用语的事例，则反映了当时欧美思想、学问的翻译与循环，值得我们注意。

第三位报告人高原智史（EAA 研究助理）以《森卷吉与中国留学生》为题，聚焦特设高等科设立（1932 年）与一高迁校驹场（1935 年）时任一高校长的森卷吉（1929-1937 年在任），探讨了当时日中学生的交流情况。森卷吉与中国留学生的接触可以追溯至其 1904 年大学毕业进入一高，负责教授清国官费留学生的英语课程之初。森于 1908 年任一高讲师，次年升任教授，继续负责留学生的英语教育。报告人选取介绍了若干史料，如对留学生教育十分热心的森校长入学典礼致辞的草稿，寮日志中有关当时茶话会的记录等一高内部言论。从这些言论中可以看出，时人认为共同度过一高生最为重视的寮生活使得日中融合成为可能，但另一方面，被称为笼城主义的寮生活至上主义只是日本学生的一种价值观，在留学生中未必能够产生共鸣，而一高内部的言论与当时一般社会舆论之间亦逐渐产生差异。报告人认为，致力培养精英的一高内部，由于中国留学生教育制度这一“他者”的存在产生了种种矛盾，厘清上述问题，对于理解近代日本青年的思想动向也有着重要的意义。

最后由孙安石（神奈川大学）报告《清末民国时期日本留学指南书的系谱——以章宗祥 < 日本游学指南 > 为中心》。孙教授着目于 20 世纪初中国学生留学日本的高潮时期所参考的留学指南书，从中选择了广为流行的章宗祥编《日本游学指南》，通过分析指出其内容多来自于明治时期日本出版的面向国内上京（东京）者的《东京游学指南》（『東京遊学案内』）。除介绍章宗祥编《日本游学指南》外，报告人还比较了崇文书局编《日本留学指掌》（崇文书局、1905）与木川加一 · 田中龟治编《东瀛游学指南》（日华堂、1906）等，发掘中国留学生史先驱实藤惠秀未曾使用的史料，阐述了新的见解。报告人在广泛分析史料之外，还基于自身体验，指出留学生活中人与人的缘分的重要性，而随着世代更替，对同一种史料的看法也会有所改变。上述话题及其对于新生力量研究的期待都给人留下了深刻印象。

在上述特别演讲及四位报告人研究报告的基础上，石井刚（EAA 副院长）、冈本拓司（东京大学）两位评议人分别从其他角度提出了问题以作回应，二者内容互有交叉。

石井副院长首先说明了 EAA 标识图样所蕴含的深



冈本拓司（东京大学大学院综合文化研究科教授）

上列左起：石井刚、宇野瑞木、冈本拓司
中列右起：萨日娜、田村隆、汪婉
下列右起：孙安石、高原智史、大里浩秋

意，阐述了 EAA 的设立过程及其目的。标识所用的红蓝两色，既是北京大学和东京大学的代表色，也象征了中国神话中阴阳、水火等相反事物之间循环往复的世界认识。标识的形状“鱼尾”则是汉字文化圈中书籍的象征，代表汉字文化圈学问的聚集地——书院。石井副院长表示，这些设计均蕴含着 EAA 立足东亚，提倡新的教养教育（Liberal Arts）的构想。要认识到 EAA 本身亦是“时代性”的产物，一高迁校驹场后，日本走向日中战争这一“时代性”与一高的教养教育、学问之间的关系则是“沉重的遗产”，要在历史中不断学习。

冈本教授以森卷吉后任校长、医学家桥田邦彦为例，称其将“科学”与“日本式的理解”、“东洋精神”相结合的言论为当时的“时代性”所欢迎。进而尖锐地指出，尽管当时的一高生对此表示了怀疑，但其精英意识同时也暴露了他们对留学生的歧视态度，而一高教师所标榜的“善邻”、“友邦”等提倡融合的词语，则内含着先进国引导后进国的意识。

在问答环节，与会者讨论了战后科学精神与日本式理解的动向，以及一高在明治、大正乃至昭和时期“科学”一词语义的变迁，进一步确认了在研究留学生史时，除传统的日中关系史框架之外，还必须将两国现代学术的范本——欧美纳入视野范围。同时，“中国留学生”的“中国”，根据时期不同，其内涵亦呈现出多样性与复杂性，要时刻注意批判地看待“时代性”与一高教育的关系。会议中，听众也通过 Zoom 的讨论功能提出了许多问题，提供了许多宝贵的资料，可见除一高之外，日本国内外史料的丰富程度。

讨论意犹未尽。在会议的最后，石井副院长致闭幕词，对各位同仁的大力支持再次致以谢意，表示正因与各位相识，本次研讨会乃至一高项目才能够顺利推进。

本次研讨会的成功举办是 EAA 自成立之初所筹划的一高项目的一次里程碑。我们将珍惜会议中提出的问题意识与结成的人际网络，继续致力于整理公开沉眠在驹场的一高留学生史料，期待今后能够开展更为深入的共同研究。

报告人：髙山花子（EAA特聘助教）
宇野瑞木（EAA特聘研究员）

第5回　日中韓オンライン朱子学読書会

2021年3月20日

2021 年 3 月 20 日（土）日本時間 16 時より、第 5 回日中韓オンライン朱子学読書会が開催された。これまで同様、EAA のほか、清華大学哲学系、北京大学礼学研究中心、科研費基盤研究（B）「グローバル化する中国の現代思想と伝統に関する研究」との共催である。

今回は廖娟氏（南開大学）が「曹元弼の易学伝承と思想辨正」というタイトルで報告を行った。司会は、清代易学・経学に造詣が深い谷継明氏（同済大学）である。

曹元弼 (1867-1953) は呉の人、字は谷孫、『易』『礼』『尚書』『孝経』などの学をおさめた。近代中国における経学は、負の側面ばかり強調されてきたが、近年では優れた研究も増えてきた。曹元弼の幅広い経学を研究することで、近代経学の枠組みを立て直すことができ、また近代思想を多面的に捉えることもできる。曹元弼に教えを受け、現在、大学で教鞭をとる研究者も複数おり、経学の伝統がどのように現代へと繋がっているのかを考察する契機にもなる。

報告ではまず曹元弼の学脈について検討した。曹元弼が師事したとされる人物のうち、とりわけ黄以周は、これまで多くの研究で学術上の関連の強さが指摘されてきた。しかし、師事した時間が短く、書簡の往来などが少ないこと、また、学術の内在的な風格が異なっていることなどから、黄以周との間に学術的関連を強く主張することはできない。曹元弼の学問の源流を考えるにあたり、重要なのは彼の一族が尊んだ学問と、彼自身の学びの経歴である。曹氏一族は清初に呉に移り、元弼は幼い頃から易を学んだ。彼自身が述べるように、彼の学問は恵棟と江永、すなわち乾嘉学派にその源流がある。

報告では続いて、曹元弼の易学が、恵棟・張恵言・姚配中の易学の伝統を受けていることを指摘した。訓詁によって経義を求めること、漢儒の旧説を集めてそれらの意味を疎通させようとすること、三者の釈易の方法に敬意を示していること、張恵言に依拠し「礼」で「易」を解釈したことなどが、その理由として挙げられる。

最後に曹元弼の易学研究の欠点について指摘した。彼の学術は「博聞を好む」ために、瑣末なところまで追求をやめず、学ぶ者を混乱させてしまう側面がある。また様々な説を取り入れようとしてどんどん複雑になり、自らの立場をはっきりさせず、断言しない点である。

その後、司会の谷継明氏よりコメントと質問がなされた。谷氏はまず近年、曹元弼研究が盛んになった背景と現状について論じた。曹元弼研究は民国期の経学研究が復興したことの一つの縮図であると同時に、現代中国社会が礼教システムを顧みようとする背景のもと、礼学や易学など経学を熟知する曹元弼が、

研究者の関心を集めるのは自然な現象であると述べた。曹元弼の易学は発掘する価値があるものがまだある。たとえば彼の釈易体例や、清末の文化変動期においても継続した経学研究の意義、さらに「礼」で「易」を解釈する学風と、彼の政治傾向がいかなる関係にあるのかなどである。

これに対し廖氏は、曹元弼は、六経を貫通させ、経学を研究することが「人心之所同然」であり、これこそが経学の復興に期待することだと述べた。しかし、曹元弼の学問には長所もあれば短所もあり、たとえば、彼の釈易体例はやはり完全とはいえないという。

このほか日韓の近代経学研究の状況、さらなる交流が望まれることなどが議論された。曹元弼研究に従事する若手研究者も複数参加し、有益な説明と補足を行った。今後ますます曹元弼研究の新しい局面が開かれていくことが期待される。

報告者:田中有紀(東洋文化研究所)

第9回 痛みの研究会

2021年3月21日

2021年3月21日、第9回「痛みの研究会」がオンラインで開催された。2017年に発足した本研究会は、人文学で近年注目を集める「痛み」という問題系に、文学、歴史学、宗教学などの観点から分野横断的に取り組むことを目指している。本研究会は西欧地域を対象とする研究者を中心に発足したが、近年はその視野を北米及び東アジアにも広げており、前回の研究会からEAAとの共催企画を行っている(第8回研究会の様子についてはブログに掲載された報告「痛みの研究会」第8回研究会〔https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/pain8report/〕を参照されたい)。

第9回研究会は前回と同じく2部構成で進められた。研究会代表の南谷奉良氏(日本工業大学)による挨拶のあと、前半部では南谷氏による報告、後半部ではゲストの高野泰志氏(九州大学)による講演がなされた。アメリカ文学者の高野氏は、自然主義作家フランク・ノリス(1870-1920)の『マクティーグ――サンフランシスコの物語』(1899年)の翻訳を2019年に幻戯書房から出版しているほか、同書における「痛み」というモチーフの重要性を指摘した著書や論文を発表している。そこで今回、本研究会での講演を特別に依頼させていただくことになった。

南谷氏の報告「未踏の雪原のフィールド――痛みを表現する障壁と困難について」は、具体的な文学作品に触れながら、日本でまだ広く知られていない「痛み」という主題の論点を参加者と共有することを目的とし、特に痛みの表現・共有不可能性の問題を紹介した。初めにエレイン・スカリーの先駆的研究『痛みのなかの身体――破壊と創造』(1985年)における有名な命題「痛みは言語を破壊する」を参照し、続けてヴァージニア・ウルフ(1882-1941)のエッセイ「病いであること」、アルフォンス・ドーデ(1840-1897)の死後出版の断片「痛みの国で」(1930)、エミリー・ディキンソン(1830-1886)の詩「痛みは空白の要素をもっている」の作品分析を行い、痛みを表現する独特の困難を例示した。

痛みには表現・共有不可能性が取り憑いているにもかかわらず、あるいは取り憑いているからこそ、作家たちは「痛み」を表現し共有しようとしてきた。南谷氏が注目したのは、痛みの文学表象における白さのイメージである。実際、ウルフは「雪原」、ドーデは「空虚」、ディキンソンは「空白」として、それを表現してきた。かれらにとって「痛み」とは、主体の言葉や他者の同情を逃れ去り、ある経験が漂白されてしまう現実と対峙することであり、他者と孤絶した自身の存在を問うことである。痛みを書くこととは、そうした白さの上に何か書くことであり、また痛みの研究に求められるのは、その「白さ」そのものの質を問うことだという。

南谷氏はさらに、現代の東アジアにおける痛みの文

学表象にも言及した。取り上げられたのは、韓江（ハン・ガン）氏の『回復する人間』（原著 2013 年；翻訳 2019 年）に収められた中編「火とかげ」と、宇佐美りん氏の小説『推し、燃ゆ』（2020 年）の 2 作である。南谷氏は、両作品は対象への没入による「充満」と、それを失う「空虚」のリアリティーを対照的に描き出す点が共通しているとした上で、その「充満と空虚の詩学」の中心に痛みがあることを指摘した。

高野氏による講演「痛みの共感と麻酔――『マクティーグ』を中心に」は、このノリスの作品における「痛みの共感」の描かれ方に、「情動（アフェクト）理論」を用いてアプローチすることを目的としていた。高野氏がはじめに注意を促したのは、痛み、共感、芸術が本来不可分の関係におかれていることである。語源的にも、共感は苦痛の共有に由来し、麻酔は美学と関係している。高野氏はこうした観点から、「痛みの表象はその作家の芸術論として読むことができるのではないか」という仮説を議論の出発点として提示した。

現代的な意味での「痛み」はいつ誕生したのだろうか。高野氏によれば、それは痛みをなくす可能性が生まれた時代、麻酔が発明された 19 世紀半ばに遡る。麻酔薬はたしかに古代から存在していたが、医学によって組織的に用いられるようになったのは、デイヴィド・モリスが『痛みの文化史』（1986 年）で指摘したように、「エーテル・デー」と呼ばれる 1846 年 10 月 16 日以降のことである。現代的な意味での痛みへの感受性が生まれたのは、この麻酔の近代的発明によって痛みを取り除く可能性が生まれてからのことだという。

現代的な意味での「痛み」の正体とは何なのだろうか。高野氏によれば、この問題に大きな示唆を与えてくれるのは、心理学者シルヴァン・トムキンズの「情動理論」である。トムキンズは食欲や性欲などの生理的「衝動（ドライヴ）」よりも、恐怖や興奮などの感情的「情動」のほうが人間の行動の動機付けとして重要であると主張した。この理論は痛みにも適用することができるという。痛みはたしかに外的刺激が引き起こす生理的「衝動」によりもたらされるが、それを感じる程度は主体の心理的「情動」により大きく左右されるのである。

エドガー・アラン・ポー（1809-1849）の『ベレニス』（1835 年）と、ハリエット・エリザベス・ビーチャー・ストウ（1811-1896）の『アンクル・トムの小屋』（1853 年）を比較すれば、こうした痛みの現代的で情動的な性格がわかる。麻酔発明以前の前者では、仮死状態のベレニスから歯を引き抜く場面があるにもかかわらず、その痛みが描かれていない。これは痛みへの感受性の低さを物語る。反対に、麻酔発明以後の後者では、黒人奴隷のトムが鞭打たれる場面があり、読者はトムの痛みに感情移入することが求められる。

高野氏によれば、『マクティーグ』も情動理論を用いて読み解くことができる。この理論では、感情は表情や振舞いを通して他人に伝播するとされる。この「模倣的伝染（ミメティック・コミュニケーション）」はたしかに作品の随所に描かれている。だが、『マクティーグ』の最大の特徴は読者に対する「共感の拒否」であると高野氏は主張する。たとえば主人公マクティーグが妻トリナに初めて暴力を振るう場面では、読者はトリナに対する同情を誘われるはずだが、直後にトリナの異常な金銭欲を示す場面が描かれており、読者はうまく共感できない仕組みになっている。

登場人物同士の「模倣的伝染」も読者の共感を拒否するように描かれている。たとえば、作品の後半ではトリナがマクティーグのサディスティックな怒りに共感し、家庭内暴力を振るわれることにマゾヒスティックな悦びを感じている。ここで描かれているのは、被害者が加害者に向ける倒錯的な共感である。それまでの感傷小説やリアリズム小説において、共感は無批判に美しいものとされていたが、高野氏の結論によれば、ノリスは暴力を肯定する醜い共感を描くことで、そうした既存の文学的前提を拒絶しようとしたのである。

高野氏の講演後には、南谷氏によるコメントに加え、会場との質疑応答がなされた。南谷氏は、痛み研究における感情史的観点の重要性を再確認したあと、ノリスの作品におけるマクティーグとトリナ以外の登場人物間の共感はいかに分析できるのかという問いを投げかけた。質疑応答の時間には参加者との濃密なやりとりがなされた。たとえば、研究会メンバーの小川公代氏（上智大学）はイギリス文学との比較の観点から、

進化論が流行していた 19 世紀、アメリカ文学では「退行（デジェネラシー）論」がどれほど共有されていたのかと問いかけた。

以上の報告からは、痛み研究が複数の方法論に開かれていることがわかる。南谷氏の報告と高野氏の講演は、二つの異なる仕方で「痛み」という問題に切り込んでいた。南谷氏が採用したのは、文学作品の内在的読解によって痛みの個人的体験を「理解」するアプローチである。これに対し、高野氏が採用したのは、情動理論を用いた外在的分析によって痛みの集合的共有を「説明」するアプローチである。「痛み」というテウメソスの狐は、こうした複数の方法論が交差するところでしか、捕まえることができないように思われる。

報告者:田中浩喜（東京大学大学院博士課程）
南谷奉良（日本工業大学）

EAA Workshop “Identity and Movements”

2021年3月22日

Following up on the EAA online workshop and discussion “Identity, History, and Legal Mobilization: Focusing on Japanese War Orphans from China”, which took place in November 2020, we held the EAA online workshop “Identity and Movements” on March 22, 2021. Our November workshop raised many questions: it revealed its present significance through a thought-provoking and wide ranging discussion that addressed issues such as identity (who are considered true Japanese), war responsibility and similar cases such as the comfort women issue, Okinawans and Ainu as Japanese, social movements, and post-activism, to list a few. These topics have motivated us to revisit the issues of identity and movements from various perspectives.

In our workshop the first two presentations tackled identity more directly, and the latter two concentrated on movements that have roots in issues related

Hye-Won Um (Hawaii University), Yoojin Koo (EAA), Yoshiyuki Aoki (Dokkyo University), Takeshi Shirakawa (Hawaii University), Sana Sakihama (EAA), Ching-Yuen Cheung (Graduate School of Arts and Sciences, UTokyo)

The discussion proceeded in a friendly atmosphere

to identity. Takeshi Shirakawa (PhD Student, University of Hawaii), our first presenter, ushered in the issue of identity in the context of the nation-state under the title "Disturbance or Exception? the negotiation of identity for Japanese returnees." Based on a perspective of Japan as a "striated space" as defined by Deleuze and Guattari, he analyzed the role of Japanese identity in the process of the repatriation of individuals who were left behind in China following the Second World War and highlighted the inherent tension in an identity as Japanese, which acts to provoke questions regarding the nature of "Japanese-ness." Sana Sakihama (EAA Project Research Fellow) expanded on these ideas with her presentation entitled "The political philosophy of Ifa Fuyu: the limits of identity politics", which examined Ifa Fuyu's thinking in regard to the Okinawa issue and Okinawan people in modern Japan. She elucidated the limitations of "politics" as outlined by Jaqcues Rancière and the possibility of Ifa's views as being "political philosophy", thus building a framework that allows us to subtly scrutinize the Okinawan issue.

After the break, Yoshiyuki Aoki (Visiting Lecturer, Dokkyo University) addressed how identity correlates with movements and affects movement tactics – violence in particular – by looking into Korean student movements following the democratization of South Korea. His presentation, "Identity, violence, and student movements: a case study of Korean student movements in democratized Korea", particularly emphasized the ways in which the identity of student movements in South Korea evolved and incorporated anti-Americanism, the militant legacy of the Japanese colonial period, the issue of North Korea, and the discourse surrounding reunification of the Korean peninsula. Here, he outlined an evolutionary process that in turn resulted in pronounced violent tactics. Lastly, Hye-Won Um (PhD, University of Hawaii) and Yoojin Koo (EAA Project Assistant Professor) raised the issue of identity in an effort to understand its possible in role in viewing legal activism related to Japanese war responsibility as social movements rather than as legal cases. Their approach used the framework of legal mobilization, which has gained more attention in recent years. As a preliminary study, they suggested the legal mobilization framework can provide new insight on and motivation to sustain war responsibility related litigation, as these cases have almost always ended in defeat for those who have brought them.

During this time, we were privileged to have Professor Ching-Yuen Cheung as a commentator. Professor CY specializes in Japanese and East Asian philosophy and has important insight into the issues facing Hong Kong. In the course of our workshop Professor CY pointed out matters such as the importance of "social death" of Japanese returnees; the pre-conditions that affected Ifa's thought; the similarities and differences of student movements be-

tween democratized and democracy-consolidated periods in South Korea; and the expansion of legal cases as related to legal mobilization (such as cases related to war dead enshrined in Yasukuni Shrine, a practice which subsumes the ethnicity of non-Japanese war dead into the Imperial Japanese nation). These topics Professor CY raised are very critical in accounting for identity and movements, and together with questions from participants and the audience we were able to think of further issues, such as the way nationalism has been appropriated by parties from the left and right in both modern and contemporary Japan — something that has also occurred in nations worldwide — and the ways in which nationalism relates to identity and movements. The three-hours of our workshop literally flew by, reflecting our deep involvement in the discussion. We plan to collect these manuscripts in the EAA Booklet and to have further lively discussions in the future.

Report by Yoojin Koo
(EAA Project Assistant Professor)

連続シンポジウム「世界哲学·世界哲学史を再考する」

第2回　世界における日本哲学を再考する

2021年3月25日

2021 年 3 月 25 日、連続シンポジウム企画「世界哲学・世界哲学史を再考する」の第 2 回「世界における日本哲学を再考する」が Zoom にて開催された。この連続シンポジウムは、2020 年に筑摩書房から全 8 巻＋別巻が刊行された『世界哲学史』シリーズの編者である納富信留氏（人文社会系研究科）をオーガナイザーとして迎え、「世界哲学（史）」というコンセプトのさらなる可能性を探究する試みの一環である。

哲学をめぐる中国とヨーロッパの関係についての議論が交わされた前回に続いて、第 2 回となる今回のシンポジウムでは、オーガナイザーの納富氏に加えて、『世界哲学史』の第 7 巻第 10 章「「文明」と近代日本」を寄稿した苅部直氏（法学政治学研究科）、第 8 巻第 9 章「アジアの中の日本」を寄稿した朝倉友海氏（総合文化研究科）、別巻第 6 章「道元と中世の日本哲学」を寄稿した頼住光子氏（人文社会系研究科）が参加し、それぞれの視点から「世界哲学（史）」という視座のなかで「日本哲学」をどのように位置付けていくかのアイデアを持ち寄った。議論の糸口を提供するため、そこに郭馳洋氏（総合文化研究科・博士課程）が加わり、自身の専門も踏まえた観点からコメントを行った。

納富氏は、今回のシンポジウムの趣旨説明を行った。前回のシンポジウムを振り返りつつ、「世界哲学（史）」という枠組みのなかで「日本哲学」を考えるための基本的な視点を整理した。世界哲学における日本哲学の位置や役割を考えるためには、そこで言われている「日本」の文脈がそのつどの議論のなかで特定されなければならない。納富氏は、様々な文化的背景（漢字文化、宗教的伝統、伝統芸能および現代の視覚文化など）のなかで「日本」を論じうること、そして、「日本」という限定が地理的な意味なのか、言語的な意味なのか、共同体的な意味なのか、といったことなどがつねに問われなければならないことを指摘した。

頼住氏は、「中世日本哲学と世界哲学」という題で報告を行った。氏は、西洋哲学における理性中心主義、人間中心主義に基づいた二元論およびそれを乗り越えようとする伝統に言及したうえで、主客の対立を乗り越える試みのひとつとして、日本中世の仏教者である道元と親鸞の思想に注目する。注目すべきは、道元と親鸞における「仏性」についての考え方である。仏性とは「仏になりうる可能性」であり、誰もが

修行によって成仏する可能性を持っているという主張を支えてきた概念である。頼住氏は、仏教思想のなかで「仏性」が実体化され、個物に内在するものとして理解されてきたことを指摘する。本来であれば実体化できない存在を実体化してそれに執着すること（煩悩）を批判する仏教的な思惟方法に基づけば、このような仏性理解もまた批判されなければならない。実体化に抗する仏性理解を展開した代表的な仏教者としての道元と親鸞へと注目することで、世界哲学に対して日本哲学からの示唆を得ることができるだろう、というのが頼住氏の主張であった。

苅部氏は、「近代日本哲学と世界哲学」という題で報告を行った。氏は冒頭で「近代日本哲学」のイメージを問い直す。ふつう近代日本哲学といった場合には井上哲次郎や井上円了といった、19 世紀の終わりに成立したアカデミズムにおける哲学が取りざたされる。しかしながら、苅部氏は江戸期後半の西洋との出会いをひとびとが「開化」「文明」といった概念で理解しようとした経緯に注目する。黒船来航から開国へと向かう日本史の流れは、しばしば黒船の「襲来」や、開国を「余儀なくされた」といったかたちで、受け身でネガティブなものとして語られる。だが、日本の文化的伝統のなかに古くからあった「開化」「文明」といった言葉によってこの西洋との出会いを表現した知的文脈のなかに、むしろ伝統的な思想に基づいて西洋的価値観を積極的に取り入れていこうとする姿勢を見いだすことができる。さらに、このような捉え方は当時のインテリだけに見いだされるものではない。町人文化のなかに、より洗練された「人情」をもたらしてくれるものとしての西洋文明への期待感が普及していたのではないか、と苅部氏は仮名垣魯文の戯作を例に挙げて指摘している。

『世界哲学史』（全 8 巻＋別巻、筑摩書房）

朝倉氏は、「アジアの中の日本哲学」という題で報告を行った。氏はまず、日本哲学について議論されるときには、西洋哲学と伝統思想との関係を強調しながら東アジア圏の近代哲学から切り離される傾向があると指摘する。しかしながら、そのような議論のなかで「西洋哲学」および「伝統思想」が扱われる際には、西洋哲学がある種の大陸哲学へと矮小化され、仏教理解が特定の対立関係を過度に強調した図式にとどめられてしまうことがある。朝倉氏はこのような問題意識のもと、西洋における分析的伝統と大陸哲学の分断の経緯にアジア圏の思想が関わっていることを明らかにする。そこから帰結するのは、大陸哲学の一種としての日本哲学という位置付けであるが、この理解は素直に歓迎できるものではない。そこで氏が注目するのは、分析的伝統に寄り添ったかたちで東アジア思想の「論理」を扱う研究の伝統である。西洋哲学の分断をそのまま内面化した一面的な哲学観を廃し、より広い文脈で日本哲学を捉え直すことを朝倉氏は提案している。また、東アジア仏教の理解についても、天台・華厳の対立関係と論争の伝統を踏まえることなく、華厳的な図式を下敷きにした仏教理解ばかりが強調されることへの疑念が提示される。哲学においても仏教においても、分断された一方にのみ親和的な理解が広まってしまうことに対して警戒しなければならないというのが、朝倉氏の主張である。

3 人の報告の後、日本近代思想史を研究する郭氏がコメントを行った。郭氏は、頼住氏と朝倉氏が『世界哲学史』に寄せた論考に「実体的なものから関係的なものへ」というテーマおよび仏教というモチーフが共通することをまず指摘している。これらは、主客二元論的な考え方から距離をとっているという点で一元論的なモメントを備えている。このような一元論的なモメントは、苅部氏が扱った 19 世紀日本における「文明」批評のなかにも見いだされる。郭氏は自らの研究分野を背景として、以上のような仕方で三者の報告を横断するようなパースペクティヴを提示している。徳富蘇峰は 19 世紀の終わりに、日本が批評の時代を

上段：納富信留氏 (人文社会系研究科)
中段：左から順に朝倉友海氏（総合文化研究科）・頼住光子氏 （人文社会系研究科）
下段：左から順に郭馳洋氏 （EAA 特任研究員）、苅部直氏 （法学政治学研究科）

迎えていると述べた。この批評の時代を先導したのが大西祝である。彼の文明批評を貫く問題意識は、西洋の文物が大量に流入することによって生じる思想の混乱のなかで、精神の拠り所（「安心立命」）を見いだすことであった。近代化が進む日本のなかで「安心立命」を喪失してしまうのではないか、それを取り戻さなければならないのではないか、という問題意識は、井上哲次郎の現象即実在論や、清沢満之の万物一体論の背景を成していた。郭氏は自身の研究分野を背景として以上のような報告を行ったうえで、報告者それぞれに対して質問を行った。

その後は、郭氏の質問への応答を皮切りに、お互いの報告内容に関して活発な議論が展開された。「日本哲学」と一口に言ったとしても、そこで言われている「日本」は決して揺るぎない実体を持って私たちが触れることのできるものではない。登壇者の報告と議論は、すでに確固としたかたちで聳える「日本哲学」を確認するようなものではなく、むしろ固定的に捉えられてきた「日本哲学」の有り様を捉え直し、流動化していくような側面が際立っていたように思われる。しかしながら、それは事態をいたずらに複雑にし、認識を曖昧にしていくようなものでもない。拠って立つものの「確からしさ」をつねに問い直していく今回のシンポジウムのような営みを、安心立命を追い求めた 19 世紀末の知識人たちの肖像に重ねることができるかもしれない。

報告者:田村正資（EAA特任研究員）

ご質問・コメントからの抜粋

第 2 回シンポジウムの参加者からいただいたご質問・コメントの一部を紹介させていただきます。回答はシンポジウム発表者個人の意見です。

Q1　古代以来日本では、土着の習俗を外来の普遍的理論（おもに仏教、儒学）を通じて説明するということの繰り返しだったと思います。仏教、儒学に関しては江戸時代以前までにかなりの程度土着の習俗への定着ないしすり合わせが進んだのではないかと思います。受容開始以来 2 世紀になろうとする西洋哲学は、土着の習俗への定着ないしすり合わせはすでになされたと見るべきでしょうか、それともまだまだこれからだと考えるべきでしょうか。また、どういうことが起こったらそれがなされたと判断できるようになるでしょうか。個人的に

は、今はむしろ西洋哲学研究者、また西洋のスタンダードを日本に直接適用しようとする一般的な風潮に向けてこそ漢意批判を展開すべき局面なのではないかと思ったりもするのですが。

A（苅部） まったくの思いつきの私見ですが、外来思想を受容するには「土着の習俗」への「定着」「すり合わせ」がないといけない、と考えること自体が、近代日本の知識人に特有のこだわりではないでしょうか。仏教の戒律も、儒学の礼も、日本の習俗にはいまだに定着していないと思いますし、反対に、「政治」や「哲学」に始まって、西洋由来の概念を日本人はすでにある程度使いこなしています（もちろん充分な理解かどうかという問題もありますが、厳密な議論をするなら欧米の普通の人だって、それをちゃんと理解していると言えるかどうか？）。大事なのは、習俗として定着させる（←その必要があるかどうかも検討が必要ですが）以前に、異なる地域・時代の文化や思想については、自分の理解と「本場」でのそれとの異同を吟味する姿勢を、つねに忘れないでいることではないかと思います。

Q2 朝倉先生への質問です。日本哲学における大陸哲学の傾向を是正する必要があると強調していますが、私見ではこの傾向をむしろ日本哲学の多様性（間文化性）として評価すべきだと思っておりますが、いかがでしょうか。たとえば、牟宗三の哲学においても大陸哲学（カント）の傾きが顕著ではありますが、この傾向も是正する必要があるのでしょうか。

A（朝倉） 大変に興味深いご指摘ですが、私が述べたかった点は、分析系／大陸系の違いがタコツボ的傾向と結びつくことで、日本哲学の可能性を狭めてきたことについてです。発表のなかでは、京都学派研究を例にとり、かつて大陸系へと行き過ぎた傾斜を見せたという認識のもとに、分析系のアプローチを対置することで、議論の活性化を促す趣旨の発言をいたしました。しかし、異なる文脈のもとでは当然ながら言い方も変わってきます。日本哲学が逆に分析系一辺倒となるような文脈を想定するならば、別の方向での「是正」が必要になるという点に私も同意します。そして、分析哲学をグローバルスタンダードと見るような立場への批判こそが「世界哲学」の特色ともなっています。こうした観点からすれば、（当時の）分析哲学へ苦言を呈し「非分析的」思考について述べた牟宗三には、確かに哲学の多様化へのヒントを見て取ることができます。ただし、仰るように日本哲学についても同様のことが言えるかどうかは難しいところで、やはりタコツボ性への批判的観点が必要だと私は思います。

Q3 宗教（超越）と哲学、文学（芸術）（エステティックなもの）と哲学との関係を議論してほしい。両項の質的な差異を確保しつつ不可分の関係を構想していくべきだと思うのですが、質的な差異をあいまいにすることによって両項を関係づけようとする方向に流されがちな気がしています。たしかに哲学を近代の大学の一学科に限定する必要はないというのはもっともです。しかしアリストテレスの第一哲学を一つの範型とする学問を宗教や文学と連続的に捉えようとすると、重要な一面が抜け落ちてしまうのではないかと思います。

A（納富） コメントありがとうございます。私は古代哲学を研究しているので、そこから見ると宗教と哲学、文学と哲学という区別は歴史的に作り出された西洋近代の枠組みであり、少なくとも紀元前 4 世紀まではそれらは一つの知の営みであったと考えています。神を扱わない哲学はありませんでしたし、詩や悲劇・喜劇は異なる表現形態や社会的役割を持ちましたが、それらもいわゆる哲学や諸科学と密接に連関して展開していたからです。文学と哲学との対立は前 4 世紀にプラトンが提起しましたが、弁論術の伝統ではその通りには受け取られませんでした。また、アリストテレスは『詩学』で悲劇を人間の生を捉える究極の制作と考えました。宗教との区別はさらに後で 18 世紀でしょう。アリストテレスの『形而上学』は神の問題を論じていて、「神学」とも呼ばれています。それらをそもそも別の領域と考える近現代的見方は徹底的に反省されなければならないと考えています。無論、そのなかでの質的な差異をどう考え位置付けるかは重要な課題です。

中国でも「文」はいわゆる哲学と重なっています。日本では近代以前の思想が「宗教」に過ぎないと退けられることがありますが、そういった発想が貧困であることは、古代ギリシアを鏡にすることで見えてくるように思います。「世界哲学」では、西洋近現代の学問の枠組みが問題となります。

話す／離す／花す（12）

「文運日新」解題

石井剛（EAA副院長）

2021年3月29日

次第に開花時期が早くなりつつある傾向は今年も変わらず、3月半ばにはもう東京でも開花したソメイヨシノは、これを書いている3月29日にはすでに散り始めています。このブログ連載コラム「話す／離す／花す」は、ことばを使うことによって人たり得ているわたしたちが、ことばを媒介にしているがゆえに生じるずれや距離を人としての倫理の契機であるととらえつつ、いかにしてわたしたちが共に成長しながら、それぞれ「花する」ことが可能であるか、その条件をいっしょに考えてみようという趣旨で始まりました。それはより直接的には、昨年来のテレワークによって、身体を伴ったコミュニケーションから切り離されたがゆえに否応なく生じた、ことばと仲間との間の距離感の不穏な動揺から、もう一度、わたしたちにとっての協働の空間を希望あるものとして再構成しようという、ある種切迫した気持ちの産物であったことも、憚ることなくここに記していくことは決して無意味なことではないでしょう。

テレコミュニケーションが人と人の関係を取り持つのにじゅうぶんな方法でないことは、この一年の間にほぼ明らかになったと思います。少なくとも、このコラムで田中有紀さんが適切に示してくれたように、「儀礼的なものはオンライン環境で完遂できない」のです。そして、まさに儀礼的なものを通じて人は周りの人々と共に変化を醸成し、世界の創造に関わっているのです。それはわたしたちの身体と言語によって表現されるパフォーマティヴな現実関与のあり方そのものであり、わたしは大学という空間が有している最も本質的な意義は、こうした儀礼的なパフォーマティヴィティによって、来るべき未来に向けた「変化のため」を生み続ける場であると考えています。

ところで、親しい人がやがてわたしのもとから離れていくのにも似て、発せられたことばはその瞬間からすでにわたしのもとを離れています。いや、そもそも「わたしのことば」なるものはもともとないのでしょうが。わたしたちの「関係」は離れていることによって初めて成り立つものであり、それ以外にはあり得ません。そして、漢字の世界では、そうして成り立つ関係のことを「文」という概念によって括りだしています。

春は心を晴れやかな気持ちにさせます。しかし同時に春は別れの季節でもあります。このたび、特任研究員の若澤佑典さんが晴れて新しい天地を獲得し、EAAを巣立つことになりました。テレワークの一年、彼がオフィスで勤務したのは合わせても数日にしかなりませんが、やはりEAAから離れていくことには一抹の寂しさを禁じ得ません。しかし、若澤さんは、友情が必然的に有する距離ゆえの希望について、いかにも「文」的に思考する人でもあります。それは、彼が「編む」という表現でEAAスタッフ間の友情を形容していることに表れています。「文」とはそのかたちの通り、交錯しながら編まれていくものですから。こうした若澤さんによって発せられるメッセージはわたしたちみなを励ますものであるにちがいません。わたしもそこに悦びを見いだす一人です。

こういうことを考えながら、彼の離任のあいさつには「文運日新」というタイトルをつけてみました。これは魏晋南北朝時代の劉勰という人が書いた『文心雕龍』から取ったものです。原文はこうです。

文律運周，日新其業。變則其久，通則不乏。趨時必果，乘機無怯。望今制奇，參古定法。

「文の創造はめぐるようにとどまることがなく、日に日に新たなものが生まれる。変化することで持続することが可能となり、通ずれば欠乏することもない。時に臨むには果断であるべきで、機に乗ずるのにおそれをなしてはいけない。現状をよく見て奇なるものをつくるにしても、古を参照して原則を定めるべきだ」というほどに解釈できるでしょうか。このことばは通変篇に見えるものですが、そのなかでは「通變則久（変化に通ずれば持続できる）」ともあります。これは The Book of Change、つまり『易経』を貫く主題に通ずる中国哲学得意の論点であると言えるでしょう。わたしたちは日々新しくあるために、変化を求め、果断に時をとらえるべきです。しかも、それは単に奇をてらうだけではなく、古を参照しつつ行われるべきなのだと、このくだりは告げています。若澤さんや、そして、近い将来ここから巣立って行くであろうすべてのお若い方々、そしてまさにこれから EAA に加わる一人一人の皆さんに、このことばは向けられていると思います。縁あって新たな職場に赴く若澤さんの前途を改めて祝福します。そして、わたしたちの「文」がつねに新しく、それによってわたしたちが共に成長していけることを期して、「文運日新」の解題といたします。

写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

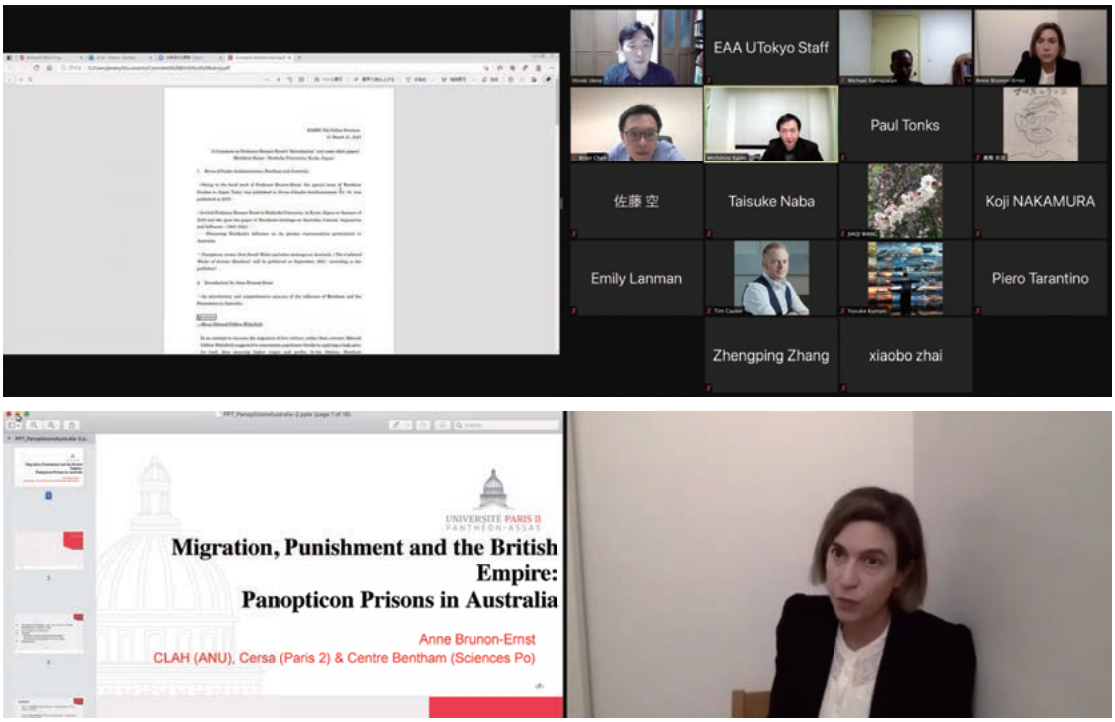
The 5th EAIHN Online Seminar

"Trans-Pacific Perspective on the British Empire"

2021年3月31日

On 31st March 2021, the East Asian Intellectual History Network (EAIHN), through the auspices of the EAA (East Asian Academy) at the University of Tokyo, hosted a talk by Anne Brunon-Ernst (Panthéon-Assas, Paris) entitled "Penitentiaries in the British Empire: The Case of Panopticon Prisons in Australia." After opening remarks by the chair, Hiroki Ueno (EAIHN), Professor Brunon-Ernst briefly introduced the latest special issue in "*La Revue d'études benthamiennes*" edited by herself and her own article included in the volume, and situated these studies in the larger project on "Bentham and Australia" (which is, again, part of her long-term research programme of "Bentham and Empire"), sharing the informative Powerpoint slides. As is mentioned at the beginning of Anne's paper, recent scholarship in modern intellectual history has paid so much attention to the so-called imperial dimension of Enlightenment thought and practice, in relation to imperial or global history. As the paper mentions, recent literature includes: Jennifer Pitts' "*A Turn to Empire*", Sankar Muthu's edited volume, "*Empire and Modern Political Thought*", and David Armitage's "*The Ideological Origins of the British Empire*". This kind of global and imperial context is something which we could not avoid when studying Enlightenment Europe in Asia. Of particular interest is the colonies as a kind of "laboratory in which Enlightenment utopias were experimented with" by the British and other European Empires. They can even be considered as radical and utopian experiments that could not be put to trial in the Old World, where customs and tradition were still alive and amalgamated with modernity considerably.

We plan to edit a journal special issue that will deal with the international and imperial dimension of the British Enlightenment including Radicalism. This seminar was also a good starting point for the



Prof. Anne Brunon-Ernst (Panthéon-Assas, Paris)

EAIHN to organise the research collaboration dedicated to this plan. Everyone who is interested in the British Empire and its Enlightenment thought would be more than welcome to contribute to this planned special issue. Its detail is to be announced before too long. [Hiroki UENO]

The following is the abstract of the paper presented by Brunon-Ernst:

"Penitentiaries in the British Empire: The Case of Panopticon Prisons in Australia"

The settlement of a penal colony in Australia in 1788 was part of a wider Imperial plan to cast away unwanted members of the British community and to colonize unhospitable far-away lands. From the onset, the Australian project was fraught with contradictions, that were pointed out all through the 19th century by Jeremy Bentham and other penal reformers. To avoid setting up and maintaining an expensive system of incarceration at home, convicts were sent at great financial and human costs to the other end of the world. Faced with rebellious native inhabitants and re-offending European convicts, authorities in the colonies were however forced to set up a prison system to deal with them.

Influenced by modern penal theories in Europe and in the United-States, prison management authorities built prisons in Australia that shared elements of Bentham's panopticon scheme. The irony will not be lost on Bentham scholars. Indeed, Bentham advocated early on the building of Panopticons in Britain to avoid transportation of convicts. Ultimately, Panopticons had to be built in the penal colony to compensate the shortcomings of a convict system unable to police crime.

The aim of the seminar is to investigate the panoptic features of some of the iconic prisons built in 19th c. Australia and identify the specificities of its penal system.

Report by Hiroki Ueno (Keio University)

EAAダイアローグ

第8回 宮本久雄氏×中島隆博氏

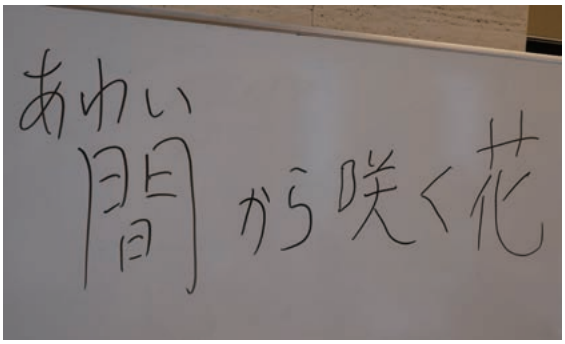
2021年3月31日

2021 年 3 月 31 日（水）14 時より、東京大学本郷キャンパス EMP ラウンジにて、第 8 回 EAA ダイアローグが開催された。今回のダイアローグは宮本久雄氏（東京大学名誉教授）と中島隆博氏（EAA 院長）によって行われた。EAA のダイアローグは幼年時代の思い出を聞く場面からはじまる。中島氏による問いかけに対して宮本氏は胎児時代の話を澱みなく始めた。1945 年 2 月に生まれた宮本氏が母親のお腹にいた頃、激しい空襲から逃れるために防空壕で孤独を過ごした母親は、世界が終わるのではないかという感情を抱いていたという。そしてその終末観、世界が没落するのではないか、という感情を自分が受け継いでいるのではないか、と宮本氏は言うのである。それから紹介されたのは BC 戦犯としてシンガポールで絞首刑になった彼のおじの存在である。これらが幼年期の二つの基本としてまず提示された。転校を繰り返しながら新潟で生まれ育った彼がやがてアウシュヴィッツについて書くようになった背景には、そうした二つがあり、それらが発端となって、戦争をめぐる議論をドイツから学び東洋に持って来れないかという問題意識がいまになおつづいていることが明かされた。

高校時代にマルキシズムとキリスト教を二者択一とするのではなく、両者をまとめられないかと夢を抱いて、しかし周囲からは答えを得られず苦しんだ過去も語られた。その後、東大に入学したことによって、葛藤し苦しんだ問題がだんだんと解決していった過程は、あとで中島氏によって確認されたように、大学の外での出会いや体験に多くを負っていたように思われる。ザビエル寮での徹夜の議論、新宿でバーを開く神父、押田神父による長野の共同体、クリスチャン禅……。駒場時代のクラスメイトに炭鉱争議にコミットしたメンバーがいた回想のあとに明かされたのは、本郷の哲学科に進学し、語学を相当勉強し、とりわけ加藤信朗氏の導きによってトマス・アクィナスで卒論と修論を書いた経緯である。それから大学紛争のあと、氏はドミニコ会の門を叩くことを決め、カナダのオタワの神学大学に進み、フランス語で学業を修め、ヘブライ語を習得し、いったん帰国する。五島列島の隠れキリシタンの頭領と知り合う出来事を経、宮本氏はまた海外へ向い、イスラエルの聖書学考古学研究所で学ぶに至った。このように宮本氏自身の旅の経験のスケールの大きさが桁違いであることが感じられるエピソードが静かに矢継ぎ早に現れていったことが印象的であった。エジプトのシナイ山にも行き、カタリナ寺院では料理長を務めたという。フランスに渡ったあとはドミニコ会の共同体で神父たちと衣食住を共にした経験も語られ、東大に教員として戻るまでに世界の各地を経巡ってきた歩みがあったことが静かに振り返られた。

左から中島隆博氏（EAA 院長）、宮本久雄氏（東京大学名誉教授）

駒場時代に宮本氏に学んでいた中島氏は、かつて、学生として、冬の真っ暗闇の 2 号館にてギリシャ語で聖書を読んだりもしたという。宮本氏は翻訳についても旅先で仲間と訳した思い出を語っており、どこにあっても、誰かと言葉を交わしつづけてきた姿が想像された。最近の著作についての受け答えのなかで、近著の『パウロの神秘論』（東京大学出版会、2019 年）に描かれるソーマの問題は、中島氏が学生のときにすでに話されていたことがわかるなど、本質的な大きな問いについての思考が熟成されるように時間をかけて



ダイアローグ終了後、ゲストが本郷オフィスのホワイトボードにメッセージを書き記すことが恒例となっている

深まってきたことも推察された。

報告者のわたしの心に残ったのは、自分にとっての問いを探究するために旅をしながら自らのテーマを深めそしてさまざまな語学を習得されていった氏のダイナミックさと、専門がなんであるのかを聞かれるのは好きではない、という言葉である。宮本氏は現在、ヘブライ的な脱在論としてエヒィエロギアをテーマとしているが、聖書学であれ、教父哲学であれ、日本の哲学であれ、どれも 8 割は行かない成熟度であったとしても、時間をかけて、すべてのレヴェルをあげて全部を投入することをやってきているという。それが根源悪の問題を乗り越えてゆくための態度でありつづけていることに驚いた。数十年かけてなお、極めて大きな高みを目指すために時間をかけて全力投球を続けている姿には、学徒の一人として大きく励まされるものがあった。

報告者自身は昨年の石牟礼道子を読む会をきっかけに初めて宮本氏に出会ったが、今回のダイアローグを聞くことで、彼の石牟礼文学の読解の底に貫かれている近代を批判的に眼差す姿勢が、終わりなき旅をする心、それも交通機関に頼らずに自分の足で歩いてゆく時間、そうした経験によって支えられていることを諒解した。夏の気配さえ感じられるほどに暖かな春の午後のひとときであったが、全体主義への警戒が再び感じられる、移動の制限されたいまこのときに、どうやってインターネットでは到底辿り着けない世界の「つらいところ」に近づいてゆけるのか、自分とは本当は何者なのかを問うてゆけるのか、これからの世界を生き、創るための激しく厳しい課題を突きつけられたように思う。そのためには極めて遠くの未来と遙か昔を見通しながら、目の前の現実をどれだけ正視できるのか、目を逸らさずに閉塞した現実を受け止めることが求められるように感じている。

ダイアローグに耳を傾ける参加者

報告者:髙山花子(EAA特任助教)
写真撮影:立石はな(EAA特任研究員)

EAAキックオフトーク

価値と価値化を問う

2021年4月1日

2021 年 4 月 1 日（木）の午後、EAA キックオフトーク「価値と価値化を問う」が対面・オンラインのハイブリッド形式で開催された。石井剛氏（EAA 副院長）が進行を担当し、中島隆博氏（EAA 院長）、國分功一郎氏（総合文化研究科）、佐藤麻貴氏（総合文化研究科）、王欽氏（総合文化研究科）、張政遠氏（総合文化研究科）が登壇した。そこに EAA ユース（RA を務める大学院生と EAA1期生、2 期生）も加わった。

最初に発言した中島氏は「空気の価値化」について、空気を商品化するという「工学的」な発想を批判し、「社会的共通資本」（宇沢弘文）すなわち商品化できないコモンズとしての空気や水を考えるにあたって「価値」を問い直すべきだと述べた。そして資本主義における商品化や消費とは異なる仕方の価値・価値化に目を向け、人間の経験の変容、人々の生を営むチャンスとしての価値・価値化もあるはずだとした。さらにこのような問いを言語化する必要性も強調した。

次に國分氏はドゥルーズの価値論を援用して、自然のなかにいるにもかかわらず、人間の目的は必ず何らかの価値となって間接的に実現されるが、そういった価値にはつねに欺瞞があり、誰かの利益に奉仕することを指摘した。そのうえ、民主主義より立憲主義のほうが危機的な状況にある今日の社会では、ニーチェやドゥルーズの価値批判を受け止めつつも、何らかの価値を信じることはやはり大事だから、価値を批判的に捉えながら、新たに作り出していくことこそ現今の課題なのだと語った。

続いて佐藤氏は自身が参加したドイツのハンブルクにある The New Institute での議論を踏まえ、気候変化などエコロジー上の制約を考慮に入れたうえで、デモクラシーや自由意志のような、人々が共有しうる価値、カップリングすべき要素としての価値をどのように正当化していくかという問いを提起した。そして価値のあり方を考える際に、パンデミックで「日常」の変化が余儀なくされている今日だからこそ、人間同士が本来持っていた信頼（trust）を回復し、世俗化した社会でコモンズを復活させることは重要だと述べた。

3 人の発言を受けて、石井氏は価値になるものへのアプローチの不平等を指摘し、たとえば空気のようなコモンズに対するアプローチの仕方の平等性をいかに担保するかという問題を投げかけた。それに対して國分氏、中島氏、佐藤氏からは、民主主義の悪用、行政権の肥大化、コミュニティー内の調整など多角的な視点での応答がなされた。

その後、同席した王欽氏と張政遠氏もコメントを述べた。

王氏は名詞としての「価値」と動詞としての「価値化」との緊張関係に着目するとともに、価値を生きることと価値を信じることの違いを指摘した。王氏によれば、何かを信じるという意志のなかにはつねにすでに自分との距離感があって、そこに自己欺瞞が内包されるので、価値のなかに価値化の契機を見つけ、あらゆる概念を不穏なものとすべきである。モノの価値は歴史的に形成された交換関係から生じた偶然的なものである以上、私たちに残される道は、偶然に満ちた日常生活において商品だけでなく自分自身の生き方にも馴染まず、未知な他者に遭遇することであるという。

張氏は東アジアという現場の視点から、まず香港における民主主義の絶望的な状況に触れつつ、価値の序列化問題を取り上げ、生を捨てて義を取るという価

上段：左から順に石井剛氏（EAA 副院長）、中島隆博氏（EAA 院長）、國分功一郎氏（総合文化研究科）
下段：左から順に佐藤麻貴氏（EAA 特任准教授）、王欽氏（総合文化研究科）、張政遠氏（総合文化研究科）

値観に対して生の価値を無限に高めることは全体主義に対する一つの究極的な対処法だと述べたうえ、よりよく生きていくための希望を新たに EAA という「書院」に託した。次に福島での見聞を紹介しながら、水の「価値」は比較によって序列化されることを問題視すると同時に、「値段」にとりつかれず、自ら身体性をもって「価値」を見る目を養う必要があると述べた。

さらにシンポジウムに参加した学生たちからは、価値の普遍性、価値と意味の関係、現代社会におけるコモンズの構築の困難さ、価値を発見して「演ずる」ことの重要性、既存の価値に対して価値化する契機を探る具体的な方法、価値観の普及などについて、多くの質問や感想が寄せられた。それに対して登壇者たちがまた応答する形で、議論がヒートアップした。新年度の初日を飾ったキックオフトークは、価値という今日の消費社会で自明視されがちな概念を問い直し、来るべき世界を構想するための手がかりを共有でき、盛況のうちに幕を閉じた。

報告者・写真撮影:郭馳洋（EAA特任研究員）

YCAM訪問記

ホー・ツーニェン「ヴォイス・オブ・ヴォイド――虚無の声」

2021年4月2日・4月3日

2021年4月2日（金）、3日（土）の2日間、わたしは山口情報芸術センター（YCAM）を訪問した。目的はホー・ツーニェンの新作展覧会「ヴォイス・オブ・ヴォイド――虚無の声」の視察である。

東京大学東アジア藝文書院（EAA）では、2019年3月の立ち上げ以来、駒場オフィスの入居する101号館が1935年から1936年に竣工された中国人留学生のための学舎であったことを機縁として、当時の留学生資料の調査・公開をつづけている（一高プロジェクト）。ここから派生して、EAAは、2020年11月には新しく101号館映像制作プロジェクトを立ち上げた。当時の記憶の刻まれた101号館の建物自体を映像作品として残すことで、歴史を批判的に現代に継承し、新しい未来の学問の場への想像に繋げることが目的である。この企画で焦点となっているのは、満洲事変後、国家統制が強まり、日中戦争、太平洋戦争がはじまる時代の状況に、どうやって映像制作を通して近づいてゆけるのか、である。

手探りではじまったプロジェクトだったが、立ち上げの比較的早い時期、昨年12月に行われた第2回の制作ワークショップで、アドバイザーの星野太氏（東京大学）から、参考になるであろう歴史と映像に関わる作品事例として、シンガポールのアーティスト、ホー・ツーニェン氏によるあいちトリエンナーレ出品作「旅館アポリア」（2019）が紹介されたのは幸運であった（2020年度年次報告書収載第2回ワークショップ報告）。これは第二次世界大戦で特攻兵として出陣する前に若者たちが過ごした豊田市の喜楽亭を舞台に、京都学派をめぐるナレーションや複数の映像スクリーンで絶対無といった概念を視覚的に体験させる作品であったという。

EAAの制作メンバーは、博士課程に在籍する3名のリサーチ・アシスタントで、わたし自身はコーディネーターの立場にある。冬の間、作品の構想を練るなかで、資料調査は進んだが、当時の一高への留学生自身の言葉についての資料がなかなか得られず、他方で、一高生のアイデンティティをテーマとする方向が固まり、資料とナレーションを取り入れてゆく案が生まれていた。ホー・ツーニェン氏の京都学派を全面的にテーマとした新作が発表されると聞き、なにかヒントを得られないだろうか、と思い、山口を訪れた次第である。彼自身のアイディアの出どころについての純粋な好奇心も大きかった。

「ヴォイス・オブ・ヴォイド――虚無の声」の展示は、ヴァーチャル・リアリティに登場する人物たちと彼らの読み上げるテクストを紹介する映像スクリーン、そして、ヴァーチャル・リアリティを体験する場から構成されていた。

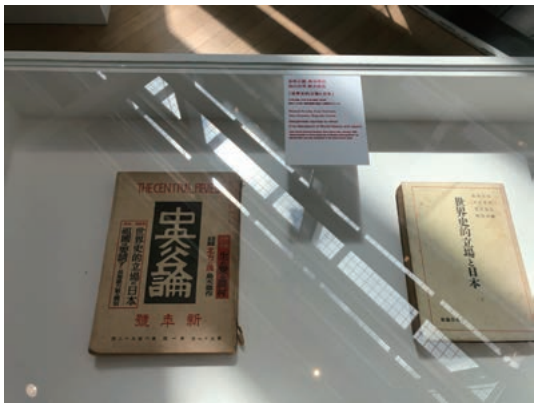
会場の配置と対応するように、ヘッドマウントディスプレイを装着して体験されるヴァーチャル・リアリティ空間は、左阿彌の茶室、監獄、空、座禅室の四つに分かれている。鑑賞者は、座っていると、左阿彌の茶室で、速記者として座談会に同席していた大家益造の視点を経験する。右手を動かすと連動して動くヴァーチャルの鉛筆で白紙に書く動作を行うと、高坂

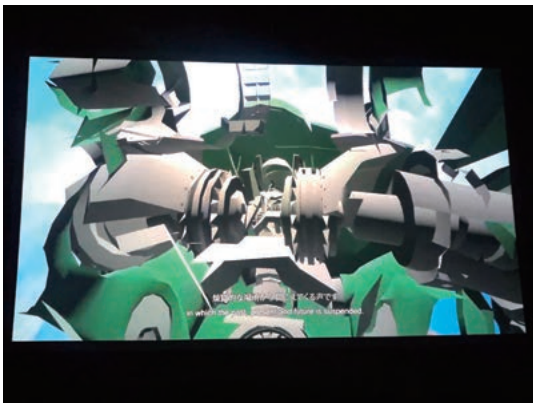
正顕、西谷啓治、高山岩男、鈴木成高の四者による座談会「世界史的立場と日本」（1941 年開催）が聞こえてくる仕組みになっている。興味深いのは、書くことをせずにいるあいだは、大家益造が戦後に発表した短歌集『アジアの砂』（大日本講談社、1971 年）があたかも自分の声であるかのように聞こえてくることだった。鑑賞者が横になると、監獄に移り、三木清の「支那事変の世界史的意義」（1938 年）、戸坂潤の「平和論の考察」（1937 年）が聞こえるようになっている。そして立ち上がると、空に移り、天上から聞こえるように企図されているのは、田邊元の京都帝国大学での講演テクスト「死生」（1943 年）である。じっと動かないでいると座禅室で西田幾多郎の『日本文化の問題』（岩波書店、1940 年）の読み上げが聞こえるのだが、うまくこの座禅室に長くいることはできず、わたしは茶室にいることがほとんどだった。

とくに印象に残ったのは、茶室にいるあいだ、速記者として手を動かしていないと、他の四者の声が何も聞こえず、彼らが口を動かしているのをみているうちに、その顔がどんどんとのっぺらぼうになるように剝けてゆく様子に立ち会ったことである。それから、田邊元の声が天空で聞こえているあいだ、戦闘機の残骸が空中に浮遊する青空のなかで、自分自身も空撃機になっているかのようで、彼のテクストを読み上げる声が、本当にわたしに宛てられているのかわからない高所での浮遊感が強かったことである。

VR の外の、田邊元について説明する映像のなかには、田邊が 1944 年に旧制第一高等学校で行った講演といいだももによるその回想がナレーションで説明される場面もあった。田邊元は一高出身で、理科に入学後、狩野亨吉のアドバイスで数学科から文転して哲学の道を歩んだ人物である。このように、時代的な重なりだけでなく、当時の一高とリンクする部分が少なくない作品であった。

ホー・ツーニェン氏の来日が叶わなかったため、直接の意見交換はできなかったことが残念だが、内覧会の行われた 4 月 2 日（金）午後には、会場とアーティストをオンラインでつなぎ、内覧会の参加者が直接アーティストに質問ができるイベントが催された。その Zoom による 2 回目のセッションで、どのような聴取を狙って異なる声を構成しているのか、質問をしたところ、非常に込み入った制作の意図が明かされた。曰く、声の配役はもちろん、それぞれの人物の声がどこからどのように聞こえてくるのか、声を定位する（locate）ことに気を配って音響技術的に設計しているという。他にも、当初は「ヴォイス・オブ・ヴォイド」というタイトルの京都学派についてのアニメーション企画を温めていたことなど、いくつも興味深い応答があり、なかでも、歴史そのものには複数のヴァージョンがあり複数の位相（layer）がある、そうした異なるコンフュギュレーションを念頭に置き、複雑さに繊細に向き合っていこうとしている態度が伝わってきたことが





心に刻まれた。

展示会初日の4月3日（土）に行われたアーティストと制作チームによるトークでは、2020年11月公開予定が延期になり、直前までVRの調整を続けてきた制作側の企図が明かされ、ホー・ツーニェン自身が来日できないなかで、彼自身がコントロールを喪失している部分として、実際の会場の音響の様子が挙げられていることが興味深かった。日本に占領されていた歴史がある東南アジア、さらには中国との戦争についての歴史認識にも言及があり、そうしたなかで、英語字幕のあるスクリーン映像に対して、VRは日本語のみで構成されていることがどういう意味をもつのか、いまも鑑賞者の一人として考えている（VRの英語版は現在準備中とうかがった）。

VRの外のスクリーンで上映される映像のそれぞれでは、作品に声を貸してくれることに対する感謝が、低く速い囁き声で述べられていた。あれは誰による誰に対する呼びかけだったのだろうか。それも含めて、過去のテクストから立ち上げる複数の声をどのように聞き取ることができるのか、制約のかけられたなかで、危険が察知されるなかで、耳を澄ます行為が求められ、そしてまた、制約下であっても、そうした行為が可能であることをありありと体感する時間だった。耳を含めた身体を作品に慣らしてゆくために何度も足を運ぶことが簡単でない状況がもどかしいが、創作にインスピレーションをあたえるだけでなく、東アジアの歴史をめぐる学問のあり方にも刺激を与える作品であったと思う。

報告者・写真撮影：髙山花子（EAA特任助教）

一高プロジェクト

藤木成彦氏インタビュー：「藤木文書」調査へ向けて

2021年4月6日

4月6日（火）、一高プロジェクトでは、新緑の駒場キャンパスにて、故藤木邦彦氏のご子息であられる藤木成彦氏をお迎えする機会を得た。お父様の遺された一高時代の留学生関連資料である「藤木文書」についてインタビューをさせていただくためであったが、成彦氏がお父様のご遺品と初めて対面される場に立ち会わせていただく形ともなった。

昼過ぎに正門で待ち合わせをし、まず101号館エントランスのパネル展示にお連れした。成彦氏は、終戦の年に疎開先の熊本でお生まれになり、6歳のころ

留学生から藤木邦彦氏に宛てられた手紙を読まれる藤木成彦氏

101 号館エントランスの展示をご覧になる成彦氏

父・邦彦氏のいる東京に出てこられ、二年間ほど一高同窓会館にお住まいだったのだという。当時のことを思い出されたご様子で、かつての「一高前駅」などの風景を熱心にご覧になっていた。

その後、101 号館内の EAA セミナールームにて、2 時間ほどインタビューが行われた。聞き手は、「藤木文書」の整理にあたった報告者（宇野瑞木）及び高原智史氏（EAA リサーチ・アシスタント）を中心に、一高映像プロジェクトの高山花子氏（EAA 特任助教）、崎濱紗奈氏（EAA 特任研究員）、そして台湾に関する研究者である前野清太朗氏（EAA 特任助教）であった。新型コロナ対策として、消毒、換気、加湿に留意し、マスク装着の上、距離を保った形で行われた。「藤木文書」とは、現在、駒場博物館に所蔵されている未整理の一高時代の留学生関連資料である。2019 年の春、EAA で整理・リスト作成を請け負うこととなり、駒場博物館の折茂克哉氏の指導のもと、高原氏と 2 人で作業にあたった。その結果、この留学生関連資料が、1942、3 年から 45 年頃まで一高の留学生課長であった藤木邦彦氏の所持品であることが判明した。そこで藤木邦彦氏の古い住所宛てにお手紙を出してみたところ、邦彦氏ご夫妻は亡くなられていたが、たいへん幸運なことに、同じマンションに住んでおられたご子息・藤木成彦氏が受け取られた。このような経緯により、全体のリストが完成したその冬に、成彦様のご厚意により駒場博物館にご寄贈いただける運びとなったのである。

今回は、まず成彦氏にご遺品を直接手にとっていただき、私たちと顔合わせをできればというイメージでいたが、想定していた質問事項への応答にとどまらず、その場で思い出された貴重な証言や興味深いエピソードもいくつもお話しくださった。印象的であったのは、藤木邦彦氏のお人柄であった。特に、同期の友人に対しても必ず敬語を使われていたというほど、丁寧に話される方であったことである。これは上から人に対することをしない思慮深いお人柄をよく物語

101 号館の EAA セミナールームでのインタビュー風景

インタビュー中の藤木成彦氏

『加茂藤成記』を見せてくださる成彦氏

101 号館の前で記念撮影（右から高山花子氏、藤木成彦氏、宇野瑞木、高原智史氏）

るエピソードと思われた。一方で東大の国史の大学院生の頃、研究仲間と京都の古刹に調査に行かれた際、その古刹の屋根に上ったことが、一番面白かったと語られていたということも楽しく素朴なお人柄をうかがわせる。成彦氏は、お父様のことをリベラルというかヒューマンな人だったとおっしゃったのも印象的であった。

温厚な性格で、大きな声で主張したり、組織をまとめ上げたりするタイプではなかったが、人の話を聞くことに長けており、難しい人間関係や状況に対処する任務の担当になることが多かったという（戦後も大学内における安保反対の学生運動対策の担当になったということである）。家の中ではあまり仕事の話をされなかったようであるが、没後 15 年もしてから再び追悼特集が組まれるほど（『史聚』41 号、2008 年 3 月）、後輩や生徒から慕われ、生前静かに語った言葉がそれぞれに深い影響を与えた。

戦後も留学生のご自宅への訪問が度々有り、中にはご夫婦でいらっしゃった方もいた。お土産は碑文の拓本が多かったそうである。こちらはいかにも歴史家らしいと感じられるが、その他にも色彩鮮やかな中国絵画やパイナップルなど持ってこられた方もいたのを子供ながらに記憶しているという。そのうちの一人には、成彦氏が仕事の関係で台湾に行かれた際に、電話で連絡を取ってお会いすることができた。その方は成彦氏に、戦時下の日本で差別を受けることもあったが、藤木先生はいつでも留学生の味方であった、と語ってくれたということである。

また、邦彦氏は退職されてから、ご自身の家系の歴史を和紙に墨書でまとめることをなさった。その名も『加茂藤成記』である。この度、成彦氏のご厚意で、その貴重な和綴じの美しい本をお持ちいただき、拝見することができた。姓氏調査の基本図書『尊卑文脈』の如き系図を含む実に本格的なもので、家系に関する歴史叙述部分の細かい推敲の跡からも、根からの歴史家らしい性格が偲ばれた。

私たちは全くのインタビューの素人で、このような場を持つことも初めてであったが、成彦氏は誠実に向き合ってくださり、私たちの質問したい内容のさらに先を汲み取って、一生懸命思い出しながら興味深いお話をしてくださった。2 時間ほどのインタビューであったが、かつて特設高等科の教室であった場で、藤木邦彦氏にまつわる当時を物語る生の資料とともにご子息の成彦氏のお話を聞くという忘れられない時間を過ごすことになった。このインタビューの内容については、いずれ何らかの形で整理して公開できればと思う。

改めて、このコロナ禍の中にもかかわらず、101 号館までお越しいただき、貴重なお話をしてくださった成彦氏に、心より感謝申し上げたい。

報告者:宇野瑞木（EAA特任研究員）
写真撮影:崎濱紗奈（EAA特任研究員）

学術フロンティア講義「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」

第1回　ガイダンス

2021年4月9日

2021 年 4 月 9 日、学術フロティア講義「30 年後の世界へ――学問とその“悪”について」の初回講義が Zoom にて行われた。今回はガイダンスとして、コーディネーターの石井剛氏（EAA 副院長）が本講義の開講趣旨の説明と各回の授業を担当する講師陣の紹介をし、約 170 名の受講者が出席した。

本講義の運営組織である東アジア藝文書院 (EAA: East Asian Academy for New Liberal Arts) は、東京大学が北京大学との協力のもと、新しい研究・教育プラットフォームの構築を目指すジョイント・プログラムである。講義の開講趣旨の説明に入る前に、まず石井氏は、EAA のオフィスがある 101 号館の歴史と EAA との関わりについて述べた。1936 年の竣工以来、中国人留学生のための校舎として使われていたのが、駒場キャンパスの 101 号館だという。101 号館に EAA のオフィスを構えた後にその史実を知り、101 号館から「東アジアの新しい学問」を北京大学と共に創ることへの想いを新たにした経緯が紹介された。

その EAA の掲げる「東アジアの新しい学問」とは、「東アジアからのリベラル・アーツ」とは何か。「リベラルアーツ」とは一般に「教養」を指すとされるが、その意味するところは摑みづらい。東アジア藝文書院の名称にある「藝文」（『漢書』藝文志に由来）には、東アジアにおけるリベラル・アーツの最も古典的な形がある、と石井氏は述べる。その歴史の大本まで遡り、新しい学問を創ろうという意気込みが、EAA の名称には込められているとの説明があった。

つづいて石井氏は、『日本を解き放つ』（東京大学出版会、2019 年）において小林康夫氏（東京大学名誉教授）が触れた「火と水の不可能な結婚」の重要性に言及しつつ、EAA の目指す学問へと話を進めた。火と水の両方が作用し循環するこの世界では、産業革命以降、人間活動が大気の循環系統を揺るがすような大きな影響力を与えている。その循環のバランスをどう取り戻すかという課題では、サステナビリティ、社会、政治、文化、経済問題が絡むのみならず、人間の現存在がもつ意味そのものを問い直していく必要があると話す。「火と水」にみるようなコンフリクトを多く抱えつつも、その中にどう希望を見出してゆくのか。この問いが EAA の出発点であり、学問でその新しい形を示すことが EAA の目指すところであるとの説明があった。

以上の問題意識を踏まえたうえで石井氏は、講義タイトル「30 年後の世界へ」に込められた想いを述べた。本講義の目的は、2050 年という具体的な時間に何が起きるのか、単に未来予測をすることではないという。むしろ、各々が 30 年後の世界において、世の中で一定の地位を占め、社会的な責任を担い世界をリードする立場に置かれたとき、何をどう望むべきなのか。大切なのは、30 年後の未来を予想することではなく、その世界を我々自身がどう形づくるのか問い続けることにある、と石井氏は呼びかけた。30 年後と

いうやや遠い未来を目指しつつ、どのような人間になり、どうより良い世界を構築すべきか。それには単に幅広い知識を身につけるのではなく、世界との関わり方に「自由さ」を求めること。教養とは、その自由を身につけることを意味するという。

この課題を探究するにあたり選ばれた今年度のテーマが、「学問とその“悪”について」である。世の中には様々なコンフリクトや矛盾がある中、私たちはどこかに「光」を求め続けている。だが、どこにその「光」、「希望」をつかむ糸口を得るのか。それには学問しかない、常に不十分なものでしかないからこそ学問には希望がある、という。石井氏は、20世紀は啓蒙的理性によって、人類史上最悪の「悪」が作られた時代であったと出席者の記憶を喚起し、啓蒙の後の世界ですらその「悪」が理性の場で行われてきたことを指摘する。学問は潔白なものではない。その事実を、学問をする者の一つのトラウマとして抱え、「悪」を眼差しつつ再出発する必要性があると感じ、「学問のその“悪”について」をテーマに据えたと述べた。

以上の講義の趣旨説明につづき、本年度の各回の講義を担当する講師陣の紹介があった。本講義は、多岐にわたる分野から前掲のテーマを探究するオムニバス授業である。駒場の礎となりその未来を支える、様々な分野で活躍される先生方を講師陣に迎えるほか、さらに今年はコロナ禍のオンライン環境を活かし、海外からも2名の先生が加わり、授業を担当されるとの説明があった。

石井剛氏
（EAA副院長）

初回のガイダンスは、講義の趣旨説明の合間に、参加者からの質疑応答を交える形で進められ、様々な質問が寄せられた。講義で網羅する分野が多岐にわたるためか、出席者からは、関連分野の知識はないが受講は可能かとの質問もあった。これに対し石井氏は、「知識」と「知性」は別物であり、この講義では後者を磨いて欲しいと答え、知性は知識に縛られるべきではなく、本講義に関わることで何か新しい問いを得たいという「意志」が求められると強調した。

学術フロンティア講義の「フロンティア」とは、これから開拓が始まろうとしている沃野であり、予測できない他者に否が応でも出遭う場所である。そのフロンティアにいることを一緒に楽しんで欲しいという石井氏の激励の言葉とともに、初回講義は締め括られた。

報告者:片岡真伊（EAA特任研究員）

〈現代作家アーカイヴ〉文学インタヴュー

第22回　松浦寿輝氏

2021年4月12日

2021年4月12日、「〈現代作家アーカイヴ〉文学インタビュー」の収録の模様がZoomにて公開された。今回のゲストには、詩人・小説家である松浦寿輝氏を迎え、聞き手を武田将明氏（総合文化研究科）が務めた。現代作家アーカイヴの文学インタビューでは、毎回ゲストが自身の代表作を3作選び、それらを軸としゲストの作家活動を振り返る形でインタビューが展開される。今回松浦氏が選んだのは、『松浦寿輝詩集』（思潮社、1992年）、『青天有月――エセー』（思潮社、1996年）、そして『人外』（講談社、2019年）の3作。さらに『明治の表象空間』（新潮社、2014年）、『幽 花腐し』（講談社、2017年）の詳説なども織り交ぜつつ、松浦氏の創作史が紡ぎ出された。

松浦氏は、詩から小説、エセー、評論、研究活

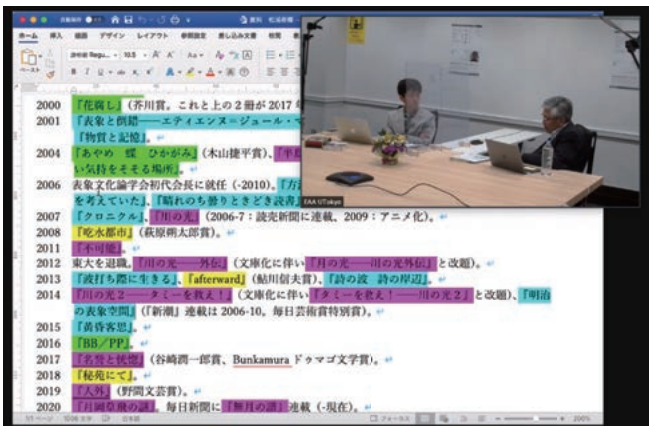
動など多岐にわたる分野で執筆活動を繰り広げてきた。その原動力はどこにあり、いかなるきっかけにより創作の幅を広げてきたのか。幼少期より世界とどことなく噛み合わないという孤独感から、世界（他者）と自身を結びつけるものは言葉しかないという意識を抱いていたという。言葉というものに対する様々なコンプレックスがないまぜになった一種のやるせなさを抱える中、言葉のユートピア、純粋結晶としての詩、そして自分の何かを作りたいという欲求に突き動かされ、徐々に詩を書き始めたと話す。詩作を始めた1978年ごろは、松浦氏が渡仏中にフランス語で論文を執筆していた時期にも重なる。フランス語で論文を書くということ。それは、自分の肉や骨のしがらみになっている日本語を一度引き剝がし、異なるシステムと歴史を持つ別言語の中で自分の表現を作ることを意味した。詩作と論文執筆で「自分の表現」を創ることに励んだ20代であったという。

だが松浦氏にとって「自分の表現を創る」ことは、「自己表現」（self-expression）とはまた別物であるという。「物語」（『ウサギのダンス』〔七月堂、1982年〕所収）の冒頭には「一人称の物語はこれで終わる」という一文がある。近代文学は、主人公の「私」が真実を語ることに始まりがあるとされるが、武田氏がその一文に近代文学の定型への拒絶を見出すと、松浦氏は「内から出てくるExpressionとは別のものを書きたいという気持ちがあった」と明かした。松浦氏にとって「物語」はいわば「詩の方法論をめぐる詩」（メタポエム）であり、それ自体を詩にすれば面白いのではという発想から生まれたという。

自発的に書いた詩の場合とは異なり、小説を書く契機となったのは、『大航海』の編集をしていた三浦雅士氏からの依頼であった。「僕は外から来た力を利用し方法を変えてアウトプットして、ということで来ている気がします」と述べる松浦氏は、同じく依頼により執筆したエセー『青天有月』を、「非常に自由に自分の中のものが流路してできた幸福な1冊」として、自身の選ぶ3冊に挙げる。

ジャンルを超越し、詩、エセー、小説、評論とのあいだを揺蕩う松浦氏がその小説に繰り返し描くのは、世間と社会、幻覚と現実、生と死などの「境界」にいる存在である。武田氏にその理由を問われると、松浦氏は、この現世が濁世だと思っているところがあり、どこかでそこから離脱したいという一種の憧れがその奥底には絡んでいると述べた。だが離脱してどこに行くのか。どこに行けるわけでもなく、結果「ここともあそこの境目のようなところ」にいつも立ち戻っていく小説や詩が創られた、と氏は語る。だがその境界の描き方は決して‘transgressive’（境界侵犯的）ではない。‘liminal’（境目の・閾の）な場所を揺蕩っているとの武田氏の指摘に、むしろその揺蕩いのメカニズムを追求したい、と松浦氏は答えた。

インタビュー本編では、武田氏の丁寧な読みから発せられる問いに誘われ、言語、生死、光と闇、ジャンルの境界を彷徨う松浦氏の創作過程や実験、探究の跡が、次々と詳らかにされてゆく。インタビューの終盤には、松浦氏が詩集『秘苑にて』（書肆山田、2018年）から選んだ一篇「光の庭」の朗読があり、インタビューで聞き知った松浦氏の執筆活動における



当日のインタビューはウェビナーで発信された

左から武田将明氏（総合文化研究科）、小説家の松浦寿輝氏

歩みの一歩一歩に思いを馳せつつ耳を傾けた。松浦氏の世界観が像を結んではまた解け、さらに新たな印象が形成される。揺蕩い変容し続ける松浦氏の創作史を追体験できるようなインタビューであり、その著作を改めて再読したいという思いに駆られた。

報告者:片岡真伊（EAA特任研究員）

EAAフェローからの便り

ケンブリッジからの報告

2021年4月15日

2019 年 3 月末に特任助教を退職し、EAA フェローになった八幡さくらです。2020 年度からは東洋大学国際哲学研究センターの客員研究員となり、2021 年 1 月からケンブリッジ大学の哲学部に訪問研究員として在籍しています。日本では新学期が始まりましたが、昨年からのコロナウィルス問題で大学の様子もずいぶん変わったのではないかと思います。現在イギリスに研究滞在中の身として、こちらの様子を皆さんにお知らせしたいと思います。

イギリスでは 3 度にわたるロックダウンが行われ、現在もその最中です。Stay Home が基本とされ、自宅での仕事が推奨され、健康のための運動として戸外に出ることが許可されています。ロックダウン中は生活必需品を扱う店（スーパーや食材店、薬局など）以外は閉店し、レストランもテイクアウトかデリバリーのみで営業を続けています。その他の物品についてはオンラインショップで買うという生活です。ケンブリッジでも街中の多くの店が閉店しているため、学生や観光客、買い物客でにぎわう通常の状況からは想像できないような人の少なさです。街はがらんとした静けさに包ま

中心地の King’s Parade とマーケット

哲学部がある Raised Faculty Building

信号機で入館制限する中央図書館

れています。

イギリスの多くの大学と同様に、ケンブリッジ大学もオンラインで授業を行っており、2021／22 年もオンライン授業が継続される予定です。約 1 年にわたるオンライン授業の経験によって、教員も学生もともにオンラインでの授業形式に慣れてきた雰囲気が感じられます。こちらでのオンライン授業は基本的にはビデオをオンにして行われるので、教員と学生が顔を見ながら授業を行っています。何度も顔を合わせるうちに、お互い知り合いになり、「元気？　最近どう？」と声を掛け合うような関係になっています。

大学内での実験や資料の関係で来校しなければならない学生や職員以外は、書籍などを借りるとき以外来校しないので、大学キャンパス内も人がほとんどいません。図書館の利用に関しては、書籍をオンライン検索して貸し出し予約し、受け取りに行く時間を選んで取りに行くというスタイルです。大学図書館のサイトからオンラインで見ることが可能な資料もありますし、それ以外にはコピーやスキャンを注文するという形で資料を入手できます。

Parker's Piece 公園に咲く水仙

イギリスでは 2020 年 12 月からワクチンの接種が始まり、4 月 7 日現在 3,180 万を超える人が 1 回目の接種を終え、609 万を超える人が 2 回目の接種を終えています。感染者数の減少とワクチン接種状況を鑑みて、政府は 3 月末から徐々にロックダウンの緩和を進めています。すでに学校は低学年から順番に対面での授業が再開されました。春が近づくにつれ、公園や街を散歩する人やピクニックをする人も増えてきました。ロックダウン中は別の家族同士が会うことも規制されていましたが、屋外での 2 世帯まであるいは 6 人までの集会が可能になります。また 4 月半ばには生活必需品以外の店も規制（手指消毒、マスク、人数制限）に従って再開されます。夏以降にはかなり状況が改善することが期待されていますが、まだ予断を許さない状況で、今後の変異種やワクチンの副作用の問題などで改善する時期は遅れる可能性もあります。

こちらで知り合ったイギリス人は、私が日本人だと知ると、「日本におけるワクチン接種が遅れているのはなぜか？」「なぜ日本はこの夏にオリンピックを開催するのか？」といった質問を投げかけてくることが多々あります（個人的な話ですが、私は東日本大震災の後、ドイツのハンブルクに留学しました。その際には、ドイツ人から「なぜ日本は原発を止めないのか？」とい

う質問を度々受けました）。そういう時、自分の知識と言語能力を総動員して説明を試みますが、色々話し合った後で、もっとうまく説明できなかったものかと反省したりもします。イギリスのことも知らなければならないが、自分の国（日本）のことも知っていなければならない。これは海外滞在を経験した人に共通する実感ではないでしょうか。コロナ禍のような危機的状況において、伝えなければならない情報はより深刻なものが多くなります。何かを正確に知り、その情報を自分の言葉で伝えられるようになること、そして、自分の意見を明確化することが重要だと、当たり前のことながら改めて感じさせられます。

自分の言葉を見つめることは、自分の思考を反省することでもあります。いま私たちが誰に何をどうやって伝えられるのかを問う、コロナ禍2年目の春です。

報告者・写真撮影：八幡さくら（EAAフェロー）

学術フロンティア講義「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」

第2回　未来社会2050――学問を問う

2021年4月16日

2021年4月16日（金）にオンラインで開催された学術フロンティア講義「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」の第2回は、環境哲学を専門とする佐藤麻貴氏（EAA特任准教授）を講師に迎えて行われた。講義のテーマは「未来社会2050――学問を問う」である。

「自分は何者なのか」

講義は、佐藤氏の「自分は何者なのか」という自己紹介からはじまった。佐藤氏は自身の理系から文系へ転向した学歴、そして政府組織、大学や国際企業、国際組織などさまざまな現場に携わった経歴から、「人には歴史がある」と同時に、個人の学問の追求や興味関心の経緯変遷にも歴史があるという話題を提供した。

LOOK BACK TO THINK AHEAD

佐藤氏は、文理融合的な考え方への導入として、時間について取り上げた。古代ギリシアの時間概念や、見田宗介の『時間の比較社会学』（岩波書店、1981年）における円環的・回帰的な時間概念、熱力学において時間はエネルギーの第二法則（エントロピーの増大）によってのみ捉えられることなど、時間に関する多種多様な考え方が紹介された。また未来について考える際の手法の一つであるモデリング予測を取り上げ、そこで考えられている過去、現在、未来とは、現在（t0）に対して過去は（t-n）、将来は（t+n）というように、直線的に捉えられた時間概念であることを説明した。こうしたことを通じて佐藤氏が強調したのは、IPCC議長であったR.K.パチャウリ博士が示した「LOOK BACK TO THINK AHEAD（過去を振り返って未来を考える）」という考え方である。すなわち、現在は過去ともシームレスに繋がっており、未来を考えるということは過去を振り返り、過去からも学ばなくてはならないという観点である。

佐藤麻貴氏（EAA特任准教授）

学問とその“悪”
――モデルを使った未来予測から

続いて、佐藤氏はコンピュータシミュレーションという事例を通して、学問とその「悪」の関係性について話題を展開した。具体的に取り上げられたのは、日本人にとってなじみ深い、高齢化社会の問題であった。

総務省国立社会保障・人口問題研究所から出されたデータを紐解くと、2005年以降、日本の人口は減少傾向にある。また、国勢調査に基づいた日本の長期人口推移予測によると、生産年齢人口の減少に伴う、経済規模の縮小が危惧されている。こうした高齢化社会の見通しに対し、佐藤氏は人口減少が本当に困ることなのかという疑問を投げかけた。

人口問題研究所の示したデータによると、2050年の日本の人口はおよそ9,515万人となることが予測されている。勿論、人口だけに回収される問題ではないものの、豊かな現代日本思想を生んだ明治維新（1868年）の3,333万人と、終戦期の1945年の7,199万人と比べても、人口という指標だけで見ると、人口減少が問題だとは決して言えないはずであることが指摘された。

このようなデータ分析に対し、佐藤氏は、「未来予測は、将来像を描くための指針に過ぎず、問題は、コンピュータがはじき出すデータに、将来の何を見据えて、今から、何を準備しておくのかということだ」と解説した。

未来社会2050
――それはいかなる社会か？

さらに、三菱総合研究所が示した「未来社会2050」に触れながら、佐藤氏は未来社会を構想するにあたって、グローバル社会として直面しなくてはならない、経済成長と環境保全の両立に伴う問題について解説した。1997年の京都議定書採択以来、経済成長にはエネルギー消費の増加と、それに伴う炭素排出量の増大も伴うことが、茅方程式により指摘されている。こうしたトリレンマ（経済、エネルギー消費、環境）を超克する要請として出てきたのが、「脱成長（degrowth）」や、経済成長とエネルギー消費との「切り離し（decoupling）」の議論である。こうした潮流に触れながら、佐藤氏は脱炭素が発展途上国も先進国も等しく向き合わねばならない課題である、ということを指摘した。

未来社会2050――学問を問う

IPCCシナリオ分析の原型となる考え方を示された国立環境研究所の森田恒幸博士は生前、シナリオ分析を考える際に、どのような未来に暮らしたいのか、未来に在りたい姿を考えなければならないと主張していた。佐藤氏はそれに基づき、モデリング予測に加え、さらにシナリオ分析的な要素を加えることにより、未来をよりヴィヴィッドに描く重要性を説いた。また、シナリオによる未来分析は、人間のもつ想像力・創造力そのものの発露であると指摘した。

講義の最後に、佐藤氏は学問とは何か、という問いに対して次のように応答した。すなわち学問の悪を論ずるに当たり「学問とは諸刃の刃である」。しかしながら、学問とは同時に「未来を切り開いていく原動力」であり、「多角的視野を得ることによって、不確実性の高い未来を切り開くためのツール」でもある。学問の悪のみならず、学問の悪を考察することを通して、学問の善い面にも改めて着目すべきであると指摘し、講義を締めくくった。

当日は230名以上が集まり、EAAの活動を支えるダイキン工業株式会社の方々も出席した。講義は、熱い議論が交わされるなか終了した。

報告者:滕束君(EAAリサーチ・アシスタント)

リアクション・ペーパーからの抜粋

(1)学問とは諸刃の剣であり、捉えようの問題であるとのお話があったが、学問の分野によって捉え方のマナーが異なるという場合があると思われる。たとえば、文化的に現代よりもむしろ豊かだったと捉えられる明治期は、同時に政治的な混乱と経済的な打撃に覆われた危機の時代でもあった。この点で、明治期は文学や哲学、芸術の分野にとって幸福な時代であると言える一方、政治学や経済学においては悲劇が現出した時代であるとも形容できる。

学問の成果が有する意義は、それを認識する人間の捉え方によって変化するというのは大いに同意するところである。しかし、すべての捉え方を実践できる者など存在しないのだから、人がある事象を手に持つ刃で捌く一方、背中から別の刃によって刺されているという状況は避けえないものなのではないか。

私は、この問いに対するアプローチは、このバイアスの悪の存在を認識することしかないと考えている。(教養学部3年)

(2)少子高齢化にしろ、地球温暖化にしろ、世の中がそれ自体を何か絶対悪のようなものとして決めつけてしまっていて、具体的に何が困るのかという部分から目を逸らしているのではないかと思った。

数値データだけで考える事で、個々の人生であったり時間的感覚というものが削がれてしまっているのではないかと思った。

20世紀までは、戦争における敵のように、他人を悪者とすることができたが、21世紀以降は、地球温暖化のように、他人という悪者が存在せず、自分たち人間全員が悪者となってしまう時代になっていくのではないかと思った。

未来を予測することが最優先されるものではなく、未来に向けて今を生きる自分が何をするべきかということを考えることが、まず大切なのではないかと思った。

現在の多くの日本人が、日本の将来を悲観視し過ぎているのではないかと思った。

役に立つかどうかで価値が決まることもあると思うが、役に立たないからといって無価値であるという考えには違和感を感じ、有用性と価値の関係は難しいなと感じた。(文科1類1年)

(3)学問が未来の予測について考えることに使われているが、学問に求められるのはその未来をどのように捉え、どのように動いていくか考えることだと思います。たとえば今日出てきた人口のデータでは、その何が問題なのか、はたまたどこが良いのか、対策をすべきなのか促していくのかについてが大切だと思います。そのような面で自分は学問はツールとしての側面が大きいと思います。ここで自分として思うのが、学問をどう生活と絡められるかです。講義後半の質問でもあったように、学問で人の精神を無視するというのは生活という精神に基づいたものに活用すると不都合にもなり得る気がします。学問は生活にどのように活用できるか、人の精神をどのように取り入れられるか、これは人々の歴史をしっかりと見つめ直すというのが大切だと思います。(理科2類)

第15回 石牟礼道子を読む会

〈合評会〉『石牟礼道子を読む――世界をひらく／漂浪(され)く』

2021年4月17日

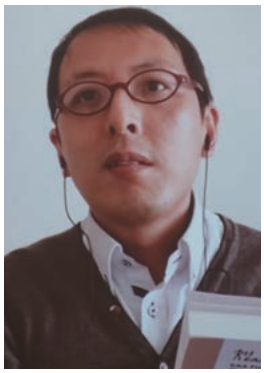
4月17日（土）13時から、EAAセミナールームでの対面とZoomを併用したハイブリッド方式にて、石牟礼道子を読む会の第15回として、この3月にEAAブックレットとして刊行された『石牟礼道子を読む――世界をひらく／漂浪(され)く』の合評会が開催された。参加者は、ブックレットの執筆者である宮本久雄氏（東京純心大学）、張政遠氏（東京大学）、山田悠介氏（大東文化大学）、建部良平氏（東京大学大学院博士課程）、宮田晃碩氏（EAAリサーチアシスタント）、佐藤麻貴氏（EAA特任准教授）、高山花子（EAA特任助教）、報告者の宇野瑞木（EAA特任研究員）に加え、読書会のメンバーの鈴木将久氏（東京大学）、石井剛氏（EAA副院長）、田中雄大氏（東京大学大学院博士課程）、さらに今学期授業で『苦海浄土』を読むという伊達聖伸氏（東京大学）の10名であった。

このブックレットは、昨年度に2回に分けて行われたオンラインワークショップの内容をまとめた論文集である。まさにコロナという思わぬ事態の中で、過去の災厄に人々がどのように向き合ったのかを学ぶために何か文学作品を読めないか、ということで考えたのが、石牟礼道子を読むということであった。今回、昨年6月以来、このコロナ禍の中で、ずっとオンラインで開催してきた読書会において、今年度最初の今回は、一部オンラインであったが、はじめて対面での開催という形をもてた会でもあった。

まず、編者の一人である宇野から「合評会」の趣旨が述べられた後、もう一人の編者である高山氏より、宮本氏に、昨年度の和辻哲郎文化賞を受賞した『パウロの神秘論――他者との相生の地平をひらく』（東京大学出版会、2019年）の紹介とともにお祝いの言葉が捧げられた。その後、順番に、それぞれブックレットの全体や各論についての感想を述べていき、共有していく形となった。

初めに、張政遠氏より、自身の「道」をめぐる哲学的実践の取り組みについて説明があり、改めて福島の現状の語りといったものに耳を傾けることの重要性が強調され、この夏に山田徹監督のドキュメンタリー映画『新地町の漁師たち』（2016年）を上映することが述べられた。

続いて、高山氏は、自身の関心の在り処である「声」と「歌」の問題を改めて振り返り、また各論について、改めて一冊の本として通読して感じたコメントを述べていった。張氏の泥道や、山田氏の草木というテーマ、さらには宮本氏の自分の足で歩く巡礼というテーマにリンクするものとして、宮本氏が編者を務めた『シリーズ物語り論　第3巻　彼方からの声』（東京大学出版会、2007年）に再録された石牟礼と金泰昌氏との対談の中で、石牟礼が一本の草であるようなときに幸福を感じていると述べられていることが、今後、自然や草花のテーマを深めるために鍵になるのではない


張政遠氏

高山花子氏

山田悠介氏

宇野瑞木氏

か、と指摘された。

山田氏からは、参考文献の多様さが際立った一冊となっている点が指摘され、異なるフィールドの執筆者が響き合いながらも、異なるバックボーンから論じていること、その豊かさへの気づきがあったことが述べられた。そして、人と人のコミュニケーションと共に、植物とのコミュニケーションが重要で、今後、草と木、そして花という位相の違いも含めて考えていく構想が示された。さらに許しの問題もこれからの課題として言及された。

報告者である宇野は、自身の説話研究という専門性が現実世界と乖離しているという感覚を抱きがちであったが、石牟礼を読む中で、その伝承、語りの次元というものの面白さや意味を改めて確信できる機会となったことを述べた。また、文学研究者は作品を論じるのは当たり前と考えてしまうのであるが、哲学者は石牟礼の言葉をどのように受け、さらにどのように言葉を発するのか、という自身の態度から問い直す作業を常にしている、という点に深い示唆を受けたと語り、各論への感想を述べていった。

宮本氏のコメントは、もう一つの講演をいただいたかのような濃密な話であった。特に、石牟礼の『水はみどろの宮』における阿蘇山の噴火と大地震の描写が、後の熊本の大地震を予言するものであったとし、石牟礼が入居していた施設も被害を受け、別の場所に移る中で、石牟礼がかなり体調を崩したことにも言及された点は示唆的であった。その上で、様々な災害、東日本大震災、熊本大地震、そして今のコロナの状況も含めた災害が、石牟礼が見た芭蕉の「山路きて何やらゆかしすみれ草」という俳句にもあるように、道端の「一本の花」を念ずることに集約しているのではないか、と述べられた。そして、この会に対して、石牟礼の文学、言葉を受け止めて、現代の災害の状況を考えていくこと、もっと世界に広めていくことへの願いが託された。

宮田氏は、言語の隔たりということを自身の問題に

宮本久雄氏

宮田晃碩氏

建部良平氏

佐藤麻貴氏

田中雄大氏

鈴木将久氏

伊達聖伸氏

石井剛氏

引き付けて改めて語り、こうした集まりの場でも、私たちは本当に同じことを共有しているのであろうか、という問題を感じながら思考していることを述べた。その上で、「一緒に」集まって考える、あるいは「一緒に」道を歩く、といった時に、「一緒に」とは何を意味しているのか考えたいという抱負が述べられた。

建部氏からは白川静の「道字論」の一節が紹介され、道というものは、もともと人間が居住する共同体の居住地というものを持ち、その外に出ることは非常に挑戦的なことであった、外はつまり精霊たち、自然がひしめき合っている場所であり、そこに道を通していくという行為はチャレンジングなことであったことが確認された。そのために、道に呪術者が先祖の首を携えていき、そして首を置いた場所が、「邊」（首という字がある）であるという点が紹介され、山田論文のさらし首の見た風景と道端の草の記憶に関する議論にも触れながら、今後石牟礼を読む際に白川静と連関させてみていく提案がなされた。

佐藤氏は、読書会に参加する経緯を振り返りながら、以前から『苦海浄土』に関心はあったが、環境哲学者として環境問題の現場に身を置いていた経験もあり、非常に重く捉えていたからこそなかなかコミットできなかったことを述べた。そして石牟礼の語りについて、宮本氏が指摘したように、science based on evidence と science based on narrative の間を考えていくことが求められるとし、石牟礼テクストを読む際の多様な態度への可能性が示唆された。

執筆者がひと通り感想を述べた後で、そのほかの読書会のメンバーも発言していった。

田中雄大氏は、石牟礼文学が、日常言語（公的言語、説明的言語、規範的言語等）とどのようにずれているのか、という問題に関心があって参加していると述べ、今回のブックレットの論文も様々な角度から、どれも日常の場とのズレ、異質なものへの関心が共通していたのではないか、という指摘があった。

また 2 回のワークショップのコメンテーター及び司会を務めた鈴木将久氏は、初回から読書会に参加し、2 回のワークショップを経て完成したブックレットを読んでみて、それぞれのテクストがかなり変容してきたことを感じたと述べた。コロナで身体的に身動きが取れず、様々な意味で干からびていた感覚があるが、読書会でどこに向かうか予測できない変化や発見を感じたことが自身に潤いをもたらしたことが述べられた。そして、来月から石牟礼の新作能や琵琶の語りを観ることになっているという展開に驚きながらも、そこでさらに私たちが発見と変容を得られることを期待していると述べた。

伊達氏からは、小国論という歴史の重層的な把握

101 号館 EAA セミナーにて集合写真（左から、建部氏、宇野、宮本氏、高山氏、山田氏）

の問題に取り組んでおり、そこから石牟礼道子に接近して考えたいとし、関心の在り処と感想が述べられた。

最後に、石井氏から、声と歌の違いと共通性について、より深い考察を行うことの重要性が指摘された。そして、このコロナのもたらしている状況もそうであるが、今、福島第一原発の汚染水海洋放出の方針が決まるという事態も進む中で、この会がそもそも災害文学という問題関心から始まったということにもう一度立ち返る必要があると述べ、私たちの現在とこれからを再度確認する形となった。

この石井氏の声と歌という問題提起は今後の会の方向にとって重要なものであったように思われる。これについてはさらに応答が相次ぎ、特にナチスドイツにおけるハーモニアの問題などその危険性への注意の喚起もあり、音の次元における倫理性の問題、渾沌の死と新たな渾沌の生まれている可能性、そこから異質な音、不協和音のオーケストラ、尺八や琵琶のノイズを取り入れた武満徹の試みまで話題が広がった。さらに宮本氏からは、声と歌だけではなく、踊り、身振りの次元が大事であることも付け加えられた。

今回の合評会は、これまでの歩みを確認する作業というより、さらにもうひとつの次元へ漂浪（さすら）きだすような重層的かつ錯綜する議論の場となったと言えるだろう。その中で、自然と声と歌、身振りや踊りという次なる課題が示され、期せずしてというべきか、5 月以降に控えている石牟礼の新作能と、1980 年代まで熊本の辺りで活躍していた琵琶法師「山鹿良之」の語りの上映会に向けて、問題意識を共有する場ともなった。

能は河原乞食と呼ばれたような民によって死者鎮魂の儀礼として始まったものであったこと、平家琵琶も、盲者の語り部が共同体の外側から死者、むかしの人々の声を語るものであることを改めて考えるにつけ、災害という出来事と言葉の次元がどのような関係にあるのか、そこで何か起こっているのか、を何らかの形で感じ取れるのではと想像する。それを今、私たちが一緒に見るという営為が、新たに何を生み出し、発見させるのか、期待を込め、本年度もどこへいくか予測不能の舟に乗って、移動し続けていきたい。そして、旅をすること、歩くことを身体を伴ってできる日が来ることを願ってやまない。

報告者:宇野瑞木（EAA特任研究員）
写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

学術フロンティア講義「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」

第3回 地球上の生命と人類は30年後にどうなっているか

2021年4月23日

2021年4月23日（金）、ガイダンスを含めて3回目となる学術フロンティア講義がオンラインで行われた。今回の講師は、分子生物学・遺伝学を専門とする太田邦史氏（総合文化研究科）である。太田氏は昨年度までの2年間、教養学部の学部長、大学院総合文化研究科の研究科長も務められ、学内者はとりわけ新型コロナウイルス感染症への対応でもそのお名前を頻繁に目にしたはずである。

今回の講義は、太田氏の専門領域である生物学、とりわけ進化と多様性という観点から、私たちの生きる現在および将来を考え直す視座を提供するものであった。「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」という本講義の主題に照らして言えば、「30年後」というスケールを問い直すものであったとも言えよう。生物の生が紡ぐ時間は、必ずしも私たち人間が社会生活を営むうえで基準とする時間とは一致しない。私たちが「環境のため」といって設定する目標も、政治的な思惑を免れるものではない。今回の講義は、私たちがいかに問題を設定すべきかという、その根本的な部分に対する反省を促すものであったと言える。

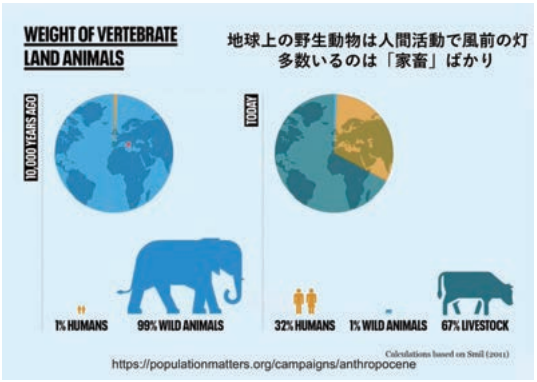
生物にとって何故多様性が大事かと言えば、それは環境の変化を乗り越え、それどころか「ピンチをチャンスに」するためである。遺伝的多様性が保たれていれば、大きな環境変化に直面したときでも、外れ値にあたる遺伝的特質をもつ集団がその環境に適応し、そこから新たな種が生じてくるということも起こる。実際のところ、過去には大規模や火山活動や隕石の衝突等によって環境が激変し、生物は大量絶滅を経験してきたのだが、それはまた後に生物種の増加をもたらしたのであった。生物はいわば「無駄」を作ることで、変化に備えているのである。

太田邦史氏（総合文化研究科）

人間が環境に対してもたらす影響は、この多様性という観点から捉えられる必要がある。地球上の生命にとって人類の活動が問題であるのは、エネルギーの蕩尽や環境変動においてというよりむしろ、その多様性を減少させているという点においてである。もし多様性が保たれていれば、生命は環境の変化に耐えるだけのしなやかさを有している。そのしなやかさが人間の活動によって失われていることが問題なのである。

人類が生物の多様性を低減させてきたというのは、なにも最近に限ったことではない。有史以来、人間は多くの生物種を絶滅させてきたし、また動物および植物の家畜化（domestication）を行ってきた。具体的な数値を示すならば、地上の脊椎動物の総量（重さ）は、1万年前には99%が野生動物で占められていたのが、今日では32%がヒト、67%が家畜、そしてわずか1%が野生動物によって占められるばかりである。また生物多様性への人間の影響は、人為的なものに限らない。人間の移動や交通手段が、本来であれば隔離されていたはずの生息域を繋いでしまい、生物種を均質化してしまう、という事態も起こっている。

こうした事情を踏まえて考えねばならないのは、人間も含めた生物が「ネットワーク」として存在している



講義する太田邦史氏

ということである。そのバランスによって成り立っているのだということである。太田氏の言葉をそのまま引いて言えば、生物とは「ノードの多様性によって強固になっているネットワーク」にほかならない。このことを理解し、関係そのものの自己修復能力の、不可逆的な破壊を避けることができるか。それが私たちの直面している課題なのである。

講義を受けて活発な質疑が交わされた。そのなかで太田氏が指摘した根本的な課題は、「幸福の定義を考え直さねばならない」ということである。上に述べたように、私たち人間自身が、ネットワークとして、関係として生きるものである。このことに自覚的にならねばならない。いま敷衍して考えるならば、おそらく生物種を絶滅に追いこむことや「家畜化」の過程も、ある種の「関係」であろう。だがそれは持続可能な関係ではない。人間の幸福と地球環境とを別個の条件と考えるのではなく、むしろそれらを関係として捉え直すこと、そこから考えねばならないのである。

冒頭では、私たち人間の問題設定が、必ずしも生物の生そのものに即しているとは限らない、と言った。しかしここに見た生物学の発見と示唆は、紛れもなく人間の営みの生んだものである。私たちは、私たち自身が元来そこに属していた関係へ、こうして関わり直す観点を得ることができる。そのような学問が、学問の成果として必要なのであろう。もちろん学問は、人間の営みとして為されるほかなく、その限り社会的な時間のなかで行われねばならない。「30年後の世界へ」とは、そうした学問そのもの可能性を、私たちが具体的に望み見るための時間設定であるとも考えられる。

報告者:宮田晃碩(EAAリサーチ・アシスタント)

リアクション・ペーパーからの抜粋

(1) 最近よく話題にあがる多様性の必要について生物的な見地から基礎づける授業で大変興味深かった（社会的人間の多様性の話と同一視していいのかは分からない）。人間のマインドセット、パラダイム、幸福の再定義がどのように可能かという疑問は前回の授業で話題になった時間概念の話と関係してきそうだと思った。直線的な時間概念で人間の生活を考えるとどうしても近代資本主義的な成長、拡大の方向に進んでしまいそうである。個々の人間の日常的な日々の繰り返しという円環的な時間概念、そのなかに成長とは違った幸福を見いだすこと。そこに自分の幸福の追求が多様な生物との共存につながるヒントがあるかもしれない。（教養学部後期課程）

(2) 環境維持・生物多様性から一歩踏み込み、「人間の多様性」について考えたい。今回の講義から、多様性が動物種の存続に不可欠であることはよくわかる。一方、これはある種のエゴであるが、環境維持を考え

るときには人間の存続が大前提になる。であるから、この手の議論には人間の多様性が不可欠であると考えられる。しかし、現代の情勢と歴史を鑑みるに、我々人類はむしろ多様性の反発を行ってきたのではないか。帝国主義下では「遅れている国々」を「進んでいる国々」へ同質化するという発想が少なからずあっただろうし、宗教戦争などは最もたる例だろう。今現在取りざたされている、黒人・ジェンダーマイノリティへの不寛容などもこの一部だと考えられる。利権がらみの事情なども大きいだろうが、これらの運動の背景には多様性への反発があると言ってほぼ間違いないだろう。集団単位での解決に向かうためには、個人個人が寛容の精神を持つことが不可欠なのではないか。生物多様性の精神のためには、まず人間多様性の精神が必要であると考える。（理科一類〜三類）

(3) 私は今、田辺明生先生の文化人類学の講義を受けているのですが、それと関連づけて考えるなかで思ったことについて書かせていただきます。太田先生の講義からは、生物が多様性を維持することが地球生命体の生存に関わってくることやそうした多様性を人類が脅かしていること、そして地球の均質化は環境の変化への弱さを生み出すことを学びました。だから多様性を取り戻すべきだ、と。しかし、ここで私が思うのは、地球の生命の持続、あるいは人類の存続、とは何のためなのかということです。地球の生命にしても、人類にしても、いつか終わりが来るのは自明の事実です。人間がいつか死を迎えるように。終わりばかりを意識すると、悲観的な考えに陥りそうになります。生あるものはいつか終わりを迎えるのだから、それが多少早まっても別に構わないじゃないか、と。こうした考えに陥るのを避けるにはどういう世界観を持つことが大切なのだろうか、という問いを私は持ちました。この問いに答えていく上で大きな手助けになるのが、田辺先生や太田先生がおっしゃる関係性の考え方なのだと思います。私という人間の、人類の、あるいは地球の、その終末の後まで想像力を巡らせ、無限に広がる関係性の編み目の中に自らを位置づけることが大切な気がします。それがどうすれば可能になるのか。それをじっくり考えてみたいと思います。（文科一類〜三類）

〈経験〉を見つめ直すための哲学

メルロ＝ポンティと考える身体・他者・言語

2021年4月24日

2021 年 4 月 24 日、東京大学共生のための国際哲学研究センター（UTCP）主催、東アジア藝文書院（EAA）共催のシンポジウム「〈経験〉を見つめ直すための哲学――メルロ＝ポンティと考える身体・他者・言語」が Zoom にて開催された。

このシンポジウムは、UTCP が行っている一般向けの公開哲学セミナーの一つとして企画され、EAA からも現象学・知覚の哲学を専門とする筆者（田村正資〔東京大学〕）が参加して報告を行った。

今回のシンポジウムのオーガナイザーを務める山野弘樹氏（東京大学）が設定したシンポジウムの統一テーマは「〈経験〉を見つめ直すための哲学」であった。

そこに登壇するのはいずれもメルロ＝ポンティ研究者として活躍している酒井麻依子氏（筑波大学）、佐野泰之氏（立命館大学）と筆者であるが、UTCP のウェブサイトに掲載された趣旨文では、統一テーマとメルロ＝ポンティの関係が次のように述べられている。

> 友達と会話していて、ふと自分がこれまで思いも寄らなかった相手の新しい一面に気づいたとき、あるいは、公園を散歩していて、春の麗かな日差しや子供たちのはしゃぎ声に安らぎを覚えているとき、私たちは実際のところ何を〈経験〉しているのでしょうか？　そして、それはどんな〈経験〉なのでしょ

上段：左から山野弘樹氏、田村正資
下段：左から酒井麻依子氏、佐野泰之氏

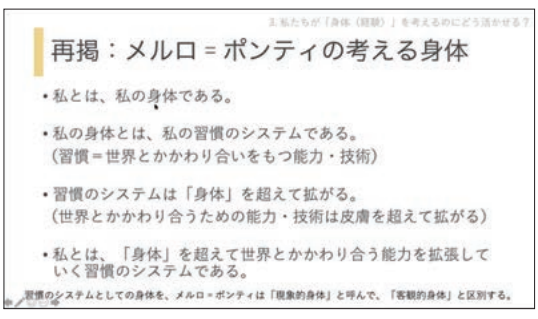
うか？　言葉にすれば壊れてしまうようにも思える繊細で微妙な情感をまとった〈経験〉を、私たちはどこまで・どのようにして言葉で表現することができるのでしょうか？

こうした〈経験〉の生成やその表現をめぐる問題を、おそらくは最も徹底的に考え抜こうとした哲学者の一人が、20 世紀フランスの哲学者、モーリス・メルロ＝ポンティです。多面的な思想を展開したメルロ＝ポンティ哲学の中から、今回は「身体」・「他者」・「言語」という三つのトピックを取り上げ、上記の問題についての議論を深めてまいりたいと思います。

私たちを日常の深みへと誘う哲学。流れ去っていく日々の経験に耳を澄まし、この手でつかみとって他者と共有するための哲学。メルロ＝ポンティの哲学に見出されるこのような側面を伝えることが、本シンポジウムの狙いである。

イベントの趣旨文にも書かれているように、このシンポジウムでは、私たちが経験を豊かに捉え直すためのメルロ＝ポンティ哲学を「身体」「他者」「言語」という三つの観点から取り上げた。3 人の報告者がそれぞれ一つのトピックを取り上げるかたちで、田村は「身体」という観点から「メルロ＝ポンティと身体経験を見つめ直す」という発表を、酒井氏は「他者」という観点から「メルロ＝ポンティと考える他者とのコミュニケーション」という発表を、佐野氏は「言語」という観点から「経験を記述すること、世界を作り変えること」という発表を行った。その後は、オーガナイザーの山野氏が司会を務めるかたちで、聴衆との質疑応答の時間が設けられた。

最初の発表を務めた筆者は、メルロ＝ポンティがなぜ身体経験に着目したのかを明らかにしつつ、彼が身体経験を解釈する枠組みを一般化して取り出すことを試みた。私たちの身体は、テーブルや椅子のような物体と同じように、材質や形状を科学的に記述することで理解し尽くしたと言えるような類の存在者ではない。どんなに力を尽くして他人の身体を客観的に記述し尽くしたとしても、そこにはいまだ、そのひと自身の「感じ方」が理解されないままに残っている。メルロ＝ポンティは、身体の在り方と深く結びついたこの「感じ方」を記述することによって、私たちと私たちによって生きられた世界のありさまを明らかにすることができると考えた。私たちの身体は、能力や技術のレパートリー（手が届く、○○ kg までの物が持てる、ハンマーが使える）を備えた習慣のシステムであることによって、世界をかくかくの仕方で私たちに経験させている。このレパー



トリーが異なれば、それぞれが経験する世界も異なる。さらに言えば、そのような習慣のシステムとしての身体は、皮膚に囲まれた文字通りの意味での「身体」を超えて、さらに外側まで拡がっていく。拡張された身体は、皮膚で触れていなかったとしても杖のさきに、靴の裏に、生々しい世界を感じているのである。

このような理解のもとでメルロ＝ポンティが身体経験をどのように記述し、理解を深めていったのか。筆者はメルロ＝ポンティが提出した事例だけでなく、マンガ『斉木楠雄のφ難』で描かれた超能力者の身体の記述や、劇場アニメ『鬼滅の刃』を鑑賞した格闘家の那須川天心の「感じ方」といった事例を用いながら、聴衆が自らの経験に適用できるようなかたちで一般化して提示してみせた。議論の詳細に興味がある方は、こちらの資料をご覧いただきたい。

二番目に発表を務めた酒井氏は、メルロ＝ポンティが主に 1950 年代に遺したテクストを紐解きながら、他者関係をうまく解釈しながら他者と付き合っていくためのヒントを取り出そうと試みた。酒井氏の議論は、2020 年に出版された単著『メルロ＝ポンティ 現れる他者／消える他者――「子どもの心理学・教育学」講義から』にまとめられたものをベースとしている。専門家向けの書籍ではあるものの、興味のある方はこちらを参照してみることをお勧めする。

今回のシンポジウムにおける発表では、酒井氏はまず「そもそも他者と交流できるのはなぜか？」「私たちは他者とどのように交流しているのか？」という二つの問いを聴衆に提示する。田村の発表でも触れたように、客観的には記述し尽くせない「感じ方」が問題となるのは、この「感じ方」に直接アクセスできるのは私（他人）だけであって、他人（私）はそれを身振りや言葉を通じて理解するほかないからであった。であれば、どんな「感じ方」を持っているのか、あるいは「なにも感じていない」かもしれない他者と私たちはどうやって現に交流をしているのか、それが問題となる。メルロ＝ポンティは、一つ目の問いに対しては、私と他者が身振りや言語といった表現よりも根源的なレベルでの交流（前交流）を持っているからだと答える。だが、この根源的な交流は、私と他者が通じ合うことを可能にする一方で、私と他者の境界を曖昧にしてしまう側面も備えている。前交流における自他未分化な状態にとどまったままでは、他人を独占できなかったときに嫉妬を抱いたり、他人を偏見のうちに閉じこめて理解してしまったりといった未熟なコミュニケーションに頼ってしまうことになる。このような未熟さをどう理解し、そこからどのように抜け出すべきなのか。酒井氏はメルロ＝ポンティの記述を頼りに、私たちの日常的なコミュニケーションをよりよいものにするヒントを提示してみせた。

最後に発表を行った佐野氏は、メルロ＝ポンティの文学論＝表現論にも触れながら、経験を見つめ直す＝表現にもたらすとはどういうことなのかについて集中的な考察を行っている。彼の発表もまた、2019 年に出版された単著『身体の黒魔術、言語の白魔術――メルロ＝ポンティにおける言語と実存』（ナカニシヤ出版）の議論をベースとしている。メルロ＝ポンティ哲学の主要なトピックをめぐってなされてきた議論を簡潔にまとめた前半部と、彼の文学論から生き方としての哲学観を引き出す後半部からなる同書もまた、興味のある方は参照されるとよいだろう。

今回の発表で佐野氏は、私たちがふだん経験していると思っている世界が、個別的で具体的なものとい

うよりはすでに一般化され抽象化された意義であると主張する。冷たい水の入ったガラスのコップが目の前にあるとき、私たちが経験しているのはきめ細やかで情感豊かな世界ではなくて、類型化されたコップ、水といった意義であって、生々しい事物それ自体は忘却されている。したがって、私たちが生きる世界をそれ自体として見るためには、意識の自然な傾向性に逆らう特殊な努力が必要になるのだと佐野氏は論じる。ここから佐野氏は、私たちが生きられた経験へとどのように接近していけばいいのかについて、メルロ＝ポンティの議論を頼りに考察する。特殊な努力によって意識の自然な傾向性に反して顕わにされる生きられた世界は、それ自体が異様なものであって、私たちが慣れ親しんだ月並みな概念や言葉によって表現することはできない。それゆえ、すでに抽象的な意義に縮約されてしまった経験をあらためてみずみずしく生きられた状態に連れ戻すためには、それを独特な表現へともたらす努力が不可欠となる。メルロ＝ポンティはその努力を偉大な作家たちの文学的な営為のうちに見出している。彼らによる経験の表現＝実現によって、私たちは世界の異様さへと連れ戻されると同時に、慣れ親しんだ世界の把握までをも変容させていくことになるのである。

3人の報告の後、山野氏の司会のもとで聴衆からの質疑応答が行われた。発表の内容に深く立ち入るものから、自分なりの経験の解釈を問うものまで、たくさんの質問が寄せられた。発表者たちもまたそれに対して活き活きとした応答を繰り広げる、とても実りの多い時間であったように思われる。筆者がSNS等で観測した限りではあるが、今回の発表を受けて聴衆が自らの経験に立ち戻り、それをどうにか解釈しようと苦闘する様子を投稿してくれていたのを見て、「〈経験〉を見つめ直すための哲学」を伝えるという本シンポジウムの目的はあるていど達せられたのではないかと思う。筆者自身も、ふだんの学会発表とは異なる緊張感のなかで、ジャーゴンに頼りきることなくメルロ＝ポンティの哲学について論じるというのは貴重な経験となった。得難い機会ではあったが、また縁があればこのような試みに挑戦してみたい。

報告者:田村正資（EAA特任研究員）

第16回 石牟礼道子を読む会

2021年4月27日

2021年4月27日（火）15時より、第16回石牟礼道子を読む会がZoomにて開催された。昨年6月以来、おおよそ隔週で開催し、『苦海浄土』三部作を中心に読み進めてきたこの集まりだが、今年度からは、メインテクストについての発表回は、発表担当者が自由にテクストを選んで開催する運びになった。今回、発表を担当したのは張政遠氏（総合文化研究科）である。加えて、鈴木政久氏（人文社会学研究科）、武田将明氏（総合文化研究科）、佐藤麻貴氏（EAA特任准教授）、宇野瑞木氏（EAA特任研究員）、建部良平氏（総合文化研究科博士課程）、報告者の高山花子（EAA特任助教）の合計7名が参加した。

張氏が選んだ石牟礼のテクストは、「愛情論初稿」（1958-1962）で、これまで氏がさまざまな角度から愛の哲学にアプローチしてきたことからこのテクストを選択したものの、読んでみると、これは愛情論というよりは、人間論とでも言うべきものであった、というコメントがこのテクストの本質を射抜いていると思った。結婚、家制度、生殖・育児をめぐる男女の違い、現代に通じる諸々のテーマを経由して、張氏は最後に、「国」を愛することができるとすれば、それはエロス的なものになるのか、アガペー的に愛するものになるのか、という彼自身の関心を明かした。そこから、愛の方向と範囲をめぐって、儒教や仏教の文脈が参加者の中から提起されたのだが、最も印象に残ったのは、この「愛情論初稿」の最後で、石牟礼である「あ

張政遠氏（総合文化研究科）

たし」が父である「彼」の喘息の様子や農夫としての仕事を描写し、「彼は…」という三人称で語る異質性をどう理解できるのか、という問いだった。たとえば、こんな記述がある。

> 彼は嫁にやってからアカがかってきて、奇病のことなんかを書いているらしい長女のことを思う。親はどげん世間のせまかか。ときどき豚の餌荷いに朝の暗かうちに加勢に来たりするが、嬉しゆうもなか。呉れた娘に、白石亀太郎は、野垂れ死しても、世話にならんぞ。会社に弓ひいたりなんのして。（石牟礼道子『石牟礼道子全集・不知火』第1巻、藤原書店、2003年、83ページ）

実父との軋轢や距離を感じさせながら、それでもなお、このように「彼」の内心の声を記述する手つきを、石牟礼の『苦海浄土』に現れる聞き書きと比較すると面白そうである。

報告者:髙山花子（EAA特任助教）

東アジア教養学「世界歴史と東アジアⅢ」

中江兆民『三酔人経綸問答』を読む

2021年4月27日

今学期の東アジア教養学「世界歴史と東アジアIII」では、「世界歴史」の観点からの再検討に値すると思われる近現代日本の「古典」を何作か選び、2週間かけて読むスタイルを試みている。1週目は、教員側が著者の生涯における該当書の位置づけと概要の紹介を比較的オーソドックスに行い、参加者には最初の印象を自由に語ってもらう。そして、さらなる「深読み」のための論点を抽出し、それを検討するための文献などを提示する。思い切ってデフォルメを加え、新しいネットワークに位置づける読み方も歓迎である。2週目は、学生側がこのようにも読むことができるのではないかというプレゼンを中心に、意見交換を行う。ちなみに、この授業はグローバル・スタディーズ・イニシアティヴのキャラバン・プロジェクト「「小国」の経験から普遍を問いなおす」と連動したものである。

最初に選んだのは、中江兆民の『三酔人経綸問答』。フランス研究の観点からは、兆民は何と言っても「東洋のルソー」として『民約訳解』を漢文で著したし、宗教学の観点から言うと、『続一年有半』が「無神論」を展開したものとして関心を引く。『三酔人経綸問答』は、欧米列強の世界進出を前にした「小国」日本が取るべき方向性について、南海先生

のもとを訪れた洋学紳士と豪傑君が、酒を飲みながら口角泡を飛ばして議論する。思想という部屋に暮らす洋学紳士は理想先行の「民主主義者」、冒険を喜び功名を求める豪傑君は「侵略主義者」、あいだを取り持つ南海先生は中庸。三者の違いは明快で、気軽に読めるところがある反面、兆民の人生の転機に位置する著作とも指摘され、実は複雑で手強い本でもある。受講者には、現代を舞台に『新・三酔人経綸問答』を書くとしたら、何をテーマに論じることができるだろうかと水を向けてみた。

参加者の1人は、人権の理念から高らかに死刑廃止を訴える新・洋学紳士と、日本における存続をやむなしとする新・豪傑君の対話というアダプテーションのアイデアを披露してくれた。もう1人は、民主主義が広がれば平和な世界になると訴えた洋学紳士の主張がもはや説得力を持たない時代に私たちがいることが『新・三酔人経綸問答』の地平と指摘した。帰国子女で都心の有名大学を出たばかりの新・紳士君と、自衛隊にいたこともある40代の新・豪傑君が、新・南海先生のお気に入りの店「キッチン南海」で、女系天皇の可否をめぐって話し合う。3人目は、『三酔人政教問答』と題して、「ネオ世俗主義」と「ポスト世俗主義」の対決のヴィジョンを示した。そして、現代社会では「進化の神」ならぬ「主観の神」が暴走しうるのではと問題提起した。

宗教をめぐる議論と言えば、ヒューム『自然宗教をめぐる対話』も三者による問答体の著作である。当時は非常に微妙なテーマで、3人の議論を聞いた者が

教室での様子

別の者に報告するという入り組んだ形式を取っているが、それでもヒュームは生前の出版は控えた。兆民は『三酔人経綸問答』の出版後まもなく保安条例によって東京からの立ち退きを余儀なくされた。この本の終局でなされる南海先生の提言は一見「平凡」だが、「恩賜的民権」を「恢復的民権」に読み替える可能性の示唆には自由民権運動の挫折の経験と将来への希望とが交錯していよう。見解の分かれる同時代の重要テーマについて、異なる当事者の立場を引き受けながらそれぞれ考えを突き詰めていき、かつそれらに批判的な距離を設けて再構成すること。さらにそれを酒の席の話とするわけだから、兆民も相当に手が込んでいる。

報告者:伊達聖伸(総合文化研究科)

連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」

第3回 哲学の領域横断的対話を求めて

2021年4月30日

2021年4月30日、連続シンポジウム企画「世界哲学・世界哲学史を再考する」の第3回「哲学の領域横断的対話を求めて」がZoomにて開催された。この連続シンポジウムは、2020年に筑摩書房から全8巻＋別巻が刊行された『世界哲学史』シリーズの編者である納富信留氏（人文社会系研究科）をオーガナイザーとして迎え、「世界哲学（史）」というコンセプトのさらなる可能性を探究する試みの一環である。

第3回となる今回のシンポジウムでは、オーガナイザーの納富氏に加えて、『世界哲学史』の第2巻第

4章「大乗仏教の成立」を寄稿した下田正弘氏（人文社会系研究科）、第3巻第6章「イスラームにおける正統と異端」を寄稿した菊地達也氏（人文社会系研究科）、第6巻第4章「啓蒙から革命へ」を寄稿した王寺賢太氏（人文社会系研究科）が参加し、それぞれの視点から領域横断的に「世界哲学（史）」の可能性について論じた。議論の糸口を提供するため、そこに笠松和也氏（人文社会系研究科・博士課程）が加わり、自身の専門も踏まえた観点からコメントを行った。

まずは納富氏から、今回のシンポジウムの趣旨説明が行われた。一つのテーマに関連した登壇者が集ったこれまでの2回を振り返りながら、氏は時代・地域・主題がそれぞれ異なる登壇者が集まった今回のシンポジウムの位置づけを語った。「世界哲学（史）」という枠組みにおいては領域横断的な研究は不可欠のものであって、異領域ではあれ広義の「哲学」に携わる研究者がそれぞれの方法論を持ち寄ることで、従来の哲学研究を刷新する視点を養うことが本シンポジウムの狙いである。

最初の登壇者である下田氏は、「仏教における歴史性と超歴史性」という題で報告を行った。氏は、「世界哲学史」という試みが、単一の理念へと向かう普遍性と、様々な思想的な営みの歴史を拾い上げる多元性の双方を希求する両義的な営みであるという理解を示したうえで、そのような営みの一環として仏教史を紐解く。仏教においては、仏（ブッダ）・法（ダルマ）・僧（サンガ）の三つを宝とみなす「三宝」という考え方があるが、この三宝をどのように捉えているのかに注目することで、仏教を記述する形式の変遷を追跡することができる。ブッダが自らの悟りの体験を言語化された教説として広めることを決意する「梵天勧請」として知られる場面をきっかけとして、ブッダの内面における悟り（仏）と言語によって外界を流布する教え（法）が分化し、人々（僧）に受容されていく。このように、三宝と呼ばれるものは歴史的にはブッダという一つの起源を持っているとされている。しかしながら、ブッダの入滅をきっかけとして、それら三者のいずれが理論的に特権化されるべきであるのかという解釈は、継承の営みのなかで様々に変化してきた。このように、歴史叙述の繰り返しのなかで、過去は同一性と多様性という二つの相を伴って立ち現れるのである。リクールの歴史記述の理論も参照しながら、仏教記述の歴史を「世界哲学（史）」の試みと重ね合わせるような図式を示して、下田氏は発表を締めくくった。

『世界哲学史』（全8巻＋別巻、筑摩書房）

菊地氏は、「イスラム思想の中のギリシア哲学」という題で報告を行った。氏は最初に、自らがイスラム思想研究者として「世界哲学」についての原稿執筆を依頼されたときに感じた戸惑いを振り返った。ヨーロッパ文化圏と地理的・歴史的・思想的に近いことをどう捉えるべきなのか。また、ギリシア哲学の継承関係をどのように位置づけるべきなのか。そういった問いを念頭に置きながら、菊地氏はイスラム世界と哲学との関係を整理しようと試みる。イブン・スィーナー（アヴィセンナ）、イブン・ルシュド（アヴェロエス）に代表される「イスラム哲学」は、彼らの没後も継承され発展していることが近年の研究で明らかになっている。その哲学の一部は、イスラム神学やシーア派の思想、スーフィズムにも継承されている。また、ギリシャ哲学のような外来の要素を排除してコーランやハディースといった聖典に立ち返ろうとするのがサラフ主義である。これらの思想が、イスラム世界の思想を「世界哲学」として考えるときにしばしば注目される。図式的な整理を行った後、菊地氏はシーア派主流派から分派したイスマーイール派と、そのイスマーイール派からさらに分派したドゥルーズ派におけるギリシア哲学的な痕跡について論じた。とりわけドゥルーズ派においては、イスマーイール派ペルシア学派の新プラトン主義的な

上段：左から順に納富信留氏（人文社会系研究科）、笠松和也氏（人文社会系研究科博士課程）
中段：下田正弘氏（人文社会系研究科）、王寺賢太氏（人文社会系研究科）
下段：菊地達也氏（人文社会系研究科）

用語が換骨奪胎され擬人化されることで、独特の世界観を形づくっている。ドゥルーズ派のように、ギリシア哲学の影響を受けながら、本来のギリシア的なものへと回帰しようとする動機を一切欠いた独特な思想は「世界哲学（史）」のなかでどのように位置づけられるのか。そのような問いを提示して菊地氏は報告を締めくくった。

王寺氏は、「フランス啓蒙から見た世界・われわれ・歴史」という題で報告を行った。王寺氏は、『世界哲学史』シリーズに寄せた論考「啓蒙から革命へ」において、モンテスキューやルソーを取り上げながら「政治的自律」の理想と実現についての考察を行っていた。そのなかで、オーソドックスな政治思想史の枠を超えて「世界哲学史」プロジェクトに貢献できた点としては、ルイ14世没後に各地で生じた政治的変革を世界的な展望で捉えたときの18世紀フランス政治思想の位置づけを示したことであると氏は振り返る。そしてそれに接ぎ木される課題として、18世紀後半のフランスにおいて「世界」がどのように記述されたかを検討することを提案する。この時代に、世界的な展望で歴史を捉えようとしたのは哲学者たちであった。彼らはどのような世界叙述を試みたのか。そこから私たちの「世界哲学（史）」への示唆を取り出そうというのが、王寺氏の目論見である。ボシュエ『世界史論』で主張されたようなローマ帝国とフランス王国の連続性が、ブーランヴィリエやモンテスキューの「ゲルマン起源説」によって批判されたとき、そこではキリスト教的な世界観に根ざした歴史記述の在り方が問い直されることとなった。それと並行して、国際通商の発展と西欧諸国間の軍事的衝突の世界化を背景としたヴォルテールやレナル／ディドロの議論は、国際的な秩序をどのように構想するかという問題を提起した。ここで挙げたような18世紀フランスにおける哲学者たちの世界史叙述が、現代の世界哲学史の記述にとって持つ意義を強調して、王寺氏は発表を締めくくった。

3人の報告の後、スピノザの思想を専門的に研究する笠松氏がコメントを行った。氏は、「世界哲学（史）」というプロジェクトが、哲学を世界の多元性へと開いていくことで、哲学が求めていた普遍性を回復しようとする試みであるという理解を示したうえで、三者の発表が、いずれも哲学と歴史との関わりを考えることによって「世界哲学（史）」の目論見を達成しようとしていた点で共通しているのではないかと指摘した。

その後は、納富氏の問題提起から登壇者によるディ

スカッションが行われた。笠松氏が指摘したように、いずれの発表も哲学と歴史との関係について扱われていたが、普遍的な真理の探究としての哲学と、個別的な事象の記述を積み重ねる歴史記述の関係は複雑なものにならざるをえない。下田氏や王寺氏の議論に見出されるように、歴史叙述をどのようなレベルで行うかによって哲学的に導き出される議論が異なることもあれば、菊地氏が扱ったドゥルーズ派のように、もはやプロティノスのような自らの起源にある言説をまったく意に介さないものを哲学的にどう評価すべきかといった問いが提出されることもある。各登壇者が提出した事例を出発点として、哲学と歴史の関係についての多角的な議論が行われた。

「世界哲学（史）」が目指す普遍性への衝動は、互に異なった個が出会うことによって生まれる。それは自らと異なるものを抹消することによってではなく、他なるものと共在するための秩序を模索することによって満たされなければならない。今回の領域横断的なシンポジウムという現象がそれを体現するものになっていたのではないかと感じたのは、筆者だけではないであろう。

報告者:田村正資（EAA特任研究員）

ご質問・コメントからの抜粋

第3回シンポジウムの参加者からいただいたご質問・コメントの一部を紹介させていただきます。回答はシンポジウム発表者個人の意見です。

Q1　従来、「哲学史」の教科書には、世界中に迷信や宗教や、諸思想があったが、それらを克服するものとして「哲学」が誕生した。儒教も仏教も「思想」としては高度だが、「哲学」ではなかった……みたいな言説があふれていましたが、それに対する距離感はどうでしょうか？　それらもみな一緒くたに「哲学」とするのか？　あるいは、「哲学的な濾過」（?）を経て、哲学とするのか？

A.（納富）　ご紹介いただいたような従来の見方を払拭するのが「世界哲学」の試みの目標です。そこで前提されている「哲学」の理念が、実は単一のものでも絶対的なものでもなく、「神話・宗教」などとの区別も厳しい反省が必要となっているからです。たとえば、アドルノ・ホルクハイマー『啓蒙の弁証法』が「神話／合理性」の対比を根本から見直したような問題意識です。私たちがこれまで「哲学」と前提してきた考え方・視野の偏りや狭さを再考することで、新たな「哲学」理念を展開すると、そこでは自然にこれまで排除されてきた多様な考え方がより生き生きと、現在の哲学にとって意義あるものとして現れてくるのではないかと期待しています。

A.（下田）　仏教についていえば、西洋世界において、研究が本格化した19世紀より現在に至るまで、圧倒的に、宗教ではなく、認識論、存在論を主題とする、哲学として扱われてきています。宗教的な側面から、多様な要素を視野に入れる方向で研究が進みはじめたのは、1960年代以降のことになります。哲学史の教科書に記されているというご指摘の内容は、研究の実態からはかけ離れています。

Q2　王寺賢太先生のご講演に関連して。グローバリズムの画一性――ますます強まる英語帝国主義もその一端かと思います――に対して、すでに啓蒙の内部に、そうした動きとは異なる（普遍性のなかの）多元性を包含するベクトルも存在していたということが示唆されていたかと思います。世界の多元的秩序となると、それは具体的には主権国家分立体制ということになるのでしょうか？　国民国家のリベラルな役割、つまりグローバルな画一主義に対して文化や言語の（一定の）多元性を守る防波堤として、主権国家や社会的連帯を再評

価する論調は、フランスに加え近年では英米圏でも強まっていると思いますが、そうした議論と啓蒙の多元主義・植民地帝国批判は重なり合うものでしょうか？　それとも別様の可能性がそこには見出せるのでしょうか？

A.（王寺）　啓蒙の政治思想が、ルイ14世の治世以降、「教会」と「帝国」の下でのキリスト教圏の統一に代わる、ヨーロッパの国際秩序の模索から出発していることは動かないと思います。レナル／ディドロに代表される、いわゆる「啓蒙の植民地主義批判」が、近世の「ヨーロッパの拡大」がヨーロッパの外にもたらした「帝国」ののりこえを、すでにして「グローバル」な広がりを見せていた商業資本主義の地の上で主権国家体制を普遍化する方向を志向していたことも事実です。その意味で、私は啓蒙期西欧の政治思想に国民国家を単位として構成されるグローバルな政治経済秩序の先駆を見る立場はあながち間違ってはいないと思います――ただし、私にとってそれはむしろ啓蒙のある種の歴史的限界を示すもののように思われますが。しかしまた他方で、ルソーやディドロからロベスピエールまでの幅で、彼らが古代共和国のイメージに仮託した政治的理想を、単に君主制にかえて共和制を樹立する近代国家の模索としてではなく、むしろ近世の君主制国家が体現したような「主権国家」そのもののオルタナティヴの模索として読むことは可能であるように思えます。その際には、いわばフランス革命によって流産させられてしまった啓蒙のモーメントをあらためて読解することにまだなんらかの意義を認めうるかもしれません。

A.（納富）　グローバルな一元化への抵抗は、ナショナリズムやトラディショナリズムで簡単に実現できるものではありません。むしろ、西洋哲学、英語等に回収され還元されない多視点を確保し、それを普遍的に呈示して新たな対話の場を開く努力が必要だと考えています。「多元性」は旧来の国民国家の枠組みではなく、文化、階層、地域など多層なレベルで追求していくべきでしょう。とりわけインターネットなどが発達した現在では、一つの集団、あるいは一個人が複数の枠組みに属するという多元性と開放性を重視すべきだと考えています。

世界哲学を遂行する「言語」という問題は非常に重要ですので、回を改めて議論したいと思っています。

A.（下田）　シンポジウムでは取り上げなかった視点からの話になりますが、現在、知識のありようを急速に大きく変化をさせつつあるデジタル媒体は、あらたな世界共通語のような力をもちはじめています。この地平に現れてきつつある人文学を見ると、英語に統一されてゆくというこれまでの傾向とは反対に、個々の地域や国の固有性が尊重され、多様性が確保される向きに進みはじめています。こうしたあらたな事態は、「～イズム」を離れたところで先に生じていて、「～イズム」はそのできごとに本質を与えるべく二次的に生まれてくるいとなみになります。これからの研究は、一つには、こうした向きに進んでいくように思います。

Q3　今回は歴史という観点から、世界哲学の困難さと可能性の両方が垣間見えて、哲学を哲学と呼べるような同一性とは何かと改めて考えさせられました。下田先生が語られた「外来の世界を受け容れて、自らが他になってゆく」ことがギリシア以来の哲学にもあるのだとしたら、哲学の同一性を特定することはできるのでしょうか。菊池先生のご発表は、同一性がそもそも自覚されていたのか、という点に関わると思います。それとも同一性自体が動く（場合によっては反転する）ようなその動きを、世界哲学は一続きのものとして捉えることができるのでしょうか。

A.（納富）　哲学は「同一」である必要はありません。ウィトゲンシュタインが言う「家族的類似」で構わないのではないでしょうか。一つの理念の絶対的な実現というより、多様な状況と文脈における実践として、多元的な哲学のあり方を求めていく場が「世界哲学」だと考えています。世界哲学は一つの運動であり、そこに巻き込まれる諸哲学に「参加資格」といった制限はありません。むしろ、「哲学」を異化する役割も大切だからです。

A.（下田）　よくご理解されたうえでのご質問だと思いますので、ここでの回答はいささか蛇足ぎみになりますが、

仏教を例にとれば、その同一性は、静的に固定されたものでなく、歴史的運動としてあるものです。「外来の世界を受け容れて、自らが他になってゆく」のは、そうした仏教の運動の一面を捉えたもので、仏教がたんに解体していくことを意味するのではなく、逆に仏教という固有の運動の存在を示そうとしたものです。重要なのは、仏教は現に存在していることです。こうした運動のありようは、それぞれの地域の哲学や宗教において相違があり、それは比較をすることによって、初めて明らかになります。その点で、世界哲学の企図は力を発揮すると期待しています。

A.（王寺）　私のフランス啓蒙理解に従えば、西欧中心主義の強靱さは、差異を排除する同一性の顕揚にあるよりも、むしろ自己同一性を積極的に「否定」し、そのようなかたちで「差異」を積極的に受入れ、まさに自己差異化する運動として、結局のところ、事後的に同一性を確保し続けるとでもいった、弁証法的なからくりにあるように思います。私が、西欧中心主義に対して多元主義を立てるだけでは、不十分なのではないか、という懐疑を抱くのはそのせいでもあります。

Q4　本日は充実した内容のお話を伺わせていただきまして誠にありがとうございます。私は哲学専攻ではなく（表象文化論研究室出身）、幾人かの方の著書を勢いで読んだのみで、参加するのもどうかと思いましたが、幅広く参照点を置いてくださり、理解のきっかけを摑むことができました。細かい点で恐縮ですが、王寺先生のお話で、スライドには「自己所有」とあるところを「自己の身体の所有」と口頭で補足していらしたのですが、それでよろしいのでしょうか。

A.（王寺）　ロック以来、フランス 18 世紀のケネーやディドロに至るまで、「自己所有」の問題が論じられる際には、つねに、「自己の身体の所有」が陰に陽に問題になっています（ローマ法に遡る « habeas corpus »〔汝は身体をもつ〕という法諺に由来する主題です）。したがって「自己所有」＝「自己の身体の所有」というふうにして間違いだとは思いませんが、その際にはただちに、「身体」を所有する「自己」とはいったい何なのか、あるいはさらに「自己」が「自己」を所有すると言うときに、この所有の主体 = 客体としての「自己」は「自己同一性」をもちうるのか、といった問いがただちに浮上します。この点については、ロック研究のなかでも盛んに議論のあるところだと思います（たとえば、Étienne Balibar, “« My Self », « my Own » : variations sur Locke”, dans id., Citoyen Sujet et autres essais d’anthropologie philosophique, Paris, PUF, 2011 所収――英訳は存在すると思います――などを御覧下さい）。

Q5　菊地先生のイスラーム哲学について、普遍知性が男性名詞で、普遍霊魂が女性名詞というのに興味を惹かれました。旧約聖書でも男が先で、女性は男の脇腹から生まれたという記述がありますが、ヨーロッパにせよイスラームにせよ、こうした記述の仕方には男性優位の視点が反映されていると言えるでしょうか（また今回のシンポジウムとは話題がずれてしまいますが、日本の記紀神話で考えると天照大御神は女性神、という説が普及しているようですが、男女の優位についての意識がもし日本神話に現れているとすると、どのようなものがあるでしょうか）。

A.（菊地）　アダム神話はクルアーン（コーラン）にもあり、イヴが誘惑にかられアダムを巻き込んだという記述はないものの（2 人は同罪）、最初の人間がアダムであることには変わりはありません。一般的な傾向として「男性優位の視点が反映されている」とは言えるでしょう。とは言え、講演内で触れたドゥルーズ派神話では男性名詞である（普遍）知性が第一存在者でしたけれど、同派の母体となるイスマーイール派の神話には、女性原理を体現した第一存在者（クーニー）が見られます。神話における男女の描かれ方は一様ではなく、神話の中での差別的記述が現実社会に存在する差別と常に直結するわけでもないでしょう。

学術フロンティア講義「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」

第4回 近代日本哲学の光と影

2021年4月30日

2021 年 4 月 30 日（金）にオンラインで開催された第 4 回学術フロンティア講義は、中島隆博氏（EAA 院長）による「近代日本哲学の光と影」がテーマであった。「哲学は役に立っていない」としばしば言われるが、歴史を振り返ると、その役割には悪い面も窺えると中島氏は切り出した。そして、哲学と社会との複雑な関係について、田辺元と九鬼周造の思想的対立に注目しその一端を明らかにした。

田辺元「種の論理」をめぐって

講義は京都学派の中心人物である田辺元から始まった。田辺が 1939 年 5 月から 6 月にかけて京都帝国大学の学生を前にして講演した『歴史的現実』（1940 年）は、本質的には学生を戦争に駆り立てる演説であった。

『歴史的現実』にて、田辺は個人と国家の極めて緊密な関係を主張している。それは中島氏によれば、「種の論理」と呼ばれる彼の哲学の核心であった。なお注意すべきは、彼の考える、個人が集まって種となり、さらにそれが集まって類となる個－種－類の三者関係は、一方向的なヒエラルキーではなく、相互に影響を与えあう三位一体的な弁証法的な関係になることである。

中島隆博氏（EAA 院長）

ところが、田辺は戦争末期に懺悔を口にするようになった。『懺悔道としての哲学』（1943 年から書き始め、1945 年出版）において、彼は「哲学する能力も資格もない」と自らを批判し、そして親鸞の仏教思想を参照し、自力ではない他力の哲学を「懺悔」として示そうとしている。

しかし、他力に向かった田辺はこれまでの論理を本当に離れたのだろうか、と中島氏は疑いを投げかけ、この点は近代日本の親鸞ブームと共に検討し直すべき課題であることを提示した。

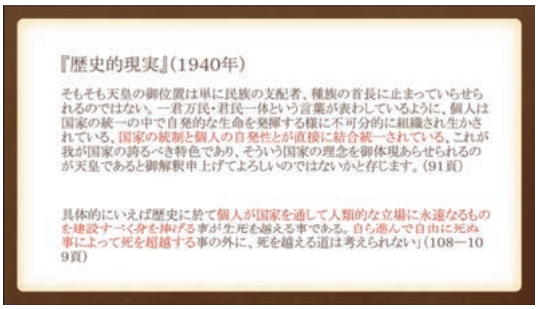
九鬼周造の『「いき」の構造』と偶然性に関する諸論考

以上で見てきた田辺哲学と対照的に捉えられるのは、同様に京都帝国大学に在籍したものの、全く異なる哲学の態度を示した九鬼周造である。広く知られている九鬼の『「いき」の構造』（岩波書店、1930 年）は、運命を見据えながら自由に生きていく結論に至っている。ここで中島氏は「魂」や「心」（esprit, Geist, spirit）ではなく、九鬼が「いき」概念を選択したことに注目した。ここには語源を考えれば「生」（life）という問題への九鬼の関心が垣間見えるという。

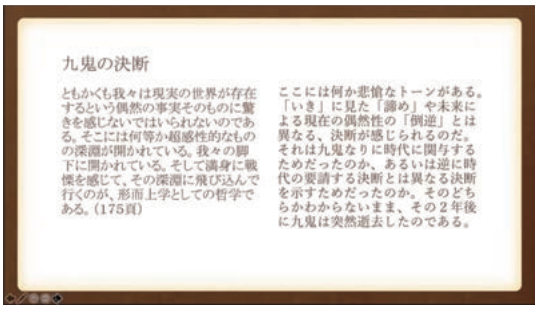
また、1935 年に九鬼は「偶然性」について論究している。その特徴は未来を志向するものであり、「邂逅」「遇う」をキーワードとし（必然性に取り込まず）真の偶然性を強調する点にある。中島氏は次の引用に注目し、九鬼の思想的性格を見極めた。

つまり、九鬼は（田辺の主張する）弁証法の効力を否認し、（田辺の求める「国家」という根拠に反して）世界の根拠を問わず、形而上学的・哲学的なレベルで偶然性を引き受ける、という振る舞いを示しているのである。

講義の後、教員や学生から多数の質問が寄せられ



講義スライド抜粋 1、田辺元『歴史的現實』（岩波書店、1940 年）からの引用



講義スライド抜粋 2、左は九鬼周造『驚きの情と偶然性』(1939 年)『九鬼周造全集』（第 3 巻所収、岩波書店、1981 年）より。右は中島氏の文章

た。田辺哲学の示唆・九鬼哲学の限界や、哲学というディシプリンのあり方（宗教学、倫理学、美学等との交渉）、グローバリズムの今日における「国家」の捉え方などについて活発な議論応答が交わされた。

報告者:丁乙（EAAリサーチ・アシスタント）

リアクション・ペーパーからの抜粋

(1) 九鬼の偶然性を真に偶然性たらしめ、出会いに期待するような考えは魅力的であると同時に難しいことだと思った。人間であるかぎり何か根拠を求める動きから離れることは難しそうだと思われる。自分がどのように行動していけば良いのか、どのようにして生きれば良いのかという指針がないと不安になってしまうからである。世界の偶然性、無根拠さに耐えられない人が信仰に走り、自分が日本に生まれたことの偶然性、無根拠さに耐えられない人が日本人という民族を頭の中で作り上げ、それに運命を見いだしてきた、人間の歴史はそのような過程であったようにも見える。九鬼のいう偶然性を真に偶然性たらしめるという生き方がどのようにして可能なのか。これを問うことが今の人間に残された課題だと感じられる。偶然的な出会いに立ち会えるように自分のアンテナを伸ばし、多様な場をさまようことが一種の偶然性を真に偶然性たらしめる生き方として提示できるかもしれない。（教養学部 4 年）

(2)田辺が「種の論理」を軸にした「歴史的現実」などで戦争の気力を高めるという方向性から「思想的転回」を行ったということについて「戦争への反省」によって展開したのだという主張があったが、講義全体として田辺元についての話を聞く中で、田辺が戦争への反省から思想の転回をしたという印象は感じられなかった。当然、教え子を戦地に送ったことへの後悔というものはあったであろうが、むしろ、「戦争に勝つ上で哲学が無力であったこと」に反省し、その責任を「無」という追いきれない概念に落とし込んでいるのではないかという印象を受けた。九鬼周造の「いき」「偶然」の考え方は捉えるのが非常に難しいものであったが、哲学を美意識という身近なもので語ることに成功したということだと理解した。したがって、九鬼が哲学として国家という構造に歩み寄れなかったというのは、やや厳しすぎる指摘に感じる。（教養学部 3 年）

(3) 今回の授業では、日本の近代の哲学者 2 人の業績から、哲学のあり方や哲学者のあり方について深い理解をすることができました（実際の哲学の内容に関しては抽象的で何回か見直しても理解しきれない部分が少しありましたが）。その中で、私は、哲学者としての対象と自身との距離感について興味を持ちました。当講義の目的である哲学者の紹介とは少し離れてしまいますが、今回の話では、田辺氏の懺悔という哲学についての話の際に述べられていました。ほかの例で行くと、科学者と科学哲学や、政治家と政治哲学の関係が

これに該当するでしょう。現状哲学者ではなく科学者を目指している者として、自分に非常に関係のある話だと考えられたので、この適切な関係を問に立てることにします。この問題に関しては、先生が最後の答弁の際に仰っていた「哲学の哲学」と言うべきものに学ぶのが良いと考えます。というのも、対象の主観を擁した状態で哲学を「正しく」理解できるか否かは、前例を確認したり著名な方に話を伺っても、多分に独善的要素を含んだ事しか得られないだろうと考えられれからです。以上のように、今回は理系の人としての感想を述べましたが、当講義を通じて、1度西洋・東洋哲学について腰を据えて学んでみたいとも思いました。（理科一類1年）

International Conference “Reality and Fiction in Philosophy and Literature”

2021年5月6日·5月7日·5月14日

The online conference “Reality and Fiction in Philosophy and Literature,” organized by the University of Bonn, the University of Tokyo, and New York University, was held on May 6, 7, and 14 on Zoom.

To being the conference discussion on the first day, Professor Takahiro Nakajima (UTokyo) briefly introduced the relationship between the conference and the general framework of the “Winter Institute” organized every year by the participating institutions. Professor Markus Gabriel (Univ. Bonn) introduced the transcultural nature of the conference.

The first presenter, Professor Masaaki Takeda (UTokyo), in his talk “‘Such a Damn’d Clever Book’: Poetics of Suspended Animation in Sterne’s *Tristram Shandy*,” discussed the relationship between an author and her work in terms of fictionality. While in the eighteenth-century there are authors, like Daniel Defoe, who regarded their stories as an extension of their “real life,” other authors, like Henry Fielding, put their names on their works. Focusing on Laurence Sterne’s *Tristram Shandy*, Takeda analyzed the particular ways in which the proper name “Tristram” appears in the work. The author, Takeda argued, attempts to destabilize the reality through a doubly-fictionalized name, just as autobiography functions as “defacement” for Paul de Man in his interpretation of Wordsworth. Takeda then developed the dubious relationship between the half-word “Tristram Shandy” and the author, where “suspended animation” implicates an existence that is indeterminate. Sudden death and accidental injuries become the condition of a “kingdom of hearty laughing subjects,” as Sterne puts it. But this “kingdom,” Takeda warned, also indicates the political engagement with colonialism.

In her presentation on “Fragile Constructions of Reality in Kazuo Ishiguro’s *Klara and the Sun* (2021),” Professor Marion Gymnich (Univ. Bonn) first drew attention to Ishiguro’s genre hybridity, which complicates readers’ assumptions about reality within the fictional universe. Taking on the genres of dystopia and science fiction, Gymnich argued, Ishiguro’s latest novel explores changes in social classes and the maintenance of social inequality. Gymnich emphasized the partitioning of Klara’s perception into small segments, associating Ishiguro’s description to the problematic of android ethics. The image of the sun, Gymnich pointed out, introduces a

new dimension of reality into the novel, for it may be regarded as reviving the stage of religion. At this point, Gymnich suggested, the conventions of different genres will put forward different questions to the work.

Professor Zakir Paul (NYU) presented on "Crises of Intelligence." Zakir first gave an etymological explanation of the term "crisis," which designates "change" in terms of value, society, class, etc. By revisiting the Deleuzean "society of control," Zakir considered the way in which "intelligence" has been discussed in the present day as well as the history of discourses on "intelligence." The first metamorphosis, Zakir argued while quoting from Malabou, is a genetic paradigm, while the second metamorphosis turns out to be epigenetic. The third metamorphosis has to do with the computer-brain and neuronal architecture. Zakir pointed out that the crisis of AI in the present day lies in turning AI into a paradigm, or what he terms "fake-AI," for the surveillance and governance of the society.

The second day of the conference began with Qin Wang's (UTokyo) presentation on "Dialectics of Writing and Memory: A Reading of Lu Xun's 'Preface' to *Outcry*." Through a rereading of Lu Xun's preface to his first collection of stories, Wang argued that writing in Lu Xun is not so much a neutral means of transcription of what happened as it is a creative articulation of memory. The dialectical relation between writing and memory, Wang pointed out, thus enables Lu Xun to organize representations of his personal experience in the preface into a particular chain of signification leading toward *Outcry*, and the ongoing literary movement.

Professor Tobias Keiling (Univ. Bonn) gave a presentation entitled "Between Fact and Fiction: Hermeneutic Truth." Keiling focused on Gadamer's use of interjection, pointing out the aspects of the hermeneutic truth — namely, the "personal," "contextual," "dialogical," and "modal." Before coming to an agreement on facts, the interlocutors must presuppose some states of affairs that are but "possible" (or in the mode of "as if"). The truth of art, Keiling stressed, has a lot to do with the moment in the fourth modal from "possibility" to "reality." "Fiction," Keiling concluded, is indispensable to Gadamer's understanding of the hermeneutic truth.

Professor Todd Foley's (NYU) presentation, "Wang Anyi's *I Love Bill*: Fiction and Reality of the Universal," associated Wang Anyi's novel with the historical context of China in the early 2000s. Foley discussed the complicated relationship between China and the West, represented by Bill and Ah San, arguing that the imaginary of global cosmopolitanism eventually stumbles on the nationalistic characteristics of China. Global capitalism is structured around global economic inequality and uneven development, a game in which China will never be recognized as a fair player, emphasized Foley. Following Scheleiermacher's observation concerning the relationship between concept and national language, Foley argued that the world Wang Anyi depicts is always fragmented into incommensurable parts.

On the third day of the conference, Professor Takahiro Nakajima (UTokyo) first presented on "Figurative Reality: Compound of Reality and Fiction in Kūkai's *Shojijisogi* [The Meaning of Sound, Letter, and Reality]," in which he introduced the thought of Kūkai, a foundational Japanese philosopher. On Nakajima's reading of Kūukai, it is only when the sound and the letters of a language are revealed clearly through its teaching, that reality can become manifest. Comparing Kūkai's "true name" with the "rectification" of names in *Xunzi*, Nakajima pointed out that Kūkai tackles the problem of language in a multi-linguistic space, where sound and letter always engage with the reality. Given the close relationship between sound, letter, and reality, Nakajima concluded that reality is not a fictional reality, but rather a figurative reality. Buddha is precisely this

figurative reality itself.

Professor Markus Gabriel (Univ. Bonn) gave a presentation entitled "Real Fiction." Gabriel started with a brief summary of his book on fiction, focusing on the proposition that "nonexistence may mean to exist elsewhere." Gabriel then rephrased his theory of fields of sense and raised the problem of "nonsense." In order to address this problem, Gabriel appealed to the interpretation of artworks. On his account, interpretation fills the gap in the score when we experience artworks, where the distinction between the object of the score (which has material reality) and the object imagined by the interpreter (which has psychological reality) produces a gap (which is the nonsense). This gap does not belong to either objecthood. Sense, concluded Gabriel, can only emerge from the space of nonsense.

Finally, Professor Xudong Zhang (NYU), in his presentation "Politics of Time in Lu Xun and Yu Hua," discussed the intensely and entirely political signification of the concept of time in the two writers. In Lu Xun, Zhang argued, a politics of time is embodied in a biological determinism and the essayistic mode of writing, while in Yu Hua it is a stoic philosophy of survival as allegorical and affective narrative, which ushers in a tragic counter-movement against the earthly pursuit of happiness. Zhang further analyzed the three-fold model of time in Lu Xun vis-à-vis the linear-cyclical duality as well as the duality of chronological vs. cosmological time in Yu Hua.

The three-day conference ended with concluding remarks by Professor Nakajima, drawing upon the image of Walter Benjamin's notion of a "constellation" as a way of situating the presentations.

Report by Qin Wang
(Graduate School of Arts and Sciences)

学術フロンティア講義「30年後の世界へ――学問とその"悪"について」

第5回　30年後の被災地、そして香港

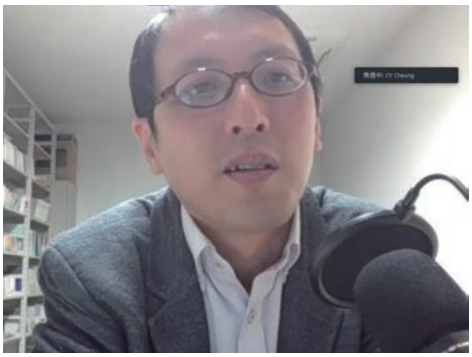
2021年5月7日

2021 年 5 月 7 日（金）、5 回目となる学術フロンティア講義がオンラインで行われた。今回の講師は、日本哲学・現象学を専門とする張政遠氏（総合文化研究科）である。張氏は昨年 5 月の着任まで香港中文大学で講師を務めており、今回の講義ではその香港中文大学も話題に取り上げられた。

実は昨年度の学術フロンティア講義でも、張氏は「30 年後の被災地、そして香港」と題した講義を行っている。今回の講義は、その後 1 年間に考えてきたことを「悪」の一字をめぐって提示するものであった。

「悪」の字は多義的である。張氏はその多義性を、少なくとも四つ、この字の動詞的用法（悪（にく）む）、形容詞的用法（悪い）、副詞的用法（悪く）、名詞的用法（悪）において捉えることができるとし、それぞれについて（1）価値問題、（2）人性問題、（3）悪搞問題、（4）原発問題に即して論じた。

張政遠氏（総合文化研究科）



価値問題とは、端的に言えば何を好み何を悪むかという問題である。そこに価値序列というものが生ずる。これが大きな問題となるのは、個人のみならず集団がなんらかの価値序列を有するからである。張氏は、特に「儒学」が価値をめぐる議論を展開してきたとして、その議論を紹介した。儒学の「儒」とは本来、国を亡くした遺民たちのことであるという。国を失ったがゆえにこそ、彼らは価値の復興を志す。そこで五常、五徳、五倫といった価値が示され、論じられることになるのである。

また人性問題とは、人の性が善であるか悪であるかという問題であり、これも儒学の論ずるところである。孟子の性善説、荀子の性悪説、さらには告子の性無善無不善説を概観したうえで、張氏は、いったいいかなる意味で「性」が捉えられているのか、それを検めることが重要であると指摘した。張氏自身の見解はこうである。人間はときに暴力的に振る舞い他者を傷つけるが、そのことよりも問題なのは、その振る舞いを理性的な働きによって合理化し、正当化してしまうことではないのか。そこに人間の性の「悪」があるのではないか。そうだとすれば、肝心なのは、暴力を覆い隠さず、暴くということではないのか。

「悪搞問題」および「原発問題」はこうした文脈で取り上げられた。前者は、香港中文大学が学生のデモ等を機縁にして、Google Maps 上で「香港暴徒中文大学」と書き換えられた事件を指している。「悪搞」とはパロディのことである。これは悪意ある仕業には違いないが、しかしデモに限らず、学生が被ったものも含めて、大学は暴力に満ちていた、と張氏は認める。重要なのは、その暴力を隠蔽せず暴くことであろう、と。また原発問題についても張氏は、その「悪」を暴き出すことが必要であると訴える。ある点では良いがある点では悪いといった相対的な評価の問題ではなく、福島第一原発事故以後、故郷にもはや住めなくなった人々がいること、その絶対的な悪を見つめねばならないのだ、と。

「悪」をめぐるこの講義は、受講者の目に不思議なものと映ったかもしれない。これは「悪」という概念の分析でもなければ、「悪」についての体系的な議論でもない。むしろ「悪」という文字をめぐって、ぐるぐると歩き回るかの観さえある。手がかりとなるのは、最後に言及された「学を為せば日々に益し、道を為せば日々に損す」という老子の言葉であろう。これは「損す」の方に重点があるのである。知識を得るというよりも、むしろ様々なものを失うことによって、物事をよりはっきりと見ることができるようになる。巡礼の実践にも身を置く張氏は、そのような行き方の一端を示したのだと言えないだろうか。

報告者:宮田晃碩(EAA リサーチ・アシスタント)

リアクション・ペーパーからの抜粋

(1) 絶対価値とはなんだろうか。自分は価値とは何かを考えたときに、メタ価値なるものが必要になるのではないかと考えた。ではメタ価値とはなんだろうか。道を為せば日々に損すとあったが、道がなければ損することはないわけで、いわゆる巡礼することもないであろう。そして、巡礼することで初めて見える物事があり（暴力など）、先入観が揺らぎ、そして価値の序列が変わるきっかけとなるのである。そうして新しい価値の序列を暴露していくことで新たな価値が作られる。こうしてみると、自分にはメタ価値とは不安定そのもののように感じられる。不安定であるからこそ生であるという言葉をどこかで聞いたことがあるが、もしかしたら絶対価値が生だというのはこういう理由でも説明できるのかもしれないと思った。（理科一類）

(2)「生」は絶対価値である、という考え方には大賛成です。しかし、その実行が問題になると考えています。特に、お金、貨幣経済的側面、が実行の阻害要因になりうると考えます。具体的には、原発イシューであれば「原発マネー」の存在であり、また、昨今のコロナ禍においては「経済を回す」というフレーズが散見されることです。この二つの例は厳密には異なりますが、平穏な生活の揺らぎと金銭が密接な関係にあることは確かです。さて、本当のプライオリティは何であるのか？　現況を鑑みれば、金銭なしに生活することは不可能であり、金銭が優位に立っているように見えます。本当にそれで良いのか。これは「学」だけでなく「道」も含めて考えていかなければならないと思います。（教養学部後期課程）

(3) 今回の講義でとりわけ自分の痛いところを突かれたと思ったのは、「道を為すことで損なう」ことに敢えて価値を見出す姿勢である。すなわち、安全なところ、離れたところからの議論ではなく、居場所を離れること、或いは居場所を失うことによって、崩れた状態、乱れた状態から価値観を再構築していくという姿勢である。

自分自身、機会があって、興味をもって、日本の貧困問題について考えること、他には現行政治の権威主義化の問題、世論形成の問題などについて考えてきたつもりだった。しかしながら、すべて文章を通じてのことであって、元の価値観から一度離れてみる、一度先入観を捨ててみるということには乏しかったのではないかと、今回はっと気付かされた。極端な現場主義的な考えを信奉するわけではないが、特に部屋に籠りがちな今にあって、直接にはできないにせよ、まだ見ぬ他者と出会いに行くこと、実際に見に行くこと、未体験のことを経験しに行くことを改めて重視したい。

学問的に有意義な問いではなく、極めて個人的な「学問にどういう姿勢で向き合っていくか」という点が今回自分の抱いた問題意識になるわけだが、自分を乗り越えていくために、時に自分の心地よい場所から出て、時に敢えて艱難を求める姿勢が肝要になってくるのではないかと感じた。（文科三類）

第1回 東アジア仏典講読会

2021年5月8日

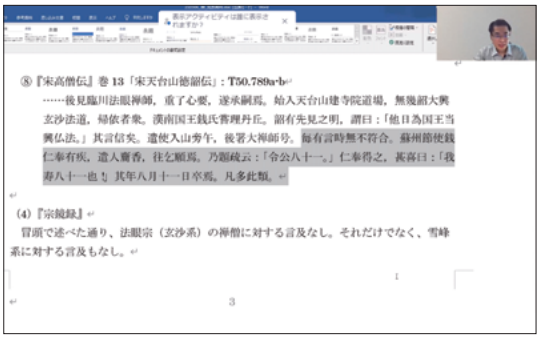
2021 年 5 月 8 日（土） 日本時間 14 時より、 第 1 回東アジア仏典講読会を開催した。 この読書会は、禅を中心に仏教の研究を行っている日本・中国・韓国・フランスなど各国の研究者が集い、 文献の会読や研究発表・討論を行うものである。

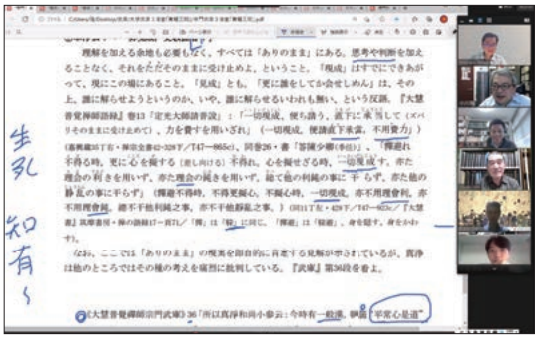
初回となる今回はまず、 会の幹事となる柳幹康（東京大学） が講読会の趣旨について簡単に申し述べた後、「転換期における『宗鏡録』 の成立」 というタイトルで研究発表を行った。『宗鏡録』 は中国の社会全体が大きく変化する五代十国時代に編まれた書物で、 中国はもとより朝鮮・日本を含む東アジア一帯の仏教に大きな影響を与えた書物である。 膨大な仏典から要文を網羅的に蒐集して 100 巻にまとめ、 禅宗所伝の一心を明かす内容となっているが、 そこにはなぜか編者の延寿に法系的に近い禅僧の言葉は収められていない。 本発表ではそれが単なる偶然ではなく意図的な選択の結果である可能性が高いことを指摘するとともに、 その理由について当時の時代背景を踏まえながら分析を加えた。 その際に『宗鏡録』 が編纂された呉越国内における禅の正統をめぐる論争とその終結、 国外における仏教弾圧とその余波について言及したが、 発表後に行われた議論において、 それらの位置づけや宋代に継承された禅宗観などについて、 報告者が見落としていた重要な観点を数多く示していただいた。

それに続き小川隆氏（駒澤大学） が『大慧普覚禅師宗門武庫』 の講読を行った。『宗門武庫』 は大慧が弟子に語った宋代禅林の逸話を収集したものであり、 大慧は今日まで続く禅の実践形態である看話禅を大成した南宋の禅僧である。 今回は大慧が大きな影響を受けた湛堂文準が、 その師の真浄克文に初めて参じた際の話を収める第三段を会読した。 そこで真浄がまず常識的な質問を続けたうえで、 その流れを唐突に断ち切る答えようのない問を発していること、 それが真浄の師の黄龍慧南に倣ったものであること、 及びその主眼が分別を断ち切り「ありのまま」 の現実を修行僧に体認させることにあることなどを、 当時の問答・用例や関連する先行研究を踏まえつつ明らかにした。 その後の議論において、 このような分別を断ち切る指導方法が五代から宋代にかけてどのように形成されたのか、 それが日本の禅においてどのように受け止められ変化したのかなど、 東アジアにおける禅の展開について活発な議論が行われた。

EAA （東アジア藝文書院） には「リベラル・アーツとしての東アジア学」 という理念が託されている。 東アジア仏典講読会では、 インドから中国を経て東アジア一帯へと伝播した東伝仏教の典籍講読を通じて、 これまで東アジアにおいて蓄積されてきた豊かな文化・思想的財産を再発見するとともに、 今後の世界における新たなリベラル・アーツの可能性を模索していきたい。

報告者:柳幹康（東洋文化研究所）





東アジア教養学「世界歴史と東アジアⅢ」

幸徳秋水『廿世紀之怪物帝国主義』を読む

2021年5月10日･5月17日

講座「世界歴史と東アジア III」では 5 月 10 日・17 日の 2 週にわたり、幸徳秋水の『廿世紀之怪物帝国主義』（1901 年、以下『帝国主義』と略記）を講読した。伊達聖伸氏（総合文化研究科）が担当する今学期の本講座では、近現代日本の古典的著作を数点選び、それぞれ 2 週間かけて講読している。4 月 19 日･26 日には、秋水の師である中江兆民の『三酔人経綸問答』（1887 年）を読んだ（その様子については伊達聖伸氏の報告「中江兆民『三酔人経綸問答』を読む」を参照されたい）。秋水の『帝国主義』を取りあげた 2 週間は報告者が講義の進行役を務めることになったため、以下にその様子を簡潔にまとめる。なお、本講座は「東アジア教養学」プロジェクトの一環であり、その内容はグローバル・スタディーズ・イニシアティヴのキャラバン・プロジェクト「「小国」の経験から普遍を問いなおす」と連動している。

1 週目の 5 月 10 日には、秋水と『帝国主義』の基本情報の共有に加え、『帝国主義』がこれまでどのように読まれてきたのかを紹介した。『帝国主義』に対する評価はおよそ 1960 年代まで、ホブソンやレーニンの古典的な帝国主義論に比べて、時期的には「早い」が内容的には「未熟」というものだった。だが 1970 年前後には、『帝国主義』を起点に秋水の思想的変遷の内在的な理解を試みる研究が現れるとともに、『帝国主義』に今日的意義を読み取ろうとする動きが活発になる。たとえば東大元総長の大河内一男は、国内で反戦運動が高まるなかで『帝国主義』を「反戦の書」として評価。歴史家の遠山茂樹は、帝国主義に経済学的分析ではなく政治学的・社会学的分析を与えた点に『帝国主義』の「現代的意義」をみた。『帝国主義』の今日的意義を探る試みは 21 世紀も続いている。たとえば思想史家の梅森直之氏は、グローバル社会において新しい倫理を創出するプロジェクトとして読み直すことで、まったく新しい視点から『帝国主義』を現代に蘇らせている。1 週目の講義の最後には、「刊行からちょうど 120 周年の今年、私たちは『帝国主義』をどのように読み直すことができるでしょうか」と問うてみた。

2 週目の 5 月 17 日には、『帝国主義』をどう読むかについて、参加者のそれぞれが論点を持ち寄って議論を交わした。そのひとりは、例えばアメリカの中東政策には帝国主義的な側面があるとして、現在でも「20 世紀の怪物」ならぬ「21 世紀の怪物」が生きていると指摘した。もうひとりは、昨今のパレスチナ・イスラエル問題、アメリカにおけるポピュリズムの台頭、日本における靖国問題を取り上げながら、秋水による愛国心批判は現在でも有効だと論じた。こうした参加者の意見を受けて、伊達氏はいわゆる「テロとの戦争」に言及しながら、従来の戦争は主権国家のあいだで行われることになっていたがその前提が崩れていること、戦争をする主体間で軍事力が非対称化していることを指摘し、『帝国主義』が著された 20 世紀初頭と現在の違いにも目を向ける必要があるとした。最後に、報告者は『帝国主義』とその前後に書かれたテクストを取り上げて、秋水が「帝国」に代わる国家像として「小国」に期待していたこと、ただし、秋水の「小国主義」は「帝国主義」には批判的だった反面、朝鮮半島に対する「植民地主義」とは共存していたことに注意を促しておいた。

今回 2 週間分の講義進行の準備を進めるなかで気づいたのは、遠山茂樹が 1968 年、法政大学の大学院ゼミで秋水を講読していたということである。『幸徳秋水全集』の刊行に合わせて、秋水が『萬朝報』に載せた論説と『帝国主義』を比較検討するという内容だったようである。遠山は先述のように、レーニンが経済の観点から帝国主義を分析したのに対して、秋水が政治的・社会的観点から帝国主義を分析したことを評価したわけだが、『帝国主義』の刊行から 120 年、遠山ゼミでの講読から約半世紀が経過した現在、秋水の『帝国主義』はどのように読み直すこ

幸徳秋水（ウィキペディアパブリックドメイン：https://ja.wikipedia.org/wiki/ 幸徳秋水）

とができるのだろうか。なにより、この講座が「東アジア教養学」プロジェクトの一環であることを考えれば、東アジアという観点から、今この古典とどのように向き合えばよいのか。こうした問いが準備を進めるなかで次第に大きくなってきた。

無論、安全保障をめぐる近年の国内情勢や世界情勢を鑑みれば、『帝国主義』は「反戦の書」として現在もアクチュアリティを帯びている。秋水自身の生涯も、国家権力に社会主義を掲げて対峙した「志士仁人」のそれとして評価できよう。また「小国」の観点に立てば、開国以降大国への道を模索していた近代日本に、オルタナティヴな国のあり方を提示した秋水の議論は、今日もなお魅力を失っていない。だが、秋水の議論が持つ植民地主義的な側面を無視することもできない。これまでの秋水研究が指摘してきたように、自由・平等・博愛という西洋由来の理念を掲げた秋水だが、同時代の中国や朝鮮に対してはむしろ抑圧的な言辞（あるいは沈黙）が目立つ。刊行から120年後の現代日本という場所で、この古典に正面から向き合うには、秋水の議論に見え隠れする負の側面をみずからの問題として引き受けながら、それでもなんとか正の側面をすくい上げようとする反省的な構えが求められるのだろう。

報告者:田中浩喜（東京大学大学院博士課程）

北京大学元培学院
东亚研究联合项目宣讲会 东大方代表致辞

2021年5月14日

非常感谢北大元培学院李猛院长和孙飞宇副院长邀请我参加今天的“东亚研究”联合项目宣讲会。我也非常高兴能够与北大的同学们进行交流。我叫石井刚，任职于东京大学综合文化研究科，也是东京大学东亚艺文书院（East Asian Academy for New Liberal Arts, EAA）的副院长。EAA是咱们东亚研究联合项目的东大方主办单位。今天，借此宝贵的机会，我想着重介绍一下我们东亚艺文书院的理念、目标以及其教学和研究的实际情况。希望大家会感兴趣。

据我了解，东大和北大之间关于东亚艺文书院以及东亚研究联合项目的构想当初由当时的北大校长林建华先生提出来，他说“北大和东大两校应该建立一种特别的关系。”时任东大校长的五神真先生立即响应。于是，在双方校领导的一致支持下，该项目于2019年春天正式启动。东大方由当时具体推动这一崭新的两校合作项目的羽田正副校长担任东京大学东亚艺文书院的第一任院长。书院在大金集团公司的赞助下，作为研究和教学为一体的机构，设置在东大的东洋文化研究所及综合文化研究科。虽然东亚艺文书院冠以“东亚”这一地域名称，但其学术追求并不在于深化并发展作为“地域研究 Area Studies”框架中的东亚研究。东大和北大两校之所以决意共同培养新一代的人才，就是因为我们要基于东亚这一生存、环境、文化以及历史的共同平台，为人与世界提供新的学术视角，从而共同培养能够站在我们共有的这些基础上为全世界的和谐和发展做出突出贡献的新的全

球性人才。而且，这种人才，无论在学术上还是在做人上，都必须要具备成为“通才”的条件，所以我们特别重视 liberal arts 即通识教育。我们要通过东亚艺文书院的教学和相关的研究，把 liberal arts 这一在美国发展起来的通识教育概念及其具体内容，进一步发展为一种能够适应当下人类处境的，且能“接地气”的学问方式。所以，这个 liberal arts 在我们的想法当中不仅仅是通识教育，它更是一整个包含教育和研究两方面,也包含人作为人的成长过程本身的学问方式。无论是文科还是理科，或者是艺术类、体育类，我们的高等教育机构当中的专业体系太过细化，也太过技术化。我们 EAA 负责本科教育的职能之所以由综合文化研究科来承担，就是因为我们认为该研究科的定位有利于打破当今的这种学术分科模式。

东京大学作为研究型大学，每一个学院都以研究生教育为其主要任务，学院被称作“研究科”的理由就在这里。同时,各个研究科都有自己的本科教育机构，叫做“学部”，综合文化研究科下面有教养学部负责本科生教育，由于该研究科及学部的校园位于东京都目黑区驹场地区,我们一般称之为“驹场（Komaba）”。这也是我们师生作为这个校区的成员感到很自豪的一个具体表现。如果你们参加该项目，一定会有访问驹场的机会。我们期待能够与更多的同学在可爱的驹场校园见面。我们驹场之所以完全负责 EAA 教学工作，是因为驹场乃是唯一一个自东京大学成立以来一直负责通识教育的学院。长期以来，通识教育在日本被称作“教养教育”，东京大学教养学部自 1949 年成立之始，就有此名，该学部实际上继承了驹场的前身即“第一高等学校”奉行教养教育的传统。1949 年,日本国家对整个高校体制进行改革,帝国大学撤出,原来的“高等学校”合并到新制大学，主要承担本科基础阶段的通识教育。从那时起至今，我们教养学部承担着东京大学所有的本科一、二年级阶段的通识教育。本科三、四年级以及研究生阶段也完全以跨学科的 liberal arts 模式开展教学工作。驹场的学风一直以来以跨学科的前沿氛围著称。所以，我们通过东亚艺文书院的工作，要把我们的通识教育、我们的 liberal arts 塑造为我们在 21 世纪的条件和挑战下能够认识世界，改善世界，能够为人类造福的新的学问。

照片第二张（右上图）为第一高等学校（“一高”）遗址。这个地方曾经是学生宿舍——驹场寮。自一高迁到驹场的 1935 年起，一高的学生都住在这个宿舍里。1949 年教养学部成立之后，驹场寮继续存在，它与教养学部的通识教育传统一起，为营造驹场独特的校园文化扮演了重要的角色。但是，由于校园发展规划上的原因，驹场寮于 2001 年被废除，如今只有这个遗址残存于校园一角。

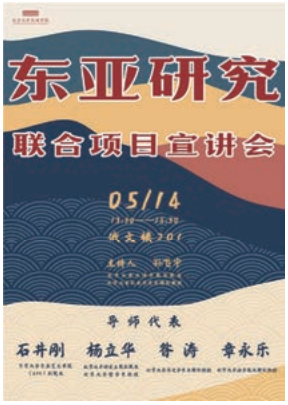
照片第三张（右下图）是我们 EAA 驹场办公室所在的驹场校区 101 号楼。我们的教学研究活动大多也在这里进行。这座楼从 1936 年建成后到一高被收编为教养学部的 1949 年，一直是中国留学生专用的教学楼。EAA 的办公室坐落在这里纯属偶然，但我们正是有了这样特殊的历史记忆，才会有今天的两校关系，甚至是两国友好关系。

这是我们的标志图案。敏锐的同学们很容易看得出来，左边红色和右边蓝色分别代表北大和东大。下面棕色为土。这个图标取自“鱼尾”。摸过线装书的同学们也许会有印象：线装书每一张书叶中间折叠的部分都有这个图案，叫做“鱼尾”。正如“艺文”一词取自《汉书 · 艺文志》，我们也通过此图案

来表明，我们在我们的学问当中倍加珍惜东亚的文化传统。另外，我自己的一个阐释是，中间空白的地方形状如房屋，象征着书院，由此看来，这个书院是开放的，甚至是会在大地上移动的。因此，自然寄托着“有朋自远方来不亦乐乎”的开放性和学术友谊的微意。回到红色和蓝色，也可以说这是火和水。在五行中，火和水是相克的关系，但我们把它演绎为“火和水不可能的结婚”。这是曾经在驹场任教多年的小林康夫先生有一次在与 EAA 现任院长中岛隆博的对谈中提到的。火和水，究竟如何合得来？ 我想，其实，我们在地球上的万物包括人类正依赖于这种看似矛盾的火与水的关系才能够生存。请大家想一想，地球的热能和水的巨大循环系统难道不是因为“火和水不可能的结婚”才得以运转的吗？ 今天，在人类世（Anthropocene）的压力之下，全球循环系统失去平衡，人类和地球上的所有物类都面临着前所未有的危机。我们要追求新的学问，不能不正视这个严峻的现实，为此，我们更需要跨过一切分歧和矛盾，培养相互之间以同感（empathy）为基础的情感纽带。咱们联合项目的意义和价值正在于此。

接下来，我简单地介绍一下我们东大东亚艺文书院的教学。我们在本科阶段设置了“东亚教养学”辅修课程。我们 EAA 的学术由四个模块组成：“世界哲学与东亚”、“世界历史与东亚”、“世界文学与东亚”，以及“社会环境健康与东亚”。我们的课程体系也按照这个模块分类来安排课程。我们的教学特点是多语言（multi-lingual）模式，具体来讲，就是由英语、汉语、日语组成的三语（trilingual）模式。上述四个模块的课组体系均以三种语言开设。东大的同学们要加入 EAA，都被要求具备娴熟运用这三种语言的能力，虽然大部分同学的水平有待提高，但我们要求同学们通过 EAA 的教学以及学术活动养成多语言并用的习惯，以多元视角思考并面对世界。

除了这些学术模块课程之外，我们还设置了核心课程。这是我们“东亚教养学”的必修课程，由“东亚教养学理论”与“东亚教养学演习”来组成。在这两门课中，我们主要致力于经典文本的阅读。就方法论而言，其特色可以分为以下几点：第一，经典取自古今东西，并不拘泥于东亚古代传统；第二，由两个老师一起上课，给同学们展示阅读文本的多元可能



性；第三，注重文本跨语言流通的现实，把翻译的可能性与不可能性，甚至翻译所带来的概念误读当作我们学术思考的重要资源；第四，鼓励同学们之间就共同的文本进行讨论，安排研究生和本科生一起研讨的环节。我们的同学在本科毕业后不一定继续走学术研究的道路,更多的同学会在各行各业中发挥其才华。我们不管在哪里从事什么样的工作，都要应付变化莫测、错综复杂的社会现实，我们人类在地球上正经历的种种危机，更需要我们锻炼自由的想象力，而经典的阅读——而且也是对经典文本的集体阅读经验，一定有助于你们将来遇到困难的时候，放开你们的想象力，在与他人合作共处的基础上，去努力解决所面对的问题。我们做学问的目的，无非就在于通过平常生活中不停的锻炼，培养更好地思考并面对世界的方式，EAA 的经典阅读以及与之相关的活动都会对此有很大帮助。

除此之外，我们和北大的师生们合作，举办一些假期活动，去年还办过一学期的线上联合课程。在新冠病毒疫情尚未平息的情况下，我们暂时无法实现面对面的实体交流，但我们希望借助于网络技术，继续为同学们提供更多，更有趣的交流活动。如有建议，请随时告诉我们。

最后，我想介绍东大东亚艺文书院的网站。同学们访问这里，可以获取我们开展各种学术活动的信息，也可以观看视频。我们自己也有很多刊物已经出版，都可以免费下载。

我衷心希望并期待通过我们的东亚研究联合项目见面交流!

致辞人:石井刚（EAA副院长）

一高プロジェクト

映像制作メモランダム（1）

2021年5月17日

こんにちは。高山花子です。昨年 11 月に立ち上がり、各種資料調査と並行した 7 回のワークショップを経て、101 号館映像制作チームは、実際の制作を本格的にはじめました。シナリオ制作やロケハンなどが進んでいます。今後アトランダムに作業経過を記してゆく予定です。

松田良一氏寄贈の一高机。「第一高等学校」の焼印が認められる

4 月の出来事としては、2018 年 3 月まで駒場に勤められていた生物の松田良一先生（現・東京理科大学）より、旧制第一高等学校の焼印の入った一高机、そして駒場寮で使われていた一高ベッドを寄贈いただきました。駒場寮廃寮時に松田先生がご自身で回収されたものだそうです。

3 月の一高シンポジウムをきっかけに EAA の活動に気がついてくださり、こうやって貴重な資料をお譲りくださった松田良一先生には改めてお礼申し上げます。今後、一高関連の資料を集めて展示する夢がふくらんでいます。

当時の学生による日誌等の資料読解、現在も残っている 101 号館を含めた当時の建築に加え、こういった「モノ」にも視点を向けて、よく見ることができたら、そして撮ることができたら面白い気がしています。

報告者:高山花子（EAA特任助教）

写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

第17回 石牟礼道子を読む会

2021年5月18日

2021 年 5 月 18 日（火）15 時より、Zoom にて第 17 回石牟礼道子を読む会が開催された。参加者は、佐藤麻貴氏（EAA 特任准教授）、高山花子氏（EAA 特任助教）、建部良平氏（総合文化研究科博士課程）、宮田晃碩（EAA リサーチ・アシスタント）及び報告者の宇野瑞木（EAA 特任研究員）の計 5 名であった。

今回は、来週に控えている第 18 回（5 月 25 日）の石牟礼道子の新作能「不知火」の鑑賞会、続く第 19 回（6 月 15 日）の最後の琵琶法師・山鹿良之の語り物の鑑賞およびその記録者・兵藤裕己氏の講演会にむけての事前勉強会としてセッティングされた会である。共有されたテクストは、下記の通り。

メインテクスト

1. 石牟礼道子「『詩篇・苦海浄土』（テレビ台本について）」
2. 石牟礼道子「ひがん花」（共に、『石牟礼道子全集・不知火』第 1 巻（藤原書店、2004 年）所収の「わが不知火」の一部、326-335 頁）

サブテクスト

3. 兵藤裕己「語り物享受と共同体――平家物語と〈国民〉文学論」『語り物序説――「平家」語りの発生と表現』（有精堂、1985 年）
4. 兵藤裕己「座頭琵琶の語り物伝承についての研究（一）」『埼玉大学紀要』（教養学部）26（1990 年）

まず、発表者（宇野）は、石牟礼道子における琵琶語りの芸能者や、その周辺の「かんじん殿」と呼ばれた人々への深い関心の在り処を確認するために、1 と 2 のエッセイを取り上げた。

1 の「『詩篇・苦海浄土』（テレビ台本について）」では、石牟礼がテレビ用に台本を書いたドキュメンタリー作品「詩篇・苦海浄土」（ディレクター：木村栄文、制作：RKB 毎日放送、1970 年芸術祭大賞を受賞）の撮影時のことが綴られている。中でも興味深いのは、作品の主人公である胎児性水俣病患者の杢太郎の家に、漂泊の瞽女に扮した女優・北林谷榮が「門つけ」にやってくるシーンで、杢太郎の婆さまが庭先に突如現れた琵琶を背負った瞽女を本物だと信じて疑わなかったと述べられている点である。石牟礼が活写した婆さまの慌てて米や銭を喜捨しようとする姿は、かつてこの土地に、確かに漂泊の瞽女がいたということを物語っている。

加えて、発表者は、瞽女が「門つけ」に向かう道中、心のうちに深く誦える「生死のあわいにあればなつかしく候」と始まる石牟礼自身が創作した「詩経」が、のちに『苦海浄土』第三部冒頭に掲げられる「序詩」の原型となったことも指摘した。すなわち、この瞽女の心象に響く詩（声）は、石牟礼にとって、第三部の構想の一つの核となるほど重要なモチーフであったことを意味するであろう。

続いて、2 の石牟礼の幼少期における「かんじん（勧進＝乞食、あるいは狂人）」との交流を綴ったエッセイ「ひがん花」では、先の瞽女の誦えた「詩経」の世界観と共鳴するような、盲目性、人間の「言葉」への嫌悪に象徴される未分化の世界、花の匂いに酔

参加者の様子

い狂う虫の世界への憧憬が表明されている。さらに、そこに連なるような「かんじん殿」たちの魂や境遇への思慕が、彼らとの交流の思い出とともに描き出されていくのである。そして注目すべきは、こうした人々は、かつての水俣あたりの地域共同体にとって「遊行する人びと」としてなくてはならない存在であったと石牟礼が述べている点である。その一方で、女性の「かんじん殿」の過酷な現実についても描かれている点は見逃せない。

以上のように、石牟礼の二つのエッセイからは、幼少時の心象に深く刻印された「かんじん殿」たちの姿やその共同体における位置づけが、石牟礼作品中の「漂浪(さすら)き」という言葉や、他者の心への寄り添い方の基盤になっていること、また、そうした存在の共同体の浄化作用と差別を併せ持つ構造が、石牟礼において明確に認識されていることが確認された。また、石牟礼の「かんじん殿」という「漂浪き」の系譜への思慕・親密さの大本には、自身の盲目の祖母「おもかさま」の存在と共に、父の「おなごは三界に家なし」という因習的“教訓”があったと石牟礼自身が述べている点も興味深い。

さて、今回は、能と琵琶語りを鑑賞する連続企画のきっかけともいえる、石牟礼自身が「自分自身に語り聞かせる浄瑠璃のごときものであった」（改稿版講談社文庫のあとがき、1972年11月）と第一部を振り返って述べた言葉が、一体なにを意味するのかを検討する作業でもあるといえる。それはすなわち、石牟礼のいう「浄瑠璃」とは具体的にどのようなものであったか、ということになるであろう。

実は、この「浄瑠璃のごときもの」という石牟礼の実感は、熊本に伝わる芸能の特殊な歴史的状況というものが深く関わっていると考えられる。なぜなら、熊本は琵琶を持つ浄瑠璃語りが最後まで残っており、中世的な芸能の内容や活動形態が残存していた特殊な地域であったからである。熊本で1980年代まで活躍していた座頭琵琶の山鹿良之のもとに通い、語りを記録する活動をしていた平家物語研究者の兵藤裕己氏（学習院大学名誉教授）は、その実態についてまとめた論考（4）において、この地域の座頭琵琶の特徴・歴史的位置を次のように指摘する。第一に、肥後琵琶とは琵琶を用いた浄瑠璃で、すなわち古浄瑠璃との関係が深いこと、第二に、盲人の語り部が中世から近世にかけて琵琶から三味線へと持ち替えていく中で、九州地方だけは琵琶を持ち続けたことである。それは九州では近世以降も座頭琵琶が宗教儀礼を司り続けるという中世的な芸能者の在り方を継続させていたからであり、琵琶は法具としてみなされた。さらに、天草は、制度的に管理されていない、放浪する芸能者が最も多かった土地でもあったという（山鹿の最初の師匠も天草の座頭琵琶）。

すなわち、奇遇なことに、石牟礼が生まれ育った天草・水俣の辺りは、全国的に見ても中世的な漂泊の口頭芸能の姿が濃厚に残っていた特別な土地であった。兵藤氏は、盲目の座頭琵琶・山鹿氏の語りの特徴に、オーラルな伝承の記憶の仕方と、その語りの生起のしくみを見出しており大変興味深い。それは、近世以降の正本テクストにおける、分割されインデックス的に部分の取り出しが可能な在り方とは異なるものである。即ち盲目の芸能者が伝承するために、日常言語とは異なる七五調で（それは方言とも異なる）、フシ回し・リズム様式に結び付いた「声」による一定の成句として「記憶」され、継起的・入れ籠的に、いうなれば芋づる的に生起する語りであるという点である。

また、同じく兵藤氏の研究の原点に位置づけられる『語り物序説』（1985年）の中から一篇の論考（3）を取り上げた。本論考は、当時の国文学研究における『平家物語』の「国民文学」としての位置づけ、そして近世に刊行された正本テクスト中心主義に対して、そもそも中世の「平家」語りは共同体の外部を漂泊する被差別民により伝承されたものであり、その盲目の語り部の身体・主体・声・社会的位相において捉え直す必要があると異を唱えたものである。その上で、兵藤氏が強調したのは、漂泊の盲僧の琵琶語りの機能が共同体の浄化作用でありながら、語り手自身は不具性＝穢れを負い続ける者であり、その生存のリアリティの上に迫真の語りがなされていたという点である。こうした問題意識の背景には、現代の琵琶法師・山鹿氏との出会いがあった。それと同時に、ユージン・スミスの写真集『MINAMATA』についての

言及があるように、水俣病患者の存在を文学者はどのように語ることができるのか、そこから目を背けて「国民文学」などと語ることはできないのではないか、という問いがあった。兵藤氏の「平家」語りの研究の根底は、はじめから水俣にも繋がっていたのである。

＊　　＊　　＊

以上を踏まえて、議論では、まず同じ芸能とはいっても、能と門付けの位相は大きく異なっているのではないか、という疑問が呈された。能は、神仏や死者等に奉納する芸能であり、そこに居合わせなかった者にとっても催されたという出来事自体が意味を持つ一大イベントとしてあるのではないか。これに対し、たとえば「門付け」のような偶発的にはじまる語りは、それとは異なる出来事としてあるように思われる。

この点を考える上で、「不知火」の上演が、不知火海の大量の汚染魚をドラム缶に詰めて埋めた場所でなされたということが改めて注目されるだろう。その痛ましい出来事に対して、汚染されてしまった土地自体から沸き立ってくるような複数の思いや声をどのように聞き、そしてある種の救済や浄化をすることができるのか。そこには儀礼的な節目としての出来事が必要であり、しかも人類の経験したことのない未曽有の事件であったがために、その世界を新たに創る仕事は石牟礼道子が担わねばならなかったと想像される。そこに、能をほとんど見たことがないという石牟礼が作能に踏み切った一つの背景があるのではないか。

さて、その一方で座頭琵琶にも「夜ごもり」のように、わざわざ家に招いて、夜通し語り物を聞くような一大イベントもあったようだ。しかし、これは一晩中続くことを考えても、ずっと集中して聞くのは異なる鑑賞形態であったであろう。参加者の中に、兵庫にいた祖父から聞いた話として、芸能者を家に招き、何夜も続けて「平家」語りしてもらった時のことを披露してくれた方がいた。それは一晩中、語り物に集中するわけではなく、酒食を楽しみながら、名場面になると皆集中して聞き涙するといった楽しみ方であったという。この語り物は段物だと非常に長いものとなることが兵藤氏によっても指摘されているところだが、長い語り物を皆で聴くというかつての娯楽が、共同体の浄化作用として機能したことの意味を考えさせられる。それとともに、兵藤氏が指摘するように、共同体の外からやってくる芸能者が、共同体を浄化するけれども自ら浄化されることがない、という差別の回路の構造もあったのであろう。

もう一つ重要なことは、石牟礼が、兵藤氏がラフカディオ・ハーンについて指摘したのと同様に、「耳」の人であった点である。石牟礼の生まれ育った土地が、偶然にも中世的な語り物の形態を残しており、彼女はそうした声と音の響く世界を原体験として持っていた。そして、石牟礼はそれを敏感に聞き取る「耳」を持つ人であった。それは、彼女にとって共同体の外側を漂浪（さすら）き、人間の言語の分断の世界から離れた盲人や狂人の「あわい」の主体への限りない憧れにも繋がっていた。

しかし一方で、石牟礼自身は「声」で語る芸能者ではなく、あくまで表現としては「書く」人であったことを改めて考える必要がある。石牟礼は、『苦海浄土』第一部を刊行して間もない時期に、テレビ台本により盲の瞽女の語り手を現出させてみた。しかしテレビというメディアにのせて女優が演じるという在り方に拭いきれない違和感を抱いたのではないか。「書く」という表現だけでは果たしきれない何かを達成するために、そこから身体・声・場所を伴う次元を求めていったのが、第二部以降の「巡礼」であり「御詠歌」という実践でもあったのであろう。そして、さらに「不知火海」という場所性の問題とともに、死者に正面から向き合うにふさわしい儀礼的な芸能として、そこに能舞台を設けて奉納することへ向かったようにも思われる。こうしたそれぞれの芸能の持つ位相の違いも含めて、次回の石牟礼の新作能「不知火」鑑賞会では、能の専門家の高橋悠介氏と倉持長子氏を迎えてさまざまに議論できたらと思う。

報告者：宇野瑞木（EAA特任研究員）

第1回 EAA沖縄研究会

2021年5月21日

2021 年 5 月 21 日、第 1 回となる EAA 沖縄研究会がオンラインで開催された。EAA 沖縄研究会は、張政遠氏（総合文化研究科）と報告者（崎濱紗奈〔EAA 特任研究員〕）が協働して今年度新たに立ち上げた研究会である。初開催という不安もあったが、幸いにも当日は学内外から 9 名の参加者が集い、活発な議論が展開された。

本研究会は、「沖縄」をめぐる事象・表象について学際的な研究を行い、自由闊達に議論する場を創造することを目指している。しかし、これは「沖縄」についてのみ思考することを意味しない。「沖縄」を出発点としつつ、この場所を通して見えてくる普遍的な問題系について、哲学・歴史学・文学・社会学といった様々な方法論を駆使しながら、多方面から光を当てて皆で議論することが、研究会設立の目的である。

こうした姿勢のもと、本研究会では、今年度検討するテーマとして、次の二つを設定した。一つは「沖縄から／への移民」であり、いま一つは「琉球・沖縄の歴史と民俗」である。前者のテーマについては、張氏が以前より交流を進めてきたメキシコ自治大学の研究チームとの交流を想定している。後者については、一般社団法人琉球歴史文化継承振興会とのコラボレーションを企画している。

第 1 回研究会では、「沖縄から／への移民」というテーマのもと、上野英信『眉屋私記』（潮出版社、1984 年：海鳥社、2014 年）の第 2 章・第 4 章について、崎濱が発表を担当した。このテクストを選んだ理由は二つある。一つは、この作品が、「眉屋」という屋号を持つ山入端一家の兄妹の足跡を克明に描くことによって、近代沖縄という構造そのものを見事に把捉しているからである。もう一つは、著者の上野英信（1923-1987）への着目である。上野は、谷川雁とともに石牟礼道子を輩出した雑誌『サークル村』を創刊した。EAA で昨年度より継続して開催されている「石牟礼道子を読む会」との連携を図ることができれば、との目論見もある。

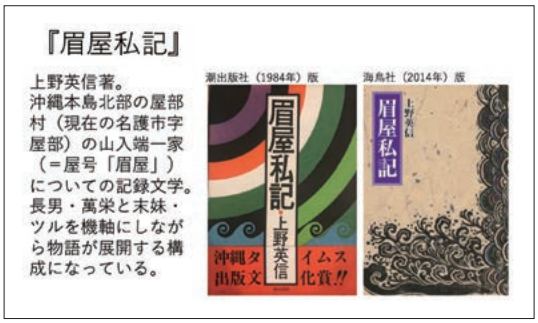
発表では、まず、上野英信にとって「書く」という行為がどのような意味を持っていたかという問いに焦点を当てつつ、彼にとって『サークル村』という場が非常に重要な意味を持っていたことを確認した。1958 年に創刊された『サークル村』は、上野のほかに谷川雁・森崎和江・石牟礼道子といった優れた著述家を輩出したが、彼女・彼らをこの雑誌の代表者と見るべきではない。なぜなら『サークル村』は、炭坑労働者をはじめ、社会から周縁化されたところで生きる人々の集う場であり、こうした人々の間で交わされる議論・言葉こそが、『サークル村』を形成していたからである。

研究会の活動方針について、張政遠氏から、メキシコ自治大学との研究交流が示唆された

そこで中心的な問いとなったのが、「他者」についてどのように記述するか、という問いであった（竹沢尚一郎（2018）「人類学を開く――『文化を書く』から「サークル村」へ」『文化人類学』第 83 巻第 2 号）。「他者」について「私」が書く、という関係性は、「他者」を代理／表象（representation）するという暴力を少なからず孕む。こうした暴力を引き受けつつ、しかし「他者」の声を「他者」自身が語ることが可能となるように書く、ということはいかにして可能か。こうした問題意識から、たとえば森崎和江が実践したような「聞き書き」という方法が生まれた。上野もまた、このような徹底した意識を持って「沖縄」という場所へと向かったのである。

『眉屋私記』は、上野最晩年の作品である。執筆のきっかけとなったのは、琉球新報社記者の三木健によって手渡された『わが移民記』（志良堂清英編、1960 年）であった。この本が下敷きにしていたテクスト「在外五十有余年ノ後ヲ顧リミテ」の著者こそ、『眉屋私記』の主人公の一人である山入端萬栄である。萬栄は 1907 年、東洋移民会社の仲介によってメキシコへと渡った。貧困に喘ぐ家族のため、故郷に錦を飾らんとする萬栄を待ち受けていたのは、過酷な炭坑労働であった。萬栄はその後、メキシコを脱出しキューバへと流れ着き、そこでドイツ領事館のドライバーとなり、同じ職場で働くドイツ人女性と結ばれ一人娘に恵まれた。しかし、日本の敗戦によって虜囚となった萬栄は、家族と離れ離れになってしまい、独りキューバで永眠した。

萬栄の物語を見るだけでも十分ドラマチックであるが、上野は萬栄の足跡だけでなく、萬栄と同時期にメキシコへ渡った沖縄出身者たちへの聞き取りを行っている。さらには仲介業者であった東洋移民会社の来歴、萬栄がメキシコへ渡る際に乗った船を造った川崎船舶部（後の川崎汽船）の背景まで、あらゆる資料を渉猟しながら明らかにしていく。その手つきは、「沖縄」に徹底的に向き合うという、上野の鬼気迫る思いに裏打ちされている、「沖縄」を自身とは異なる「他者」として理解しつつも、その「他者」に対して恐る恐る腫れ物を触るように近づくのではなく、徹底した事実の記述の積み重ねによってその核心に迫ろうとする上野の筆致は、それを読む者をも「沖縄」の只中に放り込む力を持つ。



上野英信『眉屋私記』。発表者スライドより

筑豊炭坑で炭坑労働に従事した上野が見ようとしたのは、日本という国の近代、日本という国の資本主義が、「地獄」とも言うべき「下層」の世界と、そこで生きる人々の上に成り立っているという構造である。「地獄」の一例である「沖縄」は、「琉球処分」によって大日本帝国に併合されたのち、「旧慣温存」と呼ばれる政策と、その後に続く「土地整理事業」によって、資本主義に畸形的に併呑された。そのような畸形的包摂を、権力を持つ側（国家や資本家）と、翻弄される側（労働者）の両側面から描き出しているのが、『眉屋私記』である。もちろん、資本主義の蠢きは、権力を持つ者と持たざる者という単純な二分法では捉えられないし、『眉屋私記』も無論、そのような二分法を前提とはしていない。いわば、資本主義という巨大な構造物を炙り出す試みが、ここでは実践されていると言えよう。

ディスカッションでは、植民地台湾と沖縄の間に横たわるヒエラルキーの再検討や、移民として渡った人々にとっての「故郷」の意味、また、日本語ではなく移民先の言語（スペイン語やポルトガル語）で書かれた手記や文学作品を併せて読むことで見えてくる可能性、「移民」という形以外での日本とメキシコとの繋がりを確認する重要性、上野英信にとって筑豊と沖縄がどのように連関していたのか等々、様々な意見・問いが提起された。研究者のみならず、学外からも参加してくださった方々のおかげで、議論が多方面にわたって展開され、非常に充実した時間となった。参加されたすべての方々に御礼申し上げたい。

第 2 回も引き続き「沖縄から／への移民」をテーマとして、『越えていく人――南米、日系の若者たちをたずねて』（亜紀書房、2021 年）の著者である神里雄大氏をお招きして合評会を行う。次回も活発な議論が展開されることを期待したい。

報告者:崎濱紗奈（EAA特任研究員）

学術フロンティア講義「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」

第6回　悪をめぐる三つのパラドックス

2021年5月21日

2021 年 5 月 21 日（金）、6 回目となる学術フロンティア講義がオンラインで開催された。今回は朝倉友海氏（総合文化研究科）による「悪をめぐる三つのパラドックス」がテーマであった。朝倉氏は、哲学、特に東アジアの思想を専門とする。

講義は、善と悪の価値は反転し得るという発想が、古今東西の様々な思想のうちに見出せるという指摘から始まった。例えば、シェイクスピアの『マクベス』には、「きれいは穢い、穢いはきれい」という台詞がある。また、荘子の「斉物論」の中にも「善いことによるのは悪いことによること、悪いことによるのは善いことによること」といった議論が見られる。そこから講義は、善悪に関する三つのパラドックスをめぐって進められた。

まずは、「良いは悪い」＝「善は悪である」というパラドックスである。朝倉氏はカントの学説を用いながら議論を切り出した。カントは常に、自分が道徳的に完全であると思い込む「道徳的狂熱」を批判対象とした。彼の『道徳形而上学原論』によれば、「同情心に富む人の行為が道徳的価値をもつわけではない、むしろ同情心に欠ける人が義務感から行う行為に道徳的価値がある」。人類の歴史を見ると、善のふりをしてなされた悪も広く知られている。例として、朝倉氏はアドルノとホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』を取り上げた。「啓蒙された文明が、現実には未開・野蛮へと復帰する」というテーゼに示される善悪の転化可能性は、20 世紀の近代史が残した最も重要な示唆とも言える。

次は、「悪いは良い」＝「悪はむしろ善」というパラドックスである。カントの理論と対照的に捉えられたのはニーチェの道徳観である。朝倉氏によれば、ニーチェは道徳には 2 種類の起源があると主張した。一つは、騎士的・貴族的な評価様式である。これによって、優れていることが「良い」と信じ、低劣・下衆

朝倉友海氏（総合文化研究科）

であるのが「悪い」と判断される。もう一つは、「惨めなる者のみが善き者である、貧しき者、力なき者、卑しき者のみが善き者である」とするものである。この逆転的な様式は、「復讐的」とも呼ばれる。この復讐的評価様式が、己を脅かす他者への恐れと増悪を原理とするものであるとして、ニーチェは批判的な態度をとった。一方、朝倉氏はニーチェの具体的な論説より、彼が提唱した「系譜学」的な方法に注意を促した。すなわち、ある善悪の評価様式それ自体の社会的、文化的由来を考察しなければならないのである。

最後に、三つ目のパラドックスは「良いは悪い、悪いは良い」である。つまり、存在論の観点から見れば、善と悪は等しいものでしかない。ここでは、朝倉氏は主に東アジアの思想から考察を行った。その代表として取り上げられたのが、「天台性悪論」である。これは、「仏」は悪を根絶せず、むしろ悪によく通じるものとする論であると、朝倉氏は要約した。言い換えれば、悪を滅ぼそうとするのではなく、悪を理解してこそ自由になれる、とするものである。その延長線上で、朝倉氏は「悪の陳腐さ」にも言及した。悪を特殊なものと認識して、憎めば安心するという考え方こそ大きな落とし穴である。アーレントが論じた凡庸な悪が最も鮮明な例であることは言うまでもない。

善悪の転化可能性は、必ずしも歴史的な相対主義を導くものではない。むしろそれをヒントとして、常に善とは何かを考え、未来に向かって「賭ける」ことが重要であると、朝倉氏は結論付けた。

報告者:黄秋源(EAA リサーチ・アシスタント)

リアクション・ペーパーからの抜粋

(1) 非常に勇気のあふれるお話でした。これからどうしたらいいかという方針は無いけれど、直感に従って、というところが心に残りました。また、悪が善に、善が悪になる可能性があるからこそ、評価方法自体を考える必要があるというのは新たな知見でした。直感というのは、難しいですが、私としては変化していくものだと考えています。様々な経験を経て、自分の中で直感の感じ方が変わってくるのではないかと思います。その感じ方を磨いていくために、日々学んでいるのだと思います。そのなかで、悪に手を染めないということは、善悪の区別が様々ということがあるために、意外と難しいのかもしれないと思いました。勇気を持って、しかし注意深く進んでいきたいです。(文科三類 2 年)

(2) 自身は国際関係論を先行しているのですが、国際関係についての哲学的・思想的立場としてリアリズム・リベラリズム・コンストラクティビズムの大きく三つが発展させられてきたと学びました。ご講義いただいた中で出てきました「良いは悪いである」という文言にリアリズムを、カントの形式主義としてご紹介いただいた「善悪は法則により規定される」という部分にコンストラクティヴィズムを、「悪いは良いである」という文言にリベラリズムの原点を感じ、自身の専攻との共通性からまさに「越境する知性」の原点を見たように思いました。国際関係論を学びながら、リアリズムとリベラリズムが相異なるものでありつつも、違いがわからなくなってしまうことがありましたが、「良いは悪いで悪いは良い」という善悪の等しさという観点を示してくださったことで、これまで腑に落ちていなかった部分が少し明瞭になったように感じます。ご講義いただきありがとうございました。(教養学部 3 年)

(3) 質疑応答の時間、「理性の声を聞くにはどうすれば良いのか」という私の質問に対する答えの一つとして、「見識を広めること」という答えをいただきましたが、見識を広めるということは、さまざまな視点・可能性が検討できるようになる一方で、一つの事柄・行動に伴う多くのリスクや不確実性を知ることでもあると思います(私の疑問自体も、「理性」という言葉の不確実性、あるいはその言葉を用いることに伴うリスクを恐れた結果生み出されたものだったのかもしれません)。もちろんある程度の慎重さは欠かせませんが、それが行きすぎてしまっ

た結果、ある種の相対主義に陥ってしまったり、過度に縮こまった、当たり障りのない思考しかできなくなってしまったり、という事態も起こり得ます。

そのような中にあって、「理性の声を聞くという行為は常に「賭け」である」という言葉は、様々な可能性を徹底して吟味した上で、それでも最後まで残る（ある意味で学問に構造的に内在する）リスク・不確実性を、直感に基づく「賭け」によって乗り越えて行動に移すという、知性のあり方の一つの可能性を示していたように思います。このような「行動する知」のあり方は、安楽椅子に収まっていては決して完成しません。「知性を磨く」という言葉が、必ずしも「書物と向き合う」「部屋の中で思考する」ことだけを意味するのではないのだと気づかせていただきました。（教養学部３年）

第6回　日中韓オンライン朱子学読書会

2021年5月22日

5月22日（土）日本時間15時より、第6回日中韓オンライン朱子学読書会が開催された。これまで同様、EAAのほか、清華大学哲学系、北京大学礼学研究中心との共催である。

今回は陳叡超氏（首都師範大学）が司会を務め、鄧慶平氏（江西師範大学）が「沈黙する多数の発見――朱子門人と朱子学研究」と題し、2017年に出版した『朱子門人与朱子学』（中国社会科学出版社）について報告を行った。

朱子の門人や後学は朱子学研究において欠かせない存在であり、最近十数年の朱子学研究での成長分野であるが、朱子門人全体がどのような思想史的貢献をしたのかについてはまだ研究の余地がある。門人とは、ここでは朱熹に師事した記録がはっきりと残る「一伝」の弟子を示す。

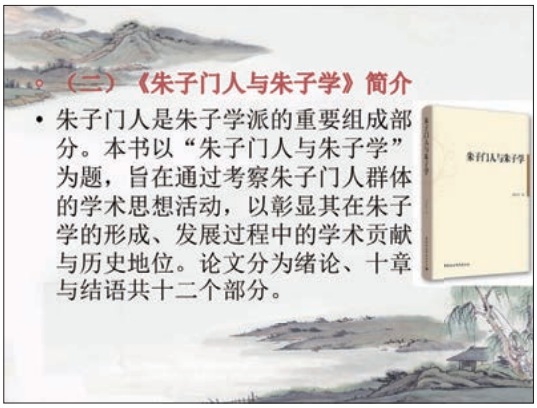
朱子学とは、第一に朱熹学（朱熹の思想）、第二に狭義の朱子学（朱熹とその門人の思想）、第三に「後朱子学」（朱子学の後の発展）が含まれる。朱熹自身は生前、経書全てに遍く注釈を施せなかったため、彼の学術思想体系には不足がある。そのため朱子門人による補完が必要とされた。たとえば『朱子語類』は、朱子学の学術思想体系が発展するための第一段階と位置付けられる。

鄧氏の考証によれば、明確な記録が残り名を留めている朱子の門人は合計492名であり、南宋の様々な地域に分布し、官職についた者や著述をなした者も多く、南宋後期に大きな影響力を持った知識人群であるといえる。儒学は少数の一流の思想家から成

鄧慶平氏のスライドより

り立っているのではない。朱子学を形成した重要なメンバーとして、朱子門人は様々な役割を果たした。第一に、朱子門人は朱子学の最も早期の学習者・信仰者・実践者である（門人たちが師事するタイミングは、朱熹が地方官であった時、帰郷し講学を行っていた時、外遊していた時の三種あり、彼らが分布する地域は非常に広範で、それぞれ朱子学を学び、尊崇し、実践していた）。第二に、朱子門人は朱子学の学術思想体系が形成される過程における重要な参与者及び完成者である（『朱子語類』が示すように、多数の門人たちが朱熹の学術思想の背後にある問題体系を開拓し完備させていき、「朱熹学」を「朱子学」へと転換させた）。第三に、朱子門人は南宋中後期における朱子哲学思想体系の重要な創立者であり主要な代表者である（たとえば蔡元定の象数易・地理堪輿・楽律や、黄榦の太極を宇宙論の基礎とする思想体系など）。第四に、朱子門人は朱子学の思想と義理を体系的に理解し規範化した再解釈者である（典型例は『性理字義』や『北溪字義』等）。このほか、朱子門人は、朱熹の歴史的イメージを構築し朱熹の「道統」における地位を確立させ、さらに朱子学の社会化・制度化を推進した。また、朱子学を後世に伝えさらに発展させ、海外への伝播において重要な役割を果たし東アジア朱子学の代表となったこと等も重要な役割として挙げられる。

儒学の伝統において、門人は単に受動的に学ぶだけではなく、学派の形成に重要な役割を担う。彼らは師とともに学派を形成し、それぞれの時代において広範な社会的影響力を発揮するだけでなく、学派の理論が形作られ長期存続し、やがて分化する過程において重要な学術的地位を占めた。門人研究を重視するということは、儒学の中に、社会性や変化・発展していく連続性を認めることにもつながる。



門人研究を進めるにあたっては、まず門人自身の問題意識や時代的任務に注意し、その学派の創始者の思想を、門人の思想に取って代わらせてはいけない。また、中国儒学に限らず、韓国・日本・ベトナムなど海外の儒学を視野に入れることも重要である。

質疑応答では、「17 世紀の韓国や日本の儒学文献の中には『朱子語類』に登場する問答と類似する内容があり、17 世紀の韓国・日本の儒者は必ずしも『朱子語類』を見ていたわけではないが、なぜ同じような問題意識に行き着いたのか」「朱子門人の中で心学に転向した者はいないのか」「朱熹の理気論への疑問は、何代目の門人から生じてくるのか」などの質問のほか、理学と心学の関係、『北溪字義』の日本儒学への影響など、様々な方面からのコメントや質問が寄せられた。

鄧氏の報告は、朱子学を研究する本読書会において、改めて「朱子学とは何か」を考えるために非常に有意義なものであった。朱子学の後世への社会的影響、東アジアへの伝播を考える上で、朱子門人の思想は再評価されなければならないだろう。

報告者:田中有紀（東洋文化研究所）

話す／離す／花す（13）

「虫の心」を慮ること

石井剛（EAA副院長）

2021年5月23日

いつの間にか、2021年度の春学期も半分近くを経過しました。今年度もEAAでは学術フロンティア講義「30年後の世界へ」を開講しています。昨年度の講義に関しては、たいへんありがたいことに『私たちはどのような世界を想像すべきか――東京大学教養のフロンティア講義』（トランスビュー、2021年）として、今週から全国の書店に並び始めました。また、東京大学の授業を動画コンテンツとしてインターネットに配信するサービスUTokyo OCWでは、同書に収録されている講義11回分の内容をご覧いただけます。書籍は講義の内容に加筆修正を行ったもので、その過程では受講生とのディスカッションの内容も適宜取り入れられていますが、動画ではもとになった質疑応答も記録されていますので、書籍と動画の双方を見比べていただくことで、立体的な臨場感を伴いながらテクストの生成過程を追体験することができるはずです。どうぞご覧ください。

さて、3回目の実施となる今年度は、副題として「学問とその“悪”について」という、我ながら挑発的だと認めざるを得ないテーマを掲げました。ジャン＝ジャック・ルソーがディジョンのアカデミー懸賞論文として「学問と芸術の復興は、習俗の純化に寄与したかどうかについて」という課題にノーという回答を突きつけた、あの『学問芸術論』が範を示してくれているように、学問がその誕生からある意味運命的に背負ってしまっている「悪」に対しては、学問自らが取り組む以外に望みはないとわたしは思いますし、実際それしかありません。しかし、ルソーの時代に比べて、わたしたちのいま置かれている状況は厳しいものになっているかもしれません。この講義の二人目の登壇者太田邦史さんのお話は、わたしも含め、聴衆にとってはショッキングな内容でした。それは、近年SDGsのようなグローバルな取り組みの中でも焦点となっている気候変動のような問題もさることながら、地球規模で考えてみると、人新世における生物多様性の急速な減少の方がはるかに深刻な問題であると指摘するものでした。人類という特定の種の持続可能性を追求することが、ともすれば地球上の生物界全体にとっては脅威になりかねない（いや、すでになっている）というのです。それでも、生物進化の長い歴史のなかでは大規模絶滅の後に別の繁栄が生じるというサイクルが繰り返されていますので、生物多様性はやがてまた回復するであろうという予測は成り立ちそうですが、そのためには、人類だけが種としての持続可能性を追求する特権を放棄する必要があるかもしれません。

こうした事態をニヒリズムに陥ることなく希望ある道へとつなげていくことは、いったいどうすればできるでしょうか。今年度の講義は、この問題を皆で考えてみることを迫っています。それは解釈できない「秘密」の存在を感じながら、見えるものの向こうにあるものをとらえようとする試みであると言えるでしょう。「東アジア発のリベラルアーツ」を掲げて出発したEAAは、COVID-19パンデミックという危機のなかで「新しい学問」を探究することをいつのまにか引き受けることになりました。EAAで活発に行われているすべての研究活動はつきつめればみなこの問題に逢着します。

どうやら、「学問」と呼ばれ、「学問的」であると思われているそれらの内実そのものを、わたしたちは別の想像力で再び鍛えていく必要がありそうです。そして、そのためには、何かを「手放す」ことも時には必要であるかもしれません。まるで、「虫の心」を慮って手放した結果、「あの光と風のなかの場所」について豊かな思いを馳せる自由を得た子どものようにです。

あ、補足しますと、今年度の「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」もUTokyo OCWにて順次公開します。書籍化も決まりました。どうぞ楽しみにお待ちください。

写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

第18回 石牟礼道子を読む会

石牟礼道子の新作能「不知火」鑑賞会

2021年5月25日

2021 年 5 月 25 日（火）15 時 30 分より、駒場キャンパス 101 号館の EAA セミナールームにて第 18 回「石牟礼道子を読む会」が開催された。今回は石牟礼道子作の新作能「不知火」を、高橋悠介氏（慶應義塾大学）、倉持長子氏（聖心女子大学）の解説・発表付きで鑑賞するという趣旨である。参加者はゲストスピーカーの二氏のほか、鈴木将久氏（東京大学）、山田悠介氏（大東文化大学）、宇野瑞木氏（EAA 特任研究員）、高山花子氏（EAA 特任助教）、建部良平氏（東京大学大学院博士課程）、そして報告者の宮田晃碩（EAA リサーチ・アシスタント）の計 8 名であった。

まず、高橋氏の解説つきで新作能「不知火」の映像を鑑賞した。映像は、2002 年 7 月 18 日に国立能楽堂で上演されたものの録画である。

解説は、筋書きや所作の意味のみならず、登場するモチーフがどのような含意を伴っているか、能の約束事に照らしてみたとき「不知火」の演出はどのようにそれに従いあるいはそれを破っているか、また石牟礼の原作と上演版の台本を比べたときどのような変更が加えられているか、といったことにもわたった。舞台はそれ自体で美しいものであったが、こうした解説なしでは「不知火」の表現しようとする世界にさらに接近していくことは難しかったと思う。

簡単に筋書きを紹介しよう。「不知火」は、毒にまみれた大地と海の浄化をひとつのテーマとしている。

シテにあたる不知火は「海霊の宮の斎女、竜神の姫」である。その弟、常若（竜神の王子）と不知火とは、それぞれ大地と海にあって、「この世の水脈のゆたかならんことにたづさはり、心魂を燃やして命の業をなす」こととされていた。だが毒を浚いつづけた常若はすでに息絶え、不知火もまた命尽きようとしている。そこで死者の魂を弔う隠亡の尉（ワキにあたる）は、反魂香（死者の魂を呼ぶ香）を焚き、常若と不知火とを渚に呼ぶ。不知火は救いのない惨禍を省みて「わが身もろとも命の水脈ことごとく枯渇させ、生類の世再度なきやう、海底の業火とならん」と嘆き狂うのだが、それに対して、菩薩としての姿を現した隠亡の尉は、不知火と常若とを再び会わせ、次の世では二人を妹背の仲にせんがために、いまここに二人を呼んだのだと告げる。不知火と常若とは、ただ互いに会いたいがためにつとめてきたのだと語り、「回生の勤行にとりかからん」と、祝婚の舞を舞う。最後には菩薩（隠亡の尉）の呼びかけによって、夔（キ）と呼ばれる仙獣が呼び出され、「わが撃つ石の妙音ならば、神猫となつて舞ひ狂へ、胡蝶となつて舞ひに舞へ」と言い、不知火、常若と共に舞って終演となる。

静かな興奮に包まれたなかで、高橋氏による「新作能《不知火》と能の古典作品」と題された発表がなされた。原作と上演版とを比べてみると、随所に工夫が加えられていることがわかる。たとえば上演版では冒頭に「次第」と呼ばれる文句が挿入されている。これは能の約束事でもあるが、一曲のテーマを暗示し、かつ『苦海浄土』を読んだことのある人にとっては一気に心を惹きつけられる演出となっている。「繋がぬ沖の捨小舟。つながぬ沖の捨小舟。生死の苦海果もなし」。これは『苦海浄土』冒頭に引かれた、「弘法大師和讃」の一節である。

演出においてもかなり大胆な手法が取られている。能では登場人物のほかに「地謡」があって場面や情景を謡い上げるのだが、「不知火」ではさらに「コ

ロス」が登場する。白装束をまとって両手には和紙で包まれた球形の灯りを捧げ、これが死者の魂魄をあらわしている。通常の能の舞台よりも暗くして、この灯りが人物を照らすようにしている。また能ではしばしば作り物が宮をあらわし、そこに登場人物が出入りするのだが、「不知火」ではそれが菩薩の入る「薫香殿」として、また隠亡の尉の小屋として用いられる。

こうしたことを確認しながらあらためて指摘されたのは、この能がひとり石牟礼の手になるものではなく、文字通り多くの人の力をあわせて作られているということである。もちろんそれは上演版の台本に梅若六郎その人をはじめとする錚々たる名前が節付や囃子作調等に並んでいることからもわかることだが、単純にそれぞれの役割において協力があったという以上のものが、ここにはあると思われる。たとえば「次第」の文句を持ってくることや、「コロス」に死者の魂魄を担わせることなどは、相当深く、石牟礼の描く世界を理解したうえでの演出であろう。また同時に、石牟礼自身の言葉がはじめから、能の言葉として響くものであったということも指摘された。実際、上演のために変更されている箇所も多いが、しかし言葉づかいなどはほとんど原作そのままで上演されている。石牟礼は二度しか能の舞台を見たことがないと言うのだが、世阿弥の『風姿花伝』を座右の書にしていたとも言う。してみれば「不知火」という能は、単に石牟礼の描く世界を能の形式にあてはめたというものではなく、むしろ根底において能と通ずるものを、あらためて能という形に表現したというものなのだろう。そこには、能という芸能それ自体への解釈がはたらいており、そこに能の大家も石牟礼も、共に参与したのだと言えるだろう。ただし一方では、上演にあたって削られた箇所に、海と山の関わりや家族の関わりなど、重要なモチーフが凝縮されているということも指摘された。舞台としてのまとまりのために削られた箇所も、それはそれで思いを致すべきところがある。

高橋氏による発表につづいて、倉持氏による「能《不知火》にみる救い――能の枠組みを超えて」と題された発表があった。「救済」という観点から、どのようにこの能を受け止めることができるかという趣旨での解説である。石牟礼が繰り返し語っているイメージとの重層性を踏まえての発表であった。

そもそも能は、宗教による救済劇としての側面をもっている。それは人のみならず草木にも及ぶものである。毒にまみれた山河と生類の救いを願うものとして、「不知火」も理解できるだろう。だが他方、石牟礼は「水俣の人々が体験した受難」が、これまでの一切の宗教の限界を突き付けるものであるとも語っている。そして同時に、却ってこの受難が「次の世紀へのメッセージを秘めた宗教的な縦糸の一つ」になるかもしれないと言う。そうだとすれば「不知火」は、能による救済の可能性自体を問い質す、能の「臨界点」として捉えられねばならないだろうと倉持氏は指摘する。

取り上げられた様々なモチーフのなかでも、「香り」と「舞い」についてここでは簡単に紹介したい。劇中では反魂香が不知火と常若とを呼び出す役割を果たすのだが、同時に橘の香りも懐かしいものとして何度も語られ、不知火を呼び出す役割を担っている。ここには常世の国の「ときじくの香の木の実」のイメージが重ねられているうえ、漁場を奪われた人々が水俣の再生をかけて育てた甘夏やデコポンといった柑橘のイメージも重ねられているかもしれない。橘の香りは、現実と神話とを媒介し、また希望のよすがとして働いているのである。またそれが嗅覚に訴えるものであるという点も注目に値する。水俣病の患者の特徴的な症状に、視野狭窄や言語障害、知覚の鈍麻がある。そのようななかで残されたのが嗅覚であった。しかしこれは残酷な一面も想起させる。『苦海浄土』の印象的な箇所に、「熊本医学会雑誌」からの引用がある。そこでは「猫における観察」が淡々と綴られている。そこで報告されているのは、猫が嗅覚を刺激として、踊るような痙攣発作を起こすという様子である。希望は極めて両義的なのだ。このことは、一曲を締めくくる「舞い」にも通ずる。

「不知火」の最後は、夔（キ）の打ち鳴らす磯の石の音に合わせて不知火と常若が、また「神猫」や胡蝶が舞う、というかたちで終わる。原作では「いざや橘香る夜なるぞ。胡蝶となつて華やかに、舞ひに舞へ」となっている。ここで思い浮かべられるのはやはり、「舞う」「踊る」と形容された、水銀に侵された猫の姿であり、「失調性歩行」と呼ばれる水俣病特有の歩

き方をする患者たちのことだろう。夔の打ち鳴らす石も、水銀まみれの渚の石である。この舞いは決して、万事がめでたく済むことを祝うようなものではない。むしろこの永遠に続くかのような「狂い舞い」をもって「創世」となさんとする、極めて痛切な祈りがある。そしてそれを美しいものとして現出させようとするのである。その残酷さが、祈りの深さを示している。倉持氏はそのような「臨界点」を、この能に見出す。

その後の議論では、上に触れたような石牟礼の創作の底流にあって古典芸能と通ずるものや、また最後に登場する夔（キ）に関連して、白川静が紹介する中国の神話にも話が及んだ。また能という形式でこそ表されるものについても語られた。たとえば常若は「蝉丸」の面をつけている。これは盲目の面である。死者として登場した常若は、不知火とは対照的にはっとするような無表情さの印象を与えるのだが、ここにはその面の効果もあるかもしれない。さらには能に特有の「ポリフォニー」がある。地謡や登場人物、ひょっとすると観客としての私たちは、同じ場所にいながら、あたかも異なる時空が重なるような仕方で響き合っている。オーケストラのような調和とは、それはやはり異なる。この独特の多声性は、『苦海浄土』にも響いているものではないか。報告者の私としては個人的に、超常の神話をたまたま遙かに目撃してしまったような感覚を抱いた。能の台詞は慣れない耳に決して聞き取りやすいものではないが、しかしそれも当然のことと思われた。日常の言葉とはまったくモードが異なるのである。

当初予定されていた時間を大幅に超え、外は既に暗くなっていた。残念ながら、そのまま食事を共にするというわけにはいかない。眼裏にあの「魂魄」の灯りを浮かべながら、私たちは三々五々帰路に就いた。

報告者:宮田晃碩（EAAリサーチ・アシスタント）
写真撮影:髙山花子（EAA特任助教）

学術フロンティア講義「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」

第7回　真実の終わり？――20世紀の現代思想史のために

2021年5月28日

2021年5月28日（金）、7回目となる学術フロンティア講義がオンラインで行われた。今回の講師は、美学・表象文化論を専門とする星野太氏（総合文化研究科）である。

星野太氏（総合文化研究科）

冒頭で星野氏は、今年度の学術フロンティア講義の主題である「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」への応答として、「30年前のことを30年後にいかに継承するか」という問題を提起された。今回の講義テーマは、「真実の終わり？――21世紀の現代思想史のために」である。ポスト・トゥルース的状況を準備したとして批判される20世紀後半の現代思想／ポストモダニズムを再検討することで、30年間というタイムスパンの中での学問や言説の在り方について考える機会を提供してくださった。

ポスト・トゥルースとは？

講義の前半では、イギリスの EU 離脱やトランプ大統領就任が決定した 2016 年頃から聞かれるようになった「ポスト・トゥルース」という語について説明された。「ポスト・トゥルース」とは、「公共の意見を形成するさいに、客観的な事実よりも、感情や個人的信念に訴えるほうが、影響力のある状況を述べたり示したりする」という意味の形容詞である。ポスト・トゥルース的状況が生まれた背景として、科学への攻撃や認知バイアス、伝統的メディアの凋落とソーシャル・メディアの台頭が挙げられるのに加えて、ポストモダニズムの影響があるという言説が存在することが紹介された。ポストモダニズムが提示した相対主義的な考え方こそ、右派の言説に利用されたのだという主張である。

フランス現代思想の罪？

講義の後半では、ポストモダニズムこそがポスト・トゥルース的状況の原因であるという上記の言説は妥当なのか、という観点で議論が進められた。注目すべきは、フランス現代思想／ポストモダニズムの批判者たちによる批判は、米国で変異した「フレンチ・セオリー」によるポストモダニズムの通俗的イメージに基づく批判であって、デリダやリオタールらによる本来のポストモダンの議論に基づいてはいないという点である。

こうした点をふまえた結論として、フランス現代思想がポスト・トゥルース的状況を準備したという言説（批判）は、それ自体が根拠を欠いているか、意図的な印象付けを行っているとまとめられた。

質疑応答では、「そもそも truth とは何か」や「学問とイデオロギーとの関係」に関する質問が多くなされ、「学問とその“悪”」という主題にも通じる本質的な問題について、活発な議論がなされた。

報告者：石井萌加（EAAリサーチ・アシスタント）

リアクション・ペーパーからの抜粋

（1）今日の講義を通じて、テクストは「純論理的」ではないがゆえに「開かれた」存在であり、問題とされるべきは解釈の問題であると感じました。学術のフィールドでアカデミックマナーに沿って議論される場面から政治家に利用される場面まで、無限に広がっています。いずれの場面でも、その解釈が黒・グレー・白のスペクトラムの中のどこに位置付けられるのか状況次第であるし、その位置付けは時代によって変遷しうるものであるとも思います。だからこそ、批判的に、また「客観的に」解釈を見つめるべきであり、そして、その見つめる側もまた、批判的・「客観的」に見られている / 見られるべきと思います。その繰り返しによってこそ truth に接近できるのではないかと感じました。（教養学部・3 年）

(2) さしあたりの結語で示された状況、つまり「フランス現代思想」がポスト・トゥルースを準備したという言説が批判対象の反復になってしまっている、ということは恐ろしいことだと感じた。意図的な印象づけによるものであれば、当人はそのことに気が付くことが難しい。星野先生は amazon のレビューを例に挙げていたが、twitter などの普及によって、個人は自由に考えを発信し、同時に受容できるようになった。ただ、サイバーカスケード現象のようなことが起こるならば、まさに「真実の終わり」ではないかと思う。先週の善と悪の話と、今回の真実と偽りの話は異なっているが、悪が何かを理解するためには真実がわかっていなければいけないのではないか。そして、「直感」を鍛えるためにも、様々な場所に行って様々なことを知る必要があるのではないか。まだ自分の中で整理がつかずまとまらないが、このようなことをどこか意識しながら、学問に向き合っていきたい。（文科三類・1 年）

(3) 私は、アメリカにて変異したフレンチ・セオリーに依拠した「ポスト・モダニズム／脱構築主義」とそれを土台とした「ポスト・トゥルース」への批判が、結果的にポスト・トゥルース的状況に陥ってしまっているという痛烈なアイロニーに衝撃を受けました。このような状態の根本には、フランスで論じられていた脱構築やポスト・モダニズムの思想がアメリカに「輸入」される時点で大きく変質してしまったことがあると思われますが、このようなことは他の学問分野でも往々にして有りうることだと感じます。したがって、他にルーツを持つ学問上の概念や思想を導入することは適切なのか否かという問いを立てました。

上記の問いに答えるにあたって、特に日本の場合は明治維新の頃を想起することがヒントになりうるのではないかと考えます。近代になって導入された「国家」「個人」などといった概念は、多くの知識人が四苦八苦して外国語から翻訳した結果であり、必ずしも原語の意味を完全に反映したものになっているとは限りません。しかし、これらの概念が日本の中で独自の発展を遂げて諸外国と全く異なる意味合いを獲得するようになったわけでもありません。それはやはり、先人たちがいかに原語の持つニュアンスを和語・漢語に含めるべきかという工夫を重ねてきたことが一因にあるでしょう。したがって、この点においては、他の学問領域や他国から概念や思想を導入すること自体に問題があるのではなく、なるべく元リソースに迫り、その実態を理解しようとする姿勢があるか否かが導入後の行く末を決める鍵になると思われます。とはいえ、これはあくまでも一例であり、より一般的な議論には程遠いため、今後の講義や他の授業、また自分自身の研究を通して考察を重ねていくべき点でしょう。（教養学部・3 年）

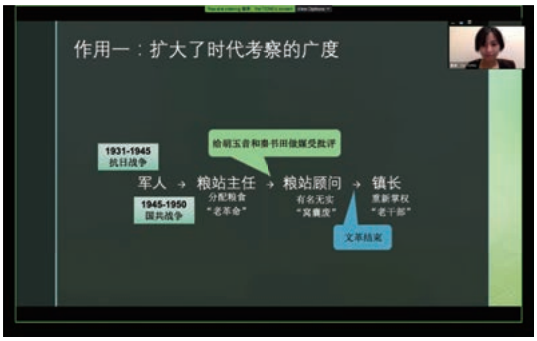
第一次电影评说会　芙蓉镇的主人公

2021年5月29日

2021 年 5 月 29 号星期六的早晨，阳光灿烂，EAA 开展了第一次电影评说会，对象是谢晋的《芙蓉镇》。发表前的课题是观看电影以及阅读论文《作为政治寓言的人道主义情节剧——重读谢晋的〈芙蓉镇〉》。张旭东教授的这篇论文原刊于《文艺研究》2021 年第 4 期，由 EAA 世界哲学 UNIT、综合文化研究科副教授王钦老师整理发表。

在石井老师简要介绍了电影的历史背景之后，由 EAA 第二期 YOUTH 成员童菲（法学部 3 年级）做个人发表。童同学发表题目是“《芙蓉镇》的主人公是谁”。她补充了张旭东教授所提的电影多元叠加的主人公特色，对谷燕山这个人物形象在电影里起到的重要作用加以梳理和探讨。发表后张政远老师、王钦老师进行了评价并展开了深入议论。

张政远老师重点提取了谷燕山作为“军人“的特点，延伸到军人所有的“无常感”这一精神特征。谷燕



山在战场上“无畏于死”，但他幸运中活下来了，但是他的活下来的结果有可能只是不幸的开始，因为他身怀了战伤，又卷入了文革的时代，迟迟等不到自己所奋斗争取来的“安生日子”。

而王钦老师探讨了谷燕山从中心（政治）边缘化的过程，认为这一边缘化位置和电影中所谓“像牲口一样活下去”所意味着的边缘化位置有相似性。谷燕山是非常暧昧的存在，在二元对立之间易被排挤在外，但也因此重新唤起了社会主义作为理想的潜能。他还指出，“动物性”反映在谷燕山自动的边缘化里，与为了生存不把自己的生命压在赌注里的黑格尔“奴隶”概念有异曲同工之处。

石井老师补充并提出疑问：谷燕山真的有“无常感“吗？ 谷燕山是“动物”吗？ 石井老师提出，因为谷燕山是唯一一个没有“失去生育功能”的人，他可能是电影里唯一的“人”。随着讨论深化，谷燕山的重要性似乎越来越明确、珍贵。关于电影评论，石井老师也强调，需要严格地将评论对象限定在电影所表现的画面、台词之中，不宜加入主观感受。

这次电影评论会由此留有余音，徐徐谢幕。

（以下为童菲同学的发表原搞）

大家好，我是童菲。

今天我想和大家聊的是「芙蓉镇的主人公」。

如果说评论电影有两种方式，宏观和微观，我今天想采取的是微观的角度。我想，当我们把焦点放在一个人的时候，我们可以更好地通过个人的视角捕捉电影所想表现的真实、实在的思想。 这种角度能帮助我们更好的感受当时的时代和人的相互作用。 看到整个电影的叙事结构，从而能够分析其中的道德寓意和历史面向。

让我们先看看张旭东的文章是怎么说的。他指出，这部作品具有一种多元叠加的主人公结构，或主角的“多元决定”（overdetermined）。 多元叠加，多元决定，是什么意思？

我想有这里有两个意思。第一个就是这个电影不只有一个主角而是有几个主角。第二个就是一个主角内部也是复杂的，一个主角可能同时怀揣着互相矛盾的两个心情，或是一个主角的性格里有不同性质的两种特质。 我觉得大概可以分成人性的一面和非人性的一面，并且，这背后有时代的操作。

张旭东的文章说电影的主要人物有四位，胡玉音、秦书田、李国香和王秋赦。他们确实是四个主要人物吧。

但是我觉得应该还有一位，那就是谷燕山。

他是个残疾人，他没有家庭，他没有什么野心。

他文化水平也不高，不理解运动。

他浮在中间—- 没有被完全迫害，也没有站在权力的护伞下。

他可能不是故事的主线，也不是推动故事情节的主要人物。

但他是电影的重要道德情感“人情”的底流。

我觉得他是另一位主人公，因为我觉得这个故事以他为中心能够代表出的人道情怀是最强烈的。 以他为中心的故事可以提现更加完整的时代背景，他推动了电影非常重要的情感底流，他体现了当时的人们所怀揣的无力感、迷茫感，同时，是他揭开了新的时代。

我想和大家一个一个聊，谷燕山在整个电影里起到的重要作用。

第一个，就是他扩大了时代考察的广度。具体而言，他退伍军人的身份，让我们看到了新中国建立的艰辛。这是其他人物所不携带的故事。 他的社会地位随着

时代上上下下，更是体现了时代的动脉。

在李国香要查胡玉音，以谷燕山批给胡玉音碎米谷子这事停职反省的时候，他愤怒了，说，血流成河、尸骨成山，打出了这个天下，你们却胡批乱斗，不让人过安生日子，不让人活命！

正因为他有人情，他信任过人，才会如此气愤。

正因为他打过仗，知道“安生日子”的来之不易，才会感到强烈的背叛。

这里我们可以看到，他所携带的新中国建立时的希望，对当下的失望和愤怒。

他和黎满根喝酒喝醉后，在街上反复吼叫：

和日本大战，枪对着日本人。和国民党大战，枪对着国民党。但是这次呢？ 这个不幸的世界，是为什么这么不幸？ 他痛苦了一辈子，为什么不能过上和平的幸福的日子？ 他说“完了”“没玩”。

但是这回枪口不知道应该对着谁。

可能大家也还记得，是他在李国香指责他和胡玉音有一腿的时候，说要脱裤子证明，然后非常悲伤和不甘心地敲打着窗户说出了自己的病情 。

谷燕山因为打仗时伤到了性器官，是个没有性能力的男人，这就是他压抑着自己的性爱而把对胡玉音的感情转化为一种父兄之爱的绝佳反证。所以就不难理解谷燕山被李国香诬陷与胡玉音有肉体交易时感受到的痛苦，这是一种情感隐私、私人领域被侵犯的痛苦。这样一来《芙蓉镇》历史批判力的深度也陡然上升，“四清”也好“文革”也好，种种大革命群众运动的天生缺陷就在于对私人领域的监视和否定。

也展现了谷燕山的悲剧—他作为光荣退伍军人的尊严在这个时候撒了一地。

第二个作用，是体现了当时混沌的年代人们的无力感。

他始终在思考，这个革命，是为了什么？ 在他为了送胡玉音去医院拦车的时候，他想起了二十年前。二十年前在华北平原的雪地里，自己在战场迎来了新的国家，新的社会，而二十年后的现在在南方小镇的雪天里自己要迎来一个不被社会欢迎地小生命。世事太复杂了，他解释不清。

这一段也是如此。他看到了新生的婴儿，想到为什么这个世界有痛苦。工人农民自己打出了这个天下，不是为了和平吗？ 为什么在自己打出的江山里，抖个不停。他对自己的存在意义感到了怀疑。他可能是最有人情的人，但他没有文化水平，所以不可能搞出一个革命。我觉得这又体现了当事人的无力感。

第三个作用，就是支撑人情的底流。

是他在大家都往胡玉音秦书田吐口水的时候，到他们家喝喜酒，做媒人。

这个行为最终被组织处分，让他停止组织生活。

他是唯一走在电影里弱者与强者之间的人，他让强者意识到善，让弱者受到关怀。没有谷燕山，可能电影就只是一个悲剧。

最后，也是最重要的一点。

他揭开了电影里新时代的序幕。在他等在医院的手术室门口，看到解放军女医的帽子上的红星时，他想到了战场。那个受伤的场景又出现了。这是有人在说：

“为了新中国……前进!!”

“为了新中国，前进！”

“她是站在海岸，遥望海中已经看得见桅杆尖头的一只航船。她是已经光芒四射，蓬勃欲出的一轮朝日，她是躁动于母腹中快要成熟了的一个婴儿。让我们举起双手，欢迎她吧。”

胡玉音的孩子随了谷燕山的姓我觉得有两个 意思，一个就是希望下一个时代是谷燕山这样的朴实的勇敢的，有人情的时代。

还有一个，就是希望下一个时代远离战争，向往和平。

但是可能同时还有一个意义，那就是下一个时代可能也是坎坷的。

我想谷燕山的特点，可能也会给这个故事增加一点讽刺意味。

因为谷燕山是一个残疾人，他不能生育，没有家庭，没有妻子，这是和黎满根不一样的。他背叛了胡玉音，是为了保住自己的家庭。谷燕山终究还是一个被社会遗忘了的人。把他作为“英雄”可能是带有一点讽刺和悲剧的成分了。

记录者 童菲

連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」

第4回 中世と近世のあわい

2021年5月31日

2021年5月31日、連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」の第4回「中世と近世のあわい」がZoomにて開催された。この連続シンポジウムは、2020年に筑摩書房から刊行された『世界哲学史』シリーズ（全8巻＋別巻）の編者である納富信留氏（東京大学人文社会系研究科）をオーガナイザーとして迎え、「世界哲学（史）」という概念を再構築し、その方法論的な意義を探る試みの一環である。

今回のシンポジウムでは、オーガナイザーの納富氏に加えて、同じく『世界哲学史』シリーズの編者であり、第3巻第1章、第4巻第1章、第5巻第1、3章、別巻第2章を執筆した山内志朗氏（慶應義塾大学文学研究科）、第4巻第9章「鎌倉時代の仏教」を執筆した蓑輪顕量氏（東京大学人文社会系研究科）、第5巻第2章「西洋近世の神秘主義」を執筆した渡辺優氏（東京大学人文社会系研究科）が登壇し、世界哲学史における中世と近世の意義をめぐって各自の専門的な視点から提題した。それに加えて、コメンテーターを務める田中浩喜氏（東京大学人文社会系研究科・博士課程）が自身の研究分野に基づきつつ、三つの報告に対してコメントを述べた。

最初は納富氏から今回のシンポジウムの趣旨に関する説明がなされた。氏によれば、『世界哲学史』シリーズで語られる「中世」は7世紀から17世紀へと続く長い時代を包摂する概念となっており、通常近代とみなされる事象も中世という枠組みで議論されている。納富氏は「中世」という概念自体の曖昧さに警戒を示しつつ、「中世」を軸に哲学史を見直す際に看過できない時代区分、宗教と哲学の関係、交通・メディアの変化といった基本的な論点を整理した。さらに、中世という視座からの領域横断的な研究の可能性を展望し、西ヨーロッパと東アジアの中世の共通性、イエズス会の布教活動を背景とする「旅人」の出現、「辺境」としての日本の位置づけ、理論ではなく実践・体験・身体性としての哲学など、複数の切口を提示した。

『世界哲学史』（全8巻＋別巻、筑摩書房）

納富氏による趣旨説明のあと、1人目の発表者である山内氏は「バロック・スコラから見た世界哲学」と題する発表を行った。山内氏は中世という名称が多くの問題を含んでいるとはいえ、それを手放して性急に新たな時代区分を作るよりも、むしろ世界哲学の観点から着眼点を洗練していくべきだと主張し、古代、中世、近代という通常の時代区分が流動化して見えるバロック・スコラ期に焦点をあてて議論を展開した。氏によれば、中世という時代を設定することは「帝国の転移」（translatio imperii）の叙述、すなわち一時期途絶えたギリシャの古典・古代の規範性を自分が継承するという正統性の主張を可能にした。また、中世を「闇の時代」とする紋切り型の認識を批判して、フランシスコ・スアレスらイエズス会士の哲学が実は経済思想と密接に結びつき、営利活動を正当化する論理を志向したこと、唯名論が経済思想、宗教思想と強く関連すること、13世紀に伝来した「理虚的存在」（ens rationis）という概念がのちの哲学史に大きな影響を与えたことを指摘した。山内氏からすれば、世界哲学史という観点から中世哲学を組み直す場合、従来の図式を相対化し、当時の利子肯定論や個人主義といった人間の有限性という視点が必要になる。そこで山内

上段：左から順に納富信留氏（東京大学）、山内志朗氏（慶應義塾大学）、蓑輪顕量氏（東京大学）
下段：左から順に田中浩喜氏（東京大学博士課程）、渡辺優氏（東京大学）

氏は、世界規模の貿易・メディア・技術の成長を背景としたイエズス会の活動に、資本主義につながる発想を見出した。この点では中世という時代が必ずしもネガティブなものでなく、現代もまた新たな中世といってよいと、発表を締めくくった。

続いて蓑輪氏が「教理と実践――古代・中世の仏教者の見ていたもの」という題で報告を行った。蓑輪氏はまず仏教の時代区分と歴史学のそれとの違いを指摘し、中世日本の仏教の主流は古代から受け継いだもので、その二つの重要な流れとして学問研鑽を中心するものと、修行によって不思議な力を身につけたとされる修行実践を挙げた。次に日本で社会的な勢力をもつ天台宗と法相宗を重点的に取り上げ、その学問の場として法会を紹介した。中世において、寺内法会で研鑽を積んだ僧侶がより格式の高い法会（南都三会、三講など）に出仕できる点から、学問への重視が窺えるが、その一方で修行の伝統も継承されていくという。では当時実際にどのような議論が行われたのか。蓑輪氏にしたがえば、天台宗ではあらゆるものを絶対的に肯定していくとされる本覚思想（不二思想）が成立するのに対して、法相宗では解脱房貞慶らによって心のありようが正面から詳細に論じられており、つまり感覚器官で捉えた対象を心で描くと「戯論」（分別相・名言相・尋思相）が起きるが、真実はむしろ分別や言語を離れたところにあり、それを知りうるのは言語機能を介在させない無分別智によるほかないというような議論がなされている。蓑輪氏の見方では、中世の法然や親鸞などに代表される鎌倉新仏教の背景にはこのように以前から受け継がれてきた仏教者の内部で行われた知的営みがあって、そこから見えてくる問題点に対して独自の解決手段を提示する形で鎌倉新仏教が始まったのである。

渡辺氏は「神秘主義と愛知――世界哲学史と神秘主義研究の接点を求めて」という題で報告を行った。自身の研究の主眼を神秘主義という概念の拡充、思想史におけるその位置づけに置いた渡辺氏はまずミシェル・ド・セルトーの画期的研究を紹介する形で神秘主義研究の現在を概観した。渡辺氏によると、以前の神秘主義理解が神的なものとの合一や現在の体験（見神）を中心としたのに対して、セルトーは、宗教的コスモスの崩壊と神の声の途絶えを背景としつつ「神秘主義 la mystique」なるものが自立した領域を形成した近世（16-17 世紀）に注目して、神秘体験に執着せず不在の神をなおも希い、語ろうとする神秘家たちを描いた。またセルトー以後の研究は神秘主義の思想史上の意義を評価し、新たな記述の仕方を模索しているという。上記の研究状況を踏まえ、渡辺氏は神秘主義をあらためて世界哲学史というプラットフォームに位置づけることは、哲学と神秘主義の両方を問い直し、両者の接点である「愛知」を考えることだと述べた。そして神秘家を、完全な知を欠くがゆえにそれを追求する愛知者として捉える場合、「ことば」が最重要な論点になるということを、オルテガの議論やアウグスティヌスのテクストを援用しながら論じ

た。そのうえ、テレサ、ヨハネ、シュランのような中世・近世の神秘家に見られた神秘主義／哲学もしくは信／知の二項対立を超える可能性を示した。最後に、「神学的詩学」、「女性的」エクリチュールといった、今日のフェミニズム問題につながる問題提起をも行った。

三者の発表が終わったあと、近現代フランスにおける政治と宗教の関係を研究している田中氏がコメントを述べた。田中氏は世界哲学の試みに通じる「グローバル」な視点から「普遍」と「特殊」を問い直すという問題意識を共有している社会学研究を紹介したうえで、以下の三つの視点から発表者に質問を投げかけた。すなわち、1.「時間」の問題として、『世界哲学史』シリーズでは「近世」の位置づけをめぐって議論が分かれているが、そもそも世界哲学にとって近世という時代区分が有効なのか、あるいはどうすれば有効になるのか。また日本仏教史の観点から見ればどうなのか。2.「空間」の問題として、哲学もなんらかの「場」で生起する以上、帝国主義的もしくは自閉的な哲学ではなく、反省的で構築的で対話的な世界哲学を打ち立て、しかも地域的な多様性も視野に入れるには、どのような空間的な枠組みを措定すべきなのか。3.「概念」の問題として、近年問い直されている「世俗／宗教」という対概念は世界哲学とりわけ中世の哲学にとってどういう意味をもつのか、時代と地域を異にする「世俗／宗教」のあり方を言語化・概念化する試み（たとえばJason Ananda Josephson（2012）や小島毅（2017）の研究）は中世の研究にもできるのではないか。

その後、田中氏の質問に発表者たちが応答する形で盛んな議論が交わされていた。

私たちは不可避的になにかしらの概念を通して世界を分節し、認識を形成する。しかし中世／近世（ないし古代、近代）、哲学／宗教、世俗／宗教という、当たり前だとみなされがちな基本概念もしくは図式が必ずしも自明ではなく、それらに基づく枠組みからはみ出す「余剰」もあるということ、そしてそこに世界哲学（史）の新たな出発点があるということが、今回のシンポジウムにおいて一層明らかになったのではないだろうか。

報告者:郭馳洋（EAA特任研究員）

ご質問・コメントからの抜粋

第4回シンポジウムの参加者からいただいたご質問・コメントの一部を紹介させていただきます。回答はシンポジウム発表者個人の意見です。

Q1 ヨーロッパの神秘主義を、近世以降の宗教の個人化、脱教会化、脱ドグマ化の先駆と見ることは可能でしょうか？

A.（渡辺） 可能ですし、しばしばそのように理解されてきました。ことは神秘主義をどう捉えるかという問題と切り離せませんが、私の発表で輪郭を描こうとした神秘主義の起こりは、神学（原義は「神がたり」）の、大学における専門学知化・男性聖職者による専有化が顕著になる12-13世紀に求められ、先駆者としてたとえばアントワープのハデウェイヒを挙げることができます。半聖半俗の生活を送った女たち（ベギン）の指導者であったともされる彼女の神がたりは、俗語（ブラバント方言）による、一種の宮廷愛文学でもありました。神を愛し求める、ほかの誰でもないこの「わたし」を自らのことばに刻みつけるが如きその言語活動は、学問としての神学の枠組みには到底収まるものではなく、それゆえ教会や神学者たちの畏怖と警戒を呼び起こすことにもなりました。この緊張は17世紀にかけて強まってゆくことになります。ラインラントの神秘主義がルターに与えた影響もよく指摘されるところです。ただし、「宗教の個人化、脱教会化、脱ドグマ化の先駆」という神秘主義観は、近世に強まった反神秘主義言説、また、19世紀末から20世紀半ばにかけて世界的に流行した近代神秘主義

論のなかで強化されたということに留意する必要があります。このあたりの議論はもう少し丁寧にしなければなりませんが、少なくとも、「中世と近世のはざま」の神秘主義における言語活動を、脱教会化、脱ドグマ化した近代的個人による内面的体験の独白と単純に重ねることはできません。ハデウェイヒにとって、あるいは十字架のヨハネやスュランにとっても、教会も「ドグマ」（この語の意味も時代のなかで変化しました）もなくてはならないものだった。そして彼女・彼らの「わたし」の語りは、すなわち「わたしたち」の語りであり、愛する者たちのあいだの語り合いでもあったと思われるからです。

Q2　蓑輪先生にお尋ねいたします。本日お話しいただいた古代中世の仏教研究者たちは、神話などに表われるような日本土着の世界観に、研究成果を接続、定着させようとしていたのでしょうか。神仏習合のような試みには積極的だったのでしょうか、それとも無関心だったのでしょうか。

A.（蓑輪）　日本に仏教以前から存在した信仰との接続には、おそらく古代から（資料的には奈良朝の初期から見えてきますので）、仏教者たちにとって関心の対象だったと思います。土着の信仰と結びつけるために、神が神の身を止めたいとか、神は仏法を守護するのが使命なのだ、神と仏は別々なのだといった素朴な言説が、神社やお寺の縁起に見えてきます。積極的に神仏習合を言うのは平安時代後期以降で、所謂、本地と垂迹という関係が語られるようになります。しかし、積極的に唱えかつ理論書的なものを作成するのは、鎌倉以降の時代だと思います。そのような中で、逆に神は神として自立した存在で、仏と同様に救済者になり得ることが語られていくような気がします。この辺りの研究は、茨城大学の伊藤聡先生が詳しいので、そちらをご覧ください。

一高プロジェクト

映像制作メモランダム（2）

2021年5月31日

101号館映像制作チームのその後の動きをお伝えする。

特記すべき件としては、5月14日に、今回の映像の撮影を依頼する古屋幸一氏と共に、駒場キャンパスのロケハンを行ったことが挙げられる。キャンパス内で撮影に適した場所を探索するとともに、撮影当日

ロケハンで訪れた駒場キャンパスの一二郎池周辺

の進行や、映像を取り終えた後の編集の進め方などにつき、プロの目線から具体的な話を聴かせていただき、映像制作チームの認識がより具体化され、映像の構想と進行手続きの見通しがはっきりとしてきた。

試行的に、2分程度の特報映像を作成してみた。現在の駒場の風景や音の感じと、往時の一高について残されている資料とをどう組み合わせられるか、試みているものである。なるべく早いうちに、実際の特報映像をみなさまにお届けできるよう励みたい。

当プロジェクトで作成した映像は、いずこかの映画祭に出品したいと考えており、そのために、各映画祭の概要なども調べているところである。夢は大きく持ちたい。

この先、映像の構想をさらに広げていくとともに、作業面をより具体化、明確化させていくことになる。引き続き映像プロジェクトへのご支援を賜ることができれば幸いである。

報告者:高原智史(EAAリサーチ・アシスタント)

写真撮影:古屋幸一(FOO)

一高プロジェクト

映像制作メモランダム (3)

2021年6月1日

「101号館映像制作プロジェクト」と銘打たれた企画が動き出してから、すでに半年が経とうとしている。これまではやや頭でっかちに、共同体や排除／包摂、エリーティズムといった、いかにも鍵語めいたものを弄しては、どのような映像が撮れそうかという構想ばかりに終始してきたが、結局それは「物語」の構想でしかなかった。

この5月は、実際にカメラを回し始めている。カメラから世界を覗くと思うのは、世界の側が呈示してくる豊穣さの前に、抽象的な構想なるものがいかに撓ませられてしまうか、ということだ。それは具体の圧倒的な重みによる、挫折と言ってすらよいかもしれない。

プロジェクトを通じて普段ページを繰っている、1930年代半ばの一高寮日誌、とりわけ中国人留学生をめぐる箇所は読んでいて確かに面白い。国家の問題、一高の問題、青年の問題がそこには渾然一体として描かれている。けれどもその記述と、我々がそれをいま読むという経験を接合して幾分かでもアクチュアルな映像表現を目論むとき、30年代以外のいつか、駒場ではないどこかのイメージが欲せられてくる。それはコロナ禍という状況の息苦しさ、そこからの解放を求める気分と、どこか似通っているようにも思う。渋谷でのプロジェクトの打ち合わせ中にカメラを回したり、8mm風カメラを持って代々木公園を訪れたり、駒場キャンパスの地下に潜ったりする日々は、解放を求めてというよりは、ただの彷徨と言うべきかもしれないが、そこでかき集められた断片が、やがて一つの像を結ぶことを期されているように、単なる彷徨にも、一つの方向がきっとあるだろう。

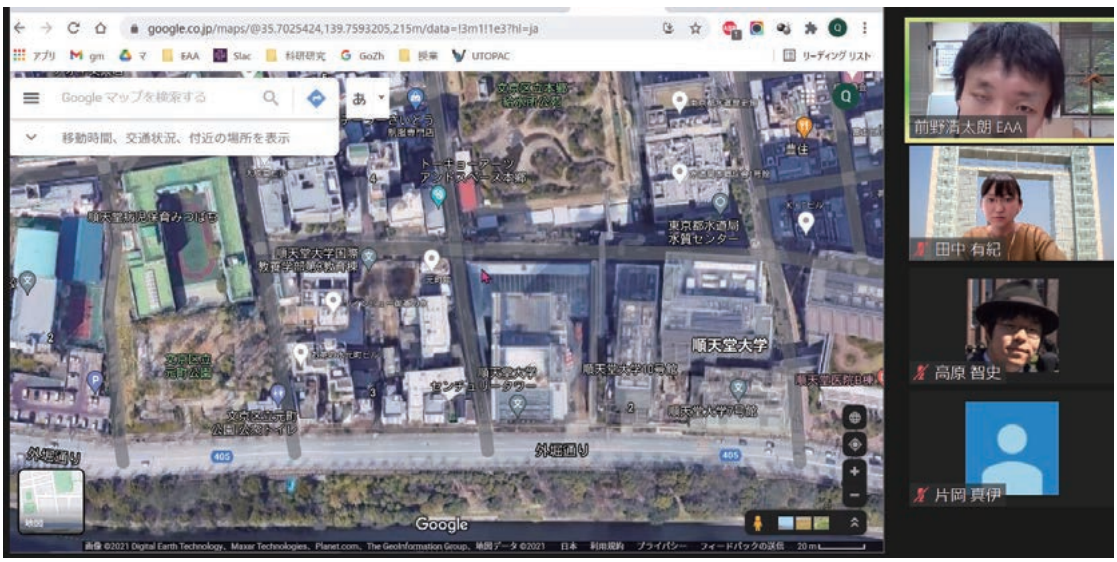
報告者:日隈脩一郎(EAAリサーチ・アシスタント)

第2回「部屋と空間プロジェクト」研究会

2021年6月3日

「部屋と空間プロジェクト」研究会は、我々にとって最も身近な「空間」である「部屋」という概念を手掛かりに、EAA メンバーの関心に共通する点を取り込みながら、「部屋」に関する様々な文献を皆で読み進め、新しい学問を提示できないかという思いで発足したものである。第 2 回研究会は、2021 年 6 月 3 日（木）15：00 よりオンラインで行われた。研究会ではまず、前野清太朗氏（EAA 特任助教）が今回の報告の主役でもある「文化アパートメント」があった御茶の水付近の地図を示し、都内に残る戦前のアパートの遺構について説明を行った。その後、田中有紀（東京大学東洋文化研究所）が、大正時代の住宅論として、第 1 回に引き続き、有島武郎・森本厚吉・吉野作造著『私どもの主張』（文化生活研究會、1921 年）をとりあげ、森本厚吉（1877-1950）の論考（「経済問題の根本義」「生活権の主張と其責任」「新婦人と文化運動」）を分析した。参加者は張政遠氏（東京大学総合文化研究科）、柳幹康氏（東京大学東洋文化研究所）、高山花子氏（EAA 特任助教）、宇野瑞木氏（EAA 特任助教）、片岡真伊氏（EAA 特任研究員）、高原智史氏（EAA・RA）、滕束君氏（EAA・RA）、伊野恭子氏（EAA 学術専門職員）、孔詩氏（人文社会系研究科）であり、外部からも 2 名参加した。

森本厚吉は 1877 年京都で生まれる。1894 年、東京東洋英和学校を卒業し、札幌私立北鳴学校で学んだ後、札幌農学校に進学して、有島武郎と出会う。のちジョンズ・ホプキンズ大学で消費経済学を学び、1916 年に論文「The Standard of Living in Japan（日本の生活標準）」で博士号を取得する。1918 年に北海道帝国大学農科大学に着任した。1920 年、能率的生活を目指す「文化生活研究會」を設立、1925 年にはお茶の水に日本初の鉄筋コンクリート 5 階建ての「文化アパートメント」を建設した。北海道帝国大学を退職した後、1928 年に女子経済専門学校（現・新渡戸文化短期大学）を設立し、晩年は女子経済教育に専念した（参照：森本厚吉伝刊行会編『森本厚吉』河出書房、1956 年）。『私どもの主張』は、文学（有島）・経済（森本）・政治（吉野）の三分野から、「文化生活」について論じたもので、3 人が関西で行った講演の記録である。森本にとっては、「文化生活研究会」を設立した直後の講演であり、彼の消費経済学研究を実践に移していく過程が垣間見える。



田中有紀氏のスライドより

報告では森本の三論考の内容を紹介した後、先行研究を紹介した上で、『滅びゆく階級』（同文舘、1929 年）と『アパートメント・ハウス――新しい住宅の研究』（文化普及會出版部、1926 年）をとりあげ、森本の「中流階級」という概念、欲望の分類と適切な養い方、能率的生活の内容、アメリカの生活にならう理由について読み解いた。そして森本にとって「文化」とは何かについても考察した。「文化」には刑罰ではなく礼楽などによって人民を教化する「文治教化」の意味と、ドイツ語の kultur に由来する、自然を変え人間の理想を実現し、学問や藝術などを生み出していく過程という意味がある。後者の意味が日本に普及したのは大正時代からであり、のち、西洋式生活に追随するだけの安易な「文化」という意味も加わるようになった。「文化住宅」などの「文化」はこれに当たるとされる。Kultur に由来する大正時代の「文化」の語は、三木清によれば、明治時代の啓蒙思想に対する反動として登場した大正時代には教養思想を代表するものである（参照：柳父章『一語の辞典：文化』三省堂、1995 年）。森本が、社会の不平等を批判しつつも急激な改革は望まず、また女子教育を重視するも婦人参政権を積極的に肯定しないのは、このような、反政治的な教養としての「文化」を意識しているのではないか。しかし、彼は軍国主義を批判し、「武」の政治ではなく、能率的生活によって人々の意識を変える「文化」（文によって化す、漢語的ニュアンス）ことを目論む以上、結局のところ政治的である。また、Kultur の原義に遡れば、能率的な道具や機械を備え、人間社会において最も進歩した行動形式である「共同」生活で、経済的に暮らせる「アパートメント」は、森本にとって、人類が行き着いた、最も理想的な「文化」的な生活なのではないか。

討論では、能率的な生活が実現すれば生活に余裕が生まれ「なまけられる」はずなのに、森本が大正の人々は「なまけてはいけない」と考えたのは何故かという問題が提起された。また、森本が生活という「卑近」なところから、身体に能率性を徹底的に備え付けていくあり方について、1930 年代から始まる蒋介石の「新生活運動」や、さらには高遠な「朱子学」に対して身近なところから思想的実践を行おうとした江戸時代の儒学者たちを想起させるという話題や、震災で街が破壊され欧米式の街に生まれ変わることを期待するも、それによって失われた日本家屋の「陰影」を礼讃した谷崎潤一郎が話題に上った。

森本は、「非能率的な」古い習慣から解き放たれ、新しい「能率的生活」を習慣化することで、人間はむしろ本来の状態を回復でき、これまで以上の力を発揮できると考えた。それでは、「能率的生活」の後には、どのような理想的世界が開かれているのだろうか。ここからは先は、彼の唯一無二の親友、有島武郎の思想を読み解かなければならないだろう。次回の「部屋と空間プロジェクト」研究会は、有島のテキストを分析する予定である。

報告者:田中有紀（東洋文化研究所）

一高プロジェクト

映像制作メモランダム（4）

2021年6月4日

つくっている最中の映画について何かを書くというのはとても難しいことです。映画制作が始まる前は「共同体や排除／包摂、エリーティズムといった、いかにも鍵語めいたもの」について、まるで共同研究を進めるかのように話し合い、その過程のいくらかを報告文にして公開することができました。しかし、映画をつくることができるかもしれない、とにかく映画を撮ろうと私たちが決めてから、報告文だったものはシナリオという形に変わる必要がありました。なぜなら、一高や駒場と私たちの関係、どのように私たちが寮日誌を読んだのか、なぜ私たちは一高時代のベッドや机などを集めるのか、等々について映画は示すことになるだろうからです。どうすればいいのか明確にわかっているわけではないのですが、ともかく率直な態度でなければならないとは思います。

5月14日、制作チームは今では閉鎖されている駒場キャンパスの地下道に入りました。入ることが禁じられている場所というのは確かに魅力的です。しかも学生たちはふだん意識せずに地下道の上を歩いているわけです。私たちは地下道を楽しみました。ハクビシンがいないか探したり壁面に下品な落書きを見つけたり、ここからこういうショットが撮れるだろうかと話したり、そうして現在の地下道の様子をあらかた把握しました。改めてはっきりと見てとったのは、地下道の状態が一高時代とは様変わりしているということです。部分的には昔のまま残っているところもあるのですが、多くの増設や整備が行われていたのです……。これは映画にかかわる出来事です。この地下道はかつて建物間を移動する際に一高生が使っていた地下道ではあるけど、私たちは以前のように地下道を通過することはできない。ただ、現在の地下道であれこれが見えたり聞こえたりする私たちの意識には、授業終わりに寮へと戻る一高生たちの姿も幽かに思い浮かんでいたかもしれない。さて、この道をどうやって人々に見せられるのだろうか。この地下から何が明るみに出てくるのだろうか。このような問いかけが私たちのプロジェクトを方向づけています。

報告者・写真撮影：小手川将
（EAAリサーチ・アシスタント）

第1回 EAA若手研究者研究会

2021年6月4日

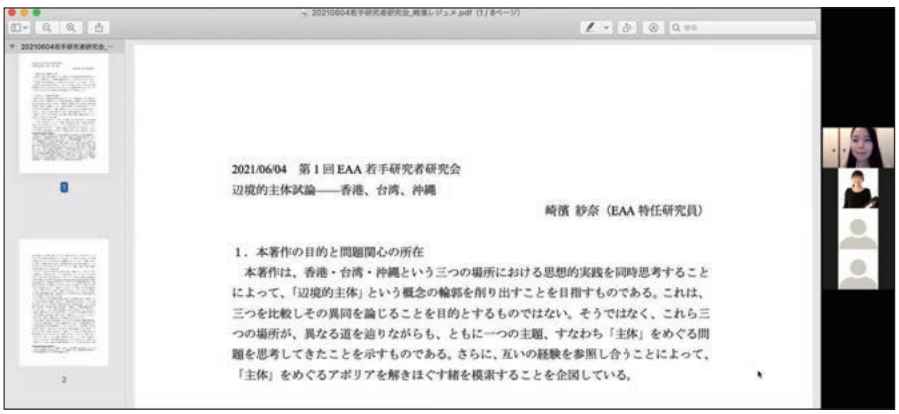
2021年6月4日（金）15：30より、オンラインにて第1回「EAA若手研究者研究会」が開催された。本研究会は、EAAに所属する若手研究者が、EAAの活動を通して得たものを自分の研究に還元し、どのようにして「新しい学問」を世の中に問うかについて、専門家だけではなく、広く社会に示すことを目的とする。第1回は具裕珍氏（EAA特任助教）、崎濱紗奈氏（EAA特任研究員）、田村正資氏（EAA特任研究員）が報告を行い、今後1年かけて完成させていく研究の構想を発表した。司会は田中有紀（東京大学東洋文化研究所）が担当し、張政遠氏（東京大学総合文化研究科）がコメントを担当した。このほか、EAA所属教員や研究員、ユースからの参加者、また他大学の学生や社会人の参加も複数あった。

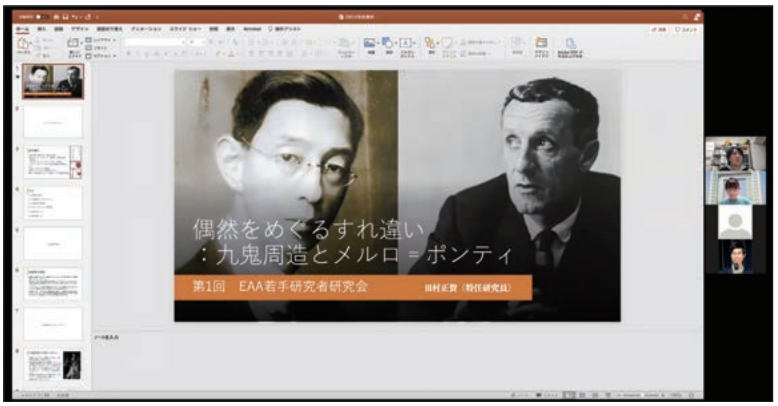
具裕珍氏は“Cultural Repertoires in Japanese Contentions: Learning from enemy ?”として報告を行った。抗議活動には様々な行動様式（投票などの伝統的方法、ストライキやボイコットなど破壊的方法、テロなど暴力的方

法）があるはずが、抗議活動を行う人々が選択する様式は驚くほど限定されている。また、選択された様式が抗議活動に与える効果的については、コストと利益が釣り合い、合理的である場合も多い。これは、人々が歴史や社会から学習した上で、行動様式を選んでいるためであり、これまでの研究では、抗議活動を行う人々が、他者とりわけ同じ立場にある人々の行動様式から学習することが指摘されてきた。具氏は今回、日本の事例を取り上げ、日本の左翼や右翼がそれぞれ「敵から学ぶ」という方法を取りそれぞれの活動を展開してきたのではないかという仮説を提示した上で、今後分析すべきデータについても紹介した。討論では、西欧の政治思想史ではすでに中世から、お互いの方法を学ぼうとする姿勢が見られたという指摘がなされ、また、90年代以降の日本における左翼・右翼のバランスなどについても意見が交わされた。

続いて崎濱紗奈氏が「辺境的主体試論――香港、台湾、沖縄」として報告を行った。崎濱氏は、香港、台湾、沖縄における思想的実践を同時思考することによって、「辺境的主体」という概念の輪郭を削り出すことを目指し、今回は特に沖縄を取り上げた。「沖縄」という「主体」には、まず「日本」が、そして「アメリカ」が大きく関与した。当初熱烈であった「祖国日本」への復帰を求める声は沈静化し、別の自立のあり方を模索され、国民国家体制そのものへの批判を射程に含めた哲学的議論が展開された。沖縄の「主体」化を目指しつつも、同時に「主体」化が持つ限界、たとえば、「沖縄」という「主体」が、「他者」に対し排除と包摂という暴力を再演する可能性なども指摘されてきた。沖縄近現代思想史ではこのような限界点をすり抜けつつ「主体」を志向できるかが問われ続けている。崎濱氏はさらに、「主体」にとって「政治」がなぜ重要か、「辺境」であることとの関連性についても言及した。討論では、個人を主体と考えるのではなく「沖縄」を主体と考えることの意味や、香港は「港」であり台湾は「島」であるが「辺境」とはどう関わるかなどの問題が提示された。

最後に、田村正資氏が「偶然をめぐるすれ違い――九鬼周造とメルロ=ポンティ」として報告を行った。九鬼とメルロ=ポンティは、現実の世界で出会うことはなく、これまでその偶然論が比較されたことはなかった。しかし、フランスのスピリチュアリスムの系譜やフッサール・ハイデガーの現象学の系譜など、哲学的バックグラウンドを共有する両者の偶然論を比較し、その差異を浮かび上がらせれば、両者の特異性も露にできるのではないか。九鬼もメルロ=ポンティも、世界の内部的な偶然性ではなく、世界そのものの根源的な偶然性に目を向け、「偶然としか言えないかたちで成立しているこの世界で生きるこの私がどのように生


2021/06/04　第1回EAA若手研究者研究会
辺境的主体試論――香港、台湾、沖縄
崎濱 紗奈（EAA特任研究員）
1．本著作の目的と問題関心の所在
本著作は、香港・台湾・沖縄という三つの場所における思想的実践を同時思考することによって、「辺境的主体」という概念の輪郭を削り出すことを目指すものである。これは、三つを比較しその異同を論じることを目的とするものではない。そうではなく、これら三つの場所が、異なる道を辿りながらも、ともに一つの主題、すなわち「主体」をめぐる問題を思考してきたことを示すものである。さらに、互いの経験を参照し合うことによって、「主体」をめぐるアポリアを解きほぐす緒を模索することを企図している。



きるべきか」という実存的な問題に挑戦した。しかし、偶然性に対する立場の違いによって、両者の帰結は大きく異なる。この違いを詳しく論じるため、本研究では仮に九鬼の立場を「先験的偶然観」、メルロ=ポンティの立場を「創発的偶然観」と呼び分析を行う。今回は、両者の偶然論の核心部を記述するテキストを紹介しながら、それぞれの偶然論に対する分析を行い、両者を比較した。討論では、九鬼の「必然」「偶然」という言葉に対する理解に関して、また、九鬼・メルロ=ポンティへのハイデガーの影響などに関して、いくつか質問が挙がった。

それぞれの報告の冒頭では、簡単に自己紹介を行い、これまでの研究で何を取り上げ、どのような関心を持ちEAAの活動に参加しているのかについても紹介した。3人の研究はそれぞれ異なるが、本研究会やEAAの様々な活動を通し、お互いに影響を与え合い、問題意識を様々に共有していく様子も垣間見えた。今後は、EAAの他の活動とも連動しながら、中間発表、最終発表を行っていく予定である。

報告者:田中有紀(東洋文化研究所)

学術フロンティア講義「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」

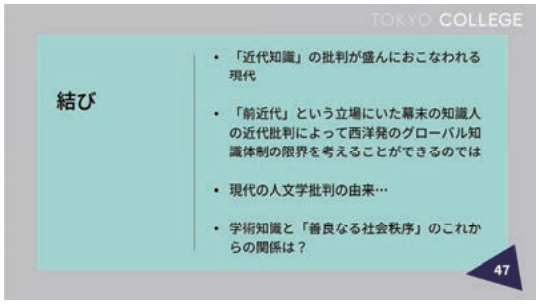
第8回「知」の歴史から見た学問の「悪」

2021年6月4日

2021年6月4日（金）、8回目となる学術フロンティア講義がオンラインで開催された。今回はミハエル・ハチウス氏（東京カレッジ）による「知」の歴史から見た学問の「悪」がテーマであった。ハチウス氏は、日本文化史、特に世界史から見た近世・近代日本文化史、「知」の歴史を専門としている。

講義は、ハチウス氏による「知」の歴史についての紹介から始まった。15年前から発達してきた学問分野を表す用語として、“history of knowledge”が主にヨーロッパで使われている。日本では「知の歴史」あるいは「知識史」と訳されているものの、この概念

ミハエル・ハチウス氏（東京カレッジ）



自体はまだ定着していない。「知の歴史」という学問分野の特徴は、知識を抽象的な概念としてよりも「動いて触れるもの」として取り扱っていることである。要するに、知識史の研究対象は頭の中の知識ではなく、基本的に生産物としての知識の「社会的生産と流通」である。そして、歴史学者が研究対象と見なす知識は普遍的なもの、すなわちソクラテスが考えた「正当化された真なる信念」と異なり、歴史的な現象、つまり歴史が変わるにつれて変化していく知識であるとハチウス氏は強調した。知識の作用と効果、知識の媒体、そして知識がどのような形で現れているのかについての様々な問いかけは「知識史」の問題意識である。岩波講座『「帝国」日本の学知』シリーズ (2006)、『近代学問の起源と編成』(2014) などがその研究例である。

次に、ハチウス氏は日本史を例にしながら、学問の「善」と「悪」、つまり学問と道徳の関係をめぐって講義を展開した。真実を追求するため、倫理と道徳よりも知識を中核に据える「近代」の知識観に対し、「非近代」の知識観においては、知識が道徳を得るための一つの手段であり、そして知識を獲得する目的は善良なる社会秩序に立てるためだったとハチウス氏は紹介した。たとえば、日本の近代化と知徳の関係を考える際、クレイグ（「徳川時代の日本における科学と儒教」1965）、丸山真男（『日本政治思想史研究』1952）など日本国内外の学者によって、知識と道徳の区別は近代化の大前提とされた。また、横井小楠、元田永孚と重野安繹の言説から、ハチウス氏は「前近代」という立場にいた幕末の知識人の近代批判によって、西洋発のグローバル知識体制の限界を考えることができるのではないかと指摘した。

最後、ハチウス氏は“epistemic virtue”（学問の美徳）、“scholarly virtue”（学者の善行）など知識史で近年取り上げられる概念をはじめ、学者の善行と悪行について、「実学」を中心に紹介した。儒学の用語としての「実学」には、もともと修身につながる学びという意味があるが、幕末に入るとその意味は次第に狭くなっていった。19 世紀初頭、政治との関連でのみ生み出されるとされた「実学」が、幕末以降は西洋の軍事技術を習得することを意味するようになり、さらに応用可能な科学に偏るようになった。近代化の過程を経て、知識と道徳が分別されたプロセスを理解するために「実学」は重要な言葉だとハチウス氏は考えている。

報告者:滕束君（EAA リサーチ・アシスタント）

リアクション・ペーパーからの抜粋

(1) これまでの講義において考えてきた学問の悪というのは、どちらかと言えば、ある種の知識そのものが正しいのか否かという問題だったと思う。正確には、今日の授業を受けるまでは、このような問題を考えていたことはあまりにも自明だったため意識することはなかったが、今日の授業で向き合ったのはそれよりも更にメタな、如何に知識が現われたのか、そして如何にしてそれらが正しい／正しくないと認められるのか、という問題であると理解した。この視点は、現代に於いて学問の悪というものに如何に立ち向かうか、というこの講義の原点とも言える問いに私を立ち戻らせた。即ち、これまで私は授業を聞く中で己が如何に悪に飲み込まれずに己が如何に知識をつけていくかということだったが、今日のお話で自覚したのはその知識というのは意識的にせよ無意識的にせよ歴史的な拘束を受けているということだった。日本の近代化において、知識が実学という文脈の中で道徳を欠かせないものとして語られる様は、歴史的検証なしには浮かび上がってこないものだろう。これまで私は知識史というものをあまり考えたことはなかったが、このような歴史的な検証に基づいた知識の現われる過程を知ることで――それはもはや自由意志というものは存在しないのだという諦めに繋がるのではなく、むしろその反対に――無意識のうちにその時代の文脈に支配されているかもしれない知識を相対化し、それは正しいものなのか、道徳的なものなのか、考えることに繋がるのではないか。その意味で、学問の悪に立ち向かうに当って、知識史というものを知ることは必要不可欠だと考えた。（教養学部 3 年）

(2) 私は、本講義において言及されていた「道徳」と「学問」の関係性に特に関心を持ちました。とりわけ権力と結びつきやすい学問に対して、技術や思想自身に罪はないという主張がなされる一方、いかなる学問も予期せぬ帰結につながる可能性を考慮して行われるべきだという見解も存在するでしょう。いずれにせよ、資本主義体制にひずみが生じてその限界が露呈しつつある現代において、学問と道徳のあり方を再検討することは必要不可欠な作業だと思われます。

しかし、日本における「道徳」を学問との関係性で捉えようとすると違和感が残るように感じます。というのも、我々が受けてきた教育カリキュラムにおいては「道徳」を独立した概念として扱っているためです。初等・中等教育において「道徳」「倫理」といった科目が他の科目と同列に存在し、それ単体として学ぶことがスタンダードになっているうえ、高等教育においても「道徳」はあくまで先行する知識の副産物程度の扱いでしかありません。したがって、ある学問において「道徳」的な視点から事象を捉えたり思索したりすることが困難になっているのではないでしょうか。（教養学部 3 年）

(3) 伊藤博文が漢学は危険であるといったように、虚学には、時の権威が、彼ら自身を脅かしかねない不都合な研究を押さえ込むために用いた概念でもあった。こうした虚学は現代においても存在するのだろうか。私は、文系の研究の多くは虚学に近い扱いを現状受けているように思う。とくに 1960 年代に急速な経済成長をとげ、資本主義神話が根強い日本においては、この風潮が強いと感じる。資本主義は、技術力の無限の向上を信仰し、前提とするような理論である。この資本主義というイデオロギーにとって、文系学問は、その存在を脅かすものである。資本主義にとってもっとも好都合な状況は、全ての人が、資本の拡大や経済成長、価値の増殖こそが幸福度に直結すると信じ、つぎの技術革命を待ち望んで、ひたすら思考停止状態で目の前の労働に没頭する、という状況である。しかし、文系学問は、多様な価値を追求するという特徴をもつため、資本主義の専制に対して、別の価値を提案し、資本主義自体を相対化することができるためだ。（文科三類 2 年）

一高プロジェクト

「藤木文書アーカイヴ」プロジェクト始動

歴史に直に触れることから

2021年6月8日

6月8日（火）12時半より、駒場博物館セミナールームにて、「藤木文書アーカイヴ」キックオフミーティングが開催された。参加者は、本ブログ報告者（宇野）、そして宇野と共に2019年春から「藤木文書」の整理に携わり、現在101号館の歴史を映像作品に表現する「映像制作ワークショップ」でも活躍する高原智史氏（EAAリサーチ・アシスタント）、同じく「映像制作ワークショップ」メンバーで寮日誌等にも関心を寄せる日隈脩一郎氏（EAAリサーチ・アシスタント）、ニューフェイスとして戦後の日中関係史を専門とする横山雄大氏（EAAリサーチ・アシスタント）、さらにこれまで展示パンフレットの執筆・翻訳などで尽力してきてくれた宋舒揚氏（総合文化研究科博士課程）の5名である。加えて顧問役として、石井剛氏（EAA副院長）、田村隆氏（総合文化研究科）、折茂克哉氏（駒場博物館）の3名が参加した。

この6月より本格始動した「藤木文書アーカイヴ」は、駒場博物館蔵の一高時代の中国人留学生に関する未整理資料「藤木文書」の目録作成、調査展示、そしてアーカイヴ化を行うことを目的とした活動である。その名称は、1943年から45年頃に一高の留学生課長であった藤木邦彦氏が所持していたと思われる資料群であることから名づけられた。縁あって、2019年春にEAAにてこの資料群の整理を請け負うこととなり、同年暮れには藤木邦彦氏のご子息・成彦氏のご厚意により駒場博物館への一括寄贈が叶った（このあたりの経緯については本誌「一高プロジェクト：藤木成彦氏インタビュー」の記事を参照されたい）。しかし翌年初めから新型コロナウィルスの感染拡大という予期せぬ事態に見舞われ、その整理・調査活動は一年ほど休止状態となった。いうなれば、駒場に長い間眠っていた戦時中の留学生資料は、再び眠りの中に戻っていったのである。

それが呼び覚まされることになったのは、逆説的でもあるが、この新型コロナウィルスという事態がもたらした大学や教育現場の意義の問い質しとともに、教師と生徒、生徒同士の関係性が形作る豊かな学びの環境への気づき、建物・キャンパス自体が担ってきたもの、それ自体が物語る歴史の価値の見直しというものであったように思われる。「藤木文書」はまさに戦局極まる時期の一高における留学生受け入れの実態を物語る原資料であり、その中には非常措置として留学生の集団疎開を行うなど、今の大学に学生がいられなくなる状況がオーバーラップするような経験を、より際立った形で示してくれてもいる。

こうした情勢の中で、この6月から新体制を整えて始まった本プロジェクトのキックオフミーティングは、メンバー同士が初顔合わせをし、目的や意義、具体的な年間活動計画を話し合う場となった。また顧問の先生方からそれぞれに貴重な助言をいただくことができた。

最初に石井氏は、一高プロジェクトの始まった経緯から本プロジェクトのEAAや駒場キャンパスにおける位置づけと意義について述べ、私たちの活動を力づけてくださった。特に印象的であったのは、アーカイヴという言葉やその方法についてより哲学的に探究していくこともできるのではないか、とおっしゃったことである。これから歴史に関与していこうとする私たちの態度そのものを問うような大事な言葉の贈り物とともに門出を言祝いでいただいた思いである。

続いて、狩野亨吉一高校長の文書類のデジタルアーカイヴ化を進める科研を主催され、これまでもEAAの一高プロジェクトにおいて大いに力添えいただいている田村氏は、この「藤木文書」が駒場で代々保管されてきた経緯に触れ、ある意図をもって引き継がれてきた資料であった可能性を示唆された。特に、一高における公文書管理の状況を鑑みるに、公式に記録・保管するというあり方自体が当時はなかったの

ではないか、と述べられた点は重要であろう。藤木邦彦は一高の正史にあたる『第一高等学校六十年史』（1939 年）の編纂者であり、その中で留学生専用の課程「特設予科」「特設高等科」にかなりの頁を割いていた。一高の公的歴史を残す意志があったとすれば、この一群の資料は一高のその後の歴史を構成する大事な一角を占めるものとして敢えて大学に残された可能性がある（これは父・邦彦氏の退職後に荷物を引き取る作業を手伝ったという成彦氏も示唆されていたことであった）。狩野文書にしろ、藤木文書にしろ、学校の公的書類が個人の保管物から発見されていることと一高の公文書管理の在り方との関係について、今後も狩野文書の科研プロジェクトと連動させながら考えていきたい。またデジタル公開の具体的方法や注意点についても助言いただいた。

さらに折茂氏からは、「資料」というものはそのままでは使うことができず、それを誰もが使える状態に整えて初めて使える「資料」になるということ、そうした「基本資料」を作ることの心得と意義を伝授していただいた。さらに、折茂氏の専門である考古学の発掘資料の保管の方法を例に、資料は出てきた状態をできるだけ尊重して保管することが大事で、その時のグループ分けの在り方を崩さずにモノとして保管し、データ上では、現在の使う人に有益な形で分類したり、備考欄で関連資料を辿れるようにしたりしておくという方法を教えていただき、目から鱗であった。

その上で、本活動の具体的な内容として、下記の 4 点を共有した。

1. 「藤木文書」を使える状態に整えるため、再整理し、新規リストを作成する。同時に、本資料の性質にふさわしいアーカイヴ化の方法も検討する
2. 一高生（できれば特設高等科生も）や当時のことを知る方々へのインタビューを行う
3. 研究発表を行うなどして資料の活用法を具体的に示す
4. 2022 年 3 月に展示を行う

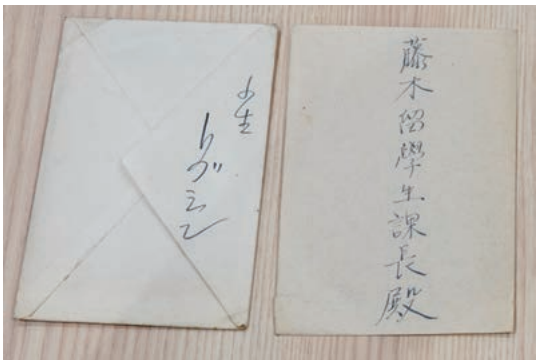
これらの作業を通じて、本プロジェクトでは、清末から始まった一高における留学生受け入れの 50 年ほどの歴史の空白期間（戦時中）を補完し、一高から教養学部に至る歴史の多角的（多声的）把握を目指したい。また、藤木邦彦の留学生課長としての役割、留学生の内訳・関係性等の解明を軸として、敗戦に至るまでの一高の留学生受け入れの実態を明らかにし、戦時下の一高における教養主義の意義とその限界についても見極めたい。さらに資料公開・展示の方法およびアーカイヴ化の方針を決め、より広い資料活用の可能性へと開くことを目指したい。以上のことを確認してミーティングを終えた。

この後、私たちは、早速に専用の撮影器具を使って資料を撮影していく作業に取り掛かった。その日初めて中性紙の封筒から当時の写真を取り出したメンバーから、静かな興奮が伝わってくる。思わず「藤木文書」に初めて出会った時の興奮を思い出した。撮影しながら、各自が気づいたことをつぶやくと、それに誰かが応答し、時々資料を読み込みながら新たなテーマを思いついたりする。それぞれが持っているスキルや知識を共有しあいながら、資料を中心に形作られていく空間、静かな活気に満たされたそうした空気感を久しぶりに取り戻した感覚があった。

戦争の激化した厳しい時代の資料である。しかし、だからこそかもしれないが、そこには確かに生きていた人たちの息遣いが感じられる。特に書簡類はその背景にあった人々の思いの遣り取りを立体的に伝えてくれるような気がする。無論、一人ひとりの留学生に関して、詳細な通信元リストが残されていることが物語っているように、書簡には検閲のあった時代である。そこで、書かれた内容を額面通りに受け取ってはいけないが、手紙がもつメッセージは、文面のみではなくモノとしても伝わるものがある。留学生がつづった文面の裏側の声に耳を澄ませることが大事であろう。

教育現場を回していくこと自体が大変な時代に、留学生たちの受け入れはより難しい局面を迎えていたであろう。そこには、いかなる制度があったのか、留学生内部での待遇の違いや制度的な違いはどのようなものであったのか、その制度の例外や変更、さらにそれを潜り抜ける人と人との遣り取りが透かし見えてくるような気がする。

資料を残した人の思い。それを託された人の思い。



特設高等科生から藤木邦彦留学生課長への手紙

101 号館の EAA オフィスに戻り、写真データの保存作業中のメンバー（右から高原智史氏、宋舒揚氏、横山雄大氏、宇野瑞木）

それを今私たちが引き継ぐということの意味とはなんだろうか。

歴史に直に触れること――そこから始めることの意義は、いま私たちがそこからいかなる歴史を汲み取り、複数の声を聞き取り、それらをもって未来をいかに望んでいくかにかかっている。

報告者・写真撮影:宇野瑞木（EAA特任助教）

一高プロジェクト

映像制作メモランダム (5)

2021年6月10日

6 月 9 日（水）に通算で 16 回目になる映像制作ワークショップが終わりました。現時点でのシナリオにもとづき、具体的な進行スケジュールの見通しが立ったところです。当日は制作メンバーにくわえて、ひさしぶりに企画立案者でもある石井剛先生（EAA 副院長）に参加してもらい、思いがけず、希望や歴史、信といったモチーフについて意見交換することができました。そうしたテーマをどのように作品において表現するのかが、今後、問われてくるだろう、と課題を共有する時間になったと思います。最後、閉鎖空間における秘密の共有と光を照らすことで秘密が失われる話になったのは、個人的にはスリリングでした。

こうやってあれこれ実際に「撮る」ことにフォーカスする 2 か月を経て実感するのは、自分が世界でいかになにも見ていないのか、見えていないのか、ということです。なにかを映像として記録に残せば、後からでも見ることができるだろう、なんて単純な話ではなくて、なにか「よく見る」ことが、「撮る」ことによってはじめて可能になるような、そんなよくわからない感覚を抱きはじめています。たとえば、地下道で閉ざされた扉を開き、進もうとするときに、扉の先を予感して「見ている」感覚を得ました。そんな自分の動きと見方は、実際にその場で、撮ることになって初めて実現した気がするし、それは、ある意味では、創られた経験でもある。

また、素朴に、「映像」と「映画」、「静止画」と「動画」の見え方が、どのように違っているのか、いい意味で、わからなくなってきました。自分が動いていると、壁も絵も落書きも動いてみえる。なににによってその見え方が変わってくるのか、たとえば地下道の見たことのない壁の染みと凹凸を見つめながら、これがなんなのかと角度を変えつつ見るうちに、時間が経過する長さに驚いたりしています。

大江健三郎の小説に「美しいアナベル・リイ」という、壮大な「M計画」と呼ばれる映画制作をめぐる物語があります。これは大江をモデルにしているだろう主人公の「私」と木守が駒場時代の同級生という設定で、むかし駒場のキャンパスで肩を並べて歩いたことが回想される場面があります。それをいま読むと、1954年、1955年頃に、彼らがここを歩いていたのかもしれない、というふうに、ただ2人の姿を思い描くだけでなく、すこしだけ、いまはもういない一高生たちの姿に重ねて想像する自分がいます。こんなふうに、よく見ずに通り過ぎていた世界があちこちに無数にあり、これからも無限に見つかるだろうことを感じる日々です。

現在、RA3名は、制作だけでなく、一高に関連する映像アーカイブの調査も鋭意進めています。自分は主にスケジューリング担当なのですが、見ているかぎり、静かにいろいろなアイディアが形を求めはじめているので、どうかこの動きの展開を楽しみにお待ちくださいい、という気持ちでいっぱいです。

報告者・写真撮影:髙山花子(EAA特任助教)

第2回 EAA沖縄研究会

神里雄大『越えていく人——南米、日系の若者たちをたずねて』合評会

2021年6月11日

2021年6月11日、第2回の「沖縄研究会」が開催された。テーマは第1回に引き続き、「沖縄からの／への移民」である。今回は2021年3月に刊行された『越えていく人——南米、日系の若者たちをたずねて』(亜紀書房、2021年)の著者・神里雄大氏をお迎えしての合評会を行った。

神里氏は1982年にペルーにて出生し、生後間もなくからの川崎育ちである。大学在学中より劇作と演出活動を開始し、2017年講演の「バルパライソの長い坂をくだる話」では岸田國士戯曲賞を受賞されている(のち先行2作とエッセイを交えた作品集『バルパライソの長い坂をくだる話』〔白水社、2018年〕として刊行された)。

当日の会は、主催の張政遠氏(総合文化研究科)、崎濱紗奈氏(EAA特任研究員)が進行役となってすすめられ。合評会との体ではあるものの、著者ご本人をお迎えしての貴重な機会ゆえ、まずは神里氏と張氏のトークセッション「『越えていく人』のもろもろのこ

『越えていく人——南米、日系の若者たちを たずねて』著者の神里雄大氏

合評会は張政遠氏と神里氏の和やかな対談からスタートした

とについて」を行っていただいた。

セッションは張氏からのコメントと神里氏からの応答を主軸にはじめられた。話の切り口は、張氏が体験し神里氏も関連する劇作を行ってきた「東日本大震災」であった。2011年頃は、神里氏にとってアルバイトをせずとも劇作で身を立てられるようになった時期、東京にすべてがあるという認識を持つようになっていた時期であったという。震災はそうした価値観から「東京のお客さん」以外を組み込んだ劇作をする転機でもあった。2011年の震災を通して感じた各種の無自覚――東京主義、移民、自意識――を結実させたのが初の国外（台北）公演作「レッドと黒の膨張する半球体」（中国語タイトル：放屁蟲）だった。同作は2016年に香港でも公演がなされ、公演の機会を通じて張氏との交わりも生まれた。

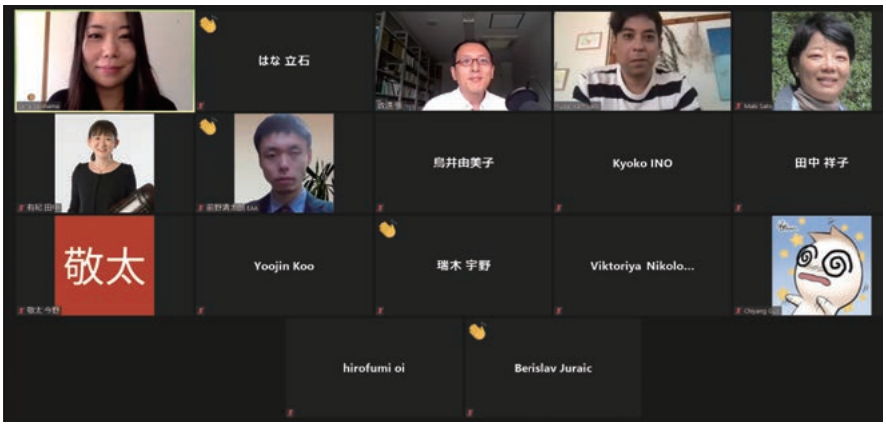
話題が広がるなかで、張氏からいくつか質問がなされた。第一は、オキナワ／沖縄についてである。大宜味村の訪問写真を交えつつ沖縄について語ってもらいながら、神里氏が幼い頃からたびたび訪ねていたはずの母方の実家・札幌の「故郷」感が消えていく一方で、沖縄を「故郷にしていっている」感覚もあることについて話してくれた。

神里氏が南米を訪ねる前に訪れたのは、漢字の（現）沖縄であったが、南米各地では括弧つきの「オキナワ」を訪れることになった。このうち本書において特に印象的な「ボリビアのオキナワ」について特に深く話してもらった。「ボリビアのオキナワ」は「沖縄ではないバージョンのオキナワ」（本書p.227）であり、訪ねてみた感覚としては存外に（現）沖縄的ではない「オキナワ」であった印象が大きかったという。そうした（現）沖縄と異なるオキナワをみていくなかで、神里氏は「ウチナーグチ」に代表される「ことばのありのままの保存」にこだわることでむしろ漏れてしまうものがあるのではないか、との感覚を持つようになっていった。すなわち、「ことば」はあくまでコミュニケーションツールであって、「ことば」と「ことば」の使い手の生きる文化・身体・慣習との交わりのずれから新しく生まれる面白味があるのではないか、と劇作家として思えるようになったのだという。

第二の張氏からの質問は、移民と「故郷」についてだった。『新潮』掲載の小説「亡命球児」（2013年8月号）のなかで描かれた、亡命元で「亡命書類」を書き人々が申請のための長蛇の列を作っている、というアイロニカルな小説中のシーン（通常は亡命先で書くはずであるから）を引いて、神里氏の考える「亡命」のモチーフについて質問がなされた。神里氏は、それは震災直後の今ある場所から離れた「かった」という当時の自身のイメージの反映ではなかったか、と話した。改めて考えてみれば、それは逃げた先の苦労の想定なしに今ここから離れたい、との心境であって、現在はやや異なる考えであるという。2013年当時は震災が全てを変えた出来事のように思っていたが、それは変化の最後のスイッチであって、現在は東京の今ここ、にあることも受け入れていると話した。

最後の第三の質問は、「血」についてである。現在なお「気にしだすとイラッとする」処理できなさを神里氏は語ってくれた。一方で、「ぼくは血のことを聞かれるのが嫌だった。でも本当は血のことを聞かれるのが嫌ではなくて、その質問が自分の体内の歴史を否定されてでもいるように、感じる」（本書p.301）と「〇〇人よりもまず自分は地球人、みたいな言い方があるが、どこで育ち、どの言語を獲得し、どの地域・国の意識や価値観を元にするかで、その人を形成する要素は違ってくる。……世代を追うごとに彼らの「日本人としての意識」はその範囲が広がっていき、同時に我々「日本人」の鏡となっていく気がする。」（本書p.292）とあるような並立があるのではないか、とトークセッションは一旦結ばれた。

フロアとの意見交換はトークセッションと連続して行われた。やはりセッションで一つの焦点になった血や



自意識の問題について多く意見が交わされたもののように思う。立石はな氏（EAA 特任研究員）は自身のアメリカ渡航直後の経験――アメリカからカナダへの移動の途中、白人系夫妻がアジア系の子供について「養子なんだ」とフランクに話していた光景――に受けた衝撃を語ってくれた。立石氏は「「血がつながらない」ことは隠さなくてはならないものなのか？」、と疑問を抱いたという。神里氏からは南米・欧州にあって体験したより露骨な形での「血」にまつわる差別を挙げつつ、南米・欧州にあって「血がつながらないこと」が日本より受け入れられているとは思わないが、家族（イエ）に対する考え方を改めて捉えなおしてみる意義についての応答があった。

「血」をめぐって思い出さざるをえないのは、すでに 10 年以上の前のことになるが、報告者が台湾の地方の町の老人会を継続的に訪ねていたころの記憶である。あのころまだ多くの「国語家庭」（家庭内での日本語使用を奨励する運動）の子弟の方々が生きていた。ほとんどの方が鬼籍に入られてしまったけれども、古風ながら流麗な日本語を話し、俳句を嗜み日本歌謡に涙を流す彼・彼女らは私よりも濃厚な日本人性を持っていた。ごく小さいコミュニティであったから、そのなかでは日本姓を使う人もいた。「血」かアイデンティティかをめぐる議論は古い議論であるが、そのいずれか、を突き詰めることには残酷さを伴う。

田中有紀氏（東洋文化研究所）は「ことば」に関連して思い出した感覚として、二つの言語的身体を持てることに過去抱いていた「あこがれ」について語ってくれた。中国語を教え・学びながら多元的ルーツをもつ人々と出会い、当事者からはその多重性ゆえの苦悶はたしかに耳にするのだが、日本語的なベースで中国語を、中国語的なベースで日本語を行き来できるありかたに「あこがれ」をやはり感じてしまうのだ、という。理解できるどちらの言語でも「完全に表現できない」との感覚は往々に苦しみ（ダブル・リミテッド）となりがちであるが、それを神里氏が伝えるずれから新しく生まれる「面白味」ととらえなおしていくことも可能なのではないか。最後に、進行の崎濱氏から、さまざまな文脈が結び付けられた「ことば」を各々自身の意思によって結びなおすことで開かれる可能性について、それにより神里氏の著書でも触れられている「日本語をひらく」ことについての展望が述べられ散会となった。

報告者:前野清太朗（EAA特任助教）

学術フロンティア講義「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」

第9回　人種･民族についての悪い理論

2021年6月11日

2021 年 6 月 11 日（金）、第 9 回学術フロンティア講義がオンラインで開催された。講師はロシア・ユダヤ史が専門の鶴見太郎氏（総合文化研究科）で、テーマは「人種・民族についての悪い理論」であった。生物学的に不変の身体的特徴を同じくする人間集団としての「人種」、文化的特徴を共有し、ある程度同族意識を持つ人間集団としての「民族」は、どちらもそれに対応する現実が実体としてあるわけではない、「いい加減」な概念である。しかし、そうしたものが信じられることから、歴史を通して確固とした現実が作られてきたこともまた事実である。それゆえ、人種や民族の概念を虚妄だとして単に批判するのではなく、それらが具体的な環境の中でどのように機能してきたのかを問わなければならない。このような基本的視座から、講義は展開された。

人種・民族概念の歴史

そもそも、人種・民族は近代になって生み出された概念である。講義では、前者についてはゴビノー『人種不平等論』（1853-1855）、チェンバレン『19世紀の基礎』（1899）、後者についてはヘルダー『言語起源論』（1772）、フィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』（1807-1808）に言及しつつ、それぞれがフランス革命の平等理念や啓蒙思想の普遍主義への対抗として提起された経緯が説明された。また、戦前の日本では、白人中心主義に反対して人種間の平等を求める動きもあった一方、高田保馬『民族論』（1942）に見られるように、日本の膨張主義政策と適合的な、極めて流動的な民族概念が語られたことも紹介された。

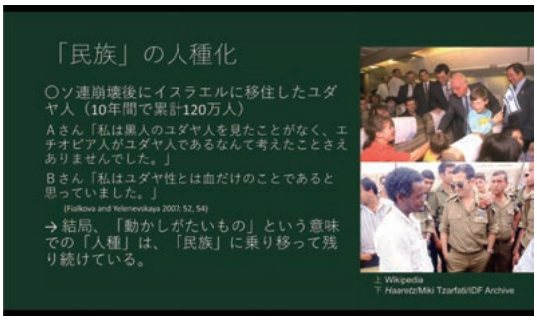
鶴見太郎氏（総合文化研究科）

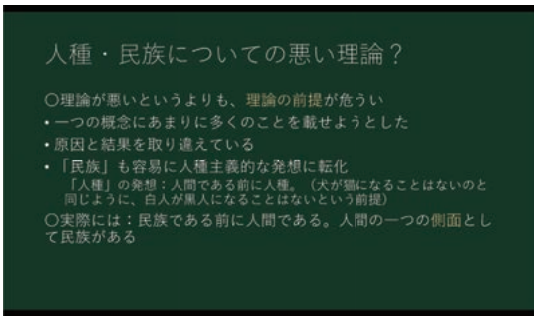
ソ連のユダヤ人の場合

概念が状況に応じて異なった意味を担うことは、鶴見氏の専門に関わるソ連のユダヤ人をめぐっても同様である。ソ連崩壊前後、約 120 万人のユダヤ人がイスラエルに移住したが、その動機はソ連の経済的・政治的混乱からの逃避が主であり、しばしば語られるようなシオニズム運動的性格は希薄であった。その背景として鶴見氏は、生活上ロシア人と同化していた都市部のユダヤ人において、多民族国家ソ連の一部として制度化されていた「民族」は、実質的には文化と関係のない「人種」的なものとして意識されていたことを指摘した。移住者の中には、自分とは異なる肌の色のユダヤ人を想像したことのなかった人もいたという（スライド参照）。結果的に「ユダヤ人」という単位で多くの人が動いたとしても、その動きを「民族」によって一括して理解するのは表面的であり、彼ら一人ひとりにとってユダヤ性がいかに意味づけられていたのかを問う必要があるのである。

個人の一側面としての民族

「人種・民族についての悪い理論」があるというよりも、むしろ人種・民族に基づく理論全般に警戒する必要がある。最後に鶴見氏は、民族をあくまで多面的な個人の一側面として捉えること、またマクロレベルの民族的現象を、個人の諸側面と同居する民族性





講義スライド抜粋2。Fialkova and Yelenevskaya, Ex-Soviets in Israel: From Personal Narratives to a Group Portrait. Detroit: Wayne State University Press, 2007 からの引用

というミクロレベルの現実と混同しないことの重要性を強調し、講義を締めくくった。

質疑応答では、社会主義国における民族概念と階級概念の実体化の諸相や、民族の実体性の否定可能性の程度などをめぐり、活発な議論が交わされた。

報告者:上田有輝（EAAリサーチ・アシスタント）

リアクション・ペーパーからの抜粋

（1）本講義の結論であった「人種をあくまで一つの側面として見るべきだ」、「人種という一側面と他の要素との連関を考えるべきだ」といったような主張は、語弊を恐れずに言えば当たり前のことだと感じた。こうした主張をいざ聞けば、殆どの人がそれに同意するだろうと思う。しかし、問題の所在は、それらの人が無意識のうちにこの主張に反する思考を行い、ステレオタイプに嵌った判断を下してしまっている現実である。つまり、授業やセミナーで受け取れるような「当然」の結論と、人間の日々の思考の結果には溝があり、学問は概してこの溝を乗り越えることに失敗することが多いと感じる。

この溝を乗り越えるには、人々の日々の生活に直接関連するような啓蒙が必要であると思う。たとえば、今回の人種・民族について啓蒙を行うなら、つい最近ニュースになったような事件を取り上げて、「この事件について皆さんは（人種・民族というラベリングのせいで）こうした思考をしてしまってはいないだろうか」というような形で問題提起をする。これによって、聴衆は日常において犯してしまっていた短絡的思考を反省し、ステレオタイプから脱出する経験を得るのである。こうした、知識だけではなく経験も与えられる啓蒙が、真の問題解決につながると考える。（教養学部3年）

（2）今回の講義が終わってから私の中に残った疑問は人種と民族という概念はどのように異なるのだろか、ということだった。確かに定義の上では、そしてヒトの分け方では両者は明確に異なっている。人種は遺伝的形質や身体的外見で区分がなされ、民族では文化や人の主観的なものによって区別される。しかしながら、逆に言えば両者には区別方法において差異があるだけで、使い方によっては善くも悪くもどうにでもなるように感じている。このことは鶴見先生も「民族」の「人種」化という風に表現されていたが、ここでは民族や人種といった概念をより一般化させて「属性」として考えると、人の属性を他のもの（言語・宗教・経済活動・文化・嗜好など）と結びつけて、固定的に捉えてしまうと偏見や誤解を生じさせてしまう、ということが言えるのではないだろうか。そしてこの結びつけは学問においてしばしば行われていることではないだろうか（もしくは人間としての性質？）。前学期を思い返してみると、政治学では投票行動を分析する方法の一つとして政党

支持者の属性分け（たとえば共和党支持者は白人の低学歴者層など）が行われていた。社会心理学では実験結果において見られる国民性が紹介されていた。ここでは共に個人差の存在を留保しつつも、やはり属性との結びつきを行っている。このこと自体が有害なものだとは思えないが、それでもやはり「個人差」というものにも気を配らないと、いかなる属性に対する分析も悪用が可能なのではないだろうか。（文科三類 2 年）

(3) 自分は日本人なのだが、社会心理学の授業などで日本人の傾向を紹介される時など、それが自分にどれほど当てはまりそうなものかとは無関係に、日本人という括りで話をされることに違和感を感じることがある。そうした言説は、それ自体では統計的に意味のある違いを表してはいるが、そこで抽出されている日本人という「側面」を自分の中でどう位置づけるのかを考えることで、そうした括りで語られる言説との距離を適切に保つことができるだろうと、今回の授業を聞いて考えた。（文科三類 2 年）

新作能「沖宮」視察

――石牟礼道子原作の能舞台を見て

2021年6月12日

2021 年 6 月 12 日（土）、京都市内の金剛能楽堂で開催された石牟礼道子原作の新作能「沖宮」夜公演を視察した。「沖宮」は、染織家の志村ふくみ氏が 2011 年以降に石牟礼道子と交流する中で生まれた作品である。東京大学東アジア藝文書院（EAA）の石牟礼道子を読む会では、今年度に入ってからは、『苦海浄土』以外の石牟礼のテクストにもとづく参加者の自由発表を進めるいっぽうで、中近世文学や説話表象を専門とする宇野瑞木氏の導きのもと、浄瑠璃のような語り物をはじめとする古典芸能と石牟礼の関係を探りつづけている。先月には、「不知火」の DVD 観賞会を行い、原作がどのような謡曲に仕立てられたのか、高橋悠介氏と倉持良子氏によるレクチャーを受けた。兵藤裕己氏による、最後の琵琶法師、山鹿良之の記録映像の解説・観賞会を控えたタイミングで、じっさいの舞台を見るチャンスが得られたのはありがたかった。

「沖宮」は、島原の乱のあと、干ばつのつづく天草で、雨乞いのために、龍神に少女あやが人身御供として捧げられる物語である。『石牟礼道子全集・不知火』第 16 巻収録の台本との異同や、初演時に「竜神」を登場させたのとは異なり、新しく「大妣君」という役が導入され、この存在が天草四郎とあやを海底に連れゆく設定になった翻案のプロセスは、石牟礼のテクストを詞章に変えてゆくプロセス同様、そのつど作品がどのように更新されてゆくのか、その動きをもっと詳細に知りたいと思わされた。だが、舞台を見、もっとも感じられたのは、すぐそこの舞台上の動きが、舞のときの衣装の動きや光の照り返しの変化で、こちらに風のように伝わってくる感覚だった。そして、この「沖宮」が、どんなに陰影の美しさを湛えていても、この世のむごさと犠牲の物語である残酷さであった。舞台の途中で、緋色の長絹「紅扇」に着替えたあやは、能面こそしていないが、天草四郎や大妣君とおなじく艶めく衣装を纏うことで、異界のものになりつつあることが視覚的にはっきりと伝わってきた。座席数が半減

された能楽堂で、生死のあわいを観客は垣間見た。彼女らが舞台から去り、姿が見えなくなった先でも、彼女らが沖宮への道を進んでいることが思われた。

前奏曲としてフランクの「アヴェ・マリア」とともに、石牟礼道子作詞、佐藤岳晶作曲の「黒髪」と「アニマの鳥」が歌われたことからも、石牟礼の言葉は、小説に限定されない文学の可能性を差し出していることが痛感された。世界文学をもっと柔軟にいくつもの角度から考えたい、と素朴に思わされた。そのために、昨年、どのように石牟礼の言葉を繰り返せるのか、という問いが浮上したことを改めて思い返している。東京に戻ってから反芻しているのは、はじめの挨拶で、実行委員長代表の志村昌司氏が、ひごろの機織りの仕事について、心の原風景を織っている、と述べていたことである。それは、心の原風景のコピーをつくるのということではまったくなく、原風景そのものとして布を織り上げる、ということだったと思う。『椿の海の記』に描かれている機織りの音を思い返しながら、声的な意味でも文字的な意味でもテクストを編む一学徒として、これからどんなことができるだろうか、と考えている。当日の上演 DVD を後日入手次第、石牟礼道子を読む会のメンバーで、鑑賞し、議論する機会を必ず設けたい。

報告者・写真撮影:髙山花子(EAA特任助教)

第2回 東アジア仏典講読会

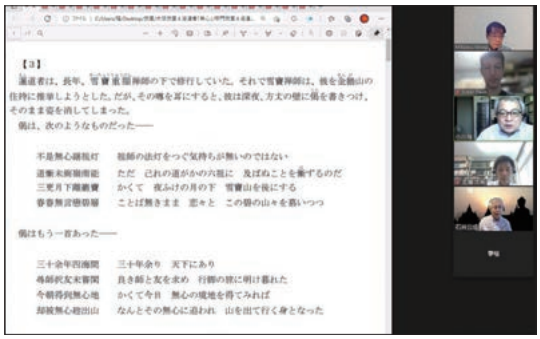
2021年6月12日

2021 年 6 月 12 日（土）日本時間 14 時より、第 2 回東アジア仏典講読会を開催した。この読書会は、禅を中心に仏教の研究を行っている日本・中国・韓国・フランスなど各国の研究者が集い、文献の会読や研究発表・討論を行うものである。

今回は小川隆氏（駒澤大学）による『大慧普覚禅師宗門武庫』第四段「暹道者」の講読とそれに基づく議論が行われた。当該の一段には「嗣法」に関する暹道者の逸話が記されている。

「嗣法」とは「法を嗣ぐ」意であり、禅宗では歴代の祖師により釈尊の法（真理）が代々継承されてきたとされる。禅僧は各地を行脚して法を伝える各地の禅師に参じ、開悟を経て一寺の住持となる際に自ら嗣法の師に対し報恩の香を焚き、それによって自身の嗣法関係を決定・公表することになっていた。師承関係の決定権は師でなく弟子の側にあったのである。

『武庫』に記される一段によれば、暹道者は長らく雪竇重顕のもとで修行していたが、その後継者と目されるや二首の偈頌を壁に書き付けて出奔し、晩年に開先寺に住するにあたり徳山慧遠を嗣法の師として香を焚くとともに、その旨を伝える書簡を雪竇に送った。雪竇の門前の婆子は暹道者が徳山に嗣法したことを聞くや、その不義理を詰ったという。婆子は禅籍において、無名ながらも禅僧顔負けの力を具えた者として登場するのが常であり、当該の一段においても禅門の本義を代弁、更には雪竇側の輿論を代表する役割が担わされている。雪竇重顕と徳山慧遠はともに雲門宗の禅僧であるが、雪竇は 70 余人もの法嗣（嗣法の弟子）を輩出し、後に雲門宗中興の祖と尊称されたのに対し、徳山の法嗣は 10 人にも満たない。通常なら、一門の名望や権勢を顧慮せずそもそもの開悟の師の法を嗣ぐことは称賛されるべきことであるが、この故事が暹道者が雪竇の法を嗣がなかったことを非難する婆子の言葉で結ばれていることは、おそらく雪竇山側の不満を表現するものであり、と同時に、暹道者に対する評価と期待が本来いかに高かったかを反面から



示すものともなっている。小川氏は、他の事例を挙げて、禅僧の嗣法においては、「誰の法を嗣ぐか」ではなく「誰の法を嗣がないか」ということに意味がある場合があることを指摘しつつ、暹道者にとっては雪竇の法嗣という権威ある輝かしい地位は受け容れがたいものであったろうという解釈を示した。

参加者による議論では、暹道者が書き残した偈頌の解釈や詩の格律・修辞などが取り上げられた。また後に日本の禅宗で有名となる釈尊成道の語「明星出現の時、我と大地有情と同時に成道す」が元は徳山慧遠の語であることが指摘されるとともに、中国ではこの語が殆ど注目されなかったことなども確認された。

禅籍は禅問答に代表されるように簡潔かつ難解な表現が多く、その読解は非常に困難である。本講読会には、禅宗史・仏教学・中国文学など様々な専門分野の研究者が参加しており、今回もそれぞれ独自の視点から様々な議論が為された。一つの文献を前に参加者が各自の知見を寄せ合いつつ、新たな読みを摸索していくことは会読の醍醐味であるし、新たなリベラル・アーツの可能性を模索するうえで重要な基礎となるものと考える。

報告者:柳幹康(東洋文化研究所)

第19回 石牟礼道子を読む会

《企画》座頭と瞽女の説経(節)の語り――兵藤裕己氏をお迎えして

2021年6月15日

2021年6月15日(火)15時より、EAAセミナールームにて第19回石牟礼道子を読む会が開催された。石牟礼と古典をテーマとした特別企画の第2弾として、兵藤裕己氏(学習院大学名誉教授)をゲストに迎え、「座頭と瞽女の説経(節)の語り」と題した講演を頂戴した。そして、兵藤氏の解説のもと、最後の琵琶法師と言われる山鹿良之氏(1901-1996)による「刈萱右童丸」の1時間弱の記録映像の観賞会を行った。司会は宇野瑞木氏(EAA特任助教)が務めた。読書会メンバーの鈴木将久氏(東京大学)、佐藤麻貴氏(EAA特任准教授)、山田悠介氏(大東文化大学)、宮田晃碩氏(EAAリサーチ・アシスタント)、建部良平氏(東京大学大学院博士課程)、報告者の高山花子(EAA特任助教)に加えて、野田研一氏(立教大学)、高橋悠介氏(慶應義塾大学)、倉持長子氏(聖心女子大学)、川上佳風氏(学習院大学文学部4年)、それから撮影のために、小手川将氏(EAAリサーチ・アシスタント)が参加した。

はじめに宇野氏より、兵藤氏のこれまでの仕事が、論考の中でユージン・スミスの写真集『MINAMATA』に言及のある『語り物序説――「平家」語りの発生と表現』(有精堂、1985年)から、DVD付録のついた『琵琶法師――〈異界〉を語る人びと』(岩波書店、2009年)等をへて、近著の『物語の近代――王朝から帝

当日の講演会はハイブリットで開催された

国へ』（岩波書店、2020 年）に至るまで、一貫して「声」による語り物と共同体についてのものであり、それが、石牟礼道子のテクストにすくなくない頻度で現れる瞽女のイメージや浄瑠璃への依拠の背景に近づくための鍵になると考えられて今回の企画実現に至った経緯が述べられた。

兵藤氏は、1980 年代にかなりの頻度で九州に赴き、中世以来の説経節の伝承について実地調査を重ねてきたという。九州各地の座頭（盲僧）について、自身で撮影した 100 本近くのビデオ映像は成城大学民俗学研究所に寄託されている。各地で採録される唄い物の特徴や異同をつきあわせるなかで、上方・江戸の説経正本が地方で伝播したという考えでは到底説明のつかない伝承の実態に迫ってきた兵藤氏のライフワークの凄みが感じられる時間であった。

今回、上映のために選ばれた、山鹿氏による「刈萱（かるかや）石童丸」は、行方不明の父を訪ねて主人公が高野山へと旅する物語である。1989 年 3 月 16 日に山鹿氏の自宅で録音された記録映像を、兵藤氏自身によって作成された翻字資料と照らし合わせながら視聴して一同に痛感されたことの一つには、いかに言葉の繰り返しが多く、そしてそれらの即興性が高いか、ということだっただろう。兵藤氏は、冒頭での解説で、ホメロス研究者であるミルマン・パリーによって導かれた叙事詩の口頭的構成法（oral composition）とオーラル・フォーミュラ・セオリー、その影響を受けた山本吉左右による瞽女唄の分析を紹介していたが、視力を喪失した者が声によってそのたびごとに創り上げるものがたりの世界が映像をとおして体感されたように思われる。

質疑応答では、目が見えないものにとっての風景とイメージがどのようなものであるのか、聞き手の反応によってパフォーマンスにどのような変化が生じるのか、など、さまざまな議論が交わされた。兵藤氏が持ち運び可能な VHS で撮影を開始したのが 1988 年であるため、それ以前の記録はなく、何十種もの語り物のレパートリーを自在にそのつど語っていた山鹿氏の技芸が極みに達していた時期の演奏は、録音にも残っていないという。長さについても、今回視聴したのはかなり短い部類のものであり、往年は、一日一段単位で語りが 1 週間かけて行われることがあったという。メディアの変化と連動するように記録されずに忘却されてゆくものがつい数十年前まであったことに思いが馳せられた。

振り返って、興味深かったのは、議論において、石牟礼道子が自己と他者の境界の淡い語りを書いていることを、泉鏡花の初期作品「化鳥」（1897 年）と比類させる流れがあり、また、兵藤氏によって、作家の松浦寿輝氏の小説『人外』（講談社、2019 年）への目配せがあった点である。これまでの会の集まりでは、反復というテーマに加えて、自然や、人ではないものとのコミュニケーションが話題となっていた

が、文字によらない声のパフォーマンスにある種の文字の文化の影響を受けた人たちのフィードバックが働いている可能性だけでなく、そこにはさらに、必ずしも人間とは限らないものの存在の働きかけがあり、それらが融和した結果、誰の語りなのかわからず、主体、という用語で説明することそのものに再考を迫るような形で、しかしそれでもなお、コトバが生成していることについて、大きなヒントが与えられたように思う。状況の制約がなければ夜通しでも聞いていたい刺激的な話であり、閉会が惜しまれた。兵藤氏には、貴重なお話を惜しみなくいただいたことに心から感謝したい。今回のイベントの内容については、後日、EAA ウェブサイトにて映像アーカイブとして公開を予定している。

山鹿氏の生誕 120 年、没後 25 年を記念して、来月 7 月には浅草にて、浪曲と肥後座頭琵琶の演奏とあわせて、長編記録映画『琵琶法師山鹿良之』（青池憲司監督、1992 年）の特別上映が行われる。9 月には別の関連ドキュメンタリーの上映会を企画しているが、兵藤氏も映り込んでいるというこの映像も見た上で、夏以降、さらなる議論を行い、思考を進めたい。

報告者・写真撮影：髙山花子（EAA特任助教）

東アジア教養学「世界歴史と東アジアⅢ」

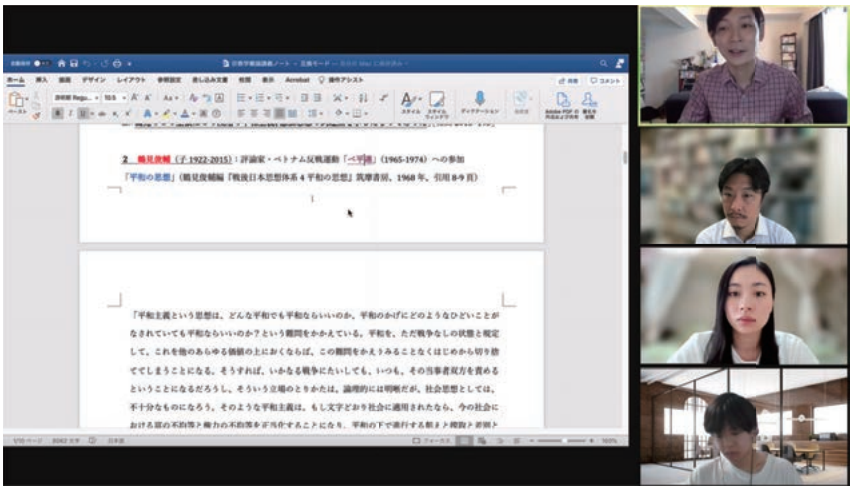
鶴見俊輔『戦時期日本の精神史：1931～1945年』を読む

2021年6月15日

中江兆民『三酔人経綸問答』、幸徳秋水『廿世紀之怪物 帝国主義』に続き、今学期の東アジア教養学「世界歴史と東アジア III」の授業で、近現代日本の「古典」として 3 冊目に選んだのは鶴見俊輔『戦時期日本の精神史：1931 ～ 1945 年』（岩波書店、1982 年）である。戦後に書かれた戦中の本としてひとつの橋渡しになるのに加え、ある人物をあいだに挟めば、系譜的にも繋がる気がしたのである。

その人物とは石川三四郎である。諸宗教の影響を受けつつ職業的宗教家からは距離を取った石川は、自分の葬儀には宗教家を呼ばないようにと遺言した。この点が中江兆民に似ていなくもない。幸徳秋水とは『平民新聞』でのつながりがあった。幸徳秋水は大逆事件で死刑になり、大杉栄は関東大震災直後に殺されたが、同じくアナキズムの系譜に連なる石川は生き延びる抵抗を組織した。大逆事件のあと日本を脱出して欧州に亡命生活を送り、後年アナキストの地理学者エリゼ・ルクリュの著作を日本語に訳した。そのような石川を鶴見は高く評価している。『戦時期日本の精神史：1931 ～ 1945 年』でも、「明治後期の最初の社会主義者の生き残りであった無政府主義思想家」の石川が、戦時の著作でも国策に同調しなかったことが触れられている。

後藤新平の孫、鶴見祐輔の長男として生を享けた鶴見俊輔は、若い時期に「不良化」した。文部省の教育方針に自分を合わせることができず、日本を脱出してハーヴァード大学に学んだ。日米開戦後、アナキストの容疑で逮捕されて監獄で卒論を執筆、戦時交換船で帰国すると海軍の軍属として南洋に送られた。仕事には慰安所の設置もあり、「日本人であることをぬぎすてたかった」というが、自分の考えを表明しないことで生き延びた。戦後、『思想の科学』を舞台にアメリカ・プラグマティズムを紹介する一方で、戦争体験から戦後社会をとらえる方法を摑み出そうとし、「転向」現象や大衆文化の研究に従事した。ベトナム戦争に際しては、反戦運動に加わり、国家を超える市民のつながりに注目した。そのような鶴見が、1979 年から 1980 年にかけてカナダ・ケベック州のモ



ントリオールに滞在し、マギル大学での英語による講義をもとにした本が、『戦時期日本の精神史：1931～1945年』である。

「十五年戦争」という呼称の提唱など、本書で展開される日本の戦前・戦中をとらえる認識枠組みに今日の私たちが負っている部分は小さくない。転向の諸相を描き出す鶴見の視線は、もちろん批判的だが共感的なものも含んでおり、あるイデオロギー的な立場から断罪するものではない。今では物珍しくもないかもしれないが、あまり有名ではない人びと、普通に暮らす人びとに注目しての叙述も印象的だ。朝鮮や沖縄への眼差しや市民運動への着目は日本の鎖国性を揺さぶる。

本書で取り上げられるトピックが多様であるぶん、参加者の議論の展開も興味深かった。1人の参加者は、戦前の日本で左翼を弱体化するのに用いられた転向の手法は、植民地時代の朝鮮半島においても用いられたことを紹介してくれた。その手法は、朝鮮戦争を経たあとの韓国でも受け継がれ、北朝鮮を牽制する目的で使われたという。「かくし念仏」の研究を志している参加者は、本書の「非転向の形」の章で岩手県の和賀（岩崎）のかくし念仏が紹介されていることから、この「地下信仰」についての内容を掘り下げてくれた。そして、地域的に限定された現象を、広い視野に置き直すためのヒントを得たようだった。もう1人、戦後日本の平和運動に関心のある参加者は、自衛隊の海外出動はしないことを決議した1954年の国会で父・鶴見祐輔が戦後の日本人は「平和愛好国民」であると演説したことを紹介した。そして、ベ平連に参加した息子・鶴見俊輔の「動的な平和観」と比較した。

「小国」の観点から普遍を問いなおす企てにおいても、鶴見俊輔は鍵になりうる人物である。彼はモントリオール滞在中に北米先住民モホークの居留地を訪れようとした。道中、米国領を通らなければならなかったが、ヴィザを持っていないので目的地にたどり着けない。戦前の逮捕歴のせいもあるのか、戦後に米国政府からヴィザ発給を拒まれたことが鶴見にはあった（結局彼がこの国の土を再び踏むことはなかった）。そこで族長たちが国境を越えて会いに来てくれた。彼らは「英国から渡ってきた白人にくにを奪われたが、自分たちのくにがそれで終わったと思ってはいない」。鶴見は「大国」批判の「小国」贔屓という類型の戦後知識人の1人である。

鶴見はアメリカに二つの姿を見ていたと言えよう。帝国主義的な戦争国家のアメリカと、抑圧の経験から自分の権利を見出していく活力をもったアメリカの市民社会の人びとと。そして戦後の日本にも、前者に同調する姿と、後者に連なる一群の人びとの姿とを見ていたのだろう。日本の外に出て日本を相対化して眺めることのできた鶴見は、アメリカが日本の「外」ではなく、日本もアメリカも「内」であると見える地点に立っていた（『期待と回想』〔晶文社、1997年〕）。

『戦時期日本の精神史：1931～1945年』岩波現

代文庫の「解説」を執筆している加藤典洋は、マギル大学で鶴見の英語の講義を聴講していた1人である。「この人と会うことで、自分はやはり完全に変わった」とまで加藤は述べている（「ヒト、人に会う――鶴見俊輔と私」）。日本帰国後に「アメリカの影」で文壇デビューすることになる加藤の物の見方には、北米経験によって培われた部分もきっと少なくない。『北米体験再考』は鶴見俊輔の本のタイトルだが、加藤典洋が同じタイトルの本を書いたとしたら、鶴見俊輔が大きな位置を占めたのではないだろうか。

「日本の外に出て日本を相対化して眺めることのできた鶴見」と書いたが、彼は自分が内側に抱えている歪みを突き詰めた果てに、普遍的な価値を見出そうとする志向性も備えていた（「根もとからの民主主義」1960年）。これはおそらく加藤典洋が『日本という身体』において、「日本的なるもの」に対して批判的視座を得るには、外部へと逃れるのでは不十分で、内側に落ちきって出ることが必要だと述べていることに通じる。『日本という身体』は昨年度の「世界歴史と東アジアIII」読んだのだが、実は当時の受講生にここのくだりの意味を尋ねられ、なんとなくわかるようで、よくわからなかったのである。鶴見俊輔と重ねて読み直すことで、少し理解を深めることができたように思われる。

報告者:伊達聖伸（総合文化研究科）

学術フロンティア講義「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」

第10回 清末中国のある思想家の憂鬱――章炳麟の「進化」論批判

2021年6月18日

2021年6月18日（金）、10回目となる学術フロンティア講義がオンラインで行われた。今回の講師は、東アジア思想史・文学を専門とする林少陽氏（香港城市大学）で、講義題目は、「清末中国のある思想家の憂鬱――章炳麟の「進化」論批判」であった。

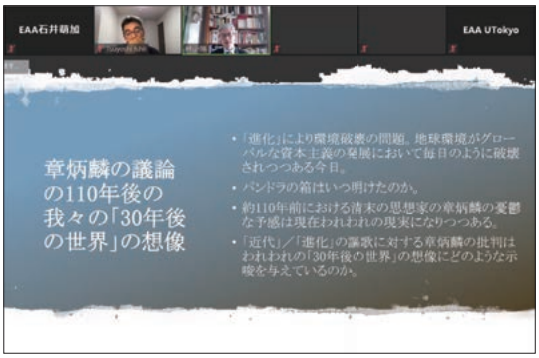
章炳麟について

章炳麟（1869-1936）は、1911年の辛亥革命の理論家である。仏教と老荘思想に基づく思想により西欧思想と対峙し、帝国主義や植民地主義を批判した。東京で発行された革命団体の同盟会機関紙『民報』の主筆も務めていた。『民報』発行期であった1907年には、弱小民族を解放し、帝国主義に反対してアジアの連帯を掲げた連合である「亜洲和親会」を設立する。

章炳麟の「進化」に対するユニークな批判

章炳麟は、ヘーゲルからスペンサー、ダーウィンに連なる西洋の「進化論」を批判した。1906年9月に『民報』に掲載されたエッセイ「倶分進化論」では、人類が無限に進化すると考える西洋の進化論に対抗し、

林少陽氏（香港城市大学）



進化は一方の直進ではなく双方の並進によるものであると主張した。善が進化するならば悪も進化し、楽が進化するならば苦も進化するという。章炳麟は、善悪・苦楽の並進を解くことで、進化論の楽観的な構図を批判したのである。

さらに彼は、少数派・弱者への圧迫や束縛を正当化する「四惑」(公理、進化、唯物、自然)の一つとして進化を位置づけ、進化による個人の抑圧を批判し、個人の自由を主張した。

個人を尊重する章炳麟の思想は、国家や民族主義に対する彼の考え方にも通じる。章炳麟によれば、個体にこそ「主体」があり、国家は幻にすぎない。そして愛国心は、強国にはあってはならず、弱国ではなければならない。なぜなら、弱い国の人は愛国心を持たなければ、帝国主義に侵略されてしまうためであるという。「完璧な民族主義」とは、弱いものに対する同情に基づく国際主義でなければならないという章炳麟の思想が反映されている。

章炳麟の議論から、110 年後の我々が「30 年後の世界」を想像する

以上のように章炳麟は、西洋的な帝国主義・植民地主義への対抗として、国家や団体の主権を主張するのではなく、アジア民衆の「自主」や個人の「主権」を主張した。総括として林少陽氏は、約 110 年前の章炳麟の憂鬱な予感は、現在、我々の現実になりつつあると述べ、「近代」や「進化」に対する章炳麟の批判は、我々の「30 年後の世界」の想像にどのような示唆を与えてくれるのか、という問いを投げかけた。テクノロジーの発展こそが軍事力を意味してしまうことの怖さや、国家中心的な考え方に関する問題、「進化」による環境破壊の問題などが挙げられ、活発な質疑応答へと続いた。

報告者:石井萌加(EAAリサーチ・アシスタント)

リアクション・ペーパーからの抜粋

(1) 本日の講義では現代、そして 30 年後の世界を考えるにあたって非常に示唆的な論点がいくつも示されましたが、その中でも特に国家のあり方に関する議論が印象に残りました。

章炳麟の国家に対する姿勢は、講義の途中でも指摘された通りハンナ・アーレントの nation state に関する議論が想起されるところがある一方で、おそらく帝国主義の侵略の只中にあったからこそ生まれ得たのであろう弱国と強国の区別、それぞれにおける「国家」の意味づけの違いというユニークな部分も備えている点が非情に興味深かったです。そして、「愛国心を持ってはならない国」の存在を考えた時に、では 30 年後の国家のあり方として、いったいどのような形が考えられるのだろうか、という問いが浮かびました。

一つには、講義後の議論で質問者の方や石井先生がおっしゃったような、福利や再分配を主たる役割とす

る互助的なあり方があり得るかもしれませんし、また一つには、EU のようなより大域的でゆるやかな繋がりに吸収されていくという可能性もあるかもしれません。いずれにしても、世界的なパンデミックに対して協調して向き合うどころか、ますますナショナリズムが肥え育つような現代の国家のあり方は、まさに「持つべきでない」愛国心に振り回され、すでにその限界を露呈していると言わざるを得ない状態であり、新たなあり方を探るべきステージに達しているのは明らかです。そのような意味で、国家のあり方というのは、まさに、30 年後の世界のあり方を決める一つの重要なファクターになってくると思われます。

昨年のこの授業で羽田先生が指摘された「「地球市民」としての帰属意識」の醸成という問題も意識しつつ、この問題を考えていきたいと思います。（教養学部 3 年）

(2) 授業後「倶分進化論」を軽く読みました。章炳麟が革命家であることを割り引いてもなおその言説の鋭さや勢いというものを感じました。一方で、善と悪を双対的で並進すると捉えることに対しては、検討する余地があると考えます。どの段階においても善と悪がゼロサム的であるとするならば、段階を進める意義が薄れてしまうのではないか、ともすると、未来に対する諦念が生じてしまうのではないか、との懸念を抱きます。ある種、比較的段階の進んだ側――“文明的”な側――だからこそ、このような見解が生まれているのではないか、と思います。そうであるならば、「弱い」側に対する視点が欠けており、結局は「進化論」を抜け出せていないのではないかと感じます。（教養学部 3 年）

(3) 章炳麟による進化論に基づいた社会の進歩主義的な見方への批判や、国家や共同体といった幻想を自明視しすぎないという姿勢は今となってはしばしば耳にする言説となっているが、東洋における先駆け的存在であることを踏まえると興味深かった。特に林少陽先生が指摘した従来の政治哲学が国家を前提としていることと章炳麟の思想との対比に強い関心を持った。確かに私が知っている限りでの伝統的な政治哲学では、共通の基盤（国家や共同体）を持った市民間での正義観念が議論されていた。しかし特に環境問題の文脈において必ずしも共通の基盤を持たない人々（将来世代や多国間）の間での正義観念が問題となり、従来の政治哲学の改善が求められている。そういった中で章炳麟の個人に目を向けた思想が政治哲学のアップデートの参考になりうるのではないかと考えた。

また、林少陽先生がおっしゃった民主主義は戦争に勝ちやすいということに関しては、民主主義というシステム自体が戦争を起こしづらくしているという考え方もあり、民主主義を戦争との関わりをもう少し精査したいというふうに思った。（文科三類 2 年）

東アジア教養学「世界歴史と東アジアⅢ」

伊波普猷「古琉球の政教一致を論じて経世家の宗教に対する態度に及ぶ」を読む

2021年6月21日･6月28日

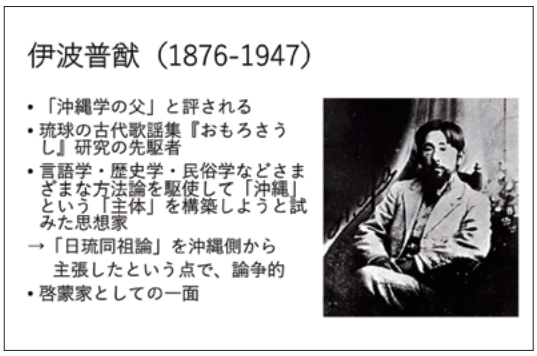
2021 年 6 月 21 日、28 日の東アジア教養学「世界歴史と東アジア III」は、EAA セミナーとのコラボレーション開催という形式で、報告者（崎濱紗奈：EAA 特任研究員）が発表を担当した。

今回題材としたのは、近代沖縄を代表する知識人である伊波普猷（1876-1947）が 1912 年に行った講演「古琉球の政教一致を論じて経世家の宗教に対する態度に及ぶ」である（併せて、サブテクストとして『古

琉球の政治』〔郷土研究社、1922 年〕も参照した）。本講演は、1912 年、第二次西園寺内閣内務大臣・原敬の主催で開催された、「三教会同」という宗教者会議に対する伊波普猷の私見を述べたものである。

日露戦争直後の当時の日本社会は、都市／地方、資本家／労働者といった種々の格差が発生するなど、急速な資本主義の浸透や富国強兵路線の遂行による歪みが各所で露呈していた。これを背景に社会主義思想も流行を見せた。その主導者と目された幸徳秋水が 1911 年、大逆事件で処刑されたことは周知の通りである。「三教会同」は言わば、こうした社会不安への対抗措置として画策された。この政策の中心人物は内務次官・床次竹次郎と宗教学者・姉崎正治であった。彼らは、宗教が、社会統合のための新たなメディアとして機能することを期待したのである。

「三教会同」の結果は、床次や姉崎が期待したように芳しいものではなかった。しかし、帝都から遠く離れた沖縄で、伊波普猷はこの政策を高く評価した。ただしそれは、為政者の意図をそのまま受け容れるというよりは、中央の視点を自らの側に簒奪し利用する、戦略的な態度であったと言えよう。伊波の意図は次の点にあった。「進歩せる宗教」を普遍的理念として設定することによって、記紀神話によって日本民族を規定し、帝国の新たな参入者（「沖縄」「朝鮮」「支那」「アイヌ」「馬来」）を劣った存在と見做す自民族中心主義を批判すること。これにより、各々の「個性」（伊波の言葉で言うところの「無雙絶倫」＝ユニークネッス）を尊重し、統合・包摂する新たなネイションとしての「大国民」を構成すること。言い換えれば伊波は、為政者の言説を借りながら、大日本帝国を、自らが理想とするところの普遍的な空間として書き換えようとしたのだ。



発表者スライドより

このような伊波の戦略的態度は従来の研究では肯定的に評価されてきた。しかし、本セミナーでは、次のような限界も指摘した。伊波の態度は、自民族中心主義から多文化主義へ、というより洗練された統治の言説を先取りすることによって、帝国日本という空間それ自体を補強してしまうという限界を内包していた。伊波が唱える「進歩せる宗教」というものも、あらゆる宗教を包摂する、言わばメタ宗教としての国家神道のあり方を、青写真として描き出してしまったと見ることもできよう。

だが、宗教に賭けた期待は、伊波普猷自身によって手放されることとなる。1910 年代後半から 1920 年代にかけて沖縄を襲った経済危機である「蘇鉄地獄」がその大きな転機となった。資本主義の行き詰まりを目の当たりにした伊波は、もはや宗教によってこれを克服することはできない、と痛感した。そこで伊波が新たに踏み出したのが、郷土研究という領域である。柳田國男、そして折口信夫の手引きを得ながら伊波は、琉球の古代歌謡集『おもろさうし』をはじめとするウタの世界に沈潜していく。

しかし、ここでもやはり伊波の関心は宗教にあったと言えよう。なぜなら伊波は、資本主義に対するオルタナティブとして古代琉球の共同体を眼差す際、その共同体の核心にあったのは神への信仰であった、と考えたからだ。ただしここで言う宗教とは、制度化された宗教ではない。伊波によれば、制度化された宗教は、王の権威を担保するものとして利用され、奴隷（王の民として稲を納める者）を生む。伊波はこうした王と奴隷の関係性を「政治」と呼んだ（『古琉球の政治』）。伊波が理想としたのは、このような「政治」が生まれる以前の純粋無垢な共同体、すなわち神と人とが一体となった生活である。言ってみれば伊波は、より純粋な宗教のあり方を追い求めたのだ。

以上の議論を踏まえた上で、伊波の思想的な限界はどこにあったのか、というテーマでディスカッションを行った。参加者からは、「アイヌ」に対する伊波の眼差しから窺い知れる進化論的発想にまつわる問題点や、「ノロ（祝女）」や「ユタ」についての伊波の

上段：左から順に伊達聖伸氏、崎濱紗奈（報告者）

論じ方についてジェンダー論的見地から見た場合の限界が指摘された。また、本講義の主宰者である伊達聖伸氏（総合文化研究科）は、近代主義者でありつつも、資本主義への対抗として土着的な価値を評価するという伊波の態度は、ナショナリズムに関する議論で有名なエルネスト・ルナンにも通じる、と指摘した。また、国家以前の社会に関するピエール・クラストルの一連の議論と併せて検討する可能性についても言及された。発表者は最後に、資本主義の克服、という一大テーマに向き合いつつも、「政治」を徹底的に外部化し、「政治」なき共同体を理想化したロマン主義的な態度に伊波の限界があったのではないかと指摘し、セミナーを締め括った。拙い発表に耳を傾け、ディスカッションに参加してくださった皆さまに、改めて感謝申し上げたい。

報告者:崎濱紗奈（EAA特任研究員）

一高プロジェクト

丹羽みさと氏「駒場博物館の一高資料の整理とその活用法について」

2021年6月24日

6月24日（木）13時より駒場博物館（以下、駒博）セミナールームにて、丹羽みさと氏（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター・助教）より、歴史資料の整理と活用法についてご講義いただいた。オーディエンスは、本プロジェクトメンバーの宇野瑞木氏（EAA特任助教）、高原智史氏（EAAリサーチ・アシスタント）、横山雄大氏（EAAリサーチ・アシスタント）、そして宋舒揚氏（総合文化研究科博士課程）、報告者（日隈脩一郎）の5名である。

今月より始動したプロジェクト「藤木文書アーカイヴ」では、主として戦時中における一高留学生に関する「藤木文書」の撮影と再リスト化（仮の段階）をひとまず終えたところである。とはいえ、これらがデータとしてひろく活用される道を拓くことこそが本プロジェクトの一つの主要な目的であるため、今後は公開に向けて舵を切る必要がある。そこで、かつて駒博において整理・公開を主導した丹羽氏に、資料整理のあり方を中心としてお話をいただいた次第である。

駒場博物館セミナールームにて。右側手前は丹羽みさと氏、奥の 4 名は「藤木文書アーカイヴ」メンバー

近現代の史資料について最初に配慮すべきこととして、個人情報がある。とりわけ書簡類には、住所・氏名はむろん、書簡であればこそ記し得た私的な事柄が満載である。当人がすでにこの世におらずとも、その血縁者・姻族が存命の場合はそうした情報が公開にあたって侵襲的であるかいなかを検討しなければならない。知的な資源はできるだけ公開することが望ましいが、実際に駒博所蔵の一高資料にも閲覧制限を設けている場合もあるという。

また、歴史資料のデータ化は研究活動に用立てることをその使命とするが、資料の分類整理には分類者・整理者の資料への評価が必然的に含まれる。資料の命名や分類に恣意性はないかということは常に念頭においておかねばならないが、たとえ恣意的であると思われるにせよ、その注記・エクスキューズを資料の公開にあたって付記しておくなど、施すべき処置はある。たとえば、複数のまとまりとして収集された資料群を、まとまりを解消して要素の類同性にしたがって分類するとしても、そのまとまりの記憶は、どこかに記しておくといったようなことだ。したがって仮に分類を変更し資料番号を振り直すにしても、旧番号は少なくとも内部資料としては保存しておくべきだと、実際の一高資料の分類の変遷を例に丹羽氏は語った。なお、この話題については考古学者や文献学者、図書館情報学者のあいだで価値観・態度の相違があるようで、個人的には少なからず興味を誘うところであった。

講義後、駒博の収蔵庫に潜り込み、資料の整理の仕方や保存方法を実地で検討した。分類番号と配架順に大きな違いがある場合、検索に不必要な時間を要することがある。写真を整理するには適切なフォルダ、ファイルを買い揃えなければならない。いずれも、基本的な注意点であるようだが、注意してもしすぎることはない。丁寧に整理されていても、「未活用資料」に新たに気付かされることもある。二次文献だけを相手にしていると必ずしも見えてこない事物そのもの、ローデータへのまなざしが今回、開かれたように思う。

報告者:日隈脩一郎(EAAリサーチ・アシスタント)
写真撮影:宇野瑞木(EAA特任助教)

駒場博物館の所蔵庫にてレクチャーする丹羽氏

学術フロンティア講義「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」

第11回 民主主義という悪の閾 ――他者なき民主主義とそのディレンマ

2021年6月25日

2021年6月25日（金）、第11回学術フロンティア講義がオンラインで開催された。講師は政治思想・日本思想史が専門の金杭氏（延世大学）で、テーマは「民主主義という悪の閾――他者なき民主主義とそのディレンマ」であった。

政治において悪とは何か。金氏ははじめに、政治とは公共の事柄における未決定的な領域およびその創出に向けられた言表や行為であり、常にすでに混沌の場に回帰しつつある再帰的かつ遂行的な共同行為であるという見方を提起した。この運動が停止し、未決定の領域が消去されるとき、人間は自分自身に関わる事柄でさえ外的決定に従って行動するという自己疎外に陥ってしまう。したがって、政治における悪は、政治の不活性化へと向かう契機それ自体として考えることができる。講義はこのような暫定的な定義から出発した。

民主主義という悪の閾

では、政治が不活性化するのはいかなるときか。金氏によれば、その契機は人民による自己統治という民主主義の理念そのものに潜んでいる。ルソーの『社会契約論』のジュネーヴ草稿には、「市民（citizen）になってこそ人間（human）になる」というフレーズがある。ここには、人間という全体にとって一部分をなすに過ぎないはずの市民という資格が、人間による自己統治に参加するための条件になるという根本的なねじれが現れている。民主主義には、人間に資格を与える（市民化する）ことで未決定の領域を消し去り、政治の遂行性を停止するという危険が内属しているのである。

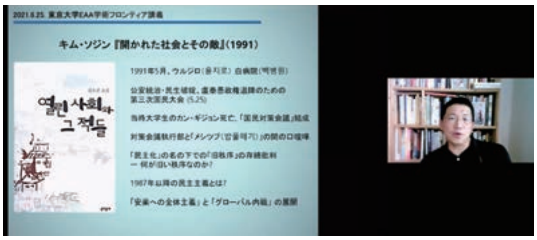
金杭氏（延世大学）

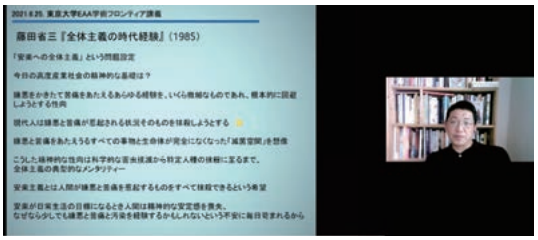
韓国の民主化運動の場合

具体例として、講義ではまず韓国の民主化運動が取り上げられた。金氏は当時の映像を用いつつ、1980年の光州民主抗争に始まる民主化の動きが、韓国社会の自由主義化・消費社会化の動向と軌を一にしていることを指摘した。その上で、二つの流れの狭間に起こっていたことを鋭く抉る作品として、金昭晋（キム・ソジン）の小説『開かれた社会とその敵』（1991）が紹介された。1991年の民主化闘争に取材したこの小説では、運動に実際に参加していた「メシツブ」と呼ばれるホームレスの人々が、民主運動家たちの想像力において、運動を担うべき「善良な市民」像からいかに排除されていったのかが克明に描かれる。それは、経済的な豊かさを背景に、清潔で綺麗な善良な市民という人間像が民主主義の中心に据えられていく過程の象徴なのである。

他者なき民主主義／戦後日本の民主主義の場合

こうした現象は、韓国のみに留まらない。藤田省三





『全体主義の時代経験』（1985）は、経済的繁栄の絶頂を誇った日本社会に対し、嫌悪や苦痛を与える状況そのものを排除しようとする現代の風潮こそ、全体主義のメンタリティーではないかと問うた。この問題意識は、シュミットにまで遡る。彼は『政治的なものの概念』（1932）において、人類、国民、市民という民主主義的主体の規定が、非人間たる「海賊」の排除を必然的に前提とすることを指摘している。

最後に金氏は、戦後最初の東大総長でもある南原繁を、近代日本における最も平和的で原則的な民主主義者として評価しつつ、彼の議論のうちにも同じ排除の力学があることを指摘した。南原は「外地異種族の離れ去った純粋日本に立ち返った今」における「君民一体の日本民族共同体」を語る（「祖国を興すもの」〔1946〕）。彼の戦後日本の理想は、一度は「日本人」とされたはずの台湾や朝鮮の人々を「異種族」として排除することの上に立ち上げられているのである。

かかる排除のはたらきが、民主主義を侵害すると同時にその根源的な条件でもあるのだとすれば、他者なき民主主義への傾斜はいかにして歯止めをかけられるのか。金氏は最後に、嫌韓・ヘイトといった現代の問題もまた、こうした原理的な問題に向き合い、国家と国家の「あいだ」の領域で民主主義を問い直すことによってこそ取り組まれるべきではないかと問いかけ、講義を閉じた。

報告者:上田有輝（EAAリサーチ・アシスタント）

リアクション・ペーパーからの抜粋

（1）民主主義を揺るがす、あらゆる集団に対するヘイトは、実はそれ自体が民主主義の成立条件であるという逆説が私にとって衝撃的だった。「自分たち大衆」とは異質な集団を「不衛生」であるとして排除することは、時代が移ろったり社会が変化したりすれば異常／正常の線引きは簡単に変容してしまう点でも危険な傾向だと感じた。昨日まで「正常」だった人がある日突然「異常」になったりその逆のことが起きたりすれば、一部集団の排斥どころか社会の分断が起きるが、それはまさに現代起こっている（起ころうとしている）ことではないかとも思わずにはいられなかった。（文科一類１年）

（2）同質的な空間・比較的均一な人間とともに高校時代を過ごし、現在もそうした空間に身を置いている私にとって、無意識のうちに異質な存在を排除する民主主義の側面は、身につまされる部分がありました。本講義では韓国における民主化運動の中で「善良な市民と彼ら（＝メシツブ）」という区分がまさに民主主義の排除の原理を体現していると言及されていましたが、こうした滅菌空間を特に現代人が希求するようになったのはなぜでしょうか。民主主義に内在する排除の暴力自体は古代からも存在し、近代国民国家のもとで強化されてきたように見受けられますが、とりわけここ数年のポピュリズムと排他主義にみられるように、「衛生的」な空間への固執が顕著になってきた根本的な要因が何であるのかという問いは、その解決策とともに検討に値すると考えます。

私は、やはりメディアという観点を検討の際に持つことが重要だと思います。たとえば、我々はメディアを介

して瞬時に自らの外にあるコミュニティや他者と繋がることができる一方、無意識のうちに自らと親和的な情報以外を排除することができるために、異質なものの存在を認知すらしない、あるいは認知していても関わりを持つことなく生きるということが可能な状態になっています。SNS が飛躍的な成長を遂げてきている 2000 年以降、特にこうした傾向は顕著なのではないでしょうか。他者の不在を快適なものとみなす心理の裏には、このような「異質なもの」への免疫力の低下があると思われます。しかし、コロナ禍によって無意識に排除していたものが否が応でも表面化し、向き合わざるをえなくなってきている今、こうした滅菌空間に固執し続けることはもはや困難になりつつあります。長きにわたり我々が目を背けてきた事実に対してどのような態度を取るべきであるのか、この点についてもさらに検討の余地があるでしょう。（教養学部 3 年）

(3)冒頭で「他者なき民主主義」という言葉を聞き、まず、民主主義の本質を「同質性」に見出したカール・シュミットの議論を思い出しました。それを踏まえれば、「民主化」を求めるがゆえにメシツブを異質な他者として排除しようとした心情は容易に想像できました。そもそも、このように考えると、ミルの「他者危害排除の原則」は全く違った意味でも民主主義の根幹に関わるものと言えるのではないか、と思います。つまり、異質な他者を危害（を加えてくるかもしれない存在）とみなし、排除しようとする心情のことです。予防的で排他的な民主主義の相貌に気づくことができ、とても勉強になりました。（文科三類 1 年）

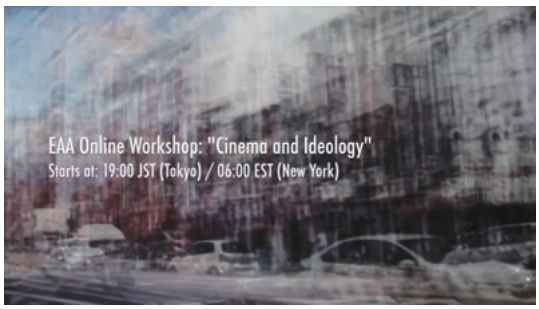
EAA Workshop “Cinema and Ideology”

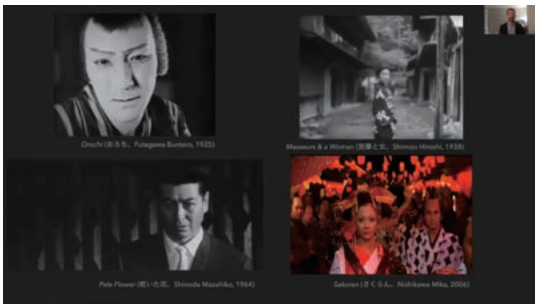
2021年6月26日

At the inception of film studies as a field of inquiry, the problem of ideology and its representation emerged as one of the central concerns of the field. Yet, our thinking about the problem of ideology vis-à-vis cinema has changed over the past few decades. With the aim of considering this problematic from the vantage point of contemporary Japanese film studies, EAA sponsored an online workshop entitled “Cinema and Ideology”, that was held on June 26th, 2021. The workshop was organized around four video presentations, followed by discussion, and open Q & A.

The broad narrative is more or less familiar: when film studies took shape as a field of scholarly inquiry in the late 1960s, the problem of ideology emerged as one of its central concerns. Moreover, from the beginning of academic film studies, Japanese cinema played an important role, especially for attempts to ‘deprovincialize’ the discourse on cinema. With the recasting of film as an ideological practice, film studies and criticism took upon itself the project of exploring and theorizing film practices that worked to demystify cinematic regimes of seeing and knowing the world.

By the 1990s, earlier lines of inquiry had expanded to include concerns from gender, cultural, and me-





dia studies (e.g., the debates on sexual identification, spectatorship, and medium-specificity). Through a process of disaggregation and shifting boundaries (e.g., should the study of film be subsumed under larger fields of inquiry into culture or media?), the problem of ideology tended to be obscured by more immediate questions concerning the topography of film studies as a whole.

While the utility of ideology as a concept has been questioned by some (e.g., Deleuze), others have re-affirmed its central significance for the study of cinema, even as the boundaries of the field remain in motion. Insofar as our thinking about the problem of ideology vis-à-vis cinema has changed over the past few decades, it appeared worth exploring how we might approach this in the present. Which approaches or theories of ideology seem particularly relevant at present?

With this goal in mind, the four presenters each considered it in relation to the study of cinema and media, through readings of specific Japanese films.

First, Phil Kaffen (University of North Carolina at Charlotte) offered a reading of "The Reciprocal Image", taking as a point of departure the large number of films containing scenes which feature characters staring into the camera (and, by extension, out to the audience). These scenes of "staring back", Kaffen proposes, orient the image outward, in contrast to the reflexive image, which casts its gaze back at itself. Within film history, such images have generally been either consigned to an object (the face) or to breaking the fourth wall. As Kaffen argues, though, neither of these formulations seem adequate. While speaking to the iconic and multifaceted role the reciprocal image has played in the history of Japanese film, Kaffen's primary focus is on more its recent manifestations across different media. From here, he proposes that the reciprocity on offer in these images may be said to play a role in our experience of "popular sovereignty" — an experience which remains troubling and worthy of deeper investigation.

Next, Max Ward (Middlebury College) presented "The Fold within the Frame: Police Power in Japanese Cinema". Ward begins by noting Thomas Leitch's observation that Hollywood police films often explore conflicts embodied in their police protagonists (e.g., power vs. justice) which evoke an ambivalence in the audience. The ambivalence appears as spectators negotiate their own antipathy for the police with a common desire for narrative closure, which in turn implies the police as an institution that participates in the reproduction of the social order. Ward argues that the cinematic representation of policing in fact very much resembles the basis on which police power is represented in society, and yet there remains something elusive or indistinct about the place of police power in the socio-political field. As a way to address the question of how cinema takes this indistinct form of power as its object — and what it creates within the sphere of cinema as art — Ward offers an interpretation of Uchida Tomu's *Keisatsukan* (1933), in relation to the Ōmori

Gang Incident (Ōmori ginkō gyangu jiken) that took place in October, 1932, and Tosaka Jun's meditations on police power in 1930s Japan. In this fashion, Ward proposes thinking about police power as an "ideological fold".

Next, Mitsuyo Wada-Marciano (Kyoto University) presented "Okinawan 'Mothers' as Social Thought", which focused on a reading of *Mothers in Okinawa* 『沖縄の母たち』(1970). For the purposes of reading this film, ideology is proposed as both a conscious line of thought, but also a sensation [*kankaku*] that a society shares at an unconscious level. Through an analysis of this film, Wada-Marciano argues that Okinawa may be understood as an embodiment of the 'system of sacrifice' [*gisei no shisutemu*] as described by the philosopher Takahashi Tetsuya, which has been concealed in Japanese history. Wada-Marciano proposes to read the Okinawan social structure as it is depicted in this film. More specifically, the analysis explores the sponsorship of the film production, its intended audience, documentary style, and relationship with Okinawan history. Wada-Marciano notes that while the film shows a community of mothers dedicated to a future in which Okinawa is no longer under the shadow of the American Empire and its global network of military bases, what the film doesn't show the audience is a sense of disappointment or hopelessness felt by mothers, especially, in Okinawa, under its present geopolitical configuration. That is, what the film doesn't show us is Japan as a suzerain state that, together with the U.S., governs Okinawa as a *de facto* internal colony.

Finally, M. Downing Roberts (EAA, University of Tokyo), presented "Ideology and Black Mist in Kumai Kei's *Nihon rettō*", in which he offered an interpretation of Kumai's 1965 film, as well as a recasting of ideological analysis in the wake of the David Rodowick's critique of political modernism. The reading of Kumai's *Nihon rettō* considers its use of remediated, documentary materials, its relationship with postwar reality, and the structure of suspicion that finds expression in the metaphor of "black mist" [*kuroi kiri*], a term popularized by the writer Matsumoto Seichō around 1960. As a mode of analysis, Roberts proposes parapolitics, not as it has been described by Rancière or Žižek, but rather in line with Peter Dale Scott's definition of power that is exercised by covert means. Following the argument of Eric Wilson, and as illuminated in Kumai's film, Roberts considers parapolitical institutions not as fringe or parasitic, but in fact at the center of global governance in the postwar period. In this sense, Kumai's film may be understood as an ideology critique of the geopolitical condition of postwar Japan, for its protagonists — the journalists, police investigators, public prosecutor, as well as their American military counterparts —, are all shown to be powerless against a parapolitical apparatus.

Report by M. Downing Roberts
(EAA Project Research Fellow)

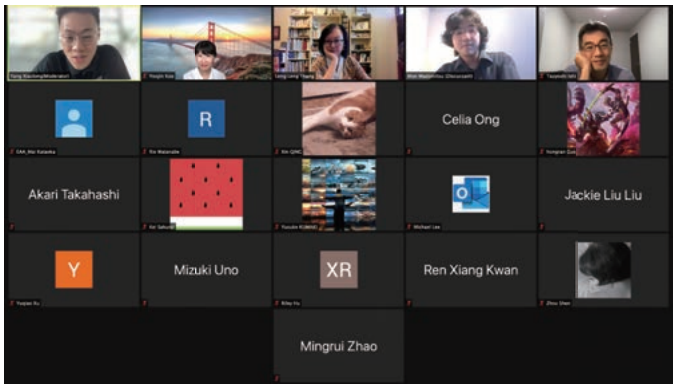
EAA-NUS Seminar "Expectation on the family: Policies to encourage filial support in Asia"

2021年6月28日

Ageing related issues have emerged to be one of the most prominent and hotly debated academic discourses in the entire world of social sciences, and perhaps even more so for scholars with a particular substantive interest in East Asia. Professor Thang Leng Leng from National University of Singapore is an established and influential scholar who has been conducting numerous important research on ageing related issues i.e., productive ageing, intergenerational gap, elderly care, social welfare policy (making and evaluation), intra/international labour mobility etc., with a special curiosity for Japan, Singapore and other Asian countries. Prof. Thang's academic interests originated from her post-undergraduate fieldwork as she interacted with some Japanese elderlies and learnt that their lives were in fact, quite different from the conventional depiction that regrettably, largely marks only dependency and inactivity. More observations and revelations have then led her to pursue her graduate training as an anthropologist in the United States before her current tenureship at NUS's department of Japanese Studies.

Prof. Thang was invited to EAA to give a talk on June 28, 2021, that aims to provide an analysis and discussion on the impact of Asian states' policy on promoting elderly care, or in a more cultural tone, filial support. Addressing a wide audience of both EAA affiliates (EAA Youth, professors and research staff) and those interested outside of EAA or even UTokyo (around 30 people attended from Japanese, Chinese, Australian and American universities and high schools), Prof. Thang first brought the debate to the table by sharply identifying the cultural tension between individualism (thusly individualisation) and filial piety, pointing to the importance of government policy in promoting elderly care as the demographics of Asian societies become increasingly older and skewed. Next, basing on Prof. Thang's book chapter Social-cultural Aspects of Ageing in Asia: Policies for Family and Filial Support (assigned as recommended reading beforehand), Prof. Thang provided Singapore, India and China's cases to compare and contrast how the main elements (i.e., scope for parents/children stated in the law; amount of money; punishment if violated etc.) of filial responsibility law differ; these valuable insights then in turn encouraged the audience to ask many interesting questions.

In the Q&A session, both students and professors raised their unique opinions on many topics, for example, the pros and cons of changing intergenerational dynamics and potential problems in addressing the realistic concern of declining filial support through a powerful, but visible hand (the governments). What was particularly memorable to many was, as much as an internal responsibility that filial support seems to our generation now, such a perception could quickly change in a span of several gener-



ations as Asian societies continue to go through individualisation and fundamental demographic shifts, to much less so, and an increasing effort on familial, societal and governmental support for the elderly population, if neglected, hence shall only result in catastrophes that either directly or through spillover effects, negatively impact the economic, political and societal development of Asian nations. Therefore, it would not be an exaggeration to state that owing to Prof. Thang's talk and every participant's effort in showing up, we all became a more vigilant, or even wary (in a conducive way), part of the society in the face of ageing related issues.

The talk was brought to an end as Prof. Ishii gave us a wonderful ending remark where he thanked the initiative and participation. A huge thank you to Prof. Thang for her kindness for fitting this talk in her busy schedules and for the truly educational talk. Big thank you also to Prof. Ishii and Prof. Yoojin from UTokyo EAA for patiently touching base on every single detail of the event organisation, and most importantly, for showing unprecedented and genuine deep trust in permitting us - the year three and four undergraduates, to independently organise and moderate the event, in its entirety. The best way of learning is by doing, and it would be absurd to deny that the ones most involved in the process of making the talk happen are the ones benefited the most from the entire event. So Thank you. For those who devoted labour in the organisation, specific thanks goes to Madomitsu Mon for the numerous zoom calls we had to prepare and finalise the detailed plan, which was rather all too trivial; big thanks to Xin Qing for her well thought out and lovely drawn artwork - saying that it is only a poster would certainly be an understatement.

Report by Xiaolong Yang (EAA Youth)

第20回 石牟礼道子を読む会

2021年6月29日

2021 年 6 月 29 日（火）15 時より、Zoom にて第 20 回石牟礼道子を読む会が開催された。参加者は、発表を担当された山田悠介氏（大東文化大学）、そして鈴木将久氏（東京大学）、張政遠氏（東京大学）、高山花子氏 (EAA 特任助教)、宮田晃碩氏 (EAA リサーチ・アシスタント)、報告者（宇野瑞木・EAA 特任助教）に加え、今回から新たに、第 18 回で新作能「不知火」についてお話しいただいた倉持長子氏（聖心女子大学）、また北京から徐嘉熠氏（清華大学）をメンバーに迎えての会となった。

石牟礼道子『水はみどろの宮』（福音館書店、2016 年）

5 月から 6 月にかけて新作能「不知火」の上映会と座頭琵琶の語りの上映会というように、石牟礼から古典芸能の世界に導かれるような特別企画が続いたが、今回の山田氏の「「声音」を読む――石牟礼道子『水はみどろの宮』をめぐって」と題された発表も、そうした芸能において響く声音にも通じるような、通常話される「言葉」とは異なる「声音（こわね）」のあり方に関わる議論がテクストの豊かな読解によって展開される形となった。なお、今回のサブテクストは、石牟礼道子「湖」（初出 1997 年）、伊藤比呂美による『水はみどろの宮』解説「詩の発生に立ち会う」（『石牟礼道子全集・不知火』11 巻、2005 年）であった。

山田氏が、メインで取り上げた『水はみどろの宮』（福音館書店、2016 年）は、児童文学雑誌『飛ぶ教室』（光村図書および楡出版）に 1987 年 5 月から 1993 年 2 月にかけて『やつせ川』として連載されたものに、第 12 章を書き足して『水はみどろの宮』と改題して 1997 年 11 月に平凡社から刊行された作品である。

本作が、中断の時期も挟みながら、完成までにおよそ 10 年かかっている一方で、石牟礼は旺盛な創作活動の時期に入っており、『天湖』（1997 年）、『アニマの鳥』（1999 年）、新作能「不知火」（2001 年）と大きな作品を次々と発表している。山田氏は、それらの中でも『天湖』と『水はみどろの宮』は同年同月に刊行された双子のような関係にあるとし、同じテーマが扱われている点を指摘した。それは、山の胎に泉の湧く幻の湖が隠されているというもので、その発想源は『肥後国誌』（明治 17 年）に記された土地の伝説であったという。さらにこの人跡未踏の水底のイメージは新作能「不知火」にも通じていく。山田氏は、特に、「不知火」の水底の毒を「浚（さら）う」という言葉に着目し、その役を担う常若、不知火、竜神の妻が、『水はみどろの宮』の山の腹の中の湖の底にたまった濁りを「浚え」る千年狐の「ごんの守」と同じ系譜にあることを確認した。

その上で、『水はみどろの宮』と「不知火」のさらなる共通点として、今回の発表の核心である「声」と〈変身〉というテーマに向かった。山田氏は「空に浮いた小さな花のような、かそかな声」という表現に着目し、トドロフの『幻想文学論序説』の比喩と〈変身〉の議論も参照しながら、主人公のお葉が、発せられた声のありようを表現する言葉を契機として、比喩としての「小さな花」自体に〈なる〉（「声」という客体と「声」を発した主体が重なる）、つまり〈変身〉という事態が生じているとする。そして、お葉はさらに「魚のように」〈なり〉、水はみどろの宮にたどり着くのである。さらに、石牟礼自身が「言葉」と「声音」を峻別した上で「声音」を表現したいと述べたことに引き付け、議論は言葉の意味内容と声自体の超分節的なありよう、テクスチュアというものに向かっていく。山田氏は、こうした声の呪力・霊力にもつながるような、通常とは異なる声音というものへの志向は、石牟礼の『梁塵秘抄』の口伝集への傾倒とも関係していることを示唆した。

さらに「龍玄寺の鐘騒動」の部分で、「仏説阿弥陀経（ぶっせーあみだきょうーおー）」と唱える時に「天女の撒く花のように、お経の文字が花びらに見えてくるまでとなえ」ると表現される点に着目し、このような言葉の意味の手前の次元で「声」という出来事・力そのものに注意を向けさせるようなコミュニケーションの在りようは、石牟礼文学のひとつの特徴であることが示された。

最後に印象的であったのは、山田氏が、「日本手話」を「第一言語」と位置づけて教育する唯一の学校の存在に触れ、「音」や「声」のない世界が存在するということと今回の議論がどのように繋がるのか、という問いを投げかけた点であった。

以上の濃密な発表を受けて、質疑でも様々な方面からのコメントや質問があがった。まず、「小さな花のような、かそかな声」という表現について、〈書く〉ことではじめて比喩による〈変身〉が成立し得るのではないか、あるいは、聴覚と比喩はどのように繋がるのか、それは音の次元ではどのように成立しているのか、といったことが議論された。要するに、記述できない領域を、声も含めてどのように〈書く〉のか、という挑戦が石牟礼にはあったのではないか、ということである。それと関連して、声音に視覚的比喩を用いる方法に加え、セリフや心中語を「　」やダッシュ、一字下げ、（　）など様々な表記で書き分けていること、「六根清浄　六根清浄」「仏説阿弥陀経」といった反復される仏語の異質な響きやその儀礼性、独特な擬態語や擬音語、ひらがなと漢字の書き分けなど多岐にわたる表現上の工夫や特徴が議論された。

さらに興味深いのは、「みどろ」という言葉の意味である。「みどろ」と聞くと「水泥」「深泥」などの意味を思い浮かべるが、実は『梁塵秘抄』に「御菩薩（みとろ）」という言葉が登場するのだという。この興味深い指摘を踏まえると、衆生を救うために現われる菩薩に、お葉も含めて「濁り」を「浚え」浄めを担う存在が重なってくる。また、こうした仏教的な観念は、直接的には石牟礼が熊本の真宗寺近くに仕事場を設けていたこと（石牟礼は表白を作ったりもしている）と関わっていること、また仏教的な観念と童話のつながりでは、宮沢賢治の表現の関係についても言及があった。

また、誰も知らない川の源、そうした始原や源への志向性と声の密接な関係性についてもハイデガーの詩に関する議論を参照しての指摘があった。それにも関連して、前回からの繋がりとして個人的に気になったのは、『水はみどろの宮』に音曲や芸能の神であり、そして水の女神でもある弁才天のイメージが登場する点である。石牟礼の生まれた天草には、座頭の同業者組合である妙音講（弁才天講）が昭和初めごろまで残っており、天草で修行した座頭琵琶の山鹿良之氏宅にも琵琶をもつ弁才天の石像がまつられていた（兵藤裕己『琵琶法師――「異界」を語る人びと』岩波書店、2009年、192頁）。兵藤氏は、そうした母なる水土の女神（とその子）は、漂泊の語り部たちの喪失された母の代償として未生以前の世界への信仰を人格化したものであり、「モノ語りの発生する原郷」であったと述べていたのであった。石牟礼が、現実の瞽女は三味線を持っていたにもかかわらず、作品内では琵琶を持つ瞽女を登場させることに拘った点にもどこかで繋がっているように思われる。

石牟礼道子『水はみどろの宮』（福音館書店、2016年）。美しい挿絵は山福朱美による

質疑では、こうした声や音の意味だけでなく意味以前の次元自体に耳を澄ませることが議論された一方で、災害の現場などを考えた時に、死者や弱者の声を〈聞く〉だけでよいのか、という問題提起もなされた。このあたりは、中動態と医学の議論、ケアの倫理学とも通じていく問題でもあるだろう。

以上を受けて、最後に山田氏から発せられたのは、このテクストに出てくる「迦陵頻伽の声」や「天の笛」という形容を付された声音は、誰も聞いたことがない声音であるからこそ、聞こえない人と聞こえる人が同じ条件のもとに置かれているのではないか、言い換えれば、それは誰にでも聞こえる音として両者を繋げ得るのではないか、というさらなる問いであった。これは、前回、野田研一氏が投げかけた盲目の語り部がどのように風景を認識し、語るのか、という問いともつながっていくようにも思われた。

琵琶語りと能の鑑賞をした経験が、石牟礼を読む会に大きなインパクトをもって響いていることを感じる。今後も石牟礼の作品を通して、これらの問いや問題提起を共に思考していきたい。

報告者:宇野瑞木（EAA特任助教）

2021年度活動報告

夏● 7月～9月

学術フロンティア講義「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」

第12回 私たちの憲法“無感覚”――竹内好を手掛かりとして

2021年7月2日

2021年7月2日（金）、第12回学術フロンティア講義がオンラインで開催された。今回の講師は比較文学を専門とする王欽氏（総合文化研究科）で、テーマは「私たちの憲法“無感覚”――竹内好を手掛かりとして」であった。

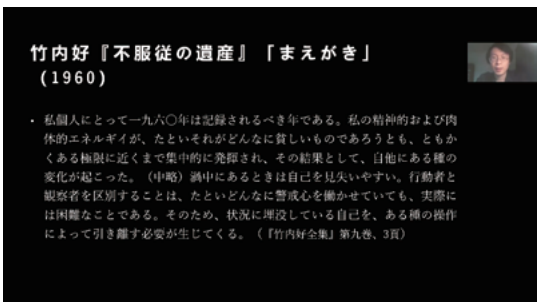
王氏は冒頭で、今日の日本において改憲派、護憲派両方の言説と彼らを批判する言説がともに陳腐化していると指摘した。そして、一般民衆の憲法に対する感覚は薄れつつある。それゆえ、考え直すべきは平和憲法を守ろうとするとき、我々は一体何を守るべきかという問いである。そこで、王氏は、竹内好が安保闘争の最中で発表した一連の論文に注目する。

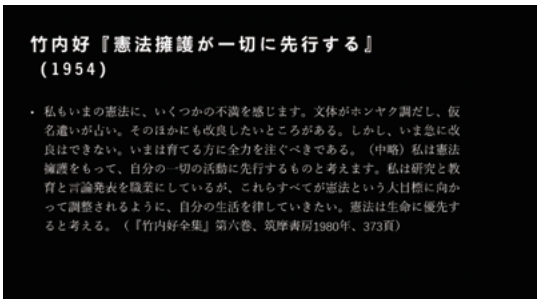
竹内の議論の中心には一種の「違和感」があると王氏は主張した。それは、戦前帝国主義の国家原則のもとで教育を受けて人格を形作った民衆は、新しい憲法が意味する人類の普遍の原理をたとえ自分で伝えようとしても、彼らの手元にある伝達の手段は帝国主義のイデオロギー的なものしかなかったためである。さらに、このことは改憲派のいう憲法の「外来性」ともつながっている。竹内も憲法の「翻訳調」に不満を抱えていたが、あえて憲法を守る立場を取っていた。なぜならば、彼にとって一番重要なのは戦後の憲法を既存の価値として受け入れることではなく、現実の闘争を経験するなかで憲法というテキストを主体化することであったためだ。竹内本人も積極的に参加した1960年前後の安保闘争はまさにこのような闘争の一つである。

王氏によると、安保闘争の特徴は二つある。一つは、様々な民衆が多様な形で政治に関与すること。民衆は垂直的な連盟の代わりに水平的な国民連合を組織した。もう一つは、闘争に参加した民衆は不平等な力関係を自分が強くなる条件に変えること。そのため、憲法は闘争を通して一般民衆に根を下ろして、内在化され、主体化された。一旦民衆に受けいれられたら、憲法は単なるテキストではなく、もはや自分なりの生命を持つようになり、民衆の未来とつながっている。

こうした議論をふまえた結論として、王氏は、我々は起草者たちの意図を守るのではなく、憲法の未来や

王欽氏（総合文化研究科）





ポテンシャルを守らなければならないとまとめられた。

最後の質疑応答では、「国民」と「民衆」の区別やこれから憲法の自己更新の可能性などをめぐり、活発な議論が交わされた。

報告者:黄秋源(EAAリサーチ・アシスタント)

リアクション・ペーパーからの抜粋

(1) 憲法に関する竹内好の考察は非常に興味深いものでした。私はそもそも竹内好は魯迅の作品の翻訳者としての側面しか知らなかったので、驚きました。竹内好は戦前から生きていて、しかも安保闘争を経験しているという点で、私のような平成生まれの若者とは大いに異なる感性を持っていると言わざるを得ません。とはいえ竹内は他の民衆よりもはるかに深い視点を持っていたとは思います。彼の営みを踏まえたうえで、今を生きる若者としての私たちがどのように憲法とかかわっていくかというのは、一生の課題となることでしょう。(文科三類1年)

(2) 授業後「私たちの憲法感覚」を読みました。60年前の当時の時代背景としては、竹内自身をはじめとして大日本帝国憲法世代が中心であり、「よそよそしさ」が支配的であったことが感じられました。だからこそ当時の安保闘争は、まさに憲法を「自分たちのもの」にするためのムーブメントであったのだと思います。翻って、現代はどうでしょうか。戦後世代が大多数を占め、憲法に対して「よそよそしさ」とは異なる状況です。しかし、低投票率に代表されるような「政治離れ」ともいわれる状況で、憲法は身近な存在ですと自信を持っていえる雰囲気はないと感じます。(憲法の内在化、主体化、民族化を是認したうえで、)どのように憲法に接近すればよいのか。講義の最後に「闘争」という表現が使われていましたが、「理想」ではあるものの、今すぐ「闘争」を目指すのは適切な手段ではないと感じます。むしろ、「政治離れ」のような「観察者」的な態度を改める必要があるのではないか、と思います。憲法であれ政治であれ「自分事」としていくのが出発点になると思います。(教養学部3年)

(3) デモというと以前は大人数が集まって行うという印象があったが、近年見られる傾向として、ネット上での政治運動が広がっている。しかしこの場合の政治運動では身体性を獲得しうるか。実世界で行っていたものがバーチャル空間上で行われるようになったという見方をすれば、身体性を獲得しうることになるだろう。街をぶらぶら歩いていてなんとなくデモ隊に加わることと、ネットサーフィンをしていてなんとなく見た投稿にいいねをすることとに本質的な違いはないように思われる。逆に違うところをあげるとすると、物理的な接触があるかないか、また、一時的なものか半永久的に残るものかという具合である。憲法のポテンシャルを守るという目的においては、その連帯性に関係する性質上、ネット上での活動というのは今までのデモを遥かに上回る効果が見込まれると考えられる。(理科一類2年)

第21回·第22回 石牟礼道子を読む会

2021年7月5日·7月12日

2021年7月5日（月）10:25よりZoom上にて第21回石牟礼道子を読む会が開催された。今回は伊達聖伸氏（東京大学）の授業「世界歴史と東アジアⅢ」との共催で、宇野瑞木氏（EAA特任助教）、髙山花子氏（EAA特任助教）がそれぞれ『苦海浄土』の概略の説明も兼ねて、サークル村の活動や共同体のモチーフを取り上げる発表をした。

「世界歴史と東アジアⅢ」の授業では小国をテーマとして中江兆民、幸徳秋水、鶴見俊輔などのテキストをこれまで読んでおり、今回は石牟礼道子の『苦海浄土』第1部を取り上げるということで、共催が実現した。伊達氏の授業参加者のほか、石牟礼道子を読む会からは、徐嘉熠氏（清華大学大学院博士課程）、建部良平氏（東京大学大学院博士課程）、宮田晃碩氏（EAAリサーチ・アシスタント）、今回から新しく加わった報告者の池島香輝（東京大学大学院博士課程）が参加した。

議論では、まず、『苦海浄土』においては、石牟礼はかなり自覚的に聞き書きという手法を使ったのだという話が出た。実際に石牟礼が所属していたサークル村は、聞き書きやルポルタージュを通して、民衆の「沈黙」に接近しようとしていた。『苦海浄土』には黒子としての聞き手／書き手が存在しており、絶対的無私を軸に書いている、しかし、そこには共同体から逃れられない葛藤も垣間見えるという指摘もあった。

特に議論が盛り上がったのが、石牟礼の描く「されく（漂浪く）」というモチーフであり、居場所のない漂流するものたちの姿や、石牟礼自身もこの世に所在なさを感じながら生きているということが作品に通底しているのだと議論になった。所在なさというと、『苦海浄土』三部作を読んでいく上で、チッソ側はもちろんだが、患者の側にもつけない書き手の孤独が伺えることも重要な点である。

移民研究を行っている学生からは、『苦海浄土』を読み、共同体の中で聞き書きをしていくことの難しさを感じたという意見もあり、石牟礼が『苦海浄土』を世に出した際には、村の人に田んぼに落とされたというエピソードが思い起こされた。また石牟礼と対照的に、外から共同体へと入った存在として、水俣病の取材のために来日し患者たちの姿を写真に収めたユージン・スミスも石牟礼と呼応する存在として想起させられた。

また、宇野氏は石牟礼が高群逸枝に大きな影響を受けていたにもかかわらず、フェミニズムには向かわなかったことを取り上げ、言葉による新しい共同体、もう一つのこの世を作ろうとしたのだろうと指摘した。それについて伊達氏は、またそれも新しいフェミニズムの形と言えるのではと加えた。最後に、石牟礼作品の持つポリフォニックな側面にも議論が及び、様々な声が書き手を通して浄瑠璃のようにまとまりを持っていると述べられ会は閉じられた。

＊　　＊　　＊

続いて、翌週2021年7月12日（月）10:25よりZoom上にて第22回石牟礼道子を読む会が開催された。今回も伊達聖伸氏の「世界歴史と東アジアⅢ」との共催で行われ、参加メンバーがそれぞれ前週の授業を経て、『苦海浄土』第1部を読んで考えたことを簡単に発表した。石牟礼道子を読む会からは、宇野氏、髙山氏、宮田氏、建部氏が参加した。伊達氏がまず、鶴見俊輔と石牟礼の繋がりを簡単に説明し、小国論に引き付けて発表した。同時代の知識人との関わりは今後石牟礼を考える上でも重要な視点である。宇野氏は、説教浄瑠璃が注目を集めた時代と執筆時期が重なっていることも含めて、『苦海浄土』の中の浄瑠璃的な要素を指摘しつつ、同時代的なものに敏感だった石牟礼は、その生い立ちからも伺えるように、耳学問で聞いたものもすぐに自分のやり方に変換できる人だったのではないかと述べた。このような石牟礼の特質は、『苦海浄土』の「のみくだす」という言葉によく現れているのではないかという指摘も

あった。

学生の発表では、『苦海浄土』で水俣病患者が値付けされる箇所に着目し、現代における人々への値付けや出稼ぎについて語られた。バングラデッシュを例に、階級間の転落が容易なことや病気、誹謗中傷など、『苦海浄土』から考えられることがたくさんあると述べられた。また、現在のコロナ禍において読む意義、隠れキリシタンの話題も出た。

苦海浄土に描かれる、共同体における差別や排除は現代を考える上でも読みの可能性を秘めており、現代のアクチュアルな話題においても示唆の多い部分である。隠れキリシタンについては石牟礼の『春の城』で描かれているので、今後詳しくみていきたい。建部氏は、文学が社会性を持つのはいかなる時か、それを可能にするのはどんな作品、文章なのか考えていきたいと述べた。「なにか対なにか」という二項対立ではない、葛藤を含んだ言葉は、石牟礼作品が我々に訴えてくるものであると言えるだろう。

また田中浩喜氏（東京大学大学院博士課程）の発表では、文章に着目するかたちで、説教臭くない石牟礼の文体について語られた。魂などといった一見すると使いづらい言葉を使う石牟礼の文章のある種の歪さが、その魅力を支えているのでは無いかと指摘された。宇野氏はそれに対して、石牟礼の言葉を介して森羅万象が、石牟礼の存在よりも水俣を宗教化させていくのではないかと述べた。加えて高山氏は、石牟礼作品には生活があり、生活が祈りとなり念仏となっていくような力があると指摘した。最後に、東日本大震災や現在のコロナ禍を踏まえて、災後文学として『苦海浄土』を読む重要性が取り上げられ、会は閉じられた。

2回に渡る読む会を通して感じられたのは、『苦海浄土』という作品が含んでいる読みの可能性の大きさである。渡辺京二は石牟礼作品の特徴をワールドではなく、コスモスだと指摘したが、『苦海浄土』という作品はまさにその中に、いくらでも彷徨うことができる宇宙を内包している。石牟礼作品、ひいては石牟礼道子を文学研究以外の視点から考えることは、そのようなコスモスを、日本文学の枠のみならず、東アジア、さらには世界に開いていくことだと言えるだろう。

報告者:池島香輝（東京大学大学院博士課程）

第6回 EAAブックトーク

2021年7月8日

2021年7月8日、第6回のEAAブックトークが行われた。参加予定者の定まった直後に4度目の緊急事態宣言の発令が決定されたが、参加予定者が少人数であったこともあり、久方ぶりの屋外・対面方式での開催となった。当日の参加者は郭馳洋氏、片岡真伊氏、崎濱紗奈氏（以上、EAA特任研究員）および本報告執筆者の前野清太朗（EAA特任助教）の4名である。当日は梅雨空で恒例の青空ブックトークとはならなかった。とはいえこの梅雨空を梅雨空なりにその趣を愛でようと、雨中の句会を模して一筆箋の短冊を用意してトークのセッティングを行ってみた。4月よりEAAではお2人の新スタッフ（郭氏、片岡氏）を迎えたため、今回は研究員の相互の研究紹介を兼ねたブックトークを「お題」とした。用意した短冊にそれぞれ持ち寄った本の統一テーマを記し、各自の研究とからめたトークを行っていった。

トップバッターは執筆者（前野）がつとめた。短冊に記したトークテーマは「既存の社会がいかに「近代的なるもの」を受容するかをめぐって」である。紹介した本は2冊、前川啓治『開発の人類学――文化接合から翻訳的適応へ』（新曜社、2000年）、菅豊『川は誰のものか――人と環境の民俗学』（吉川弘文館、2005年）であった。前者はオーストラリア・トレス海峡を舞台にした人類学的著作、後者は新潟県の「大川」を舞台にした民俗学的著作である。執筆者は台湾農村でのフィールドワークを行ってきたが、

左から順に前野清太朗氏（EAA 特任助教）、崎濱紗奈氏、郭馳洋氏、片岡真伊氏（以上、EAA 特任研究員）

そこで長年着目してきたのがコミュニティの内と外の関係についての問題であった。今回紹介した 2 著作は互いに大きく異なる地域を扱った研究であるが、近代的な諸概念――経営、所有、保護 etc.――をコミュニティがいかにローカルに再解釈し「適応」してきたかをいずれも扱っている。またかたや人類学者、かたや民俗学者の著作ではあるが、2 著作にはいずれも歴史的な眼が込められている。

続く郭氏のトークテーマは「明治・清末の哲学言説と思想史」である。郭氏は何冊か本を準備のうえ一場のトークを展開してくれたので、うち主要なものを紹介しておきたい。特に話題の中心となったのは、舩山信一『明治哲学史研究』（『舩山信一著作集』第 6 巻、こぶし書房、1999 年）、梅森直之『初期社会主義の地形学――大杉栄とその時代』（有志舎、2016 年）、小林武（『章炳麟と明治思潮――もう一つの近代』（研文出版、2006 年）であった。最初の舩山信一『明治哲学史研究』は 1959 年の原著刊行と日本の哲学史的著作としてかなり古い。実際、日本哲学を観念論と唯物論の対立という前提のもとでととらえる論調はいかにも古い。しかし哲学史研究の批判性を重視し、現代的な「哲学」史が描かれる際に「哲学」外とされて漏れてしまうような思想を網羅して論を展開するのが、舩山の哲学史の魅力でもある。続く梅森の著作は、近年の著作ながら日本的な社会主義思想が完成する以前の未熟な思想として日本の「初期」社会主義を捉える遡及的立場を批判する著作である。舩山や梅森の著作に通底するのは「批判」の精神であると郭氏はいう。「哲学する営み」と、「哲学する営みを研究する」間の乖離を結び付けるキーとして郭氏はこの批判性に着目している。最後の小林の著作は、清末思想の重要人物たる章炳麟について、彼が影響を受けた明治思潮の外的視角からとらえようと試みている。思想ないし「哲学する営み」をいかに描けるか、自身の研究上の試行錯誤とともに論じた爽やかなトークであった。

片岡氏のトークテーマは「一次資料からみる生成現場」である。紹介してくれた本は吉田城『『失われた時を求めて』草稿研究』（平凡社、1993 年）であった。吉田の本著は日本文学の英訳出版について研究してきた片岡氏が文学翻訳を研究するうえで、方法論と研究の意味についてインスピレーションを与えてくれた本であったという。マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』をめぐり、草稿から出版までの生成過程を含めて丁寧にテキストクリティークを行ってみせた本著は、文学研究における「原典」や「決定稿」の絶対性を強く批判している。それは片岡氏が行ってきた日本文学の英訳出版においても相通ずるテーマであったという。原著者、編集者、翻訳者の複数のアクターを介して作業が進められるなかで「原典」は大きく改稿されていき、さながら共同叙述に近いものになっていく。

最後の崎濱氏のトークテーマは「沖縄・政治・主体」である。紹介してくれたのは冨山一郎『流着の

思想――「沖縄問題」の系譜学』（インパクト出版会、2013年）であった。郭氏・片岡氏のトークでも触れられた、思想をいかに研究するかのテーマについて崎濱氏も重ねて触れてくれた。冨山は、「沖縄問題」の生成プロセスを多様な同時代史料を駆使しながら描き出していく。中央に対し「救済」を申請する主体として「沖縄」を自己描写するなかで主体としての「沖縄」が作られていった、とするのが同著の論旨である。いってみれば「沖縄問題」として沖縄に押し込められてしまう問題の枠組みの脱構築を試みているわけであるが、ここに崎濱氏自身の「沖縄」の問題をいかに「超・沖縄」的な問題として把握するかの向き合い方の苦難があるという。たとえば大日本帝国の領域下にあった諸植民地との比較の問題、戦後のアメリカ統治と1972年以降の基地の問題、これらを網羅的な問題としてとらえる概念として崎濱氏は「辺境」に着目をしている。

各々のトーク後には参加者相互の関心に応じた派生的トークが展開された。なかでも記述の立場性やトリミングの話題などは4名ともに共通するテーマであり、各人各様に意見の交換ができた。研究者が科学（science / wissenschaft）的であろうとすることから生じる「まなざし」の力の問題といかに向き合うか、あるいは逆に当事者の「力」といかに組み合うかは古く長い話題である。新しく（も古い）話題を挙げておけば、翻訳に関してAI翻訳についても議論がなされた。直訳論と意訳論の対立は翻訳論の古いテーマであるが、ディープラーニング技術を活用したAI翻訳は直訳論の極致たる存在だろう。コミュニケーションを介した共同的なテキストの生成として翻訳を捉える立場からは、あるいはスローな翻訳、スローなコミュニケーションに価値を改めて付加できるかもしれない。

これらトークで出た様々な思考はまだまだ論の断片、思考の芽である。昨年末よりEAAでは次々と新しい研究会が立ち上げられてきた。着想した論の断片・思考の芽を各研究会に供給し、やがて結実させるブレインストーミングの場所として、このブックトークの機会を極力維持していきたく望んでいる。

報告者:前野清太朗（EAA特任助教）

学術フロンティア講義「30年後の世界へ――学問とその“悪”について」

第13回 たたかう「文」――言語の暴力と希望について

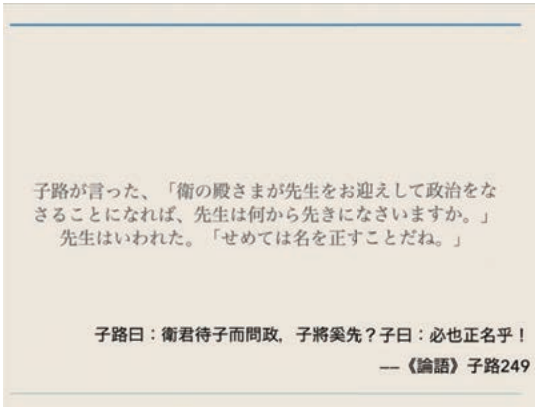
2021年7月9日

2021年7月9日（金）、オンラインにて開催された今学期の学術フロンティア講義最終回は、EAAの副院長・石井剛氏を登壇者として迎えた。テーマは「たたかう「文」――言語の暴力と希望について」であった。氏は古今東西の思想を参照し、「文」の内実およびその作用について論じた。

石井剛氏（EAA副院長）

「中動態的な悪」／「システム的な悪」と「文」

講義は最初に、「中動態的な悪」（東浩紀、引用



は最後の文献表を参照）という、人間が能動的でも受動的でもなくただ周囲に従い、加害するはめに「陥って」しまうという悪の形態を提起した。それは「システム的な悪」とも称しうる。石井氏によれば、生成過程に善悪が共働する一つの中動態的なシステムとして世界を捉える見解は、東西の思想にともに存在する（戴震、シェリング）。

他方、かかるシステムは、悟性能力をもつ人類が「文」を介して構築しているものと考えられる。ここでいう「文」は、文字、文章、ないし文化全体を指す。「文」は、初めから病に付き纏われたものである一方で（章炳麟 a）、悪を正す上での積極的な役割が期待されるものでもある（『論語』）。

「最悪の悪」を回避する

システム形成に組み込まれている「文」は、具体的にはいかにしてシステム的な悪に対峙しうるのか。システムに固有の悪は原理的に回避できないが、少なくとも「最悪の悪」——今学期の講義で検討された「原子力の悪」、「民主主義の悪」、「人類活動自体の悪」といった人類自らの力によって解決しえないような悪——を回避する可能性を考えるべきだ、と石井氏は主張した。彼はこれらの悪の克服に向け、未来の破局を公言し（デュピュイ）、あるいは過去における悪を記録する（章炳麟 a）ために「文」を用いることを提案した。さらに、「文」の力には、他の生物を含め一種の「宇宙の希望」を切り拓く可能性があるという。

「文」の場としての大学

だが、今日的社会では「文」は機能しにくくなっているという問題がある。そこで、大学という、先生・学生がともにシステムによる束縛を一旦棚上げにし、「文」の形態を介して自由に議論し、それによってシステム的な悪を少しずつ修正していく空間が重要となる。これは孔子の教育観に遡ることができ、また本学期の講義を通してたどり着いた一つの結論である。

その後、「文」によって「たたかう」ことの意味、学校教育の実態や今後の課題に関して活発な議論応答が交わされ、議論が深められた。

報告者:丁乙（EAAリサーチ・アシスタント）

リアクション・ペーパーからの抜粋

(1) 名を明確にすることは可能か。講義で、たとえば民主という言葉であってもアメリカと中国では全く異なり、もっと言葉を明確にしていく必要があると孔子が言ったことを教わりました。それは可能なのでしょうか。世界内存在といわれるように、人それぞれは独自の世界観を持っていて、ある事物に対してそれに対する解釈は人それぞれに異なるので、やはり全く同じような解釈を与えることは難しいように思える。しかし、それでも尚努力はするべきで、そのために歴史を記録してそれについて学ぶ必要があるのではないか、と考える。（文科三類2年）

(2) 人間世界にはもともと善も悪もあり、言葉はもともと曖昧で病的なものであって、人為的な絶え間ない努力によってそれを正そうとし続けるしかないという考え方は、少し悲観的でもありながらやはり最悪の悪を克服するために必要なのかもしれないと感じました。「最悪の悪＝人為的な力で癒すことができないとわかっていることをそれでも行うこと」とするならば、私個人的には現在の、コロナ化の中でオリンピックを強行しようとするIOCや政府の姿がタイムリーにそれだと想起されました。「文」の場としての大学は、個人の信条や政治的背景など様々な前提をいったん脇に置いて議論できる限定された場所だとおっしゃっていましたが、そのような要素すべてを捨象して中立なまっさらな状態で学問をすることは本当に可能なのか、逆にアクティビズムなど政治的な要素は学問の範疇に持ち込むべきではないのだろうかと疑問に思いました。（文科三類1年）

(3) 情報量が圧倒的に増えていく中で、虚偽の記録をつけるなど「文」の悪用をする事例も増えているが、どう対処していくべきだろうか。「文」の悪用もやはり悪の生起にすぎず、その悪を記録するという形、すなわち「文」による抵抗でしか対応できないのだろう。今後、この構造が変わりうるとすれば、それはやはり「文」の力によるものであろう。（文科二類2年）

第3回　東アジア仏典講読会

2021年7月10日

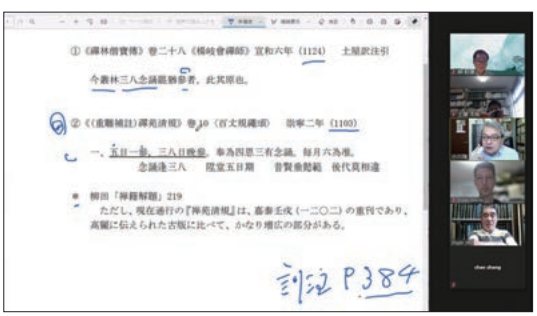
2021年7月10日（土）日本時間14時より、第3回東アジア仏典講読会を開催した。この読書会は、禅を中心に仏教の研究を行っている日本・中国・韓国・フランスなど各国の研究者が集い、文献の会読や研究発表・討論を行うものである。今回は（1）仏教の「唐宋変革」に関する議論、(2)『宗門武庫』の会読、(3) 慈明婆に関する一節の会読が行われた。

（1）夙に東洋史学において「唐宋変革」と称されるように中国の社会は唐から宋にかけて一変する。政治体制について言えば、唐代以前は門閥貴族が政治の実権を有していたのに対し、唐末五代の戦乱期に貴族が没落して武人が擡頭し、宋代になると皇帝の独裁制が確立した。この間に仏教も大きな変化を遂げ、唐代以前は仏教の勢力が優勢であったのに対し、宋代以降は力が弱まり、中国思想の主流は儒教へ移行するとともに、唐代以前は諸宗が並存していたのに対し、宋代以降は禅宗が主流となる。こうした従来の指摘に対し参加したメンバーからは、以下のような様々な観点が提示された。すなわち、変化したのは仏教というよりも、むしろ社会環境のほうであり、本質的な部分が変わらなかった仏教は時代にとりのこされたからこそ衰微したのではないか。仏教のなかでも禅宗が宋代以降の官寺制に適合し、士大夫の知的関心に応えたからこそ、宋代以降の中国仏教の主流となり得たのではないか。寺院や僧侶の数は元代まで増加しつ

づけたのであって、宋代以降仏教が衰微したとは一概に言えないのではないか。唐から宋にかけて仏教が変わったのは衰退ではなく体制化であり、仏教と儒教の棲み分けができたのではないか。社会環境の変化により仏教の立ち位置が変化するというのは日本の室町期にも見られた現象ではないか。変化しなかった仏教の本質とは輪廻を前提とすることであり、宋代以降の知識層にはそれが次第に受け容れがたいものとなっていったため、仏教が公の空間から私的な空間へと移っていたのではないか。輪廻を前提とする民衆むけのものと、それを前提としない知的なもののに仏教が二極化したのではないか。などなどである。各分野の研究者から様々な観点が出され、非常に活発な議論が為された。

(2) 次に小川隆氏（駒澤大学）による『宗門武庫』第5段「舜老夫」の講読とそれに基づく議論が行なわれた。

その段に記される一節は以下のようなものである。舜老夫は雲門宗の禅僧であるが、同じ雲門宗の天衣義懐を「葛藤禅」（くだくだしい言葉を弄し、煩悩を瞬時に断ち切れない禅）と罵っていた。舜老夫のもとにいた円通法秀は天衣義懐の法を嗣いだ弟子であり、師を罵倒する舜老夫に不満を抱いていた。とうとう我慢しきれなくなった円通法秀は「夜参」の際に舜老夫を言い負かそうと、列から進み出て声を励まし切り出した、「『円覚経』にはこうございます……」。すると舜老夫は間髪容れず「本日の説法はこれまで、みなご苦労であった!」と言うや、さっさと方丈（住持が住まう部屋）にひきあげてしまった。法秀はつぶやく、「このじいさま、まるで全身が一個の眼だ。みごと義懐禅師を罵りきった……」。



小川氏は最後に法秀がつぶやいた言葉「みごと義懐禅師を罵りきった（罵得懷和尚也）」の原文中に見える「得」が、動作が可能であることを表すだけでなく、その行為によって然るべき結果を実現・達成したという意味を表わすこともあることに着目し、「罵るという行為により然るべき結果を達成した」すなわち「義懐禅師を罵るという行為により、それを聞いていた円通法秀の「葛藤」（言葉）への拘泥を断ち切るという結果を得た」のではないかと論じた。つまり舜老夫が常々天衣義懐を罵っていたのは、その場にいない天衣義懐を貶めるためではなく、それを聞いていた円通法秀の言葉への拘泥を断ち切るためだったのである。

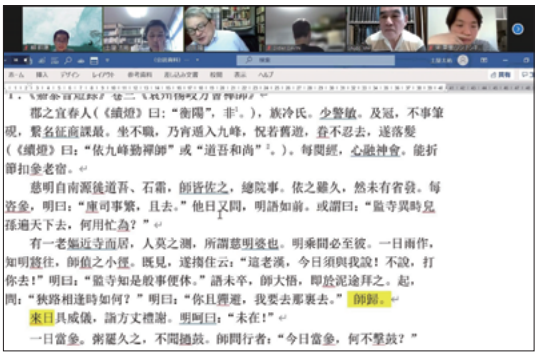
その後参加者により、雲門宗における「葛藤禅」の語義、ならびに「夜参」が制度化されたものではなかったことなどについて議論された。

(3) 最後に土屋太祐氏（新潟大学）により慈明婆に関する一節の会読が行われた。慈明婆は宋代の禅僧慈明楚円の妻と目される人物で、『嘉泰普灯録』巻3の楊岐方会章に登場する。それは以下のような内容である。

仏教では戒律で僧侶の妻帯が禁じられているが、慈明楚円の寺の近くには「慈明婆」が人知れず住んでおり、慈明は時間があるといつもそこに通っていた。慈明の弟子の楊岐方会はいまだ悟りを得られておらず、時々に教えを求めたが、慈明はそれに答えることはなかった。ある日、雨が降り、慈明が「慈明婆」のもとに行こうとすると、その前に楊岐が立ちはだかり今日こそ教えを説くよう求めた。慈明は言う、「そのようなことがわかれば、もうやめよ」。それを聞くと楊岐は大悟し、雨でぬかるんだ道で礼拝し尋ねた「狭い道であった時はどうですか」。慈明、「お前は避けよ、私は向こうに行く」。そこで楊岐は寺に戻った。翌日、打たれるべき太鼓が打たれないことに疑念を抱いた楊岐が僧に尋ねたところ、慈明がまだ戻ってきていないことを知り様子を見に行くと、慈明がかまどの火を見、「慈明婆」が朝食の粥を煮ているところであった。慈明は言う、「お前が適切な言葉を言えれば帰ろう。それができなければ、それぞれ別の道を行こうではない

か」。すると楊岐は何も言わず、笠をかぶり数歩あるいた。慈明は大いに喜び、一緒に寺に戻った。その後、慈明が外出すると、どんなに遅い時間であっても楊岐は太鼓を打ち修行僧を集めさせた。慈明は怒って言う、「若僧め、夜に太鼓を打って人を集めるとは。どこにそんな規則があるというのか」。楊岐、「汾陽の晩参です。どうして規則にないことがありましょう」。いま定期の念誦のあとに更に参集するのは、これが起源である。

参加者による議論では、日本の禅僧一休がこの一段にしばしば言及し、「慈明婆」のもとから寺に戻った慈明の行為を不徹底と批判すること、この「慈明婆」の話が先行の文献『禅林僧宝伝』に見えず後の創作であろうこと、この一段で重要な一文が文字通りの意味にも読めるし禅的な比喩としても読めることなどが指摘された。ただ今回は時間の制約上、これ以上の議論はなされず、次回に持ち越されることとなった。



今回の読書会は中国仏教の唐宋変革という非常に大きな話題から、宋代禅の具体的な事例まで話題は多岐に及んだ。今後の講読会でも引き継ぎ議論を深めていきたい。

報告者:柳幹康(東洋文化研究所)

一高プロジェクト

田仲一成先生へのインタビュー：一高から教養学部への過渡期について

2021年7月10日

7月10日（土）、藤木文書アーカイヴにおける一高生インタビューの一環として、教養学部が初年度を迎えた昭和26年に入学された田仲一成先生にお話を伺う貴重な機会を得た。田仲先生は言わずと知れた中国祭祀演劇研究の大家であり、東京大学東洋文化研究所を退職され、その後も大学の教員を勤められた後、現在は公益財団法人東洋文庫に所属していらっしゃる。今回のインタビューは、先生のご希望により、この東洋文庫において行われることとなった。藤木文書のメンバーより宇野瑞木氏（EAA特任助教）と本報告者（宋舒揚〔総合文化研究科博士課程研究生〕）が直接お伺いし、その他に高原智史氏（EAAリサーチアシスタント）および横山雄大氏（EAAリサーチアシスタント）がZoomにて同席した。なお対面インタビューは、新型コロナウィルス感染予防のため、透明パネルを挟み、全員マスクをつけた状態で行われた。

田仲先生のお話は、まず、ご自身がなぜ一高に憧れたか、というところから始められた。それは端的に、熾烈な争いの頂点であるエリート中のエリートが集まる一高を目指したいというお気持ちがあったからだという。また旧制高校の学生は、そのまま帝国大学までいけることがほぼ確実で、そこも大きな魅力であった。

先生は自らご用意くださった昭和10年頃の受験情報が載っている雑誌記事の資料（『日本国「受験ユーモア」五十五年史』所収の『蛍雪時代』等）に基づき、ナンバースクールとその他の旧制高校などの入試の倍率、学科ごとの受験者数と合格者数、試験科目の配点等、当時の受験事情を確認しなが

ら、一高に入るということが、現代の東京大学受験と比べても遥かに難しいことであり、いかに難関であったか、について丁寧に説明くださった。

また先生が最初に勤められた大学である北海道大学は、旧制北海道帝国大学予科からそのまま入学したこと、また他大学に比べて寮に入る人が多かったこともあり、新制大学においてもその気風が受け継がれていると感じたという。一方で、その後勤務された熊本大学、東京大学、金沢大学においては、それぞれ五高、一高、四高とは断絶があり、旧制高校から新制大学への移行において、各高の個性が消滅し画一化を実感されたという。

この一高から教養学部への移行期の雰囲気について、昭和24年4月に一高以外の旧制高校の出身者も入ってきた時点で、純粋な一高という空間はなくなり寮歌が駒場から消えたということがある。25年には、一高出身者と、東大に合流した一高以外の旧制高校（東京高校、浦和高校など）出身者、そして新制高校の出身者とで三つ巴の様相を呈した。そして田仲先生が教養学部に入学された26年には、23年に最後に一高に入学した者もすべて卒業してしまっていた。但し、寮には、特別な事情があったためか、ごく少数ながら、元一高生も、また特設高等科生出身者も残っていたということである。なお26年の『教養学部報』には、前年の旧制高校出身生と新制高校出身生の試験の答案を教官が比較した記事が掲載されており、そこでは両者の実力差が歴然していると書かれていた。先生は、一高生がすぐれた寮歌を自ら作詞できたのも、このような高い学力を備えた学生ならではのことであったとおっしゃった。

パネル越しの田仲一成先生（駒込の六義園の近く、公益財団法人東洋文庫にて）

続いて、私たちの方で事前にお渡しした質問項目に沿って先生のお話を伺った。

まず駒場キャンパスの建物についてである。一高時代の建物のなかで特設高等科生の専用校舎であった現在の101号館は、まだ「特高館」と称されてはいたが、実際には事務棟として使用されていたという。900番教室は、一高時代は「倫理講堂」と呼ばれ、講堂の左右に文武両道を象徴する坂上田村麻呂と菅原道真の肖像が掲げられていたが、昭和24年頃には既に肖像は取り外され、「倫理講堂」という名称もなかったのではないかということであった。少なくとも、26年の入学時点で一高時代の名称も肖像もなくなっていたのである。また駒場の地下道については、ご存知ではあったが、中に入ることは許可されていなかったという（当時、原爆が投下されたら、地下道に逃げればと良いなどと言われていたそうである。実際に戦時中の一高では空襲時に地下道を防空壕として使用した）。

なお、寮については、四つの寮のうち南寮が教官室として使われていた。先生ご自身が寮に入っていなかったため、寮の運営などについて詳しくは語られなかったが、戦前と同様に部活動などで部屋割りがなされていたらしい。但し、当時は生活が非常に厳しく、寮生の多くは学費を捻出するために授業どころではなくアルバイトに出ており、寮にはあまり人がいなかったということであった。

また、先生は難関に挑戦したい気持ちから一高入学を志望されていたが、教養学部に入学してから、一高の精神や気風の名残りを特に感じることはなかったという。なぜなら、当時の社会全体にエリート意識を否定する風潮があり、民衆が歴史を牽引する歴史観が主流となっていたからであった。そのような空気の中で、エリートとして誇りを持つようなことは恥ずかしいと感じられたのである。

この背景にある大きな社会意識の変化は、教育研究にも影響を与えていた。たとえば、学生が中国語に興味をもった理由には、中国という国に対して未来があると期待していたからであった。当時は寮には中国研究会（中寮11番）があり、中国語を勉強する

2019 年 10 月、詠歸會にて 1935（昭和 10）年に一高が本郷から駒場に移転した時の行軍を再現するウォークを 2 日がかりで実施した時の写真。途中、皇居前にて集合写真を撮影した。前列左端が田仲先生（本写真は撮影者の谷田和夫氏及び所蔵者の田仲先生のご厚意により掲載しております）

というより、ある種の革命に関する啓蒙活動として機能していた。その会員は中国研究所との関係があり、その独自のルートで『人民日報』などの中国の出版物を手に入れていた。当時、田仲先生は、中国語の授業を通して大きな影響を受けていた工藤篁先生が、そこに関わることを良しとしなかったために近づかなかったという。この工藤先生は漢字一文字について深く探究することを重視し、独自の教育方針を持たれていたというが、一高時代からの教員には、この工藤先生のように個性の強い方も多かった。

また、一高出身者が中文科に多く入ったのも、文学を勉強したいわけではなく、中国の社会経済を勉強したかったが法学部や経済学部に受け皿がなく、やむなく中文科に入ったということであった。興味深いことに、漢文学者になった方は一人もおらず、みな現代中国や現代文学を志したという。また、一高時代に、戦争責任と地続きに思われた漢文（古典）を毛嫌いして、戦時中への反動として「漢文と体操をやらない運動」も行われた。日本文学に関しても、日本精神の象徴とされた『万葉集』などよりも、マルクス主義の問題意識から中世文学を重視していたという。

同じ理由で、共同体のアイデンティティーを象徴する寮歌も昭和 24 年 3 月をもって駒場から消えていた。先生ご自身も駒場で寮歌を聞いたことはなかったという。昭和 27-29 年度以降の入学者くらいから寮歌に対する違和感が薄らいだらしく、この期の方々の間から平成 14 年になって詠歸会ができ、寮歌が復活してきた。それは、この方々が 27 年までのアメリカに対する反発、政治の季節が終ってから以後の入学生だったからではないか、との推測を述べられた。

なお、田仲先生が現在において寮歌を歌う会の「詠歸会」に参加された経緯は、「詠歸会」の創始者の一人を実兄（一高 23 年入学）に持つ旧制中学の同級生（新制東大）に誘われたからであるという。格別、一高寮歌を愛された万葉集学者の五味智英先生（一高教授）と一高時代に交流の深かった一高 23 年入学の井下さんに歌詞や歌唱について解説していただいている。その中でもリーダーたち 12、3 名が「和楽会」という名称で活動しているという。現在は、新型コロナウィルスの関係でオンライン活動に切り替えながらも、「和楽会」の 10 名程度が月 1 回集まっている。合唱ができないのは仕方ないが、やはり物足りないということであった。オンラインでの各自の独唱という形で実感された声によって共同化する意味についてのお話は、祭祀演劇の専門家たる先生ならではの観点が見られ、大変示唆的であった。

今回のインタビューを通して、一高から教養学部へ転換期について貴重なお話を伺うことができた。社会全体の時代の空気というものがいかに若者（学生）の考え方と関心に影響を与えたか、が良く伺えるお話

でもあった。これは戦時中、エリートの頂点に立つ一高生（留学生を含めて）がどのように考えて活動していたのかを探るにあたっても大変参考になるだろう。3時間弱の長時間にわたり、熱心に質問に答えてくださった田仲先生に心より感謝申し上げたい。

報告者:宋舒揚（東京大学大学院博士課程）

EAAダイアローグ

第9回　高橋哲哉氏×中島隆博氏

2021年7月12日

2021年7月12日、東洋文化研究所第一会議室にて、高橋哲哉氏（東京大学名誉教授）と中島隆博氏（EAA院長）のダイアローグが開催された。オリンピック開幕が目前に迫る中、4度目の緊急事態宣言が発令された直後ではあったが、最新の注意を払い環境を整えた上で、対面での開催に踏み切った。

ダイアローグ・シリーズでは、対談相手となる先生方に、幼年期から現在に至るまでの研究者人生を語り起こして頂いている。こうした貴重なお話を拝聴するには、オンラインだと少し味気ない。とりわけ今回のダイアローグは、高橋氏と中島氏の年来の友情があってこそ実現したものであったので、対面方式での開催が叶ったことは幸いであった。

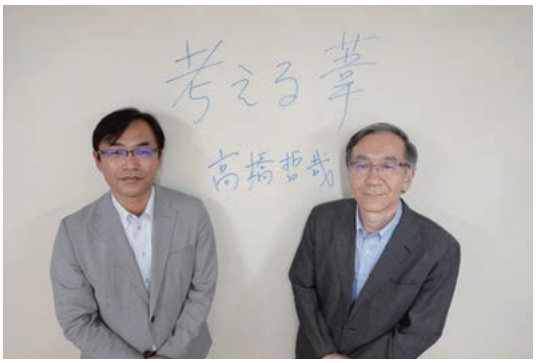
高橋氏は1956年、現在の福島県いわき市（当時の平市）に生まれた。福島県内を転々とした経験やお父様の思い出を、一つずつしっかりと確かめつつ、懐かしそうに語ってくれた。「もはや戦後ではない」の掛け声に象徴されるように、高度経済成長期の右肩上がりの時代だった。その発展の波が地方都市にも押し寄せる中、海や山の近くの小さな町で楽しく過ごした幼年時代であったという。

そのような中、後に哲学、とりわけヨーロッパ哲学を志す原点となった本がある。ソクラテスやニーチェを少しずつ齧り読みし始めた折、当時中学生だった高橋氏の印象に強く刻み込まれたのは、『世界の旅』という写真全集に収められたフランス・ブルゴーニュ地方のヴェズレーという町であった。特に高橋氏を魅了したのは、夕日に照らされ佇むサント・マドレーヌ寺院の姿であった。ヨーロッパに対する憧れは、文学によっても醸成された。中でもドストエフスキーに惹かれ、そこに漂う存在論的態度は、後に哲学を専門する一つのきっかけを作った、と高橋氏は振り返った。

中島隆博氏（EAA院長）

高橋哲哉氏（東京大学名誉教授）

高橋哲哉氏の著書



本郷オフィスにての記念撮影

その後、大学に進学した高橋氏はフランス語を第二外国語として学んだ。入学直後、坂部恵先生の講義の初回に、先生がミシェル・フーコーの原書を持ち込んで解説をし始めたのに刺激され、現代哲学に関心を向け、現象学を自らの研究テーマとするに至った。卒業論文・修士論文ではフッサールを研究し、その学問論、とりわけそこで論じられている「責任」概念について探究した。同時にメルロ＝ポンティのオープンな哲学的態度にも惹かれていた。また、後年の研究の中心となるデリダにもこの頃からすでに強い関心を持っていたという。

1992年秋から1994年春までの期間をフランスで過ごした。帰国後は映画『ショア』（クロード・ランズマン監督）の上映や、加藤典洋氏との間に繰り広げられた「敗戦後論」論争、そして慰安婦問題や靖国問題を中心とする歴史認識問題といった事柄に深く関与していった。ひとことで言えば「政治」的であるこれらの事柄に関わるに際して高橋氏が重要視したのは、次のことである。「表現不可能なものの表現」という思想的問題を前に「（証言を）聞く」という態度を貫くこと。「判断不可能なもの」「決定不可能なもの」というアポリアを突き詰めた上で、それにもかかわらず「脱構築不可能なものとしての正義（justice）」を求めること。

デリダの議論を踏まえて、不可能としか言えないようなアポリアを引き受けつつも、実践的には決定しないということは不正になる、と述べた高橋氏に対して、カール・シュミット的な決断主義と、アポリアを踏まえた決断はどのように異なるのか、と中島氏が問うたスリリングな場面もあった。これに対して高橋氏は、決断という契機の只中に決定的な要素としてそこにある「他者」、そして「私における他なるもの」すなわち予見不可能な到来するもの、の重要性について論じた。

ほかにも、「敗戦後論」論争や沖縄の米軍基地の県外移設をめぐる論争についても多くのことをお話いただいたが、その多岐にわたる議論の詳細については、今後発刊予定のブックレットを是非ご覧いただきたい。

ダイアローグの最後、「今後の哲学的展望は？」という中島氏の問いかけに対し、高橋氏は次のように応答した。研究を志した早い時期から、いわゆる「哲学」という枠を定めること自体に問題・限界を感じてきた。重要なのは「哲学」という枠組みの中で「哲学」について研究することではなく、「哲学」を実践的営みとすることである。その実践とは、様々な出来事や概念、そうしたことの可能性の条件を常に問い返していくことに他ならない。

フッサールにおける「責任」論を出発点として、自身も「責任」そして「他者」という問題系に深く関与してきた哲学者・高橋哲哉氏の信念に触れた、貴重な3時間であった。

報告者:崎濱紗奈（EAA特任研究員）
写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

東京カレッジ主催シンポジウム・シリーズ（EAA共催）

人文社会科学の未来

2021年7月12日・7月19日・7月29日

東アジア藝文書院は「東アジア発のリベラルアーツ」を標榜すると共に、「新しい学問」を構築することを目指している。新しい「研究」でも新しい「教育」でもなく、新しい「学問」と称しているところが肝である。「学問」はその中身であるだけでなく、そのかたちをも含むべき大きな概念であり、わたしたちは大学を拠点として行われる学問のあり方そのものを、大学の中と外、学問の中と外のそれぞれからつねに新しいものへと更新しながら、大学と学問とが共に人類がよって立つ世界のよりよきすがたを照らす役割を果たしていくべきであると考えている。それは理論と共に実践によって培われていくべきものであるが、その過程では既存の学問の構造（専門領域分類、教育制度、選抜制度など）に対する問い直しを迫られることもあるだろう。いや、それは不可欠であると言うべきだ。EAAはもとよりとても小さな組織なので、現実にできることは限られている。しかし、小さいからこそ新しいさまざまな試みが機動的に実行できる。北京大学をはじめとする国際研究ネットワークが牽引力となって学部教育での新しいジョイント・プログラム「東アジア教養学」が設立されたことや、ダイキン工業から社員の皆さんをお招きして行われた「Look東大」のテクスト講読セミナーや学術フロンティア講義、さらには若手研究者が主体となって取り組んでいる一高プロジェクトなどは、いずれもEAAならではの機動力を活かした取り組みであり、それらの一つひとつが「新しい学問」のかたちを実践しながら世に問うていく明確な意図をもって進められている。

こうした活動の意義をお認めいただいて、2021年2月に公表された全学の「東京大学における人文社会科学の振興とその展望――東京大学人文社会科学振興ワーキング・グループ最終報告書」には、ワーキング・グループとは別に発足した事業でありながらも、EAAが紹介されている。とてもありがたいことだ。リンク先のページに詳らかにされている紹介によると、この全学ワーキング・グループは、2016年からという息の長い活動の中で本学における人文社会科学を振興するための方策を検討してきたということだ。報告書はその活動成果であると共に、今後の本学における「人文社会科学」のあるべき方向性を示すものだと言え、画期的なものだと言うべきだろう。

わたしたちとしては、この報告書に示されたヴィジョンが今後どのように具体化していくのか気になるところであるが、東京カレッジが早速その期待に応えるように「人文社会科学の未来」と題するシンポジウム・シリーズを開催した。7月12日、19日、29日の3回に渡って行われた活発なディスカッションには、東京カレッジ長であり、EAAの初代院長でもあった羽田正先生のはからいで、EAAも共催団体に名を連ねることができた。

3回のパネルディスカッションは、東京カレッジのウェブサイトでその模様が全篇動画として公開されているので、ご関心のある方にはぜひご覧いただきたい（下記リンク参照）。

Panel 1（2021年7月12日）
文系・理系という区分の再考
https://www.tc.u-tokyo.ac.jp/ai1ec_event/4417/

Panel 2（2021年7月19日）
これからの人文社会科学
https://www.tc.u-tokyo.ac.jp/ai1ec_event/4345/

Panel 3（2021年7月29日）
知の社会学の視点から
https://www.tc.u-tokyo.ac.jp/ai1ec_event/4421/

Panel 3にはEAA院長の中島隆博さんも登壇している。人文社会科学をめぐるこうした新しい動きに対してはEAAもそれに棹さすような存在たりたいと願っ

ている。さらに言えば、人文・社会・自然という分類に共通の土台を与えるような学問こそがEAAの目指す「新しい学問」であろうと思う。また特に討論の中でも言及のあった「カレッジ」などは、EAAの「書院」たる存在意義に直接関わっている（詳しくは2021年2月20日のEAAシンポジウム「哲学としての書院」〔https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/academy-as-philosophy/〕を参照のこと）。

ようやく3年目を迎えたばかりの東アジア藝文書院だが、「新しい学問」に向かってこれからも力強く進んでいきたい。その過程では予期せぬ困難も待ち受けていることだろうが、学内外の多くの方々に支えられている以上、それらは一つひとつ克服していけるにちがいない。わたしたちも支えてくださっている方々の期待に応えられるよう日々努力していかなければならない。

報告者:石井剛（EAA副院長）

一高プロジェクト

工藤康氏へのインタビュー：昭和23年、一高最後の入学生として

2021年7月13日

2021年7月13日、藤木文書アーカイヴのメンバーは、昭和23（1948）年に一高に入学され、学制改革で翌年東京大学教養学部に改めて入学された工藤康氏を鎌倉のお住まいを訪ね、インタビューを実施した。工藤氏はすでに2回のワクチン接種を終えられ、インタビューをする側も感染対策を徹底して臨んだ。直接お話をうかがったのは、宇野瑞木氏（EAA特任助教）と小手川将氏（EAAリサーチ・アシスタント）と報告者（高原智史〔EAAリサーチ・アシスタント〕）の3名で、その他に日隈脩一郎氏、横山雄大氏（ともにEAAリサーチ・アシスタント）および宋舒揚氏（東京大学大学院博士課程研究生）もオンラインで参加した。

現在に至るまで寮歌を歌う会「玉杯会」の世話役をなさっている工藤氏は、一高同窓会の広報をひきつぐ「玉杯会便り」のブログも運営なさっている。インタビューはこの寮歌の話題から始められた。東アジア藝文書院の「藝文」とは何によるか、ということから、第二十回紀念祭寄贈歌（明治43年）「藝文の花」に話が及び、そこから、公募により寮歌が毎年作られるプロセスについて説明がなされた。

一高寮歌は、中学生などの憧れの的だったと言わ

工藤康氏。聞き手は宇野瑞木氏

れるが、工藤氏の談によると、明治の頃は、一高で寮歌が作られると、町に広がり、いわゆる女中さんなどがそれを聞きつけて子どもに聞かせ、「いずれは坊ちゃんも歌うのですよ」と言い聞かせたのだという。

卒業後の一高卒業生のプライベートな集まりでは、必ず寮歌を歌ったという。特に、「嗚呼玉杯」（第十二回紀念祭東寮寮歌〔明治35年〕）は特別で、右回りしながら二唱し、それが済めば会はお開きというお約束だった。工藤氏は、第四十九回紀念祭寮歌「光ほのかに」（昭和14年）が特にお好きだとのことである。

在学中、弥生道（銀杏並木）を散歩するのが好きだったと言われ、学生数もずっと少ない当時、弥生道にはほとんど人がおらず、今とは違う独特な雰囲気があったという。

冒頭の記述の通り、工藤氏は昭和23年に一高に入学され、24年に一年次修了で東京大学教養学部に進まれたが、24卒と書くと、24年に三年生まで了えた人と紛らわしいため、26年卒業相当ということで、「昭和26理甲三」という年次表記になると説明された。過渡期の複雑な制度のありようがうかがわれる。理甲三というのは、理科の理工系で第二外国語がフランス語のクラスであった。

旧制高校には、中学を早く了えて若くして入学する人がいる一方、社会に出てから入ってくる年長の生徒、なかには30歳を超えて入ってくる「オンケル」（独語でおじさん）もいたと言い、高等学校における生徒の年齢分布の多様性が言われた。

お出しいただいた一高在学時のノートをめくる宇野氏。美しい丁寧な筆致で外国語、日本語、数式が書かれている

工藤氏は、中学四年修了の後、一高の一年生になったが、同級で中学五年となった人はその先、新制高校三年生となり、さらに大学で合流することとなったという。一高での一年と、教養学部での一年目はほとんど教授内容が同じだったという。このあたりも、制度の複雑さを十分にうかがわせる。これに関した思い出として、微分積分学は中学五年で教わるが、高校入試で出る、だから中学四年生で独学したという。その後、微積は一高でも習ったし、教養学部でも同じく習い、重なっていたという。

一高の入試についても触れられ、選抜は点数によってザルで掬うのではなくて、粒選りなのだと言われていたという。つまり、ただ点数で振り分けるのでなく、答案にあらわれた考え方などまで見られたうえで、教官会議も開かれ、選抜はなされていたのである。また教養学部への入学試験で苦労したのは、新制高校で実施されていた社会科などの科目への対応であった。

寮の部屋割りは部活動単位によるものが多く、工藤氏はサッカー部で、中寮19、20番だった。サッカー部にはインドネシアからの留学生がいたことを覚えているというが、部屋は別だったとのことである。

フランス語の授業については、川口篤、市原豊太、前田陽一といった教官の名を挙げながら、週18時間にも及ぶ多くの時間数があったこと、文法の授業は早々に終わって、すぐに原書を読んだこと、理科でも、日本語の教科書は少なく、数学はフランスが進んでいたので、フランスの数学者のポアンカレ（1854-1912）など、フランス語で数学を学んだことを語られた。

戦後の寮生活について、工藤氏の時代は、食糧がなくなれば休校していた数年前に比べれば、食糧事情も改善していたが、やはり厳しいものもあり、部活動でサツマイモの栽培もしたという。外の飲食店で使える外食券というものが配られたそうだが、工藤氏はもらわなかったとのことである。

現在の101号館は「特高館」と呼ばれ、教務課が入っていたと記憶されているとのこと。また、寮から教室へ行くのに特高館や地下道はよく通っていたという。試験の成績表も特高館に貼り出されたという。その順位で負担額が決まる（首席は最も多く出資する）番付コンパという話も出た。

左から高原智史、工藤康氏、宇野瑞木氏、
小手川将氏

駒場キャンパスについてよく覚えていることとして興味深かったのは、校外に出て帰校したとき、「ああ、俺の住み家へ帰ってきた」という感覚が強くあったという点である。その感覚は、自宅よりも強かったという。

寮内での生活について、一部屋に 12 人、共同生活を謳歌したが、中には、プライヴァシーを重視して、オフシーズンに入ると自分のベッドの周りを手製のカーテンで囲い、その中に閉じこもる者もいた。そうした共同生活の中で、同級生や先輩との間で、文理の垣根も越えて、勉強の情報交換や交流が行われた。

一高の終焉については、三年生までいたわけでなく、一年次修了までしか一高にはいなかったので、一高終焉への感慨は強くないという。同級には、寮歌祭に出てくる人も少ない。一級上の先輩曰く、一高に入ったら廃止反対の声が渦巻いていると思ったら、そんなことはまったくなかったことに拍子抜けしたという。

ここで少し休憩したあと、インタビューを続けた。

旧制高校の教育は高等普通教育とも教養教育とも言われるが、どのようだったかお尋ねすると、一高には、「一年生は盲従せよ、二年生は考えよ、三年生は改めよ」という格言があり、未熟な 16 歳で一高生活に飛び込んだ時分は無我夢中で過ごし、考え改める時間に恵まれず、その辺りには思いが至らなかった、という。卒業して振り返ってみるときに、その教育の特質や有難さがわかってきたとされた。

戦後すぐの教養学部では一高出身者は、居心地の悪い面もあったという。というのは、他の高校が教養学部に合流しており、一学年 400 人の一高生は教養学部 3,000 人の中では少数派となってしまったからである。一高（だけ）の寮歌は、東大の歌ではないということで、歌いづらくなった。他の高校からの一高への対抗意識はずいぶんと強かったとのことである。

最後に、若い世代に伝えたいことをうかがった。寮の共同生活において、プライヴァシーは制限されながらも、本音で語り合うことから人間形成がなされるということを強調された。それは今日の、文理横断のリベラルアーツというのとはまた少し違った形での人間形成だと言われた。フランス国旗にあらわれている自由、平等、友愛に言及し、対立しうる自由平等を両立させるために友愛が必要とされるのだとおっしゃった。そして理屈だけでは解決できない問題を解決するためにリベラルアーツが必要なのだとされた。リーダーの育成のためにリベラルアーツが必要であり、それがあって初めて、心服されるリーダーが育つとされた。東アジアからリベラルアーツを考える EAA にとっても印象深い話の終わりであった。

改めまして、このコロナ禍の中で、ご自宅でのインタビューに快く応じ、またあたたかく迎えてくださった工藤康様およびご夫人に心より御礼申し上げます。

報告者:高原智史（EAAリサーチ・アシスタント）

EAAセミナー

「東アジアからの批評理論」合同発表会

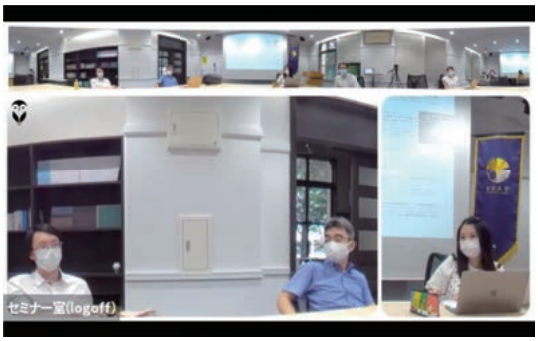
2021年7月14日

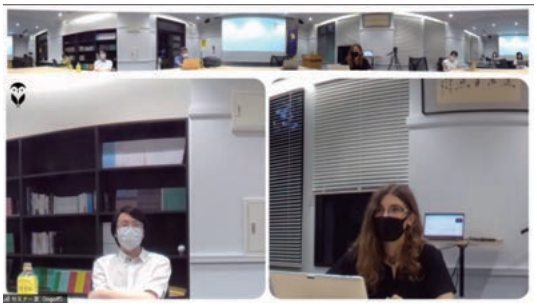
2021 年 7 月 14 日（水）、EAA セミナー「東アジアからの批評理論」合同発表会が開催された。本セミナーは、EAA の石井剛氏（EAA 副院長）、張政遠氏（総合文化研究科）、王欽氏（総合文化研究科）が開講する大学院授業の共同企画である。近現代東アジアの思想・文学を専攻する大学院生 5 名は研究発表を行い、石井氏、張氏、王氏はコメンテーターを務めた。

まずは張氏から本イベントの趣旨説明がなされた。その後、1 人目の発表者王雨芊氏（東京大学大学院）は「柳田國男の『海上の道』から「一帯一路」の再検討」と題する発表を行なった。王氏は現在中国によって推進されている「一帯一路」というアジアからヨーロッパ、アフリカまで包摂する経済圏構想と、日本人・日本文化南方由来説を唱えた柳田國男（1875-1962）『海上の道』を比較し、文化交流における海の役割に注目した。王氏によれば、海上の道は文化の道でもあり、「一帯一路」と『海上の道』は多くの違いを含みながら、技術の移転、文化の伝播という点、ナショナリズムを背景とした点では一定の共通性が見られる。その後のディスカッションにおいて、『海上の道』と近代日本のナショナリズムや吉本隆明らの議論の関連、海の交流に特有な覇権性・拡張性、「一帯一路」と「改革開放」路線の違い、文化の伝播とその背後にある経済力の関係など、様々な問題が提起された。

次に崔高恩氏（東京大学大学院）は「日野啓三と朝鮮」というテーマについて発表を行った。崔氏は現代日本の作家・評論家日野啓三（1929-2002）の「無人地帯」（『文學界』1972 年 5 月号）を取り上げ、植民地朝鮮で幼少期を過ごし、戦後に韓国特派員やベトナム戦争取材という体験を持つ日野の作品において「朝鮮」の現実がどのように受け止められたかを論じた。崔氏にしたがえば、日野のテクストでは「故郷」であるはずの「朝鮮」は歴史の大きな断絶と連続のなかで確固たる固有名を持ちえず、むしろ故郷ではない、どこにも属さない異質な領域が見出される。そこで「越境」の新たな可能性が模索されているという。発表後のディスカッションでは、東アジアの近代国民国家の構築に見られた脱漢字の動きと対照的に、日野のテクストで漢語をあえてローマ字で表記することはむしろ国民国家を相対化する効果を持っているということが指摘された。ほかに近現代中国の言語政策、無人地帯における風土・歴史の問題も議論された。

続いて朝倉智心氏（東京大学大学院）は「文芸理論の側面から見た梁魯「硬訳」論争」というタイトルで発表した。朝倉氏が焦点をあてたのは 1929 年に起きた翻訳をめぐる梁実秋（1903-1987）と魯迅（1881-1936）の論争である。この論争において、魯迅は中国を変革するための最後の希望を「硬訳」に託したのに対して、梁実秋は魯迅の翻訳がもはや「死訳」に近いものだと批判していた。朝倉氏は先行研究を詳しく整理しつつ、これまでの研究は論争のイデ





オロギー的な側面に着目したものが多いと指摘したうえで、あらためて梁・魯の文芸理論とりわけ言語観と美学を考察したいと述べた。ディスカッションでは、魯迅自身における二つの時期の翻訳、すなわち1920年代半ば以降の翻訳と日本滞在期の翻訳（『域外小説集』）に見られた方法上の違い、翻訳理論をめぐる論争と翻訳の実践との区別、翻訳理論による新しい中国語の創出などをめぐって討論がなされた。

合同発表会の後半は、胡婧氏（上智大学大学院）の「啓蒙の文脈における「近代性」批判――張君勱の「人生観」論を導きとして」と題した発表に始まった。胡氏は、近代中国の知識人たちによるベルクソン哲学の「直観」概念の受容について、1920年代の張君勱（1887-1969）による「人生観」論を中心に考察している。「人生観」論や、張とベルクソンのインタビュー録などを分析する中で、西欧文明に直面し自己分裂や葛藤を抱えていた当時の中国の知識人たちにとって、ベルクソン哲学が「科学理性」と「心」との関係について考える手がかりであったと胡氏は指摘する。さらにそのベルクソンの「直感」概念が近代心学に吸収され、変容したものが、後の近代中国における直覚主義の礎になったと論じた。発表後の討論では、張君勱の論争における科学と人生観との関係や、「啓蒙」という言葉自体が孕む複雑性などについて議論が交わされた。

最後の発表を担当したヴィクトリヤ・ニコロヴァ氏（東京大学大学院）は、「想像としての中国――戦争の時代を生きた中国研究者を再考する」というテーマで報告を行なった。戦前と戦後の断絶性を前提とした日本における中国研究史に疑問を呈するニコロヴァ氏は、日本人中国研究者・実藤恵秀（1896-1985）が戦前から戦後にかけて展開した研究活動に光をあてることにより、戦前・戦後という二元論的な捉え方を乗り越えようと試みている。この研究では研究対象となる中国研究者の「中国認識」の検討が欠かせないため、今回の発表では実藤と竹内好（1910-1977）の中国観が取り上げられた。発表後のディスカッションでは呼称問題、すなわち「支那」あるいは「中国」と呼ぶのかという問題に議論が及んだ。こうした呼称問題は、研究者各々が研究対象地域をどう捉え、向き合い、そのうえで何を目指すのかを問う、分野を超えた共通の課題ともいえよう。ニコロヴァ氏が「想像する中国」という含蓄に富んだ発表タイトルをつけた背景には、こうした問題意識が少なからず絡んでいるという。

3時間に及んだこの合同発表会では、発表者たちの数ヵ月にわたる学びの成果や、授業で取り上げられたテクストの読みの深化を垣間見ることができた。石井氏、張氏、王氏のコメントや、参加者からの質問を通して得た示唆を、発表者たちがどう自身の研究に活かすのか、今後の進展が楽しみとなるような充実した発表会であった。

報告者:郭馳洋（EAA特任研究員）
片岡真伊（EAA特任研究員）

第7回　日中韓オンライン朱子学読書会

2021年7月16日

7 月 16 日（金）日本時間 15 時より、第 7 回日中韓オンライン朱子学読書会が開催された。これまで同様、EAA のほか、清華大学哲学系、北京大学礼学研究中心との共催である。

今回は趙金剛氏（清華大学）が司会を務め、江求流氏（陝西師範大学）が「朱子哲学の問題意識とその展開」と題し、2020 年に出版した『朱子哲学的结构与义理』（中国社会科学出版社）について報告を行った。江氏が 2015 年に華東師範大学哲学系にて学位取得した博士論文が本書の母体である。

朱熹の哲学について、その概念や範疇について論じた先行研究は多い。しかし朱熹自身はこのような概念を用い、一体何を解決しようとしていたのか。彼が直面していた、どうしても解かざるをえない問題とは何だったのか。本書は、朱熹の問題意識に基づき、その著作に内在するロジックを一つひとつ体系的に読み解く。第一章では、朱熹が当時の仏教からの挑戦にどう応答したかを論じる。仏教の「以心為法」は、「万物がどのように存在しているか」という問いに読み替えることができ、朱熹は、万物はすべて気であるという存在論を提示した。また、「以空為真」は、人性の実在をめぐる問いであり、朱熹は、性は理であり五行の気には仁・義・礼・智・信の理が内在的に存在すると論じることで、人性もまた実在すると考えた。また「天は人格を有するか」という問いに対しては、天（地）の実質は気であるとし、先秦以来論じられてきた人格神的色彩を有した天とは決別することとなった。第二章では、そもそも「なぜ朱熹が人性の実在について論じる必要があったのか」を考えると、「人性はどのようにして善であるのか」という彼の中心的な問題意識に行き着くことになると述べる。「仁・義・礼・智」を具体的内容とする人性は、主体に内在する感通能力によって、主体が日常生活の中で自然に「親親、仁民、愛物」を実行する、すなわち善を行うのである。第三章では、このような人性がなぜ秩序を失ってしまうのか、その原因について、「気稟」（人性を抑制する先天的要素）と「人欲」（人性を抑制する後天的要素）という二つの点から説明を行った。第四章ではこれらを克服し、本来の性にもどるための工夫について、「涵養」と「察識」を挙げ、その内容について詳細に検討した。第五章ではこの二つが両方とも、「尊徳性」と密接不可分であることを指摘した上で、朱熹の工夫論のうち、「道問学」として語られがちな「格物致知」についても、読書によって聖人の道を学び、「尊徳性」の工夫をうまく導くための役割を有していたこと、そして実践活動を行う際、盲目的にならないために重要な意味を持っていたことを指摘する。第六章はこれまでの内容を受け、朱熹が歴史上の帝王について、先天的な神聖さよりも、後天的な工夫を行えたかどうかを評価の軸にしたことを指摘する。

江求流氏（陝西師範大学）

最大で 150 名程度の参加者があった今回の読書会では、「八条目の筆頭である「格物致知」は、盲目性の克服にはなるが、速やかな実践の妨げにもなる可能性について朱熹はどのように考えていたか」「工夫が必要だった聖人もいるとのことだが、聖人には二種類あるのか」「牟宗三が論じた朱熹と荀学の関連についてどう考えるか」「朱熹の工夫と禅はどのような関係があるのか」など数多くの質問が提起された。

朱熹が提示した様々な概念についてはこれまで数多くの研究があるが、江氏の研究のように、朱熹が有していたと考えられる問題意識を、当時の思想潮流を

鑑みて正確に把握し、その問題意識のもと、朱熹が主張した様々な概念やテーゼを体系的につないでいく試みは、ひとりの思想家としての朱熹の姿を、私たちにわかりやすく示してくれる。しかしその一方、この体系から外れる朱熹の思想も残されているように思い、これらをどう理解するかについても、朱子学研究者にとって重要な課題になるだろう。

報告者:田中有紀(東洋文化研究所)

EAA分科会

2021年紹興元培フォーラム

2021年7月17日

2021 年 7 月 17 日（土）、中国浙江省紹興市人民政府と北京大学元培学院が主催する 2021 年紹興元培フォーラム「東アジアの文明とリベラルアーツ教育の視野」において、EAA は第 6 分科会を担当した。本フォーラムは 7 月 16 ～ 18 日の 3 日間にわたり、近代中国の著名な教育家であり北京大学校長も務めた蔡元培（1868-1940）の故郷、紹興市において行われた。国内参加者はすべて現地に参集したが、EAA 側メンバーの COVID-19 パンデミック下での国際出張はかなわず、分科会はオンラインと対面のハイブリッド形式で開催された。分科会では田中有紀氏（東京大学）と韓笑氏（北京大学）が司会を務め、中島隆博氏（EAA 院長）、欧陽哲生氏（北京大）、田耕氏（北京大学）、石井剛氏（EAA 副院長）、王利平氏（北京大学）、王欽氏（東京大学）、張政遠氏（東京大学）、袁一丹氏（首都師範大学）、毛建衛氏（浙江工業職業技術学院）、柳幹康氏（東京大学）らが参加した。

中島氏による開会の挨拶のあと、分科会のセッション 1「歴史の省察」が始まった。最初に発表した欧陽氏は 20 世紀前半から 21 世紀初期までの中国における中国近代思想史研究の潮流と特徴、および北京大学との関連を整理した。次に韓氏は北京大学における近代学術の営みを振り返りつつ、学際的研究と国際交流の新たな拠点として 2016 年に発足した北京大学人文社会科学研究院の活動を紹介した。

続いてのセッション 2「文明の想像と創建」では、

北京大学元培学院参加者の様子

東京大学 EAA の参加者

田氏が戦後アメリカにおける社会科学研究の変化について、シカゴ大学における学際的社会科学の再編と社会民族誌の展開を中心に述べた。石井氏は東京大学東アジア藝文書院（EAA）で行われている、30年後の世界を想像するための新しいリベラルアーツ教育の実践を紹介し、東アジアという多言語的現場で哲学する意義を語った。

セッション 3「教育、哲学、文学」において、王利平氏は 1894 年から 1904 年の間にシカゴ大学で教鞭をとったデューイ（John Dewey〔1859-1952〕）による教育学科と実験学校の創設、および work の能動性を重んじた彼の教育思想の展開について述べた。王欽氏は教育の「原場面」をめぐるランシエール（Jacques Rancière）と柄谷行人の議論を手掛かりに、教育現場に必然的に内在する根源的な文学性を指摘した。

コーヒーブレークのあと、セッション 4「教養教育の複眼的視座」が始まった。張氏は自身の香港中文大学での学習・教育経験と東京大学での教育経験に基づき、両大学におけるリベラルアーツのカリキュラムを説明したうえで、EAA のコア科目「東アジア教養学理論」と「東アジア教養学演習」の具体的な授業計画を示した。袁氏は 20 世紀前半の輔仁大学における国文教育を取り上げ、「小通」つまり国文を正しく運用する作文能力の養成に力を入れた教員たちの取り組みを紹介した。最後に毛氏は高等専門学校での教育理念と陽明学における実学的傾向との思想的連関について論じた。

総合討論では、教育の文学性もしくは紀律の自発的形成を保証する制度の必要性、仏教の修行における自発性と他律性の相剋、liberal education の目標および異なる訳語によるニュアンスの違い、リベラルアーツ教育にとっての「東アジア文明」の意義、国文教育の可能性、パンデミックと反グローバリズムの時代における人間・国家・世界の位置付け、教育における哲学的「エロス」の重要性などが話題になり、盛んな議論が行われた。

なお、本分科会の発言記録は後日 EAA のウェブサイトで公開するほか、ブックレットに収めて刊行する予定である。

報告:郭馳洋（EAA特任研究員）

一高プロジェクト

映像制作メモランダム（6）

2021年7月19日

梅雨も明け、暑さが本格化しようとする中、EAA101号館映像制作プロジェクトチームは、製作に向けて、議論を盛んにしています。

報告者（高原智史〔EAAリサーチ・アシスタント〕）は、自身の研究としても一高を対象としており、修士論文では明治期の一高の言論について書いています。映像制作では、昭和期の一高が舞台となりますが、新旧両時期を並べて見ると、そこにはある関係が見て取れます。

それは、伝統の引き受けとでもいうべき現象です。昭和の一高生は、自らが寮生活を送るのに際して、明治23年に開かれた自治寮の開寮の精神（その具体化としての「四綱領」）というようなものを強く引き継ごうとしていました。他方、明治の一高生にも、それより前の維新の志士の精神を引き継ごうという意識が見られます。

一高生は、校内雑誌『校友会雑誌』への投稿でも、自らを国家の継続者などと位置付け、引き継ぐ者としての自己認識が強いです。ある種、ロマンティックでもある、このようなあり方は果して、真正なものといえるでしょうか。思い返せば、明治期の官僚の姿を本で読んで、自分もそうなりたいと思って東京大学を目指した自分は、明治に始まる「一高なるもの」に誘われてここまで来たのかもしれません。しかしそれは、所詮、一高そのものでもない「一高の亡霊」に過ぎないものに縛られているだけかもしれず、自分自身に発するものではないのかもしれない。学歴エリートが往々にしてそうなりやすい、自分ではないものを引き受けてしまうことからいかに自由になれるか、そのためのリベラルアーツとはいかなるものなのか。自分自身の研究テーマでもあるこのことを、映像プロジェクトに関わることを通じて考えていければと思います。

明治、昭和の一高生、そして令和の東京大学大学院生に連関があるかもしれないというのと並んで、EAA内のプロジェクトの連なり、さらにはその外への拡がりも感じられています。藤木文書プロジェクトがEAA一高プロジェクトにはあり、映像プロジェクトのRAは藤木文書のRAを兼ねていますが、1930～40年代という時期の一高を扱おうとしている両プロジェクトが関係を強めています。「月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて」の76号には報告者名で本年3月17日開催の国際シンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」について紹介がなされ、その末尾に映像プロジェクトのことが告知されています。また、同ニューズレターを発行されている冨岡勝氏（近畿大学教授）らを中心に運営される、長野県松本市の旧制高等学校記念館開催の第25回夏期教育セミナーに、オンライン発表として藤木文書チームが共同研究発表のビデオを寄せることになっています。

こうしたアイデアと関係性の拡がりが、シナリオに落とし込まれ、撮影へと実を結んでいけるよう、頑張っていきたいと思います。ご期待ください。

報告者:高原智史（EAAリサーチ・アシスタント）

一高プロジェクト

映像制作メモランダム（7）

2021年7月21日

去る7月15日（木）、101号館映像制作プロジェクトチームの一行で東京は京橋の国立映画アーカイブを訪れ、戦前の一高学生を映した以下の3本のフィルムを鑑賞した。

①『Japan Pictorial No.4 SPORTING JAPAN』（朝日新聞社、1935年、35mm、19分）
②『皇太子繼宮明仁親王殿下 御降誕奉賀式』（松竹キネマ、1934年、35mm、8分）
③『一高生活』[部分]（松竹キネマ、1930年、35mm、30分）

①は、日本でのスポーツ人気を紹介する報道映像であり、一高生の花形スポーツだったボートの（おそらく練習）風景のようすが活写されていた。一高校舎が本郷から駒場へ移転した1935年後も、ボートの練習場所は変わらず尾久（現・東京都荒川区）だったというが、荒川でオールを振る一高生の表情からは、勉強から一時的に解放された人間のある種の普遍性が看取された。

現上皇生誕時の一高生による宮城参拝のようすを映した②は、一高の校旗であったところの「護国旗」の名にも見えるように、一高生と当時の天皇制国家との特殊な関係の一端を描き出している。特別に松竹に依頼して製作されたということもあり、画面はよく構成されているように見受けられた。役者が役者であるから、たとえば万歳三唱時の締まりの悪さといった裂け目が走ってはいるにせよ、それは作品というテクストの偶有性として肯定されるだろう。

③は、「生活」といっても行軍の様子が比較的長尺を占める映像で、エリート学生が学校行事の一貫として銃剣を担ぎ発砲してみせる場面には、ややいたたまれないものを感ないではなかった。

いずれも記録映像ではあったが、世界をカメラで捉えるにあたって留意すべきことのいくつかを教示してくれたのではないかと思う。たとえば、③の「いたたまれなさ」について、カメラを向けられた学生がそれを自覚してしまうことに伴う演劇的振る舞いに起因するのではないかといった話を、鑑賞後にメンバー間で交わしたが、本編とは別に、ミーティングや撮影時の風景を記録したメイキング映像の制作も進めている本プロジェクトにとり、カメラがまなざしとして世界のうちに埋め込まれているという状態に対して、カメラマンは何らかの態度決定を迫られるのだということを改めて確認する契機となった。まなざしを無化させるべきか、あるいは反対にまなざしの存在をまざまざと被写体たる人物に意識させるか。それは役者相手ではない記録映像なればこそ意を注ぐべきことであるのかもしれないが、カメラと世界との関係一般についても、構成された画面に対する視点が、その画面に映し出されたものといかなる位置関係にあっていかなる意味を持ってしまうか、といった基本的な（根源的な？）ことがらへの問いを喚起する。映画論の初歩的な教科書さえ読めば事足りるのかもしれないが、我々はまなざしそのものによって、実はそういった問いに誘い込まれているような気がしてならないのだ。

報告者:日隈脩一郎（EAAリサーチ・アシスタント）

連続シンポジウム「世界哲学·世界哲学史を再考する」

第5回　世界哲学における「尊厳」概念

2021年7月22日

2021年7月22日（木）、連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」の第5回「世界哲学における「尊厳」概念」がZoomにて開催された。この連続シンポジウムは、2020年に筑摩書房から刊行された『世界哲学史』シリーズ（全8巻＋別巻）の編者である納富信留氏（東京大学）をオーガナイザーとして迎え、「世界哲学（史）」という概念を再構築し、その方法論的な意義を探る試みの一環である。

今回のシンポジウムでは、オーガナイザーの納富氏に加えて、科研費（基盤S）プロジェクト「尊厳概念のグローバルスタンダードの構築に向けた理論的・概念史的・比較文化論的研究」（以下、「尊厳」プロジェクトと略称）に携わっている加藤泰史氏（椙山女学園大学／一橋大学）と小島毅氏（東京大学人文社会系研究科）が登壇し、世界哲学・世界哲学史の視点から、「尊厳」という概念について提題した。その後、コメンテーターを務める犬塚悠氏（名古屋工業大学）が自身の研究分野に基づきつつ、二つの報告に対してコメントを述べた。

まずは納富氏から本イベントの趣旨説明がなされた。氏は「尊厳」プロジェクトの問題設定と研究内容および研究成果（加藤泰史編『尊厳概念のダイナミズム――哲学・応用倫理学論集』〔法政大学出版局、2017年〕、加藤泰史・小島毅編『尊厳と社会』上・下〔法政大学出版会、2020年〕、加藤泰史・小倉紀蔵・小島毅編『東アジアの尊厳概念』〔法政大学出版局、2021年〕など）を簡単に紹介したうえで、今回のシンポジウムでは世界哲学・世界哲学史の視座から時代・地域を横断し、「尊厳」概念とほかの概念・問題系との連関、「尊厳」を考える「哲学」の役割、ないしそれを世界哲学から考えることの意義を問うという。

そのあと、1人目の発表者加藤泰史氏は「尊厳概念の多元化と世界哲学／世界哲学史構想の問題」と題する発表を行った。氏は自身が研究代表者を務めている「尊厳」プロジェクトについて改めて説明した。本プロジェクトは尊厳概念を多角的な観点から総合的に分析し、普遍的な尊厳概念のグローバルスタンダードを日本から発信することを目指すもので、理論的・概念史的・比較文化論的なアプローチをとっているという。そして欧米・日本・非欧米をともに視野に入れる本プロジェクトの組織図および「尊厳」概念と関連する諸問題・諸分野をも提示した。次に、氏はかつて提起された世界哲学／世界哲学史の構想として、*Kleine Weltgeschichte der Philosophie*（1950）を著したドイツの学者シュテーリッヒ（Hans Joachim Störig, 1915-2009）の構想を紹介した。氏によれば、シュテーリッヒ

『世界哲学史』
（全8巻＋別巻、筑摩書房）

上段：左から順に納富伸留氏・加藤泰史氏
下段：左から順に小島毅氏・犬塚悠氏

の世界哲学史構想には西洋の自己批判や東洋哲学への目配りがあったものの、「世界」をそのまま哲学の対象とみなすこと、論述がやはり「西洋哲学史」に収斂すること、そして日本哲学が不在であることなど、いくつかの問題も含まれていた。それに対してシリーズ『世界哲学史』（筑摩書房、2020年）の構想は「世界」そのものを「私たちが生きる現場」と哲学の現場、さらには「世界」が哲学する現場と主語的に理解し、「世界哲学」の「歴史化」によって「哲学の始まり」を問い直すという、多元的に開かれた普遍性を探究するものであると氏は評価した。そして氏によれば、この構想では「世界」と「生」の緊張関係が問い返され、「尊厳」概念は両者を媒介する原理の一つになる。さらにこうした構想はヴィンデルバントとクレプスの問題史（Problemgeschichte）的構想にもつながるという。

では、世界哲学／世界哲学史から見た尊厳概念はどのようなものなのか。加藤氏にしたがえば、「尊厳」は道徳的概念として古代から近現代にかけて議論されてきたが、戦後は国際条約や憲法（スイス憲法〔1999年〕など）に組み込まれて法的概念にもなり、近年は「被造物の尊厳」「生命の尊厳」「高齢者の尊厳」と多元化している。氏の考えでは、尊厳概念は人間および自然に対する人間の道徳的態度を原理的に再考するための手掛かりとして、「世界哲学」に「新たな社会統合／世界統合」の包括的原理への問いを突きつける。そしてこのような尊厳概念をめぐる意味争奪戦、すなわち獲得・喪失可能な「尊厳」（小松美彦・倪培民の問題提起）vs. 喪失不可能な「尊厳」という解釈の対立は現在のカント哲学理解に看取できるという。最後に加藤氏は人間以外のものの尊厳を考える際に東アジア／日本の哲学を生かす意義に触れつつ、最近の儒教的尊厳論の試みおよびその問題点を紹介して本発表を終えた。

続いて2人目の発表者小島毅氏は「「文化中国」と「自由」」というタイトルで発表を行った。中国思想文化を専門とする小島氏はまず、「中国」というものを歴史的に捉えるにあたって参考になる文献として、葛兆光の『中国再考――「宅茲中国」のイメージと現実』（岩波書店、2014年）と『中国は「中国」なのか――その領域・民族・文化』（東方書店、2020年）を挙げた。さらに氏は自身の「中国」理解として、「政治的中国」（political China）、「民族的中国」（ethnical China）、「文化的中国」（cultural China）を挙げて説明した。氏によれば、政治的中国とは「中国」という国号を用いる国のことであり、民族的中国とは「中華民族」を指しているが、この言葉自体は20世紀初の革命派による造語である。ではこの二つに対して、文化的中国とは何なのか。小島氏は、「文化中国」という表現を世に広めた現代新儒家第三世代とされる杜維明（Tu Wei-ming）の議論を取り上げ、そこで語られる「文化中国」とは中国大陸・香港・台湾の人々および世界各地の華人、さらに中国研究に携わる各国の学者まで含めた概念であると紹介した。そして近年の中華人民共和国における儒学尊重の動きに触れ

つつ、儒学を誇るべき文化的伝統とみなす現在の中国（大陸）の儒学評価は、「批林批孔」が行われた時期の儒教観と全く異なると指摘した。

次に小島氏は、かつて中華人民共和国が儒家思想を悪しき伝統として批判していた時期においてそれに反対して中国の伝統文化を守るべきだと主張した人たちの言論、とりわけ牟宗三・徐復觀・張君勱・唐君毅が1958年に連名で発表した「為中國文化敬告世界人士宣言」を紹介した。そのうえで唐君毅（1909-1978）の儒学論に焦点をあてて議論を展開した。氏によれば、唐は『論語』における「仁を為すは己に由る（為仁由己）」という孔子の言葉に着目して「己に由る（由己）」を「自らに由る（由自）」と解釈し、それを「自由」と捉え、儒家思想には古くから「自由」の表現があり、しかも孔子のいう自由は「良知」「仁心」、「礼」の精神、家・国・天下を重視する点では西洋思想より優れているとした。氏はほかに中国古代思想の「自然」という語に「自由」の意味を読み込む胡適や、中国文化の世界的普遍性を説く許紀霖（許紀霖著、中島隆博・王前監訳『普遍的価値を求める――中国現代思想の新潮流』〔法政大学出版局、2020年〕）の議論にも言及した。氏自身の考えとして、もし文化的中国に世界的普遍的な意義があるとすれば、それは「己の欲せざる所は人に施すこと勿れ」（『論語』）という原理に見出しうる。最後に氏は今日の中国で起きている、人間の尊厳に深く関わる諸問題を西洋中心主義ではない形でどう考えるかという問いを投げかけて、本発表を締め括った。

両氏の発表が終わったあと、コメンテーターの犬塚悠氏は本日の発表のみならず「尊厳」プロジェクトの既刊研究成果をも踏まえながらコメントと質問を述べた。犬塚氏はまず「人間に対する人間の道徳的態度」と「自然に対する人間の道徳的態度」および（両者に対応する）「人間中心主義」と「非人間中心主義」に関する加藤氏の議論に触れながら、非人間中心主義的尊厳概念は可能なのか、可能だとしたらどのような解釈が必要なのかと問うた。犬塚氏の見方では、「人間の尊厳」を比較考量できない不可侵なものと理解すれば、それをほかの生物へ適用することが難しくなり、一方で尊厳を「個」ではなくある全体性（「人間性」、「自然」）にあるものと捉えてしまう場合、人間個人の尊厳も危うくなる以上、問題領域によって異なる尊厳概念が必要になる。次に犬塚氏は小島氏の議論における唐君毅と牟宗三のカント批判にある類似点に着目し、理性に対する良知の優位性について唐と牟との立場は共通するかと問いかけつつ、近年の日本哲学研究における身体論と比較する可能性を示唆した。続いて（小島氏の論文で述べられた）朱子学や仏教に見られる非人間中心主義的な可能性は唐君毅らの哲学においても見出せるか、その哲学の現代的意義とは何かという質問を投げた。

さらに、加藤氏と小島氏両方への質問として、犬塚氏は、尊厳概念が歴史的に変化していくという事実がすでに指摘されている以上、「尊厳」プロジェクトに見られる尊厳概念に関する包括的な理論的枠組みの追求の可能性と可欲性について疑問を呈した。この点と関連して犬塚氏は自身の専門でもある環境倫理学における一種のプラグマティズムへの傾斜に言及した。つまり様々な理論的対立があるのに対して、環境プラグマティズムは理論的討論よりもむしろ政策の合意という実践的問題のほうに注目するという。

その後、納富氏もギリシア哲学を取り上げながら「尊厳」と関連諸概念の関係について自身の見解を簡潔に述べた。そして犬塚氏と納富氏のコメントに加藤氏と小島氏がそれぞれ応答する形で討論は展開されていった。

本報告では十分紹介できなかったが、本日の議論を振り返ると、「尊厳」は（肯定的にも否定的にも）「生」の問題と結び付けられて語られたことが多いという印象を受けた。では「死」の問題つまり「死者の尊厳」はどうなのか、死に対する道徳的態度・行為もまたこの世を生きる私たちの生を少なからず規定するのではないか、と思われる。いずれにしても、「尊厳」概念に論点を絞った今回のシンポジウムは「人間」と「世界」の向き合い方を考え直すための手がかりを提供してくれたといえよう。

報告者:郭馳洋（EAA特任研究員）

ご質問・コメントからの抜粋

第５回シンポジウムの参加者からいただいたご質問・コメントの一部（字句修正あり）を紹介させていただきます。回答はシンポジウム発表者個人の意見です。

Q1　尊厳概念の多様化は、尊厳という概念の内実を空無化するのではないであろうか。尊厳あるもの同士の比較考量が必要になれば、尊厳概念の持つ「重み」「絶対性」が失われるのではないであろうか。

A（加藤）　ご質問ありがとうございました。概念の比較検討・比較考量と、尊厳あるもの同士の比較考量とは別問題であると考えています。概念の比較考量が直ちに尊厳概念の絶対性の喪失であるとすると、絶対性を主張する概念を無批判的に受容するだけになってしまうのではないでしょうか。それは哲学的ではないと考えます。

A（小島）　「尊厳」概念について。尊厳を単数化・純粋化するのではなく、多様な考え方を分析した上で整理し、メタレベルでの普遍的なものを探っていこうという趣旨です。

A（納富）　世界哲学は、普遍的な思考を多元的に展開することを目指しています。どれか一つのスタンダードで割り切るのではなく、それぞれの文化・思想背景を踏まえて両立的に生かしていくという試みです。「尊厳」という概念についても、その実践が期待されます。

Q2　世界が哲学するというときに、「神」的なものの位置づけはどのようなものになるでしょうか。話の全体としては、ヘーゲルのように「精神」「霊」の自己展開として世界史をとらえ、その自己知として世界哲学をとらえているのか、というのが気になりました。神、精神という言葉を使うかどうかに限らず、その機能的等価物となる概念に着目し、それが現代社会でどう働くのかを考えるということになるのでしょうか。

A（加藤）　ご質問ありがとうございました。「世界」が哲学する現場となるといいました時に、世界が自己展開するというようなヘーゲル的な枠組みは考えておりませんでした。むしろ西洋中心主義的な観点を相対化できる視点を提供できる場として世界を捉えたいと考えています。西洋からは非西洋との哲学的対立などはあまり問題にならないでしょう（シュテーリッヒも結局は不徹底に終わりました）。非西洋を含み込んだ「世界」の観点だからこそこの対立が可視化・問題化できると考えます。「世界」に視座を置くことで、これまで可視化できなかった様々な対立が可視化できますので、その意味で「世界」の自己展開というよりは「世界」の自己暴露と考えていただいた方が良いでしょう。「神」的なものもそこで暴露された問題の一つとして問題史を構成できますが、その際には現代的な観点から宗教と科学技術の問題を核として描き出せるのではないかと思います。いずれにしましても、暴露される「世界」の問題・対立には、精神や神も含まれますが、それらやそれらの機能的等価物にのみ限定する必要はなく、貨幣や都市、文化、価値なども含み込まれてくると考えています。

Q3　尊厳については、人格があるかどうかで尊厳を認めるかどうかが決まるという視点が生命倫理にはあります。生命の尊厳の sanctity は人格なき存在にも認められるのでしょうか。付与したり剝奪されるものではない、比較考量の対象でもない存在の内在的価値（ヨナス）に近いものとして理解してよいでしょうか。それは改変を許さないものなのか、あるいはその尊厳を保守するために介入する必要があるものなのか。確認できればと思います。

A（加藤）　Sanctity は基本的に神学的概念だと位置づけます。日本語の尊厳は哲学的概念としての Dignity に対応すると考えます。その意味で尊厳には人格概念との密接な結びつきがあります。ハーバーマスらがペットまでに尊厳を拡張しようとする場合、この人格概念との結びつきや人格の内実そのものを薄めることで拡張で

きるとします。ペットには類比的に人格的なものが認められるから、あるいはケイパビリティの一部を人間と共有しているから類比的に尊厳的なものを認めることができるというわけです。しかし、私自身は問題の焦点は人格概念そのものの内実にあると考えています。この点を別の角度から見直してゆきたいと思います。ヨナスの議論は厳密には、Dignity of Life ではなく、あくまでも Sanctity of Life という神学的概念に基づくものであって、生命の神聖性であると解釈します。ただし、東アジアではこのヨナス的なニュアンスも尊厳として理解して違和感なく「生命の尊厳」という言い回しが使用されていると私は分析しますので、この問題を何かさらに掘り下げることができないかと模索しております ところです。

A(小島)　ご質問の中に出てくる「人格」という概念についての考察が、その場合には必要になるでしょう（「玉ねぎの皮」状態になってしまう恐れはありますが……）。

Q4　統計学でよくいわれていますが、「標準」「平均」の危険性をどのように表現されているかを伺いたかったです。たとえば、基準・標準という枠組みで「世界」いわゆる「グローバルスタンダード」として捉えると「個・固有」の尊厳が軽視される可能性があるのではないか。それぞれのファクターが、相互作用しているシステムとして考えると腑に落ちるかと思います。「弱者の保護」は社会福祉理念でいうところの「劣等処遇」であるため、尊厳概念から拮抗している可能性があるのではないか。東側諸国と西側諸国から発展した世界の現状からすると重要なことは、多文化、地域性を大切にすること、ヒトはそれだけでは存在しえないため、環境との相互作用があって存在しているため、古い話で恐縮ですが「宇宙船地球号」のような考え方が適切ではないかと思いました。

A（加藤）　ご質問をありがとうございました。グローバルスタンダードはただ単に西洋的な尊厳概念を基準として受け入れるのではなく、非西洋からもそれを問い返して非西洋を包括する概念構築を目指したいという意図を言い表した言葉として使いました。しかし、よくよく考えますとご指摘の問題は重要だと思います。尊厳を名誉概念の一種と捉える解釈はもちろん存在しますが、私自身はそれとは切り離して内実を構成したいと考えています。環境との相互作用はまさに自然倫理学構想の重要な要点です。ご指摘に感謝いたします。

A（小島）　「標準」重視・「個」の軽視というご意見に同感です。数量で判断するのと違う視点をどう説得的に提示できるか、共感してもらえるかが鍵であろうと考えています。そうした手法は科学的ではないと批判する人たちもいるでしょうが、そもそも（そういう意味での）「科学的」である必要はないというのが私の見解です。環境の問題が重要なのはいうまでもありません。他の重要問題（人権など）と並べて併せ考えることを心がけます。

Q5　良知・良心・思慮の関係については、個人的にとても深い関心を持っています。いつか取り上げていただきたいです。特に、小島先生のお話をうかがいたいです。conscience をなぜ良知と訳さなかったのか。私の考えでは、良知は可謬性を免れているのに対して、conscience は可謬的であることにポイントがあると思います。その意味で、良知は、やはり可謬的でない synderesis に近く、その訳語としてふさわしいといえるのではないでしょうか。

A(小島)　可謬的かどうかという捉え方は魅力的に思えました。ありがとうございます。Conscience がなぜ「良心」になったのかの詳しい経緯を私は存じませんが（大西祝は私も好きなのですが……）、良知という概念は陽明学の致良知によって手垢に塗れていると明治期の学者たち（とりわけ西洋文化の紹介者たち）には見えたのかもしれないという推察をしています。本来の良知は『孟子』に良能と並んで見える語で、分析的に解釈する場合（朱子学など）は前者を思考の、後者を実践のもとになる本性とします。唐君毅や牟宗三は陽明学的に良知を捉えているため、西洋でいうところの（と彼らが理解していた）理性より高等であると論じています。

ただし思想史的には彼らの説は当たっていないというのが、私の見解です。

Q6　私はカトリック思想を主に研究しているのですが、M. シェーラーも指摘している通り、フランシスコは全ての被造物にある種の輝きを見ました。これはイエスの体験の共有だと考えられます。「ここでは [ルカ 12：22-32] 動植物と人間が、いのちとして、しかも無為のまま現に神によって生かされている生命として […]、一体のものとされている。イエスの目には、空の鳥と野の草花が人間と共なる被造物として、生かされてあるいのちという根源的的な現実を啓示するものとして映っている」（大貫隆『イエスという経験』〔岩波書店、2003 年〕72 頁）。宗教者にとっては尊厳は宗教的に経験されるものでしょうから、生命の尊厳を宗教現象学的な視点からも見てみると面白いかもしれません。また、東方教会はすぐれた哲学的伝統を有していますが、そこでは「いのち」が「神的エネルゲイア」などの概念と結び付けられており、様々な議論が展開されているようです。近年「神化」が世界中で注目されていますが（阿部善彦・田島照久編『テオーシス――東方・西方教会における人間神化思想の伝統』〔教友社、2018 年〕）、そこでもやはり神と一体化する中で被造物の価値が輝く、という考えがあるようです（この辺は仏教思想などとも似ているのかもしれません）（今夏発行予定のカトリック神学会誌の「シェーラーのアシジの聖フランシスコ観」という拙論でこれらの点を扱っています）。ちなみに、「いのちの思想」はカトリックでも近年回勅『ラウダートシ』などを通して見直されつつあり、今後カトリックの教義として広く展開されていく見通しです（先日の教皇来日の際のスローガンは「すべてのいのちを守るため」でしたし、最近、「愛するアマゾン」という使徒的勧告も出されました）。

A（加藤）　ご質問とご指摘をありがとうございました。確かにシェーラーの中に生命の尊厳を読み取ろうとする解釈もあります（加藤尚武など）。ご高論は探して拝読し、勉強したいと思います。貴重な情報にも感謝いたします。

A（小島）　当事者という概念は翻訳しづらい概念です。だからこそ、それは「わたし」というあり方を鍛え直してくれると思います。それは、従来の主体と客体といった対立を問い直し、「わたし」がより複雑に世界に関与していること、他者と関わっていることを考えさせてくれるのではないでしょうか。

Q7　西洋哲学ではかつてカントの死刑支持論が支配的であり、これに対抗する死刑廃止論はデリダが 2000 年に初めて提起しています。フランス政権はこれを受けて死刑廃止に転じ、いまや国際的には死刑支持の国は少数派となりました。日本が何らか特殊な価値意識から死刑支持を存続させるのであれば、それに見合った理論的根拠で世界を説得する明確な意思表示が必要ではないでしょうか。国家による生命の毀損というこの難問は、数々の「尊厳の毀損」事例より切迫した問題であり、東アジアの価値として「生命の尊厳」を主張するのであればなおさら必要な課題ではないでしょうか。

A（加藤）　私はカントの主張が全て正しいとは考えておりません。カントの死刑論には批判的です。この点に関してはデリダの議論の方が説得的であると考えます（他方で、デリダの歓待論はカントの重要な要点を見落としていると解釈しています）。

A（小島）　死刑が国家による生命の毀損行為かどうかは見解が分かれるところであり、私自身は質問者に同意しかねます。それが（日本同様に死刑制度が存在する中華人民共和国や朝鮮民主主義人民共和国にも見られる）東アジアにおける共通の伝統なのかどうかは簡単にはいえませんけれど、検討・考察を必要とする課題であるかもしれません。ありがとうございます。

Q8　端的な「人間中心主義」には現代哲学からの批判があるが、古代哲学や近世哲学の人間規定に問題がある（たとえば良知を排除する科学主義）という趣旨であり、まずこれを反省・調停する必要がある。それ

により自然環境・歴史的所産・多元主義に配慮した新たな共存の理念と制度を提案できるようになるのではないか。伝統哲学のテクストにはすでに現代哲学の批判を予期し応答している構想があるのではないか。もちろん日本哲学のテクストにも。これまで解釈されずにいたそうした諸構想を発見し新たな解釈による哲学史として提起すべきではないのか。

A（小島） 伝統哲学の再評価という観点は同感です。私は「科学」という概念規定を問題化していく必要がある（＝この議論に自然科学者に加わってもらう）と考えています。

Q9 axia が古代ギリシアにおいては概念ではないとのお話がありましたが、そうだとすると、axia という概念があってもなくても古代ギリシアの哲学は、同じ内容が保てるということなのでしょうか。言葉としてあるということと、概念としてあるということの違いについて知りたかったです。

A（納富） ギリシア語の形容詞 axios（値する）はホメロス以来普通に使われている言葉で、その名詞形 axia（価値）はやはりヘロドトスあたりから様々な文脈で出てきます。プラトンもそれらの語を一般的な意味で使いますが、それ自体が定義されたり、哲学的に限定された意味で使われてはいません。たとえば、『法律』第12巻 945B に「役職の威厳」という用例がありますが、そのように事物の価値一般です。キケロら後世の受け取り方は別にして、プラトン自身ではこの言葉に特別に注目はしていないという限りで、「尊厳」概念の歴史的起源がプラトンにあるという一部の研究者の説明は哲学史的には不正確だと考えます。

哲学概念はもとは日常語だった言葉をテクニカルに使うことで成立する場合が多いのですが、その場合は限定された特殊な意味が加わります。axia という単語について、プラトンではそういった術語化は見られません。

Q10 素朴な疑問ですが、なぜ世界哲学史であって、世界思想史でないのか疑問です。そこで、思想と区別される「哲学」のメルクマールは何なのでしょうか。なお、思想・哲学の共時的比較としては、中村元の業績が重要であると思います。中村の「世界思想史」などを参照すると、加藤先生が提示していたような問題は、かなり整理できるように思います。

A（加藤） 従来では西洋哲学の概念や枠組みの共有がある場合に「哲学」と位置づけられてきたと思いますが、世界哲学／世界哲学史の構想はそのこと自体を根本的に問い返して「哲学」の新たな定義も模索する運動であると理解しています。しかし、中村元の議論は確かにこの問題の中で再検討に値すると思います。ご指摘ありがとうございました。

A（小島） 「世界哲学」について。実は私も似た意見を持っています。ただこれを哲学か思想かという用語の選び方の問題として捉えてしまえばよいというのが、私の現時点での考え方です。なお、中村の議論は思想だけを特権化して語っている（社会や生活文化の問題を枠外にはずしている）ように私には感じられます。

A（納富） 「世界哲学」という呼称については、これまでもしばしば議論してきましたが、日本や中国といった非西洋圏の知的営為、さらに日常の営みや文化まで射程にいれて反省的に考察することを「哲学」と呼びます。西洋哲学で「哲学（フィロソフィー）」と呼ばれたものも当然その一部ですが、それだけではないことが重要です。他方で、もし「思想 thought, idea」と呼ぶとすると、特に英語などで議論する時に、西洋哲学ではそもそも考慮に値しない劣った「考え一般」という偏見を被りますので、それを避けるための戦略があります。

連続討論会――ラファエル・リオジエ『男性性の探究』をめぐって

2021年7月22日·7月26日

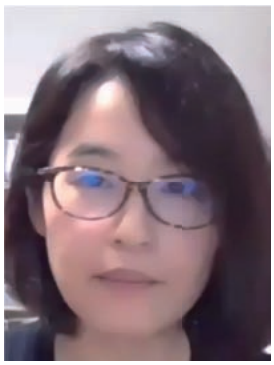
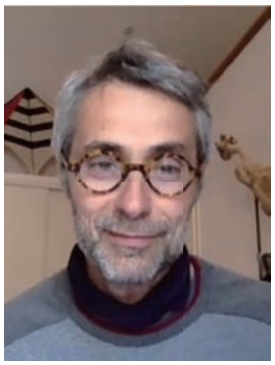
フランスの宗教社会学者ラファエル・リオジエ氏（エクス＝アン＝プロヴァンス政治学院教授）は、#MeToo運動が世界各地で盛り上がりをみせるなか、2018年に *Descente au coeur du mâle* を上梓し、男性と社会の思考に巣食う女性蔑視を男性の立場から反省的に抉り出した。本書はこの度の連続討論会の企画者でもある宗教社会学者の伊達聖伸氏（東京大学准教授）によって日本語に翻訳され、『男性性の探究』という邦題で2021年に講談社から出版された。翻訳の出版を記念し、2021年7月22日・26日には、科学研究費補助金基盤研究（B）「結婚の歴史再考――フランスの事情から見る（ポスト）結婚、生殖、親子、家族」、および科学研究費補助金基盤研究（A）「西洋社会における世俗の変容と「宗教的なもの」の再構成――学際的比較研究」主催、EAAの共催で、リオジエ氏をゲストに招いたオンライン連続討論会が開催された。また26日の討論会は「痛みの研究会」との共催であった。両日ともに200名程度の聴衆に恵まれた。

7月22日には討論会「フランスから見た#MeToo運動――ラファエル・リオジエ『男性性の探究』をめぐって」が開催された。この討論会ではフランス社会に精通する研究者4人が登壇した。ゲストスピーカーのリオジエ氏に加え、コメンテーターには政治学者の大嶋えり子氏（金城学院大学講師）、科学史家の隠岐さや香氏（名古屋大学教授）が名を連ねた。司会兼コメンテーターを務めたのは、フランス思想研究者の増田一夫氏（東京大学名誉教授）である。

リオジエ氏の講演内容は、#MeToo運動に関心を抱くに至った個人的経緯の紹介から、現代の性差別を解決する実践的方法の提案まで多岐に渡る。ここでは「#MeToo運動の人類学的意義」という論点を取り上げよう。リオジエ氏によれば、女性は新石器時代以降、受動的なモノと通念され、市民権を享受する主体でも、性的快感を味わう主体でもないとされてきた。#MeToo運動の意義は、この性差別的な通念に異義を唱え、女性が市民権を享受し、性的快感を味わい、世界を能動的に楽しむ主体であると示したことにあるという。

講演の後、大嶋氏が投げかけたコメントには「男女の隔離」に関わるものがある。リオジエ氏は『男性性の探究』で、日本やドイツの女性専用車両に言及し、女性蔑視を助長してしまうと批判した。大嶋氏はこれに対し、日本の女性専用車両は、性暴力から女性を守る空間であり、男性支配への臨時の対策として有効ではないかと問うた。リオジエ氏はこのコメントを受けて、男女の隔離が対症療法として有効なのは

左から順に、増田一夫氏、ラファエル・リオジエ氏、大嶋えり子氏、隠岐さや香氏

左から順に、小川公代氏、ラファエル・リオジエ氏、清田隆之氏、三牧聖子氏

間違いないが、隔離が必要な現状を生んでいる女性蔑視の構造的原因を解決するという長期的目標も重要だと答えた。

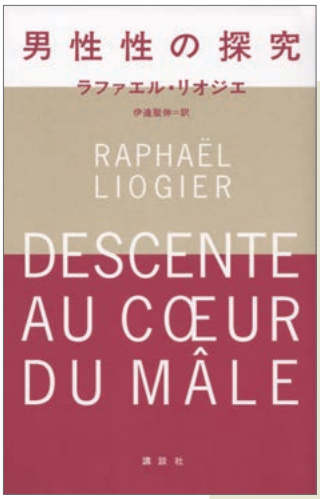
続いて隠岐氏は、リオジエ氏の論じる「男性性」は「支配者の男性性」であり、そこからは女性に加えて被支配者の男性も排除されてきたのではないかと問うた。近年問い直されているのはこの支配文化そのものなのではないか、というのが隠岐氏の見方である。リオジエ氏はこの見方に賛同し、男性の間にも「強く英雄的な男性」と「女性化された男性」という区別が古来存在してきたのであり、#MeToo 運動は女性の解放だけでなく、この男性主義的な区別のなかで劣位に置かれてきた男性の解放をもたらすものでもあると論じた。

増田氏は、「フェミサイド」の用語を採用し、男性による女性の殺人をより明確に社会問題として同定する必要性を主張した。他方で、女性に過剰で一方的な性欲を抱くよう男性を誘導する社会のあり方を批判したうえで、男性が女性に抱く欲望すべてを排除することはできるのかと問うた。リオジエ氏はこれに対し、問題は欲望そのものではなく、欲望を支える幻想にあると論じた。男性が能動的な主体であるのに対し、女性は受動的な客体で、それゆえ男性の欲望に服従するという幻想である。この一方的な幻想を生み出す「ポルノ的」構造こそ、現在問い直されているのだという。

22 日に続いて 26 日には討論会「女性蔑視はどうつくられるか――ラファエル・リオジエ『男性性の探究』をめぐって」が開催された。22 日の討論会ではフランスに関する議論がメインとなったが、26 日の会では、日本・アメリカ・フランスという異なる三つの地点から出発し、考察・討論が展開された。リオジエ氏に応答した登壇者は、「桃山商事」代表として長年日本における「恋愛とジェンダー」というテーマに向き合ってこられた清田隆之氏、そしてアメリカ外交・平和思想を専門とする三牧聖子氏（高崎経済大学）である。司会兼コメンテーターを英文学者の小川公代氏（上智大学）が務めた。

会の冒頭で小川氏が日本におけるジェンダーギャップの深刻さについて紹介したあと、これに応える形でリオジエ氏は、ジェンダーギャップのランキングに関わらず、アメリカでもフランスでも、そして日本でも、問題の核心は「目に見えないミソジニー」にあると論じた。自身の経験に言及しつつ、リオジエ氏は、明確に女性蔑視の態度を取る男性でなく、フェミニストを自称する男性においても、不可視化されたミソジニーがその深層に巣食っている場合があると指摘した。極端（extreme）ではなくラディカル（radical）を信条とするリオジエ氏は、犯人を追及して刑罰を科し糾弾するという形にこだわるのではなく、問題の根本に遡ってこの構造を可視化し、変えていくことの重要性を説いた。

続いて、リオジエ氏への応答として、「男性性とセクシズム」「#MeToo 運動と人種問題、インターセクショナリティ」「本質主義に抗う方法について」という三つの論点から清田氏・三牧氏がコメントを行った。清田氏は、多くの（異性愛者の）女性から寄せられた「恋バナ」を事例として参照しつつ、そこから窺い知



ラファエル・リオジエ著、伊達聖伸訳『男性性の探究』（講談社、2021年）

れる日本社会におけるセクシズム（性差別）について論じた。また清田氏は、いわゆる「一般男性」（シスジェンダーでヘテロセクシュアル、おおむね健康で、組織で働いている等々の特徴を備えた人々）に対するインタビューを重ねる中で、女性を消費しモノ扱いするということの意味や、それが問題であるという意識がそもそも共有されていない、というのが日本社会の現在地なのではないか、と感じたと述べた。

三牧氏は、トランプ前大統領とその政策に象徴される、セクシズムと人種主義の結合について論じた。ある種の「被害者感情」――自分たちの方が差別されている、と考える非エリート層の白人男性が抱く強烈な感情――ゆえに#MeToo運動への拒絶や無理解が生じている構造が指摘された。また、裕福な白人女性によって#MeToo運動が担われたことでこの運動が爆発的な拡がりを見せたことも確かであるが、一方で、こうした運動を以前から展開してきた黒人女性の存在（たとえば三牧氏は、2006年、黒人女性のタラナ・バークが貧困層の若い有色人女性の救済を目的として行った#MeToo運動に言及した）が後景化してしまうという限界があることも指摘された。

本質主義に抗うというテーマについては、差異をなくすことなく「幻想を流動化する」（『男性性の探究』126ページ）ことの重要性が確認された。「流動化」とは、男／女、あるいは白人／黒人といった二項対立を規定する権力関係をなかったことにするのではなく、それを可視化し、揺さぶりをかけることを意味する。

22日・26日と2日間にわたって開催された連続討論会が、女性の解放のみならず、「男らしさ」に縛られた男性をも同時に解放する「流動化」のためのラディカルな革命の端緒となることを願ってやまない。

なお、それぞれの討論会の内容は、別途文章化されて後日公開される予定である。ご関心の向きはそちらも合わせてご覧いただきたい。

報告者:田中浩喜（東京大学大学院博士課程）
崎濱紗奈（EAA特任研究員）

GSI Caravan Project “Conditions of Sovereignty”

The 1st Workshop: Prof. Jacques Lezra (University of California—Riverside)

2021年7月24日

The first workshop on “Conditions of Sovereignty,” co-organized by Global Studies Initiative (GSI) at UTokyo and East Asian Academy for New Liberal Arts (EAA) at UTokyo, was held on July 24, 2021. Professor Kokubun Koichiro, who is the director of GSI as well as one of the members of the study group of the project, first briefly introduced the basic ideas underlying the whole project on sovereignty shared by all group members. Against the background of globalization and specially the world-

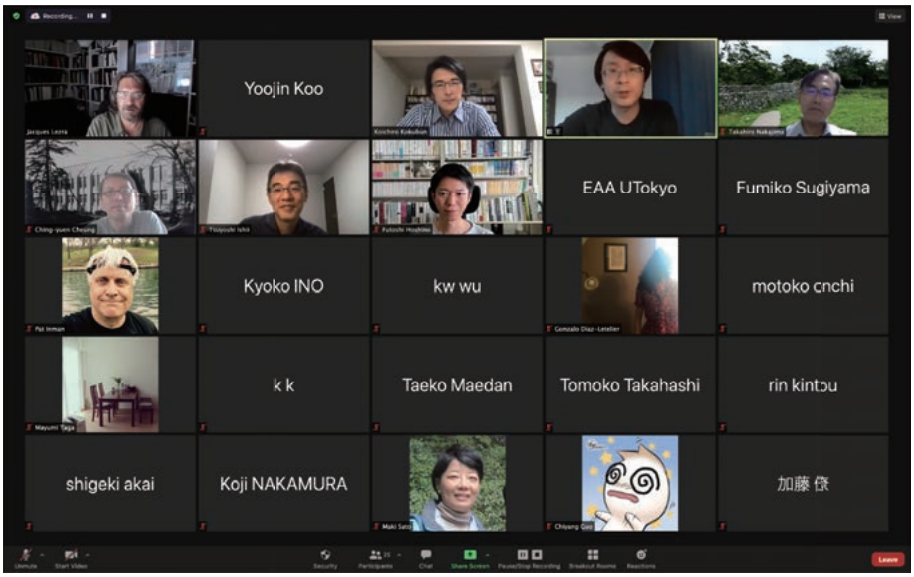
From left, KOKUBUN Koichiro, WANG Qin, and Jacques Lezra

wide problematic of the corona-virus, emphasized Kokubun, what has been taken for granted for a long period in terms of politics, including the principle of democracy, the limit of sovereign state, the problematic of the exceptional state, etc., now have to be critically reexamined. That being said, there is no given alternative to the idea of sovereignty when we think about contemporary politics. The project, then, according to Kokubun, aims at a philosophical articulation and criticism of a series of problems concerning sovereignty as it is operative in the present-day, including the distinction between politics and governance, the tension between democracy and the state of emergency, and so forth.

Professor Jacques Lezra (University of California—Riverside) then gave a speech on "Instance of the Police: on Defective Institutions," where he argued that, if in nowadays political practices sovereignty constitutes the "common" through its institutions of violence, whose exemplary case is none other than police, then what is at stake for us is to imagine a sort of "defective institution" where the constitution of commonality becomes problematic in the first place. With regard to the current form of the state, Lezra poignantly asked: if the state is to be understood as a legitimation of some people dominating other people through persuasion or suppression represented by the police, why is the state to exist at all? The instance of the police, according to Lezra, played a significant role of creating hegemony, serving to regulate analogy and synonymy, determining borders and limits, and thereby representing the necessity in the field of politics.

Lezra pushes further the problematic of the instance of police, as it operates as the representation of the necessity of necessity in politics through a close reading of Louis Althusser's famous essay on ideological state-apparatus, indicating that a seemingly trivial "internal translation" does the work of rendering synonymous subjectivity understood as rendering account of oneself and one's actions, and subjectivity understood as responsibility to a duty. These two subjectivities are sutured by and when the interpellated one turns around in Althusser's theatrical scene, just as the instance of the police produces the synonymy of these two modes of subjectivization. By contrast, concluded Lezra, what are to be called "defective institutions" will be instituted in the disjoining of one's experience from one's formal responsibility for its event.

Professor Kokubun asked about the meaning of "defective institution" while mentioning the Deleuzean distinction between law and institution. Professor Nakajima Takahiro, director of EAA, asked a question about "the instance of the police," where "instance" seems to imply "case" as well as "instant-ness." The issue, the, is about to think about "conditional sovereignty" under such a condition,



asked Nakajima. Professor Ching-yuan Cheung asked about the Hegelian model of the police, where the police is closely associated with the framework of civil society. Professor Ishii mentioned the situation of police offices in the United States, where the right of "qualified immunity" is predominant. Professor Sato Maki put forward the questions about education and anarchism. Professor Hoshino also asked about the concept of "the defective institution," who asked how to deepen the institution defective.

In his response, Lezra pointed out that by "institution" in the normal sense he meant that which is posited in political philosophy as the dispositif of the state; by contrast, "defective institution" does not lie on the concepts of identity, consistency, etc. They are "defective" insofar as they are not coherent, but assemblages of language games in which identity claims do not have continuity or accountability, but contingent temporalities and plural democracies. About Nakajima's question, Lezra said that "instance" also means "insistence," which implies duration. Authority is placed on the retention of an authoritative position, so that the police is the figure where the culture tries to suture the three terms—the court, the instant, and the insistence. What is interesting, by contrast, will be a condition that cannot be saturated, where contingencies, pluralities, and overdeterminations prevail. With regard to the definition of the police, Lezra emphasized that we have think about the possibility in which the police can disappear. Education is often regarded at the service of the erasure of coercive function of the police in the present-day, which at the same time has to be masqueraded in democratic states. But, Lezra stressed, the state cannot be separated from its apparatus. In the alternative version, this will not be the case for defective institutions are noninstrumentable devices.

Report by Qin Wang
(Graduate School of Arts and Sciences)

第3回「部屋と空間プロジェクト」研究会

内なる泉を守る「部屋」

2021年7月29日

生活を簡素化し、能率化された「部屋」があれば、自身の創作能力を高めることができるのだろうか。吉野作造・森本厚吉に誘われ文化生活研究会に加わった有島武郎の論考からは、むしろ、外部の環境がいかに変わっても、自分の内から出てくる声に抗うことはできない知識人の在り方が窺えた。一方、そんな彼にとっての「部屋」とは、内なる泉に耳を傾けるため、外圧を避け籠城し、自らを守るための「陣地」でもあった。

第3回「部屋と空間プロジェクト」研究会は、『私どもの主張』（文化生活研究會、1921年）から、有島武郎の二論考をとりあげた。担当は片岡真伊氏（EAA特任研究員）である。2021年7月29日（木）15：00よりオンラインで行われた。参加者は前野清太朗氏（EAA特任助教）ほか、張政遠氏（東京大学総合文化研究科）、柳幹康氏（東京大学東洋文化研究所）、宇野瑞木氏（EAA特任助教）、若澤佑典氏（EAAフェロー）、高原智史氏（EAA・RA）、滕東君氏（EAA・RA）、伊野恭子氏（EAA学術専門職員）、孔詩氏（人文社会系研究科）であり、外部からも3名参加した。

「泉」（1921）はローマ近郊にある、テベレ（タイバー）河に注ぐFontana dell'Acqua Acetosaという泉を取り上げたもので、有島はこの泉のイメージに仮託し、しばしば自らの理想を語っている。当時有島は自身の創作活動の行き詰まりを感じていた。また、有産階級に属し第四階級（労働者階級）になり得ない自分や「二重生活」に対し苦悩を抱え、生活の一元化、改造を図ろうとした。農場の解放もその取り組みの一つである。彼は、「純一であること」を欲し、群衆に行きわたる「中庸」を否定、自らの「内部の純粋な要求」（「芸術的欲求」）に従って生きようとする。これは彼が純文学を選んだ理由にも重なる。滾々と湧き出る泉もまた、外部の変化に一切左右されないものである。「泉」は絶えず湧き流れて、都市部にあるテベレ河へ流れるが、テベレ河は絶えず変化し、結局、どれが本当の河の姿なのか判断がつかなくなる。汚染されることさえあるだろう。人は様々な制約（「道徳の制約」「教育の束縛」「我々の欲求の外部的約束」）を受けるが、それらを取り払い、「内部の純粋な要求」に従い生きようとする。この「内部的欲求」こそが「芸術的欲求」であり、芸術は詩を書き、画を描くことだけではなく、泉の水が何の力も借りず深い底から地表に湧き出る瞬間があるように、「内部的欲求」もまた、人々の日常生活のふとした瞬間に現れ出るという。

「美を護るもの」（1921）は、エレン・ケイ（1849-1926）の著作に依拠しながら、ラヘル（ラーヘル・ファルンハーゲン〔1771-1833〕の生き様を紹介し、有島の考えを論述するものである。ラヘルは18世紀末～19世紀初頭にサロンを主宰した女性で、女性解放についても積極的に発言した。有島はラヘルの生活・思想に「新しき時代に刺戟を與ふべき多くのもの」が含まれていると考えた。ラヘルの思想の軸となるのは、誠実さ・個人主義・偏見に束縛されない道徳感・本当の心の尊重である。有島自身が、自己の価値を増進する重要性を認識し、本能的生活（人間意志の絶対自由）を肯定していたことが、ラヘルに惹かれる原因となったのだろう。彼は「習性的生活」「知的生活」を超え、「本能的生活」すなわち「自働的の生活」を目指すべきだと考えた。自らの内なる声に耳を傾け、深い内省を続けることに

よってのみ、私たちは自由を勝ち取れるのである。

報告では最後に、「有島にとって文化生活は何か」を考察した。有島もまた、森本らと同様に「文化の行き詰まり」を問題視する。しかし彼は「文化」という語が曖昧であり、愚者を欺くため都合良く使われていると指摘する。民族の生活を押し進めるような、動的な力を持つ生活こそが文化であり、従来のような支配階級のみが享受し他の階級を苦しめる文化は真の文化ではないと考えた。泉のように、人間の生命が滾々と湧き出る時にこそ、何物かがもたらされる。自己の生活を真に見つめ、正しい方向性に向かわせ、生命力と創造力とを養い、自己に徹する生活を営むことで、「国民社会の文化に働きかける力」が出現するというのだ。

有島は、自身の部屋の隅にある机を「陣地」とし、欧州旅行の記念品をならべ、それらを眺めながら長い間考えこみ、衝動的に涙を流したという。また、欧米で過ごした時代の思い出の品で飾り立てた部屋を「僕の僧房」と呼び、外圧に侵されることのない空間で、翻訳や浄書に打ち込んでいたという。

私は中国への留学経験があるが、振り返ってみると、長い留学期間の間、荒天のためだったか、あるいは何も用事がなかったからなのか、一日中ずっと「部屋」にいて、全く外に出なかった日が数日ある。あるいは、授業や研究会が終わり、もやもやとした様々な思いを抱えて、自分の「部屋」に帰り疲れ果ててベッドにもぐりこんでいた時、私はずいぶん、内なる声に向き合っていた気がする。

片岡氏は、私よりもさらに長い在外経験を持つが、コロナ禍と重なった時期は、むしろ「引きこもり切れていない」感覚を味わってきたという。オンライン会議やメールのやりとりで仕事が進み、部屋にいても、常に「外」とつながっている感覚である。

コロナ禍において、他者とのコミュニケーションをどうとるか、どう「外」とつながるかがずいぶん模索されてきたように思う。私もまた、昨年着任したばかりの新しい職場に、どのように馴染んだら良いのかを考え続けた一年であった。コロナ禍は、もちろん人類に不幸をもたらしたが、それでも私は、環境が全く変わるということは、「新しい学問」が生まれる契機になるのではないかと期待してもいた。

しかし問題の核心は、「外」とどうつながるかということよりも、「外」と「内」との境界が曖昧になり、「内」なる泉に耳を傾け、個に向き合うための「部屋」に、完全に「引きこもれていない」ということなのではないか。「部屋」が「陣地」でも「僧房」でもなく、常に最前線で戦う場となり、自分の「内」に向かえなくなっている事実こそが、問題なのではないか。

一方、質疑応答の際、若澤氏の指摘で気づいたこともある。有島は、本人の意思とは無関係に「文化生活研究会」に巻き込まれていく感じがする。彼にとって「文化生活研究会」が目指した、西洋化し簡素

化された合理的・能率的生活は、全く無意味ではなかったが、それでも彼の創作能力に深く影響を与えるほどのものではなかった。しかし興味深いのは、それでも彼は、生涯彼の仲間と付き合い続けていくことである。また、有島が理想としたラヘルは、個人主義を貫き自己の内面に目を向けるも、生涯サロンを営み数多くの知識人と交流し、家族を気遣う良き家庭人でもあった。滾々と湧き出る、内なる泉を守り通そうとする信念のようなものは、むしろ「外」に触れ、巻き込まれ、さらされる生活を送っていたからこそ、生まれ出るのではないか。「外」で感じた様々な思いを、一度「内」に帰り、自分の心と照らし合わせてみる。「外」からの影響にさらされ続けるのではなく、「外」に対して自分の「内」がいかに共感し、また、いかに抵抗しているのかを味わってみる。有島は生涯煩悶し続けたが、このような態度こそが、彼が新しい何かを生み出していく源泉であったようにも思われる。「外」から、彼の「陣地」「僧房」に戻ってきた時の、有島の衝動的な涙はまさに、その源泉を象徴するものではなかっただろうか。

報告者:田中有紀(東洋文化研究所)

第3回 EAA沖縄研究会

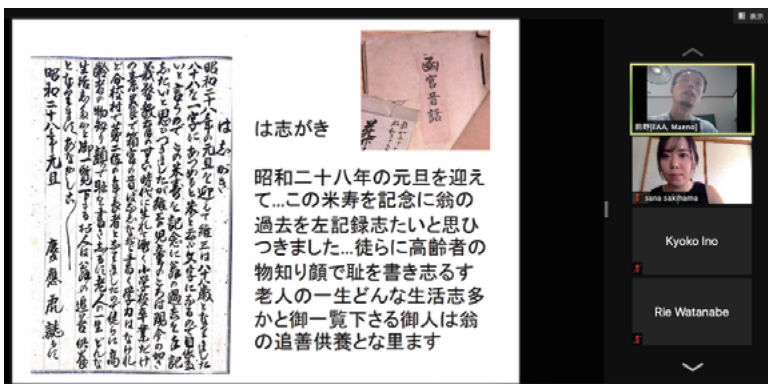
前野清太朗氏「私史に読む「裏日本」のファミリー・グローカル・ヒストリー」

2021年7月30日

2021年7月30日、第3回となるEAA沖縄研究会が開催された。前野清太朗氏(EAA特任助教)が「私史に読む「裏日本」のファミリー・グローカル・ヒストリー」と題して発表を行った。前野氏の専門は現代台湾農村研究であるが、今回は、「周辺」あるいは「辺境」として位置付けられる「沖縄」との関連から、ご自身の故郷である石川県南部を出発点として、「裏日本」と呼ばれた北陸地域を「半周辺」と捉える観点からご発表いただいた。

タイトルにあるように、前野氏は自身のファミリー・ヒストリーとして、父方の曽々祖父である前野維三氏の遺した手記を手がかりに、維三氏やその兄弟たち、ひいては母方の親族たちがどのようなローカル／グローバルな移動・活動を行ってきたのかを繙いていった。

維三氏は1866年、石川県江沼郡に生まれた。先述の手記は、維三氏の経歴や家系図、明治維新後の集落の変化や民俗に関する記録など、幅広い内容を網羅している。本研究会では過去2回、『眉屋私記』(上野英信著)や『越えていく人――南米、日系の若者たちをたずねて』(神里雄大著)といった、文学と歴史の間を自由に横断する作品を扱ってきた。今回前野氏が取り上げた維三氏の手記も、こうした作品に連なるものとして読むことができる。史料を読み解き



発表している前野清太朗氏(EAA特任助教)

実証的な分析を重視する歴史学的態度と、そこからはこぼれ落ちる「語り」という領域の双方に目配せをしながら前野氏が描き出したのは、次のような歴史ー物語（ヒストリー）である。

奈良県庁の技師となった維三氏には、4名の弟がいた。次男は北海道・帯広で海運業に従事、三男は故郷で撚糸工業を開業、四男は東京の官界、五男は台湾で警察官、といったように、家族の足跡を辿るとそこには帝国日本の近代史が浮かび上がる。古厩忠夫『裏日本――近代日本を問いなおす』（岩波書店、1997年）によれば、江戸期から北前航路の中継港として栄えた石川県江沼郡は、明治期に入ると、そのルートに乗るようにして人々も北海道や京阪神へと移動していった。京阪神へ移動していった者は、工場労働者のほか風呂屋・豆腐屋・魚河岸といった職業に従事した。このように労働者を供出しただけでなく、同地域は工業原料の供給地として京阪神の産業を支える働きをした。『眉屋私記』には、沖縄から同地区へと奔出していった労働者の姿が描かれていたが、彼らは非熟練労働に従事する最下層労働者として市場へ包摂されていった。これと比べると、前野氏が指摘したように、「裏日本」地域は「周辺」と「中心」の間に位置する「半周辺」として位置付けることができる。また、資本主義に包摂されながらも同時に遺棄されるという沖縄の「辺境」的性格とは異なる特徴が同地域には見出される。

古厩忠夫『裏日本――近代日本を問いなおす』（岩波書店、1997年）

前野氏は維三氏の手記以外にも、母方の系譜を辿り、満州あるいは台湾といった「外地」と「裏日本」とのつながりについても言及した。興味深いのは、石川県南部の料理の話である。前野氏は、他地域と比べると砂糖を使用した甘い味付けが際立つのは、もしかすると、台湾から安価で輸入された砂糖が同地域に移入されたためではないか、という仮説を述べた。ちなみに、台湾総督府の技手として同地でのインフラストラクチャー建設に従事した八田與一（1886-1942）は石川県出身である。

発表の最後に、前野氏は、一体なぜ維三氏がこのような手記を遺したのか、という問いを立て、次のように述べた。維三氏は次のように書き記している――「老人の一生どんな生活志多かと御一覧下さる御人は翁の追善供養とな里ます」。「イエ」の継続（必ずしも「血」の繋がりが必要なのではなく、あくまでも重視されたのは「家」の継続であった）が現在よりもより強く重要視されていた時代において、維三氏は、自身の娘婿が先に逝去し「若先祖」となるという経験をした。また、孫娘夫婦にも子供がいなかった。柳田國男『先祖の話』にもあるように、家とは、子孫が先祖を供養し、先祖が子孫を見守る神となる、という関係が営まれる場であった。維三氏は故郷で絶家となった家が何戸あるかについても細かく記録している。このことから前野氏は、この手記は必ずしも子孫に宛てて書かれたものではなく、絶家の恐怖と隣り合わせのところで維三氏が執筆したものであったのだろう、と推測した。

ところで『先祖の話』は、先の大戦で若くして戦死した人々を、血縁や既存の家に関係なく新たに「先祖」として祀ることによって、かれらの魂を弔うことを論じた書物である。維三氏の手記は結果として、子孫である前野氏のもとへと届けられたが、そうではなく、全く血の繋がりも家の繋がりも持たない者がこれを読んだ可能性もあったのだ。手記から浮かび上がる近代史の姿もさることながら、書くということの歴史ー物語性、言い換えれば「歴史する」ということの意味もまた深く問われた発表であった。

報告者:崎濱紗奈（EAA特任研究員）

The 6th EAIHN Online Seminar

2021年8月2日

6th EAIHN Online Seminar

Program for European Studies at Seoul National University, South Korea

August 2nd (Mon.), 2021. 19:30-21:00 (KST/JST)

Speaker: Hiroki UENO 上野大樹 (Keio University & Hitotsubashi University)

"The Enlightened Scots as Citizens of Europe"

Discussants: Iago Ramos (University of Salamanca, Spain)

Paul Tonks (Underwood College, Yonsei University, South Korea)

Chair: Doohwan Ahn (Seoul National University)

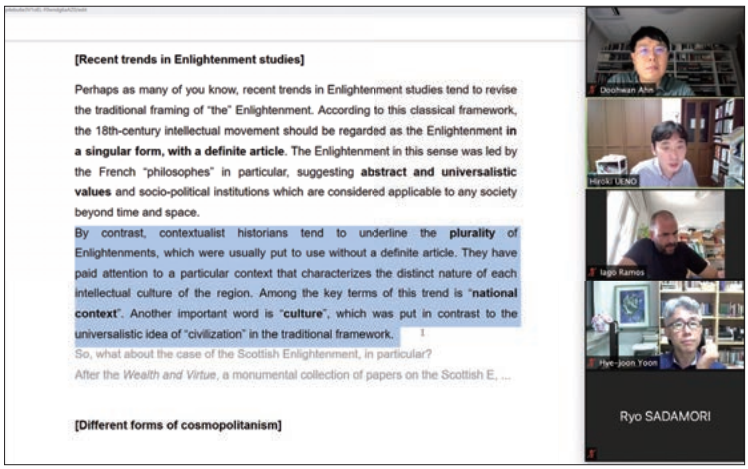
On 2 August Monday, from 19:30 to 21:00 (Tokyo time), Dr. Hiroki Ueno gave a talk on the topic of "The Enlightened Scots as Citizens of Europe". The presentation was based on Dr. Ueno's paper entitled "The French and English Models of Sociability in the Scottish Enlightenment: The Politics of Refined Culture in David Hume", which is published in Annick Cossic & Emrys Jones (dir) La Repre'sentation et la re'invention des espaces de sociabilite'au cours du long XVIIIe siècle (Le Manuscrit, 2021). Professor Paul Tonks at Yonsei who is currently visiting Oxford as a fellow in residence and Professor Iago Ramos at Salamanca were the discussants.

Dr. Ueno's work is a bridge in the literature which sees the 18th century Scottish cosmopolitanism linked either with France or with England. He highlighted, instead, that the links are with both, rather than just with one or the other. From the comments, during the discussion, a suggestion was to look at the influence also of Holland and other European countries in Scotland.

Dr. Ueno also highlighted that the Scottishness of the 18th century cosmopolitanism is characterized by its focus on sociability. From the discussion after the presentation, a lively debate emerged about the difference between this Scottish understanding of cosmopolitanism and the Rousseaunian one which focused more on homogenization.

The presentation was extremely well prepared and the discussion energetic.

Report by Maria Pia Paganelli
(Trinity University / President of the International Adam Smith Society)



一高プロジェクト

「藤木文書アーカイヴ」共同発表会

2021年8月4日

8月4日（水）、「藤木文書アーカイヴ」の共同発表会を参加者限定で開催した。発表会はZoomを用いたオンライン形式で行われ、20名ほどの参加者にも恵まれた。発表者として、宇野瑞木氏（AA特任助教、司会も兼任）、高原智史氏、報告者の横山雄大、日隈脩一郎氏（ともにEAAリサーチ・アシスタント）、宋舒揚氏（東京大学大学院博士課程研究生）の5名が登壇し、コメンテーターとして川島真氏（東京大学）と荒川雪氏（東洋大学）が発言された。

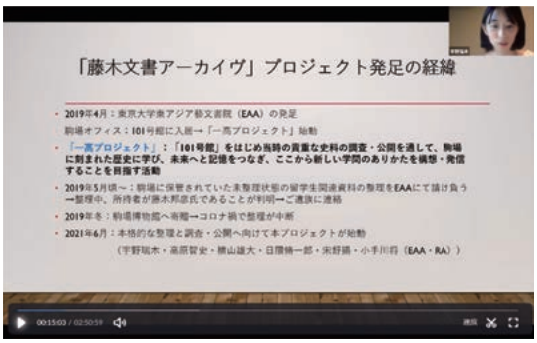
第1報告として、宇野氏が「藤木文書の概要とその活用法及び課題について」と題して報告を行った。まず、「一高プロジェクト」とその一環として位置づけられる「藤木文書アーカイヴ」プロジェクトのこれまでの活動と今後の予定について述べた。その上で「藤木文書」の来歴やその所持者である藤木邦彦に関して紹介を行った。最後に、「藤木文書」の具体的な構成内容について紹介し、その活用方法や今後の課題について議論を投げかけた。

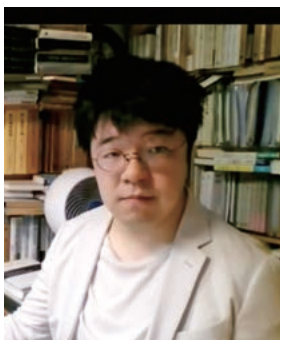
第2報告として、高原氏が「個人文書としての藤木文書の生成と収蔵」と題して報告を行った。まず、個人文書と法人文書の定義について解説を行った。その上で、一高内部に文書管理規定が存在せず、法人文書の集積にも積極的でなかったため、留学生課長である藤木のもとに文書が集積されたとした。そして、このような一高の文書管理の不足を補う存在として、「藤木文書」含む個人文書の重要性を指摘した。

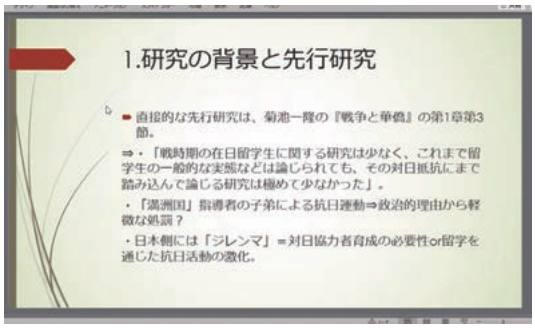
第3報告として、横山が「留学生管理における両面性――釈放後の復学手続きを事例に」と題して報告を行った。本発表では、対日協力と抵抗という留学生の両面性を検討し、国共双方が地下活動を組織するなど、一高の留学生にも同様の特徴が見られた点を確認した。さらに抗日運動のために逮捕された留学生の釈放後の復学手続きを事例として取り上げ、管理側は復学を認めることで、再度対日協力者として取り扱いを行っていたことを指摘した。以上をもって留学生自身だけでなく管理側にも両面性が存在していたことを述べた。

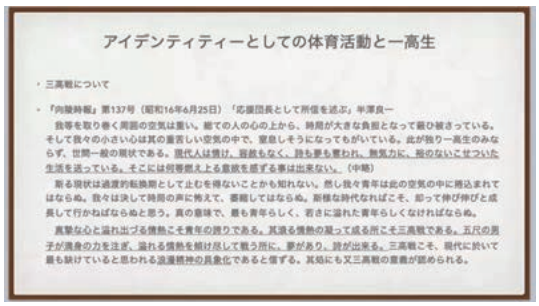
第4報告として、日隈氏が「戦時留日学生の帰趨――旧制第一高等学校教授・藤木邦彦宛書簡の紹介を中心に」と題した発表をした。まず藤木宛に届いた書簡について、差出人、投函地、内容を整理し、その上で、当時の日本の留学生政策を概観し、それを反映して書簡の内容も入営延期、休学依頼、疎開の連絡などが中心であったとした。さらに今後の展望として、留学生の疎開や郵便を含む情報交通網の状況、他の資料館との連携やプライバシーの問題などを提示した。

第5報告として、宋氏が「戦時中における一高護国会と体育活動について――藤木文書を手がかりに」と題して報告を行った。宋氏はまず、クラブ活動にあたる護国会の成立過程について説明を行った。もとも




高原智史氏





と一高ではクラブ活動が盛んであり、軍事上の体育活動の重要性からクラブ活動は維持されたものの、戦争動員の準備の必要性が次第に高まり、自治の精神に反する形で、護国会への改組が行われたと指摘した。

以上５名の発表を受けて、コメンテーターとして、まず川島氏が発言された。今後の方向性として、隣接資料の活用と戦後の留学生の状況解明の必要性を指摘された。また、特に日隈報告に対し、戦時下の留学生の疎開や情報交通網の変化について今後の研究が期待されるとして、その意義を評価された。

川島真氏

荒川雪氏

次に、荒川氏もコメンテーターとして発言された。関連資料やインタビューの活用、遺族の所蔵資料の収集の可能性や戦後の留学生の状況解明の必要性について言及された。一方で、インタビューの史料としての信ぴょう性やプライバシーの問題、扱う対象として東大生を含めるのかについても言及された。さらに戦後の一高の留学生の活動について、中国留日同学総会の機関紙などを用いながら、一高生が戦後同団体の中心的人物となって 1948 年以降親中共的な路線を推進し、人民共和国への帰国後も日中関係における中国側の幹部として活動していたことを説明された。

最後に、フロアからもコメントが出された。その中では、他の文書との関連性、様々な一高生の戦後の活動、憲兵と検察の違いの重要性、戦前の状況に注目する必要性などが議論になった。

以上のように、様々な議論がなされ、盛会のうちに本報告会は終了した。

報告者:横山雄大（EAAリサーチ・アシスタント）

EAA座談会

第5回「人間」を価値化する

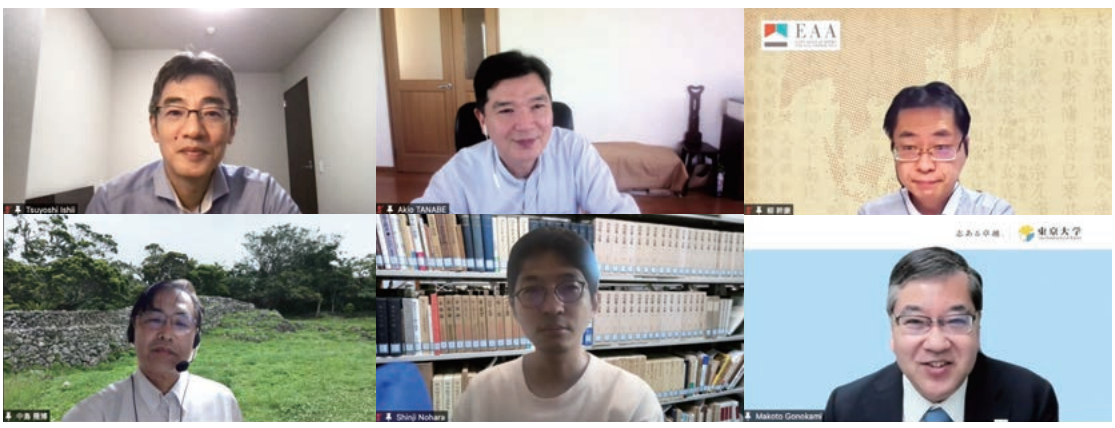
2021年8月5日

2021 年 8 月 5 日（木）に第 5 回 EAA 座談会「「人間」を価値化する」が開催された。今年度、EAA は「価値と価値化」をテーマとする議論に取り組んでいる（EAA キックオフトーク「価値と価値化を問う」〔2021 年 4 月 1 日〕を参照）。今回は、中島隆博氏（EAA 院長）の司会の下、五神真氏（前総長、理学系研究科教授）をはじめ、田辺明生氏（総合文化研究科）、野原慎司氏（経済経済学研究科）、柳幹康氏（東洋文化研究所）、石井剛（EAA 副院長）が登壇し、「価値と価値化」をめぐる議論を深めることができた。当初、感染防止対策を徹底した上で対面で行われる予定であったが、近日来の感染者数の急増状況に鑑みて、全面オンラインでの開催となった。

最初に、中島氏により趣旨説明が行われた。「「人間」を価値化する」という刺激的なタイトルについて、中島氏は、EAA の寄付元でもあるダイキン工業と東京大学の枠組みの中で「空気の価値化」をめぐる議論に参加したことを契機として、現在さまざまな問題を抱えている資本主義システムの中で展開されている「価値」と「価値化」をめぐる議論を批判的に捉え、もう一度「もの、こと、ひと」を整理し、「価値」と「価値化」を考える機会を設けていくことの必要性を述べた。その過程で大事なのは、こうした議論を再構築していく場もしくはフラットフォームとしての大学の役割であるとし、今回の座談会のような試みの重要性が強調された。

以上の趣旨説明を受け、五神氏は「社会変革を駆動する大学――知識集約型社会を支える「価値」の創造」と題する基調講演を行なった。五神氏は、総長就任前から抱えていた問題意識――大学が生み出している高度の知が社会で十分活用されていない（言い換えれば、「価値化」されていない）――を元に、それにチャレンジした総長任期の 6 年間のビジョンと経験を明確に伝えた。総長在任期間中のさまざまな取り組みの中で、とりわけ、デジタル革新に代表される知識集約型社会において、大学主導で、市場と社会に良い刺激を与える仕組みを構築するための「グローバル・コモンズ」構想とセンターの立ち上げが語られた。こうした構想に欠かせない膨大なビックデータの活用においては、デモクラシーとインクルーシブ、良きガバナンスが求められることが強調された。より良い社会を勝ち取るための大学の役割を実践的に示した前総長ならではの示唆に富んだ基調講演であった。

基調講演の後には「人間を「価値化」する」のは、いかなるものかという問いをめぐり、各分野における報告がなされた。まず、「生の意義としての価値」を題



上段左から、石井剛氏、田辺明生氏、柳幹康氏、下段左から、中島隆博氏、野原慎司氏、五神真氏

にして田辺氏の報告がなされた。田辺氏は、今は価値喪失の時代であると診断した。その上で、経済的な意味での価値が支配的に語られている現在、この「価値」を根本的に捉え直すためには、今の「価値」の捉え方が構築された近代の前まで遡る長いタイムスパンで考える必要があると指摘した。田辺氏は、人間がいかなる価値を求めてきたのかという観点から人類史は価値の探求の歴史でもあると述べ、価値と幸福、自由、宗教、真理との関係を考察し、洞察のある「生」をめぐる「価値」を見出した。

次に、野原氏は経済学の観点から価値を論じた。野原氏は、経済史において、価値は商品から労働へ、労働から消費へと移動したことを概観し、その背後に無限の欲望追求が肯定される市場独自のメカニズムがあるとした。つまり、個人の満足もしくは欲望を追求することは、欲望の商品化を通じて、人間活動を価値化するのであり、これこそが資本主義の原動力となったとの説明であった。しかし、情報集約社会である現在にはこうしたメカニズムが問題を起こしているという。特に情報（データ）管理について、野原氏は、諸個人が共有できる情報をめぐる満足の追求が、新たな社会の価値形成をもたらす可能性があるのではないかと提案した。

続けて「仏教のコモンズと人間の価値化」と題した柳氏の報告がなされた。中国仏教を専門とする柳氏は、出家者の共同体であるサンガを手がかりとして仏教におけるコモンズの形成と運用、思想を紹介した。そこでは「輪廻」に基づいた人間の価値化が試されていたという。それが故に、サンガには多様性と倫理の内面化が進んでおり、担保された。柳氏は、サンガは持続可能なコモンズのインフラとしての物語かもしれないが、現代の私たちはそれに替わり得る物語を持ち得ているのかと問いを投げかけた。

最後に、石井氏が「斉物的平等と「渾沌」のメカニズム――『荘子』斉物論の近代的解釈から考える」と題した報告を行った。中国近代の哲学者・章炳麟は、『荘子』斉物論篇に対して、いわば「斉物的平等」という考え方を提起した。それは、等価値であることによって平等なのではなく、価値によって測られることのない「物」の存在そのものが平等であることを指す。こうした「斉物的平等」の考え方はさまざまな声を出す多様性に満ちた「天籟」ともつながり、またそれは「渾沌」（カオス）ともかなさる。つまり、「斉物的平等」の世界観を表す方法としては「渾沌」をもう一回作り出すほかないのではないかとの考えである。石井氏はこうした「渾沌」の場というのは大学で

あるべきではないかと主張した。

密度の濃い議論が続いたが故に、総合討論としての時間が十分に確保できなかったものの、登壇者間で、用語の確認や実践の方法と問題点、法律の整備など多岐にわたる議論が行われた。この深くかつ刺激的な「価値」をめぐる今回の議論については、今後原稿を整えてEAAブックレットにする予定である。今から刊行が楽しみである。

報告者:具裕珍(EAA特任助教)

第23回 石牟礼道子を読む会

2021年8月10日

2021年8月10日(火)15時より、第23回石牟礼道子を読む会がオンラインにて開催された。参加者は、発表者の高山花子氏(EAA特任助教)の他に、宮田晃碩氏(EAAリサーチ・アシスタント)、建部良平氏(東京大学大学院博士課程)、池島香輝氏(東京大学大学院博士課程)、山田悠介氏(大東文化大学)、倉持長子氏(聖心女子大学)、徐嘉熠氏(清華大学大学院博士課程)、そして本ブログ報告者の宇野瑞木(EAA特任助教)の8名であった。

今年度に入ってから、本読書会では、6月15日の盲目の座頭琵琶の説教節の上映会、石牟礼の新作能「不知火」の上映会を開催し、併せてその専門家である兵藤裕己氏(学習院大学名誉教授)、及び高橋悠介氏(慶應義塾大学)、倉持氏を招いて講演いただきながら、伝統芸能の世界と石牟礼文学との交叉の在り方やその意味について議論を重ねてきた。

『新作能「沖宮」DVDブック 魂の火 ―妣なる國へ』(求龍堂、2019年)

このような流れの中で、高山氏が6月12日に京都の金剛能楽堂にて上演された石牟礼道子原作の新作能「沖宮」夜の部の公演を鑑賞し(「新作能「沖宮」視察――石牟礼道子原作の能舞台を見て」〔2021年6月12日〕)、これをきっかけに、新作能「沖宮」の実行委員長代表の志村昌司氏を読書会にお招きしてお話を伺う企画が進んでいる。今回の読書会は、その事前勉強会として設けられたものである。

高山氏は、最初に、自身が金剛能楽堂にて新作能「沖宮」を鑑賞した時に体感したことや印象的であったことについて語った。高山氏が特に印象的であったと述べたのは、前半の「二重唱」においてセザール・フランク作曲の歌曲「アヴェ・マリア」、そして石牟礼道子作詞・佐藤岳晶作曲の「黒髪」と「アニマの鳥」が歌われた点であったという。特に「アニマの鳥」では、16世紀末に天草で作られたとされる竹のパイプオルガンの複製楽器の音声が用いられていたとされ、どのような音色を舞台に響かせていたのか非常に興味惹かれるものがあった。

もう一点は、後半の新作能「沖宮」にて、志村ふくみ氏によって染め上げられた衣裳の色と輝きであったという。とりわけ竜神に人柱として供される少女「あや」の緋色の衣裳の舞の際の光の照り返しは鮮やかであり、そういた染めの過程と石牟礼の言葉や思想がどのように作用しあったのかという点に注意が喚起された。

続いて、パンフレットの情報なども紹介しながら、改作された箇所やその意図についての主催側の説明にそって、原作との違いについて検討がなされ

た。具体的な大きな改変としては、天草の乱の後、干ばつに苦しむ村で、雨乞いの儀式の人身御供となる亡き天草四郎の乳兄妹の「あや」という少女を連れていく存在が、竜神から「大妣君」に変更されている点、また全体としてもともと戯曲の科白劇として作られた文体を能にあうように七五調に整える際に、石牟礼の晩年の詩などを謡の中に織り込んだ点が挙げられるという（中村健史「解説 妣が国・沖宮」参照）。

以上を受けて、議論の時間に入った。まず能の専門家である倉持氏から、石牟礼の新作能は、過去を引き受けて供養することと、生者と死者だけではなく、死者同士を引き合わせることという二つの能の核をなす要素を併せ持っている点が指摘された。特に、生前には争い合った仲の者同士が、死後に出会い和解しともに浄化されるという能における構造は、石牟礼の「草の砦」（ただし、これは「戯曲」とされている）にも確認されるという。読書会では、これまでも生者の世界に死者の世界が接続する構造を出現させる能舞台の特質が議論されてきたが、石牟礼にとって、能がもつ死者同士を引き合わせて和解させるような構造もまた重要であったのではないか、と気づかされた。

また、能は鎮魂と共に、供儀という要素もある。そもそも能役者の舞台上の身体は、面による孤独と重い衣裳の拘束により心筋梗塞を起こしてもおかしくないほどの過酷な状態にある点で、舞台に捧げられる供儀でもある。

しかし同時に、石牟礼が舞台において供儀というテーマを敢えて扱ったこと、たとえその先に幽かに救済がほのめかされたとしても供儀の構造がなくなるわけではなく、その点をどう受け止めればよいのか、という問いも浮上した。また、その救済的な要素として新たに加えられた、「あや」を迎え入れる「大妣君」という母性的存在の是非も議論された。そこから、以前に張政遠氏が発表された際の石牟礼の「愛情論」に関する議論や前回の伊達聖伸氏の「小国論」をテーマにした授業の議論にも接続しながら、石牟礼における「母性」なるものをどう評価するか、といったことが議題に上がった。石牟礼における「妣の国」は折口信夫に由来する民俗学的な地盤を踏まえていると思われるが、さらに生命の母を強調するようなエコフェミニズム的な危うさに近接しつつも、しかし「妣」という母系の連なりが他者との連続性を担保する点や母・女というジェンダーを超越して「マザリング」（中村佑子『マザリング――現代の母なる場所』〔集英社、2020年〕）という「ケア」の動詞的な在り方・行為として捉えられる可能性もあるといった意見が出た。「mothering」は「-ing」というように、固定化された状態ではなく、つねに行為や運動として変化し続けていることを意味するのだろう。今回、なぜ石牟礼を読むのか、という問いに対して、すべてを否定せずに話を聞いてくれているような感じがする、という感想が相次いだことも、「ケア」の問題と通じて興味深かった。私個人としても、石牟礼は確かに母性的なものを強調した側面があるが、それは言葉によって分節される前の未分化な世界、森羅万象の共同性の世界への憧憬の比喩表現でもあり、ジェンダーそれ自体が石牟礼文学の本質的な問題ではないように感じている。

その他に、舞台上で主体が不確定なままに自由な語りがなされる「地謡」と「コロス」の関係性、石牟礼の『苦海浄土』第1部以来、40-50年間温められ続けてきた雨乞い祭文という民俗学的な土地の伝承・信仰世界への関心の意味、「もだえ神」と日本のカミの在り方の関連性等が議論された。

まだ「沖宮」を観ることができていない中で、高山氏の観能の体験語りを通して様々に喚起された議論が繰り広げられたが、改めて能というものが、能の言葉だけでもなく、役者の身体表現だけでもなく、衣裳や音楽、その他様々な要素が織りなす総合芸術であり、出来事としてある、ということ抜きにして、この問題は論じることはできないのだろう、ということを感じた。

次回とその次の回で、新旧の「沖宮」の上映会を行う予定であり、実際の上演を体感できないのは残念ではあるが、これらの議論がどのように変化するか、とても楽しみである。

報告者:宇野瑞木（EAA特任助教）

EAA Global Lecture Series

The 1st Lecture "Approaches in Researching Somali Poetry"

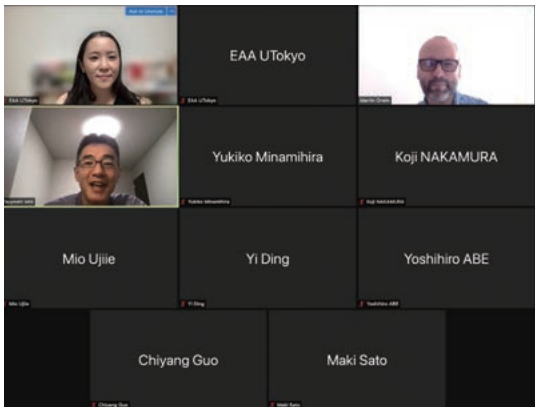
2021年8月12日

The first lecture for the EAA Global Lecture Series co-organised by EAA and GGG (Go Global Gateway at UTokyo) was held on 12 August on Zoom. This new lecture series invites guest speakers from across the world and disciplines to talk about research questions that they have now. It aims to provide opportunities for students at the University of Tokyo and Peking University to meet researchers who work internationally, and also to get to know various perspectives arising from the researchers' rich cultural, linguistic, and academic experience. As the first guest lecturer, EAA invited Dr. Martin Orwin (Associate Professor at the University of Naples "L'Orientale") to talk about his approaches in researching Somali poetry. Somali poetry is not well-known in Japan, but how should one read and understand literature from such an unfamiliar culture?

How Somali conceptualises "literature" and "poetry"

Orwin began by stressing that the ways in which "literature" is conceptualised differ depending on cultures, and demonstrated this point by explaining how the Somali people perceive and categorise their literature. The general term for "literature" in Somali, suugaan, is in fact best known for designating pasture that grows out from the ground when it rains. Rain can be very scarce in the region where Somali is spoken (so "water" is a constant image in its poetry), the environment of which the term reflects. In other words, "literature" in Somali would mean language that is rich as the pasture. It includes various genres of literature including poetry, tales, stories, riddles, and songs—in short, anything crafted in an artistic manner. This different conceptualisation of the term also applies to the case of "poetry", and this relates to one of the inquiries he is currently exploring—the question of how the Somali perceive and conceptualise their poetry. There are four types in Somali poetry: gabay, maanso, hees, and tix. Amongst them, he pays particular attention to the following two forms for his research: hees (folkloric, mostly anonymous, tend to be recited one after another, and its words could be changed) and maanso (more serious poems and its words cannot be changed; the poet is known).

Dr. Martin Orwin (The University of Naples "L'Orientale") gave a talk on Somali poetry.



Literature to be heard, not to read

Somali poetry has been, and still is, predominantly oral literature. Even the written poetry, Orwin says, is essentially there to be listened to. Experiencing poetry would mean for them, is not to read in books/magazines. If one were to read them, the purpose for doing so is to recite them. Due to being "heard poetry" (if I borrow his term), various audio medias—cassettes back in the 1970s and 80s, and online video sharing medias such as YouTube nowadays—have played a vital role in disseminating Somali poetry in contemporary times.

This characteristic of Somali poetry as "heard poetry," combined with his academic background as a linguist and his appreciation of music, comes together in his approach in researching Somali poetry. In introducing some Somali work-songs, Orwin demonstrated the way he examines how language, sound patterns, and music fit together. He used graphs of sound patterns to analyse the way people sing and visually showed how that relates to the pitch in the language. Such sound patterns in Somali poetry are also inseparable in the contemporary context. One of the examples he shared was a short video clip produced by the UNICEF: a music video of a song in which the lyrics explain how one could protect oneself from the coronavirus (Axmed Budul, dhannto about Coronavirus). The lyrics includes a strong alliteration of the "fa" sound (of "fayruus", i.e. "virus" in Somali)—and its repetition makes the song memorable. When they try to deliver a message that they really want people to hear, he explained, the Somali often put the message in a song.

Towards the end of the session, he took the audience through one of the gabay poems he translated, Saxansaxo ('Rain's Breeze' by Xasan Xaaji Cabdullaahi 'Xasan Ganey'). One of the aspects of Somali poetry that he has been trying to understand is the meaning of metaphors in the poems. To decipher the meanings when he translates these poems, he often relies on Somali speakers, and he told how the act of translation itself could involve research and ways in which it had informed his research. As he commented on the poem he translated, beautiful poetic landscapes unfolded, and the richness of the language was revealed. Though it is impossible to transmit all of these aspects of the poems through translation, this richness seems to have served as his strong motivation for exploring the research questions he has now.

Orwin's lecture suggests what reading literature crafted in a remote culture (and of a less translated language) might bring us. His talk made me revisit how "literature" and "poetry" are conceptualised and categorised in the case of Japanese literature. Listening to the Somali poetry along with its music aroused my curiosity not only for differences but also for its similarities, and made me wondered why it sounded so familiar in many places despite the cultural divide, a point which was also discussed during the Q&A. In the conversation with Eckermann in 1827, Goethe once emphasised how reading literature from other nations could liberate people from parochialism that they often get into, and called for the age of world literature (Johann P. Eckermann, Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens, Brockhaus: Leipzig, 1836 & Heinrichshofen: Magdeburg, 1848). Orwin's lecture on Somali poetry allowed me to experience the dynamics at work in

such encounters, and to find a way in which it could work as a stimulus for broadening my perspective.

If you would like to read more about the Somali poetry, please refer to the following article:

Martin Orwin, 'Crafting modern Somali poetry: Lyric features in Fad Galbeed by Gaarriye and Xabagbarsheed by Weedhsame', Journal of African Languages and Literatures, 1, 110-140.

The second EAA Global Lecture will be on 5 October 2021. For further information, please visit its event information page.

Report by Mai Kataoka
(EAA Project Research Fellow)

第6回 ジャーナリズム研究会

シンポジウム「朝日会館と〈コドモ〉文化（1926-1935）――メディア、家庭、社会教育」

2021年8月14日

2021 年 8 月 14 日、数か月ぶりに開催されたジャーナリズム研究会（第 6 回）は、通例通り東アジア藝文書院の後援のもと、朝日会館子供企画研究会との共催シンポジウム「朝日会館と〈コドモ〉文化（1926-1935）――メディア、家庭、社会教育」として開催された。朝日会館は、大阪の象徴的な中心地・中之島に 1926 年から 1962 年まで存在していた総合文化施設である。朝日新聞社会事業団運営のもと、母体の新聞社とは一定の距離を保ちつつ運営されたこの「文化の殿堂」では、戦前から戦後にかけて様々な文化的な活動が行われていた。その様子は、会館から発行されていた雑誌『會舘藝術』解説付き復刻版など、朝日会館・『会館芸術』研究会（主宰・前島志保）における諸研究で少しずつ明らかになってきている。会館は子供向けの活動も積極的に行っていた。朝日会館子供企画研究会は、この子供向けの活動について考察すべく、朝日会館・『会館芸術』研究会から派生する形で、様々な分野の若手・中堅研究者により結成された共同研究会である。

冒頭で、ジャーナリズム研究会の主宰者である前島志保氏から開会の挨拶があり、朝日会館子供企画研究会主宰の山本美紀氏から共同研究会の経緯と本シンポジウムの主旨が説明され、シンポジウムの開幕となった。

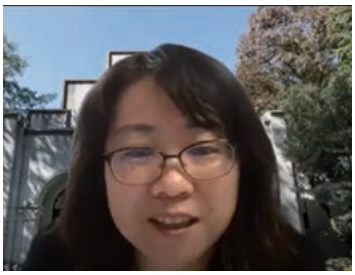
まずは佐藤宗子氏による基調講演が行われた。本講演は、昭和初年代の一般的な児童文学、児童文化の視点から行われ、「朝日会館と〈コドモ〉文化」をめぐる議論の背景を描き出すものであった。佐藤氏は、昭和初年代における児童文学における芸術的・大衆的叢書類の刊行、児童向け雑誌の好調、メディアの拡大に言及したうえで、実際の児童文学に描かれた子どもの姿へと眼を向けた。そして、具体例として千葉省三の作品を取り上げながら、都市の子どもと田舎の子どもの違いを明らかにし、それらのメディアのターゲット層が主として、都市の子どもたち、中流階級以上の子どもであったことを示した。しかし、それは、時代への目配りや庶民の子どもたちの存在を児童文学が閑却していたことを意味しない。氏は、壺井栄『二十四の瞳』に描き込まれた左派弾圧の時代背景、芸術派雑誌『赤い鳥』の掲載作における庶民の子どもの姿、農村・工場の現場で働くプロレタリアの子どもたちを描いた作品などの分析を通して、児童文学の主流が中流以上の子どもたちにありながらも、そこには庶民の子どもたちへのまなざしも含まれていたことを鮮やかに浮かび上がらせた。最後に、その後の児童文学について触れ、1938 年に「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が出されたことにより、統制や検閲へと進んでいったことを付言した。

畠山兆子氏スライドより

続いて、前島志保氏より『アサヒカイカン　コドモの本』（以下『コドモの本』）に関する報告があった。この報告は、子ども向け企画を担っていたアサヒコドモの会から発行されていた雑誌『コドモの本』の特色を、昭和初期のメディア状況を踏まえながら考察するというものであった。前島氏は、まず大正後期から昭和初期の子供関連メディアの活況を素描した。本、雑誌、レコードのほか、子ども向けの催しも多く開催され、開催地の新聞でも掲載されていたという。このような時代状況のなか、朝日新聞社もまた子供向け企画を展開し、そのなかに「アサヒコドモの会」の活動があり、その機関誌として1931年『コドモの本』が創刊された。『コドモの本』は、「うつくしく　おもしろく　ためになる」を標榜し、当時の子供向け媒体のあらゆる要素を網羅した雑誌となっていた。そのような多彩な誌面を持った『コドモの本』は、1932年10月以降、関西の会員向けの機関誌から、全国に向けた子供向け雑誌へと姿を変えていくように見える。しかし、1934年12月以降はふたたび関西の会員向けの雑誌へと回帰していくという。前島氏は、その理由を、『コドモの本』があくまでも朝日会館をはじめとする特定の「場」と密接に結びつき、その特定の「場」に集まった会員やアサヒ・コドモ・アテネの講習会参加者との密接な関係性を通じた文化活動の促進を行なうことに力点を置いたためではないかと推察した。また、氏は、『コドモの本』の活動には芸術志向の元社会主義者や女性作家・女性画家なども関わっていたことを指摘し、そのような人々への活躍の場を提供したものであった可能性も示唆した。

次に、高山花子氏がアサヒコドモの会における児童画教育について報告した。アサヒコドモの会の機関誌から出発した『コドモの本』の自由画選評欄や広告を確認すると、アサヒコドモの会では、児童画教育と呼びうる一連の活動があったことがわかる。高山氏は、同時代に行われていた自由画教育を補助線として、アサヒコドモの会による活動の特徴を炙り出していった。高山氏が最初に着目したのは、『コドモの本』誌面上での、小野田伊久馬による略画指導であった。この略画指導において、小野田は写生の重視や遠近法に言及しており、それは自由画教育とは異なった指導法であった。つづいて、氏は同誌面における古屋新の自由画選評に言及した。選評を見ると、自由な発想や独創性に対しての批評というよりは、写生的な部分への批評が中心であることが解る。これもまた、当時『赤い鳥』において山本鼎が担当していた自由画の募集欄とは類似しつつも異なった路線であった。さらに、古屋新が『子供の描く絵の導き方』(1942)において、自由画による個性尊重主義の限界を指摘していることも見逃せないという。最後に、高山氏はアサヒ・コドモ・アテネにおいて実際どのような「絵を習う会」が行なわれていたかを、『コドモの本』の広告の分析によって明らかにした。氏は、「絵を習う会」が、雑誌誌面と連動し、朝日会館周辺の洋画家の手による専門的な習い事の側面が強い活動であったのではないかと考察し、それは児童への教育に止まらず、関西での高校生やアマチュアに対する絵画教育の一部をなしていたのではないかと結論づけた。

次いで、大森雅子氏が「サウエートの絵本」について報告した。1932年から1935年にかけて、『コドモの本』誌上で40回にもわたりソ連の絵本が紹介されたという。詩人マルシャークと画家レーベジェフによる『アイスクリーム』は、「デブさん」と訳された紳士が屋台のアイスクリームを次々と平らげて、ついには凍り付いてしまうというユーモラスなストーリーである。「デブさん」には成金と道化の二つの要素があるが、「サウエートの絵本」では、成金に対する風刺の要素は欠落し、最後に凍りつく挿絵もカットされているという。『コドモの本』の読者は中産階級の子弟であり、ブルジョワ風刺は採用されなかったのである。編集者の高瀬嘉男は、アナーキズム系のプロレタリア童


前島志保氏

大森雅子氏

高山花子氏

紙屋牧子氏

山本美紀氏

佐藤宗子氏

話運動に参入していたが、1931 年にはそこから離れていた。高瀬は、吉原治良や小西謙三を通して知ることとなった 1920 年代から 1930 年代のソ連の絵本の中に、それまでのプロレタリア児童文学に代わる、芸術性と社会性を兼ね備えた新しい児童文学の姿を見出していた。高瀬に賛同した能勢寅造が絵本の選定と翻訳に携わり、「サウエートの絵本」のシリーズが成立したのだという。

休憩をはさんで、紙屋牧子氏が報告をした。主題は、『二つの玉』という、懸賞映画小説から成立し、1926 年に公開された映画である。1920 年代、映画には不良のイメージがあったことが『婦人倶楽部』の記事から示され、子どもも観られる教育映画の必要が感じられていたことが言われた。1924 年に全関西映画協会が成立し、同協会は『二つの玉』にも出演することになる水谷八重子をハリウッド視察に派遣するなど重要な役割を担った。また水谷の壮行会として日比谷で開催されたイベントでは映画上映に加え、水谷の日舞が披露された。舞踊と映画という組み合わせは当時、朝日会館でも頻繁に上演・上映された集客力のあるプログラムだった。紙屋氏は、『二つの玉』の原作小説と映画とを比較し、映画化にあたって原作の「怪奇的」雰囲気が弱められ、また、映画興行にあたっては水谷の帰朝記念映画であることが「教育映画」としての側面よりも強調されているとした。また同時代に映画界で「教育映画」の製作が志向されるに至った流れについて、1921 年に映画への世間のイメージの向上を図るものとして開催された文部省主催の活動写真展覧会、雑誌『映画教育』の創刊といった事例などを挙げ説明がなされた。1925 年にはフィルム検閲規則が制定され、内務省による検閲制度が整備されたという。そうした中で映画製作側は、検閲に不合格とならないように（そうすると資金回収もできなくなるため）、世間に受け容れられる映画を作ろうという方向へより傾斜していったと指摘し、「教育映画」製作もその流れにあると締めくくった。

続いて、山本美紀氏が趣味教育について報告した。運営を担った朝日新聞社会事業団について触れ、社会への還元として、朝日会館の事業は、社会福祉事業と同列のものとしてあったことが示された。そこでは、「なつてしまつてからより、ならぬさきの社会事業」ということが言われていたという。アサヒ・コドモの会、そしてその開始から 5 年後に創刊された『コドモの本』は、参加者と読者を共有していたという。『コドモの本』については、たとえば絵のコンクールが開かれ、そのためのレッスンが催され、そうして展覧会が開催されるという風に、何重にもリンクする企画が組まれていた。趣味教育というのは、健全な娯楽と慰安が求

められたものだといい、学校教育とは別の、知的趣味教育を次世代に対して施していこうという意向があったという。学校とは違って、趣味教育は、自分の興味関心から結びつく主体性を伴うものであり、体験的であり、体験を通じてメンバーシップが強まっていく性質があるという。地域の教育機関ともつながりながら、、学校教育とは別の教育コミュニティを創り出していたと結んだ。

最後に、長年、大阪における子供文化について研究してこられた畠山兆子氏がディスカッサントとして登壇した。畠山氏は、児童文化に関する豊富な知識に基づき、各報告に対するコメントに入る前に、まず、日本における児童向け雑誌の流れと大阪を中心とした関西における児童文化の展開について解説し、本シンポジウムの報告を改めて児童文化とメディアの歴史の中に位置付けた。そのうえで、『コドモの本』など資料入手の困難さを指摘、吉原治良ら具体美術協会の人々がソビエトの絵本を収集していた理由の考察、および、朝日新聞社から出されていた絵雑誌『コドモアサヒ』との対比分析の必要性、さらには、神戸をはじめ関西の他の地域における子供の会の活動、毎日新聞社における児童文化関連活動、JOBKの子供向けラジオ番組など、関連する諸活動との関連性・類似性にも注意すべきであることなどを指摘された。

フロアからも出版物の詳細や現在も存在する宝塚コドモアテネとの関連性についての質問が出され、議論は山本氏の閉会の言葉の後に催されたオンライン懇親会まで続き、話題は、旦那衆が協力して文化活動を盛り上げていく「民の関西」と「官の関東」との違いにまで及んだ。畠山氏によれば、新聞社・放送局による児童向け文化活動関連の資料の多くはまだ活用されず眠っている状態で、中には保存状態がよくわからないものもあるという。今後の資料調査の進展と研究の深化が期待される分野であることが確認され、18時過ぎに散会となった。

これまでのジャーナリズム研究会では、日本および東アジアの各地域において近代的ジャーナリズムの基礎が固まる19世紀から20世紀初めまでのメディア状況に関する報告を中心的に取り上げてきたが、今回のシンポジウムは、その基礎のうえにメディアが大衆化してきた昭和初期において、大阪をはじめとする関西での公教育以外の場で子供向けの文化活動がいかに行われていたかという点に焦点を当てたもので、日本国内における文化活動の地域性・非画一性について改めて考えさせられる内容であった。今回もリモート開催の強みが生き、国内外から登壇者以外50名の参加者が集った。断続的ながらも少しずつ積み重ねてきた本会の活動が、着実に実を結びつつあるようだ。

報告者:前島志保(東京大学)
石川真奈実(東京大学大学院博士課程)
高原智史(EAAリサーチ・アシスタント)

近世ヨーロッパの文化と東アジア研究会

東アジアへの西欧の知の伝播の研究

2021年度第1回公開研究会

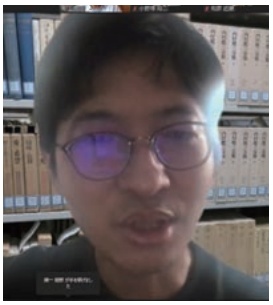
2021年8月23日

2021年8月23日(月)の13:30-16:00にかけて、「近世ヨーロッパの文化と東アジア研究会」の一環として、第1回「東アジアへの西欧の知の伝播の研究会」が開催された。

冒頭、野原慎司(東京大学)より開催趣旨の説明が行われた。

次に、第1報告として、小野塚知二(東京大学)より、「美、風刺、「封建的自由」――ホガースと近世日本の形象表現のずれ」と題して、18世紀イギリスの風刺画家ホガースと、江戸時代日本の浮世絵での風刺のあり方の違いについて報告された。

第2報告として、有江大介(横浜国立大学)より、「西


野原慎司氏（東京大学）

小野塚知二氏（東京大学）

有江大介氏（横浜国立大学）

石原俊時氏（東京大学）

欧社会経済思想の 19 世紀後半東アジアへの波及――明六社知識人と厳復たちの翻訳」と題して、日本と中国における西欧社会科学古典の翻訳にあたっての受容の相違が取り上げられた。とりわけアダム・スミス『国富論』の翻訳が焦点となった。

最後に、石原俊時（東京大学）より閉会の挨拶があった。

参加者は、40 名を超え、活発な質疑応答が行われた。

報告者:野原慎司（経済学研究科）

連続講義「東亜経典与世界漢学」

2021年8月25日

香港教育大学東亜古典学研修会主催の連続講義「東亜経典与世界漢学」に東京大学東アジア藝文書院（EAA）が共催者として参加し、全 5 回の講義のうち最終日の 2021 年 8 月 25 日（水）に柳幹康が登壇し、「五代呉越国永明延寿『宗鏡録』及其日韓流布」という題目で講演した。

講演ではまず、五代十国時代を境として中国社会が大きく変化するという所謂唐宋変革論に触れ、中国仏教もその前後で姿を大きく変えること――唐代以前は国家から一定の距離を保ち、さまざまな立場が並存していたのに対し、宋代以後は国家の枠組みのなかに組み込まれるとともに、禅を中心に諸宗融合の道を辿ること――を紹介した。その後、永明延寿の『宗鏡録』が禅の立場から従来の仏教の思想・実践を統合する書物であったこと、それが後に中国のみならず朝鮮・日本の仏教にも大きな影響を及ぼしたこと、ただしその受容のされ方は地域・時代によって大きく異なっており、そこからそれぞれ異なる道を歩んだ東アジア各地の仏教の様子が見えてくることなどを話した。

講演の後、出席者から多くの質問が寄せられ、活発な議論が為された。質問は、延寿が自身の思想の核心を示すのに用いた「頓」という語が何を意味するのか、延寿が提示する各種実践と人々の相異なる機根（能力）がどう関係するのかという教理的な問題から、古典を文献学的に読解することと修行の場で修養を積むことの関係をどう理解すべきかという実践的な問題まで多岐に及び、当日司会を務めてくださった商海鋒氏（香港教育大学文学及文化学系助理教授）も議論に加わり、長時間におよぶ意見交換がなされた。

東アジア全域に広まった仏教、その各地で異なる受容のされ方をした『宗鏡録』をめぐり、異なる学問的背景を有する複数の研究者が一緒に議論することで、東アジアにおける知のあり方について認識を深めることができたと考える。また今回の共催は好評であり、来年度以降も引き続き同様の形態で行う予定である。

報告者:柳幹康（東洋文化研究所）

第2回 EAA若手研究者研究会

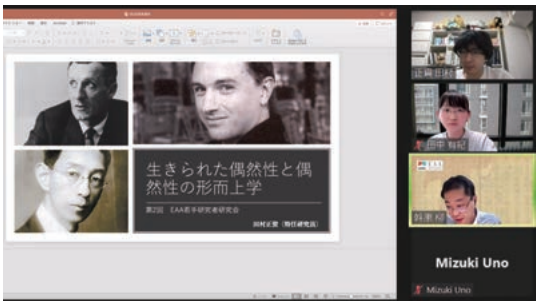
2021年8月26日

2021年8月26日（金）15：00より、オンラインにて第2回「EAA若手研究者研究会」が開催された。本研究会は、EAAに所属する若手研究者が、EAAの活動を通して得たものを自分の研究に還元し、どのようにして「新しい学問」を世の中に問うかについて、専門家だけではなく、広く社会に示すことを目的とする。第2回は前野清太朗氏（EAA特任助教）、田村正資氏（EAA特任研究員）、崎濱紗奈氏（EAA特任研究員）、具裕珍氏（EAA特任助教）が研究の中間発表を行った。司会は田中有紀（東洋文化研究所）が担当し、柳幹康氏（東洋文化研究所准教授）がコメントを担当した。このほか、EAA所属教員や研究員、社会人の参加も複数あった。第1回については報告ブログ「第1回若手研究者研究会」（https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/report-0210604/）を参照していただきたい。

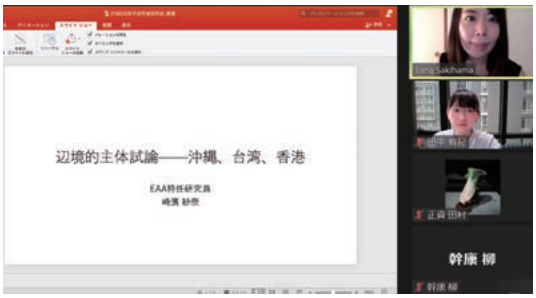
最初の報告者である前野清太朗氏は、フィールドワーカーでもあり、「ある対象を誰かが描写する」ことをめぐる問題を常に意識してきたという。今回の報告「日本統治初期台湾の漢文地方志編纂活動」では、1896年から1900年前後の期間に日本統治下の台湾で編纂された、漢文による地誌（漢文地方志）をとりあげた。統治者が、被統治者の言語で、その土地の地理や風俗を記述させるという行為はどのような意味を持つのか。報告ではこれら「地方志」の序や本文から、執筆者である台湾在地の名望家たちの思想を分析した。「地方志」は、表面的には「沿革」「地勢」などを淡々と記述するだけの書である。しかし典礼や風俗、学校などの項目において、名望家たちは「そこにある」実情のほかに、「あるべき」姿を描いた。漢文を用い、今の統治者の主導のもとに「地方志」を執筆する名望家たちは一見奇妙な立場にあるが、そこには限られたメディアの中で、彼らが自らを「儒」と規定し、あるべき理想像を模索していくという強い態度を見いだすことができる。

田村正資氏の報告「生きられた偶然性と偶然性の形而上学」は、九鬼周造とメルロ＝ポンティ、カンタン・メイヤスーの偶然性に関する議論をとりあげる。私たちはいま、感染という偶然性が大きく影響する事象に日々さらされながら生きている。また、マイケル・サンデルが『実力も運のうち』で能力主義を批判したように、偶然性を社会システムに入れ込もうとする試みもある。九鬼の偶然観は「全体論的偶然観」とも呼ぶべきもので、他の必然性の因果的系列をも取りえた可能性を持ちながら、いま現実として現れ出た因果系列が必ずしも絶対性を持たないと思惟できる点に、偶然性があると考える。それに対してメルロ＝ポンティは、「未分化なものの創発的偶然観」であり、無秩序・秩序を未分化なものとして含んだ予測できない世界に向き合う私たちが、一つの可能な未来へと投企していくときに、歴史的偶然性が、悲劇的に立ち現れてくると考えた。今回田村氏はメイヤスーの「偶然の形而上学批判」の視点も用い、九鬼とメルロ＝ポンティそれぞれの偶然観をさらに明確にした。

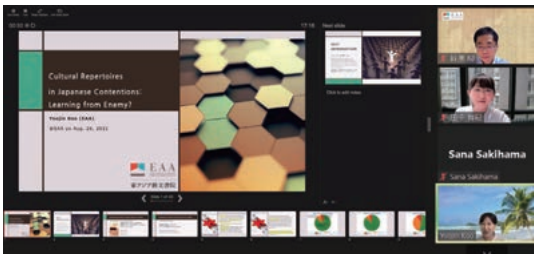
前野氏スライドより



田村氏スライドより



崎濱氏スライドより



具氏スライドより

続いて崎濱紗奈氏が「辺境的主体試論——香港、台湾、沖縄」として報告を行った。崎濱氏は、香港・台湾・沖縄における事例を同時に思考し、「辺境」において「政治」と「主体」がどのように存在するかを考察する。「辺境」とは、資本及びそれに伴う統治権力が複数交錯しあう地点であり、現代のグローバル資本主義においては、もはや予測不可能な展開を遂げ続ける資本の渦の最先端に投げ出され続ける場所となる。同じ事象に対し、「抑圧／被抑圧」「搾取」「不平等」があると思う立場と、思わない立場の間に断裂（「不和」）が生じ、「主体」とは、その「不和」から開始される「政治」を志向する。そのため「主体」は瞬間的に生じる不安定な存在である。この不安定さを払拭し足場を固めるために、「アイデンティティ・ポリティクス」が展開される。1970 ～ 80 年代の沖縄における「反復帰」論は、「沖縄」という「アイデンティティ」の内容として「文化」を動員した。しかしこのような本質主義的な方法は暴力を含む。これらの暴力をどのように乗り越え、どのように「主体」を確立させるのか。報告では、台湾ナショナリズムを多元性に基づいて定義する戦略をとった呉叡人氏の取り組みを紹介した。

具裕珍氏の報告“Cultural Repertoires in Japanese Contentions: Learning from enemy ?”では、主に日本の抗議運動の型をとりあげ、どのような特徴があるのかを明らかにする。抗議活動には様々な型があるはずだが、実際に選択される型はかなり限定されている。集会や、ストライキやボイコットなど破壊的方法、テロなど暴力的方法など様々な型のうち、どれを選ぶかは国によっても大きく異なり、人々が歴史や社会から学習した上で、型を選択していることが窺える。報告では、日本の左翼・右翼がそれぞれ「敵から学ぶ」という方法を取り活動を展開してきたのではないかという仮説を提示した上で、現在までに行ったデータ分析の結果について論じた。1960 ～ 1968 年の社会運動・右翼運動それぞれのアクション・フォームを比較すると、それぞれのレパートリーの在り方や、暴力的アクションを選択する時期に差異が見られる。今後さらにデータを詳細に分析し、これらの傾向をどのように解釈すべきか分析を進めていく。

研究会ではそれぞれの報告のあとに質疑応答の時間が設けられた。「漢文地方志」に携わった知識人たちの意見は植民地統治にどのように影響を与えたのか、九鬼やメルロ＝ポンティは歴史をどのように捉えていたのか、「主体」が自らを拡張する際に生じる他者への「抑圧」はどのように解決されうるのか、そもそも右翼とは何でありその敵とは何を指すのか等である。また、田村氏の論じた偶然性に対し、たとえば崎濱氏の論じる「辺境」における「政治」や「主体」といった問題はどのように関わりうるのか、前野氏の論じた台湾にとって日本統治はいかなる「偶然」だったのか、さらには具氏の社会科学的な研究及びデータ分析の中で「偶然」はどのように論じられるべきかといった問題について、石井剛氏を中心に議論がなされた。また佐藤麻貴氏は、4 人の報告の中に、近代的価値観の揺らぎと崩壊に対し、その間隙を突くような問題意識を見いだせると述べた。

今後も引き続き、EAA の他の活動とも連動しながら、最終発表に向けて準備を行っていく予定である。

報告者:田中有紀（東洋文化研究所）

話す／離す／花す（14）

所有から離れて

石井剛（EAA副院長）

2021年8月26日

しばらくこのコラムから離れていました。文字通り「離れていた」のですが、「話す／離す／花す」というこのコラムのタイトルのなかで「離す」には明らかに異様な雰囲気が漂っています。それは言うまでもなく、COVID-19の世界的流行が始まって以来、人と人との距離を離すことの生命維持観点から見た重要性が強調されて今日に至っているからですね。もっとも、わたしがこうしてこのコラムを書いているときにも所属しているこの国では、かかる意味での「離す」の政治性も隔靴掻痒のもどかしさの中で曖昧に溶解し、「自粛」という強制でも自発でもない、それでいて「中動態」と呼ぶにはあまりにも不適格な行為規範の効力が長持ちするはずもなく、「離す」ことの意味は曖昧なまま、多くの人々は「つながる」ことを求めてでしょうか、街にくり出すようになっています。「離す」ことも「つなぐ」ことも、人と人の関わり方、つまり政治の問題であるにも関わらず、それが茫漠とした気分の中で、ただ生物的な生命の欲求の範囲を出ることなく、行為されていく。人間的な生のあり方への反省もないがしろなままにパンデミック下の生活が消費されていくのに付き合わされるこうした日々には、やりきれなさが募るばかりです。

「離す」をタイトルに入れることには、当初やや戸惑いもありました。それは強制的な隔離こそが感染拡大防止のための最良策であるというメッセージが、武漢のロックダウンを皮切りに主に北半球の裕福な国々の多くで共有されており、それに対する強い疑念がEAAのメンバーの中にもあったからです。しかし、わたしは「病毒」（「ウイルス」を表す中国語名詞です）の保有者を／から隔離するという処置の是非だけではないところから、「離す」ことの意味（政治的な意味、人間的な意味）をもっとちゃんと考えるべきではないか、そうしないと生きとし生けるものがみな「花す」ことにもつながらないのではないかと、そういう予感がありましたので、このタイトルを提案してみたのです。

いま、中島さんに書いていただいた初回のエッセイを再読すると、たいへんうまく「離す」ことのポテンシャルについて表現されています。それは「思考のスペース」を開けるためにこそ「離す」ことが必要なのだという意見です。このコラムの中でわたしも書きましたように（第9回、2021年1月12日）、この数年間、「変化を可能にするスペース」について考えることを、あるきっかけに促されて続けてきました。最近それで関心を持っているのは『荘子』に出てくる渾沌の寓話なのですが、それはともかくとして、結局のところ、そうした「スペース」は、所有に対する欲望を断ち切らないことには実現しないのかもしれません。まるで、文字が書かれたその直後から書いた人の手を離れていくように、わたしたちは、自分に属すると信じ込んでいる何かを手放すことでこそ、「花」を咲かせられるのではないかと思うことがあります。これはひょっとすると、ただ所有に対する欲望を断ち切ることにとどまらず、種としての生命の存続に対する欲望を断つことにすらつながるのかもしれません。なぜそんなに悲観的なことを、と訝る方もいることでしょう。しかし、そうではないのです。

手放すことによって万物が「花す」ことは、求道者の倫理的な信念や目標ではなく、この世界の単なる事実ではないでしょうか。複雑系科学の中では、いわゆる「カオスの縁」において共進化が促されるメカニズムが「自然に」機能していると言われます。「カオスの縁」とは、まさに「変化を可能にするスペース」だということなのです。もしそうだとすれば、自然界においては、倫理的な理想とはまったく無関係に、事実として、「花す」ことが実現しているのだということだと思います。しかし、面倒なのは、人類という種は、複雑系科学が提示してくれるような予定調和の自然とは異なっているということです。それはきっと、コジェー

ヴが言うように、人類だけが欲求ではなく、欲望を持っているからなのでしょう。

たとえば、「コモンズ」という考え方には、所有のあり方を私的所有ではなく共同所有として実現しようという思想があるのだと思います。しかし、「コモンズ」を共に所有するためには、たいへんな努力が必要になるはずです。なぜなら、そのためにはやはり、所有したいという欲望をどこかで断ち切る（部分的にでも）ことが不可欠だと思われるからです。「コモンズ」という「カオスの縁」を保つことは、人間の世界ではこのような至難の業なのではないかと思います。

しかし、「コモンズ」はなおも人間を中心に世界の秩序が構成されるための方策という範囲を出ないかもしれません。どこまでこの概念が有効なのか、この概念が届かないところまでわたしたちは何らかの責任を追うべきではないのか。そういったことを考えるのは、まさに人間が人間であるからだとわたしは信じたいと思っています。ですので、欲望をあるしかたで断ち切ることは、所有とはまったく異なる次元においてわたしたちが希望を見いだすことにほかならないのではないか。そう思って、学術フロンティア講義でも「宇宙的希望」という未熟な言葉を使ってみたりもしました。

所有への欲望を離れることによって、「私」を含むすべてのものが「花す」結果になるのなら、それをこそわたしたちは悦ぶべきではないでしょうか。最近わたしはそのように考えて、わたしがいないところにわたしが播いた種が思いがけず花開くことを夢想しています。

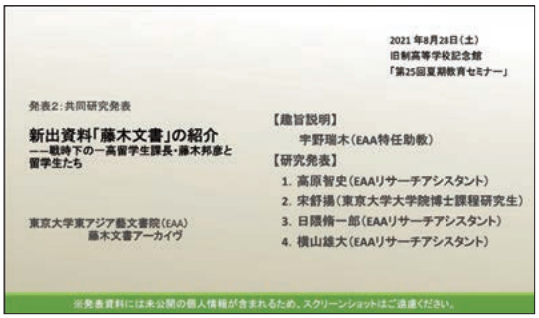
写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

旧制高等学校記念館「第25回夏期教育セミナー」

2021年8月28日

長野県松本市の旧制高等学校記念館では、毎年夏期教育セミナーが開催されてきた。2019年の第24回セミナーにはEAAメンバーも参加したところである（ブログ〔https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/2019-1073/〕参照）。

2020年はコロナ禍のため開催されず、2021年になって、2年ぶりに第25回のセミナーがオンライン開催された。8月28日にZoomにて、中澤篤史氏（早稲田大学）から「学生スポーツの歴史――戦前・戦後・現在」と題した基調講演があった。中澤氏は、戦前から現在に至る、部活を中心とした学生スポーツにつき、正の側面にも、顧問教師の負担や事故といった負の側面にも触れつつ、講演をされた。



他に、YouTubeにて、オンデマンドの研究発表が二つ用意された。一つは、今回のセミナーにEAAから発表をすることを勧めてくださった、冨岡勝氏（近畿大学）の「雑誌『校友』にみる旧制松本中学の生徒自治像――どんなことが「自治でない」とみなされたのか」である。冨岡氏は、生徒の「自治」につき、自治のどの側面が強調されるかという点で、時代による違いが生じる可能性があるだろうとし、今後もそのことが意識されることが、「自治」の取り組みを振り返るヒントになるかもしれないとした。

もう一つが、EAAの「藤木文庫アーカイヴ」プロジェクトメンバーによる共同発表「新出資料「藤木文書」

の紹介――戦時下の一高留学生課長・藤木邦彦と留学生たち」であった。メンバーは、発表者として宇野瑞木氏（EAA特任助教）、横山雄大氏（EAAリサーチ・アシスタント）、日隈脩一郎（EAAリサーチ・アシスタント）、宋舒揚（東京大学大学院総合文化研究科博士課程研究生）及び報告者（高原）、そして動画編集担当の小手川将の6名である。発表の内容に関しては、同8月4日に開催したプレ発表会の記事をご参照いただきたい。

2022年の夏は、コロナウィルスの状況が収まり、再び松本の記念館で夏期教育セミナーが開催され、EAAから更なる研究の成果を発表できることを祈念したい。

報告者:高原智史（EAAリサーチ・アシスタント）

第8回　日中韓オンライン朱子学読書会

「東アジア」と時代的使命感

2021年8月28日

8月28日（土）日本時間16時より、第8回日中韓オンライン朱子学読書会が開催された。これまで同様、EAAのほか、清華大学哲学系、北京大学礼学研究中心との共催である。

今回は田中有紀（EAA、東洋文化研究所）が司会を務め、姜智恩氏（台湾大学国家発展研究所）が、2020年に出版した『被誤読的儒学史――国家存亡関頭的思想、十七世紀朝鮮儒学新論』（台湾聯経出版公司）について報告を行った。姜氏の博士論文をもとにした同書（『朝鮮儒学史の再定位――十七世紀東アジアから考える』東京大学出版会）は2013年に日本で出版されたほか、2021年4月には韓国でも出版されている。

この読書会は、日本・中国・韓国の研究者が集い朱子学に関して議論を続けている。しかしそもそもなぜこの三国なのか。また、そもそも「東アジア」という枠組みで論じる意味はどこにあるのか。今回の姜氏の報告は、「東アジア」という枠組みで思想の歴史をみるとはどのようなことなのかを再考する機会となった。

姜氏の著書は、17世紀朝鮮朝の儒者たちの活動に焦点を当てる。朝鮮時代の儒学者たちは、中国を中心とする「天下」の中で、自分たちがいかなる状態にあるべきかを、常に思考の基準とした。また19世紀以降の植民地時代において、朝鮮儒学史研究者たちは、徳川日本の儒学史と近代日本の学術成果を強く意識しながら、自身の研究課題を設定していった。つまり、韓国儒学史の形成と認識を語るにあたり、

姜智恩氏（台湾大学国家発展研究所）の報告スライドより

「東アジア」という範囲を無視することはできず、日・中・韓全体を視野に入れなければならない。「東アジア」という範囲が歴史研究の単位として有効かどうかについては様々な疑問がある。たとえば葛兆光氏は、韓国と日本が受容したのは漢・唐を代表とする中華文明なのであり、17 世紀半ば以降は、漢唐の中華という歴史的記憶に自己同一視をしなくなった、それ以来、歴史的同一性を持つ「東アジア」という空間は存在しない、という。これに対し姜氏は、歴史的同一性を持つ「東アジア」の存在の有無に関係なく、「東アジア」という枠組みをとることは重要で、この枠組みは中国・日本・朝鮮をむやみに同一化するのではなく、むしろその差異をも明らかにし得る点で、有効な枠組みだと述べる。

明清交替に伴い、「夷」が「華」に取って代わったとされる中国と向き合い、朝鮮や日本の儒者たちは、どのように自己を認識し始めたのか。姜氏が著作で繰り返し述べるように、17 世紀朝鮮の儒者たちにとって、朱子学は批判すべき対象とはなり得なかった。植民地期の儒学研究が示すような、自らの「独創性」を示すために朱子学を批判するという構図は朝鮮朝には存在し得ない。科挙を受けるため徹底的に朱子学を学ぶ朝鮮朝の儒者たちにとって、朱子学の枠組みで物を考えることは当然であり、朱熹の残した様々な記述から自分の解釈こそが朱熹の真意と同じであると主張することで、自らの思想を明確にしていく。これは科挙が行われなかった徳川日本と大きく異なる。そのため、朱子学を批判した江戸の儒学者が「独創的」であり、朝鮮の儒学者が朱子学に追随し「非独創的」であったとはいえない。

このように姜氏は、植民地期の儒学研究による、「十七世紀に朱子学に対する批判意識が芽生え、朝鮮後期に登場する「実学」思想の萌芽となるという通説に異議を唱え」るが、「植民支配下の学界が果たした努力と貢献を等閑視するものではない」という。姜氏はこの「努力と貢献」を十分理解した上で、21 世紀における自身の儒学研究の使命を、「植民地時代に朝鮮儒学史研究に絡みついた時代的使命感を切り離し、その歴史的展開を実証」することだと捉える。

姜氏は報告者が大学院時代をともに過ごした同級生である。在学中、ともに朱子学や経学について語り合ったが、「植民地期の儒学研究が背負った時代的使命」というものは、当時の私にとっては非常に遠い存在であった。時代的使命と距離を置き、テキストをありのままに読み、前近代の儒者がおかれたコンテクストを重視すること――これは当然のことであり、特定の時代的使命感が絡んだ研究については、その中で今でも採用すべき成果があれば採用すればよいし、そうでない部分については黙って見過ごせばよい。私はそのように考えていた。

しかし朱子学的普遍性、あるいは植民地期の雰囲気を共有しない私たちにとって、「東アジア」という枠組みがもたらす時代的使命を、過去のものとして冷静に見ることは本当にできるのだろうか。いま改めて姜氏の著書を読み、報告を聞き、17 世紀の儒者たちのテキストと向き合うことで、私たちもまた、結局のところ、時代的使命感を自分の根底に持ちながら研究しているのではないかと気付かされる。17 世紀やそれ以前、あるいは近代以降も、私たちは依然として「東アジア」の中で生き、その枠組みの中で思考している。植民地期の儒学研究が「実学」「独創性」を重視したという事実が、彼らがまさに「東アジア」という枠で世界を見ていたからこそ、もたらされたように、私たちの研究もまた結局のところ、「東アジア」に連なっているのではないか。姜氏のいう「朝鮮儒学史研究に絡みついた時代的使命感を切り離」そうとする態度が、私たちの時代的使命感であるとするならば、そもそもそれは一体何なのか。少なくとも私は、自分の根底にあるだろう、その時代的使命感を意識の外に追いやってしまうことなく、自分の研究に向き合っていきたい。

報告者:田中有紀(東洋文化研究所)

第24回·第25回 石牟礼道子を読む会

2021年8月31日·9月14日

2021年9月14日（火）16時より、第25回石牟礼道子を読む会がオンラインにて開催された。参加者は高山花子氏（EAA特任助教）、宇野瑞木氏（EAA特任助教）、池島香輝氏（東京大学大学院博士課程）、本報告文を執筆する宮田晃碩（EAAリサーチアシスタント）の4名である。

今回は、石牟礼の新作能「沖宮」の記録映像を観た感想を交わして議論した。8月31日（火）と9月3日（金）に駒場キャンパス内で小規模の上映会を開き、また参加の叶わない方にはDVDを回覧したものである。

この「沖宮」は今年6月にも京都・金剛能楽堂にて上演された（今年の上演についてはホームページ：https://okinomiya.jp/ 参照のこと。また高山氏による観劇の報告は「新作能「沖宮」視察——石牟礼道子原作の能舞台を見て」〔2021年6月12日〕を参照）。今回観たのはそれとは異なり、2018年10月、熊本にて初演されたものである。再演にあたってはいくつか変更が施されているのだが、大きく異なるのは、初演時に「竜神」として登場した役が、再演では「大妣君（おおははぎみ）」として、優しく包み込むような女性の姿に置き換えられたことである。またそれに伴い、大妣君の台詞として、2011年の石牟礼の詩「花を奉る」から抜粋する形で詞章が加えられている。前回の勉強会では犠牲の物語をどう受け止めればよいかという点について議論が交わされたが、その犠牲を迎え入れるものの姿の変更は、劇全体の印象を変える。今回の「読む会」ではその点についても語り及んだ。以下、話題となったことを簡単にまとめておく。

今回観た初演版では、雨乞いのための犠牲として捧げられたみなしごの少女「あや」を、最後に「神高き姫ぞもぞらしや」と言って竜神が連れてゆく。その竜神の姿がいかにも物々しく、あやは異界へ連れ去られたという印象が強い。自然の恐ろしさを示すという点ではもっともなことかもしれないが、しかし救いがないように感じられたというのが、参加者の正直な感想であった。実際、今年の再演を主催された志村昌司氏は「初演では人身御供的な側面が強調されていましたが、今回はあやが妣に迎えられ本来の故郷へ帰るという側面が印象的です」と綴っている（朝日新聞デジタル2021年6月10日）。

どちらが「正しい」というものではないが、原作となった「沖宮」の台本を見るとまた印象が異なる。舞台では、初演再演ともにワキである「天草下島の村長（む

新作能「沖宮」に登場する「竜神」（新作能「沖宮」DVDブック〔求龍堂、2019年〕のジャケットより）

らおさ）」があやを連れて原城の址に上陸し、そこであやが兄分であった天草四郎の霊と出会うという筋立てなのだが、原作では幕開きから既に四郎が現世とも異界ともつかぬところにいて、そこにあやを迎えるという筋立てになっている。そこから回想シーンのように、あやが竜神への捧げものとして選び出される経緯と緋の衣を用意する場面とが思い起こされるという話の運びは舞台も原作も共通なのだが、舞台では再び原城に戻ってあやが送り出される（四郎はそれを送り出しているように見える）一方、原作においては、むしろ村の人々があやを送り出す場面が結末になっており、最後は四郎とあやの舞で締め括られることとされている。つまり原作では、死によって引き裂かれた四郎とあやとがようやく相見え、ひとつになるという点に救いのようなものが見出されている。

これと比べてみたとき、竜神に連れてゆかれるあやを後ろから見送る、初演版の四郎の姿は、やはり戸惑いの残るものであった。再演版では（曖昧な記憶ではあるが）大妣君があやのみならず四郎をも、ともに「沖宮」へ連れて帰るようであった印象がある。おそらく大妣君とは、原作で登場していた「おもかさま」（四郎の乳母でありあやの実母）の役柄をも担うものなのだろう。前回も議論されたように、「妣」とは母たちの系列を言うものである。その重層性を体現するものとして、大妣君は登場させられたのだと思われる。原作では竜神も大妣君も姿を見せはしないのだが、あやと四郎の魂の向かってゆくところを能の舞台のうえで表現するとなったとき、竜神の姿や大妣君の姿でそれを試みたのではないかと思われる。再演にあたっては、原作のさらなる解釈、ないし石牟礼の願いをより深く汲み取ろうという努力があったに違いない。

また犠牲のモチーフをどう描くかということに関しては、石牟礼の場合それを捧げる者の思いの痛切さが描かれているように思われる、という指摘もあった。「沖宮」に限らず、石牟礼は「犠牲」に連なる人々への独特の通路を持っていて、それを作品に滲ませているように思われる。以前観た「不知火」においても、我が身に毒を負い海と大地を浄化する姉弟が描かれ、そこでは姉が弟の犠牲を悼む立場でありながら、同時に自らの身を犠牲にするのであった。もしその姉たる「不知火」に石牟礼自身の姿を重ねて見てよいのだとすれば、そこには水俣病患者や「からゆきさん」、他の名付け難い人々に寄り添い、ともに滅びを生き抜こうとする石牟礼の生き方が示されているようにも思われる。「犠牲」という問題を受け止め考えるにあたって、私たちの各々がやはり死にゆく者であるということが忘れられてはならないのだろう。能という形式にはひょっとすると、そうしたことへの感受性を呼び醒ますところがあるかもしれない。

今回観た初演版について、印象的なことはいくつもあった。特に、この「沖宮」の舞台は染織家の志村ふくみ氏が石牟礼と語り合うなかで誕生したものであり、衣裳は志村氏の監修による。それだけに衣裳の用いられ方は心に残った。物語の核心を担うのは、あやに着せられる緋色の装束である。原作においても「茜色の空」や「彼岸花で飾りつけた小舟」など、赤色のイメージが強調されている。それを能という、極限まで抽象化された舞台で担うのがこの衣である。「水流少なき川辺にて。洗ひあげれば古き煤。埃は落ちて緋き色。花のごとくに現れたり。村のうちより女房ら。ひと針ごとに涙ぐみ。糸を通して縫ひゆけば。夕日に遊ぶ花の色。あやしき衣あらはれたり。あやしき衣あらはれたり」と地謡が歌うなか、四郎が緋の衣を手にもってそれを再現するのも印象的であった。せめてもの晴れ着が胸を打つ。

今回の「読む会」の参加者は能を専門としていないこともあり、実のところ分かりきらないところも多かった、ということを互いに確認することとなった。ただ原作と比べて見てみると、その舞台がどのような願いを原作から汲み取り、再構築されたものであるのかといったことが検討できるようになる。舞台は舞台として味わうべきものだが、それと同時に、それこそ「緋の衣」を洗い上げるようにして、石牟礼の残した思いというものに迫ってゆければと思う。その衣を縫うひと針なりと通せたならば、せめてその供養に与りうるのではないかと思う。

報告者：宮田晃碩（EAAリサーチ・アシスタント）
写真撮影：上杉遥

EAA Book Review-05

Nobuo TSUJI, *Revolutionary Artists in Eighteenth-Century Kyoto: Shohaku, Jakuchu, Okyo and Others*

Reviewer: Yusuke Wakazawa (EAA Fellow)

2021年9月2日

Tsuji Nobuo (1932-) is an eminent art historian of early modern Japan having contributed to the post-war rediscovery of Ito Jakuchu (1716-1800), Soga Shohaku (1730-81) and Nagasawa Rosetsu (1754-99). Before the publication of his Genealogy of the Fantastic Imagination (1970), these artists had been almost forgotten. Tsuji's intellectual exploration has highlighted various strands of Edo visual culture beyond the rise of Ukiyo-e. *Revolutionary Artists in Eighteenth-Century Kyoto: Shohaku, Jakuchu, Okyo and Others* (2019) is a collection of his essays exploring the ways in which cultural upheaval mediates new ideas and forms of artistic expression. The book closely examines Maruyama Okyo (1733-95) and his pupils, Ike no Taiga (1723-76) and Yosa Buson (1716-83) in addition to several fantastic artists, including Jakuchu and Shohaku, whom Tsuji had discussed in a previous monograph. These revolutionary painters were neighbors in eighteenth-century Kyoto, and many of them knew each other personally. Their experiments in visual representation underlay the diversity of early modern Japanese art, and did not converge into any single school. Tsuji aims to discuss the process and context of this cultural flourishing under which revolutionary artists produced eccentric works vividly expressing their individual characters.

The first chapter presents the colorful panorama of eighteenth-century Kyoto and the lively figures of the remarkable artists who lived there. The rise of proto-commercial society nurtured the independent spirit of merchants and craftsmen, who appreciated the fantastic imagination. These citizens enjoyed the eighteenth-century art world as an imaginative space free from the hierarchical order of society under the Tokugawa shogunate (11). They felt that curious subjects in the "floating world" could heal their sorrows and ease the boredom of their daily lives in the "floating world" (11). Eighteenth-century Japanese were fascinated by foreign objects and new technologies. Even though the Tokugawa shogunate prohibited international exchange except the foreign trade in Nagasaki, the public at the time had indirect encounters with European culture through the limited circulation of imported copperplate prints and other foreign goods. Maruyama Okyo, being inspired by Western stereoscopes, applied perspective drawing from Western art to his pictorial experiments known as the production of "megane-e" (28). Tsuji suggests

Nobuo TSUJI, *Revolutionary Artists in Eighteenth-Century Kyoto: Shohaku, Jakuchu, Tokyo and Others*
辻惟雄『十八世紀京都画壇――蕭白、若冲、応挙たちの世界』（講談社、2019年）

that this kind of fragmentary knowledge and limited experience of the West stimulated the imagination of Japanese painters even though their understanding of foreign culture was sometimes inaccurate (12-13). These misinterpretations, however, catalyzed creative experiments in the visual culture of eighteenth-century Kyoto.

In addition to interaction with Europe, early modern Japan also experienced an influx of ideas works from China including Chinese literati painting. This influence is a main theme for the second chapter. Due to the decline of the Ming dynasty in seventeenth-century China, a certain number of Chinese intellectuals chose to move to Japan, rejecting their service to the succeeding Qing dynasty. Buddhist priests, who comprised some of these intellectuals in exile, introduced current Chinese art and related cultural trends to early modern Japan. Their founding of the Manpuku Temple in Kyoto in 1661 was highly influential in spreading new ideas and techniques concerning Chinese painting among local citizens (13-14). Japanese artists in eighteenth-century Kyoto were engaged in this ongoing process of absorbing the cultural impact from China into their own tradition of visual culture.

Following the two introductory chapters, Tsuji turns his focus to individual artists. He emphasizes that artists in eighteenth-century Kyoto closely observed and depicted the natural world. Okyo assiduously sketched animals, plants, natural landscapes and astronomical objects such as the moon (28). His sketchbook, Shasei Zatsuroku (c.1771), informed the idea and practice of realistic representation (28). Ike no Taiga was an avid traveler who produced landscape paintings during his journeys (22). He also enjoyed visiting Mt. Fuji and other mountains associated with holy places. These travel experiences were elaborated through the vivid colors in his visual narrative of Japanese landscapes (24). Yosa Buson observed the natural world through his Haiku poems, and his paintings worked in collaboration with his literary sensitivity and expressions (26). Ito Jakuchu's work shows that close observation and empirical depiction supplemented a fantastic imagination. He regularly visited temples in Kyoto to copy the masterpieces of Chinese bird-and-flower paintings (38). He also kept hens and roosters in his house garden for observation and sketching (38). Based on these empirical practices, his singular imagination exploded, producing an extraordinary body of fantastic work. This unique conjunction between fantasy and reality is key for understanding the art world of eighteenth-century Kyoto as a whole, while also appreciating its remarkable diversity.

For Tsuji, the revolution in early modern Japanese art demonstrates that curious artists synthesized these new ideas and techniques of visual representation into their own forms of art. The eccentric expressions of the individual artists are in fact tied to their careful observations and sketches of the everyday world. Individuals as the source of experience became an important element in eighteenth-century Japanese art. This link between empiricism and individualism highlights the shared features among Jakuchu, Okyo and other eighteenth-century painters in Kyoto, even though they cannot be classified into any single school. The unity and diversity of these artists will continue to be a significant topic for those who explore the cultural landscape of eighteenth-century Kyoto. Whereas Tsuji focuses on each artist as a singular individual, his narrative also refers to the communication between these figures. Even Soga Shohaku, known as an unsociable man, enjoyed lively discussion on visual theory with Taiga (35-36). Jakuchu learnt the idea of empirical expression from a Buddhist priest, Daiten of Shokoku Temple (38). The further interpretation of this social network of artists will develop the narrative of eighteenth-century Kyoto beyond the emphasis on their eccentricity.

第1回 EAA批評研究会

近代日本の批評とメディア

2021年9月2日

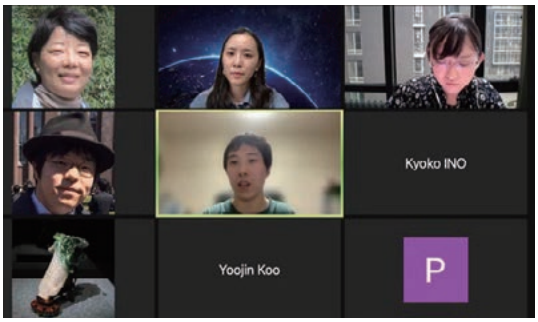
2021年9月2日（木）、第1回EAA批評研究会「近代日本の批評とメディア」が開催された。本研究会は、様々な概念・事象・テクストから「批評」そのものを問い直すとともに、「批評」を広く世界史・文学・哲学の文脈に向けて開き、新たな知のプラットフォームの構築を目指す試みである。第1回目の研究会として、大澤聡著『批評メディア論――戦前期日本の論壇と文壇』（岩波書店、2015年）に関する読書会が行われ、研究会メンバーの他、EAA内外から6名が参加した。

研究会ではまず、郭馳洋氏（EAA特任研究員）による『批評メディア論』の内容紹介があった。同書は、何が「批評」たらしめるのかという問いを起点とし、1920年代後半から30年代の論壇・文壇に焦点を当て、論壇時評・文芸時評・座談会・人物批評・匿名批評などの各種批評形態を中心に、批評の言論を支えてきたシステムの解析を試みた研究である。各章の論点のまとめに続き補足として、郭氏からは同書が取り扱う時代以前の、明治期における「批評」の成立史の紹介があった。“Criticism”（英）の訳語である「批評」は、その歴史を遡ると幕末の辞書『英和対訳袖珍辞書』（1862年）などに既に記述があるという。西周の『百学連環』（1870年）、さらに『哲学字彙』（1881年）などを辿ることにより、アカデミズムにおけるCriticismの訳語として「批評」が定着した背景の解説に加え、1880年代の雑誌における批評欄の設置、それに伴い生じた「作品」と「批評」の応酬関係、さらに書物の量的増加に伴う明治中期の「批評」のブーム（あるいは氾濫）に関する説明がなされた。

続いて自由討論では、前掲書に関するコメントを交えつつ、参加者各々が「批評」に対して抱く問題意識や気づきを共有していった。近代日本思想史を専門とする郭氏は、『批評メディア論』に繰り返し現れるテーマ、「大衆性」に言及した。同書では、消費者としての大衆が主に扱われているが、郭氏は「大衆」が批評家としての側面をもつこと、さらに同書に登場する批評家たちの多くがマルクス主義に影響を受けていることを指摘した。このことから、マルクス主義的な「大衆」像を考慮する必要性に触れつつ、「批評」というものを考える際に「大衆」概念そのものの孕む多面性を検討する重要性を強調した。

郭氏に続き、片岡真伊（EAA特任研究員）が、前掲書を読み進める中で関心を抱いた批評と「読者」／「編集」との関わりについて述べた。前掲書の目的の一つは、川端康成が幽霊に喩えた「文壇」「読者とかいうもの」の正体を見抜くことにあると、大澤氏はいう。その読者の正体、とりわけ「一般読者」というものの具体相（想定読者層が雑誌によりどう異なるのかなど）への興味に加え、批評が生成され読者の手元に届くまでの編集・出版過程において生じ得る変数（＝編集や変更、軌道修正）など、文学翻訳の編集・出版現場を研究する立場から抱いた関心についてコメントした。

発表している郭馳洋氏（EAA特任研究員）



EAA 批評研究会メンバー

中国哲学・思想史を専門とする田中有紀氏（東洋文化研究所）は、自身の分野にみる批評の場合に言及し、批評を考えるうえで極めて重要な問いを投げかけた。中国では、『四庫全書総目提要』にみるような、優れた知識人がその時代の本を網羅的に読み、提要をつけ、それに対し自身の意見を書くという確固たる伝統があるという。では、郭氏の紹介した明治期の批評成立以前には、何かしら書物を批判・批評するような歴史は日本にあったのか。そして近代以降の批評はそこに接続するものなのか、という問いが寄せられた。

近代以前・以降の「批評」の接続性に加え、環境倫理学を専門とする佐藤麻貴氏（EAA 特任准教授）は、「批評の力」そのものを考える必要性を指摘した。佐藤氏は、現代における批評力の減退に加え、その結果、批評・批判が届くべきところに届かずにいる現状に触れた。そして、批評が可能性の条件を探る一つの試みであるという観点から批評全体を捉え直すならば、「批評」という試みを通して、人が何を摑もうとし、いかなる社会を拓こうとしているのかを考えるべきだとの提言があった。

フランス哲学の研究者である田村正資氏（EAA 特任研究員）は、批評家の読者の目線への意識、そして無意識かつ間接的に編集・編集者を介して言論が規定されてゆく批評の側面に強い関心を寄せているという。また、そのダイナミズムを踏まえたうえで、さらに未来に向けて批評と編集の関係性について考えたとき、現在と過去の言論空間をどう比較できるのかという問いが生じたと述べた。雑誌よりも新書で批評がなされる現代において、批評家たちを規定するマテリアリズムがどう描き出されるのかについて考えてみるのも面白いのではないかという提案もあった。

明治時代を専門とし、一高プロジェクトにも関わる高原智史氏（EAA リサーチ・アシスタント）からは、自身の研究と批評との関わりを考えた際に想起した、一高生が編集を手がけた雑誌に登場する批評欄についての紹介があった。批評欄やそこに掲載された批評をめぐり、いかなるメカニズムが生じたのかを、この研究会への参加を機に考えてみたいという。明治35年ごろの貸本屋の本の流通のあり方や、そこに集う書生たち、さらに本が並べられる環境・空間を考える必要性を指摘する高原氏の話を通して、批評を掲載した同時代の雑誌の模倣・伝達・共有がなされた校内という知的空間や時代相が共有された。

今回の研究会を通して浮かび上がったのは「批評」そのものの向こうに何があるのか、という大きな問いである。それは、批評の生成環境・現場において、批評家たちが受ける意識・無意識の制約や編集、田村氏の言葉を借りれば、「批評家たちを規定するマテリアリズム」を指す。と同時に、佐藤氏が提言したように「批評」の届く先に萌芽し得る可能性や、「批評そのものの力」を問うことをも意味するだろう。また、何かに対して私はこう思うと示し、自身の考えのもとに整理・要約するという行為は、時代・分野を問わず人間誰しもが行う営為である。だからこそ、横断的に「批評」について考えてみると「批評」が何なのかということが見えてくるのではないかという田中氏の発言は、この批評研究会での試みに重要な意義を与えてくれた。「批評」という行為は、いかなる研究分野においても不可欠な要素であり、学問の枠組みを超えた横断的な研究の可能性を拓く豊かな土壌にもなり得る。今回の研究会を通してそのことを再確認するとともに、参加者それぞれのパースペクティヴから、「批評」にまつわる様々な問題意識やテーマ、関心の所在が共有されたことは大きな収穫だった。これらを手がかりとしてどのような「批評」の実像や可能性がみえてくるのか。今後の研究会の展開に期待を膨らませつつ、各々が専門とする各分野の観点を共有し、思索を深め、研究の活性化へとつなげることのできるような有機的な知の交流の場をどう形作るのか、共に考えていきたい。

報告者:片岡真伊（EAA特任研究員）

Summer Institute 2021 Day 0

2021年9月5日

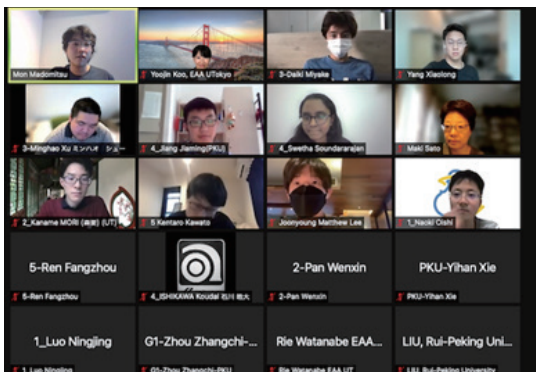
While the world continues to struggle with the coronavirus pandemic and seeking a way out of the crisis, the East Asian Academy was once again able to hold the Summer Institute 2021 by connecting Peking University and University of Tokyo students. The pre-sessions on "Day 0" started with an icebreaker. This year, Mon Madomitsu joined as a special student organizer and chaired the icebreaker, which provided a much more comfortable atmosphere for student participants and encouraged them to engage more in the interactions and discussion.

For the first half of the icebreaker, Madomitsu suggested a breakout room session in the preassigned groups and asked participants to introduce the fellow members of their group instead of themselves. This approach worked well and many of participants then felt relaxed enough to turn their camera on.

For the second half of the day, Madomitsu took the conversations a bit deeper by raising the following topic: What do you think is important for peace and stability in Sino-Japanese relations and, more broadly, East Asia?

Each group delved without hesitation into the topic and then shared what they had discussed when everyone came back together at the end.

Group One opened the floor by sharing their discussion on the deterioration of Sino-Japanese relations in recent years, especially due to the pandemic, the media, and the information technology we rely on for communication, and noted the modest progress made through such endeavors as the Summer Institute 2021.



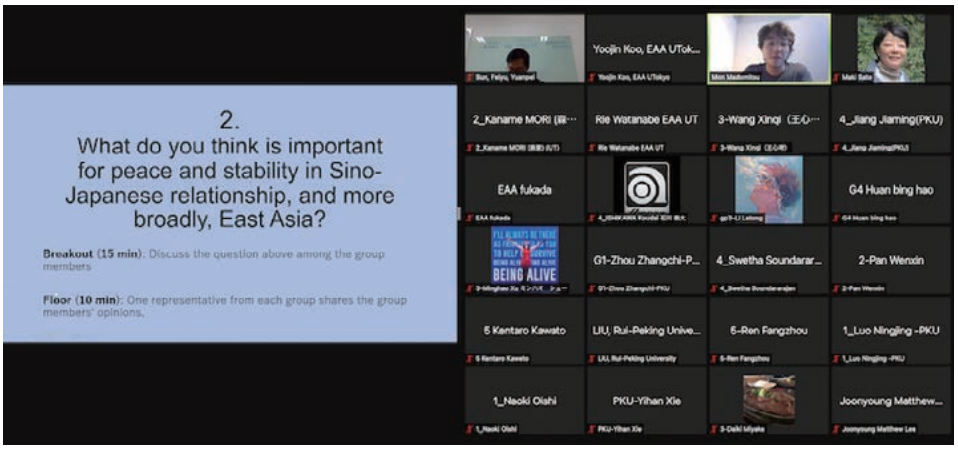
Group Two suggested that we should observe of Sino-Japanese relations at different levels: official and unofficial. Though hostile conversations occur repeatedly at the official level, we can protect unofficial interactions and strengthen ties there to boost the bottom-up forces that can make a positive change at the official level.

Group Three also took this approach of looking at the private and public phases of Sino-Japanese relations. We can enjoy cultural exchange of animation, films, and music at the private level, and deepen our conversation based on the things we have in common, such as Buddhism. Not everything needs to be political.

Group Four stressed mutual understanding without prejudice. In order to achieve this, the right atmosphere in society is crucial, and education can be a solution to untangle the problem.

Group Five brought up the importance of East Asian triangular—namely Chinese-Japanese-South Korean—cooperation. Given the dynamics of US hegemony in the region, we need to seek more ties in terms of culture and education as well as institutions and economics.

These discussions not only broke the ice but also warmed us up for the following two days of conversations. As with many events expected to be held in-person this autumn that had to change to online/virtual formats due to the recent surge in new Covid cases, we were worried about the impact on the



For the second half of the day, students shared their ideas and thoughts more casually and deeply with the given topic.

quality of the event. Nonetheless, the interaction and sense of connection among students were not hindered by the communication tools. The success of the pre-sessions raised our expectations for the two days of the Summer Institute 2021 that lay ahead.

Report by Yoojin Koo
(EAA Project Assistant Professor)

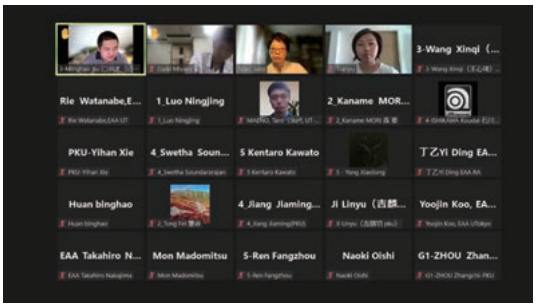
Summer Institute 2021 Day 1: Prof. Maki Sato and Ms. Meng Tianyu Lectures

2021年9月6日

On September 6, 2021, the two-day program of the EAA UTokyo-PKU Summer Institute 2021 started off with lectures by Professor Maki Sato (EAA) and Meng Tianyu (United Nations Development Programme). Having assigned the participants a reading of Immanuel Kant's *Perpetual Peace* and "Answering the Question: What is Enlightenment?," Sato praised Kant for encouraging us to use our own intellect in order to tackle the problems that all human beings face today. What are those problems? Sato briefly characterized the present era as the end of *Pax Americana* and the surge of a new type of colonialism, which indicate a change in the roles of sovereign states and a deadlock of global capitalism. Also crucial are global environmental problems and the state of volatility, uncertainty, complexity, and ambiguity that have become apparent in the current pandemic, and in the natural disasters caused by climate change.

These crises cannot be dismissed as only temporary, she argued, because they have their roots ultimately in the fundamental values of modernity. What we need to do, then, is to radically rethink our values. Here, Sato introduced a theoretical distinction, originally made by Prof. Takahiro Nakajima, between "value" and "value-ing." With the suffix -ing that emphasizes the progressive aspect of "value" as a verb, value-ing means to reconceive fixed values and

Lectured by Meng Tianyu



Active discussion among students

embed in them new possibilities of change. She added that value-ing is also "visiblizing（the）invisible." The parentheses mean that what is invisible or has been invisiblized is not predetermined as such. Rather, she stressed, it is for us to discover and problematize it.

Sato's lecture was followed by another lecture by Meng Tianyu on the current situation of carbon pricing. Meng, a program analyst at UNDP, gave an overview of the idea of carbon pricing in terms of the history of climate negotiations and as part of the ongoing international efforts toward carbon neutrality. Carbon pricing functions as a policy instrument that captures the external costs of greenhouse gas emissions. Today, sixty-four carbon pricing instruments（such as a carbon tax and emissions trading system）are in operation, covering 21.5 percent of global greenhouse gas emissions. Carbon pricing is a policy tool innovation that more and more developing countries today are keen to try. Meng pointed out, however, that we need to take time to ensure its effective function. The struggle to achieve low-carbon development by means of carbon pricing has only just begun, and it forms just one of many ongoing climate policies.

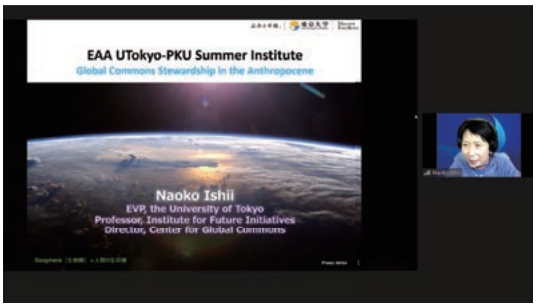
In the Q&A session, the discussion mainly focused on the limitations of carbon pricing, such as the potential volatility of carbon prices due to market mechanisms. It was emphasized that the carbon pricing system should be regarded as a learning-by-doing process, and that one of its important functions is to incentivize and signal industry to envision strategies for building a low-carbon society.

Report by Yuki Ueda（EAA Research Assistant）

Summer Institute 2021 Day 1：Prof. Naoko Ishii Lecture

2021年9月6日

On September 6, 2021, Professor Naoko Ishii（Executive Vice President, Director of Institute for Future Initiatives, University of Tokyo）, delivered the second lecture at the EAA UTokyo-PKU Summer Institute 2021, "Value and Value-ing: Visiblizing（the）Invisible," exploring the theme of global commons stewardship in the Anthropocene. The reading material for the lecture was *Governing the Commons*



Lectured by Naoko Ishii

Discussion deepened as the theme was challenging to all of us.

(Cambridge University Press, 1990) by Elinor Ostrom.

With the aim of giving a broad overview of the global commons and the issues thereof, and providing her own thinking on them, Ishii divided her lecture into three sections. In the first, "Global Environmental Crisis," she clarified that we are approaching the tipping point where the stability and resilience of the Earth's systems are collapsing irreversibly. In this respect, two facts were emphasized: the transition from the Holocene to Anthropocene eras; and how, due to decisive humanity activities, we are exceeding the capacity of our planet.

In response to the above-mentioned tipping point, the second section, "Socioeconomic System Change," examined the measures the world at large is taking. Here, the year 2050 is crucial, indicating the time limit by when we are able to set the Earth's systems back on track, according to the Paris Agreement. Concretely speaking, it is important to consider the seventeen Sustainable Development Goals as a whole, instead of discretely. Additionally, a model of system change has already formed that covers the fields of both natural and social science. Ishii also shared a number of previous examples of interdisciplinary research in this regard.

In the third section, "Global Commons Stewardship," Ishii also introduced her work at the University of Tokyo as a leading researcher in the field. In order to ponder the governing mechanism for the global commons, Ishii referred to Elinor Ostrom's *Governing the Commons*, in which several principles are identified in terms of the management of common-pool resources at the local level. However, how should we apply those principles to the global commons? To answer it, Ishii highlighted several points: first and foremost, the scientific understanding of the fact that the stability and resilience of the Earth's systems are the foundation of all human activities, which we are in danger of losing. Moreover, we are the ones who need to change—not the Earth's systems. More specifically, it is our choice whether we chase short-term interests under the current socioeconomic system or rather safeguard our humanity collectively, which will ultimately transform our shared future as a species.

Following the lecture, the Q&A session was flooded with questions from the moderator, Professor Maki Sato, and students, touching upon various topics, such as the sociocultural issues to be tackled in global commons stewardship, the feasibility of (re-) aligning ourselves from the local level to the global level, and nuclear power.

Report by DING Yi (EAA Research Assistant)

Summer Institute 2021 Day 2：Student Presentations

2021年9月7日

The second day of the Summer Institute 2021 featured presentations by each group of students, showing how they had delved into the issues raised during the lectures on the previous day. Though there was not enough time for them to prepare polished presentations, these nonetheless formed a fitting finale to the two-day event and offered a way for students to think proactively about the issues, work together to produce a single coordinated outcome, and, above all, build friendships. EAA faculty members also attended with high expectations for the students' efforts.

Group One tackled the main theme of the Summer Institute, "Value and Value-ing: Visiblizing (the) Invisible." They asked: What kind of values do we want to keep, what values do we need to change, how does science help to visiblize veiled harms and values, and what values are invisiblized in the Covid-19 era? Group One's focus on the positioning and the role of "our generation" in considering these questions was intriguing in that they are real stakeholders facing environmental challenges and international conflicts, and the emergence of a "Covid generation" might directly affect how value systems changes, as Kant stressed, "One generation cannot form an alliance. [. . .] It would be impossible for the latter (generation) to expand its knowledge . . . to rid this knowledge of errors, and, more generally, to proceed along the path of enlightenment."

The baton then passed to Group Two, which gave a presentation on "the internet as a common resource" from a comparative perspective (China and Japan, theory and practice) . Taking online spaces as an example of Habermas's "public sphere" and the development of new media into account, the group elucidated the two-fold effects on the current pandemic. The government uses the crisis to push through policies and regulate people's behavior, though individuals can obtain the information to protect themselves. By discussing privacy issues (e.g., the COCOA app) and fake news about vaccinations through examples in China and Japan, Group Two provided a step forward in understanding the place (i.e., the internet) where private and public discourse overlap to form values, and its potential and constraints.

Next, Group Three brought up the topic of "universal value" at two levels—universal and individual—and discussed the possibility of environmental protection as a universal value. As sociological stud-

Group 1

Group 2

Group 3

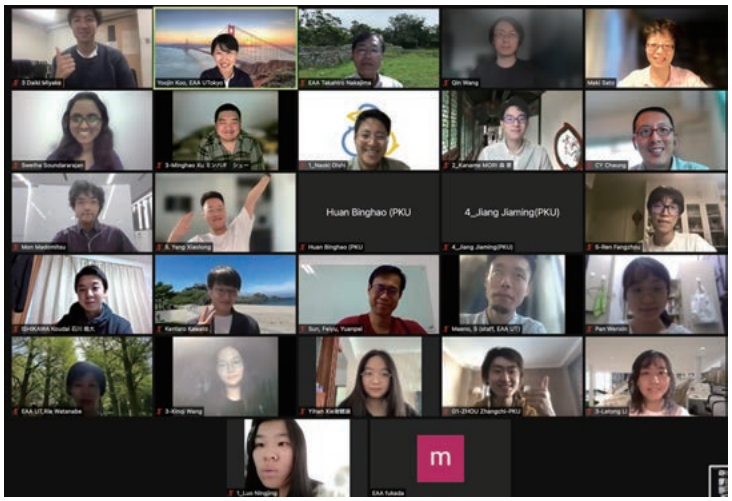
Group 4

ies and the SDGs have stressed, environmental protection is essential. But can it be a universal value? Group Three considered this in light of subjectivity versus objectivity, and argued that subjective individual values can collectively reach an "assumed" universality. Japanese people and culture（such as Studio Ghibli films）influenced by the Japanese religion Shinto cherishing nature, and personal experiences related to the nature（e.g., visiting places, reading books, encountering a pink dolphin）were just some of the examples illustrating why each individual feels an attachment to nature.

After the break, the presentations continued: Group Four took the discussion into a more varied context by turning to the issue of gender inequality. The group first addressed the current discussion about gender inequality, and then showed how values can be included and excluded to achieve it. For promoting inclusion, education is surely vital, not only in schools but also in terms of more general lifelong learning, while prejudice and violence relate to the problem of exclusion. Interestingly, the group argued that the importance of "invisiblization" signified that gender equality as a value might become invisible only when we truly achieve it.

Group 5

Last but not least, Group Five gave its presentation, which tackled questions of values through recent regional and global issues: the values manifest in Japanese public opinion on the Tokyo Olympics, value and value-ing in terms of nuclear issues, and factors affecting how each nation dealt with the pandemic. The values encompassed in these issues are fiercely competing. The group traced the processes by which values emerge, how they compete, what values remain as consequences, and what factors affect this. First, regarding the issue of holding the Tokyo Olympics, the dominant opinion was against holding them this summer, but this gradually diminished and was replaced by the underlying values stemming from a sense of unity as Japanese, eventually evoking nationalism. Likewise, in the case of nuclear issues, the logic of capitalism sharply competed with environmentalism, creating a set of binary values. The Fukushima accident gives us, in this sense, a clear image of the conflict. Lastly, with regard to the pandemic, each nation's own institutional arrangements and cultural orientation has shaped its response, implying that there is no one-size-fits-all set of measures. Competition between values, its consequences, and its determinants are worthy of subsequent inves-



Students pulled it off notwithstanding the short period of time available for presentation.

tigation.

The five presentations were over, but the discussions continued. These were much enriched by the EAA faculty's questions, such as what each group would like to do to tackle certain issues and how we can elaborate further on the definitions of value and value-ing. Notwithstanding problems with the Zoom links and the short period of time available for preparation, students from PKU and UTokyo pulled it off. As Professor Takahiro Nakajima（EAA Director）and Professor Feiyu Sun（PKU）indicated in their closing remarks, we were very impressed by the students' discussions and hope that the connections cultivated over the two-day event will grow into sustained friendships in the future.

Report by Yoojin Koo
(EAA Project Assistant Professor)

ウェブサイトのこと

石井剛（EAA副院長）
2021年9月9日

このウェブサイトを更新しておよそ一年になります。EAA の発足時からそのアイデンティティ・イメージの構築を手がけてくださってきた株式会社 SETENV に全面的な改修をお願いしたのが去年の今ごろでした。COVID-19 のパンデミックというこれまで経験したことのない事態にわたしたちの生活は思いがけず放り込まれ、春学期の 2 ヶ月以上になる事実上のキャンパス・ロックダウンを経て、いったいわたしたちが何をすべきか、何ができるかを、これまでとは異なる方向で模索していました。 オンラインの活用はその中で当然クローズアップされてきますし、そのころには各地の美術館や博物館がヴァーチュアル展示に取り組み始め、大学でもヴァーチュアル・キャンパスの構築のようなアイディアがしきりに提起され始めていました。 同時に、デジタル・アーカイヴなどのようにサイバー空間を利用して構築されるデータがネットワーク化されて多方向の往来の中でさまざまな巡り会いの機会を増大するような取り組みも、この際一気に進められるべきだという議論もあったのだと思います。

EAA は研究・教育・社会連携のプラットフォームとして、あくまでも「人」 の交流が活動の中心であるべき組織ですが、テレワークによってその機会が著し

く阻害されるようになりました。しかし、ただ坐して夜が明けるのを待つだけでは、黎明を迎える前に枯れてしまうかもしれませんし、そうでなくてもひとたび朝が来た後に活発に動くだけの基礎体力をしっかりと養っておく必要があります。そのためには、わたしたちの活動を多様なかたちでコンテンツ化し、個々のコンテンツが自律分散的に協調し合うさまをウェブ上に明示しておくことが大切であるとわたしは考えました。また、「一高中国人留学生と101号館の歴史展」の展示が誰も訪問できぬまま取り残されていることを何とかすべく、ヴァーチュアル展示を試みるとか、さらには101号館自体をヴァーチュアル化して、デジタル建築アーカイヴにしてはどうか、そのためにドローンを使って建物の内側と外側をくまなく撮影してはどうか、などと空想を広げたものでした。これはのちに、構想がぐっと洗練されて、現在の映像作品ワークショップに結実していくのですが。

SETENV代表の入江拓也さんによれば、昨今のウェブページは、コンテンツの多様化に従って、まるでリゾームのようにページが増殖し、多方向のネットワークを形成していくスタイルであるとのことでした。これはわたしにとっては、あるべき組織論の姿そのものでした。わたしは組織（institution）もまた有機体的な存在として固有名をもつべきであると考えています。組織のために人が配置されるのでなく、そこに集う人が組織そのものを育てていくというような発想です。ですから、人が絶えれば組織の有機体としての生命も終わりを迎えます。官僚機構などがそうでは困るという声が圧倒的に多いと思いますが、国家ですらもそのような有限の生命を有していることは、中国研究をやっている人間にとっては当たり前の事実にすぎません。この発想の転換がなければイノベーションは生まれないでしょう。

固有名をもつ存在である限り、それに一義的な定義を与えることは不可能ですし、その企図は無意味です。しかも固有名をもつわたしたち現存在は、実は自分が何であるかを知り得ません。それは生物学や脳科学によっても証されているとおりです。つまり、固有名をもった「わたし」は、わたしの身体について制御することはできませんし、わたしの知らない「わたし」も常に存在しているのです。これは、組織についても同様であるとわたしは思います。

新しいウェブサイトを構築する際の議論では、EAAで行われている全体像の俯瞰が可能であるようなサイトを望む声が複数ありました。しかし、EAAが固有名をもつものである限り、その全体像を俯瞰することは不可能であるし、全体像を俯瞰できるような存在であると自己規定した途端に、EAAは組織としての生命を失うことでしょう。それでは、ここに集う人たちがそれぞれのクリエイティヴィティにおいて「新しい学問」を作っていくダイナミズムは望むべくもありません。

したがって、このウェブサイトには、つねに新しい取り組みの萌芽があちこちに散りばめられています。特に「話す／離す／花す」というブログ中の連載コラムは、既存のコンテンツに含まれる任意の文字列から新しいエクリチュールが飛び出してくることをルール化しており（第3回「使用の手引き」）、EAAのスタッフが誰でも思いついたアイデアを膨らませていくことを奨励しています。

いまでこそまだまだコンテンツは乏しいですが、サイト上のすべての情報は新しい萌芽になりうる可能性を秘めており、それらがそれぞれの成長を始めれば、ウェブサイトはそれこそ俯瞰的に全体像を捉えることの困難な複雑系の世界へと進化していくことでしょう。また、外部サイトとの連携も行われていますから、東京大学東アジア藝文書院という固有名をもったこの組織によって播かれた種子は、ウェブ化した複雑系の中で、自らのあずかり知らぬところに萌芽し、意外にも「花」していくことになるでしょう。「わたしがいないところにわたしが播いた種が思いがけず花開くこと」の夢想を常に孕みながら、このサイトはこれからも育っていくはずです。それはもちろん、人間（人と人の「間」の存在!）の関係にもそのままはね返ってくることになります。有機体としてのウェブサイトを構築するのは、結局のところ、人間の関係を豊かにするためにほかなりません。このウェブサイトに関わるすべての方々との信頼関係を温めながら、サイトをよりよいものに育てていくことができればと改めて思うこのごろです。

国立中山大学中文系連続シンポジウム

文化横断的漢学の共生プラットフォーム（跨文化漢學的共生平台）

2021年9月9日

楽しみは思いがけず到来するものです（いや、より正しくは、喜怒哀楽の情はそれ自体、思いがけぬことへの反応なのでしょう）。ある日、頼錫三さんという見知らぬ方から、メールで章炳麟の斉物哲学について話してほしいという依頼を受けました。お名前を聞いたことはあり、老荘思想の研究者であることぐらいは知っていましたが、それ以上の知識はなく、面識もない方です。長いメールには、「文化横断的漢学の共生プラットフォーム：『老子』と『荘子』斉物論の共生哲学としてのポテンシャルを探る（跨文化漢學的共生平台：發微《老子》和《莊子·齊物論》共生哲學之潛力）」という連続シンポジウムの企画が説明されており、『老子』と『荘子』斉物論をテクストとしながら、共生（co-existence）の哲学について議論したいという趣旨が示されていました。高雄（中山大学は台湾の高雄市にあります）をハブとして、アメリカ、カナダ、中国、日本の研究者が入れ替わり立ち替わりオンラインで参加し、毎回2時間半に及ぶ濃密な議論を7月から8月にかけて、週に2度ずつ合計10回開催するという力の入った計画です（このあとも頼さんは別のテーマで同様の連続シンポジウムを企画開催していますから、そのエネルギーにはただ舌を巻くほかありません）。

聞くと、頼さんは昨年10月にオンライン参加した成功大学の会議に出席しており、そこでわたしの報告を聞いてくださったとのことでした。あの会ではフロアからいくつもの洗練された質問やコメントを頂戴したので、たぶんその中のお一人だったのでしょう。その後、わたしが上海の出版社から出していただいた『斉物的哲学』を取り寄せて読んでくださり今回の依頼に至ったとのことでした。「共生哲学」を掲げているだけに、UTCPについてもいろいろとご存じで、東京大学の共生哲学についても話してほしいというリクエストでした。これはわたしの身に余るご要望でしたので、UTCPをずっと引っぱってこられた中島隆博さんにお出ましいただくことになり、わたしと中島さんがそれぞれ1回ずつ発題者もしくはインタヴュイーとして参加することが決まりました（第8回、第9回）。そもそも「共生」という概念を考えるようになったきっかけの一つが中島さんの『共生のプラクシス――国家と宗教』（東京大学出版会、2011年）であったというのですから、これも驚きではあります。

議論の内容については、現在、文字起こし原稿の整理に取り組んでいます。やがて中国から何らかのかたちで刊行されることになりますので、ここでは紹介しません。ここでご紹介したいのは、議論のかたちのほうです。

一つのテーマを設定して、それに関するテクストや題目を選定し、著者もしくはそれに近い人が解題（中国語で「導読」と言います）を行い、それに基づいて頼さんやその同僚のマーク・マッコナギー（Mark McConaghy）さんが批評を提起し、さらにフロア全体で議論するという一連のプロセスが毎回繰り返されます。毎回異なる題目に対して詳細なクリティークで応える頼さんの力がまずは驚くべきものですが、多くの国と都市を結んでテーマが共有され、それを高雄でしっかりとまとめあげていること、台湾と大陸の間での協力体制が築かれていること（上述の刊行計画）、セッションの開催から半月前後で録音の文字起こし原稿が発言者に送付されるという作業の迅速さなど、組織の柔軟さと機動性が際立っていることが、わたしにはともかく最大の驚きでした。これは『老子』の思想を骨肉化している哲学者が中心になっているからこそ可能であるのか、それともよほど強力な制度的バックアップ体制が大学に整っているのか、背景はわかりませんが、リーダーとなる個人の資質に加えて、やはりより集団的なエトスのようなものが有利に働いているのにちが

いありません。

「共生」という概念が台湾から問い直されていることもまた興味深い現象です。「共生」は「co-existence」でいいのかどうか、「symbiosis」ではないのか、という議論もありますが、そのどちらでもないものだからこそ、翻訳がつねに居心地悪く見えるのでしょうし、そもそもこの言葉にはどこかしら根本的に居心地の悪さを感じさせる側面が潜んでいます。中島さんがたいへん興味深い論考を発表なさっていますので、興味のある方は読んでみてください（「わたしたちの共生――パーソナルなものをめぐって」、『世界思想』48号）。中島さんのセッションでも、この論考に示されている「共生」と「共死」をめぐる議論に言及がありました。『荘子』とそれを解釈した章炳麟の「斉物的平等」もある意味、共生の思想であるとは言えますが、倫理と政治の問題としてはやはり「共生」なる概念のこの不気味さを不問にしたままだと、そのテクストも読みきれないように感じます。このあたりはわたしにとっての継続課題です。

来年には、高雄でこの続きを開催したいとのことですが、COVID-19がそれまでに収束していることを祈るばかりです。

報告者:石井剛（EAA副院長）

第4回「部屋と空間プロジェクト」研究会& 第7回 EAAブックトーク

大石和欣『家のイングランド――変貌する社会と建築物の詩学』合評会

2021年9月10日

仕事を終え日が暮れ、家路を急ぐ感覚をしばらく味わっていない。在宅勤務が続き、家にずっといながら、実は家にいないのではないかと感じるようになった。それはおそらく、私の中で自然と理想化された「家」と私の現実とが一致せず、何らかの不安を感じているからであろう。

私の父も母も「仕事」を好まなかった。家で好きな絵を描き、庭の手入れをし、動物を飼う。好きでもない「仕事」をするためにしぶしぶ家を出て、休日は自分たちの趣味で家を飾り、庭に手を入れ、ごちゃごちゃとした「混濁」を作り出していた。人生には不満を抱いていたようだが、自分たちの日常生活に没頭しているのは間違いなかった。母は家のことを、父は庭のことばかり考えていた。

大人になって私はふと、自分の育った家を思い出すことがある。今住んでいる家には「混濁」がまだない。やみくもに蒐集した本で散らかってはいるが、「こうしたい」という意思のもと生成された「混濁」が、少なくともまだないのだ。私の実家は、父が庭に無造作に建てた小屋や拡張された池、それに負けじと母が並べた植木鉢のせいで、ずいぶんごちゃごちゃとしていたが、その「混濁」こそが、わたしの「家」だった。

自分にとって、もっとも身近な存在である家が、私たちの習慣や伝統を形作り、感性や思考を構築する。私の「家」が、私の思考にどのように影響しているのか、私自身はわからない。なぜわからないかといえば、私が見えている世界そのものが、家をはじめとする日常生活から形作られた私自身の思考から成り立っているからであろう。私は日常生活に無頓着であるようで、日常生活は私の在り方を大いに規定している。

2021年9月10日（金）13：00よりオンラインで行われた、第4回「部屋と空間プロジェクト」研究会（第7回EAAブックトーク）は、大石和欣『家のイングランド――変貌する社会と建築物の詩学』（名古屋大学出版会、2019年）をとりあげた。司会は田中有紀（東洋文化研究所）が担当し、主な書評は滕束君（EAAリサーチアシスタント）が担当した。

『家のイングランド』は19世紀後半から20世紀前

滕束君氏
（EAA リサーチ・アシスタント）

半のイギリス文学に描かれた家の表象をとりあげ、同時代の歴史的・社会的文脈の中で、どのように「イングリッシュな」家をめぐる言説とイメージが生み出されていったのか、その位相をたどる。そして、そこに習慣的に呼吸し、住み、感じる日常生活的生息空間としての家が、文化を生み出す心的構造としての「ハビトゥス」としても出現する姿を確認する。

滕氏の報告では各章の内容を紹介した後、自身の感想を絡めながら、本書の持つ意義について説明を行った。まず、本書が「イングリッシュな家」の神話を問い直したことを評価する。『家のイングランド』はカヴァー図版の平和な雰囲気から一転して、理想的な家へのアンチテーゼであるスラムから始まる。中流階級的な美徳と言語によって批判的に描き出されたスラムだが、ディケンズもまた『オリヴァー・トゥイスト』でスラムと中流階級の家の対比を表象する。その一方で彼は『クリスマス・キャロル』で、家庭愛に裏打ちされた空間こそが「家庭（ホーム）」であり、たとえ立派な邸宅であってもディストピアへと反転する可能性を描く。このように、本書はディケンズの小説に描かれるいくつかの家の表象を対比することで、その背後にあるディケンズの家への認識を浮き彫りにした。厳密な歴史考証と詳細なテクスト分析により、私たちは本書を通して、文学における家の表象がいかに豊富であるか、また表象文化学において文学をどのように用いるかについても、多くのことを学ぶことができる。19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての英文学における家の表象を通して、この時代のイングランドの社会と文化を描き出したのも本書の特色であろう。たとえば、『ジキル博士とハイド氏』（1886 年）や『ドラキュラ』（1897 年）で描かれる、スラムと上品な邸宅の表裏一体は、中流階級の恐怖の目線を通し、「退化」の過程にある帝国の二面性を反映しているという。また、スラムや、ネオ・ゴシック建築、カントリー・ハウス、郊外住宅の表象を歴史的・社会的文脈の中で読み解いた、イングランドの建築文化の研究書でもある。筆者が、文学研究として「ハビトゥスとしての家」を読み解くことを「日常的な生活空間として、そのなかで暮らし、呼吸しながら、時間の流れを感じ、歴史を経験する「場（トポス）」として、言語のなかから抽出することである」（p .13）と表現するようにテクストが描きだす多様な表象（家のほかにも、音楽や動物など）を歴史的・社会的文脈の中で読み解くような、文学研究の新しい可能性が見出せるのではないかと滕氏は述べた。

そして以下の質問を投げかけた。本書のタイトルが、「イングランドの家」ではなく「家のイングランド」であるのは何故か。また、田中純氏の書評（「東京大学 教養学部報」第 614 号、2019 年）で「ハビトゥスは、本書中の「「時代」のざわめき」、「歴史と人間の匂い」、「人びとの生活の息づかい」といった表現のうちに、如実に感じ取れるように思う。それは優れて身体感覚的なものなのである」というが、身体感覚のうち、聴覚に関する文化はどのように捉えられるか。『庭のイングランド――風景の記号学と英国近代史』（名古屋大学出版会、1983 年）を執筆した川崎寿彦氏は、イギリスのカントリー・ハウスは、ルイ・アルチュセールの「全的イデオロギー」の好例だと述べるが、本書は、イデオロギーよりもハビトゥスへ、政治に対する批判よりも日常性へと目を向けているということなのか。また、本書が様々に示す理想的な建築像は、古い建築をどう保存するかという問題に役立つのではないか。

大石氏は以下のように回答した。本書に大きな影

大石和欣氏（総合文化研究科）

響を与えたのは、IHS（大学院プログラム「多文化共生・統合人間学」）のプロジェクト「生命のかたち」であった。ここで生まれた、「身体として家がどう感じられているか、それが記憶の中でどう残存し、私たちの見方を規定しているか」という「問い」が本書の根源にある。身体でつかんだ知覚が心の中にどう現われてくるかについては、たとえばハイデガーが「空間に存在が意味を付与することによって、逆に空間が存在に意味を付与し、相互互換的な関係により、空間が単なるハコモノではなく実存的なものへ変わっていく」と考えたように、現象学を参照して考えることができるだろうし、聴覚も同じように考えられるのではないか。身体感覚に関しては「アフォーダンス」という概念も重要である。鳥・虫が木にとまるなど、動物は自分の身体に即して色々な物を使う。物は形・色・手触りによって扱われ方が変わってくる。家・住居・部屋にも「アフォーダンス」がある。自分が使いたい部屋に変え、使いたいものを置き、居間やピアノルームなど用途を考える際、空間の形や素材が重要な意味を持つ。音楽もTPOによって聴かれ方が大きく異なるだろう。

また本書は川崎氏の『庭のイングランド』を強く意識し、タイトルを決め、同じ出版社から刊行している。『家のイングランド』というタイトルには、家によって浮かび上がらせることのできる、イングランドの文化という思いを込めた。「イデオロギー」は、80年代文学研究の一つのパターンである。身体に関心を持つ本書は、ピエール・ブルデューがハビトゥスという概念を建築学に使っていたことから着想したが、ハビトゥスだけでは捨象されてしまう要素もあったと認識している。

保存については、プリザベーションよりコンサベーションが重要だと考える。そのまま保存するのではなく、使っている人の使い勝手が良いように変更を加えながら残す、つまり「使いながら保全していく」ことが重要なのではないか。住む人がいることで、都市のバイタリティも生まれ、都市の中には異なる歴史の層が残されていく。

ほかの参加者からも多数の質問があった。張政遠氏（総合文化研究科）の「ハイデガーが「田舎」へと帰っていったように、建築をめぐり、農村やコテージを礼讃することの裏には、近代化への批判という読みも可能なのではないか」という質問に対し、大石氏は「農村の実態・実情とは関係なく、都市が洗練されたものになればなるほど、農村が比較対象となるのではないか」と応答した。

前野清太朗氏（EAA特任助教）の質問「過剰に批判されたり、逆に理想化されたりする「スラム」について、どう考えるか」について、大石氏は「金澤周作氏の書評（『史苑』81（2）、pp.141-149、立教大学史学会、2021年）が指摘したように、実際にスラムに住んでいた人たちがどう考えていたのか、書かれたものからきちんと検証していく必要があるだろう」と述べた。また、たとえば「農村の木など、どこでもあるようなものにも場所性はあるのか、都市のモールや商店街なども、ある人にとっては大変重要な「場所」になりうるが、ハイデガーの「田舎」も、結局「住めば都」ということになるのだろうか」という質問に対し、大石氏は「どこにでもある竹藪でも、本人の記憶・身体・生活と結びつき大きな意味を持つようになる。擦過性（長年住むことで、部屋に「傷」がつき蓄積されていく）が、ある人にとって重要な意味を持つ場所となる」と答えた。

長いイギリス滞在経験を持つ片岡真伊氏（EAA特任研究員）は、築600年の家に住む友人の家を訪れ、家族でどのようにリノベーションしていくかについての話を聞いたそうだ。この家のうち、中世から引き継がれていたのは、キッチンの窓ガラスのほんの一部だけだという。アメーバのように増改築を繰り返す生活空間、文化の層を内包していく家という存在を、本書を読みながら考えていたという。そして、いまイギリス

が重視するのは「ブリティッシュネス」という概念であり、多様性を重視する「ブリティッシュネス」の中で、「イングリッシュネス」はどう機能していくのかと質問した。さらにコロナ禍において「都市から地方へ移動する」現象が見られ、最近では古民家に憧憬を抱きリノベーションを行うことも流行しているが、このような現象についてどう見るかと質問した。

大石氏は、以下のように返答した。「ブリティッシュネス」は政治的に正しく重要な概念であるが、本書の中ではあえて「イングリッシュネス」を使った。たとえば、スコットランドとイングランドの家は異なり、違いは違いとして認識すべきである。イングランドの専門家は、イングランドについて書くという立場をはっきりさせることが文化への敬意である。また「地方への移動」「古民家への憧憬」について、古いものを使っていくことの大切さは理解できるが、都市には都市の良さ（便利さ、バイタリティ）がある。それぞれの生活スタイルが異なり、農村は決して楽なところではなく、マイナス面も意識し、そこでのコミュニティの大切さをきちん理解した上で行くべきだと考える。また、リノベーションについても、どのようなものがその風土に合っているかを検討した上で進めていくべきだと述べた。

最後に司会から「たとえば中国でも「家」は重要だが、ハコモノとしての「家」への関心というより、「家」の内実（家族、祖先）への関心が強い。「家」に自らの理想を投影しようとするのは、イングランド特有の文化なのだろうか。また、本書の「イングリッシュな伝統」とは結局何なのか」と質問した。これに対する返答は以下の通りである。「家」への関心については、イングランドの風土（冬は暗くて寒く、外で色々なことができない）と実用性（機能、心地よさ）を重視する文化が根底にあるのではないか。また「イングリッシュな伝統」とは、格式やディグニティーなど様々なものの背後に必ずある、居心地の良さを追求するような、プラクティカルな部分なのではないか。

私は、大石氏がIHSのプロジェクトで「家と身体」という着想を得たという話がとても印象に残っている。ある研究者が、偶然に、とあるプロジェクトに巻き込まれていく過程の中で、自らの研究の中に新しい光を見出す。たまたまその「場」に参加していたメンバーの研究あるいは何気ない発言が、のちの自分の研究を大いに広げていく。今はオンライン空間が中心だが、EAAのある101号館もまた、私にとって、学生時代に事務手続きをした場所、UTCPにいた時にシンポジウムの前に他のメンバーとおしゃべりした場所、そしていまEAAの活動をする拠点というふうに様々に変化し、いろいろな「傷」を残していく。この「場」は、きっと現在進行形で、私のみる世界をまた別のかたちへと構築しなおしているのだろう。

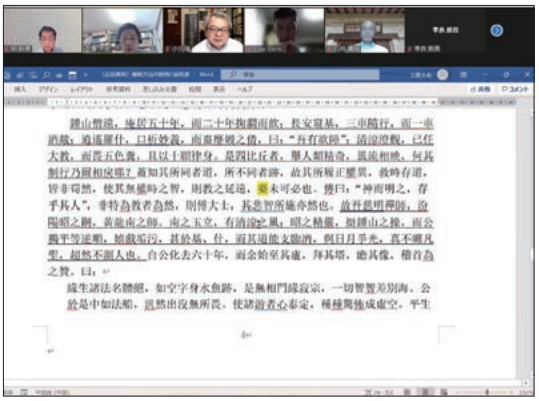
報告者:田中有紀（東洋文化研究所）

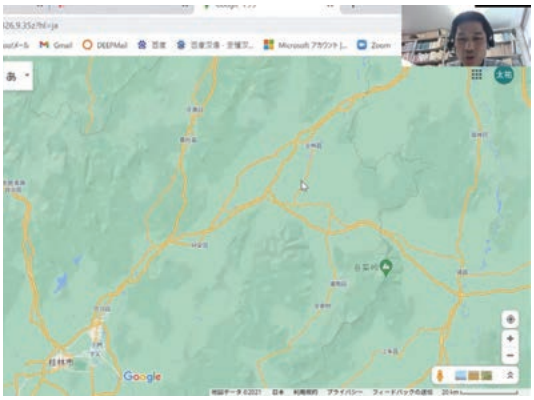
第4回 東アジア仏典講読会

2021年9月11日

2021年9月11日（土）日本時間14時より、第4回東アジア仏典講読会を開催した。この読書会は、禅を中心に仏教の研究を行っている日本・中国・韓国・フランスなど各国の研究者が集い、文献の会読や研究発表・討論を行うものである。今回は前回に引き続き、土屋太祐氏（新潟大学）により慈明婆に関する一節の会読が行われた。

慈明婆は宋代の禅僧慈明楚円（986-1039）の妻と目される人物である。仏教では戒律で僧侶の妻帯が禁じられているが、1204年に編纂された『嘉泰普灯録』の巻3楊岐方会章によれば、慈明楚円の寺の近くにはその妻の慈明婆が住んでおり、慈明は閑さえあれば必ずその許を訪れていた。ある雨の日、慈明がいつものように妻の所へ行こうとすると、それを小径で待ち伏せしていた弟子の楊岐方会（992-1049）が慈明の前に立ちはだかり、「今日こそ言え、言わなけれ





ば殴るぞ」と言った。慈明が「そのようなことがわかるのであれば、もうこれまでだ」と言うや否や、楊岐は大悟して礼拝し、「狭い道であった時はいかがか」と尋ねた。それに対し慈明が「お前はひとまず避けよ、わしは向こうへ行く」と言うと、楊岐は寺に戻った。翌日、慈明が未だ寺に戻っていないことを知ると、楊岐は妻のもとにいる慈明を訪ね連れ戻そうとした。慈明、「適切な語を言うことができれば帰ろう。それができなければ、それぞれ別の道を行くまでのこと」。楊岐が笠をかぶり数歩あるいて見せると、慈明は大いに喜び一緒に寺へ戻った。以後、慈明が寺を抜け出そうとするのを見るたびに、楊岐はどんなに遅い時間であっても太鼓を打って修行僧を集め、それをとどめた。それが既存の規則から逸脱するものであったため慈明は怒ったが、楊岐は涼しい顔をしていたという。

かかる『嘉泰普灯録』の記述を見たうえで、それ以前に編纂された北宋の文献には慈明婆が登場しないこと、明言はされないものの慈明が破戒を犯すような型破りな僧侶として描かれていること、当時広東・広西では僧侶が結婚する風習があったことなどが当時の文献をもとに紹介された。

そのうえで、『嘉泰普灯録』が記す一連の問答は史実とは看做しがたいものの、表面的な意味と、禅的な意味の二重奏になっていることについて議論がなされた。すなわち、表面的な意味を追えば、楊岐が「また慈明婆のところへ行くのだろう、今日こそ白状しろ」と言い、慈明が「もうわかってるのだから、それ以上言うな」と応え、楊岐が「このように狭い道であった時はどうか」と問い、慈明が「お前はひとまず退け、わしは慈明婆のところに行く」と言ったと取れる。それに対し禅的な意味を追うのであれば、楊岐が「今日こそ真理を開示する一句を言え」と言い、慈明が「究極の一事がわかったのであれば、それ以上は他人に聞くものではない」と応え、楊岐が「悟ってもなお避けがたい苦とどう向き合うのか」と尋ねたと取れる。ただし、それに対する慈明の「お前はひとまず避けよ、わしは向こうへ行く」を禅的にどう解するかは難しい問題であり、様々な見解が示されたものの解決を見なかった。また、楊岐が笠をかぶり数歩あるいて見せた意図も難解であり決着は見なかったものの、慈明はそれを自分と同じ道を歩む意と解したのに対し、楊岐は慈明と異なる自分の道を歩むことを宣言し、お互いにすれ違いがあったのではないかという理解が提示された。

資料を丹念に調べることで当時の状況を知ることができるものの、そこで為された禅問答をどう理解するかは依然として難しい問題である。だからこそ各分野の研究者が一堂に介し、議論することの意義があると言えるだろう。

報告者:柳幹康(東洋文化研究所)

一高プロジェクト

藤木文書アーカイヴ・東京大学文書館訪問

森本祥子氏の手引きのもとに

2021年9月13日

さる9月13日（月）、藤木文書アーカイヴメンバーのうち、宇野瑞木氏（EAA特任助教）、高原智史氏（EAAリサーチ・アシスタント）、横山雄大氏（EAAリサーチ・アシスタント）、そして報告者・日隈は、本郷キャンパスに所在する東京大学文書館を訪れた。EAAの本郷オフィスが入居する東洋文化研究所からほど近い、医学部1号館内に文書館はある。

東京大学文書館は、『東京大学百年史』（1987年）編纂に係る膨大な史料を保存・活用することを目的に設置された東京大学史料室を前身として2014年に創設され、東京大学における重要な意思決定等に係る資料の評価・選別・収集・保存等に携わる部局である。

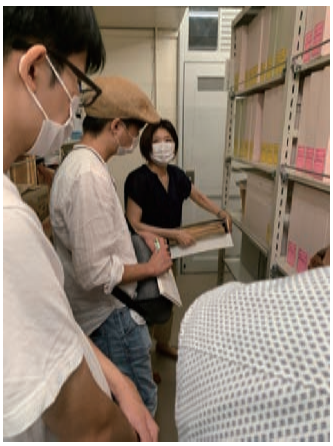
収蔵する史資料は、東京大学職員が作成した事務書類を元とする特定歴史公文書等、歴代総長や教員の寄贈等を受けた歴史資料等のほか、ニューズレター等の学内刊行物および図書類の4種類に大別される。特定歴史公文書等には、例えば旧文部省とのやり取りに係る資料など、重要文化財指定を受けたものも存在する。

今回、我々は森本祥子氏（東京大学文書館准教授）の手引きを受けながら文書館における資料の整理・保存の実際を見学した。しばしば耳にすることだが、和紙と墨書の組み合わせは資料の保存状態が一般に良好であって、明治初年の資料については現状の維持には大して気を回さずともよいというが、時代を経るにつれその比重を増す洋紙はそのかぎりではない。特に、日本が全面的にアジア太平洋戦争に突入してゆく1940年代の文書は、洋紙の中でも化学パルプ使用比率の低い下級紙が多く、酸性劣化が著しい。藤木文書の多くも例に漏れずこの下級紙であり、その保存には細心の注意を要する。具体的には、個々の文書の形状・大きさに鑑みて適当なサイズの中性紙製の箱・フォルダを用意することが、基本的な保存方針となる。むろんほかにも、博物館等と同様、温湿度の管理や害虫・害獣対策への配慮が求められる。

収蔵されている資料はどれも目を引くものばかりではあったが、他の資料館等との役割分担も興味を誘う話題だった。例えば戦後に東京大学総長を務めた矢内原忠雄関連の文書群は、学者あるいは大学教員としての矢内原に係る文書を東京大学文書館で主として収集し、彼が関心を注いだキリスト教に関係する資料は今井館（東京都目黒区）が保存することになった分もあるという。文書館は資料を何でも集めればよいというのではなく、当該組織（東京大学文書館であれば東京大学）の歴史的構成を跡づけるための資料収集をその使命とする、という原則をこの事例からも確認できるだろう。

なお、資料庫を巡回中、思いがけず昭和10年代後半の留学生関連の文書群が見つかり、その中には藤木文書にも見える、一高特設高等科出身の留学生の名が記されていた。本プロジェクトでは、年度末に藤木文書を活用した展示を予定しており、「アーカイヴ」を他の文書群と突き合わせることで「アーカイヴズ」としての拡がり・厚みのあるものとして提示することが一つの避け得ない課題となっているが、かかる課

各文書のサイズに合わせてカットされた中性紙のフォルダ。藤木文書でもこの方式を採用している



東京大学総長を務めた人物のうち、内田祥三関係史料の収蔵架の前で文書を取り出す森本祥子氏。手前は説明を受ける「藤木文書アーカイヴ」メンバー

内田祥三の直筆のメモ等含むファイル。内田は非常に几帳面な性格で、詳細な議事録などが直筆で残っているという

題を解きほぐすための糸口の一端を、思わぬ形で発見できた。今回の訪問は、文書の具体的なあり方や今後のプロジェクトの見通しについて具体的なイメージを獲得する好機となった。森本氏をはじめ、東京大学文書館のスタッフ諸氏にはこの場を借りて、日頃の業務への敬意および今回の貴重な経験についての謝意を表したい。

報告者:日隈脩一郎(EAAリサーチ・アシスタント)

EAAシンポジウム

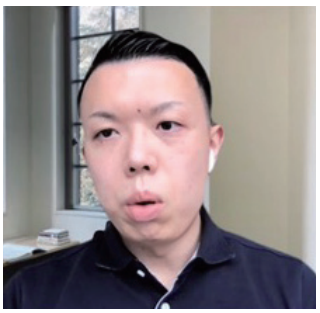
明治日本における東アジア哲学の起源

2021年9月14日

2021年9月14日(火)、EAAシンポジウム「明治日本における東アジア哲学の起源」がZoomにて開催された。このシンポジウムでは、東アジアにおける「哲学」の系譜を探求する試みの一環として、近代化へと向かっていく明治期の日本の思想状況を詳しく検討する機会となった。当時の日本において、旧制一高から帝国大学を経て東京大学にいたる知の制度化が進むそのさなかで、流入しつつある西洋哲学が東洋思想と創造的な摩擦を生じさせていた。そのなかで日本の哲学者・思想家たちはどのようなことを考え、記述していたのか。5人の発表者が3部構成で報告を行っていった。

第1部を飾ったのは、国立台湾大学哲学系教授の佐藤將之氏による基調講演「「東洋哲学」誕生の契

佐藤將之氏(国立台湾大学)



水野博太氏(東京大学)

胡穎芝氏(明治大学)

山村奨氏（昭和薬科大学）

郭馳洋氏（EAA 特任研究員）

機としての東京大学と明治中期」であった。佐藤氏はまず、私たちが「中国哲学」と呼ぶものは、複雑に入り組んだいくつもの契機によって成立していることを指摘した。中国には古代から連綿と続く思想体系があるが、近世にはそこに西洋の「哲学」が流れ込んでくる。そんななかで日本においては「哲学」の翻訳と制度化が進み、そうしたバックボーンのなかで現代中国の哲学者たちが躍動する。「中国哲学」は単純な像によって捉えることはできず、古代・近代中国・近代日本・現代中国それぞれの「思想資源」をめぐる対話として捉えなければならない。そのような構図でもって見たとき、他の契機についての実証研究に比べ、第三の契機、つまり近代日本をめぐる研究が相対的に不足しているというのが佐藤氏の問題意識であった。この第三の契機をより詳細に明らかにしていくためには、東アジアの知識人たちがいつから自分たちの思想伝統を「哲学」という枠組みで捉えるようになったのかと問いかけなければならない。すなわち、明治期日本における「哲学」「中国（東洋）哲学」という学術領域の誕生を、思想史的なアプローチによって解明しなければならない。シンポジウム全体を貫く問題意識を提示することで、佐藤氏は後続の発表者たちの報告を位置づける観点をクリアに示してくれたと言えよう。

基調講演に続く第 2 部は、水野博太氏（東京大学）の発表「井上哲次郎の見果てぬ夢――東西比較哲学と「日本哲学」」に始まった。水野氏は昭和初期から時代を遡る形で、西洋哲学の語彙・概念を以って中国哲学を解釈しようとした松本盛長、後藤俊瑞、林茂生を紹介し、その試みの先駆者である井上哲次郎へと話を展開した。そして井上のポール・ジャネへの反駁や第 11 回国際東洋学者会議（1897 年）での発言などを交えつつ、最晩年まで日本哲学の存在を主張し続けた井上の日本哲学観が形成された背景を辿った。発表後、コメンテーターの林永強氏（獨協大学）からは、井上にとっての東洋哲学・西洋哲学の定義や、現代における日本哲学のアイデンティティーに関する質問が寄せられた。

つづいて胡穎芝氏（明治大学）が、東洋哲学としての老荘思想受容を、夏目漱石の場合に焦点を当てて論じた。胡氏は漱石の老荘思想受容を漢学素養とみなす既存研究のスタンスに疑問を呈し、井上哲次郎の「比較宗教及び東洋哲学」講義を含む漱石が接した東洋哲学の教育環境に触れた。そのうえで、漱石の論考「英国詩人の天地山川に対する観念」（1893 年）や漢詩などに見出される老荘思想と関わりの深い記述の詳解、さらに「老子の哲学」（1892 年）と内田周平の『老荘学講義』（1894 年）の比較検討を通して、漱石の老荘思想受容を東洋哲学受容として考察する必要性を強調した。発表に続き、コメンテーターの片岡真伊氏（EAA 特任研究員）からは、漱石の東洋哲学としての老荘思想受容とその英国での経験との関わり、また漱石の老荘思想観の変遷などについて質問があった。

第 3 部では、まず山村奨氏（昭和薬科大学）が近代日本における陽明学の展開という主題について発表を行なった。山村氏は自身の著書『近代日本と変容する陽明学』（法政大学出版局、2019 年）に基づき、井上哲次郎、高瀬武次郎、石崎東国の陽明学理解を紹介したうえ、三宅雄二郎（雪嶺）の著書『王陽明』（1893 年）で示された儒教観や、心即理・良知・知行合一という点をめぐる陽明学と西洋哲学の比較を重

点的に取り上げて論じた。本発表のあと、コメンテーターの田村正資氏（EAA 特任研究員）からは、幕末の志士たちを惹きつけた陽明学のポイントおよびそれと明治政府との思想上の継受関係、陽明学と西洋思想を比較するモチベーション、三宅の『王陽明』が対象とした読者層などについて問題提起がなされた。

続いて郭馳洋氏（EAA 特任研究員）は井上哲次郎の大我小我論と「東洋哲学」をテーマに発表を行なった。郭氏はまず近代中国の言説にも頻出した「大我」「小我」という語は井上に由来したと紹介し、井上の現象即実在論および倫理的宗教観における人天合一説と大我小我論の展開を整理した。そしてこの大我小我論と井上の『日本陽明学派之哲学』（1900年）における中江藤樹論との間テクスト性を明らかにした。その後、コメンテーターの工藤卓司氏（県立広島大学）は、井上の論理と朱子学・陽明学の類似点、井上による東西思想比較論における比較対象の通時的変化、井上の藤樹論と同時代のそれとの差異、「東洋」と「東アジア」という用語の相違、今日に井上のテクストを読む意義について質問を寄せた。

本日のシンポジウムでは「中国哲学」「日本哲学」という学問ジャンルの成立と明治日本の思想的水脈との錯綜した絡み合いに分け入り、その膨大なアーカイブからの言説化の可能性が模索された。「中国哲学」ないし東アジアの「哲学」をめぐって、その自明性や自己完結性を前提としないような語り方がいまこそ求められているのではないだろうか。

報告者:田村正資、片岡真伊、郭馳洋
（EAA特任研究員）

EAAセミナー

デジタル資本主義と価値革命

2021年9月15日

2021 年 9 月 15 日（水）に EAA セミナー「デジタル資本主義と価値革命」が開催された。今年度 EAA で取り組んでいる「価値と価値化」の議論を深めるために、今回はアカデミアの外で活躍されている野村総合研究所未来創発センター上席研究員の森健氏をお招きした。「デジタル資本主義と価値革命」を題としたご講演を通して、大学と産業界とのつながりを考える時間を持った。

最初に石井剛氏（EAA 副院長）により趣旨説明が行われた。コロナ禍で社会のデジタル化が急速に進む中、かつての「産業資本主義」とは異なるメカニズムで働いている「デジタル資本主義」とも呼べるシステムが実現しようとしており、価値をめぐる概念や認識も変化している。EAA では教育と研究に加え、産学協同を重要な一つの柱とした活動に取り組んでおり、産学を結び付けながら、学問を作っていくことを目指している。石井氏は産業界で何が起こっているのか、具体的に学び、新しい言葉を学ぶ機会を増やしていきたいと述べた。この度は、石井氏が先日野村総合研究所で講演したことをきっかけに、今回は 2018 年に共著で『デジタル資本主義』（東洋経済新報社、2018 年）を出版され、この分野で活躍されている森氏を講師としてお招きすることができた。

趣旨説明と紹介を受けて、森氏は講演を始めた。まず「デジタル資本主義」について「デジタルデータと人間の創造力・活動力が、労働力や機械設備にかわって最も重要な経営資源になる世界」であると定義した上で、森氏はコロナ禍が加速させた社会のデジタル化の現象を紹介した。緊急事態宣言の発令などで様々なオンラインサービス利用が急拡大し、日本のテレワーク対象者も最大就業者の 40%弱まで拡大したことが確認できたという。これは、デジタル化がもたらす「時間」と「空間」の解放という経験とパラダイムのシフトが行われたからであろう。周知のように、テレワークの拡大を受け、通勤時間がなくなった分、個人の「可処分時間」が大幅に増加し、一方で空

石井剛氏（EAA 副院長）

森健氏（野村総合研究所未来創発センター）

間の制約もオンライン化（Zoom 会議など）で劇的に削減された。森氏によると、こうしたパラダイムシフトは新たな需要を生み出している。米国ではオンラインビジネスが急増しており、D2C を促すオンライン事業とそれを支えるプラットフォーム（例えば、Shopify）の台頭がそれを裏付けている。

森氏は、そこに働いているメカニズムをデジタル化による「消費者余剰」の拡大であると説明する。森氏が注目しているのは、2000 年代後半から GDP は低迷するも日本人の主観的な生活レベル（生活満足度）は上昇している点である。それは、デジタルによる産業破壊で、たとえば、オンライン販売において「価格」の下落により、消費者が最大支払ってもよいと考える価格と実際の取引価格の差分という「消費者余剰」が拡大し、生活満足度を上昇させているとのことである（言うまでもなく、その裏側では「生産者余剰」が圧迫されている）。たとえば、音楽業界を見ると、Spotify のストリーミングサービスにより、消費者は高い CD の購入なしに月 1,000 円で無数の曲を聞くことができる。デジタル化が生み出したこうした消費者余剰は野村総研の共同研究によると、日本の GDP 比で 3 割近くあるという。それを受け、市場や企業は aaS（アズ・ア・サービス）で対応を進めている。

以上の議論に基づいて、最後に森氏は、デジタル時代における「価値革命」を考察した。森氏は産業資本主義では減価償却社会であったことに対し、デジタル資本主義は AI の学習やソフトのアップデートのように増価蓄積社会を築いていくのではないかと論じた。つまり、デジタル資本主義の下では、時間とともに価値が減価するのではなく増価していく。そのため、「時間」と「こだわり」をめぐる「価値」がより見出されるのではないかと指摘した。

森氏の議論を受けて、参加者からは次のような問いかけがなされた。デジタル化が生み出す価値は娯楽や芸術のような人間の感性に訴える側面が強い。消費者余剰が増えていく裏側で生産者余剰が限りなく 0 に近づいていくのは問題ではないか。消費者余剰の拡大で余っているお金が新たな投資につながらない問題、貧困状態でありながらも生活満足度が増加するという逆説的な問題があるのではないか。個人情報を誰に、どの程度、預けられるのか。コロナ禍でまさしく私たちが直面している問題であるからこそ、予定の時間を超過して議論は続き、多くを考えさせられた内容であった。

報告者:具裕珍（EAA特任助教）

第9回　日中韓オンライン朱子学読書会

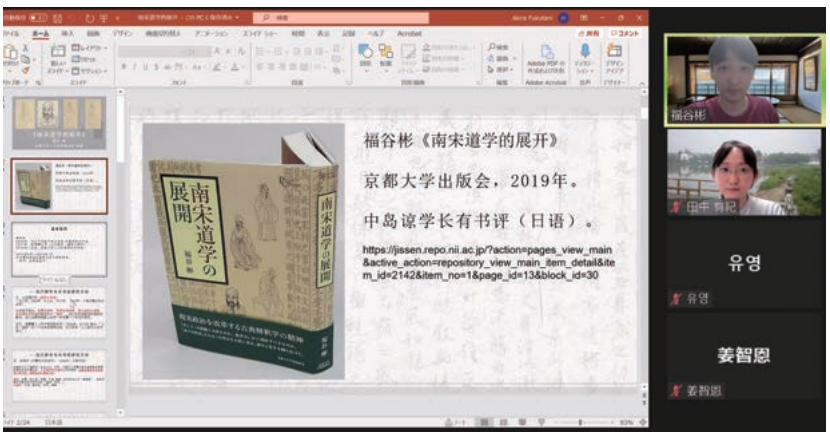
2021年9月25日

9 月 25 日（土）日本時間 16 時より、第 9 回日中韓オンライン朱子学読書会が開催された。これまで同様、EAA のほか、清華大学哲学系、北京大学礼学研究中心との共催である。

今回は田中有紀（EAA、東洋文化研究所）が司会を務め、福谷彬氏（京都大学人文科学研究所）が、2019 年に出版した『南宋道学の展開』（京都大学学術出版会）について、特に第六章の「消えた「格物致知」の行方――朱熹「戊申封事」と「十六字心法」をめぐって」をとりあげ、発表を行った。

該章は朱熹の封事（上奏文の一種）にみえる「十六字心法」の解釈の変化から、朱熹の君臣論を分析するものである。「十六字心法」とは、『尚書』大禹謨「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中」という記述を指す。朱熹は人生で 3 回皇帝に封事を上奏したが、この「十六字心法」の実践を通して皇帝に政治意識の改革を求めることがあった。朱熹の早期の封事では「惟精惟一」を「格物致知」の解釈に、「允執厥中」を「誠意正心」の解釈と結び付けたのに対し、「戊申封事」では両方とも「誠意正心」を述べるものとした。朱熹の工夫論においては、「格物致知」を完成させてから「誠意正心」が実現できるはずだが、「十六字心法」からは「格物致知」が消えてしまったのである。これは一体何を意味しているのだろうか。朱熹の「十六字心法」解釈の転換は、陳亮の「王霸・義利」論争が関わっている。陳亮は王朝が政治的に成功するかどうかは、君主が政治的独立性を発揮できるかどうかにかかっていると考えた。それに対して、朱熹は、より重要なのは君主が政治的独立性を発揮できるかどうかではなく、「十六字心法」に基づき正しく独立性を発揮できるかどうかだと主張した。同時に、朱熹は当時の皇帝孝宗が側近ばかりを重用し、士大夫の建議を聞かずに独断で政治を行っていたことに対し、「賢臣」の建議を聞くよう主張していた。『戊申封事』において、朱熹は皇帝に「十六字心法」の実践を説き、皇帝は「私心」を取り除き、側近に頼る政治をやめるべきだと主張した。「十六字心法」は聖王が自己の私欲を取り除くための修養法であり、この修養法を実践するためには、天理と人欲をはっきりと区別する賢臣の諫言を受け入れる必要があるとした。天理と人欲をはっきりと区別するための修養が「格物致知」である。つまり「格物致知」は士大夫がなすべきことで、皇帝は士大夫に「格物致知」を任せるべきだとするのである。朱熹は「十六字心法」から「格物致知」を取り除き、士大夫の皇帝権力に対する牽制作用を確保しようとしたのである。ただし、このような士大夫を登用するかどうかは皇帝の意思次第であるという点で、皇帝の主体性もまた確保されているといえよう。

報告後、参加者からいくつか質問が出た。書評を



執筆したこともある中嶋諒氏（明海大学）は、「福谷氏の著作は、道学者の政治的側面をとりあげ、陸九淵や陳亮は思想的な対立のみならず、政治的にも対立していたことを明らかにした点が優れている」と述べた上で、「南宋時代に出てきた朱陸折衷論についてどう考えるか」と質問をした。福谷氏は「宋末に、朱熹と陸九淵は対立するものではなく、どちらの長所も吸収しようという姿勢が出てくる。どのような哲学的態度で吸収しているのかというと、「自分に対し厳しい目で修養する」場合は朱子学を取り入れ、「人に接する」場合は「自分と他者がともに探求していく」ような、陸九淵的な考え方を取り入れたのではないか」と応答した。

また他の参加者からの「八条目は時間上の順序ではなく、演繹上の順序であり、「格物致知」と同時に「誠意正心」も進める必要があると朱熹は考えていたのではないか」という質問に対し、福谷氏は「全くその通りであり、だからこそ、皇帝は「誠意正心」、臣下は「格物致知」と分けているように見える朱熹の態度に違和感を覚え、この研究へと繋がった」と返答した。「朱子学の排他性、ただ一つの理論しか認めない態度は、朱熹の哲学のどの部分から導き出されるのだろうか」という質問に対しては、福谷氏は「たとえば朝鮮朱子学における内部の激しい対立の原因は、朱熹の性格および朱子学自体にあり、もともと対立を激化させるような性質を持っている。「存天理、滅人欲」というテーゼにみられるように、他者の道理に妥協点を見出そうとせず、「自分と異なる考え方の人に流されてはいけない、徹底的に攻撃せよ」と考えてしまうからではないか」と応答した。このほか「南宋における道学形成において王安石学派との論争はあったのか、その焦点は何なのか」などの質問も挙がった。

「格物致知」を人に任せ自分で実践しないということは、たとえ皇帝にのみ許されたことであったとしても、結局、誰かがなした「格物致知」に拠ることができると、認めることになるだろう。報告者は音律学を研究しているが、朱熹にとって音律学はまさに重要な「格物致知」の一つである。抽象的な音律学を論じる一方、朱熹は毎日楽器を弾き、「自ら」音楽を奏でて実践する努力を大切にした。理論として理解するだけでなく、自分自身が経験することを重視した朱熹の態度と、本報告のような「消えた格物致知」をどう理解したら良いのだろうか。あるいは、たとえ矛盾していたとしても、皇帝には「誠意正心」を説かねばならないほど、朱熹は政治に対して切迫した思いを持っていたといえるのかもしれない。

報告者:田中有紀（東洋文化研究所）

EAAセミナー

「文化」をめぐる対立と「人民＝ピープル」の不在

コロナ禍への対応をめぐって

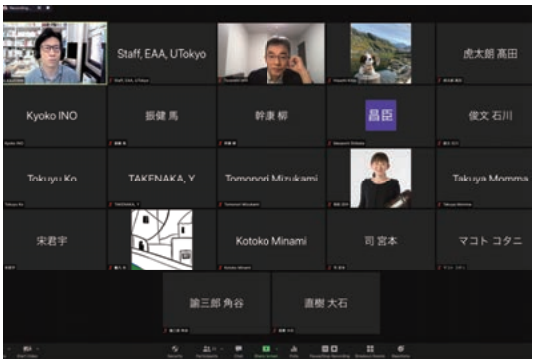
2021年9月27日

2021年9月27日（月）、神戸大学の梶谷懐氏に、「「文化」をめぐる対立と「人民＝ピープル」の不在――コロナ禍への対応をめぐって」[1]と題したご講演をしていただく機会に恵まれた。梶谷氏は、一昨年、ジャーナリストの高口康太氏との共著である『幸福な監視国家・中国』（NHK出版、2019年）を出版されており、ご専門である経済学だけでなく、幅広い視点から現代中国について分析されている。

1.「文化」をめぐる対立

梶谷氏は、まず民主主義国家において、100万人

梶谷懐氏（神戸大学）



あたりの新型コロナウイルスの死者数が権威主義体制国家よりも多くみられるという問題を取り上げた。この問題を巡っては、「民主主義の敗北」を唱える識者と、民主主義を擁護する識者の間で議論が交わされている。しかし、梶谷先生は、ここに「文化」という視点が欠けているのではないかと指摘する。自然環境がもたらすリスク（＝感染症を含む自然災害）に対処するための社会の枠組みと、人為的環境がもたらすリスク（＝暴政など）に対処するための社会の枠組みは区別して考える必要があり、前者は集団主義の文化的信念が、後者は個人主義的な枠組みが根底にある。このように考えると、中国が今回、新たな感染症にうまく対処できたことは不思議ではない。

実際、世界価値観調査（World Value Survey）を元にしたイングルハート－ヴェルツェル図は、欧州の新教諸国や英語圏の国々が「自己表現を重視」するのに対し、中国を含む儒教文化圏の国々は「生存を重視」する傾向があることを示している。梶谷氏は、こうした文化的な差異（価値観の対立）が、今回の感染症対策にも表れているのではないかと指摘する[2]。

今回の新型コロナウイルス感染症では、米国との文化的距離が遠いほど、感染者／死者数が抑えられるという傾向が見られた。近年、中国と西側諸国の経済的 / 制度的な差異は収斂しつつあるものの、だからこそ収斂しない部分（＝文化的な価値観の差異）が際立ち、例えば米中間の深刻な対立を招いているのではないか。このように述べた上で、梶谷氏は異なる文化背景を持つ世界を理解することの重要性を指摘した。

2.「人民＝ピープル」の不在と、市民的公共性の困難

続いて、梶谷氏は、新型コロナウイルスへの対応において、中国では「人民」という概念が非常に強調されたことを指摘した。中国では、新型ウイルスへの対応を毛沢東時代の人民戦争になぞらえ、「人民」の一体感を強調する一方で、「市民」の自由の抑制によって感染の抑え込みを図る手法が取られた。そもそも、近代社会において「人民＝ピープル」と「市民」はしばしば対立しうるが[3]、特に中国などの第三世界の社会主義国では、市民（ブルジョワ）革命を回避しながら、共産主義政権によって資本主義化が実現したため、「人民」と「市民」の矛盾がより先鋭化しがちである。歴史的には、中国（中華人民共和国）では、「人民の敵」を作り出すことにより、「市民」の台頭を抑えて、政権の安定を図るということが繰り返されてきた。

3. 文明間の「共通通貨」の追求に向けて

このように、中国社会において、近代的な「市民的公共性」を実現することは困難である。しかし、『幸福な監視国家・中国』で述べたように、功利主義とテクノロジーにより、「市民的公共性」を代替することには限界がある。梶谷氏は、最後に、何か普遍的な規範をベースに、そこから逸脱した存在として中国を捉えるのではなく、プラグマティズムの立場から、異なる文化背景を持つ存在として中国と向き合い、

「普遍性」を再検討しながら中国問題に取り組む必要性があると述べた。

この後、フロアから活発に質問が出され、本来の予定時刻を大幅に延長しておよそ1時間に渡って質疑応答が行われた。現代中国を考える上で、非常に重要な示唆に富んだご講演であった。

1 https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/events/20210927-lecture/
2 ただし、世界価値観調査のような文化類型に関する指標が、WEIRD（Western, educated, industrialized, rich and democratic）な社会のバイアスを強く受けているという問題点があることも併せて指摘された。
3 ここでは、酒井隆史（2019）の議論が言及されていた（http://www.ibunsha.co.jp/contents/sakaispecial01/）。

報告者:金城恒（EAAユース）

EAA ダイアローグ

第10回 國分功一郎氏×王欽氏

2021年9月27日

2021年9月27日、國分功一郎先生と王欽先生のダイアローグが行われました。今回のテーマは「中国における日本のサブカルチャー」。1980年代から1990年代に中国のテレビで放映されていた日本のアニメを実際に観て育った王先生と、留学に際して日本のアニメ文化のフランスでの受容を目の当たりにした國分先生の双方の視点から、はからずも、2つの国の、幾分か異なる時代で、どんなふうにアニメが字幕翻訳を経て、ひとびとに受け止められて爆発的な人気を博していったのか、ざっくばらんに愉しいおしゃべりが展開されました。

中国でのアニメ普及に海賊版が果たした役割の大きさや、フランスのカトリック社会での規範意識との関係、アニメを誰が見るのか、という年代や大人の定義の問題、さらには、データベース消費や資本主義をめぐって、終盤ではポケモンGOとデモ、ゲーム的リアリティについて、非常に興味深い応酬が交わされました。

左から順に王欽氏（総合文化研究科）、國分功一郎氏（総合文化研究科）

ダイアローグの最初で、王先生が慎重に、ここでいう中国を定義する必要がある、と述べ、毛沢東時代のサブカルチャーに目配せをしつつも、現代中国に限定する、と言ったことが印象的でしたが、おそらく同様の操作を「日本」についてもする必要があるのかな、と思いました。それから、おもに少年漫画ベースでおしゃべりが進んでいたので、少女漫画についての状況も、どうなっているのか、興味が掻き立てられました。セーラームーンをはじめとするキャラクターが、それこそいまに至るまでどのように受け止められてきているのか、さらに話を聞いてみたい、と思っています。

個人的に面白かったのは、アニメをみる社会階層をめぐるやりとりを受けて、わたしから、現代中国のなかでも農村ではアニメ受容はどうなっているのか、と質問したところ、王先生から、テレビはなくても、むしろ、本の形で、二次創作でまったく新しい物語が作られて、流通している、という話を聞いたことです。毛沢東時代には中国の古典に基づいて子どものためにアニメが創られていたと言いますが、なにか新しく物語が創られる際の素材はどのようなものであり、どうやって、そのような昔から受け継がれてきているイメージが編まれて変遷してゆくのか、具体的な例をぜひ観てみたい、と思います。

わたし自身は、1990 年代前半、幼稚園時代から小学校に入学するあたりまで、北海道の片田舎で再放送アニメらしきものを早朝に断片的に目にしつつ、『衛星アニメ劇場』をリアルタイムで観ていた世代です。おそらくその前後から、急速にテレビゲームが普及していったと記憶しているのですが、スマートフォンやインターネットのこの時代に、括弧付きの「子どもたち」がどんなふうにアニメを観ているのか、歴史の流れとともに複数文化の視点から、振り返ってみたい、と思いました。

このダイアローグは、これまでの EAA ダイアローグシリーズの一環として、Booklet になって公開される予定なので、楽しみにお待ちいただければ幸いです。

報告者・写真撮影:髙山花子(EAA特任助教)

第26回 石牟礼道子を読む会

2021年9月28日

2021 年 9 月 28 日（火）午後、「第 26 回 石牟礼道子を読む会――山田徹監督ドキュメンタリー作品上映会」が 101 号館にて開催された。参加者は山田監督のほかに、鈴木将久氏（人文社会系研究科）、宇野瑞木氏（EAA 特任助教）、髙山花子氏（EAA 特任助教）、宮田晃碩氏（EAA リサーチ・アシスタント）、日隈脩一郎氏（EAA リサーチ・アシスタント）、建部良平氏（東京大学大学院博士課程）と報告者の張政遠（総合文化研究科）の 8 名であった。

まず、『新地町の漁師たち』（2016 年／完全版）が上映会された。このドキュメンタリー映画は、福島県浜通りの北部にある新地町に住んでいる漁師たちの震災後の姿を記録したものである。漁師たちがいつかまた漁に出る日を待ちながらも、汚染水の海洋放出により翻弄されるシーンが非常に印象深かった。

次に、『あいまいな喪失』（2019 年／短編版）が上映された。このドキュメンタリー映画は、『テツさん、浪江町へ』（2018 年）（https://youtu.be/TpSvmox6PEQ）の続編として展開したものである。『テツさん、浪江町へ』では、震災後、浪江町からいわき市へ避難したテツさん一家は、解体直前の浪江町の家に帰ったことが記録されたが、『あいまいな喪失』では、老老介護問題やテツさんの故郷である大熊町の現状などが物語られた。

二つの作品を観たあと、山田徹監督による作品解説と質疑応答が行われた。今までの石牟礼道子を読む会は、主に石牟礼の作品の解読と古典芸能の鑑賞という形をとってきたが、今回は漁師の生業と価値観、海洋汚染問題、前近代の祭り、花の道、人間らしさ、女性と子どもの声、死者の声などについ

『新地町の漁師たち』（2016 年／完全版）

『あいまいな喪失』（2019 年／短編版）

山田徹監督（左）と司会を務めた張政遠（報告者）（右）

て、現代問題としての福島第一原子力発電所事故から水俣病を再考するきっかけを提供した。また、東アジア藝文書院では、「101号館」の歴史を描く映像制作プロジェクトを立ち上げているが、山田監督から記録、物語、知ることの大事さ、写真の役割などについて貴重なアドバイスをいただいた。

なお、今回は上映会ということで、オンラインではなく対面での開催となったが、参加者一同、対面によるコミュニケーションのよさを実感できた場ともなった。

報告者:張政遠（総合文化研究科）

産学連携を超えて

空気と空間と人づくり

2021年9月29日

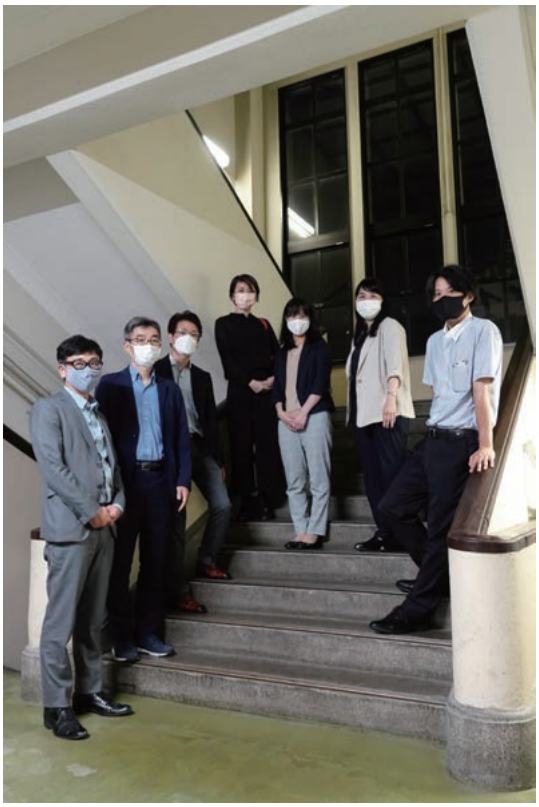
このたび、ダイキン工業株式会社より6名の社員が駒場キャンパスを訪れ、オフィス空間の新たなアイディアを求めて、KALS（駒場アクティブラーニングスタジオ）と21KOMCEEを視察しました（2021年9月29日）。以下では視察に同行した感想を述べます。

どちらの施設も、アクティヴ・ラーニングを大学の教室に取りいれることを主な目的として設計されたものです。しかし、両者の訪問を通じて最も強く印象に残ったのは、授業方法に関わる技術論やそのために導入されたテクノロジーではなく（もちろんそれらの中にも興味深いものがいくつもありましたが）、その背後にある思想でした。つまり、人の自由な集散を促し、空間全体の中で随時随所に人と人が場と身ぶりを多様な形で共有できるよう工夫を凝らすという思想です。そのような空間においては、一人ひとりが、与えられ固定された居場所の束縛から逃れることが可能となるだけではありません。なにがしかの具体的な課題に取り組むという共通の目的の下に統御される授業教室と、その目的から離れてただ人がそこにいるためだけに設けられた谷あいの里のような空間とが緩やかに隔たりながら相互浸透するよう仕組まれています。新しい学問のあり方としてアクティヴ・ラーニングは定評があり、特にオンライン授業を強いられるようになってからはわたしも意識的にその手法を取りいれています。その一方で、グループワークや多方向的な討論に参加することを強迫されかねないことに危機感を覚える教員や学生がいるのも事実です。しかし、単にたまり場としても使えるような廊下や待機室の設計や配置に込められているのは、アクティヴであれという要請とはむしろ逆のベクトルに対する配慮であるとわたしは感じました。技術論に偏ってしまうと、往々にして一直線に生産性の向上だけを追求するようになりますが、それは必ずしも善ではなく、かえってより人を息苦しくさせかねません。人の人たる所以は、生産性や効率を敢えて追求しない自由の中にこそ悦びを感じることだからです。ですから逆説的ですが、この両施設（とくに後発の21KOMCEE）において、それらがコンセプトにするアクティヴ・ラーニングがうまく機能しているとするならば、

総合文化研究科真船文隆副研究科長とのディスカッション

実は、そうした前屈みの窮屈さに陥らないよう、空間自体に意匠が凝らされているからではないかと思います。つまり、「遊び」の空間がもつ「ため」が準備されていることこそが、この建物を教育の場たらしめている肝であるのだとわたしは理解しました。

ダイキンの方々にお伴することで、このような場所を見学できたのはとりわけ有意義なことだったと思います。エアコンメーカーとして「空気をつくる」ことに取り組んでいる皆さんが、人の自由な流れを可能にする空間をデザインしようとなさっていることには、ものづくりの仕事が人ならではの自由な想像力に支えられていることへの深い経験的洞察があるように感じられるからです。阿部謹也は、中世の神学者として知られるサン＝ヴィクトルのフーゴーが哲学を修めた後に陶工としての技術を学ぶべきだと主張したことを挙げて、そこにあるべき教養の姿を見出しました（阿部謹也『「教養」とは何か』）。本来、リベラル・アーツとは豊かな哲学的教養と「もの」に働きかける身体的な作業の総合であるべきなのです。ですから、ものづくりの企業が大学と協働することの意義は、それを通じてより豊かな人の生き方を実践的に示すことにこそあります。新しい製品開発や技術開発の可能性を広げる手段としての産学連携を超えた人間的・社会的意義がそこにはあり、ダイキンとの関係においては、それを



ダイキン工業株式会社の皆さんと。101 号館にて

こそ目指すべきであるとわたしは信じます。そういう意味で、人が共に生きて成長するための理想の空間がどうあるべきかについて、具体的な事例を共有しながら皆さんと共に感じつつ考えることができたというのは、短時間の小さな取り組みであるとは言え貴重なことでした。

ダイキンの視察訪問者の中には、はるばる大阪から来てくださった方々も多く、実りある交流となりました。この場をお借りしてご来訪の皆さまに感謝の意を表したく存じます。

報告者:石井剛（EAA副院長）

2021年度活動報告

秋●10月～12月

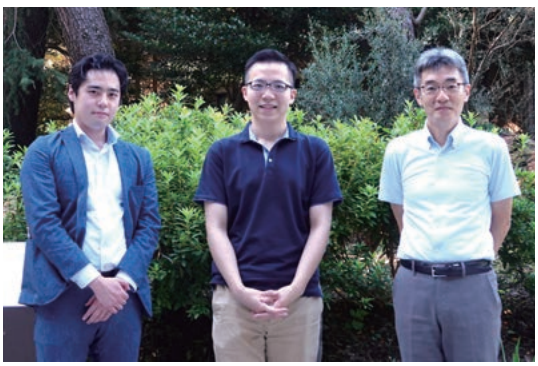
EAAユース卒業生の訪問

2021年10月4日

EAA は大学院生と学部生を EAA ユースとして組織して、学部向け教育プログラム「東アジア教養学」を展開しています。2020 年度に発足したのですが、すでに卒業生が 1 名出ていることはこのブログでもかつてご報告したとおりです。

このほど、その孔徳湧さんが「里帰り」してくれました。経済学部を卒業後、いまは人事コンサルティングの企業で働いているそうですが、休暇を利用して駒場に立ち寄ってくれたのでした。折しも緊急事態宣言期間が明け、本学の入構制限も緩和されたタイミングでしたので、マスクをしながら、そして湯茶の提供もないままではありましたが、直に向き合って楽しい会話を交わすことができました。

経済社会が大きな変革の時を迎えているなかで、20 代には特有の迷いと悩みがつきまとうのではないかと思います。もちろんそれは、その後の人生にすべて活かされるはずなので、必要な投資であると思えれば、それもまた楽しみになるかもしれません。ただ、ひとりでそれらに向き合っているのはたいへんですし、日常の人間関係の中から時には解放される必要もあるでしょう。そういうときにこそ、読書に帰り、学問に帰り、そして大学に帰ってきてもらえればと思います。EAA のオフィスは駒場にも本郷にもありますので、いつでも皆さんがふらりと帰ってくることのできるオアシスでありたいと思います。



中央が孔徳湧さん。ユース生の簸本器さん（左）と共に

EAA は、研究・教育・社会連携を三位一体として「新しい学問」を生み育てることをミッションとしています。それは、特に大学の外に広がる社会全体と大学との関係をこれまでとは異なるものに変えていくことを意味しています。産学連携、リカレント教育、インターン研修など具体的なアイディアや実践例はいくつもありますが、それらによって、大学と社会がそれぞれに変化しながら、人が人として豊かになるための学問の場として大学が機能していくようになるために最も不可欠なのは、制度に回収されることのない、具体的な人と人の関係を育むことでしょう。EAA ユースの皆さんには、読書と学問を通じて、生活のあらゆる場面で人に交わりながら共に育っていく姿勢を卒業後も持ち続けてもらえればと、わたしたちは望んでいます。今後、毎年のように卒業生が巣立っていけばやがて同窓会も大きくなっていくでしょう。そうなれば、「30 年後の世界」は遠い夢物語ではなくなり、現実にいま歩いている道の先に確実に開けてくるにちがいありません。その時、世界は、社会は、そして学問はどうあるべきか。わたしたちはどのような未来を望むのか。EAA において皆さんと共に発したこの問いは、卒業してからこそ真に試されることになります。

大学を出て人生を歩み始めた孔徳湧さんの明るく楽しげな表情にはたいへん安堵しました。現役のユース生の皆さんにもどんどん続いてほしいと心から願ってやみません。

報告者:石井剛（EAA副院長）

EAA Global Lecture Series

The 2nd Lecture "Interactive Analysis, Language Barriers, and Medical Consultations"

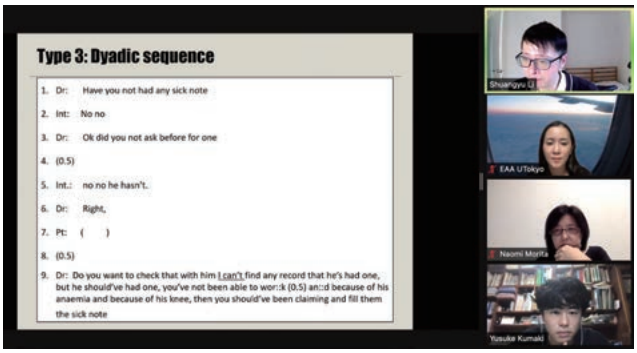
2021年10月5日

The second lecture for the EAA Global Lecture Series co-organised by EAA and GGG (Go Global Gateway at the University of Tokyo) was held on 5 October on Zoom. As the second lecturer for the series, Dr. Shuangyu Li (King's College London) took us through his journey of how he came to his current research question: how doctors communicate with their patients in interpreter-mediated consultations, so to explore how to have more effective, interactional GP consultations that are required in increasingly diverse societies.

According to Li, communication styles in doctor-patient relationships had been dominated by an authoritative and paternalistic relationship, but this has shifted towards patient-centred care in recent years. Previously, doctors were given phrase books that gave guidance of what to tell patients in specific situations. But this attitude has been gradually replaced by 'healing relationships', in which GPs value how patients' feel, and attempt to establish a more equal partnership with them.

What complicates the matter in the UK though, he explained, is a highly diverse population, and this environment seems to have played a vital role in forming his research enquiry and the way in which he engaged with medical education. More than 14 % of the UK's population consider themselves as non-white. The fact that more than 300 languages are spoken in London alone also shows this diversity ('Ethnic groups, England and Wales' and 'Ethnic groups by English regions and Wales', *Office for National Statistics*, 2011). In such culturally and linguistically diverse environment, the component of cultural competence has become an important element in medical education, an element Li incorporates when he develops medical curriculum at his university. The word 'culture' that he uses in this context has a broader meaning: it is not just about language, ethnicity, and race but also includes gender, disability, and social and cultural status. But how can doctors communicate effectively while acknowledging the diversity of patients? In the lecture, he shared how the previous studies indicated that an interpreter should be in place to mitigate barriers between doctor and patient when language becomes a barrier. Then how do the doctor, the patient, and the interpreter use language in their interaction to make sense in the interpreter-mediated GP communications?

In the rest of the talk, he demonstrated ways in which he used conversation analysis (CA) to explore dynamics at work in such communications. He explained that the way people speak is highly structured and there is a pattern to it; thus, the CA could



There was a thought-stimulating discussion among participants.

be an effective tool when analysing and observing patterns of communication (e.g. turn-taking, turn-deign, sequence organisation, social actions). Having explained the methodological aspects of his research, he then shared some results of case studies he conducted. There was much to be learnt from the findings that he shared with us, but one of the results of particular interest was from the case study in which he employed CA. The study is based on the data of seven video recorded GP consultations (with two doctors, seven patients, and three interpreters across levels including professional and ad hoc interpreters of Urdu, Mirpuri, Punjabi, and Czech), in which he identified different types of turn taking and methods of speeches observable in the data (for the detail of his research, see Nine Types of Turn-taking in Interpreter-mediated GP Consultations, Li, S., 27 Feb 2015, In: Applied Linguistics Review. 6, 1). In the lecture, he demonstrated how he analysed the data by reading transcriptions of these interpreter-mediated interactions with particular attention to turns of conversations, pauses, and power dynamics between the doctors, the patients, and the interpreters. This helped us to see how the above-mentioned elements differ between effective and non-effective GP consultations, including the finding that a lot more positive outcomes in the interaction could be expected in cases with longer pauses in the turn-taking, especially when doctors deliver complicated information. To illustrate ways in which one can translate research results into practice, he also showed us how this finding could be used, for instance, to score trainees or to train doctors and interpreters.

The discussion that followed invited us to understand the nature of his research at a more fundamental level. During the discussion, he re-emphasized the importance of being clear about what one would like to find out when one designs research especially for practical purposes – in his case, designing research that would benefit the education of medics. Since most of his audiences work at medical schools, he said, he reduced a lot of technicalities to tailor his research into a more accessible form for those who are not familiar with social science and took a more skills-oriented standardized approach instead of a social science-oriented approach. Having engaged with research motivated by practical purposes to apply its findings to medical education, understanding interactional features that are observable in all consultations even without the language barriers, rather than exploring how to mitigate the linguistic/cultural differences, seems to be the focus of his research. My focus as a literary translation scholar has been the latter, but his lecture helped me revisit the importance of understanding both sides of the spectrum, tasks imposed in increasingly diverse societies, and things to bear in mind when one wants to design research for our future to come.

Report by Mai Kataoka
(EAA Project Research Fellow)

第4回 EAA沖縄研究会

映画『緑の牢獄』上映会

2021年10月5日

2021 年 10 月 5 日（火）、第 4 回となる EAA 沖縄研究会では、映画『緑の牢獄』（黄インイク監督、2021 年、ムーリンプロダクション）の上映会を開催した。コロナ禍が続く中、本研究会では過去 3 回をすべてオンラインで開催してきたが、この度は会場に黄インイク氏をお招きし、晴れて初の対面開催を実現した。本作が 3 月に映画館で上映された際に黄氏と言葉を交わした張政遠氏（総合文化研究科）が黄氏に直接依頼し、この度の上映会・講演が実現した。いつもオンラインで画面越しにお会いしてきた参加者の方々とも対面でディスカッションを行うことができたのは、大きな喜びであった。

『緑の牢獄』は、黄氏による「狂山之海」ドキュメンタリーシリーズのうち、『海の彼方』に続く第 2 作となる。台湾出身の老女・橋間良子（橋間おばぁ）の口から搾り出される断片的な語りが、老女と同じく集落から取り残された「家」を舞台に紡ぎ出される。橋間おばぁは、10 歳の頃、養父に連れられ台湾から西表島に移住した。養父は炭坑の親方として、坑夫を募集し人材を斡旋するという仕事を担っていた（その多くは基隆からやって来た人々であったという）。「みんなここを「死人の島」って呼んだ。誰がわざわざ来たがるの？　琉球は人を毒する場所だと」。劇中発せられた橋間おばぁの言葉は、沖縄出身の私の心に深く刺さった。帝国日本には、複数の位階が存在した。帝都を中心とし、その周縁部として農村が存在する。しかしそれらは全て、沖縄や北海道からは「内地」と名指される。だが、その沖縄もまた、台湾や朝鮮という植民地から見れば、「内地」に近しい場であり、抑圧者として君臨する存在であるのだ（さらには、沖縄本島と離島との間にも、無数の位階が横たわっている）。頭ではわかってはいたとしても、それを生の言葉として自分の中に受け容れるのはまた別の作業である、ということを実感させられた。

戦後台湾に帰るも、ほどなくして西表に舞い戻った橋間おばぁ家族もまた、帝国日本の位階の狭間で苦しんだ人々であった。「あんたのお父さんはみんなを死なせる気で連れていくんだ!」という言葉を投げつけた友人に対して、橋間おばぁは答えた――「まだ着いてもいないのにそんなこと言う？」。台湾人が、過酷な労働環境だと知りながら、日本資本の炭鉱会社（南海炭鉱や丸三炭鉱）に対して、同郷人を坑夫として斡旋する。坑夫にとって西表島は、逃げることができない「緑の牢獄」である。ドキュメンタリー映画でありながら、本作では、坑夫たちの亡霊が森の中を今も坑夫姿のまま彷徨い続ける映像が交錯する。記す（docu-）ことに限定するのではなく、リアリティ（reality）をひとつずつ拾い上げながらつないでいく、「cinema

上映会の様子

『緑の牢獄』ポスター

講演する黄インイク監督

黄インイク氏

張政遠氏（総合文化研究科）

上映会を終えて

du reel」という手法へのこだわりを、黄氏は語った。

西表はまた、橋間おばぁを記憶の網目の中に閉じ込める「緑の牢獄」でもあった。「夜は横になると思い出してね、台湾から来たばかりの頃はどんなだったどんなだったって、いろいろ思い出すから、だから一晩中眠れない」。そんなおばぁには、一人の隣人がいた。正確には、おばぁの家の一間を借りている同居人だ。ルイスという名のアメリカ出身のその若者は、物語に不思議なスパイスを与えている。少年の頃、異国である日本に父親とともに渡り、その後どのような遍歴を経たのかは定かではないが西表へ流れ着いた。現地で恋人と結婚の話が出るも破談になり、数年間をおばぁの同居人として過ごした。掘ったばかりの土だらけの筍を橋間おばぁに手渡すルイスと、それを嬉しそうなのか迷惑そうなのか判然としない表情で受け取る橋間おばぁとの間には、確かに動かし難い「日常」が存在していた。おばぁと家族――養父母、兄妹として育った義兄である夫、物別れした長男、行方不明となった次男、そのほか触れられることはなかった数人の子供たち――の間に確かに存在していたであろう「日常」の上に折り重なったルイスとの「日常」は、時の経過の中で古びれた家具やカレンダーとともに、やがて「家」の中に沈殿していく。

台湾にも西表にも居場所がない橋間おばぁにとって故郷とはどこだろうか、という問いかけを黄氏は撮影中ずっと抱き続けていたという。そして、黄氏がたどり着いた答えは「家」であった。全ての記憶が沈殿し、時が止まったようなこの「家」こそが、橋間おばぁにとっての故郷である、と。御先祖の位牌を並べて毎日拝み、気が向けば散歩がてら墓参りに行く（数十年前、台湾から御先祖代々の遺骨を移したため、そこには皆が眠っている）。養父から受け継いだ翡翠の腕輪を肌身離さず身に纏い、剝がれ落ちそうな息子の写真をおぼつかない手で貼り直して飾り、つけっぱなしにしたテレビから流れ続ける音声を気にも留めず、時には横たわり、時には腰掛けながら、台湾語と沖縄訛りの日本語を織り交ぜながら訥々と話し続ける。黄氏は今ひとつの問いを心の中で投げかけてきた。橋間おばぁには、記憶の牢獄から解放される時が訪れるだろうか？答えは否、であった。膨大な記憶の森を抱き続けたまま、橋間おばぁは永眠した。

「緑の牢獄」とは、『聞書　西表炭坑』（三一書房、1982年）や『沖縄・西表炭坑史』（日本経済評論社、1996年）を著したジャーナリスト・三木健氏の言葉を借用したものである、と黄氏は語った。黄氏の著書『緑の牢獄――沖縄西表炭坑に眠る台湾の記憶』（五月書房新社、2021年）とともに、是非参照されたい。

報告者:崎濱紗奈（EAA特任研究員）
写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

EAA Workshop "From Input to Asset: Human Capital Revisited"

2021年10月14日

On October 14th, 2021, EAA sponsored an online talk entitled "From Input to Asset: Human Capital Revisited", with guest speaker Michel Feher (Zone Books), joining us from France. The presentation was followed by discussion and open Q & A with the audience.

One point of departure for Dr. Feher's inquiry is to deepen our understand of the difference between the neoliberal project (i.e., as Hayek, the Chicago school economists, and the German Ordoliberals outlined it, divergences among them notwithstanding), and the present-day regime of financialized capitalism that neoliberal reforms has generated. Recent scholarship has explored this difference by emphasizing the flexibility, diversity and mutability of neoliberalism, but Feher argues that our contemporary condition appears more clearly when we think of it outside the neoliberal box, so to speak.

More specifically, Feher traces this difference through a genealogy of the notion of human capital. This concept is generally associated with the worldview and program of the Chicago School of Economics, and more specifically with Gary Becker. For the critics of neoliberalism, it also evokes Michel Foucault, for in his famous 1979 lectures entitled *The Birth of Biopolitics*, Foucault draws on Becker's definition of human capital to devise the notion of the entrepreneur of oneself, which he sees as the neoliberal version of *homo oeconomicus*.

While Foucault's insights remain essential to understand the pivotal role that human capital has played both in the neoliberals' theoretical outlook and in their political agenda, two updates are in order. The first one aims to disentangle the initial appearance and usage of human capital from its appropriation and deployment by neoliberal economists. The second one endeavors to show how, once implemented, neoliberal public policies have reconfigured the notion of human capital in ways that their promoters did not foresee. Altogether, the concept of human capital is thus irreducible to a mere template of neoliberal doctrine: while undeniably at the heart of Gary Becker's "economic approach to human behavior", it started off by informing the political agenda that Chicago School economists opposed and is now central to an economic as well as psychic condition that neoliberal reforms have unwittingly engineered.

During the discussion following Dr. Feher's presentation, Dr. Sato Maki noted that a parallel idea of "social common capital" was developed in Japan by Uzawa Hirofumi. Moreover, Becker and Uzawa were colleagues at Chicago in the 1960s, and needless to say the Chicago school embodies the line of thought developed by Milton Friedman, i.e., that market-based mechanisms should be granted far more importance than government intervention. To this, Feher added that Uzawa moved to Chicago in 1964 (the year that Schultz handed the human capital program over to Becker), and it is worth noting further that the young economists who studied under Uzawa at Chicago were Stiglitz and Akerloff, two future New Keynesians who became very influential during the Clinton administration (Stiglitz became Clinton's Chairman of the Council of Economic Advisors).

Report by M. Downing Roberts
(EAA Project Research Fellow)

東京大学GSIキャラバンプロジェクト「主権の諸条件」

第2回 ワークショップ ——キム・ハン（金杭、延世大学）

2021年10月16日

2021年10月16日、東京大学グローバル・スタディーズ・イニシアティヴ（GSI）キャラバンプロジェクト「主権の諸条件」第2回ワークショップがEAA共催のもと開催された。第1回ワークショップのジャック・レズラ氏に続き、今回は韓国よりキム・ハン（金杭）氏（延世大学）をお招きした。キャラバンを率いる國分功一郎氏をはじめ、キャラバンメンバー諸氏（中島隆博氏、石井剛氏、張政遠氏、王欽氏）の多くがキム氏と長年にわたり研究交流を深めてきたという背景から、会は和気藹々とした雰囲気の中進行した。

「立憲的ポピュリズムと軍事クーデター——韓国現代史における人民主権」と題された講演の中で、キム氏は現代韓国の憲法学者であるハン・テヨン（韓泰淵、1916-2010）の思想を出発点として、「人民主権」と「ポピュリズム」の関係性について分析を行った。

キム氏によれば、ハン・テヨンに象徴されるように、1910年代後半生まれの世代は韓国現代史において重要な役割を果たしてきた。学徒出兵、あるいは陸軍士官学校を卒業するなどして日本軍として先の大戦を戦った経験を持つこの世代のエリートは、1945年以降のネイション・ビルディングの中核を担ってきた。ハン・テヨンは1943年早稲田大学を卒業し、1946年以降、ソウル大学や成均館大学の教授を歴任した。パク・チョンヒ（朴正熙）による1961年の軍事クーデター後、国家再建最高会議法案を案出し、また、1972年の維新憲法起草に参加したハン・テヨンは、まさに軍事政権の「桂冠法学者」と言うべき存在であった。

日本留学時代に影響を受けた法学者・黒田覚（1900-1990）の問題意識を引き継いだハン・テヨンは、ハンス・ケルゼンの法実証主義とカール・シュミットの政治主義という対立を乗り越え、いかにして法と政治を総合的に取り入れた主権理論を構想するか、という問いを抱いていた。別言すればそれは、「人民」が主権者として存立するための条件を探究する営みであった。このとき彼の念頭に1930年代の日本における総動員体制の経験があったことは特筆すべきことであろう。

人民を主権者として召喚することへの欲望は、次の二つの大きなうねりを背景として理解する必要がある。すなわち、議会を中心とする制度的民主主義への熱望と、議会への不信・直接民主主義への熱望との対立である。ハン・テヨンの憲法思想は、後者のうねりによって後押しされ、また、このうねりに正統性を与えるべく展開された。制度の形骸化に抗う人民の蜂起という物語の中で、法的フィクションとしての「人民」

國分功一郎氏

キム・ハン氏

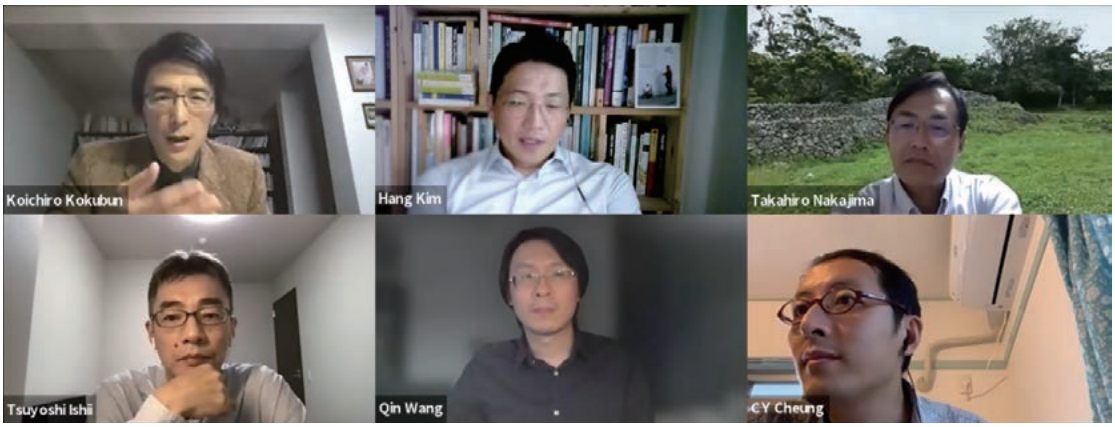
は分割不可能な単一体として想定される。1948 年以降、韓国は幾度も憲法改正を経験してきたが、この改正はこうした「人民」を前面化することによって可能であったのではないか、言い換えれば、韓国の憲政史は「人民」という誘惑の前面化の歴史として捉えうるのではないか、とキム氏は指摘した。ハン・テヨンとはまさに、こうした文脈下においてポピュリズムと憲法に正統性を与えようとした人物であった。

ところが、ここには「人民」をめぐるある種のパラドックスが存在していた。パク・チョンヒによる軍事クーデター直前、イ・スンマン（李承晩）体制に対する蜂起として、学生・市民によるいわゆる「4 月革命」が起こった。この革命下では大統領制＝独裁という認識のもと、その対抗軸として議院内閣制が志向されたが、ハン・テヨンはこれを時期尚早であると考えた。彼の議論によれば、イ・スンマンによる独裁は、大統領制という制度のなせる業ではなく、「国民」が欠如していたがために生じた。同様に、4 月革命による議院内閣制によっても、カール・シュミットが言うような「人民」を十全に顕現させることは不可能である、とハン・テヨンは考えた。

では、「人民」を顕現させるためには何が必要か。ハン・テヨンは次のように論じた。「人民」が未だ顕現されないのは、かれらが未だ動物的生命の維持のために生きているからである。裏を返せば、物質的基盤を整えること＝「オイコノミア（家政）」を充実させることこそが「人民」が顕現するための条件である。つまり、キム氏の指摘によれば、ハン・テヨンにおいては、統治機構が人民主権によって正当化されるのではなく、人民主権が統治機構と経済発展の中で初めて遂行的に自らを確認できる、というロジックになっているのだ。ここでは、主権をめぐる議論、あるいは憲法をめぐる法的議論が宙吊りにされ「オイコノミア」が全面化しているのだが、キム氏は、ハン・テヨンの議論においては、まさにこの宙吊りの中でのみ「人民」主権が可能になる、と分析した。つまり、人々を動物的生命から「人民」へと引き上げるために「人民」と指導者の絶対的一致が必要であるというロジックのもと、「人民」を国家によって食わしてもらう「巨大な家畜」として思念するというパラドックスが生じるのである。

ここから、次のような命題が導出される。ハン・テヨンが創出した論理において、「人民」主権とは、「政治」ではなく「オイコノミア」の相関物である。これは、ポピュリズムをめぐる問題の根幹に関わる命題である。すなわち、ポピュリズムとは、単に軍事独裁や全体主義との相関において思考されるべき現象ではなく、「オイコノミア」の全面化として把握されるべきものである。換言すればそれは、民主主義の病理ではなく、常に潜在する民主主義の一極であるのだ。

「人民」あるいは「人民主権」を「オイコノミア」から切り離すことができないのだとしたら、いかにすればよいのか。キム氏は「主権なき民主主義はどのように構想可能か？」という問いを実験的に提示した。この問いかけに対し全体ディスカッションでは、様々な応答がなされた。たとえば中島隆博氏（EAA 院長）は、ハン・テヨンにおける「国民」概念と「人民」概念の相違を丁寧に抉出した上で、彼がどのようなタ



GSI キャラバンプロジェクト「主権の諸条件」のメンバー

イプの「人民」を求め、逆に、どのようなタイプの「人民」を避けようとしていたのかを探る必要があるのではないか、と指摘した。また中島氏は、「主権」を従来の分割不可能なものとしてではなく、分割・分有（パルタージュ）可能なものとして構想する可能性について示唆した。

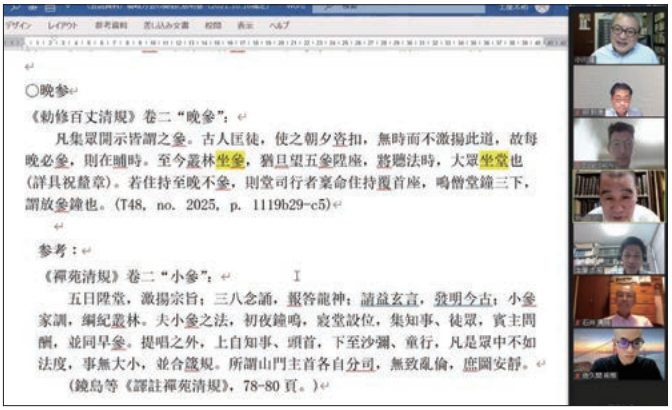
1930 年代の日本社会の情勢、そして軍事クーデター後の韓国社会と、現代の我々が生きる世界との間に、どれほどの距離があると言えるだろうか。時を経て投げかけられた現在的問いを思考することの重要性が確認されたひとときであった。

報告者:崎濱紗奈（EAA特任研究員）

第5回 東アジア仏典講読会

2021年10月16日

2021 年 10 月 16 日（土）日本時間 14 時より、第 5 回東アジア仏典講読会を開催した。この読書会は、禅を中心に仏教の研究を行っている日本・中国・韓国・フランスなど各国の研究者が集い、文献の会読や研究発表・討論を行うものである。今回は（1）「晩参」に関する資料の会読、（2）道元の著作に関する議論、（3）永明延寿の「官銭放生」に関する資料の会読が行われた。


○晩參

《勅修百丈清規》卷二“晚參”：

凡集眾開示皆謂之參。古人匡徒，使之朝夕咨扣，無時而不激揚此道，故每晚必參，則在晡時。至今叢林坐參，猶且望五參陞座，普聽法時，大眾坐堂也（詳具祝釐章）。若住持至晚不參，則堂司行者稟命住持覆首座，鳴僧堂鐘三下，謂放參鐘也。(T48, no. 2025, p. 1119b29-c5)

參考：

《禪苑清規》卷二“小參”：

五日陞堂，激揚宗旨；三八念誦，報答龍神；請益玄言，發明今古；小參家訓，編紀叢林。夫小參之法，初夜鐘鳴，衆堂設位，集知事、徒眾，賓主問酬，並同早參。提唱之外，上自知事、頭首，下至沙彌、童行，凡是眾中不如法度，事無大小，並合箴規。所謂山門主首各自分司，無致亂倫，庶圖安靜。

（鏡島等《譯註禪苑清規》，78-80 頁。）

（1）「晩参」に関する資料の会読は、土屋太祐氏（新潟大学）により行われた。

「晩参」とは晩間に参禅することを指し、その起源について南宋の嘉泰 4（1204）年に編纂された『嘉泰普灯録』には概ね以下のように記されている。すなわち、慈明楚円（986-1039）が寺を抜け出てその妻「慈明婆」のもとを訪れようとすると、弟子の楊岐方会（992-1049）はどんなに遅くても説法の合図である太鼓を鳴らして修行僧を集め、それを阻んだ。それに怒った慈明楚円が「この若僧め、暮れに説法を行なうなど、そんな規則がどこにあるか」と言うと、楊岐方会は「これは（あなたの師である）汾陽善昭（946-1024）が行なっていた「晩参」です。どうして規則でないなどと仰るのですか」と言ってやり込めた。これが禅林で、「三八念誦」（三と八がつく日に行われる儀礼）後にも参禅するようになった由来なのだという。この話は古くは北宋の 1124 年に編まれた『禅林僧宝伝』に見え、遅くともこの時点で「三八念誦」後の「晩参」が定着していたこと、それが当時、慈明楚円と楊岐方会の故事に由来すると理解されていたことがわかる。

しかしながら、『禅林僧宝伝』は慈明楚円が没して 80 年以上後に編まれた書籍であり、北宋期における「晩参」の実態については検討の余地がある。そこで現存するなかで最古の完備した清規（禅林の規則）となる『禅苑清規』（1103 年）と、ほぼ同時期に成立した禅の事典『祖庭事苑』（1108 年）、および元代の『勅修百丈清規』（1338 年）の記述をもとに、「晩参」に対する分析が為された。これにより、北宋の中頃は未だ「晩参」が確立しておらず、それぞれ五日ごとに行われる「公界上堂」と「三八念誦」が定期の行事となっており、それに加え不定期に為される夜の説法が「小参」と呼ばれていたらしいこと、元来は不定期になされていた「三八念誦」後の「小参」が宋代末には定例化され、「晩参」と称されるようになっていたらしいこと、さらに元代になると「小参」と「晩参」を分けていることなどが指摘された。その後、訓読や読解に関する問題、および今日の禅林で行なわれている「晩参」等の行事との異同などが議論された。

（2）道元の著作に関する議論は、何燕生氏（郡山女子大学）を中心に為された。

何氏は道元の著作『正法眼蔵』の中国語訳を 2003 年に出版しており、その時の経験、また何氏および本講読会のメンバーが複数名参加した東洋大学のシンポジウム「三者鼎談：『正法眼蔵』の表現・翻訳・思想をめぐって」（2021 年 9 月 18 日開催）を踏まえ、『正法眼蔵』の研究状況や各国語に訳されている翻訳の問題、『正法眼蔵』の中国語訳の反響、『正法眼蔵』の重層性などをめぐり議論がなされた。とくに『正法眼蔵』の重層性については、道元が和文で『正法眼蔵』を著すにあたって、その念頭に漢文の原文があった場合、原文ではなく訓読文があった場合、漢文ではなく最初から和文で考えていた場合があり、それにより文体が異なっていることが指摘さ

れた。それに加え、道元が訓読文や和文をもとに語った和文には、そのままでは漢文に復元しにくい場所が多々あり、そこに和文による道元独自の思索が読み取りうることも議論のなかで言及された。

(3) 最後に柳幹康（東京大学）により、永明延寿の「官銭放生」に関する資料の会読が行われた。「官銭放生」は、出家前の延寿が官銭（公金）を流用して放生（捉えられた生き物を買って解き放ち、命を救う善行）を行ったという故事である。これは中国仏教圏では非常に有名な話であり、今日でもマンガやアニメなどで取り上げられ、人口に膾炙している。しかしながら、延寿を直接知る2人の人物がそれぞれ編んだ2種の伝記にはこの話は見えず、延寿が没して100年以上を経た後に文献に初めて現われ、明代になると浄土思想に関する脚色が加えられ、さらに明末清初に編まれた演劇の脚本『帰元鏡』になると大幅に増広された。各時代の資料の会読により、その流れを追うとともに、明代に浄土的な脚色が加わった背景には、時の高僧の雲棲袾宏が放生を重視するとともに延寿を尊んだこと、および放生を含む各種善行の実践が王朝により励行されていたことがあると指摘した。なお『帰元鏡』については時間の制約上、会読を次回に行う予定である。

今回の講読会では、宋から元代にいたる「晩参」の変化、道元の『正法眼蔵』の翻訳や言葉をめぐる問題、延寿の説話が各時代の思潮を反映する形で増広されていく過程など話が多岐に及び、議論も活発になされた。また特定の議題を共有しつつ、多数の研究者が禅宗史・仏教学・文学などそれぞれの専門領域から発言し議論することで、相互に理解を深めることができ、実りの多い研究会になったものと考える。

報告者:柳幹康（東洋文化研究所）

第27回 石牟礼道子を読む会

新作能「沖宮」DVD上映会&志村昌司氏講演「新作能「沖宮」再演をめぐって」

2021年10月19日

急に冷え込んだ秋寒の10月19日（火）、京都からアトリエシムラの志村昌司氏を駒場にお迎えし、101号館11号室にて、今年6月12日に京都の金剛能楽堂で再演された石牟礼道子原作「沖宮」のDVD上映会と志村氏による「「沖宮」再演をめぐって」と題した講演をいただく機会に恵まれた。

EAAの石牟礼道子を読む会では、昨年6月以来、『苦海浄土』三部作を隔週で読み続けるなかで、同書の文庫版あとがきに「白状すればこの作品は、誰よりも自分自身に語り聞かせる、浄瑠璃のごときもの、である」とあったような浄瑠璃との具体的な関係をはじめ、石牟礼と古典芸能というテーマを深く掘り下げたい、という思いが強まり、4月以降、新作能「不知火」DVD鑑賞会や、兵藤裕己氏をお迎えしての琵琶法師の記録映像鑑賞会を開いてきた。そうしたなか、石牟礼が亡くなったあと、2018年に初演された新作能「沖宮」が今年6月に再演されたことを契機に、志村氏にこちらの活動をお伝えする連絡を取ったところ、交流がはじまり、今回の集まりが実現した。8月には事前勉強会と初演時の「沖宮」DVD鑑賞会

2021 年 6 月 12 日（土）上映の『沖宮』DVD 鑑賞

志村昌司氏

を開き、天草の乱で親を失い孤児となったあやが雨乞いのために龍神への捧げ物に選ばれ、兄である天草四郎に導かれて「沖宮」へと帰ってゆく大筋が、原作とどのように異なり、さらには、恐ろしい風貌の龍神にあやが連れ去られる印象を強く残す初演と、新しく龍神の代わりに大妣君が導入された再演について、比較をしつつ意見交換を重ねてきた（第 23 回石牟礼道子を読む会〔2021 年 8 月 10 日〕、第 25 回石牟礼道子を読む会〔2021 年 9 月 14 日〕）。

当日は、会の主催者であり、一連の古典シリーズの立役者である宇野瑞木氏（EAA 特任助教）、エコクリティズムの観点から石牟礼研究を進める山田悠介氏（大東文化大学）、ハイデガー研究の宮田晃碩氏（EAA リサーチ・アシスタント）、報告者の高山花子（EAA 特任助教）に加え、青山学院大学の結城正美氏の研究室に留学中で、石牟礼と瀬戸内寂聴についての博士論文を準備中のサラ・ニューサム氏（カリフォルニア大学アーバイン校）を新しくメンバーに迎え、少人数ではあるが、あたたかい雰囲気のなか、会は執り行われた。

DVD 鑑賞後の志村氏の講演は、1. 近代の危機――東日本大震災と福島原発事故をきっかけに、2.「沖宮」の色、3. 沖宮とは何か、の三つのパートに分けて展開された。まず、志村氏は、2011 年 3 月から 2013 年 5 月までの、染織家の志村ふくみ氏と石牟礼道子氏の往復書簡があったことを紹介し、両者の間で「近代の危機」、生命の危機が共有され、それが呪術的な要素を含み持つ新作能に結実した経緯を整理した。会のはじまりでも志村氏は「沖宮」が「未完」であることを強調していたが、原作の分量を大幅に削減し、五七調中心の古典的な能の詞章に移し変えるプロセスには、水俣弁を残せなかったり、初演の前に石牟礼が亡くなったり、龍神の演出についてだったり、困難が少なくなかったことが伺われた。志村氏が、石牟礼にとっての近代とは言葉が誕生した時点であって、近代以前が言葉以前なのだと繰り返されていたことが印象に残った。

続いて志村氏がお話されたのは、古来、祈りと染めが結びついており、草木の霊＝木霊が、和霊（にぎたま）とされていた古代的心性である。そして、「沖宮」において、石牟礼自身とも重ねられるあやの衣装に反映された緋色の衣、「紅扇」が、枝や樹皮ではなく、紅花の花そのものから染め上げられる点で、花を大切にしていた石牟礼にとっては重要な色であることを指摘された。四郎の水衣「水瑠璃」、初演時の龍神の狩衣「龍神」、そして再演時の大妣君の衣装それぞれにこめられた意図と使用された染料についての解説は、色が「魂の色」であることが実践によって裏打ちされていることを示すものだった。

最後に志村氏は、「沖宮」があやの故郷として想定されていることを、大妣君が折口信夫のいうところの「異郷の神」である点や、関連する豊玉姫物語や、母権思想を示しつつ、母性の海である不知火海が人類によって破壊されたことと、地母神信仰の頃の神獣としての竜が関連していると指摘された。そして、「沖宮」への道行は、存在＝生命の復活の物語であるとまとめられた。

質疑応答では、後期ハイデガーの詩論と故郷の主

題との重なりやデラシネの問題、機織りの原初的な魅力、祈りの儀式としての能の原型、「沖宮」原作には書かれていたオルガンを挿入した舞台の上演可能性、さらには、キリスト教におけるマリア信仰との関連にまで話が広がり、受難の不条理を現代でどのように考えるのか、生命至上主義を客観的に批判する視座の必要性を含めて、いま、近代をどのように克服できるかが、深刻になっている現実が浮かび上がる議論の時間だった。何度も繰り返し、言葉が道具ではない、ということと同時に、詩の力が色の力とリンクする形で確認されたが、文字以前の世界、あるいは言語の呪術的な作用が、それでもなお、文学と呼ばれうる領域、きわめてテクストに近接する領域で、実行されその技芸が更新され続けている点を、「文学」の定義そのものからラディカルに問い返す時間になったのではないか、と思う。

個人的には、能の上演という形で、ある種の現代のタブーへの切り込みがいまにおいても実現される可能性と、それがどのように観劇後に展開し、個々人の人生に影響を与えうるのか、いまも考えている。そのときに鍵となるのは、近代批判をしている当人がすでに近代精神を持っているのだとしても、舞台においては、近代と近代以前の揺らぎ、境界への分け入りが、何らかの形で可能となる点なのではないか、と思う。昨今、各方面で高まっている呪術的なものや霊性というテーマを、宗教と共に考えるにあたって、芸能の次元は切っても切り離せない、という感覚をえた。また、志村氏からは、「世界宗教」という言葉も出てきたが、その際に、自然や地球環境を考えることは、一つの共通認識を持つ契機となり、その観点からすると、エコクリティシズム＝環境文学・批評と石牟礼道子の親和性は、大きな地平へと開かれていると予感した。

当日は、アトリエシムラ東京の佐々木みちる氏も挨拶のために足を運んでくださり、正門をくぐり抜けて、101 号館までご案内するあいだ、1 号館正面に大きく育ったシラカシを見つけると、すぐさま、シラカシでどのように草木染めができるのか、楽しそうに志村氏と佐々木氏がお話くださったことが心に残っている。振り返ると、それは、手仕事と分かち難く結びついた思想が、風景をどのように見るのか、人間の視点そのものを変えてゆく力を持っているのだと、如実に示していたように思われる。そして、これまで、海の漁師たちの視点から水俣と福島について議論する時間があったが、草木染めを生業とする人たちにとって大地が汚染されることの重みについても、海とひとしく、考えなければならない、と痛感した。

志村氏の講演を通して、記号ではない「色」、自然に実在する事物と一致する「色」をめぐる志村ふくみ氏の思想が石牟礼道子による近代精神批判と共鳴している点が浮き彫りになったが、それでは、6 月の再演の際の挨拶で、志村氏が心の原風景そのものとして述べた機織られた布そのものは、果たして、どのようなイメージなのか。母性的なもののイメージや、龍神信仰をめぐって、新作能そのものについて、議論し足りなかったテーマは枚挙に遑がない。遠くないうちに、再び意見交換をすることができるようにと、心から祈っている。

報告者:髙山花子（EAA特任助教）
写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

The 7th EAIHN Online Seminar

2021年10月21日

On 21th October 2021, the East Asian Intellectual History Network (EAIHN), through the auspices of the EAA (East Asian Academy) at the University of Tokyo, hosted a talk by Sora Sato (Toyo University, Tokyo) entitled "Edmund Burke's Political Economy: A Historiographical Review" After opening remarks by the chair, Shinji Nohara (University of Tokyo), Dr. Sato introduced his paper, discussing its main points. His talk was followed by two discussants' comments and questions, Sato's response to them, and a lively discussion among the conference participants. The abstract of the paper is as follows:

Edmund Burke has been regarded as a major thinker of eighteenth century Britain, and his political thought has been studied intensively during the last several decades. Although his idea of political economy was, perhaps, a relatively minor part of his thought, it has been commented by historians and economists since the nineteenth century. Burke has long been regarded as a laissez-faire economist, but the recent scholarship succeeded in complicating the picture by pointing to various aspects of his economic thought. For instance, although preferring a 'freer' trade to an unreasonable restriction on trade, he at times prioritized political interests, instead of economic ones. In 1982, J.G.A Pocock persuasively showed that Burke had employed a language of political economy in his attack on the French Revolution (Pocock 1982). In 1995, Francis Canavan pointed to the significance of the concept of property in Burke's political economy (Canavan 1995). Most recently, Gregory M. Collins, indebted to Pocock, emphasised the role of morality in it (Collins 2020). However, there still seems to be some room to be explored. While Burke's preference for free trade has often associated with Adam Smith's political economy, its Irish origins have tended to be neglected by commentators. Although Burke's connection to natural law tradition has often been pointed out, his reception of it has barely been detailed in relation to his political economy. Above all, Burke's theory of money has been overlooked by the modern scholarship with a few exceptional cases. Like many of his contemporaries, Burke held that only money acquired through market transactions could not be 'neutral'. Industry is the very source of wealth, and export increases when it vigorously works in society. If money supply increases through the increase of exportation, it will contribute to developing economy by stimulating both production and consump-

Sora Sato （Toyo University)

tion. On the contrary, if money increases by the other means, it barely stimulates economic activities. Burke held to such a theory of money from the early phase of his career to the 1790s, when he effectively applied it to his critique of the French revolutionaries.

Report by Sora Sato (Toyo University)

文庫化記念公開シンポジウム

『近代世界の公共宗教』再読

2021年11月1日

2021 年 11 月 1 日、「『近代世界の公共宗教』再読」がオンラインで開催された。宗教学者のホセ・カサノヴァは、1994 年に原著が刊行された『近代世界の公共宗教』で、戦後西洋の宗教社会学を席巻した世俗化論を問い直し、近代世界には「脱私事化」した「公共宗教」が存在することを記述的に示しただけでなく、この「公共宗教」が近現代に占めるべき場所を規範的に論じた。今や古典と呼びうる同書の邦訳は、1997 年に玉川大学出版部から刊行されたが、その後絶版となり入手困難な状況が続いていた。本イベントは、同書が 2021 年 9 月に筑摩書房の「ちくま学芸文庫」に収められたことを記念して企画されたものである。

本イベントは、伊達聖伸氏（東京大学）を代表とする科研「西洋社会における世俗の変容と「宗教的なもの」の再構成――学際的比較研究」の主催であり、同科研から渡邊千秋氏（青山学院大学）、佐藤清子氏（成城大学非常勤講師）、伊達氏が報告者を務め、それぞれスペイン研究、アメリカ研究、ケベック研究の観点から『近代世界の公共宗教』の再読を試みた。さらに特別ゲストとして、同書の翻訳者である津城寛文氏（筑波大学）を招き、翻訳者の観点から『近代世界の公共宗教』を論じていただいた。以下は司会を務めた筆者によるイベントの開催報告である。

最初の登壇者である渡邊氏は、「スペイン現代史研究からみる公共宗教論」と題した報告を行った。渡邊氏は、日本とスペインにおける『近代世界の公共宗教』の受容を紹介した後、現代スペインではカトリック教会が今日でも特別な地位にあることを指摘した。法制面では、1978 年憲法がカトリック教会に他宗教とは異なる特権的な地位を認めている。たしかに近年では、公共空間のカトリック色を薄めようとする動きもあるが、コロナ禍では社会的役割への期待からか、所得税から教会に寄付される額が増えているという。カサノヴァは現代のスペイン・カトリック教会が政教分離を受け入れたことを強調しているが、カトリック教会は実際のところ、法制的にも社会的にも特別な存在であり続けているのである。

渡邊氏はまた、カトリック教会と地域主義の関係の複雑さを強調した。『近代世界の公共宗教』には、カトリック教会は常にバスクやカタルーニャの地域主義を支援してきたとする記述がある。だが渡邊氏によれば、事態はより複雑である。たとえばバスクでは、たしかに独裁期に独立運動を支援して「バスク祖国と自由」（ETA）の闘士を匿った教会もあるが、打倒独裁の大義が失われた後には、ETA の暴力行為が強く非難されてきた現実がある。現在では、教会による独立運動支援の是非に関しては現地の聖職者も大きな葛藤を抱えているという。教会と地域主義の関係を正確に理解するには、スペイン・カトリック教会を一枚岩に捉えてモデル化するのではなく、具体的な地域史に寄り添う必要があるというのが渡邊氏の見解である。

次に登壇したのは佐藤氏である。その報告「21 世紀アメリカ宗教と「デノミネーショナリズム」」は、『近代世界の公共宗教』刊行後のアメリカの宗教状況を踏まえ、カサノヴァの議論の先見性と規範性を指摘した。先見性とはどういうことか。カサノヴァは『近代

世界の公共宗教』 以降、 西洋社会における 「世俗」 と 「宗教」 の領域分化と宗教的多元化がもたらす 「デノミネーショナリズム」 の拡大を指摘してきた。 佐藤氏によれば、 近年のアメリカでは 「無宗教」 を自称する人が増え注目を集めているが、 これもカサノヴァの言う 「デノミネーショナリズム」 の拡大の帰結として理解できる。 「事実」 としての宗教的多元化を強調するカサノヴァの議論は、 現在もなおアメリカの宗教状況を分析する上で有効なのである。

だが同時に、 カサノヴァの 「デノミネーショナリズム」 論には規範性もある。 佐藤氏によれば、 カサノヴァは宗教的多元主義が望ましい 「規範」 であり、 多様な思想の共存を可能にすると考えている。 しかし、 近年のアメリカの宗教状況はこの期待を裏切りつつある。 佐藤氏が強調したのは、 近頃のアメリカでは 「宗教の自由」 が公共空間の分裂をもたらしていることである。 宗教的多元主義の理念に則って誕生した 「宗教の自由」 だが、 近頃ではワクチン接種や妊娠中絶の是非に関して、 法的縛りを回避するための抜け穴として期待され、 社会の分断を広げているようにみえるという。 多元的な公共空間は必ずしも調和に導かれるわけではない。 現実の公共空間には常に亀裂が走っているのである。

3 番目に登壇した伊達氏は、 「ケベックの 「静かな革命」 はカサノヴァの公共宗教論で読み解けるか」 と題した報告を行った。 伊達氏の報告の特徴は、『近代世界の公共宗教』 から認識論的視座を析出し、 そこからケベックの事例の独自性を分析したところにある。 伊達氏はまず、 カサノヴァが『近代世界の公共宗教』 の時点で、 「世俗」 と 「宗教」 の二元論的認識に批判的な視座を有していたことに注意を促した。 この視座は、 いわゆる宗教概念論に通じるだけでなく、 宗教は衰退しているのか復興しているのかという議論を超えて、 当該社会において 「世俗」 と 「宗教」 はどのように錯綜しているのか、 ケベックを含む西洋社会には 「宗教的世俗」 と呼びうるものがあるのではないか、 という問いを可能にするという。

ケベックは 20 世紀後半、 「静かな革命」 という社会変化を経験した。 伊達氏によれば、 その特徴は 「世俗化」 が 「言語」 と 「宗教」 の関係を変化させた点にある。 かつてのケベックでは、 プロテスタントが多数派の北米において、 カトリックとフランス語が 「フランス系カナダ人」 のアイデンティティを支え、 「信仰の守り手としての言語」 と言われたように、 カトリックが大きな比重を占めていた。 だが、 静かな革命の世俗化を経たケベックでは、 所属率は維持したまま実践率が低下するカトリックの 「文化化」 が生じ、 「ケベック人」 のアイデンティティにとっては、 フランス語がカトリックよりも重要性を帯びることになった。 伊達氏によれば、 ここには 「宗教」 から 「言語」 への宗教性の転移を見出すことができる。

3 人の報告の後に登壇したのは津城氏である。 津城氏は『近代世界の公共宗教』 を翻訳していた当初から、 公共宗教にグローバルな市民社会における人道的な役割を期待し、 弱い立場に置かれた者に寄り添うカトリック教会を評価するカサノヴァに共感を覚えていたという。 だが同時に、 違和感や疑問もある。 たとえば、 カサノヴァは対話による共通善の創出に資するという公共宗教の役割を強調しながらも、 「聖なるもの」 を求める宗教の動きにはほとんど触れていない。 また『近代世界の公共宗教』 では、 公共宗教の射程がカトリック教会などの制度宗教に限られており、 民族宗教やスピリチュアリズムは度外視されている。 津城氏によると、 公共宗教論にはこれらの非制度的な宗教を加味することも求められるという。

津城氏はさらに、 自らの近年の関心と関連させて、 現代の公共空間が抱える二つの問題点を指摘した。 一つは、 公共空間の理性的な討議倫理には、 感情的な議論や少数者は十分に参加できないことである。 これは、 アーノルド・ミンデルが深層民主主義論で提起している問題にも関わるという。もう一つの問題は、 言語が公共空間を築く上での壁になっていることである。 実際、 ある公共空間の公用語の非ネイティヴは、 その空間にアクセスする上で必要以上の負荷が求められることになる。 この問題に関して津城氏が期待を示したのは、 自動翻訳技術の発展である。 たとえば、 情報通信研究機構の先進的音声翻訳開発推進センターでは現在、 学術用語の翻訳までも視野に入れた同時通訳の開発が進められているという。

本イベントを通して明らかになったのは、 原書刊行

から約 30 年を経た現在、カサノヴァの『近代世界の公共宗教』という古典は、私たちに答えを示すというより、むしろ新たな謎を投げかけていることである。公共宗教の存在感が増すなかで、世俗と宗教の関係はどのように変化しているのか。制度化を逃れる民間信仰やスピリチュアリティは公共空間においてどのような位置を占めるのか。多様な仕方で宗教が進出するなか、公共空間自体はどのように変容しているのか。宗教が分断や暴力を生む事例を眼前に、公共宗教による調和的な公共空間の維持を期待し続けることはできるのか。こうしたアクチュアルな問いを思考しようとすれば、私たちは必ず『近代世界の公共宗教』再読に導かれることになるのである。

報告者:田中浩喜(東京大学大学院博士課程)

産学連携を超えて

ダイキンアレス青谷訪問の記

2021年11月2日

EAA は、ダイキン工業株式会社と東京大学の産学協創協定のもとで運営されています。それは第一義としては、EAA の研究と教育のために資金をご寄付いただいていることを意味しています。そのご厚情に応えるべく、わたしたちも絶え間ない努力と工夫を重ねつつ今日に至っています。しかし、ご寄付を頂戴していることの意義は本来もっと広く、もっと大きな価値があるにちがいないともわたしたちは思っています。わたしたちは、単に「産業界の寄附によって支えられている学術文化活動」を展開するだけではなく、EAA とダイキンの双方が具体的に関わりながら、その関わりにおいて、これまでにない新しい学問のかたちを示していくことを目指したいと念願しています。それはつまり、学問の価値を更なる高みに至らせることです。

一般的に、産学連携と言えば企業の開発プロジェクトに大学がコミットし、双方の強みを活かしながら新たな技術を開発し、ひいてはそれを商品化していく(つまり、市場価値を創出する)ことに寄与することを示しているでしょう。そのような了解のもとでは、いわゆる「文系学問」は、市場価値の創出に関わる機会を持ちにくいので、産学連携には結びつかないもののように思われています。そして、往々にして企業や篤志家が文化振興のためにその熱意に基づいて資金を提供することが文系の学問研究に対する産業界のほぼ唯一の関わり方になっていると思います。しかし、EAA がダイキンという日本を代表するグローバル企業のバックアップを得ている以上、そのようなレベルには止まらない、新しい産学連携・社会連携のあり方を

(左) サルスベリの巨木。千葉県から移植されたものだそうです
(右) 居室のベランダから眺める日本海

世に先駆けて提示しなければなりません。端的に言うとそれは、未来のあるべき世界のすがたを構想するために必要とされる学問知を具体的に制度化されたシステムとして提示していくことです。言い換えれば、世界に対する責任という次元において価値を創造し、それを世の人々に見てもらうことです。

学問はただ社会の現実から離れて存在しているのではなく、根柢において社会を基礎づけています。学問とは、来るべき社会のすがたを知的に想像しながら公共に向けて示していくことを運命づけられた人間の営みであると言うべきで、その意味で学問は社会に対して無限に開かれています。学問が社会を構成する現実の複雑な力学から適切な距離を保たなければならないのはそのためなのです。したがって、学問が社会とのバランスを保つためには、市場原理から隔絶するだけでは不十分であり、むしろ、市場原理を学問の推進力へと転換していくことすらもまた必要になるでしょう。産業側からすれば、学問に投資することによって、市場のゲーム規則を支配し、左右している人類の価値観の問い直しにコミットすること、すなわち未知の領域を価値化することが可能となるでしょう。企業は学問に関与することで持続的に利益を獲得しながら、同時に、市場の外側、または市場をメタレベルで支えている普遍的な世界観をリードすることに寄与する社会アクターとなります。大学と産業が共に世界に対する責任を果たし、人類の幸せに貢献していくためには、こうした協力関係が不可欠なはずです。EAA はそのための試金石となるような実践を積み上げていきたいと考えています。

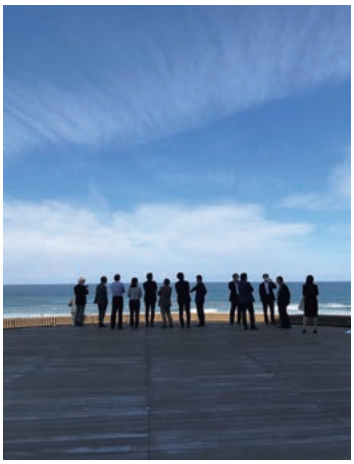
わたしの場合、このような大きなビジョンを有するに至ったのは、何と言ってもダイキンという貴重なパートナーを得たからだと言って、些かも誇張はありません。2018 年 9 月に北京大学との「東アジア学」をめぐるジョイント・プログラムの構想を具体化するために、ダイキンの方々と北京大学を訪れて以来の 3 年、多くの社員の方々と現場で楽しく関わり、その中で学びながら考えてきたことだからです。そうしたご縁もあって、今回は、鳥取の日本海に臨むダイキンの研修施設、アレス青谷を訪れる機会を得ることができました。そのようすをここではご紹介したいと思います。

「DOJO」はダイキンではもはや日本語ではなく世界共通語のようです

長かった夏が去り、秋の深まりを漸く感じられるようになった 10 月 30 日と 31 日にその機会はめぐってきました。鳥取空港から「因幡の白兎」の神話で知られる白兎海岸を西に向かって通り過ぎた先に、その施設はあります。見たこともないほど巨大なサルスベリが中央に鎮座するロータリーで車を降り、建物に入ってまず驚かされたのは、この施設の美しさでした。海側に面した部屋は大きな窓を大胆に使って、日本海を一望でき、すばらしく開放的です。

世界各地に合計 8 万人の社員を擁し、しかもその 8 割が日本以外の場所で働いているというグローバル企業の研修施設として、世界中から優秀な社員やビジネスパートナーを迎えるために贅を尽くすというのはある意味自然なことです。しかし、ここは何よりも研修施設であり、ダイキン工業という企業が育んできた文化を体験的に学ぶ場として設けられています。したがって、施設自体が、その企業文化の粋を集めている点にこそ注目しなければなりません。

そうした視点で見ると、まず気づかされるのが、その空間デザインの妙です。シングルルーム、ツインルームや、複数人が生活をともにできるメゾネットなど多様なタイプの居室が集まる宿泊棟には、随所に、それぞれ個性的な意匠を凝らしたコモンスペースが散りばめられており、深夜でも集まって思い思いの談話や議論にふけることができるようになっています。また、フロア相互の連結が敢えて複雑にくみ上げられており、慣れるまでは目的地に行くまでに建物の中で迷子になる



ことがほぼ避けられません。階段やエレベーターは建物内の導線を効率よくアレンジすることでその数を極少に抑えることが合理的なのだと思いますが、この施設内では、それらの位置がまずわかりにくく、それでいて設置数は決して少なくありません。意外なところにエレベーターがあり、しかもそれがどこに通じているかがわかりにくいのです。いったいなぜこのように複雑な設計なのか首をかしげたくもなります。しかし、考えてみると、人々の豊かな暮らしが長く息づいている都市の生活空間は入り組んだ路地によって構成され、そのことによって親密感と安心感、にぎやかさと閑寂さ、秩序とカオスが同居しています。そのような都市空間のある種猥雑な空間特性を擬似的に生み出すことによって、効率と合理性に頼らないクリエイティヴな空気を醸成していると言うことができるのかもしれません。

施設内には大小さまざまな研修スペースが設けられています。大海原に向かって開けた大研修室、4言語によるコミュニケーションが可能な同時通訳ブースを伴った会議室、さらには用途や気分にあわせて選べる、異なるデザインを施された複数の小会議室（中にはあぐらをかいたり寝そべったりもできる和室仕様の会議室もあります）、さらには、世界から選りすぐった技術者に高度な技能を学ばせるための各種技能実習室が備えられています。ここで学ぶ人たちは、技術の熟練度を向上させるのみならず、作業の安全性などを体験的に学ぶことによって、各地に帰って現地工場の技術・安全レベルを向上させるべくすぐれたインストラクター（マイスター）になることが期待されています。

こうした研修スペースは、会議室が「討議室」、技能実習室が「道場」と呼ばれており、このことにも興味をそそられます。2019年に訪れた上海や蘇州の工場でも技能訓練室が「道場」と呼ばれていましたが、ここでは、英語で「Dojo」と名づけられていることを知り、再び驚きました。ものづくりが単なる技術――したがって機械によっていずれ代用可能な身体運動――ではなく、スキル（熟練）という、きわめて人間的な営みであることをこの呼称は確認させてくれます。ダイキンには社内に「ワイガヤステージ」が設けられるなど、部署の違いや上下関係を超えた自由闊達な議論が自然に発生するよう工夫されていますが、そうした発想の自由さを尊ぶ風通しの良さがものづくり技術に対する職人的こだわりと組み合わさることで独自の企業文化が育まれているというのは、実におもしろいと思われます。

阿部謹也によると、中世の神学者サン＝ヴィクトルのフーゴーは、哲学教育の到達点を陶工としての技術の習得に求めたそうです（『「教養」とは何か』）。自由な創造の技芸（リベラルアーツ）としての教養は、手ずからものを作ることと一体になることで完成するというのが、フーゴーの学問論から阿部が得た結論でした。そのような理念にどこか通じるものを感じます。

上下関係を超えた自由なアイデアの共有という思想は、かたちだけの空論ではなく、実際に社内のプロジェクトにおいても活かされているそうです。この研修施設に関しては、居室のデザインにそれが現れています。すべての居室内部の配置が異なっているのだそうですが、それは、社員一人が一部屋の責任者としてデザインを担当したからだということでした。同時に、宿泊に訪れる人が毎回ちがった体験を得られるようにという意図も込められているのだそうです。

その他、24時間同僚たちと議論したり、身体を動かしたり、またはリラックスできる仕掛けが敷地内のあちこちに設けられていますが、一晩泊まっただけではそれらのすべてを体験し尽くすことはできませんので、それらについてはまた別の機会に訪れたときに取っておきたいと思います。

総じて、空調メーカーとは単に室内空気の温度や湿度を調節するための技術を製品化して販売するだ

けの存在なのではなく、結局のところは、空間の創造者なのではないだろうかと強く思った体験訪問でした。「空気の価値化」がダイキンと東京大学の取り組むべき未来ビジョンの共通テーマになっていますが、空間のデザインとマネジメントこそが空調が本来もつ役割であるとするならば、このテーマが具体的に含意するところも自ずと明らかになってきそうです。かつてわたしは、連続コラム「話す／離す／花す」の中で「変化を可能にするスペース」として大学を定義しようとしましたが、その発想は意外にも空調メーカーのこうした特徴と相通じているにちがいないという確信めいた感想をいまは抱いています。それをこれからの数年でいかに具現化していくのかが、わたしたちEAAには問われています。

今回の訪問機会を得て、EAAとして進むべき道がまた一歩明確になったと思います。ダイキンの皆さまからのご期待に報いるためにやるべきこと、やりたいことがさらに増えました。皆さまとまだまだ尽きせぬ交流の場を共にし、ともに未来を創っていくことを心から願ってやみません。

報告者:石井剛（EAA副院長）

EAAシンポジウム

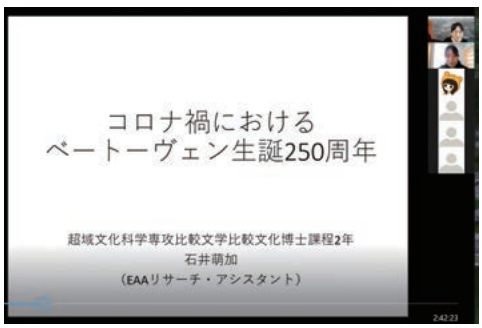
コロナ禍における藝術の理論と実践

2021年11月4日

2021 年 11 月 4 日（木）15：00 より、EAA シンポジウム「コロナ禍における藝術の理論と実践」（オンライン）が開催された。司会は田中有紀（東洋文化研究所）が担当した。

本シンポジウムは、主に音楽・美術・映画を研究するメンバーが、自身の研究に関連付け、藝術に関する様々な理論と、現在進行形で行われている様々な藝術実践を参照しながら、コロナ禍という非常事態における体験が、我々の藝術観にどのような影響を与えうるのかを考察するものである。

長引くコロナ禍で、数多くの人がステイホームを余儀なくされている。当初、多くのコンサートや展覧会は「不要不急」と判断され、延期されたり中止されたりした。しかし、これとは逆に、コロナ禍の今だからこそ注目される音楽や音楽家もいる。また、「藝術を実際に体験し、鑑賞すること」が、藝術論あるいは美学思想の中でどのような意味を持っていたのかについても、再考する必要もあるだろう。そして、コロナ禍における家での鑑賞経験から、私たちは藝術が本来有していた特性に改めて気が付くこともできる。コロナと共にある時間がだいぶ長くなり、藝術活動においても徐々に合理的な感染対策が理解されるようになり、新しい生活様式に合うような活動が再開されつつある。報告メンバーの中には、コンサートをしたり、映



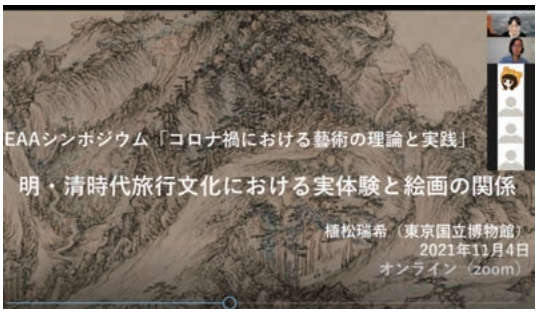
画を作ったり、あるいは博物館という場で鑑賞体験に向き合う者もいる。今回のシンポジウムでは、理論の提示だけにとどまらず、コロナ禍においてどのような藝術経験が蓄積されてきたかについても、できるだけふまえて議論したい。

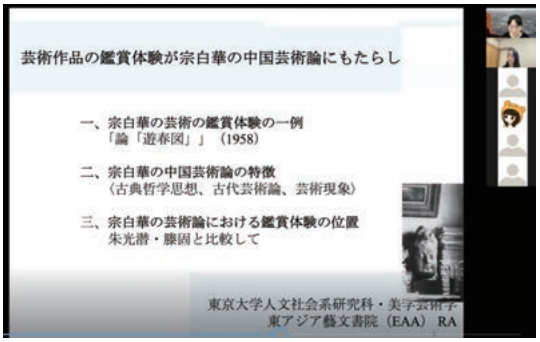
最初に滕束君氏（EAA リサーチ・アシスタント）が「身体と音楽――ラジオ体操の伴奏音楽と放送メディアの変遷に関する考察」とする報告を行った。コロナが流行して以来、「ラジオ体操」に取り組む人々が増えたという。ラジオ放送を通して遠隔で参加し、家で 1 人でも、あるいは公園で多数でも取り組める「ラジオ体操」は、コロナ禍においても便利な運動の手段である。しかし、なぜこれほど多くの人が自発的にラジオ体操を続けるのだろうか。滕氏は、ラジオ体操の伴奏音楽と放送メディアの変遷を検討し、また伴奏のリズムや「間」が自然な身体運動を促していることを明らかにした上で、「皆で気持ちよく運動をしたい」という自発性が、体操の習慣化に与える影響などについても分析した。

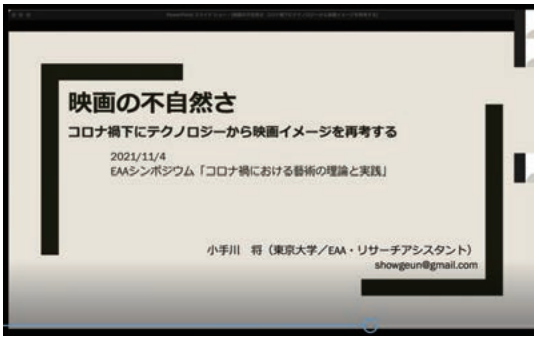
続いて石井萌加氏（EAA リサーチ・アシスタント）の「コロナ禍におけるベートーヴェン生誕 250 周年」である。コロナ禍に見舞われた 2020 年は、奇しくもベートーヴェン生誕 250 周年だった。多くの演奏会が自粛や感染防止対策を強いられる中、予定されていた 250 周年記念のイベントはどのような経過をたどったのか。苦難の人生を送ったベートーヴェンは、コロナ禍という困難な時期を経て、「ナショナリズムやポピュリズムが増す世界に勇気を与える存在」「困難から立ち直る力を持つ音楽」「人々が切り離されバラバラになってしまう状況を乗り越え、人間に寄り添う力を持つ『第九』」などのイメージが付与されていったことがわかった。

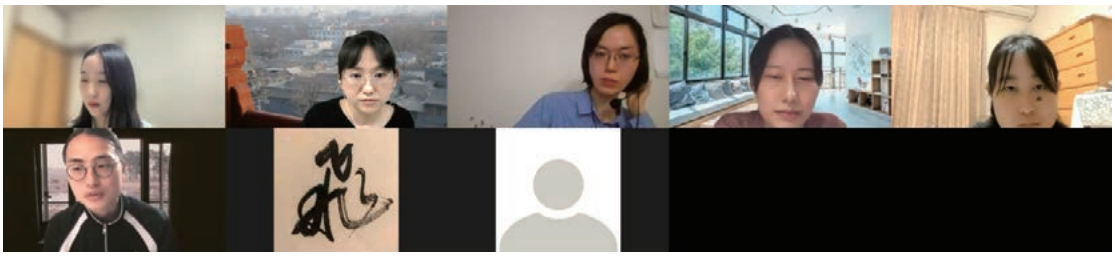
田中の「墨子の非楽思想と非常事態」は、諸子百家として知られる墨子の「非楽」論を取り上げる。「墨子が否定したのは音楽そのものではなく、非常事態下においても続行される奢侈な礼楽だ」と言われるが、自由に音楽を聞きに行けない非常事態下の現在において、「不要不急」と判断された藝術も、墨子の「非楽」に通じるものがあるのではないか。本報告では、非楽思想の背後にある、「苦しみながらも日々労働して生きる」ことに価値を見出す人間観について、儒家の礼楽思想を支える人間観と比較しながら、非常事態において人間が人間たる所以をどこに見出しうるのかについて考察した。

「実際にその場に行かない」「実見しない」ことと藝術の関係は、美術の分野でしばしば論じられたテー









マである。植松瑞希氏（東京国立博物館）は、「明・清時代旅行文化における実体験と絵画の関係」とした報告を行った。自然空間の表現そのものを主題とする山水画は、「違う土地に行き、違う自然空間を目にする」旅と相性が良く、旅に関連させる様々な「旅行絵画」が制作されてきた。たとえば「遠方に旅をするという実体験」は、まさにコロナ禍において大きな制約を受けた分野である。旅の実体験と絵画表現はどのように関わってきたのか、本報告では、中国絵画史の明・清時代、江南地域を中心とした経済発展に伴い、旅行者の数が増えた時期である 16 世紀以降の作例を中心に考察し、実体験がある場合、実体験がない場合、そもそも「する気のない旅行」を描く場合において、それぞれ異なった表現があり、志さえあれば旅行絵画は制作可能であることを指摘した。

丁乙氏（EAA リサーチ・アシスタント）は「芸術作品の鑑賞体験が宗白華の中国芸術論にもたらした影響」として、中国の美学家である宗白華（1897-1986）の芸術論を取り上げた。報告ではまず、宗白華の鑑賞体験の一例として「論『遊春図』」（1958）を紹介し、個人的な感想に基づき、様式論的分析ではなく、文化全盤への考察（自然観・宇宙観）へ導かれていく様子を指摘した。続いて、宗白華の中国芸術論の年代的変遷をふまえ、彼の課題として、鑑賞体験に由来する芸術現象をどう解釈するかという問いがあることを指摘した。宗白華にとって、老子や荘子などの古典哲学は、依然として芸術の背後の宇宙観を示すものであるが、芸術現象を直接解釈するものではなくなり、後期では芸術論が用いられるようになったという。さらに、宗白華の芸術論において鑑賞体験はいかなる位置にあるかについて比較を行った。古典哲学を先行させ、それに即して芸術作品の特徴をいわば演繹的に敷衍した朱光潜と比較した場合、宗白華は芸術現象を論の出発点とする側面が強く、それは古典哲学の宇宙観が芸術現象の背後にある宇宙観と共通するという考えに基づいている。また、古代の芸術論や絵画作品の様式に即して論じる滕固と比較した場合、宗白華の芸術現象の重視は、現象や芸術論のレベルにとどまらず、形而上的な宇宙観を目指す側面があるという。

最後に小手川将氏（EAA リサーチ・アシスタント）は「映画の不自然さ――コロナ禍下にテクノロジーから映画イメージを再考する」と題して報告を行った。映画館に行かず自宅で映画を楽しむ人が増える一方、早送りやスキップ機能を使いながら鑑賞する人に対し、批判的な声がある。しかしこれらの機能は、映画製作の際の編集機能の延長として捉えることもできる。スキップ機能やモンタージュ、倍速機能や低速度撮影など映画には様々な技術が用いられる。ベンヤミンによれば、大都市に生きる人間は技術のもたらすショックに晒されているが、映画の編集技術による「ショック効果」を人々が受容することで、対応できるという。現在、人々にショックをもたらすものは、主にインターネット技術である。自分の手元で早送りやスキップ機能を使うということは、このショックに対応する新しい知覚モードが生まれていることを示す。また、テクノロジーは映画の制作者だけではなく、受容する側にもその操作性が共有されていることを示してもいる。

その後の総合討論をふまえながら、報告者が感じたことを書く。「操作性」という問題は、映画に限らず、美術においても、あるいはどの藝術においても見受けられ、鑑賞者には大きく裁量権が認められる。絵を描く者が、風景を実見していたとしても、「何を伝

えたいか」によって、時には写実的であったり、伝統的な手法を使ったり、完成する絵はそれぞれ全く違うものになる。それと同じように、今度はその絵を鑑賞する者にとっても、丁寧に細かく様式を見極め作者の意図を汲み取ろうとする者もいれば、宗白華のように、作品を実見することに重きを置くも、そこから出てくる藝術論は必ずしも様式の分析を基礎とするのではなく、実見した時の自らの感情や思想に大きく拠る場合もある。ベートーヴェンのように、作曲家のイメージや評価が時代の空気によって大きく変わることも思えば、藝術を受容する側には、様々なレベルで「操作性」が認められているといえよう。その一方で、非常に良くできた藝術は、人々に「操作性」を許すようで、巧妙にコントロールする側面も持ち合わせる。ラジオ体操はまさに、人々に「自発性」を「促し」、特定の身体運動を習慣化させる好例であろう。

中国の思想家・荀子は、音楽の根源を「美しいものを聞きたい」「楽しみたい」という欲望に基礎付けた。つまり、人間が欲望を遂げようとする中で発揮する「自発性」に基礎を置いたが、その一方で、あくまで礼の一つとして、人々が特定の社会秩序の中で、それぞれふさわしいふるまいができるよう導くことも重視した。また、『荘子』にみえる「咸池の楽」という理想的音楽に対し、のちに郭象が「必ず黄帝の化を待ったのちに完成する」と注釈を付けたように、人々が自発的に音楽に参与していくように見えて、実はそれを導く何者かが想定されていることがある。つまり製作者側の「操作性」が依然として力を持っているという可能性を忘れてはならないのだ。

このように考えると、コロナ禍において藝術活動を続けることの是非を問うこと自体が、空しく感じる。そもそも藝術自体が、様々なレベル・様々なかたちで「操作性」を内包し、各々が「自発的に」活動に参与することを「促す」ような存在だとすれば、特定の人々が「不要不急」だと判断しようが、また、それに対して別の者たちが「必要」だと反論しようが、藝術はこのような勝手な「操作」を超えていくものとして、常に機能し続けるはずだからである。

今回のシンポジウムで論じたことを、数年後、アフターコロナの世界で再び回顧した時に、私たちはまた、どのように感じるだろうか。ここに記録し、数年後にまた思い出してみたい。

報告者:田中有紀(東洋文化研究所)

東京大学GSIキャラバンプロジェクト「主権の諸条件」

第3回　ワークショップ――汪暉氏(清華大学)

2021年11月6日

2021年11月6日、東京大学グローバル・スタディーズ・イニシアティヴ（GSI）キャラバンプロジェクト「主権の諸条件」第3回ワークショップがEAA共催のもと、オンライン上で開催された。これまでのワークショップでは、第1回にジャック・レズラ氏（カリフォルニア大学リバーサイド校）、第2回にキム・ハン（金杭）氏（延世大学）をお招きし、「主権」について批判的に考察するための議論を交わしてきたが、今回は汪暉氏（清華大学）をゲストスピーカーにお迎えし、“The Birth of the Century: China and the Conditions of Spatial Revolution”という題で講演をいただいた（講演の様子は東アジア藝文書院のYoutubeチャンネルにてご覧いただけます）。

はじめに石井剛氏（EAA副院長）から紹介されたように、汪氏は現代中国思想史研究の泰斗であり、その著作は既に5作が日本語にも翻訳されている。汪氏の研究は中国における「革命」の歴史を批判的に検討しながら、世界の政治的状況全体へと視野を広げていくところにその卓抜さがある。今回の講演および議論も、具体的な歴史的事象を取り上げつつ、「主権」概念そのものについて吟味しなおす視座を与えるものであった。

汪暉氏

まず汪氏は、「主権」概念を単に規範的なものとして捉えるのではなく、むしろそれが成立する歴史的条件と関連させて理解するという趣旨を述べられた。だが歴史的条件を考察するにせよ、その「歴史」をそもそもいかに捉えるべきなのか。ここに汪氏の根本的な洞察が光る。私たちは歴史をしばしば古いものから新しいものへの発展と捉えたがる。あるいはそれに対して、新しいものは古いものの繰り返しに過ぎないのだなどと。こうした把握の前提となっているのは、時間が単一のものであるということ、言い換えれば一つの場所における時間の経過を問題とすれば事足りるのだという認識であろう。ところが 20 世紀とは、汪氏によれば、まさにこうした前提が崩れ去った世紀であった。汪氏はそれを「空間革命（spatial revolution）」と呼ぶ。20 世紀とは、複数の時間軸が共時的・空間的に作用しあうようになり、単に「過去から現在へ」という語り口では理解できなくなった時代であった。

こうした歴史的・空間的状況にあって、政治的運動を方向づける諸概念もまた空間の問題と無縁ではない。つまり、翻訳の問題を避けられない。中国の革命を導いたのは実際のところ、西洋由来の（しばしば日本を経由した）翻訳概念であった。そこでは、元来の歴史的文脈から切り離された、たとえば「プロレタリアート」といった概念が、その指すものを中国において新たに探し求めて用いられる、といったことが生じる。しかしこれは、単に概念の誤用といった仕方で片付けられるものではない。というのもこうした概念ないしカテゴリーが、実際にその後の政治的言説を形作ってゆき、また社会的体制そのものを変容させるからである。それゆえ私たちは 20 世紀の中国を理解する際、単にそれらの西洋由来の概念に従って事態を眺めるわけにもいかず、かといってそれを歪んだ見方として斥けるわけにもいかない。あくまでそうした概念が政治的にどのように展開されてきたか、という点を注視せねばならないのである。

こうした視座のもと、国家の形態および主権というものの含意がいかに変容してきたか、ということが分析される。主権は空間の構成そのものに関わるものであるから、単に「空間革命」という条件の下でその概念の動向が検討されるのではなく、むしろ「空間革命」がどのように起こったかという観点で検討されねばならない。この点に関して汪氏はまず、マルクスの議論とシュミットの議論とを参照しつつ検討する。マルクスによれば、「政治的な中央集権化」は「生産手段の中心化」に基づくものであった。他方シュミットは空間革命を、植民地獲得競争における海洋支配および領土支配の構図に基づいて捉える。それは単に各国の利害をめぐる競争というばかりでなく、カトリックとプロテスタントという宗派間の対立でもあった。この闘争を通じて、「主権国家」の概念は西洋に根付くことになる。

こうした「主権」概念が中国に影響を及ぼし始めたのが 19 世紀末の清朝の時代であった。こうした場面でどのように「主権」概念が成立し、また力を持つのかということが問題となるのである。中国の革命はこうして、空間革命への応答として捉えられることになる。

講演に続いて、キャラバンメンバーの各氏からの質疑とそれに対する応答、さらにフロアとのディスカッションが交わされた。中島隆博氏（EAA 院長）からは、あらためて革命と主権との関係について問われた。王欽氏（総合文化研究科）からは、政治的概念の行為遂行性（パフォーマティヴィティ）についてのコメントと、今日の状況における概念使用についての問いがあった。國分功一郎氏（総合文化研究科）からは、民主主義の可能性をどのように考えればよいのかという問いが投げかけられた。張政遠氏（総合文化研究科）からは、必ずしも領土のカテゴリーで捉えきれない琉球、台湾、また朝鮮半島の「主権」について問われた。

佐藤麻貴氏（EAA 特任准教授）からは、技術による主権の変容と、宇宙という新たな「空間」による条件の変化について問われた。さらにフロアからは、国際的な制度と中国の主権との関係についての質問があった。

こうした問いに対する汪氏の応答を大雑把にまとめるならば、ポイントは以下の点にあったと思われる。第一に、主権という概念はやはり単に規範的なものとして用いるのではなく、それが成立してきた政治的状況を踏まえて理解せねばならない。具体的に言えば革命も、理念による鼓吹のみならず社会的動態の帰結として捉えられる。その過程で主権の概念も機能し、絶えず新たに理解されてきたのである。第二に、政治的状況は現在と 20 世紀初頭とでは大きく変化している。必要なのは今日の状況に即した概念の使用であり、歴史的経緯をつぶさに辿るのでなくても、今日の政治的危機を考えなおすための内在的な批判の視点を持たねばならない。第三に、より具体的な論点として、「人民（people）」がどのように作られてきたのか、また現在形成されつつあるのかという点に注意を向けねばならない。民主主義は「人民」の形成とともに成り立つが、そこには様々な力が関与する。戦争もまた、動員という力によって「市民」を形成してきた力である。空間革命という概念はまさに、そうした諸力を把握するための図式であった。第四に、国家という主体もまた絶対的なものではない。空間革命の過程を描くことで汪氏は主権国家の成立を描き出したのだが、そのことは同時に、国家の地位が新たな秩序のもとで再び変容しうるということを示している。現行のデジタル化の潮流はまさに、国家が絶対的な制度ではなく、むしろひとつのプレイヤーとなるような事態をもたらしている、と汪氏は分析する。

最後に石井剛氏から、今回の講演では触れられなかったものの話題として用意されていた、魯迅の「絶望への抵抗」という論点について問いかけられた。一体私たちはどのようにして「友と敵の二項対立」を超えられるのか、という問いである。それに対して汪氏は、現今私たちの直面している COVID-19 を取り上げて応答した。今日の状況は「COVID-19 との戦争」とも喩えられる。ここには単純に、COVID-19 という「敵」に対する「友」としての人類の結託、といった構図を見ることもできるかもしれない。だがより重要なことは、ここで新たな政治的主体が生じていることを見極めることであると汪氏は言う。シュミットは戦争を直ちに国家間のものと見なしたが、争いに立ち向かう「人民」は必ずしも国家に結びついたものとは限らない。その新たな政治的主体の生成にこそ注意を向けねばならない。おそらくは――敷衍して言うならば――その政治的主体の生成に積極的に関与していく点に、「友と敵の二項対立」を超える希望があるのである。

汪氏の講演とそれに続く議論は、私たちが「主権」について論ずる際、どのような状況において主権の概念に訴えようとするのか、またどのようにその概念をパフォーマティヴに用いることができるのかという点について批判的に考える視座を与えるものであった。考うるにそのスタンスは、私たちが人文学を担いつつ政治的状況に関わっていく、そのための条件を示すものであったようにも思われる。

報告者：宮田晃碩（EAAリサーチ・アシスタント）

EAA Book Review-06

Bunri Usami, *Chinese History of Art Theory: Philosophical Discourses*

Reviewer: DING Yi (EAA Research Assistant)

2021年11月10日

Though the author clearly categorizes his work as Chinese philosophy (Introduction iii), it contains a far wider range, touching upon the fields of art history and aesthetics. Maromitsu Tsukamoto has already pointed out these two aspects and elaborated on how this book provides new vantages for the study of art history (<Review> Bunri Usami, Chinese History of Art Theory, The Journal of Oriental Researches, 2017, 76(3): 476-489). Here, I will revisit the book, centering on its underlying scholarship of aesthetic thinking.

Chinese History of Art Theory is constituted of a long preface and four chapters. The preface and chapter 1, "Discourses on Qi 気 and Form 形 ," scrutinize these two core concepts (qi and form) and their relationship. Qi, which can be understood as atmosphere, is formless while recognized as the original power to beget everything, including forms. In terms of the relationship between qi and form, the history of Chinese philosophy has two main turning points: the Six dynasties, when the artists attempted to convey qi through forms of the objects, and the Song dynasty, when qi in painting was deemed as that from the painter and thus theoretically justified the value of the school of literati painting [文人画].

Chapter 2, "Concepts Relating to Art," tackles three concepts: pleasantness[快], ugliness[醜], and imitation[模倣]. Compared to qi and form, which are oft-discussed, these three concepts have not been used to examine Chinese art theory. The reason this is a new perspective is because they are concepts from Western, not native Chinese, aesthetic theory. However, what is important here is that Usami does not utilize those Western concepts in their original contexts, but by applying them to Chinese art, discovers new aspects of Chinese tradition.

For example, the most renowned thesis regarding pleasantness in Western aesthetics is from Immanuel Kant's Critique of the Power of Judgment (1790) where he states that "an aesthetic judgment accompanied with pleasantness shall be universally valid". Usami refers to this thought and uses the term "universal [普遍的]" while arguing that in the Chinese context there are two ways to interpret it: first, a judgment is valid regardless of the difference between individual recipients, and second, a judgment is valid regardless of the difference between individual objects that are being judged (122). The first interpretation is similar to Kant's statement. However, as Usami points out, in the Chinese context validity is guaranteed by the fundamental principle of qi (122).

Bunri Usami, *Chinese History of Art Theory: Philosophical Discourses*
宇佐美文理『中国藝術理論史研究』
(創文社、2015 年)

Because qi dominates the form in a painting, different recipients can receive the same qi and thus reach the same conclusion (whereas in Kant's context, the fundamental principle is "Common Sense"). On the other hand, Usami distinctly maintains that the second interpretation of validity characterizes "Chinese aesthetics (aesthetica, in its Latin meaning as A. G. Baumgarten created)" (122). The Huainanzi [淮南子], as quoted by Usami, claims "all beauties please people's eyes while having different bodies and faces" (121). This kind of possibility, according to Usami, is supported by nothing but the Chinese aesthetic ability (123).

Similarly, the topic with regards to imitation also manifests the reinterpretation of Western aesthetic thought. Ever since Plato, imitation, or mimesis, is widely considered to be the distinctive feature of Western art theory and what distinguishes Western from Chinese art, which supposedly has no such standard. However, Usami reconsiders the related problem in Chinese art theories. Yet, what Usami focuses on is not the imitation of nature to gain so-called "mimetic illusionism" as in the West, but the imitation of the works of earlier masters, one of the most basic approaches for learning Chinese painting.

Chapter 3, "Thought and Image," centers on the images on Hua-xiang-shi[画像石] or Hua-xiang-zhuan[画像磚] (stone or brick with pictures carved on it) in the Han dynasty, exploring how the thought that was not recorded in written materials was expressed in images. The topic here is about the ancient view of life and death, especially concerning the world after death.

The last chapter, "Discourses on Fenjing (Light and Atmosphere)," discusses the features of landscape painting through reconsidering the concept "Fengjing 風景." The establishment of the landscape painting, or, to be more exact, Fengjing painting, was illuminated by the establishment of Fengjing poetry. Before the middle of the Tang dynasty, Fengjing meant nothing more than "light and atmosphere"; in comparison, the English word "scenery" indicates a broader range of phenomena. The poets and painters pursued the expression of qi instead of the representation of the objects before their eyes. Thus, the function of the fundamental qi system underpinning Chinese art is verified again.

The above four chapters encompass various aspects of Chinese art theories. Since the discipline of aesthetics regarding Chinese art theory is yet to be developed, the relative issues were, by far, mainly discussed in the fields of Chinese philosophy and art history. However, previous studies of Chinese philosophy tended to neglect the visual elements (e.g., "form" and its appearance in concrete works) whereas studies from art history overlook the historical transitions of concepts. By referring to the Western aesthetic framework and re-scrutinizing the concepts in Chinese contexts, this book by Usami explores Chinese aesthetics authentically. This limited review could not highlight many other original viewpoints of it; for instance, even in the discussion on the frequently analyzed concept qi, Usami achieved an unprecedented clear and analytical investigation, questioning the ontological meaning of qi due to his profound Western aesthetic scholarship as a Chinese philosophy researcher.

第2回 EAA批評研究会

戦後日本の「批評」と「大衆」

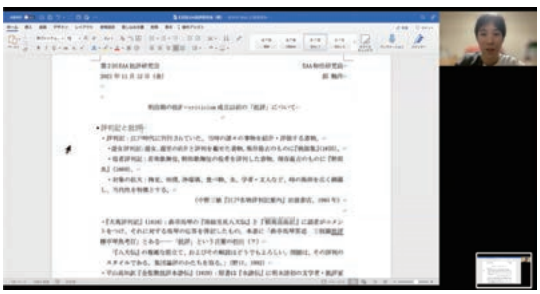
2021年11月12日

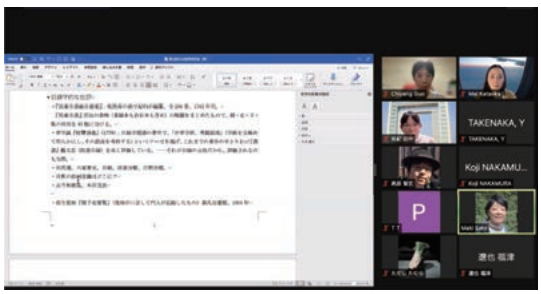
2021 年 11 月 12 日（金）、第 2 回 EAA 批評研究会「戦後日本の「批評」と「大衆」」が開催された。本研究会は、様々な概念・事象・テクストから「批評」そのものを問い直すとともに、「批評」を広く世界史・文学・哲学の文脈に向けて開き、新たな知のプラットフォームの構築を目指す試みである。第 2 回の研究会では前回の内容（「近代日本の批評とメディア」〔2021 年 9 月 2 日〕）を振り返りつつ、そこから浮上した「大衆」というキーワードにあらためて焦点をあてるとともに、主として竹内洋の著書『大衆の幻像』（中央公論新社、2014 年）の第 1 ～ 3 章を取り上げた。

まず前回行われた議論への一つのレスポンスとして、報告者（郭馳洋〔EAA 特任研究員〕）は近代以前の批評、すなわち明治期における criticism としての「批評」概念成立以前の「批評」について、江戸時代の評判記、中国の小説批評・注釈（金聖歎の水滸伝批評）、目録学的な批評（『漢書』藝文志）の例を挙げながら簡略に補足した。近代以前の「批評」に関心を抱いたのは、単なる歴史に関する実証的な趣味ではなく、かつて存在した複数の批評の様式を蒐集して今日流通している「批評」概念を相対化し位置付けるためである。

そして今回の本題として、片岡真伊氏（EAA 特任研究員）は竹内洋『大衆の幻像』の前半部分の内容を詳細に整理したうえで自身の考察を加えた。前回取り上げられた大澤聡著『批評メディア論――戦前期日本の論壇と文壇』（岩波書店、2015 年）は、1920 年代後半～ 1930 年代のメディアにおける批評の様式そのものに注目し、戦前に生成しつつあった批評メディアの生態図を描き出したが、そこで繰返し強調されているのが大衆社会化という時代背景である。それに対して今回の取り上げた著書は、歴史社会学の視点から主に戦後から現代に至るまでの「大衆」・「大衆社会」の変容およびその帰着を考察している。

「大衆」はもともと mass の訳語として大正期に登場、1920 年代後半に流行しており、「大衆社会」（mass society）はカール・マンハイムが 1934 年に提起した概念で、1951 年に清水幾太郎がそれを「マス・ソサエティ」という表記で導入した。著者の竹内は日本の大衆社会に二つの構造転換を看取している。つまり大正時代から 1960 年の安保闘争までは間歇的初期的大衆社会化の時期（「大衆社会の構造転換 I」）であったが、1970 年代後半にいわゆる新中間大衆（村上泰亮）が前面に出て、恒常的大衆社会を形成した（「大衆社会の構造転換 II」）。大衆は、エリートに対する下位者・追随者あるいは理性的討論で社会を築く自律的個人としての市民よりも、むしろ消費者・納税者として世論を通じて政治や報道機関に強い圧力をかける存在となっていた。このような「大衆高圧釜社会」では、政治家が「国民のみなさま」、マスコミが「視聴者のみなさま」をつねに意識せざるをえなくなっている。そして大衆圧力が一層増幅し、大衆がもはや実在のものではなく想像されたもの（超大衆）として担ぎ上げられている現在において、大衆社会は想





片岡真伊氏（EAA 特任研究員）

像された多数者からまなざされる「大衆御神輿ゲーム社会」になっている。この社会における支配的な存在は実体としての大衆でも理念型の大衆（吉本隆明の「大衆の原像」）でもなく、想像された大衆すなわち「大衆の幻像」である。そこでは、大衆の代理として政治を行う者の意識が「受託者」（trustees）から（大衆の意向に従わなくてはならない）「委任者」（delegates）に変化し、これまでシェルターで守られてきた学問・芸術も「大衆目線」を求められるようになった。知識人の性格はテレビが普及してから従来の「公共知識人」から「文化人」に変わり、「文化人の芸能人化」と「芸能人」の文化人への「昇格」という現象が発生した。

こうして本書（第1～3章）の内容をまとめたあと、ネット時代の大衆社会と批評を考えるためのヒントとして、片岡氏は著者と山折哲雄がかつて行った対談（http://www.kokoroforum.jp/report/toyokeizai1211/）の興味深い一節を紹介した。山折は「批評対象の最も優れたところを選び出して褒めていくこと」を小林秀雄的な批評の核心とし、「まず他人を刺す前に、自分自身の背中を刺せということ」を鶴見俊輔的な批評スタイルと捉え、現在の論壇ではこの2種類の批評法はともに失われていると述べている。その話を受けて竹内は「教養というもの自体が、自己批評があるか、自分を見つめる力があるか、自省があるか、自己中の反対がどれだけあるか、ということ」と、教養と自己批評の関係を強調している。

その後のディスカッションで佐藤麻貴氏（EAA 特任准教授）は、本書で言及されたノブレス・オブリージュというものの必要性を説きつつ、SNS での情報に日々接する若年層における懐疑精神・批評精神の欠如、「自己批評」「教養の度合い」（竹内）の不在、それが知識人層にも見られることを指摘した。この状況において一方では大学のマス化、他方では専門知と実社会との乖離が起き、哲学の実践、社会への批評の仕方が問題になっているという。佐藤氏の見方では、批評とはより良い高次のレベルの世界を開くためのツールであり、そのためには権威主義、エリート主義あるいは「大衆」を脱構築的に論じる必要があり、その際は相手への単なる否定ではなくある種の昇華のほうが重要となる。

田中有紀氏（東洋文化研究所）は中島隆博氏（EAA 院長）の新著『危機の時代の哲学――想像力のディスクール』（東京大学出版会、2021 年）での議論を援用し、批評＝批判とは切り分けることによって新しい思考空間が開かれるような実践だと捉えたうえで、竹内の著書で論じられた「大衆の幻像」への迎合、さらにはこうした大衆社会論それ自体の背後に、新たな世界を切り開こうとする理念・理想的世界像が果たしてあったのかどうかと問いかけた。そして現代の大衆迎合とは異なる民衆との向き合い方を、かつて陽明学を説いた町人学者に見出した。田中氏によれば、（東アジア藝文書院の名前の由来でもある）『漢書』藝文志はまさに複数の学問ジャンルを分けることによって新しい学問ないし世界の形を浮き彫りにしたものであり、中国の目録学・注釈では一種の社会変革志向が強く働いていたのであるが、こうした志向は「大衆の幻像」時代の批評においてむしろ薄れている。

田中氏の発言を受けて、高原智史氏（EAA リサーチ・アシスタント）は、新たな世界を切り開きこうとす

田中有紀氏（東洋文化研究所）

高原智史氏（EAA リサーチ・アシスタント）

るような大きな目的もしくはグランドデザインが欠如しており、大衆の一人ひとりが自分の思う通りに社会を支配したいというのはまさに大衆社会の重要な側面であると述べた。高原氏は竹内著における「委任」と「受託」の議論に触れながら、大衆が政策・意思決定を代議士や専門家のようなプロフェッショナルに任せようとしなくなっていることを指摘した。つまり、任せられないにもかかわらず自分の思う通りにして欲しいという大衆的欲求が迫り上がっているという。この「任せられない」状況において批評がどう成り立つか、大衆が SNS を通して政治的・社会的事柄に反応していくなかで批評家の立ち位置をどう捉えるかという問題を提起した。

SNS 時代における批評の（不）可能性あるいは難しさを考えるにあたって、田村正資氏（EAA 特任研究員）は時間間隔・時間的距離感という視点を提示した。田村氏によれば、本来なら「任せられる」政治の場合、ある政策の評価はその結果が出るまで一定の期間を待ってからフィードバックを踏まえて行うべきであって、つまりタイムラグがあるからこそ、批評的な眼差しが可能になり、作品批評についても同じである。しかし「任せられない」状況においては、たとえば「いまこの瞬間」に与えられたものに対して大衆がリアルタイムで反応し、SNS で炎上するため、政策も朝令暮改になってしまい、そこにやはり時間間隔が欠如しており、このことが批評の難しさにつながるという。

最後に参加者たちの議論を聞いた報告者（郭）による当日の発言およびその後の感想を簡単に綴りたい。

批評精神を懐疑の精神と理解すれば、あらゆる権威は批評・相対化の対象になる。しかし一方で、学的言説の権威が失墜し、専門知に対する不信感（「任せられない」状況）が増大している今日の大衆社会において、批評は軽薄化する言論に呑み込まれて機能しなくなっているようにも見える。つまり権威を相対化するのは批評の一つの役目だが、権威の全く存在しないところに批評も成り立たなくなる。では、単に権力や資本に依存しないような権威をどこに求めればよいのか。もし価値のあるものに権威を認めるとしたら、私たちにとってどのような価値が必要なのか。こうした問題はつねに批評に絡んでくる。

言論の生成・拡散のスピードがかつてないほど加速化する現代において、批評の質を担保する時間間隔が限りなく縮まり、「想像された大衆」がリアルタイムで現前している。それに対して、古代ではむしろ「書く」という行為それ自体が身体性、ときには儀礼性をさえ伴う（「読む」についても同じことが言えよう）。そのように書かれたもの、すなわち「文」は実に重みのあるものであったし、その伝達にも一定の時間を要した。だとすれば、今日における言論の批評性を回復するには、何らかの身体性・儀礼性を再構築することが大事なのかもしれない。

報告者:郭馳洋（EAA特任研究員）

中島隆博『危機の時代の哲学——想像力のディスクール』書評会

2021年11月13日

2021 年 11 月 13 日土曜日の昼下がり、東洋文化研究所にて東京大学東アジア藝文書院院長、中島隆博氏が 2021 年 8 月に東京大学出版会から出版された『危機の時代の哲学——想像力のディスクール』につき、書評会を開催した。当日は登壇者による対面とオンライン視聴の開催となった。

中島氏が「はじめに」に書かれた「小さな一点での批判的関与」を、私たち一人ひとりが、展開していくに当たり、中島氏との対話を通して、「危機という構造」にどのような風穴を開けることができるのか、書評会という「場」を設け、共に探求する機会となった。可能な限り、若い人たちからの意見を伺いたい、また若い人たちとぜひ、意見交換したいという中島氏の強い御意向と御要望を受け、当日は実に幅広い年齢層の学徒たちが集い、意見交換を行った。登壇者は EAA ユースの学部学生である大石直樹氏、Xu Minghao 氏、円光門氏をはじめ、京都大学大学院のナヌアシュヴィリ・テクラ氏、EAA 特任研究員の崎濱紗奈氏、田村正資氏、EAA 特任助教の具ユジン氏に加え、総合文化研究科の張政遠准教授、王欽准教授、東洋文化研究所の田中有紀准教授をお招きし、EAA 特任准教授の佐藤麻貴が司会を務めた。

今回、新たな試みとして、中島氏の前では皆が一様に学生ということで、あいうえお順で批評を行った。それぞれの参加者からの指摘について次にまとめる。

中島隆博氏（EAA 院長）

大石氏は歴史教育について指摘され、竹内好の体験の重ね合わせに触れながら、歴史を取り戻すことについて。具氏、崎濱氏はそれぞれ国際政治、国内政治の観点から主権のパルタージュに参加というプラクシスを付加することにより、どのような参加が可能かについて。Xu 氏は正史の歴史叙述の在り方について触れながら、時間的空間的連続性だけでは回収できない歴史の新たな可能性について。田村氏は原子力の合意形成と主権について。張氏からは分権、分割、分有の概念から三木清に触れつつ分裂という危機をどう直視すれば良いのかという問いが出された。テクラ氏からは東洋という西洋で作られたイマジネーションの所在の今後の扱いについて。円光氏からは、矛盾を内包している主権の諸問題について。王氏からは『危機の時代の哲学』と哲学の危機について、受動的な想像力ではなく、他者よりも自分の不穏なポジション、自分の主体性を想像できる力について。佐藤からは普遍と統の対峙の仕方における排他的、抑圧的な隠れた欲望について指摘した。

小休憩後、中島氏からそれぞれの批評に対して返答を頂戴した。その後も、フロアから活発な質問や意見が出て、書評会は盛会の内に終えることができた。企画するに当たり、中島氏から、「私の書評会は成功しないから」と散々に警告されていたのだが、今回の書評会は大変な盛会であったため、主催した不肖弟子としては安堵致した。ヒューマニティーズという学問に携わる私たちに問われていることは、危機を煽るのでもなく、悲観するのでもなく、はたまた危機から目を反らしたり、逆に危機を利用したりするのでもなく、「危機をどう語り、どう捉えるか」という、危機に対する私たち一人ひとりの、ある種の関与の在り方であることを脳裏に刻みつつ。

報告者:佐藤麻貴（EAA特任准教授）

EAA国際ワークショップ

石牟礼道子を読む

世界と文学への問い

2021年11月14日

2021 年 11 月 14 日（日）、13 時よりオンラインと対面のハイブリッドで国際ワークショップ「石牟礼道子を読む――世界と文学への問い」が開催された。

このワークショップは、私たちの「石牟礼道子を読む会」が 2020 年 6 月から始まり、2 回のワークショップを行ってきたことを踏まえて、初めて海外の研究者も迎えての国際ワークショップという形をとることとなった。発表者は、読書会メンバーの建部良平氏（東京大学大学院博士課程）、徐嘉熠氏（精華大学大学院博士課程）、池島香輝氏（東京大学大学院総合文化研究科）の 3 名である。

そして、講演者として、たいへん幸いなことに、詩人・作家の池澤夏樹氏をお迎えすることができた。池澤氏は、ご自身の創作活動とともに、一方では世界文学の紹介者としても重要な仕事を積み重ねられてきた。その池澤氏が編纂された『世界文学全集』（河出書房新社）において、日本文学から唯一選ばれたのが、石牟礼道子の『苦海浄土』であったことは、石牟礼の読まれ方に大きな影響を及ぼしたと考えられる。また、日本文学の系譜の最初に位置する『古事記』の現代語訳（河出書房新社、2014 年）を完成させ、その言葉の世界を小説『ワカタケル』（日経 BP、2020 年）に結実させて、文字で世界を認識する前の日本の古代人の心象や言葉を克明に語ってみせたのは記憶に新しい。

初めに、司会の高山花子氏（EAA 特任助教）から、本ワークショップの趣旨説明で、この池澤氏の編纂された『世界文学全集』が私たちの活動の大きなきっかけとなった経緯が述べられた。具体的には、2020 年の春頃から突如 COVID-19 の蔓延する世界になり、私たちの中で、未曾有の出来事に人がどのように向き合い、また「書く」ことに対峙してきたのか、具体的な文学作品からヒントを得られないだろうか、という気持ちが沸き上がってきたことがあった。当初は古典作品なども念頭にあったが、発起人である高山氏と私（本ブログ報告者：宇野瑞木）が EAA の「世界文学リサーチ・ユニット」に所属しており、そこで読むということを考慮したときに、浮上してきたのが、石牟礼道子であった。こうして私たちは、ほとんどが専門外の集まりながら、この『世界文学全集』に収められた『苦海浄土』三部作をおよそ半年かけて隔週で読み進めてきた。さらにその後は、『苦海浄土』以外の石牟礼作品の読解へと進み、また新作能の上映会等を重ねてきた。このような私たちの時間の蓄積が、ここで池澤氏に結びつくことが叶ったのである。

当初は池澤氏に先に講演をいただき、その上で研究発表が続く予定であったが、池澤氏のたってのご希望により、3 名の研究発表の後で、それに対し池澤氏が応答くださるような形で、後からお話をいただくこととなったことが告げられた。

研究発表

研究発表の最初は、建部良平氏の「苦海を吹き抜ける風――石牟礼文学における風の描写について」であった。建部氏は、私たちの読書会の第2回ワークショップで発表された『苦海浄土』における「狂い」「笑い」と「救い」についての考察を踏まえつつも（この内容は、同氏の論考「「苦海浄土」と共に――狂いと救い、そして笑い」〔EAA ブックレット『石牟礼道子を読む――世界をひらく／漂浪（さすら）く』2021 年 3 月〕として発表済）、今回は「風」の描写に着目することで、石牟礼の他の作品にまで通じる「救い」の問題を新たに展開させた。それは、たとえば『苦海浄土』第 2 部で、患者たちが大阪での株主総会で、御詠歌を誦唱し「狂」うことによって積年の思いを一旦は昇華させた翌日、巡礼団が登った高野山で足下に感じた「風」の描写に、単なる情景描写以上の意味を見出

高山花子氏

建部良平氏

スクリーン画面は徐嘉熠氏

池島香輝氏

すというものである。さらに建部氏の視点のユニークさは、石牟礼が傾倒した白川静の漢字学における「風」という文字の議論を接続した点である。白川の学問は古代人のアニミズム的な世界観を描くことに注力しており、その表現の文学性は石牟礼と通底すると指摘した。その上で、具体的には、『椿の海の記』と『水はみどろの宮』における未分化世界と言葉の世界（人間の世界）との関係の違いとそれぞれの「風」の描かれ方を分析した。そして、「風」の表現が見えない存在、未分化世界との触れ合いと変身、閉じられた一つの世界から別のもう一つの世界への回路が見いだされる瞬間と密接な関係にあると指摘し、その上で『苦海浄土』における「救い」の議論と結びつけた。

2番目の発表は徐嘉熠氏の「『不知火』における『山海経』の受容について――「夔」のイメージを中心に」であった。徐氏の発表は、これまであまり論じられてこなかった石牟礼作品に見られる中国古代イメージと東アジアへの越境性を明らかにした画期的なものであった。徐氏は、石牟礼が白川静の研究に傾倒していたことを踏まえ、具体的には石牟礼の新作能『不知火』に登場する「夔（き）」に着目して、石牟礼が中国古典イメージをいかに捉え、作品に取り込んでいたかを分析した。能『不知火』は、竜神の姫と弟が海底の毒をさらい死ぬことにより来世で夫婦になれるという筋で、その道行と祝婚の場面で終わる。その祝婚の場面で呼び出されるのが「歌舞音曲を司る、もろこしの楽祖」の「夔」である。「夔」が磯の石を撃ち妙音を鳴らすと、浜に惨死した百獣らが呼び出され舞い狂う。この「夔」のイメージについて、徐氏は石牟礼が白川の解釈を通した『山海経』とその他の中国古代文献をもとにしながらも、「楽官」を「楽祖」に変えた点に着目する。つまり「君臣」の縦の権力関係から外して、世界の源にある音曲の始祖として登場させることで救済を描こうとしたというのである。また音曲の源たる「夔」の鳴らした妙音は、言葉でも歌でもない、それらが生まれる前の無意識の音であるがゆえに、生命に呼びかけるのにふさわしいものであった。そして石牟礼にとって神話イメージが重要であったのは、「夔」が人間・非人間の特質を同時に一つのイメージとしてもつ「生命の総合体」であるように、被害者と救済者が一つとしてありうるような多義性を可能にするからだと主張した。石牟礼が近代の行く末に新しい神話的イメージの力で対峙しようとしたとするならば、それは日本の古代世界だけで捉えられるべきものではなく、その越境性にこそ見いだされるべきであろう。徐氏の発表は、石牟礼文学の源泉たる地脈水脈が、中国の古代文献の想像力に確かに通じていたことを明らかにした点で、大きな意義があると感じた。

最後の発表は池島香輝氏の「「もだえ神」たちのかなしみ――『椿の海の記』を読む」である。池島氏は、石牟礼の幼少時代を「みっちん」という4歳の少女を通してみた世界として回想的に創作した作品『椿の海の記』（雑誌『文芸展望』1973 - 1976年に連載）を中心に、みっちんの「魂の乖離」と「もだえ神のかなしみ」というテーマを論じた。石牟礼の創作活動の並走者というべき編集者の渡辺京二は、石牟礼作品の特徴として、文字＝知識で構成され知覚される二次的疑似的に知覚される「ワールド」とは異なる、自

身を中心に同心円状的かつ具体的に総合される神羅万象の世界である「コスモス」が描かれている点を指摘した。その上で、言葉の世界（人間の世界）に触れることで次第に「コスモス」から剝離せざるを得ないみっちんの抱く孤絶感と、近代と遭遇することで「ワールド」から疎外され魂の放浪者になった前近代の民の嘆きが異なりながらも重ねあわされるのが『椿の海の記』であると論じた。この渡辺の論を踏まえながら、池島氏は、作品の中で、具体的にそのコスモスを構成する存在について検討し、異人的存在と異形的存在を抽出していった。とりわけ、みっちんの祖母で、夫が妾を作ったことがきっかけで魂が漂浪き出てしまった「狂女」で「盲」の「おもかさま」に着目し、その「かなしみ」にみっちんの魂の孤絶の「かなしみ」が重ねられる在り方を「もだえ神」として見る可能性を示し、石牟礼文学の基底を成す部分を丁寧に論じた。

池澤夏樹氏「みっちんの魂――みなさんのお話を聞きながら」――講演に代えて

以上、3 名の若手の発表を受けて、池澤夏樹氏が「みっちんの魂――みなさんのお話を聞きながら」と題し、それぞれに応答をされながら話された。それは、思い返すに、まことに豊かな時間であった。池澤氏は、あらかじめ用意された原稿にそって滔々と話されるのでは全くない仕方で、若い研究者たちの研究発表について、それぞれ自身がどこにインスピレーションを受けたり、連想を得たりしたのか、ゆっくりと内容を吟味しながら、大事な言葉だけを選んで静かに語ってくださった。つまり、あくまで作家・詩人として対峙しながら、もっとも真摯な形で応答してくださったのであり、それは大変なエネルギーを要したものであろう。

たとえば、「風」については、見えないことが大事である、ということを語られた。宮沢賢治や宮崎駿は風をモチーフにした作品が多いが、その作品では風は視覚的な表現を得ていくのに対して、石牟礼は見えないものを見えないままで、聴覚や触覚や嗅覚で描くのだという。また、石牟礼さんは映画の影響を受けていない点も重要で、映画のカットの切り替えのような描き方が見られず、主観的世界で終始する、という。そして石牟礼さんが、いかに耳がよいか、というお話も印象に残った。

『椿の海の記』については、「みっちん」に同じ年の友達がいない、ということ、そこから疎外されている存在である、と自覚していることが決定的である、と述べられた。石牟礼さんが子供たちと戯れる幼少時代を過ごしていたら、石牟礼の文学は生まれ得なかったのかもしれない。

中国神話については、石牟礼さんがよく巫女のようだといわれるが、神がかりな人ではなく、神話的なものを魂の中にもっていて、そっちの方が居心地がよい、と感じている人だったとおっしゃったのも興味深かった。ただ人間世界で生きていくにはそうもしていられない、それが辛くて若い時分に何度も自殺を図ったが、言葉での表現手段を得て人間世界に対する自分のスタンスが作れるようになった。そこから水俣病患者との付き合いもしていった、と述べられた。石牟礼にとって言葉は、神話的混沌の世界から剝離させてしまうも

池澤夏樹氏

鈴木将久氏

山田悠介氏

のでありながら、一方では言葉で「書く」ことなくしては生きられない、矛盾に満ちたものだったことがよくわかる。そして中国神話については、池澤氏ご自身が愛唱されているという、晩唐の詩人・李憑の箜篌引の歌を紹介くださった。また、ある時、石牟礼さんからお電話をいただいて、夢を見た話をされたときのエピソードも魅力的であった。石牟礼さんは、夢の中で誰か女性が「あしたっから、おてんとさまがいなくなります」と告げたというのだが、それはアメノウズメだったのではないか、と伝えたいと思いながら亡くなってしまったのだという。

このように、池澤氏が、石牟礼さんの文学や言動から、ご自身にとってほんとうに汲み取ったと感じられる、重要なエッセンスの部分だけを惜しみなく教えてくださった。

そして、最後に「自分は石牟礼さんの素晴らしい表現などをいろいろと知っているけれども、研究者ではないから、緻密な分析などはできるだけしないようにしている。大事にしているものの中でも、とっておきの、石牟礼さん自身から伺った言葉をここで披露したい」とおっしゃった。そこで朗読されたのは、海辺の岩にしがみつく巻貝の群れの呼吸と自身の呼吸とをあわせて、そこで夕刻の暗闇を迎えるまで無限の時間を共有する幸福感を概念的抽象的な言葉を一つも使わずに表現しきった、石牟礼文学の至福の部分が結晶化したような一節であった。それが池澤氏のかすかに震えるような繊細な声で読み上げられると、石牟礼さんの柔らかい声とも重なって響くような不思議な感動が込み上がってきた。それはなんと美しい瞬間で、豊かな体験だったことだろう。

これまで世界文学から日本の古典文学に至るまで数知れぬ文学作品を読まれてきて、ご自身も日本語の文体を問うような革新的な作品を多く発表してこられた池澤氏が、世界文学として石牟礼作品を選んだのはなぜなのか、そのエッセンスが肉声によって伝えられたことは、改めて得難いことであったと感じている。

コメントと全体討議

以上のやり取りをも含めて、鈴木将久氏（東京大学）と山田悠介氏（大東文化大学）から、それぞれコメントがなされた。鈴木氏からは、発表者3名に共通性がある点を述べられた上で、白川静の漢字学について石牟礼が、どのような部分からインスピレーションを得て作品に取り込んだのか、という問いが投げかけられた。白川が述べるのように、神話は言葉によって作られるが、定着させるのは「文字」である、とすれば、文字化する次元をどう考えていたのか、石牟礼は白川から得た着想から、さらに別の形へと展開させた可能性がないか、というものであった。

そして、山田氏からもそれぞれの発表に対する応答がなされた。建部氏が指摘した石牟礼作品の風については、二つの世界をつなぐ移行や変身をもたらすエレメントとしての読みに加え、風と場所の問題、風の記憶や経験の問題が新たに提起された。また徐氏に対しては、東アジアへの視座の重要性に言及した上で、石牟礼の中国古代イメージが白川静を経由したものである点の重要性が改めて指摘された。さらに池島氏に対しては、コスモスの構成要素における草木石の問題、そして「おもかさま」との関係における自他の境界の曖昧化について、『あやとりの記』の一節を引きながら、二つの魂は異質なままで一緒にある可能性について示唆した。

これらの問いや意見に対するそれぞれの発表者からの応答があった上で、全体に議論が開かれた。議題としては、白川静の影響が具体的にいつから見られるのか、といった問題や、文字への態度の変化についての質問があった。またこの会がもともとCOVID-19をきっかけとして、疫病や災害に対峙する人間の書く営みについて考えたいというところから発したところに立ち返ると、この読書会の中でそれぞれ何を得てきたか、という問いもあった。最後の問いについては、今年度のしめくくりに何らかの形で応答できるように準備をしていきたいと思う。

今回、久しぶりに対面形式を交えて行われたワークショップであったが、オンラインでも回を重ねてきたメンバーを中心に行ったものであったので、くつろいだ雰囲気で打ち解けた話ができたように感じた。その分、オンラインでの参加者とのコミュニケーションがとりにくいという課題は残されたが、会場では、いわゆる研

究会での討議というよりは、フランクに対話をする場となった。それは、池澤氏の創作者としての態度と私たちの研究者としての態度が異なっていながらも、交叉した結果のようにも感じられる。

今では平地でも雪が降っているという北海道から、冷たい空気の名残をまとった池澤氏が、イチョウの色づく駒場のキャンパスにいらっしゃってくださった。そして同じ場所に存在して、肉声で対話を交わすことができた。この体験は、これからずっと繰り返し思い出すのではないか、と思う。短い時間であったにもかかわらず、じっと耳を傾けている静かなたたずまいや、絞り出すようにお話しされたことや、朗読の声の調子と息遣いというものが、同じときと場所を共有することの深く豊かな意味を教えてくれた。最後に、改めて心から感謝申し上げたい。

報告者:宇野瑞木(EAA特任助教)
写真撮影:齊藤颯人・立石はな(EAA特任研究員)

第5回 EAA沖縄研究会

崎濱紗奈「琉球／沖縄と宗教――伊波普猷『古琉球の政治』を出発点として」

2021年11月19日

2021年11月19日（金）、第5回EAA沖縄研究会が開催された。今回からの3回（第5回～第7回）は、2月5日（土）に開催予定のシンポジウムの準備会として、登壇予定者が発表を行う。シンポジウムは「「琉球」再考」と題し、「琉球の歴史・文化・宗教」をテーマとしながら、「琉球」という名のもと自明視されてきた表象を問い直すことを目的としている。今回は報告者（崎濱紗奈〔EAA特任研究員〕）が「琉球／沖縄と宗教――伊波普猷『古琉球の政治』を出発点として」というタイトルのもと、伊波普猷における宗教論の概観を参加者とともに確認した。

1910年代後半から沖縄を襲った経済危機である「蘇轍地獄」が伊波普猷に思想的転回を促したことはよく知られている（たとえば、鹿野政直『沖縄の淵――伊波普猷とその時代』を参照）。とりわけ著しい変化が見られるのは伊波の宗教観である。「蘇轍地獄」を挟んで、個人と国家を接続するメディアとしての宗教に期待をかけるという立場から、王権による租税徴収の正統性／正当性を担保する機能を果たしたとして、宗教の在り方を根本的かつ批判的に問い直すという姿勢へと変化した。『古琉球の政治』（郷土研究社、1922年）は、こうした転換の出発点とも言うべき著作である（伊波普猷「「古琉球の政教一致を論じて経世家の宗教に対する態度に及ぶ」を読む」参照〔https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/202105-lecture-worldhistoryandeastasia4/〕）。

その後の伊波の宗教研究は、『をなり神の島』（楽浪書院、1938年）、『日本文化の南漸』（楽浪書院、

1939 年）、そして『沖縄考』（創元社、1942 年）に結実する。琉球における王権の成立過程を明らかにし、「神」と王の関係を突き止め、さらには王権成立以前の「神」と共同体との関係性にまで迫ろうとする伊波の関心は、琉球／沖縄に留まるものではない。その射程範囲には、王権および国の成立、さらに踏み込んで言うならば、「政治」の発生という問題を問うところまで含まれている。こうした探究を深めるべく伊波が参照したのは、柳田國男や折口信夫、あるいはエミール・デュルケームや W.H.R. リヴァーズらによる民俗学・社会学・人類学的な知的営みであった。言語学を専門とする伊波が、これらの諸領域と自らの知を接続することによって開かれたのが、伊波の「おもろ」研究であったと言えよう。

ディスカッションでは、山にまつわる信仰や習俗との比較の可能性や、国家神道に対する伊波の批判的な立場といったテーマについて議論が交わされた。

次回は 12 月 10 日（金）に開催予定である。前野清太朗氏（EAA 特任助教）に、「樹木信仰と伝統観察者」というタイトルで発表いただく予定だ。台湾をフィールドとしてご研究を積み重ねてこられた前野氏の視点から、「琉球」を問い直す契機を獲得したい。

報告者:崎濱紗奈（EAA特任研究員）

〈現代作家アーカイヴ〉文学インタヴュー

第23回 町田康氏

2021年11月19日

2021 年 11 月 19 日、第 23 回「〈現代作家アーカイヴ〉文学インタヴュー」の模様が Zoom にて公開収録された（EAA、UTCP、東京大学ヒューマニティーズセンター、飯田橋文学会による共催）。インタビューでは、作家の町田康氏をお迎えし、批評家の矢野利裕氏が聞き手を務め、町田氏自選の代表作『くっすん大黒』（文藝春秋、1997 年）、『告白』（中央公論社、2005 年）、『湖畔の愛』（新潮社、2018 年）の三作を中心に話が展開された。

インタビューは、町田氏の作家デビュー作『くっすん大黒』の執筆経緯に纏わる話に始まった。町田氏の創作の原点には、二つの経験が絡んでいるという。その一つが、町田氏が十代のころに触れた、当時ブームであったパンク・ロック。従来は芸事としての音楽であったものが、感情を率直に吐露し日常的な出来事を謳う、見た目の印象もこれまでと違うロックに感銘を受け、音楽を始めたと町田氏は語る。と同時に、その創作力の源には、自身の用いる語彙の違和感が関わっているという。だが、その言葉遣いが詩集『供花（くうげ）』（思潮社、1992 年）の依頼に結びつき、その詩集が注目されて雑誌からの執筆依頼が舞い込むようになり、最終的には小説を執筆する機会に繋がることとなった。

日常の出来事を謳い上げるロックへの関心は、町田氏の内田百閒（1889-1971）への興味にも少なからず関係しているように思われる。ギター担当者から内田百閒のことを聞き知ったという町田氏は、後に内田の著作に目を通した際に、強い共感を覚えたと話す。日々の生活におけるちょっとした引っ掛かりや感覚を、人にわかる形で言語化するその作品に、触発されたと町田氏は述べた。

インタビューでとりわけ興味深かったのは、矢野氏

左から順に矢野利裕氏、町田康氏

から時折投げかけられる小説をめぐる意識に纏わる問い、それに対する受け答えから浮かび上がる町田氏の小説との向き合い方だった。先行する日本文学との接続性について問われると、そういう意味では何も参照していない、と町田氏は話す。町田氏が初めて日本文学を本格的に読んだのは、音楽活動を 3 年ほど休止し、家に籠もっていた時のことであったという。それまで日本文学のもつ独特の湿度／内面を忌み嫌っていたものの、その時初めて日本文学を面白く楽しく読んだと振り返る。とはいえ、その創作過程では、前例や先行先品を特に意識し、それらに近づけようとはしなかった。それでも結果的に、さまざまな記憶が作品に反映することがある。例えば、『くっすん大黒』の主人公の一人語りについて振り返る中で、テレビで目にした一般人の芸に対してプロが講評する番組の中で、ある一人の男性が落語「寄合酒」を披露した際の記憶、そして筒井康隆の『夜を走る トラブル短篇集』（角川書店、2006 年）に登場するタクシー運転手の大阪弁での一人語り、その二つを合わせたようなものになったと明かす。意識したものではなかったものの、事後的に考えるとそれらが「自分の頭の中に残って」おり、その前に読み、耳にしたものが自分の中に「言葉の塊」として確かに入っていた、と町田氏は言う。こうした小説をめぐる意識は、「初めからこういうことを書こうと思って書いている小説」、すなわち恣意的・過度に作為的な小説をあまり良いものとは思えないと語る町田氏の価値観にも色濃く反映されている。

今回、町田氏の小説をめぐる意識を追体験する中で印象に残ったのは、その活動を貫く、町田氏の創作に対する姿勢であった。一度試したことは、「こういうふうにやるとこうなる」というのがわかってしまう。それゆえ、一つの技法を使い続けないスタンスをとり続けてきたという。この技法・題材の遍歴に関して、上手くなってくると「楽してええんかな」という心持ちがしてくる、と町田氏は明かす。次々と新たな題材・技法・手法を繰り出し創作に取り組んできた町田氏の活動歴には、慣れに甘えることなく、常に新たなことに挑戦し続ける姿が垣間見えた。

インタビューの本篇では、自身の好きな言葉「湖畔」から連想・展開したという『湖畔の愛』（新潮社、2018 年）に関連したエピソードなど、町田氏の様々な創作秘話が明かされ、矢野氏のリクエストした「付喪神」（『記憶の盆をどり』〔講談社、2019 年〕）のハイライトシーンを、町田氏自身が朗読する様子なども収録されている。収録された内容は、近日中に飯田橋文学会のページ「文学インタビュー」で公開される予定である。公開収録を見逃された方にも、町田ワールドをぜひご堪能いただきたい。

報告者:片岡真伊（EAA特任研究員）
写真撮影:宇野瑞木（EAA特任助教）

スピノザ協会·東アジア藝文書院（EAA）共催シンポジウム

日本におけるスピノザ受容をめぐるワークショップ（2）

2021年11月20日

「日本におけるスピノザ受容をめぐるワークショップ（2）」が、スピノザ協会と東アジア藝文書院の共催により、11月20日オンラインにて開催された。スピノザ協会では、国際的なスピノザ研究の連携に基づき、日本でどのようにスピノザが受容されてきたかを総括する連続ワークショップを行っている。2回目となる今回は、西田幾多郎と田辺元という日本を代表する哲学者によるスピノザ解釈を取り上げることになり、スピノザ研究を超えて拡がる内容となるため、東アジア藝文書院との共催企画として開催された。

1人目の発表者として、田辺の専門的研究で知られる竹花洋佑氏（福岡大学）をお招きし、2人目の発表者として、わたし（朝倉友海）が西田をめぐって発表を行った。

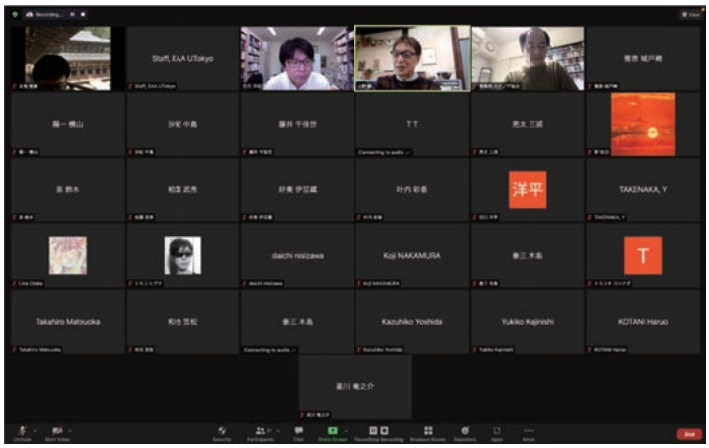
「田辺元のスピノザ理解――「限りの神」（Deus quatenus）をめぐって」と題された竹花氏による発表は、田辺の論文「個体的本質の弁証論」（1932年）および『マラルメ覺書』（筑摩書房、1961年）に見られるスピノザ解釈が、田辺自身の哲学的変遷の中に占める位置に光を当てている。上記二つの論考のあいだで田辺自身の哲学は大きく変化しているとはいえ、スピノザ理解に限って言えばほぼ前者の段階で固まっていると考えられることにより、その背景をなす1930年前後の田辺哲学の概略を示すことから発表は始まった。

日本哲学史上の出来事として、田辺による西田批判は比較的よく知られている。だが、1930年代の田辺が、自らの批判を撤回するかたちで西田哲学へ再接近し、その上で今後は以前より激しさを増して西田批判を再開していくことをめぐっては、広く理解されているとは言い難い。身を以て弁証法的に自らの思想を展開していったこの時期の田辺に特徴的に見られる「身体性の弁証法」に竹花氏は着目し、身体性を介した「様々な共同性の層」の考究がやがて「種の論理」へと展開していく推移を、整理して示した。

この時期（1930年前後）の田辺哲学における身体性への着目こそが、竹花氏によれば、スピノザ理解と深く繋がっている。論文「個体的本質の弁証論」での主張は、「限りの神」という（スピノザ解釈史において術語化された）表現があくまでも「弁証法的にのみ理解せられる」というものであるが、この論述の背景をなしているのが「身体性」をめぐる田辺自身の考察なのである。竹花氏はこの点を分析するとともに、田辺の影響のもとに石沢要の『スピノザ研究』（創文社、1977年）といった日本のスピノザ研究史への影響をも明らかにした。

続けてわたし（朝倉）が、発表「スピノザ批判としての西田の絶対無」を行った。西田とスピノザの関係については、これまでも竹内良知や小坂国継の論考があるため、二つの先行研究によって浮かび上

竹花洋佑氏



がる問題点の考察から論を起こした。前者に対しては、実体論に対する批判に限ってスピノザとの接点を見ることの限界を指摘し、身体や自愛をめぐるスピノザへの言及が中期西田哲学の進展において欠かせないものとなっていることを論じた。また小坂氏の論考に対しては、西田とスピノザに共通とされる「内在主義」を改めて検討するとともに、両者を対比的に見ることがどこまでできるのかを再検証した。

西田哲学の特徴としてとりわけ重要なのは、いわゆる「述語主義」ではなくいわば双方向主義であり、双方向的な追究こそが中期西田哲学の「骨」となっている。双方向性を核とした内在主義にこそ、スピノザとの深い関わりがあるとわたしは結論付けた。この点をめぐって発表後すぐに疑義が呈されることで、活発な議論が交わされるきっかけとなった。

休憩を挟んで約 1 時間にわたり行われた討議について、内容を紹介することが困難を極めるのは、わたし自身が発表者の 1 人でもあったために客観的にまとめることができないことのほかに、主としてその議論がかなり専門的な点に立ち入ったためである。『エチカ』の諸命題にラテン語表現の検証を含めた分析が行われる一方で、日本哲学をめぐる新出資料にまで話が及ぶといった具合であり、その白熱した討議を限られたスペース内で、広く理解可能な仕方で記述することはできない。ただ事実確認として、幾人かのスピノザ研究者と発表者 2 人を中心として大変活発な議論が交わされたことを、ここに記すにとどめたい。

朝倉友海氏

西田と田辺の哲学的対決は、日本の哲学史において大きな出来事であり、そこにはスピノザの影がある。このことを明らかにする実り多きワークショップが実現したのは、スピノザ協会がもつ高い専門性と、東アジア藝文書院による日本哲学や東アジア思想への深い関心（そして行き届いた技術的サポート）がうまく組み合わさったからであり、この点をめぐってスピノザ協会から感謝の意が表明された。スピノザ協会の平尾昌宏氏（立命館大学）による閉会の辞を額面通りに受け取ってよいとするなら、今回のワークショップを通じて日本におけるスピノザ受容の理解が大きく進展したと言えるだろう。

報告者:朝倉友海（総合文化研究科）

連続シンポジウム「世界哲学·世界哲学史を再考する」

第6回　世界哲学と宗教

2021年11月22日

2021 年 11 月 22 日、連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」の第 6 回「世界哲学と宗教」が ZOOM にて開催された。この連続シンポジウムは、2020 年に筑摩書房から刊行された『世界哲学史』シリーズ（全 8 巻 + 別巻）の編者である納富信留氏（東京大学人文社会系研究科）をオーガナイザーとして迎え、「世界哲学（史）」という概念を再構築し、その方法論的な意義を探る試みの一環である。

今回のシンポジウムでは、マクロな比較宗教学の再構築に取り組む藤原聖子氏（東京大学人文社会系研究科）、西洋中世における神学の成立と哲学受容の関係を研究している加藤和哉氏（聖心女子大学）が登壇し、世界哲学という観点から見た宗教について講演を行った。それに対して、コメンテーターを務める根無一行氏（大谷大学）からコメントが述べられた。

最初は納富氏から今回のシンポジウムの趣旨説明がなされた。氏によれば、「世界哲学・世界哲学史」は宗教なしには語ることはできない。ちくま新書のシリーズ『世界哲学史』においても、古代・中世を扱った巻においては宗教が中心的なテーマとして議論されていた。しかしながら、近代以降を扱った巻においては、宗教への目配せは限定的なものにとどまっていた。こうした『世界哲学史』シリーズの振り返りを踏まえて、世界哲学と宗教の関係を考えるための論点をいくつか提示しつつ、納富氏は藤原氏と加藤氏にバトンを回した。

『世界哲学史』（全 8 巻＋別巻、筑摩書房）

1 人目の発表者である藤原氏は「「世界哲学」は世界に開かれているか――宗教学も直面する問い」と題された発表を行った。藤原氏はまず、ときに専門の研究者からも提起される「宗教は哲学に入るのか入らないのか？」という問いについて考察するところから発表を始めた。一方に、哲学の視点から見れば宗教は一つの「思想」として広義の哲学のうちに包含されるという立場がある。だが他方、宗教学の視点から見れば宗教とは思想にとどまらない実践・組織・文化にまたがったものであって、むしろ哲学は単なる思想として広義の宗教のうちに包含されるという立場もある。このような相対化を施したうえで、藤原氏は宗教学が西洋から世界に拡大する過程で直面した課題に、世界哲学もまた直面するのではないか、という問題提起を行った。

2 人目の発表者である加藤氏は「キリスト教は宗教か」という題で発表を行った。氏は、自身が務めるカトリック大学の学生たちを事例として、日本人の宗教認識を紹介するところから発表を始めた。私たちがイメージする宗教とはどんなものか、私たちは宗教という言葉をどこから受け取ったのか。宗教に対する私たちの（非）常識を振り返りながら、加藤氏は「宗教」と訳されることになった“religion”という言葉の来歴をたどってみせる。しかしながら、そこで明らかになるのは、私たちが「宗教」という言葉によって普遍的な仕方で宗教を論じることの不可能性・困難であった。このような反省を踏まえると、むしろ宗教という画一的な語を用いた探究をたどることによって、逆説的にそれぞれの時代がどのように宗教的実践を位置づけようとしたのか、というユニークな問題が導き出されてくるのだと加藤氏は述べる。

藤原氏と加藤氏の発表が終わったあと、根無氏が「世界哲学と宗教」に関するコメントを述べた。氏は、

上段：左から順に根無一行氏（大谷大学）・藤原聖子氏（東京大学）
下段：左から順に納富信留氏（東京大学）・加藤和哉氏（聖心女子大学）

「内在／自己」を重視した後期ミシェル・アンリのキリスト教哲学の研究から出発し、「超越／他者」を重視するレヴィナスを経て、「アウシュヴィッツ以後」という問いを携えながら宗教哲学の研究を推し進めている。そんな氏から見て、「世界哲学」の構想はつねに「辺境」を捉えようと試みながら、いつしかその辺境を「中心」化することで挫折してしまう可能性をはらんでいる。だが、そのような挫折に自覚的な営みとして世界哲学を推し進めることこそが重要なのだという見解を氏は示した。このような世界哲学的な見通しを示したうえで、根無氏は藤原氏、加藤氏への質問を行った。この質問に答えるかたちで、納富氏も交えながら盛んな議論が交わされることとなった。

世俗化が進んだ現代において宗教を考えるとはどのようなことなのか。ある共同体にとって自明の前提として宗教的な実践が受け容れられていた時代から、その実践の歴史や意義が絶えず問い直されることが当たり前の時代に変わったとき、私たちはいかに宗教を語るのだろうか。「世界」という視座を持つことは、自己を相対化し、自己の根拠を問い直すことにつながる。宗教が時代の変化のなかでこのような反省の学問として歩みを進めてきた部分に、「世界哲学」が習うべきところが数多くあることが、今回のシンポジウムにおいて明らかになったのではないだろうか。

報告者:田村正資（EAA特任研究員）

一高プロジェクト

『conception -こもり-』上映会

2021年11月24日

2021 年 11 月 24 日（水）10 時より、101 号館映像制作プロジェクトにおいて制作した映像作品『conception – こもり –』の上映会が 101 号館セミナー室にて開催された。

旧制第一高等学校時代の歴史資料を調査して映像作品を制作することを目的とした 101 号館映像制作プロジェクトを進めるにあたって考えていたのは、どうしたら現在の駒場においていまはもういない一高生たちの姿を捉えることができるのか、という問いだった。しかし、昨年末から今年初めにかけて計 7 回行われたワークショップを経て、旧制一高時代に限らず、駒場という場所には幅広い時代の歴史、無数の人々の一様ではない記憶が重層的に刻まれていることを痛感した。

8 月 4 日、日向光子氏の撮影

本作品は、果てしない時間を堆積させる駒場の地層を近過去から掘り起こす作業が、激しい変遷を辿ってきた駒場キャンパスをよく見ることにつながるだろうと考えた報告者である小手川将（EAA リサーチ・アシスタント）の発案を、日隈脩一郎氏（EAA リサーチ・アシスタント）が受けとめて監督・脚本・編集・撮影を務め、高山花子氏（EAA 特任助教）が撮影助手を務めながらプロデューサーとして統括し、一高研究者である高原智史氏（EAA リサーチ・アシスタント）の支えによって実現したものである。

また、本作品は、第 5 回ワークショップにて、詩人・吉増剛造氏とともに駒場を歩き、同じ空間を共有していながらも語りのなかで時間がずれていくようだったという経験を共有してくれた星野太氏（総合文化研究科）の話を参考にして、駒場に縁のある方をお招きして一緒にキャンパスを散歩しながら自由に思い出を語ってもらうところを映像に収める、という形式をとった。聞き手は、企画者の小手川が務めた。

撮影は今年の 7 月から 8 月にかけて行われた。それぞれ駒場で長く過ごしながらも、異なる風景を経験してきた 4 名の方々にご出演いただくことができた。2001 年に東京大学教養学部に入学して現在は総合文化研究科の准教授である星野太氏、東大生協購買部に 1997 年ごろから 20 年ほど勤めている家柳貴子氏、東大生協書籍部に 1988 年から 33 年勤めている日向光子氏、そして、1968 年に東京大学教養学部に入学してから 2015 年に東京大学を退官するまで人生の大半を駒場で過ごした小林康夫氏（東京大学名誉教授）である。

上映会当日は、制作チームにくわえて作品に出演していただいた方々を招待し、ご参加いただいた。また、東大生協書籍部の店長・足立裕太氏と、東大生協購買部の店長・杉田豊氏にもお越しいただいた。

駒場についての各人の個人的な記憶を 17 分 18 秒にまとめた『conception – こもり –』は、いまはもうない駒場寮や旧生協のこと、自然豊かな駒場の植生について、はじめて駒場に来たころの印象など、まったく異なる視点から湧き出てくる駒場にまつわる語りの声が、現在の駒場キャンパスの風景とともに入り乱れるように聴こえる、音声と画面が分離された実験的な作品である。たとえば、駒場寮ひとつとっても、寮取り壊しの陣頭指揮にあたっていた小林氏、寮が閉鎖されたときは学部生だった星野氏、寮内にあった小さな売店でパンをよく買っていたという日向氏、寮廃止時に正門からずらっと警備員が並んでいたのが印象的だったと話す家柳氏では、語りと想起の質が大きく違ってくる。本作品は、そうした多層的な駒場の風景に迫

左から、星野太氏、家柳貴子氏、日向光子氏、小林康夫氏

左から小手川将氏、日隈脩一郎氏、高原智史氏

るという意図のもと、たとえ言葉が不明瞭で聞き取りづらくなったとしても四つの声を重ねるなどして、簡単には捉えられない駒場の風景を示そうとした。

また、作中には、2007 年 12 月 16 日に開催された「共生と詩 (1) ――吉増剛造と《友愛の庭》」というイベントを記録した短編映画『眼の底』(監督・撮影・編集：平倉圭／2008 年) から、小林氏と吉増氏が駒場図書館前から一二郎池まで歩いている映像を引用させていただいた。駒場という場所のイメージに時間的なずれをもたらす映像の引用、小林氏と吉増氏の姿とともに映される十数年前の駒場の風景は、本作品に豊かなエッセンスを加えたことと思う。作品の引用を快諾してくださった平倉氏にはこの場を借りてお礼を申し上げたい。

作品鑑賞後、日隈氏からあらためて作品の企画趣旨が伝えられた。駒場キャンパスは、後期課程進学前の教養学部という学科課程上のいわば「原野」であり、かつ、大都市東京において貴重な植生を示す「野原」でもある。そのような駒場の原野性、自然性に本作品は焦点を当てていると述べた。続いて、高原氏が、本作品の企画を、旧制一高時代の歴史や当時の建造物を擁する駒場＝一高を調査する一高プロジェクトの中に位置づけた。また、聞き手として 4 人の語りに耳を傾けた私から、作品には収まりきらなかった各人の具体的で想像をかき立てられる思い出の数々を、撮影時のスチールとともに紹介しながら、ご参加いただいた方々と自由に話をする時間になった。

そのなかで、作品について星野氏に、角度のついたカメラのアングルやクロースアップの多用、画面の色調などに触れ、本作の視点は非人間的なものだと評していただいた。また、杉田氏は、いまはもうない旧生協や駒場寮の記憶が想起されたと述べ、みずからの個人的な駒場の思い出を語ってくださった。その旧生協の建物は戦後、60 年代ごろに建てられたのではないかと小林氏は指摘し、本作品に登場する駒場の建造物は比較的新しいものが多く、1 号館や 101 号館など一高時代からある建物はほとんど映されていない点を突いた。また、小林氏は、この作品は駒場の歴史にフォーカスするものではなく、駒場という場所を捉えようと悪戦苦闘するさまを映した作品になっていると鋭く指摘し、捉えがたい駒場の姿にどうにか形を与えようとする過程を表現しているところが、本作のタイトルである『conception – こもり –』に含まれている「概念化」や「身籠り」といった意味につながっているのではないかと解釈した。

これを受けて、日隈氏は、出演いただいた 4 人の語りはあまりにも密度が濃く受け止め切ることが難しかったこと、しかしそれでも何とか応答しようという意識が作品に表現されたのだろうと述べた。また、小林氏から、俯いて地面を映すショットが作中に多用されていて、これが監督の視点を示すものになっているという指摘に、日隈氏は自分にとって駒場が憧れの地であり、その地面を歩く自らの足どりを確かめる無意識が表れてしまったのかもしれないと返答した。駒場キャンパスは本郷キャンパスと異なり建物間を歩いて移動するような場所であるという小林氏の洞察も、個人的にはスリリングだった。

作品観賞後も、駒場という場所をめぐって、それぞれの考えや経験が交わされて、何かを思い出すようにして発せられる言葉が駒場という風景を紡いでいき、小さな一つひとつの記憶が空間というものをかたちづくっているということを感じる時間になったのではないか、と思う。

それぞれ長く駒場を過ごした4名の方々の、私的な経験に裏づけられた言葉の数々、駒場を歩く足どりに、聞き手として随伴できたこと、それを映像作品として記録することができたのは、あらためて得難いことであったと感じている。作品に出演し、大切な記憶を語っていただいた星野氏、家㔟氏、日向氏、小林氏には、あらためて心より感謝を申し上げたい。

報告者:小手川将(EAAリサーチ・アシスタント)
写真撮影:立石はな(EAA特任研究員)

一高プロジェクト

映像制作メモランダム(8)

2021年11月25日

7月21日に7本目のメモランダムが記されて以来、4ヵ月が経過してしまった。その後、蝉の声がうるさかった長い夏を経て、短い秋が終わって、11月も下旬となった。7月にはまだシナリオも固まっていなかった101号館映像制作プロジェクトは、8–9月にシナリオが固まり、10–11月に資料や人物の撮影、11月に声の吹き込みを終えて、もう素材は撮(録)り終わり、あとは全体の編集を待つばかりとなっている。まずは、この間、そうした作業にかかりっきりで、メモランダムが執筆されなかったことをお詫びしたい。

さて、そのような構想、制作の作業を終えた今の段階で、シナリオ(小手川将監督と共同で)と、声の出演(6人のうちの1人)を担当した筆者(高原智史〔EAAリサーチ・アシスタント〕)から、「制作」ということについて、いくらか語りたい。

筆者と映像制作との関わり方は、関係者の中でも特異である。本作は、旧制第一高等学校(一高)を研究している大学院生が主人公となっているが、筆者はまさに一高を研究している大学院生であり、早い話が、本作の主人公は筆者がモデルになっている。シナリオというのも、筆者が、駒場入学以来の紆余曲折した大学、大学院生活について、その間に抱いた思いについて、まずは独白録を書き、監督との共同作業の中でシナリオに仕立て上げていくというプロセスが取られた。作品への関与の仕方として、制作サイドと出演者(声および姿の)があるが、両方にまたがって関与しているのは筆者だけである。

この映画がドキュメンタリーであるのか、フィクションであるのかということにも関わるが、まずドキュメンタリーそのものではない。筆者の人生行路を基にしているとはいっても、そこには創作や演技の契機がある。こと筆者に関しては、シナリオを制作するに当たってと、そのシナリオに沿って声を吹き込むに当たってと、二重に創作、演技の契機があった。

まず、シナリオ作成段階では、筆者本人は創作ということをあまり考えられなかった。求められるままに、かなり特異な学生生活(8年間で3回、同じ学部を卒業した上で、大学院に進学したということで、ひとまず量的にその特異性は理解いただけるだろう)を開陳する以上に、それをどう見せたいか、そうしてどのような

映画にしたいかということは、見出せなかった。それを引き出したのは、監督との共同作業である。他者の目が入ることで、筆者の人生行路は、作品として立ち上がり始めた。

本作は、研究者の実存的状況と、研究対象への志向との関係性を主題の一つとしているが、通常の研究活動では、研究者自身の実存的状況というのは顧慮されないか、客観性を装うために隠されさえする。1 人で研究をする場合、自身の実存的状況は、自ら逃れ難いがゆえに、そこから離れ、つまりは自由な立場に立つことが要請されるものかもしれない。しかし、今回のように、共同作業をする場合、自ら消去するという形ではなくて、他者の目に照らされるという形で、主題化され、それによって、自らの実存状況を対象化して、そこから自由になることが構想されてよいのかもしれない。他者の目を通して、自らの人生を主題化し、自分の人生に対して自由な立ち位置を取ること。そのようなリベラルアーツ、自由になるための技法が考えられてよいのではないだろうか。

声の吹き込み段階について言えば、本作のシナリオとは筆者にとって自分の人生であり、それに声を吹き込むことは、文字通りの自作自演であった。声を吹き込むに当たって、筆者自身の課題となったことは、一方では自身の経験や思いが語られているセリフについて、他方では一高生の残した記述を読み上げるに際して、気持ちが入りすぎて、早口になりすぎるということだった。それはおそらく、自身の人生と、そこに投影されてもいる一高生への想いについて緩急をつけることだったと思う。人生はただ生きられるだけでなく、後から振り返られ、そこに緩急がつけられることで、絶えず意味づけが更新されていくものだろう。

万人が万人に、映画化その他の題材化を通して、自分の人生を見つめ直し、他者の目に触れさせることを通して、そこから自由な立ち位置に立とうとすることが可能というわけではないだろう。しかしそれでも、一つのリベラルアーツとして、人生から自由になる一つの手法として、映画制作というのは、「使える」のではないだろうか。それが今回、大学において、リベラルアーツとしての映画制作を志向しながら、自分の人生を文字通りに捧げた者の実感である。

報告者:高原智史(EAAリサーチ・アシスタント)
写真撮影:一之瀬ちひろ(総合文化研究科博士課程)

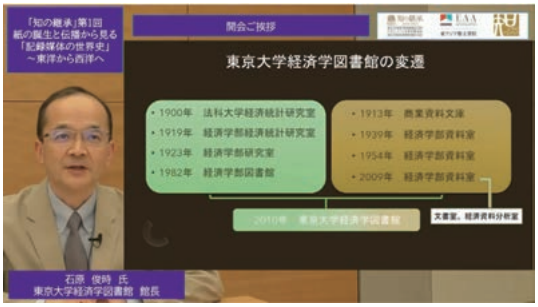
オンライン連続講座「知の継承(バトン)」

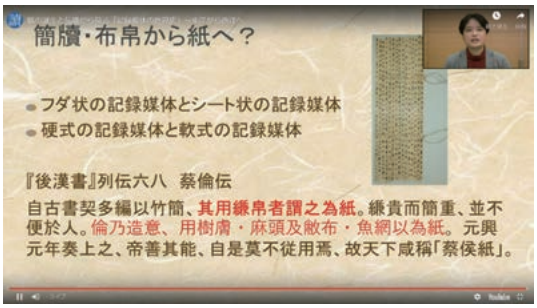
第1回 紙の誕生と伝播から見る「記録媒体の世界史」――東洋から西洋

2021年11月26日

2021 年 11 月 26 日（金）19 時より、東京大学経済学図書館・経済学部資料室、東京大学東アジア藝文書院（EAA）、（一社）読売調査研究機構の三者主催による、オンライン連続講座「知の継承（バトン）」の第 1 回が開催された。このシリーズは全体を通して「記録媒体として紙が果たした役割」をテーマとするもので、今回は「紙の誕生と伝播から見る「記録媒体の世界史」」と題して、特に「東洋から西洋へ」という方向性に焦点があてられているが、これは反転して次回の「西洋から東洋へ」と対をなすという。

登壇者は、石原俊時（東京大学経済学図書館長）、小島浩之（東京経済学部資料室講師）、森脇優紀（同特任助教）の 3 氏で、この連続講座の企画者である、東京大学経済学図書館の主要メンバーが揃い踏みしたことになる。この日の進行は、石原氏による開会挨拶のあと、小島氏によるプレゼンテーション「紙の普及と世界史」、そして小島・森脇両氏のトークセッション「歴史史料をモノから読み解く――何に情報を記





すのか」、最後に質疑応答という 4 部構成であった。

プレゼンテーションに先立って、石原氏より、この連続企画が、東京大学経済学図書館の周年記念行事の一環として企画されたことが説明された。現在の経済学図書館には、図書館と資料室の 2 部門があるが、それぞれの淵源にあたる経済統計研究室および商業資料文庫の創設（それぞれ 1900 年、1913 年）から、前者は 2020 年で 120 周年、後者は 2023 年で 110 周年の節目を迎えることになる。さらに、新渡戸稲造によるアダム・スミス旧蔵書の寄贈（1920 年）からは、2020 年で 100 周年を迎えるということで、この 2020 年から 2023 年を一つの画期として様々な催しを行う一環として、この連続講座も企画されたという。こうした背景・経緯が、歴史的な写真がふんだんに盛り込まれたスライドによって紹介された。「開会挨拶」と言っても、決して形式的な挨拶に留まるものではなく、企画そのものが有する重層的な背景の一端を簡潔に示す、これも一つのプレゼンテーションとして注目される内容であった。

小島氏によるプレゼンテーション「紙の普及と世界史」は 15 分という短時間の間に、文字通り「媒体（メディア）」としての紙の世界史的な見取り図を示す、大変濃密なものであった。ユーラシアの東から西へと製紙技術が伝播する様相を、地図で視覚的に提示したあと、そもそも媒体には「フダ状」「シート状」の別、「硬式」「軟式」の別があること、「紙」はシート状記録媒体一般を意味する文字であり、モノとしては織物（絹布）を指していたが、蔡倫の改良とともに「帋」（ぼろ布を叩解して加工したモノ）が「紙」機能の主流を担うようになっていったこと、メディアの素材の区分に植物由来と動物由来のものがあるが、紙はそのうち前者の靭皮繊維を用いたものであること、こうした事実が、技術・経済等さまざまな要因で変遷していった有様が、簡潔に語られた。さらに、紙で見過ごされがちなのが「サイジング」（滲み止め）であり、これがなければそもそも書写ということ自体が不可能になるが、逆に、これが繊維の破壊の要因（酸性紙劣化など）にもなる点が指摘された。聴衆は、経済学図書館の 100 年の歴史から、その背景にある 1000 年単位での紙の歴史へと一気に誘われることになった。

ここから森脇氏が加わり、トークセッション「歴史史料をモノから読み解く」として、①「紙以前の記録媒体」、②「東洋の紙と西洋の紙の違い」、③「ヨーロッパ人は東洋の紙をどう認識していたか」という三つのトピックから、対話が繰り広げられた。まず、小島氏が説明する東洋に対して、西洋はどうだったかと

いうところから話は始まり、有名な「パピルス」（paperの語源にあたる）や「羊皮紙」が、厳密には「紙」の定義（繊維を水中に分散させて、脱水・乾燥の工程を経て、繊維を絡み合わせてシート状にしたもの）には入らないことが、その形態や製法・用法の歴史的変遷と共に説明された。現代で「紙」と見なされる存在が、そのモノの組成と機能の点で、歴史的には必ずしも一致していなかったこと、羊皮紙を「紙」と言うのは、モノの組成でなく機能からの表現であることがよく理解できる。我々の身近にあるのっぺりした紙が、その歴史的・地域的な奥行きをもって、言わば立体的な理解を促すものとして、我々の前に立ち現れることになった。

これを承けて、東西それぞれにおける「紙以前」から「紙」への移行について、「ペン、インク、活版印刷」「筆、墨、木版印刷」といった書写方法から、時空共に非常にスケールの大きな比較がなされた。さらに、東西それぞれの紙の製造工程について、実際の工房の写真や、歴史資料に示されるスケッチから具体的に示し、それぞれの地域で独自の素材・技術の発展があったことが説明された。

後半は、東西の出合い、東洋からやってきた紙をヨーロッパではどのように認識していたか、という話題であった。マルコ・ポーロやイエズス会宣教師の残した記録の中に、紙の種類に関する詳細な記載があること、西洋ではペン書きという習慣から、記録媒体としてはガンピ紙がもっとも適していたらしいこと、いっぽうコウゾは主に贈答用に使用されていたらしいこと、等が指摘された。重要なのは、こうした事実が、歴史的な記録からの類推だけでなく、世界各地に残存する遺物を実際に熟覧し、料紙調査の手法による定

性・定量データによって裏づけられていることである。

最後に、紙のあり方は、その生産環境、使用環境、自然環境、社会環境、政治情勢などにより相違が生じること、この相違から、史料の生成時代や地域を確定したり、時に真贋を暴いたり、それをとりまく人々の相対的な力関係を読み解いたりすることができる、とまとめられた。おそらくこれらは、紙に限らず、ひろく人間の道具について、その比較史に応用できるのではなかろうか。

以上のセッションを承けて質疑応答が行われた。質問内容は多岐にわたったが、最後に、記録媒体として現今無視できない存在になっている「デジタル」との比較についての問いに対して、紙という媒体が長い歴史を有するという事実だけでなく、その視覚的な相違と使用形態の相違との関係について言及があったことは注目された。こうした比較をより深掘りするためには、デジタル・メディアについて、その近視眼的な利活用の側面だけでなく、両氏が紙に対して積み重ねていたのと同様のレベルでの分析や、比較のための枠組み構築が必要となるのであろう。課題のバトンは、質問者や視聴者にも渡され共有されたものと思った方がよさそうである（なお、本講座の申込者数

小島浩之氏

森脇優紀氏

は 581 名、視聴回数は 553 回であった。公開講座の要旨は読売オンライン（https://www.yomiuri.co.jp/culture/academia/20211203-OYT8T50038/）に掲載されているので併せて参照されたい）。

報告者:矢野正隆（東京大学経済学部資料室）

第1回 EAA「民俗学×哲学」研究会

2021年11月26日

2021 年 11 月 26 日、第 1 回 EAA「民俗学×哲学」研究会がオンライン上で開催された。EAA の張政遠氏（東京大学）の発議によって立ちあげられた本研究会は、今回がはじめての公開イベント開催であった。広義の民俗（学）的なものは EAA の個別研究会（石牟礼道子を読む会・沖縄研究会・部屋と空間プロジェクトなど）においてもたびたび取り上げられてきた。本研究会は、今までの研究会以上に踏み込んで哲学と民俗学のコラボレーションをめざす集まりである。ゲストスピーカーにお越しいただいた山泰幸氏（関西学院大学）は民俗学／文化人類学的な異人論・貨幣論から研究をスタートされ、社会学理論・日本思想史論へ幅広く活動を展開してこられた「越境」の碩学である。今回は同氏のご自身の学術的な歩みを回顧していただきながら、理論から地域協働の試みへと展開してゆかれた過程を「東アジア災害人文学の可能性」と題してお話しいただいた。

山氏は 2009 年より徳島県三好郡東みよし町と多角的なまちづくりの協働を行ってこられた。一連の活動の発端は、大学教員として・民俗学研究者としての民俗調査実習であったという。大学教員が学生を調査員として聞き書きをすすめるタイプの民俗調査は、日本民俗学の研究者が大学に活動の拠点を得て以来長い歴史をもつ伝統的な調査の方式である。通常、調査のカウンターパートは地元自治体の教育委員会や郷土史家・学校教員となることが多いなか、東みよし町ではやや異なる受け入れ態勢がとられた。フィールドワーカーの報告者（前野）自身も調査側となることが多いゆえ、ハッとさせられる視点なのだが、大学教員が引率する調査班は、外から来た大勢の学生からなっている。調査を受け入れる側から民俗調査実習を見てみると、大きな観光名所やリゾートでもなければ稀な、外からの「若者」の団体の来訪となる。東みよし町では、山氏率いる調査班の受け入れのために町役場各部署の若手職員のつくった「まちづくり戦略プロジェクトチーム」が受け入れに対応を行った。それが、山氏と東みよし町の人々の、調べる者と調べられる者を超えたかかわりの契機となったという。実践の具体化に向けた相互の模索のなかで、役場若手と商工会若手を交えた勉強会、地元祭り（加茂大楠まつり）運営への学生参画、空き家を回収した交流拠点おおくすハウス開設といったプロジェクトが生まれ

山泰幸氏

た。 大学と地域の協働プロジェクトのなかで、山氏はよそ者ゆえに課題が見える「異人」的な立場、あるいはよそ者ゆえに仲立ちができる「媒介者」的な立場を発見していった。 協働のなかでは、集落自治会長や役場若手・商工会若手の地域住民と内外をつなぐ能力をもった「媒介的知識人」たちを、よそ者として結び付けるメタな「媒介者」の役割がとられることもあった。

山氏が「異人」「媒介者」として立ち回るなかで、とくに見えたことのひとつが、当事者たちがお互いの悩みや課題を話し合う場所が地域にないことであった。 話し合う場所の欠乏ゆえに生まれる協働活動の行き詰まりが出てくるなかで、同氏が着目したのは哲学カフェ（Café philosophique）の技法であった。 哲学カフェは本学の共生のための国際哲学研究センター（UTCP）においても「哲学対話」の一環として過去実践されてきた技法である。 3 ヵ月に 1 回、 地域密着型の喫茶店で開かれる同イベントには「媒介的知識人」となりうる多様なバックグラウンドの人々（学生・会社員・自営業者・主婦など）が集まっている。 今年度も感染症流行のなか、 ハイブリッド方式を取り入れながら場所の維持が試みられているという。 報告において、 山氏は「災害」を広義の意味合いで用いておられた。 これは防災学者・岡田憲夫の現代の諸危機をとらえる「Persistent Disruptive Stressors（PDSs：続発し社会を破断する力）」の枠組みを援用し、 国外研究者との交流を通じた概念のすり合わせを経て、過疎をコミュニティ破断の「災害」として位置づけたものという。 東みよしにおける実践は、既存の開発学・災害学のいうところのレジリエンス（強靭性）概念を超え、 人文的な知の技法をもって地域の内なる「ことば」を洗い出し、 結びつける高度な試みである。

EAA「民俗学×哲学」研究会は第 2 回が 12 月（報告：張政遠氏）、第 3 回が 1 月（報告：塚原伸司氏（東京大学））にそれぞれ開催される。 オンライン・ネットワークを通じて、ぜひ広範な方々と繋がってコラボレートの輪を広げられれば幸いである。

報告者：前野清太朗（EAA特任助教）

一高プロジェクト

映像制作メモランダム (9)

2021年11月26日

紆余曲折を経て、101 号館映像制作プロジェクトでは、旧制第一高等学校と当時を研究する現在の大学院生を描く映画の構想が、この夏、現実化に向けて、一気に動いた。 昨年 11 月に行われた第 1 回ワークショップ以来、シナリオを含めた作品制作について集まるワークショップは、今年の 9 月までに 37 回を数えた。その間、それとは別で、シナリオの改稿が重ねられ、相当数の制作方針に関する打ち合わせを経た上で、10 月初旬から、駒場キャンパス内での撮影と、情報学環メディアスタジオでの声の録音を行った。 現在、編集が進んでいる。 来年 3 月には駒場キャンパス内で上映会を予定している。

制作プロセスの大半に参加しながら実感するのは、映像作品に切り取られるのは、ごくごく一部である、ということである。 何のごく一部なのか、と聞かれたら、おそらくは世界なのだろうが、正直なところそのような全体的なものを想定してよいのかさえも、よくわからない。 合計で撮られた映像のすべてが使われない、という意味にはとどまらない。 今回の場合、少なくとも、一高をめぐるすべてはあまりにもとらえがたく、作品は、そのほんの切っ先がどこかに触れるか触れられないか、くらいなのだと思う。 それくらいに、この 1 年以上、ほとんど高校生と呼んでしまってよいほどに若い、数え切れないほどの数の、駒場に訪れては去っていった、個々の若者たちの人生がたしかにそこにあったことが痛感された。 ひとくくりにはできない。 だとすれば、ど

のように、彼らに迫ろうとした上で、僅かしか切り取れないことを承知で、切り取り、編み直すことができるのか。できあがったあとの作品で批評に晒される一つは、その切り取り方と編み方であることがいまから思われる。

旧制第一高等学校時代の資料群とその研究調査にあるていど立脚している点が今回の制作の特色だが、意識的にであれ無意識的にであれ、扱われなかった資料は少なくない。その中には、藤木文書アーカイブスチームの活動ではたしかに目を通され丹念に調査されているものもあれば、戦火が激しくなる中、疎開先で展開された一高生たちの活動記録や、中国人留学生の学外での活動、1945 年 11 月頃に特高館と当時呼ばれていた 101 号館にて開かれた学生たちによる委員会の記録といったものなど、歴史をどう見るのか鋭く突きつけてくるにもかかわらず、わたしたちがいまだにじゅうぶんには向き合えていない資料が大量にある。

時代的なことで言えば、1940 年前後と現在を結ぶ、1950 年代から 1990 年代までの時代、とりわけ、1968 年の学生運動の頃の駒場には、触れることができなかった。それは、思いがけず、制作過程で派生して生まれた短いドキュメンタリー『conception - こもり -』においても、同様であった。そもそも、7 月と 8 月に、駒場に縁深い 4 名の方から、1960 年代から 2000 年代にかけての膨大な証言を得ながら、それらが作品に直接用いられることはなかった。その是非を問うわけではなく、このような事態が生じることそのものに、わたしはおもしろさとおそろしさを同時に感じている。

わたしたち映像制作チームは、何を映像にしうるのか、映像でしか表現できないものは何なのか、という問いを投げかけられているのだろう。その問いは、このプロジェクトそのものの企図を、絶えず、根源的に揺り動かしているように感じている。映像を創ろうとすることで初めて目の当たりにしてアプローチ可能になった問題系がたしかにある一方で、そこから零れ落ちてゆく現実たちを、どのように掬い取れるのか。もしかすると、録音した音声を文字として書き起こしてゆくシンプルな手法が相補的な役割を果たすことになるのかもしれないし、あるいは、別の映像の創り方がここからさらに派生してゆくのではないか、という予感めいたものさえある。思いがけない方向に進んでいることだけは、たしかである。

報告者:髙山花子(EAA特任助教)
写真撮影:立石はな(EAA特任研究員)

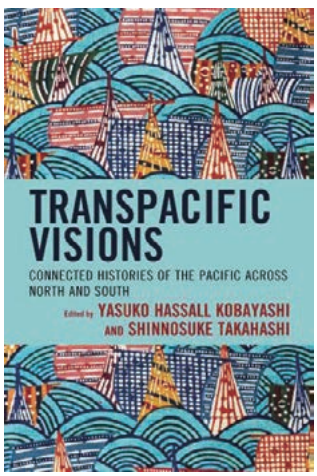
東京大学GSIキャラバン·プロジェクト「群島と太洋の思想史――太平洋のグローバル·ヒストリー」

第9回 研究会
――小林ハッサル桑子氏（立命館大学）

2021年11月27日

2021 年 11 月 27 日（土）、EAA 共催のもと、東京大学 GSI キャラバン・プロジェクト「群島と太洋の思想史――太平洋のグローバル・ヒストリー」第 9 回研究会が開催された。馬路智仁氏（東京大学）を研究代表者とする本キャラバンでは、「太平洋」というイメージ／表象／意味体系がどのように構成されてきたのかという問いに対して、思想史という観点からアプローチすることを目的とし、過去 8 回研究会を重ねてきた。第 9 回となる今回は、小林ハッサル桑子氏（立命館大学）をお迎えし、「南・北半球を横断する太平洋史――Y.H. Kobayashi and S. Takahashi eds., Transpacific Vision（2021）をめぐって」というタイトルで講演いただいた。

講演では、小林ハッサル桑子氏と高橋進之介氏（ヴィクトリア大学ウェリントン）が編者となって 2021 年に出版された *Transpacific Visions: Connected Histories of the Pacific across North and South* (Lexington Books) をめぐって、本書の方法論や問題意識の射程についてお話いただいた。Global Hisory /Asian Studies / Postcolonial Studies /Migration Studies といった複数の領域に跨りつつも、それぞれの方法論が持つ限界を超えるために本書が提唱するのは “Transnational Micro Social History” という立場である。従来、“Transpacific” にまつわる研究において焦点化されてきたのは、太平洋の東西間移動であった。しかし、本書が重要視するのは南北間移動である。ここには、これまでの研究では取りこぼされてきた「小さな社会」のトランス・ナショナルな移動史がある。これらの小さな事例を大きなフレームワークに落とし込むのではなく、一つひとつ書き起こす作業を通して多様な時間に接続し、画一化された普遍（universal）ではなく、複数化された普遍（plu-riversal）的世界を描くことが目指されている。



小林ハッサル桑子・高橋進之介編
Transpacific Visions: Connected Histories of the Pacific across North and South

ディスカッションでは、Transpacific 研究をめぐる動向や、その一大拠点となっているオーストラリア国立大学の状況について質問が挙がった。また、どのように思想史を書くか、とりわけ、アジアという場に身を置きつつ、いわゆる「西洋」も含めた世界全体に対して研究発信をしていく際、どのような立場性を自ら示していくか、という問いについても議論が交わされた。

西洋中心主義を批判しつつ、同時に、ローカルな主体性を（過度に）称揚する誘惑からいかに自由であるかという問いは、大学の国際化という待ったなしの課題に正面から向き合う上で大きな重みを持っていると言えよう。「西洋」にとっての単なる研究対象としての「東アジア」という位置に甘んじるのではなく、同時に、「西洋」の対抗的主体として「東アジア」を立ち上げるという限界に留まるのでもなく、「東アジア」から世界を観察し記述するという視点の意義およびオリジナリティを発信することが、真に国際的な研究機関として大学を開く上で何よりも必要である、と実感したひとときであった。

報告者:崎濱紗奈（EAA特任研究員）

石牟礼道子を読む会·寄り道編

「染めと織りのワークショップ」

2021年11月29日

先日 10 月 19 日に開催された第 27 回石牟礼道子を読む会では、アトリエシムラの志村昌司氏をお迎えして石牟礼道子原作の新作能「沖宮」についてご講演をいただいた。そのご縁から、また何よりそこで伺った草木染めの世界に心惹かれ、「読む会」メンバーの数人は 11 月 29 日（月）の午前から午後にかけて、アトリエシムラの「染めと織りのワークショップ」を体験させていただく機会をいただいた。参加者は宇野瑞木氏（EAA 特任助教）、佐藤麻貴氏（EAA 特任准教授）、高山花子氏（EAA 特任助教）、建部良平氏（東京大学大学院博士課程）、山田悠介氏（大東文化大学講師）、そして報告者の宮田晃碩（EAA リサーチ・アシスタント）の 6 名である。いわば「読む会」の寄り道編として、ワークショップの模様を簡単にお伝えしたい。

アトリエシムラは京都本店のほか、都内に「Shop & Gallery 東京・成城」がある。当日は成城駅の西口を出ると、正面に冠雪した富士山が遠望された。閑静な住宅街のなかに、大きなバルコニーのある 2 階建ての家があり、階上に上がると数台の手織機がやわらかい日に照らされていた。佐々木みちる氏と二階堂いくえ氏に、様々な知識も織り交ぜつつ、午前中に紅花を使った草木染め、午後に機織りを教えていただく。

アトリエシムラに集まる「石牟礼道子を読む会」メンバーたちと佐々木みちる氏、二階堂いくえ氏

紅花は「沖宮」において、雨乞いのために捧げられる少女あやの衣装に用いられたものである。あどけなくも鮮やかに透きとおった色を出す紅花は、草木染めにおいても特別なものであるという。まず花弁を使うものがほかにない。また熱に弱いため火にかけない。そして色を定着させるために鉱物を用いない。多くの染めでは石灰やミョウバンなどを用いて色を留めるのだが、紅花と臭木（くさぎ）の実は例外的に鉱物を使わないのだという。臭木の実とは、志村ふくみ氏が「天青」と呼ぶやはり透きとおった純朴な青色を出すもので、「沖宮」では天草四郎の衣裳に使われている。お話によると「沖宮」の制作にあたって志村ふくみ氏が石牟礼道子氏のもとを訪ね、「夢の浮橋」と名付けられた色糸の小箱を見せると石牟礼氏は迷わず紅花の緋色と臭木の実の水縹色とを選び、志村氏は運命的なものを感じられたのだという。いずれも植物の色を純粋に染めたものと言えようか。今回はそれをご用意いただいていた。

紅花で染めるには「紅餅」に加工したものを使う方法もあるが、今回は花弁をそのまま乾燥させたものを用いる。実は紅花に含まれる色素の 99% が黄色、1%が赤色らしく、黄色の色素は絞り出して除かねばならない。多量の花弁を袋に詰めて水に浸しよく揉んで絞ると、水溶性の黄色色素が溶け出し赤色色素が花弁に残る。それをアルカリ性の水溶液に浸しておくと赤色が出る。ここまで前日に準備してくださっていた。花弁をさらに絞ると薄めのべっこう飴のような色の水となり、これに酸性を加えると色が濃くなりゼリーの溶液のように見えてくる。終始美味しそうな見た目で、そう言えば染料はたいてい漢方の原料でもあるとか、草木染めは台所でもできるといったお話を思い出す。その溶液に絹糸をくぐらせると、鮮やかに桃色に染まった糸が出てくる。

このような作り方をするものだから、紅花の染め物

は貴重である。 かつては米の百倍、 金の十倍とも言われたという。 また伝統的には酸性・アルカリ性の調整にも、 藁を焼いた灰から取る灰汁、 梅を加工して作られる烏梅を用いた。 炭酸ナトリウムとクエン酸が今回はその役を務めたわけだが、 製法自体が歴史の重畳を感じさせる。 烏梅は今日では、 1 軒で製造されるばかりだそうである。

糸を色水にくぐらせ、 しばらく泳がせてから引き揚げて絞り、 バルコニーに出て風を通す。 これを 3 回ほど繰り返す。 すると次第に糸の色が濃くなってゆく。 ボウルの水の方は、 薄くなって割合黄味を増している。 赤色が吸い上げられているのがわかる。 生糸ではなく紬糸を染めるので、 染まり方に微妙にむらがあり、 それが風合いになっている。 蚕の吐き出して作った繭からそのまま 1 本の糸を引き出してきたものが生糸であるのに対して、 紬糸とは、 穴が開いてしまったり二つくっついて作ってしまったりした繭をほぐして真綿にしたのち、 そこから紡ぎ出して 1 本の糸としたものである。

外で風に通すとき、 また水にくぐらせるときに糸は光って見え、 なるほど地水火風の賜物だという説明が腑に落ちる。 でき上がるのはごく単純な、 何の誤魔化しもありえない色である。「哲学的」 に言うならば、 色というイデア的なものを、 私たちはこの個物に例化された仕方で見るのだ、 と言えるだろうか。 しかしこの色がここにあるということは、 植物の生育や養蚕、 染色の作業、 いまここに広げてみること、 こうしたすべての場面に土壌や水、 日の光と熱、 空気が寄与することで成り立っている。 ハイデガーが「物」 の物らしさを思考しようとして、 その本義が「結集」 という点にあるなどと言ったのも、 こうしたことだっただろうかなどと考える。 この色がここにこうしてあるということは、 種々の風物が何気なくここに宿っているということである。 それにもかかわらず色はごく単純に、 何の偽りようもなくありありと見えている。その不思議を思っていた。 われわれ 6 人と並行して、 二階堂氏の手元では山吹色の糸が染められている。 紅花を絞って出た「黄水」 で染めたものである。 これも余りの水と呼ぶには惜しいほど、 くっきりとした色を放っている。

午後は機織りを体験させていただいた。 織機には縦糸がすでにセットしてあり、 前のワークショップで織られた続きを織っていく形になる。 誰も手織機を使うのは初めてだが、 しばらく手足を動かすうちに慣れてきて、 ただ側面から杼（ひ） を通す音、 踏木を踏んで綜絖（そうこう） を上げ下げする音、 筬（おさ） を打ち付ける音が響く時間になる。

これは各人の個性が大きく出る作業になった。 織機

宮田晃碩氏

建部良平氏

の基本的な使い方を教わったあとは、各々が緯糸を選び好きなように織らせていただいたからである。まずその選ぶ色にも人柄が表れる。そもそも糸の色が、たとえば一口に青といってもそれぞれ微妙に異なっている。作りたいものを念頭に置くというより、糸を見ながらピンとくるものを選ぶので、なにか自分の心に色を映し込んでその映えを確かめるような手つきになる。これをまた実際に緯糸として織ってみると、白い経糸との組み合わせや緯糸そのものの紬糸ゆえの太さ細さによって、見栄えは変わってくる。そこでやはり自分の心に問い尋ねながら次の緯糸を選ぶ。そうして絵画的な広がりを織りあげる人もいれば、むしろリズミカルな面を作る人もいるのだった。

午前中に紅花で染めた、紅色というよりむしろ桃色の糸も使うことができた。そのためには糸車を用いて、糸を細い竹筒に巻き取る必要がある。その工程も体験させていただいた。石牟礼道子『椿の海の記』の終わりの詩にも「とんとんからり　とんとんからり」「とんとんからから　からから　から」と糸をつむぐ音がうたい込まれているが、それはこのような音だっただろうかと実感される。糸車の構造は本当に単純で、回せばそのまま簡単な音がするのである。

染めと織りを午前から午後にかけて体験させていただいたのだが、そのいずれも文字通り限りのない営みであることが偲ばれる。今回は紅花だったが、植物ごとに染めの工程が異なるうえ、同じ種類であったとしても使うものの質によって、また作業の手つきによって色合いは変わってくるだろう。そうして染められた糸がさらに、無限のバリエーションで織りあげられる。だがおそらく同時に重要なのは、そうして織られたものがそれだけで事々しく作品になるというより、日常の用に供せられるものだということだろう。それは日々を彩るものとして、限りない奥行きを持っている。そうして考えてみると、日々の彩りに限りがないということこそが、思い起こされるべきなのかもしれない。草木染めは果てしない深みをもった世界だが、それはまさしく日常の多彩さに即応すべきものとしてそうなのであって、草木染めの世界に馴染めば馴染むほど、私たちは日常の肌理を味わえるようになるのではないか——そのような予感を抱いたのだった。あらためて、素晴らしい機会をくださったアトリエシムラの皆さまに、この場を借りて御礼申し上げたい。

報告者:宮田晃碩(EAAリサーチ・アシスタント)

一高プロジェクト

映像制作メモランダム（10）

2021年11月30日

このほど、私が監督・脚本・編集を務めた『conception - こもり -』が上映され、批評を受ける機会に恵まれた。研究という営みは、経験および論理の産物として書かれたもの（多くの場合は、論文ということになるだろう）が、ジャーナル共同体による査読あるいは批判を通じて、単に個人的・主観的な成果物であることを超え、公共的な価値を有するに至るという一連のプロセスを踏む。かかる制度的な支えのないそれは研究ではない何かであり、それはそれで意義のないものではないだろうが、あくまで研究であることを自任するプロセスには、このいわば「私」から「公」への跳躍、もっと言えば（？）奉仕が不可欠である。むろん、この「私」から「公」へ、といささか標語的にすぎる事態は、研究以外にも看取されるし、映像制作の場合にも妥当するだろう。

「私」から「公」への回路が敷設されたプロセス一般にはまた、「公」から「私」への照り返しという契機が潜在的に含まれている。「（…）他者の目に照らされるという形で、主題化され、それによって、自らの実存状況を対象化して、そこから自由になること」という、同僚の高原智史氏が映画制作に見出したリベラルアーツとしての価値とは、この「公」による「私」への反照を言い当てたものだと受け取っている。ところで、「私」が「公」によって照らし出されることで、いかにして自由が可能になるのかという点について、ここでは一考をめぐらせてみたい。

前述の上映会において、出演者である星野太氏、小林康夫氏からそれぞれ受けた評によって、私が「私」として引き受けていたもの、意図・自覚していたもの以外の「私」が明るみに出され、あるいは引っ張り出されたという所感を持った。とりわけ、小林氏による指摘は、編集の過程で何を積極的に映し出そうとしたのか、逆に言えば、どういった類の素材を使わないことに決めた（排除した）のかということへ、他でもない、編集者たる私自身の意識を向けさせた。正直に告白すれば、編集作業はほとんど直観に依拠したものであり、そこには説明しようとすれば説明できなくもない意図めいたものはあるけれども、明晰に言葉にしうるような厳然たる意図があらかじめあって、その意図に従って理路整然と作品がまとめあげられたわけではない。もう少し編集プロセスを反省してみれば、直観に従って配置されひとまずかたまりを帯び始めた諸部分が、互いに連関・呼応するさらに大きな諸部分になるという路を経る一方、それら諸部分が解体・散布され、全体として眺めた場合にまだらな模様、しかし一つの連続するリズムをなすという仕方でも作業が進んだ。おおまかに言ってこの二つの進行が編集作業の基調であり、まるで編集作業そのものが一つの楽曲（構成）のようでもあった。かかるプロセスは、小林氏の批評によってある面では腑分け、あるいは裁断されたが、批評に応答せんとすることで、その分けられ細かくなった部分が、分光器のごとく、作品としては表立

つことのなかった多様な光を（少なくとも編集者当人には）垣間見させてくれたように思う。かように意図はしばしば仮構されるのかもしれないが、その意図はしかし、全くの虚構というわけでもない、何か人間の思考の前言語的な部分に触れるものであって、しかもその意図は、意図した（と慣習上みなされる）当人に他者が言語によって働きかけることで到来する。この到来に立ち会うことが、根源的な意味で人間が自由になるということなのであって、そこには通念上の自由意志とはあまり関係がなく思える、目の覚めるような地平が広がっている（とつい言いたくなる）。私はその地平に片足だかどこかを踏み入れ、おそらく身震いしていたと記憶していて、上映会後、しばらく言語との距離、言語使用を可能にする歯車の噛み合わなさを感受していた。この述懐自体、むろん仮構なのであるが。

報告者:日隈脩一郎（EAAリサーチ・アシスタント）
写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

第5回「部屋と空間プロジェクト」研究会

「空間」「時間」を創り、超える音

2021年12月2日

2021 年 12 月 2 日（金）16：00 より、第 5 回「部屋と空間プロジェクト」研究会が行われた。前野清太朗氏（EAA 特任助教）が司会を務め、田中有紀（東洋文化研究所）が、笹本正治著『中世の音・近世の音――鐘の音の結ぶ世界』（講談社、2008 年）をとりあげ、報告を行った。

本書は冒頭で「ゆうやけこやけ」（大正 12［1923］年）の歌を紹介し、そこに戦前までの村における夕暮れの典型が描かれていると指摘する。日が暮れて鳴る鐘の音は何を意味するのか、なぜ子供たちは皆帰らねばいけないのか、「山のお寺の鐘」の音が聞こえる範囲はどこか、そしてその範囲が持つ意味とは何か。本書は過去の日本人の鐘の音に対する意識の変化、特に中世と近世の間における音に対する人々の意識変化を、民俗事例を利用して詳細に検討し、この童謡に歌われる世界観が、日本社会の中でどのように形成されたのかを読み解く。

鐘はまず、誓約の場面で用いられていた。古代でも金属の音に対し人々は特殊な感情を抱いていたが、大きな梵鐘を用いての誓いの慣習は、中世の特徴である。鐘には水中や龍宮から来たという伝説が多く付与され、実際に鐘が水中から引き揚げられる事もあった。ここには、鐘は水中や地中に埋めることで時別な力が備わり、「この世」ではない別の世界と関連するという思想が垣間見える。中世前期の思想をよく表す『今昔物語集』等では、神や仏が出現する際、あるいは往生や死後の世界において、音楽が聴こえる描写がしばしばなされる。

鐘に対するこのような意識は中世後期以降、次第に変化していく。たとえば「無間の鐘」の伝説は、おおむね、自ら進んで鐘を撞き、無間地獄へ落ちる代わりに、この世での富貴を神に約束させることを旨とする。つまり人々にとって、神仏は恐れ従うだけの存在から、人間と対等な契約をなしうる神仏へと変貌したのだ。また、鋳物師は、鐘や鰐口など特殊な効力を持つ金属楽器を作り出す職人であるが、中世ではこの職自体が、「神に近い」「恐れの対象」であった。鋳物師はまた、光を制御できる道具として灯炉を作る職人でもある。昼から夜へと移り変わる黄昏時は、人間と「あの世」の住人である妖怪の交錯する時間帯

であり、危険極まりない。鋳物師は、光を生み出し、神々の時間である夜に挑戦する人々でもある。ところが江戸時代に入ると、賤民頭の弾左衛門家に伝わる河原巻物に鋳物師が見える。聖なる職人としてより、差別の対象にさえなり、畏怖の気持ちが減少したことがわかる。

軍器として鐘や太鼓が使われたように、楽器は古くから、「この世」で人間を互いに結び付けるものでもあった。戦国時代以降、大名たちが梵鐘を徴発したことで、鐘に対する神秘的な意識が薄れ、単なる音を出す器具として捉える風潮が出てきた。また、古代においても、時刻を鐘の音で知らせることはなされていたが、やはり戦国時代に入ると、城の周辺に住む一般の人々にとって、太鼓の音は生活のための時計の役割を果たすようになり、ますます身近になっていった。

山のお寺で鳴る鐘も、それを目安にして生活を送る人々がいた。そもそもお寺が、一般人の生活に身近なものになったのは、応仁の乱以後、約 200 年の間に、寺院の数が激増したことによる。さらに一向宗や日蓮宗が村の中に宗教基盤を作ったこと、江戸時代の寺請制度によって、寺院が村の役所としての機能を果たしたことも要因である。お寺の墓地にも一般民衆のお墓が集中するようになった。このようになると、お寺の梵鐘も村民から寄進され、僧だけではなく最初から村民の生活を律する合図としても機能するようになる。

改めて「ゆうやけこやけ」の歌を考えると、この歌は特定の時代背景を持ったものであり、その背景には、古代から近世に至るまでの人間の精神・政治・経済の変化などが渾然一体として、歴史の層になって積み重なっていることがわかる。今でも私たちは神社で鰐口を鳴らし、しみじみとした心持ちで除夜の鐘を聞く。筆者は最後に、私たちの行動の中にも、歴史の積み重ねが入り混じって存在し、認識せずに古い行為を行っていることも多い、と指摘する。

本書と総合討論、そして報告者自身の研究を重ねながら、あるいは空間と関連付けながら、考えたことを書きたい。「鐘下」という言葉が、同じ鐘の音が聞こえる範囲で形成される共同体を示すように、音はそれが聞こえる範囲の人々を統合し、律していく新しい空間を創りだす。空間だけでなく、鐘は人々に時間をも伝えるのだから、新しい時間を創りだす役割を持つ。人々の生活をヨコのひろがり（空間）とタテのひろがり（時間）双方から支えていく、つまり、生活の「宇宙」を律していく役割を、音は持っているのではないか。さらに本書が論じたように、音は「この世」という空間のみならず、「あの世」という別の空間も結び付けるのだから、人間の「空間」「時間」をも超えていく。写真②は、北京中心部の北方にある鼓楼から見た風景である。鼓楼は鐘楼とともに、北京に暮らす人々の生活の「宇宙」を見守ってきた。今は専ら、観光客のために演奏がなされている。賑やかすぎる今の北京で、この音はほとんど聴こえない。それでも、私と同年代の北京っ子の友人は、「ここが私の一番好きな場所」という。「ゆうやけこやけ」を聞いて、失われた黄昏時の日本の風景を思い起こすのと似て、昔の北京に響いていただろう鐘や鼓の音は、それを体験していない世代にとっても、世代を超えて、自分が属している共同体を想起させるような記憶として、機能しているのだろう。

本研究会ではこのほかに、様々な話題が論じられた。禅の専門家からは、仏教の大衆化と「山のお寺」あるいは墓地について、建築学の専門家からは「鋳物師」という職人から見る「人間」と「自然」の関係について、さらに職人の技術と近代の建築技術の接続について。このほかサウンドスケープという観点からの東西比較、イギリスの教会の近くに住んだ経験から得た生活の一部としての鐘の音、さらには医療で

応用される音の機能や高音が人間にもたらす影響について、などである。

宣伝になって恐縮だが、毎回ブログ報告ではお伝えしきれない、豊富な議論が展開されていることをお伝えしたい。前野氏によるチャット欄での詳細な情報提供も楽しい。ご興味のある方は、次回12月27日（月）にシンポジウムを行うので、参加していただければ幸いである。

報告者:田中有紀（東洋文化研究所）

東アジアへの西欧の知の伝播の研究

第2回 近世ヨーロッパの文化と東アジア研究会

2021年12月4日

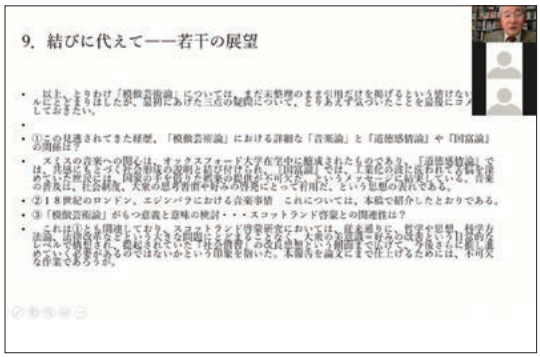
2021年12月4日（土）の13:30–16:00にかけて、「近世ヨーロッパの文化と東アジア研究会」の一環として、第2回「東アジアへの西欧の知の伝播の研究会」が開催された。

小島浩之氏（東京大学講師）の司会のもと、まず野原慎司氏（東京大学准教授）より開催趣旨の説明が行われた。

第1報告の高哲男氏（九州大学名誉教授）による「アダム・スミスの音楽論――『道徳感情論』と「模倣芸術論」を中心に」は、従来の伝記的研究では触れられてこなかった、アダム・スミスの音楽への関心について焦点をあてた内容であった。報告では、『道徳感情論』に見られる音楽用語を用いた主張の展開、『国富論』における音楽の社会的役割等に関する言及、論文「模倣芸術論」で論じられる詳細な音楽論について具体的な紹介を交えて、音楽に関心をもつスミスの一面を明らかにしている。また高氏は、「模倣芸術論」の持つ意義については、スコットランド啓蒙研究との関連で今後深めていく必要があると指摘している。

第2報告の野原慎司氏による「ホゥガース風刺画から見るアダム・スミスの時代」は、ホゥガースの諷刺画からアダム・スミスが捉えようとした社会というものを考察する内容であった。ウィリアム・ホゥガースはイギリス18世紀を代表する画家・版画家であり、本学元総長・大河内一男の収蔵品が経済学部に寄贈されている。スミスとホゥガースが生きた時代は、民衆の意見が政治・社会を動かした「世論」の時代で、その時代を生きたホゥガースの風刺画は、誇張やあざけりを伴いつつも社会を動かす民衆を描いた

上段左から野原慎司氏、小島浩之氏
下段左から高哲男氏、石原俊時氏



ものであった。その上で、ホウガースの連作版画「選挙」に着目してみると、都市化した社会の中では腐敗が生じるなど、すなわち当時の政治・社会の「影」の部分が見えてくる。そして、スミスの著作や思想に照らし合わせてみると、こうした「影」の部分もスミスが捉えようとした時代・社会であったことが見えてくると本報告では論じられている。

最後に、石原俊時氏（東京大学教授）より閉会の挨拶があった。

申込登録者は 80 名を超え、当日は常時 50 名程度が参加し、活発な質疑応答がなされた。

報告者:森脇優紀(経済学部資料室)

The 8th EAIHN Online Seminar

2022年12月6日

On 6th December 2021, the East Asian Intellectual History Network (EAIHN) hosted a talk by Dr Craig Smith, Adam Smith Senior Lecturer in the Scottish Enlightenment at the University of Glasgow. In his opening remarks, Dr Shinji Nohara underlined how significant it is to study Western thought in order to deepen the historical understanding of East Asian modernization and the varied responses to cultural transformation caused by it. Dr Smith then proceeded to explicate his paper entitled "Adam Ferguson on Trade and Empire", before the two discussants added comments and raised several questions in order to enhance open discussion.

Craig Smith's paper extensively investigated Adam Ferguson's political thought in comparison with Adam Smith, with a particular focus on their respective views of empire, including the British Empire and its international and imperial trade. The importance of comparative argument of ancient and modern empires in Ferguson's thought has recently been discussed, for instance, by Iain McDaniel (in his monograph entitled "Adam Ferguson in the Scottish Enlightenment" from Harvard University Press), who demonstrates "how Ferguson's analysis of the likely course of the French Revolution is grounded in a fear of Caesarism arising from the lessons of Rome" (p. 1). Meanwhile, this paper's focus is rather on "what Ferguson says about another empire, the British Empire in North America, an empire that he acknowledges is grounded in commerce" and "how his study of Rome impacts on his understanding of British trade and imperialism" (pp. 1-2). Dr Smith does not accept the commonplace understanding of Ferguson as a republican opponent of modern

commercial society, suggesting instead that he shares much in common with Adam Smith regarding the civilising effects of commerce and luxury. On the other hand, Dr Smith's paper acknowledges what differentiates Ferguson's framing of civilization from that of Adam Smith elsewhere, namely that Ferguson tends to emphasise the political rather than economic dimension of the historical progress of societies. In particular, according to Ferguson's view, "the key feature of political and civil association is the recognition and acceptance of the monopoly of force held by the magistrate" (p. 8), and "commerce and artistic achievement are the result of civilisation rather than constitutive of it" with civilisation meaning not so much commercial activities themselves as "regular government and law" (p. 10). While Adam Smith tends to assess ancient and modern empires and colonial policy in terms of economic necessity and welfare, with strong (but conditional) criticism of the contemporary British Empire (pp. 18-21), Ferguson focuses more on the political and constitutional issues of modern Britain and ancient Rome, paying particular attention to the (in)stability and transformation of class structure between the two case studies (pp. 22-3). According to Dr Smith's analysis, while Ferguson assuredly acknowledges the importance of a certain type of factious conflicts or internal tensions (i.e. healthy and well-regulated factionalism) in order to tackle the danger of civic "inaction" (p. 24) or apathy, he was no less wary of class struggles observed, for example, during the last stage of the Roman Republic transforming into the Empire, which were accompanied by corrupted relationships between mobs and military commanders. Ferguson's ideal constitution is one wherein citizens become ambitious, being motivated not only by the acquisition of wealth but also by honour through public contribution, making it far from a total opposition to luxury and commercial society. His first priority was to avoid civil wars, with his comparative historical framework allowing him to be cautious of radical changes to the British constitution caused by American independence, while nevertheless sceptical of empires in general at the same time. This judgement on Ferguson's part is entirely compatible with incrementalist attitudes toward reforming the political constitution of the British Empire.

Craig Smith's paper can be understood as a valuable contribution to bridging recent studies in the history of international political thought with stock studies of Scottish and other European Enlightenment thought. Some global intellectual historians, such as Jennifer Pitts, seem to describe Enlightenment and post-Enlightenment history, relying on a dichotomy between Enlightenment scepticism of the colonial Empires and nineteenth-century imperialism that is somewhat too simplistic. But we may need to pay more careful attention to the ambivalent attitude of Enlightenment thinkers toward the question of Empire. Even with respect to Adam Smith, for example, he should not be interpreted as an unconditional advocate of American independence. Indeed, perhaps more focus should be invested in the balances put to the both utilitarian and right-based perspectives by Adam Smith and other Enlightenment figures, including even Immanuel Kant. From this point of view, it is intriguing how this paper deals with several important figures of the Scottish Enlightenment from a comparative perspective, and Adam Ferguson is certainly worthy of extensive investigation as a key thinker in seeking to understand the Scottish link to American independence. Among those recent intellectual historians who discuss Ferguson in relation to the eighteenth-century revolutions is Jonathan Israel, whose interpretation of Ferguson is, nevertheless, often cast into doubt. Israel's view sometimes appears a little too one-sided, based on that dichotomy of the radical and moderate Enlightenments, with this dichotomous lens making it difficult to understand the core of Ferguson's po-

litical thinking. It is the complexity and integrity of Ferguson's thought that are demonstrated by this paper's nuanced reading of his wider body of work.

We are editing a special issue in the Revue *d'études benthamiennes* with the theme of "International and Colonial Thought of the British Empire", and inviting Dr Craig Smith to contribute a paper for the issue. Anyone who is interested in the British Empire and its attendant Enlightenment thought is still welcome to submit a paper abstract for inclusion by the end of April, 2022. Full details available via the following link:

https://journals.openedition.org/etudes-benthamiennes/9445

Report by Hiroki Ueno (Keio University)

EAAワークショップ

再興する書院――アジアからの新たなリビング・ラーニング・コミュニティ

2021年12月7日

2021 年 12 月 7 日（火）に、EAA ワークショップ「再興する書院――アジアからの新たなリビング・ラーニング・コミュニティ」が対面とオンラインのハイブリッドで開催された。今回のワークショップは日暮トモ子氏（日本大学）と山崎直也氏（帝京大学）を発表者として迎え、石井剛氏（EAA 副院長）が司会を担当し、張政遠氏（総合文化研究科）がコメンテーターを務めた。なお、本ワークショップは科研基盤研究 (C)「中台港澳における「現代書院制教育」の発展に関する比較研究」（課題番号：20K02615、研究代表者：山崎直也）の一環でもある。

石井氏による主旨説明のあと、1 人目の発表者日暮氏は「現代中国における書院制教育の展開とその意味」と題する発表を行った。日暮氏はまず欧米における「カレッジ」の成立と LC 論、LCC 概念の提起、日本における「学寮」の歴史と現状、古代から近代までの中国における書院制教育の変遷を整理した。そのうえ、中国における現代書院制教育の登場に焦点をあてた。日暮氏によれば、中国では 1990 年代における大学募集人数の拡大による質の低下、カリキュラムの細分化による学生の知識の狭隘化への批判を背景に、2000 年代に入ると、従来の「宿舎」を新たに「書院」（「住宿制書院」「現代書院制」）として再編成する動きが生じ、「通識教育」（general education）を提供し教師と学生がともに学ぶ LC、LCC を目指す現代（大学）書院制教育が登場した

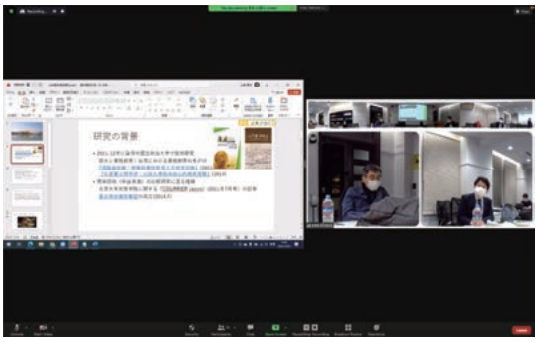
石井剛氏

日暮トモ子氏

（2017 年の時点で合計 37 校が 114 書院を設立している）。そして現代書院制教育のタイプを三つに分け、その例として西安交通大学の大衆・生活体験型書院、復旦大学の伝統・通識型書院、蘇州大学のエリート型書院を紹介し、さらに香港中文大学の書院制教育（residential college system）の成立経緯と仕組みをも整理した。最後に今日の中国における書院制教育の主な課題について、大学の専門教育との衝突（専門教育と教養教育をどう融合するか）、管理的な側面の強さ（学生の自主性をどう保持するか）、書院のエリート化と大学の機能分化（共通の文化的基盤をどう構築するか）などを指摘した。

続いて 2 人目の発表者山崎氏は「マカオ大学住宿式書院制にみる「住学合一」の可能性」というタイトルで発表した。山崎氏によれば、現代書院制教育はおおよそ通識課程改革と博雅教育（リベラルアーツ教育）の再導入を行い、学生の管理をも重視している。そしてマカオ大学の書院教育、とりわけ「呂志和書院」の施設、教育理念、カリキュラムなどが重点的に紹介された。マカオ大学は 2010 年から住宿式書院（residential college）をパイロット的に実施し、2014 年の横琴島（広東省珠海市）へのキャンパス移転に伴って書院教育を全学規模に拡大しており、現在は「呂志和書院」を含め全 10 個の書院を運営している。こうして書院教育を積極的に展開しているマカオ大学だが、実はその制度に脆弱性もあり、それが 2019 年以来の入学者に課した卒業要件の変化、つまり書院活動への参加が次第に義務づけられなくなることにも表れていると山崎氏が指摘している。そこから「学住合一」すなわち学びと生活の融合およびその制度化の難しさが窺えるという。山崎氏の見方では、書院教育は本来、現在の大学における過度の専門化と通識教育の形骸化、チューター制度の機能不全、宿舎の教育効果の薄さ、大学生のソフトパワーの欠如、サークルの没落、進学主義下での学びの動機の低下と目標の喪失という問題を改善するために展開されているが、諸問題が根強く存在している以上、過度な期待を背負う書院教育を維持していくこともそう簡単ではない。

以上、両氏はともに今日の中国語圏における書院



山崎直也氏

張政遠氏

教育の目的や形態が多様的で「現代書院制教育」の定義が難しいとしながら、その基本性格と特徴を整理し、具体例を示したうえ、書院教育の課題や限界についても的確に指摘している。

両氏の発表について、張氏がコメントを述べた。学生時代に香港中文大学の新亜書院に所属し、のちに中文大の教師も務めた張氏は自身の書院生活を振り返りつつ、1,000 人が入居できるような従来の書院の代わりに複数の比較的に小規模の書院が設立されているというのがここ 10 年間の変化だと述べた。張氏によれば、現在、学生側が書院を選ぶ際は書院の歴史的使命よりも、むしろそこに所属することのメリット（奨学金の有無、留学の機会など）のほうを重んじているように見えるし、一方で各書院も学生確保のために様々な方策を講じている。そして、いま問題視されているエリート教育と異なるような書院教育の展開がありうるか、また「学住合一」が容易に実現できない以上、今後は書院が学びの比重を下げて主に寝るための宿舎（dormitory）を提供するという傾向になるか、と問いかけた。

張氏のコメントに対して、日暮氏は LLC という理念自体はエリート教育を乗り越えるためのものであって、大学の規模や予算の問題でそれを大学全体に広めることが難しいとはいえ、少なくとも何らかの共通性・共同性を作り出すことが重要だと答えた。山崎氏は中国語圏で教室外の体験を通じた「学び」も重視されるようになり、その意味で単なる宿舎と区別される書院の存在がむしろ大きくなるが、学科の垣根をどう越えるかは一つの課題だとした。

その後のディスカッションでは、石井氏、田中有紀氏（東洋文化研究所）、柳幹康氏（東洋文化研究所）がそれぞれ質問や感想を寄せ、書院の宗教性と「魂」の問題、中国における現代型書院の急成長、書院への企業家の寄付、書院教育を担当する教員のモチベーション、学生の管理と自主性の関係、共同性と多様性を同時に担保する空間・仕組みといった問題をめぐって、2 人の発表者と議論を交わしていた。

目的・形態を異にして様々な課題を抱えつつも、中国語圏の現代型書院は一つ壮大な教育実践として、おそらくこれからも展開され続けるのであろう。それは「リビング」、「ラーニング」および「コミュニティ」といった、人間が共に生きるには欠かせないものの再把握につながる。個人的には、こうした書院教育の主な対象として中心的な位置を占める学生側の声もいつか聞いてみたいと思った。

報告者:郭馳洋（EAA特任研究員）
写真撮影:宇野瑞木（EAA特任助教）

話す／離す／花す（15）

「悦ぶ」こと

石井剛（EAA副院長）
2021年12月8日

2021 年 12 月 7 日の夕方に 101 号館のセミナー室で行われた（ハイブリッド形式の）ワークショップは、中国や台湾における現代書院制度の勃興に関して、この現象を専門に研究なさっている山崎直也さんと日暮トモ子さんにレクチャーしていただき、それをもとに皆で「書院」という魅惑的な人間教育の場のあり方に

ついて議論するよい機会でした。中国での現代書院では、共通の特徴として教員と学生が共に成長すること（中国語で「教学相長」ですね）を目標に掲げていることが挙げられるようです。しかし、大学内に新たに書院を制度として設けるにあたっては、学内で消極的な意見も多く、運営にあたっても教員の配置に関してしばしば困難が生じるということも指摘されました。また、結局のところ、学生の学寮生活を「管理する」ことに主眼が置かれることになり、教学相長の理想は形骸化していく傾向があることもわかってきました。

田中有紀さんは、自身が北京大学に留学したこともあるという経験を踏まえて、中国の大学の寄宿制度を羨むと同時に、そこには「教員が育つ」ことが必ずしも目指されていないのではないか、どうすればそれは可能になるのか、というたいへん重要な問いを発してくれました。

わたしのこの問いに対する答えは明確で、教員が学生との生活の共同から何か得るものがあるとすれば、それは「悦ぶ」ことにほかならず、そして、「悦び」はあらかじめ制度にプログラミングされているものではなく、プロセスを経験することによってしか得られないものである以上、書院に関わる教員にはボランタリーな意志が必要であるということになります。書院が書院として機能するためには、その場を共にする人びとが、「その場を共にする」という一点において悦びを得ること以外にないように思います。「学びて時にこれを習う、亦た悦ばしからずや」というかの有名な『論語』学而篇のことばはまさにこのことを言っているのであり、第二句に「朋あり遠方より来たる、亦た楽しからずや」と続くのは、「学」が「朋」を呼びながら行われていることを何より端的に表しているのです。最近亡くなった現代中国が生んだ偉大な哲学者李沢厚が楽感文化と言ったのはまさにこのことです。

「悦び」は必ずしも自らの主体的な働きかけによって初めて得られるものではないでしょう。偶然他から与えられたことを最初はいやいや取り組んでいるうちに、楽しさに気づきそれを悦びに転化していくこともあるでしょう。また、悦びはプロセスに潜むと言ったところで、プロセスが常に悦楽に満ちているわけでないことは、わたしたちの対人関係がしばしば苦々しい摩擦を生じることからも明らかです。というより、そのような苦難を抜きにして、共にあることの悦びはないと言うべきなのかもしれません。

悦びこそが学びから得られるほぼ唯一の報酬であり、朋と楽しむことがそのための条件である。『論語』が教えてくれるのはそういうことだと思いますので、大学の制度としてただ書院（residential college）を設けて、そこに「教学相長」の目標を書きこむだけではうまく機能しないはずです。その場における悦びを求める人にのみ開かれているのが書院の書院たる所以ではないでしょうか。

2021年度に入ってから、EAAでは前の年から始動したさまざまなプロジェクトがそれぞれに花咲かせ始めています。そこに集う一人ひとりがそれぞれのあり方で「花し」ているさまは、まさにそのひとつひとつが悦びの表現であるとわたしは思います。

EAAは、中国で行われている現代書院が有しているresidential collegeとしての機能は有していません。しかし、第一高等学校の流れを汲む駒場において、書院の精神を具現化すべき場として成長したいとわたしは思っています。そういうわけで、これからはブログの場をお借りして、折に触れて「悦びの記」を書いてみたいと思っています。

写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

EAA Global Lecture Series

The 3rd Lecture "Green with Milk & Sugar: When Japan Filled America's Tea Cups"

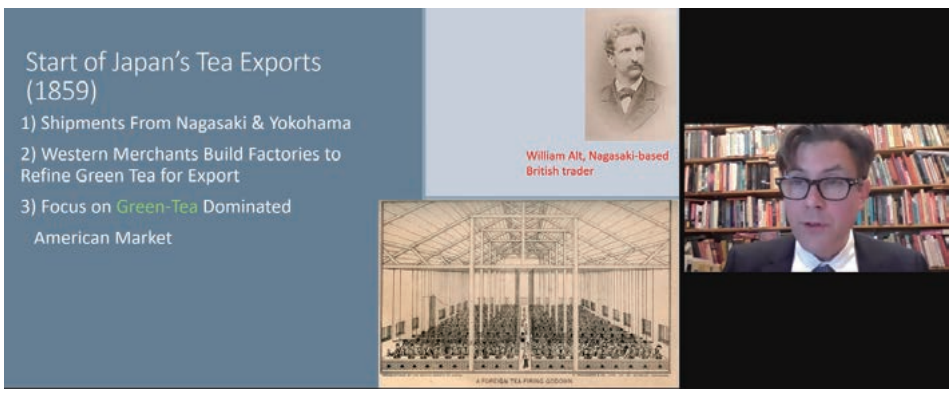
2021年12月9日

The EAA Global Lecture co-organised by EAA and Go Global Gateway at the University of Tokyo was held on Zoom on December 9, 2021. The third guest speaker of the series, Dr. Robert Hellyer (Wake Forest University), gave a talk on his newly published book, *Green with Milk & Sugar: When Japan Filled America's Tea Cup* (Columbia University Press, 2021).

The lecture began with the stories of his family that motivated him to explore the trans-Pacific tea trade: of his paternal grandparents, who were involved in their family's tea export business and sailed to Shizuoka in 1932, and of his maternal grandmother, who was based in the Midwest and would serve black tea as a daily beverage but saved green tea leaves for her guests (as it was considered as the most sophisticated type of tea back then). These personal stories closely linked with the commercial and commodity chains of green tea, he said, lay at the heart of his book.

Having introduced the background of his research, he then moved on to explaining the history of green tea consumption both in Japan and the United States since the 1850s. "Tea" for the Japanese in the 1850s, according to Hellyer, was a brown beverage, as the majority of people in the countryside mostly consumed *bancha* at that time. One can still find this legacy in the word *chairo* (literally, tea color), for "brown" in Japanese. But to Americans, "tea" around the 1850 (and several few decades before then) meant what we would call green tea. How and why did tea in the United States and Japan undergo a transition to arrive at the situation today, whereby Americans prefer black teas and the Japanese consume predominately sencha green tea?

To answer this question, Hellyer then took us through some of the key points in exploring the research, focusing on the following four points: i) American teaways (for this term, he takes inspiration from the concept of foodways, which is used by scholars to explore cultural, social, and economic practices related to the production and consumption of food) and Japanese green tea's place in them; ii) the origins and implications of Japan's tea exports since the late nineteenth century; iii) turning points for tea in the United States and Japan in the 1920s



Dr. Robert Hellyer

and 1930s; and iv) how sencha green tea gained its position as a global icon of Japan through connections with the outside of the nation. The talk further detailed the ways in which the United States developed its own distinct teaways. For instance, drinking green tea was not an exclusive beverage limited to a particular class; it was democratized and became available to all classes in the United States, and often consumed hot with milk and sugar.

The story got even more interesting when Hellyer demonstrated how a shift in taste for tea took place in the United States after 1920. The 1920s marked seminal moments for the shaping of Americans' taste for tea in that they started to consume black teas instead of green tea. This transition was partly due to the increase of tea production in South Asia, which had significant impact on tea consumption in Britain and its colonies. To sell more tea and change Americans' taste for tea to expand their market share, one of the strategies adopted was the India-Ceylon tea lobby's negative campaign, which attacked the teas produced in China and Japan with racist overtones. It was a combination of several factors, Hellyer explained, including the success of negative advertising campaigns, the lower price of black teas, the increasing prominence of national black tea brands, and the popularity of orange pekoe (a type of black tea) in the United States that turned Americans' attention toward black tea.

The lecture covered various hidden international dimensions of the green tea trade which were underexplored in previous research: aspects of the tea trade and tea consumption that cannot be examined through studies focusing on nation-to-nation relations. Captivated by Hellyer's atypical approach that took them on a journey exploring teaways and filled with the fascinating stories of people involved in the tea trade, the audience of academics and students both from inside and outside Japan actively joined in the Q&A session after the talk, which developed into a stimulating discussion.

Report by Mai Kataoka
(EAA Project Research Fellow)

From *Seele* to Mind: A Sociological Study of Knowledge On the Rationalization of Psychoanalysis

2021年12月10日

On December 10, 2021, Professor Sun Feiyu (Peking University) gave a lecture online titled "From *Seele* to Mind: A Sociological Study of Knowledge on the Rationalization of Psychoanalysis" as part of the EAA Lecture series. The title of the lecture was taken from an article Sun published in 2017.

Sun's talk focused on how the ideas and concepts of Sigmund Freud, the founder of psychoanalysis, came to be standardized through the translation of his texts from German to English. Through such examples as the translation of *Seele* ("mind") and *Einfall* ("free association"), and analysis of how Freud and his English translators used Latin words for different rhetorical purposes, Sun argued that the literary quality of the original texts with rich historical and cultural connotations was largely wiped out in the English translation, resulting in the "rationaliza-

tion" of Freud's psychoanalysis—that is, its reception in the English-speaking world as a scientific, objective, and specialized field of knowledge, rather than an intimate and humanistic investigation into *Seelenleben*, the life of the soul. This transformation is not simply attributable to the translators' bias or caprice, Sun emphasized, but should be understood, from the perspective of the sociology of knowledge, to be exemplary of what Max Weber described as the rationalization and professionalization of modern science.

While the main thrust of Sun's argument remained unchanged from his 2017 article, the lecture also allowed the audience to get a clear grasp of what initially prompted him to write the original paper. During the lecture, Sun shared with the audience his concern that the growing tendency in today's academia, obsessed as it is with quantification and professionalization, may lead to devastating consequences for studies in the humanities. Besides being a product of a close examination of historical details, his research, which traces the transition not so much of the "content" as of the "style" or "mode" dominant in one specific branch of knowledge, is deeply rooted in his interest in imagining, or restoring, alternative modes of investigation in the humanities. The lecture was followed by a lively discussion between Sun and the audience, inspired by the professor's passionate and candid attitude, on how exactly we could reimagine different styles of the humanities.

For those interested in the history of psychology, the title of the lecture may recall Edward S. Reed's seminal work in the field, *From Soul to Mind: The Emergence of Psychology, from Erasmus Darwin to William James* (Yale University Press, 1997). The modern psychological conception of "mind," Reed argued, was not originally a secularized version of "soul," as it might seem, but rather a complicated compromise between the realms of science and religious concern. A broad set of questions naturally arise by associating that book's title with Sun's lecture: How can we relate Sun's story of psychoanalysis to the detailed account concerning the history of psychology presented by Reed, who was no less deeply skeptical about the contemporary academic attitude toward the "soul"? Does the Weberian narrative of secularization suffice for an understanding of the convoluted relations between religion and science in the late nineteenth and the early twentieth centuries, which eventually gave birth to the modern understanding of "mind"? How can, for instance, Freud's explicitly materialistic worldview be situated in the whole scene? When I asked Professor Sun these questions, he emphasized the importance of employing a wide and comprehensive framework for the understanding of history, such as Weber's, adding that he is in the preparatory stages for a book that expands his argument and contains a discussion on Reed's work.

If the translation process of psychoanalysis can be deemed, as Sun argues, to be embedded in a wider process of rationalization, we should also recognize that the act of translation always carries the inherent danger of neglecting the linguistic or literary texture of the original text: we tend to fall into the trap of translating only what is "translatable," what has the apparent quality of "translatability"—a concept we should consider in comparison with that of "rationalizability." One of the remarkable features of Sun's argument is its emphasis on the role of translation, not only in the reception of ideas in a specific language, but in the history of ideas in general. This perspective, together with Sun's questioning of today's research styles in the humanities, again raises some practical as well as theoretical questions: How can we conceive of translation that translates not only the "content" but also the quasi-untranslatable "style" of each text? What style or mode of translation can we formulate that does not hastily rationalize, but encourages the exploration of styles in the

humanities? While this is not the place for examining these questions further, it is important to note finally how Sun's argument invites us to stand at the intersection of problems of translation, rationalization, and the soul/Seele, which directly leads to the difficult but fundamental questioning of the tripartite relationship between languages, science, and the humanities.

Report by Yuki Ueda (EAA Research Assistant)

悦びの記#1

石井剛（EAA副院長）

2021年12月10日

駒場キャンパスの
茶室・柏蔭舎

先日、「話す／離す／花す」で予告したとおり、場を共にして学ぶことの悦びをEAAがその名に掲げる「書院」の理想につなげるべく、「悦びの記」を書いていきたいと思います。今日はその初回です。

このコラムでは、駒場という空間のそこここで出会う小さな悦びの瞬間を紹介したいと考えています。駒場の教養学部の歴史は1935年に第一高等学校が弥生キャンパスからこの地に移転してきたときに始まります。それから86年の歳月を経て、いまわたしたちは駒場に学問の悦びとそれを人と分かちあう楽しみを享受しています。わたし自身は東京大学出身ではないので、もとより駒場に対する愛着はあくまでも教員としてのそれでしかないのですが、ここには悦楽のしかけが奥深くまで潜んでいるのをしばしば感じることがあります。例えば、今日の写真は、知る人ぞ知る茶室、柏蔭舎。先日訪れたときにも、裏千家のサークルが活動していましたが、学生たちの自主的な運営によって、キャンパス東側の木立の中にひっそりと佇むこの慎ましい茶室は維持されています。

茶は生の術に関する宗教である。茶は純粋と都雅を崇拝すること、すなわち主客協力して、このおりにこの浮世の姿から無上の幸福を作り出す神聖な儀式を行う口実となった。茶室は寂寞たる人世の荒野における沃地であった（岡倉覚三『茶の本』岩波文庫版、1929年、39ページ）。

岡倉天心のこのことばは、そっくりそのまま社会のなかの学問の位置と役割に置き換えることができると思います。マイケル・ピュエット流に言えば、茶室はpocket of orderとして、「かのようにの礼 as if ritual」が実践される場であると言い換えることができます。

12月1日には、華東師範大学哲学系にお招きいただいて（劉梁剣さん、ありがとうございます!）、MOOCセミナーでしゃべってきたのですが、その中でもこの写真をお見せして、新しい中国哲学においては、哲学の営みを、礼を実践する「場」として形成することが必要であると申し上げてきました。テーマが中国哲学をめぐるものだったのでこのような言い方になりましたが、わたしの意図としては、学問一般において同様の試みがなされるべきであると思っています。そこで「主客」とは教員と学生ということになりますが、両者はこの場を共有して、学問という「儀式」を実践する（演じる）ことが求められる他は、誰が訪れてもいいのです。少なくとも、千篇一律の規格化された選抜試験をくぐり抜けてきた人だけにではなく、さまざまなバックグラウンド、さまざまな人生の段階にある人びとに開かれているべきです。世界中から集まってくる研究者と、大学の外からも集まってくる社会の各層の人びととが共に「主客」を演じ合うことによって、「人世の荒野」たる日常の社会から暫し離れたところで、世界と人間を根本的に、かつ継続的に問いつづけること、そこに学問（「問いを学ぶ」こと）の意味はあり、社会を変えていく想像力、つまり変革の駆動力

は、このような学問のなかからこそ育まれていくことでしょう。イノベーションの揺籃としての学問の場、それが書院であり、そのモデルは、まさに岡倉天心が論じた茶のたしなみにも美しく表現されているのです。

今日は初回ですので、「悦びの瞬間」に関する話ではなく、最近の思いつきを記しました。今後は、何かそのような瞬間に出会ったときにしたためてみたいと思います。

写真撮影:立石はな(EAA特任研究員)

第6回 EAA沖縄研究会

前野清太朗氏「樹木信仰と伝統観察者――無文字伝統のテクスト化」

2021年12月10日

2021 年 12 月 10 日、第 6 回 EAA 沖縄研究会が開催された。前回の第 5 回、今回の第 6 回、次回の第 7 回は 2 月開催のシンポジウム「『琉球』再考」に向けて登壇者が順繰りに発表する構成準備回である。前回の報告では、崎濱紗奈氏(EAA 特任研究員)から、伊波普猷の古琉球論を手がかりに琉球的なるものの表象についての問題提起が行われた。今回は報告者(前野)が台湾のフィールドにて収集した各種の事例を交えながら、現代社会の古代的なるものをめぐった力学について初歩的な考察を試みた。

「樹木信仰と伝統観察者――無文字伝統のテクスト化」と題した報告では、現代台湾においてなおしばしば確認できる樹木、とりわけ巨樹あるいは老樹に対する「信仰」を取り上げた。「信仰」と括弧をつけるのは、それがひとえに「宗教」未満の、体系化され位置づけられてはいない実践だからである。文字的な起源の曖昧な実践として行われてきた樹木「信仰」は、時として実践者自身の手によって経典テクストの「宗教」世界に結び付けられ、時として外部の「伝統観察者」たちによって特定の意味を与えられる。あるいは実践者自身による、経典テクストならびに多様な現代的テキストリソースへの意味の結びつけを、必ずしも伝統の不純化とみるべきではないのかもしれない。実践者自身が各種のデジタルメディアを通じて記録・表現・発信を行うことが可能になった現在において、表象をめぐる力学は変化を遂げつつあり、その力学の中での「伝統観察者」の立場も変容を迫られている。ディスカッションでは意味記号としての漢字と音声の問題について、いくつか議論が交わされた。「仏教民俗学者」五来重を生んだ柳田國男の「ホトケ」と「ホカイ(行器)」をめぐる議論にみられるような、音声探究のスピリットを中華世界において展開することもまた可能かもしれない。

次回の沖縄研究会は、高山花子氏(EAA 特任助教)にアイヌ学者・知里真志保と「うた」をテーマにお話しいただく予定である。3 回の一見不連続なテーマの報告を通して、改めて、現代社会の古代的なるもの、について考察を深められればと思う。

報告者:前野清太朗(EAA特任助教)

第6回 東アジア仏典講読会

2021年12月11日

2021 年 12 月 11 日（土）日本時間 14 時より、第 6 回東アジア仏典講読会を開催した。この読書会は、禅を中心に仏教の研究を行っている日本・中国・韓国・フランスなど各国の研究者が集い、文献の会読や研究発表・討論を行うものである。今回は（1）国際シンポジウム「看話禅の諸相」を承けての議論、および（2）永明延寿の「官銭放生」に関する資料の会読を行った。

（1）国際シンポジウム「看話禅の諸相」は 2021 年 11 月 27 日（土）に国際禅研究プロジェクトの主催で開催されたもので、本講読会のメンバーのうち土屋太祐氏（新潟大学）が司会として、ディディエ・ダヴァン氏（国文学研究資料館）、張超氏（フランス高等研究実習院）、柳幹康（東京大学）が発表者として参加した。それを承け、当日聴講していた他のメンバーも加え、東アジアにおける看話禅の成立と展開について改めて議論を行った。

看話禅は公案に意識を集中することで大悟の体験を得る実践法であり、今日の日本でも臨済・黄檗両宗において行われている。ところが、20 世紀初頭に敦煌文献中から発見された古い禅宗文献、および韓国から発見された禅宗史書『祖堂集』から知られる唐代の古い禅の姿は、それまで知られていた看話禅とは大きく異なるものであった。そこでこれまで、古い唐代の禅から、後の看話禅へどのように繋がるのかが主な問題として議論されていた。

それに対し、今回のシンポジウムでは、以下の諸点が新たに指摘・解明された。すなわち、①従来の禅の修行は師匠と弟子の直接の交流においてなされていたのに対し、宋代に大慧宗杲が確立した看話禅は書面などによる間接的な指導が可能であり、それにより士大夫層へ爆発的に広まったと考えられる。②これまで看話禅の宋代以降の展開はあまり議論されていなかったが、元代から明代にかけて人々をより効率よく悟らせる新たな公案が複数創出された。③中国では一つの公案に参究し悟るというのが一般的であったのに対し、日本では複数の公案に参究するようになり、突破した公案の数やその進度を競う風潮が生まれた。④日本で今日行われている看話禅（白隠禅）の実践体系には、白隠がその生涯で得た三種の大悟が反映されており、その大枠は見性（最初の悟り）を経て上求菩提（複数の公案参究による悟境の練り上げ）と下化衆生（教えを説くことによる人々の救済）を行うというものであった。

かかる新たな研究成果を確認したうえで、以下のような問題が新たに議論された。そもそも公案に参究して悟る、というのは具体的にはどういうことなのか。大慧の看話禅は主に士大夫向けに説かれた資料に見えるもので、出家者に対しどのような指導を行っていたのか。中国の士大夫はなぜ悟ろうとしたのか。禅において開いた悟りを乗り越えるという発想は古くからあるものの、乗り越えた先に 2 度目や 3 度目の悟りがあるというような考えはいつ頃から見えるのか。これらの問題をめぐり、出席者により様々な意見が出された。

（2）永明延寿の「官銭放生」に関する資料の会読は、前回の講読会に引き続き、柳を中心になされたものである。延寿の「官銭放生」説の初出は北宋の『東坡志林』であり、そこから南宋期に諸書に広まり、明代に延寿の台詞を加えるなど各種の増広がな

された。 今回はそこからさらに大幅な脚色を加えた明代の小説『西湖二集』、および明末清初の浄土劇の脚本『帰元鏡』に見える「官銭放生」説を会読した。両書の文章は講読会で普段会読している唐宋期の文献と大きく異なり、現代中国語に近く、報告者にとってあまり馴染みのないものであったが、各専門分野のメンバーから意見をいただき議論することで、その内容を把握・翻訳することができた。

今回の講読会で特に印象深かったのは、看話禅をめぐる研究が近年長足の進歩を遂げており、報告者の柳が約 20 年前に研究を始めた頃には全くわかっていなかった通史的な展開が、朧気ながらもかなりわかるようになってきたこと、および現在修士課程・博士課程に所属している若手のメンバーが文献会読の際に有意義な意見を出してくれたことである。この報告書を執筆するにあたり、現時点では想像もできないような禅や東アジア仏教に関する新たな研究成果が彼らにより続々と報告されるであろう 20 年後のことに思いを馳せ、期待に胸を膨らませた次第である。

報告者:柳幹康(東洋文化研究所)

髙山花子『モーリス・ブランショ――レシの思想』合評会

2021年12月14日

昨年 9 月末に、博士論文にもとづいた『モーリス・ブランショ――レシの思想』を水声社より刊行いただきました。わたしが東アジア藝文書院(EAA)に特任研究員として着任したのは 2019 年 9 月 1 日、博士論文の提出は 2020 年 1 月 7 日だったので、最終的な論文執筆と仕上げは、EAA 在職中に進んだと言っても過言ではありません。COVID-19 の感染拡大によって、同年 3 月 30 日の口頭試問は、対面で実施されたものの、非公開になりました。色々な事情から、自分の博士論文には既出部分がなく、すべて書き下ろしであったため、研究内容を知ってもらうことはもちろん、批判をもらいたい、という願いが、本になることで叶ったことに、いまも心から感謝しています。

髙山花子『モーリス・ブランショ――レシの思想』(水声社、2021 年)

刊行直後に、張政遠先生が書評会のアイディアをくださり、王欽先生も参加してくれることが決まりました。当初、よくある書評会のように、何人か評者を立てる予定だったのですが、最初の読者の一人でもあった王先生と話をして、全体的に難解な部分が残っていること、かたやブランショ以外の文脈と結びつけられ

て語られる平易な部分とのちぐはぐ感があることがこの本の課題として浮上し、最初に自分自身で自著についてプレゼンテーションし、そのあとで、参加された聴衆の方々に自由に発言をいただく、出入り自由の3時間企画になりました。

結果として、12月14日（火）当日は、17時より、EAAのメンバーを中心に、一般の方にも数多くご参加をいただいて、途切れることなく言葉を交わすことができました。課題として痛感したのは、第2章「想起なき虚無の言明――「虚構の言語」における「レシ」」で論じたブランショによるヘーゲル読解をもっと他の議論と結びつけて、批判的に読み解く必要があるということ、それから、関連して、第4章「来たるべき歌――マラルメとクラテュロス主義」で論じた、一言でいえば、言葉によってモノが創り出されるときのそのモノとはいかなるものなのか、について、説得力のある明快さがなかった、ということです。これらについては、ブランショを再読するとは別の形で、パースの記号論を参照する、といった方途で答えてゆくことが今後の自分の課題になりそうです。

もともと、わたしが博論終了後にEAAで予定していた研究は、北京生まれでフランスで活躍した画家ザオ・ウーキーとアンリ・ミショーをはじめとする詩人たちの交遊から、アブストラクション概念を精査するものでした。彼らは象形文字である漢字や書についてもあれこれ考えていたので、ブランショの時代から発展して、言語のかたち＝形象について、腰を据えて、具体的な非言語芸術とともに勉強したい、と思っていました。しかし、コロナをはじめとする状況で、中国、フランスでの資料調査も見据えたこの計画は大幅な変更を余儀なくされました――というよりも、実質、本格的に着手することが難しくなってしまいました。そうしたなかで、EAAで偶然読み込むことになった石牟礼道子や、知里真志保をとおして、ブランショの鍵語となっていた物語や叙事詩の意味を再考し、それから、映画制作に携わることでドキュメンタリーやフィクション概念の拡張、変化について、実作者の立場や思考に接近して考える機会を得られたことは、博士論文以後の自分の学究にとって、かぎりない僥倖だった、と噛み締めています。

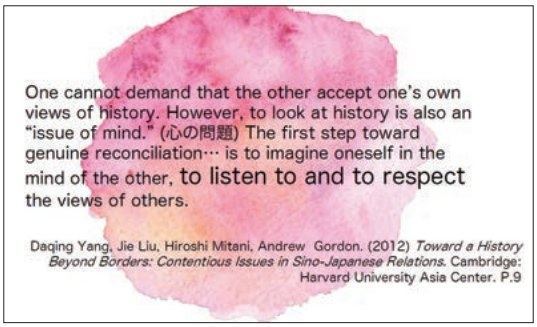
括弧付きの「政治的ブランショ」にどうアプローチするか、ということもまた、積年の課題でしたが、それについては、まだうまく言葉にできないものの、「生」という視点から切り込むことで、なにか見えてきそうだ、という手応えを感じています。そのためにも、読むことの孤独の強度に耐えうるような思考をつづけたい、書くことの孤独を楽しみたい、と強く思っています。

報告者:髙山花子（EAA特任助教）

Why do we hate each other ? —Understanding hatred through historical perception gaps

2021年12月15日

東洋文化研究所（佐藤仁教授）との共催で12月15日に早稲田大学からPattajit Tangsinmunkong（通称Jay）先生をお招きし、ワークショップが開催された。EAAからは佐藤麻貴（企画・司会：EAA特任准教授）とMark Roberts（WS企画・監修）が参加した。2021年は真珠湾攻撃（1941年12月8日）から80周年にあたる。本ワークショップでは、日中における第二次世界大戦の映画をあらかじめ鑑賞し、そこから両国に深く根付いている歴史認識の差異について読み解き、将来のより良い国際関係を構築するためにはどうしたら良いのかを議論することを狙いとした。当日は日本、中国に限らず、様々なアジア周辺諸国の学生



にも参加いただくことができ、大変濃密な議論をすることができた。下記、当日参加した学部学生諸君の感想の一部を掲載する。

高澤美優さんの感想

歴史をみる立場や重視している事象・年代が異なるので認識に齟齬が生じていることが日中歴史問題の根底にあるという Jay 先生のお話は新鮮で大変興味深かった。また、様々な背景を持つ参加者と本テーマについて意見を交わせたことは有意義であった。イベントの翌日には信頼している中国人の友人とさらに議論を重ねた。その中で、Jay 先生もおっしゃっていたように、日中歴史問題は単なる中国にとっての外交カードだという話にとどまらないのだと強く感じた。むしろそれは、原爆を経験した戦争被害者であり、戦後から一貫して平和主義をとってきたと自負する傾向にある日本が、歴史問題から目を背けることを正当化する理論ではないか。日本では、合意やそれに基づいた支援を実行しているのになぜ歴史問題を蒸し返すのかと不満の声が多々聞かれる。しかし、中国の人々が戦時中に受けてきた暴力とその記憶や屈辱は物理的な支援だけではそう簡単に解消されないのだと思われる。

第二次世界大戦を国恥と捉える中国において、日本の顔である政府が大戦を想起させるような行動をとれば中国を侮辱していると思われても仕方がない。複雑な国際情勢の中で日本がどのような外交スタンスを取るべきかを簡単に言えないのは重々承知した上で、私は、日本政府は歴史問題に改めて向き合い、反省の姿勢を中国国民にわかる形で示すべきだと考える。これは、オバマ大統領が広島を訪問した時に、原爆投下の歴史は変わりないがより未来志向の日米関係が構築できるのではないかと思えたことと同じでないか。

今後も中国の友人と生のコミュニケーションを取り続けることでまずは個人間で相互理解に努め、この問題と真摯に向き合いながら学び考え続けていきたい。

岡飛湧芽さんの感想

日本人と中国人の学生がこの WS に参加するのだと思っていたが、実際はそうではなく様々な国籍の生徒たちが参加していることに驚いた。この WS では、講師の先生が学生に発言を促すので、学生たちが話してくれた隣国に対する印象や、日本に来てその印象が変化したといったような経験談を、直に聞くことができた。たとえ、留学生の知り合いがいたとしても戦争や隣国に対するイメージについて話すことは少ないため、これは貴重な経験であったと思う。

自分は幼い頃に小学校の図書館にあった「はだしのゲン」や手塚治の戦争を題材にした漫画を読んでいたので、どうしても日本が第二次世界大戦の被害者であるというイメージが強い。もちろん、日本が加害者であるという事実も知ってはいた。だがしかし、「日本は被害者」「日本が加害者」という事実を自分はいつも日本で、日本語で、日本人から教えられた。このWSでは講師のJ先生はタイの出身であるし、参加する学生や先生の国籍も幅広く言語も英語なので、この「日本は加害者」「日本は被害者」ということが今までとは違う印象で感じられた。そして歴史・戦争・

政治は不可分であり、それらに対する様々な見方のヒントを提示してくれたことは自分にとって大きな収穫になった。そういう意味でもっと日本人の学生にも聞いてほしい講義だった。またアプリを使ったリアルタイムでの授業参加システムも、質問内容が面白いのもあって楽しめた。

短期間のうちに「戦争」に関する映画を見ることができただけでもこのWSに参加して良かったと思う。同じ「戦争」を扱っていても描き方が異なれば、そこに宿るメッセージ性はかなり変わってくることが短期間に見ることで強く印象づけられた。時間は短かったがWSの最後で、このWSのテーマに対するJ先生だけでなく他の先生方の考えや想いを聞けたのもよかった。

この「映画を通して何らかのテーマについて考える」ことは非常に楽しい経験だった。このようなWSがまたあるのなら参加したい。また今後、「メディア」「政治」「環境」を題材にした映画も見比べてみたい。

報告者:佐藤麻貴(EAA特任准教授)

Graduate Students Conference: Good Life, Emotions, and the Senses in Asian Philosophy (Day 1)

2021年12月16日

Day 1, December 16

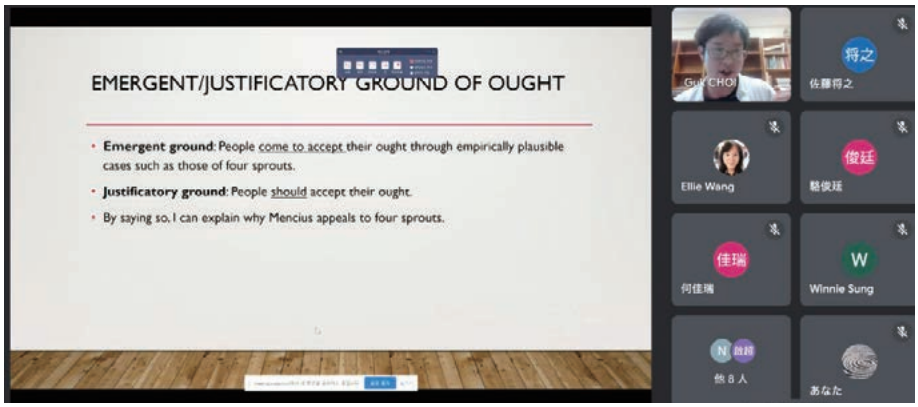
On December 16-17, 2021, National Chengchi University (Taiwan) hosted a symposium, "International Graduate Student Conference: Emotions, Senses, and the Good Life in Asian Philosophy (情感、感官與美好人生國際研究生亞洲哲學論壇)." Participants were students and professors from universities in Asia; a total of 15 speakers gave presentations.

In the first session, three speakers gave their presentations: Park So Jeong (朴素晶), professor of Sung Kyun Kwan University (Korea), Ha Na, Ph.D. student of Sung Kyun Kwan University, and Tatebe Ryohei (建部良平), Ph.D. student of University of Tokyo (Japan).

Park's presentation was entitled "Emotional Reasoning: The Dynamic Characteristics of 'Jeong 情' in Traditional and Contemporary Korean Culture." She raised the issue of how "J was/is . It is interesting to note that she pointed out the importance of the scholar Seongho Yi Ik (星湖李翼, 1681-1763) when considering "Jeong" in the traditional sense.

The second speaker, Ha Na, is a student of Professor Park. Her presentation was entitled "The Philosophical Discourse on 'Public [– Focusing on Seongho Yi Ik (星湖 李瀷)'s Theory of the Public Seven Emotions [公七情]." As we can see from the title, she also mentioned Seongho Yi Ik, emphasizing the discussion on the nature of "Jeong" in the realm of "publicSince the discussion of "Jeong" was also prominent in 17th– and 18th-century China and Japan, the two speakers' presentations are important in considering the contemporaneous trends of Confucianism in Korea, China, and Japan.

The third speaker was Tatebe Ryohei, who gave a presentation entitled "Characters (as Mediators of Ancient Ritual, Thought, and Emotion: Duan Yucai's (Philosophy of Language." He presented a discussion on the study of characters (文字) developed by a Qing dynasty Confucian scholar named Duan Yucai, especially on his work *Shuowen Jiezi Zhu* (説文解字注). Duan had developed many discussions



by thinking about the meaning or nature of each character. According to Tatebe, knowing how Duan developed his imagination from each character or how he engaged with characters is a good approach for us to think about Chinese characters, which, after all, have greatly influenced Asian culture.

In the second session, two speakers presented: Winnie Sung, professor of Nanyang Technological University, and Chen Huiya (陳薈雅), Ph.D. student of National Chengchi University.

The first speaker was Winnie Sung. Her presentation was entitled "'Wu 惡 ' in the *Mencius*," analyzing the word "Wu 惡 " of " 羞惡之心 " in Mencius. Along with " 惻隱之心 ," " 辭讓之心 ," and " 是非之心 ," " 羞惡之心 " is a famous moralistic heart emphasized by the Confucian scholar. According to her, in existing English-language scholarship, there is a tendency not to focus on " 羞惡 ." The reason she focuses on that issue is to think why there is the word "Wu," which means disgust, in such a moral term.

The second speaker was Chen Huiya, who gave a presentation entitled "A Philosophical Reflection on the Healing of Shamanism in Taiwan." It is a discussion of shamanism from a clinical psychology perspective. When a clinical psychologist confronts various patients, giving treatment based on a scientific perspective or telling them some scientific knowledge is not always good for patients to change their reality. In this sense, she pointed out the possibility of shamanism in practical treatment.

The afternoon session began with Professor Ellie Hua Wang (王華) from National Chengchi University. Her keynote speech was titled "The Nature of Ethical Knowledge in the *Xunzi*." Professor Wang focused on the concept of reasoning in the text of Xunzi 荀子 and investigated the nature of knowing. Her main view was that Xunzi developed a type of constitutive reasoning which is different from the one of Aristotle. For Xunzi, Dao 道 is not Heaven's Way but the Former King's 先王 Way. And the categories are instituted to the purpose, not a definite mapping of sets. Human beings make not by reasoning but by daily .

Next, the PhD student from the Chinese University Hong Kong presented his reinterpretation of Mencius' famous doctrine about the goodness of human nature. His argument was titled "Pragmatist Mencius and the Problem of Underdetermination." Choi Guk assumed that Mencius proposed his human nature theory for pragmatic reasons. He focused on Mencius' discussion of the four sprouts 四端 and his criticism of "Throwing Oneself Away" 自棄 , pointing out that these statements could constitute a framework for us to understand Mencius's ethical intention. The focus is on what we should consider as of our nature.

After a short break, a general discussion was held

in the final session. Professor He Jiarui (何佳瑞) from the Fu Jen Catholic University hosted the session and commented on the last two presentations. Toward Professor Wang's speech, one of the questions raised was: since the rules are changeable for Xunzi, how can he persuade people to obey them? As for Choi Gu's talk, Professor He expressed appreciation for his challenge to understand Mencius in a new way but also reminded him of the necessity to explain why he considers the traditional interpretation not good enough. Also, Tatebe Ryohei from the university of Tokyo expressed his interest in Xunzi's concept of Tongren [通人], and Professor Sato Masayuki (佐藤将之) from the National Taiwan University, who was answered the question. The session ended in a lively atmosphere.

Report by:TATEBE Ryohei
(Ph.D. Student, Graduate School of Humanities and Sociology, UTokyo)
ZHANG Yingzi
(Ph.D. Student, Graduate School of Humanities and Sociology, UTokyo)

Graduate Students Conference: Good Life, Emotions, and the Senses in Asian Philosophy (Day 2)

2021年12月17日

Day 2, December 17

Professor Ishii from the University of Tokyo delivered the keynote speech in the fourth session. Based on his thesis titled ," Professor Ishii examined Qing evidential scholars' influence on late Qing revolutionaries first, and then proposed a new interpretation about the origin of radical anti-Li (禮) discourse during the May Fourth Movement. Michael Puett's terminology, Professor Ishii showed that Tan Sitong's (譚嗣同) thoughts on reconstructing moral bonds could be understood as the Confucian practice of "rectifying names" (正名). Such a way of thinking helped us to understand the significance of the new interpretation of rituals that emerged in the middle to late stages of the Qing dynasty.

Next, the PhD student Zhang Yingzi (張瀛子) from the University of Tokyo gave her presentation about evidential studies in 17th-century China. Titled "Taste of the Classics: the Sensory Aspects of Kaozheng in 17th Century China," Zhang's presentation proposed that the Wu School (吳派) of evidential study was partly rooted in 17th-century literature . She pointed out that Wu scholars emphasized the literary excellence of ancient Confucian and shared a positive attitude on human emotion. When compared with Wan (派) scholars such as Dai Zhen, Wu scholars were more fond of the rhetoric techniques and decorative beauty of classical .

The third and final presentation in the fourth session was given by the PhD student Ding Yi (丁乙) from the University of Tokyo. Ding Yi titled her thesis "Aesthetic Reconsideration on 'Wordless Beauty': Focusing on in which she illustrated two different directions to establish Chinese aesthetic studies during the 1920s-30s. The issue of "wordless beauty" (無言之美) played an important role. While Zhu Guangqian understood that beauty exists in artwork and helps us to create an ideal world, Fang Dongmei believed that beauty already exists in the Chinese cosmos so what human beings need to do is to simply

be in harmony with the cosmos. However, both of them had a strong concern toward social problems and their different approaches reflect that modern Chinese aesthetics were developed in various ways.

In the fifth session, firstly Professor Masato Goda (合田正人) from Meiji University, School of Arts and Letters, gave a keynote speech, "In a heavy fog of East-Asia: Shunsuke TsurumiThat Goda would like to explore these two Japanese dissident thinkers whose importance hasn't been justly acknowledged yet was under the reason that today's Japanese philosophy is reduced to the so-called "school of Kyoto".

What is special about Tsurumi is that he not only has radically transformed what the Japanese called "philosophy," but he has also created a diverse movement of civic resistance or non-obedience in Japan after the Second World War. On the other hand, Yoshimi, a Japanese sinologist who is older than Tsurumi by twelve years, joined the committee of "Sisou no Kagaku" (思想の科学) – the journal founded by Tsurumi – in 1954. These two thinkers were related by their interest in pragmatism while manifesting different attitudes towards romanticism, cosmopolitanism, etc.

Subsequently, Wang Shang (王尚) from the National Chengchi University's Department of Philosophy conducted his presentation, "A Junzi is not a Vessel [*junzi bu qi* 君子不器]: On the Confucian Good Life in a Market Society." He pointed out that the teachings of Confucius to become a *junzi*, one who transforms himself through self-cultivation to possess benevolence (*ren* help us to deal with the problems of the good life in a market society. However, at least in Confucius' case, *junzi* as an ideal way of being cannot be manifested in a wide range of social roles. On the other hand, Xunzi provides a more sophisticated argument about the contribution of *junzi* in the social role/occupation sense. Finally, Wang pointed out we need further discussion on how to resolve the tensions between practicing the *Dao* and practicing the little path.

In the sixth session, a keynote speech was given by Professor Ng Kai-chiu (吳啟超), also from the National Chengchi University's Department of Philosophy, entitled "ZHU Xi's *Gewu*." The leading question was: what does Zhu Xi mean by interpreting *gewu* as "to reach things," or how to "reach" a thing in Zhu's sense?

Therefore, Ng explored the relationship between *wu* ("things and affairs," and *li* (理), and argues that it is *wu* that are themselves concrete existences on which *li*'s existence is dependent. According to Ng, the principles of Zhu Xi's thoughts are: (1) concreteness precedes abstraction (there is no independent operation of reaching *li*), (2) the grasp of *li* is a gradual abstraction rather than an immediate abstraction, while (3) without the deny of *huoren guantong* ("one day people will become enlightened and thoroughly

understand *li*," 豁然貫通). Finally, Ng indicated that this paper leads to a comprehensive view of self-cultivation and the good life: because Confucius pursues a good life through enjoying music, in which the bodily dimension, e.g., his ability to appreciate music, should not be ignored.

Afterward, Zhang Yu-cheng (張育誠) from the National Taiwan University'sDepartment of Philosophy conducted his presentation, "Skill Story and Practical Wisdom in the Zhuangzi: A Metaphorical Explanation." Zhang focuses on the analyses of the skill story "Cook Ding" (庖丁解牛) in *Zhuangzi*, in which the cook named Ding argues that what he pursues is the Course (*Dao* 道), something that advances beyond mere skill (*ji* 技). Zhang manifests that we need to use a metaphorical explanation, instead of skill models (e.g., Dreyfus' Model or McDowell's Model), to understand Zhuangzi's skill stories. Concretely speaking, there is a kind of special activity in the story that could be understood as the practical wisdom that guided us to a good life, which is a kind of spirit-driven activity (*Shen* 神) in Zhuangzi's stories, where the vital spirit in human agents and spirit-like efficacy aim at superhuman entities.

The last presenter, Zhang Ching-han (張景涵) from the National Chengchi University's Department of Philosophy, gave her speech: "Feeling and Body: Edith Stein's Theory of Empathy and Wang Chang-Ling'sShe introduced Edith Stein's empathy theory (*Einfühlung*), namely, the experience of foreign consciousness in general, and then divided two modes of empathy: sensual empathy and mental empathy. According to Wang Chang-Ling's "three situational spheres": thing-situation (物境), emotion-situation (情境), meaning-situation (意境), thing-situation provides a solution to problems regarding sensual empathy (e.g., over-emphasis on the direct relationship between body and sensation), and emotion-situation serves as an alternative understanding of mental empathy to perceive an emotional atmosphere that is perceived together with the body.

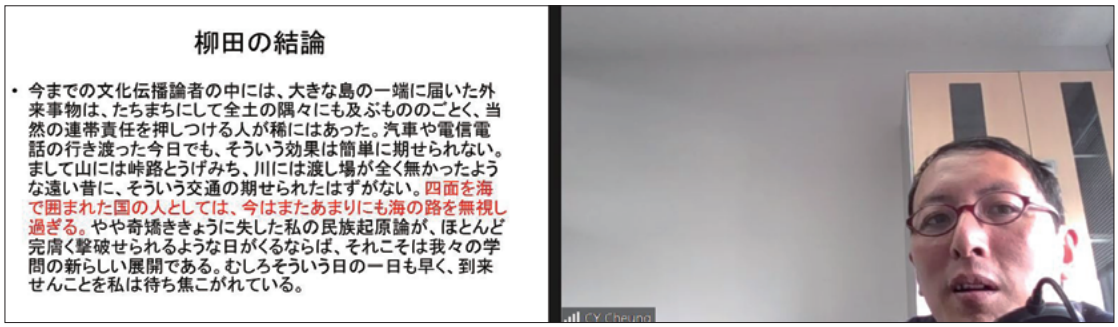
After two days of heated discussion, one more business meeting was also opened, where professors and students were able to exchange opinions in a more leisurely manner and expressed their sincere hope that the next conference could be held in person.

Report by:ZHANG Yingzi
(Ph.D. Student, Graduate School of Humanities and Sociology, UTokyo)
DING Yi (EAA Research Assistant)

第2回 EAA「民俗学×哲学」研究会

2021年12月17日

2021 年 12 月 17 日、 第 2 回 EAA「 民 俗 学 × 哲学」 研究会がオンライン上で開催された。 今回は「トランスユーラシアの言語拡散と東北アジアの農耕民移住── 「三角測量」 の死角と民俗学の視点」と題し、張政遠氏 (東京大学) による 2021 年 11 月の『ネイチャー』 論文精読と人文学的な問題提起が行われた。 報告において取り上げられた論文 "Triangulation supports agricultural spread of the Transeurasian languages" はマーティン・ロベーツ (Martine Robbeets) 氏ら各国研究者の連携チームによる共著論文である (Nature https://www.nature.com/articles/s41586-021-04108-8)。 発表後、同論文は日本のみならず各国メディアによって日本語・韓国語の起源確定として報道された。またDNA分析に宮古島・



張政遠氏

長墓遺跡出土の人骨が用いられたことから、先島諸島の先史人の北方的起源を示すものとしても報道が行われた。

論文タイトルにある通り、共著者らは歴史言語学、考古学、遺伝学の三つの分野からの「三角測量（Triangulation）」を試みている。しかし各技法の三測量点は必ずしも均等ではなく、言語学・考古学・遺伝学の順に分析に用いられたデータセットのサンプル数が少ない。ゆえに論文共著者からの、「沖縄本島と先島の出土品の違いが、本島と宮古島の間に断裂があったことを示している。長墓遺跡一つの結果で宮古先史人が北方由来と断定することはできない。八重山を含む多くの遺跡でDNA鑑定が必要だろう」（宮古新報〔http://miyakoshinpo.com/news.cgi?no=25338&continue=on〕）といった見解も存在していることが張氏からは紹介された。いくつかの争論のありうる点をふまえ、張氏からは民俗学の諸論から生まれてきた「民族」の単一シナリオと異なる複数シナリオを改めて見つめ直す重要性が指摘された。

張氏の報告を受け、コメンテーターの佐藤麻貴氏（EAA 特任准教授）からは、古代史家・平野邦雄氏（1923 ～ 2014 年）の晩年のご記憶を交えながらお話していただいた。佐藤氏によると、平野氏はマレーからの海上ルートの実験考古学的な検証に最晩年にあってなお留意しておられ、強く多面的検証について言及しておられたという。重ねて佐藤氏からは、元来複数的なルーツをもつ社会のありかたに境界線を設けていったのが明治以降の近代主義的国家建設であったのではないか、柳田國男的な問いに改めて彼とことなるやり方をもって広く人文諸学がアプローチすべきではないか、といった指摘が行われた。司会の山泰幸氏（関西学院大学）からも、自然科学的研究の発信側と、その研究の言説を受信する側の関係性そのものが一つの民俗学的分析の対象となりうるのではないか、との指摘が行われた。そうした対象の分析からは、柳田による物質・言語・心意の民俗資料の 3 類型に立ち戻りつつ、南方にルーツを求めようとする日本的「心意」のあり方といかに向き合うかの長期的な問題構成もありえよう。

東京大学東アジア藝文書院のサイトの過去の報告でも何度か紹介されているように、張氏は現象学から研究キャリアをスタートされ、西田幾多郎研究を経て現在幅広い思索を展開しておられる。報告者の全く個人的な所感であるが、張氏の「巡礼」および民俗学への接近の道筋を改めて本人からお伺いできたことは、同氏の多方面の活動を改めて理解するよすがとなるものであった。いわゆる民俗学と、それに連なる思想が、「民族」的な概念と過去しばしば結合してきたのは事実である。けれども同時に一種の自己探求と自省の学として民俗学的な思索が機能してきた側面も、私たちは看過するべきではないだろう。古くかつ新しい学問としての意義を、続く各回の研究会においても探究してゆきたい。

報告者:前野清太朗（EAA特任助教）

東京大学GSIキャラバンプロジェクト「主権の諸条件」

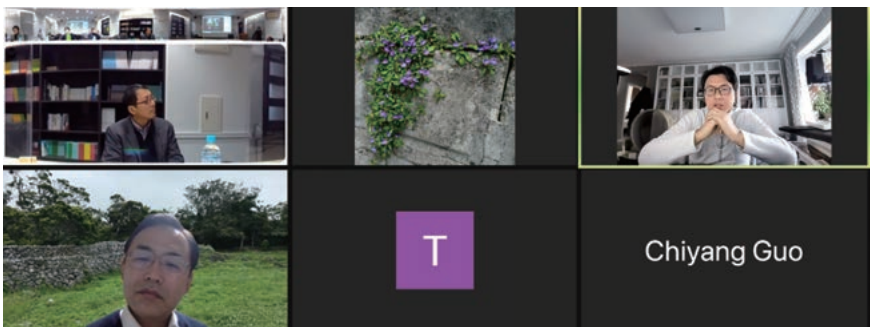
第4回　ワークショップ ——章永楽氏（北京大学）

2021年12月18日

2021 年 12 月 18 日、第 4 回となる東京大学 GSI キャラバンプロジェクト「主権の諸条件」第 4 回ワークショップがオンライン・対面併用のハイブリッド形式で開催された。第 1 回のジャック・レズラ氏（カリフォルニア大学リバーサイド校）、第 2 回のキム・ハン氏（延世大学）、第 3 回の汪暉氏（清華大学）に続き、今回は北京大学から章永楽氏をお迎えした。章氏は東アジア藝文書院設立当初から今日に至るまで、サマー・インスティテュートや UTokyo-PKU ジョイントコースなど、さまざまな場面において本学と北京大学とのパートナーシップの深化に尽力してきたキーパーソンである。

“Rethinking the Concept of ‘Imperial Sovereignty’ in the Age of Trade War”と題して行われた講演では、アントニオ・ネグリ＝マイケル・ハートの『帝国』における議論を下敷きとして、昨今のグローバル化した世界における「主権」のあり方について批判的に検討がなされた。グローバリゼーションの進展によって、国民国家や、それにまつわる従来の国家主権は力を弱め、代わって超主権的な「帝国」が出現する。これに対抗するために「マルチチュード」に力を結集し新たな抵抗勢力のあり方を構想する、というのがネグリ＝ハートの描いたある種の未来予想図であった。しかし現在実際に展開しているのは、国家主権の弱体化ではなく、ある種の強化なのではないか。章氏は国際政治における具体例に言及しながら、こうした根本的な問いを投げかけた。

章氏の熱のこもった講演に応えるように、キャラバンメンバーからも鋭い質問が複数提示された。たとえば中島隆博氏（EAA 院長）は、次のように問うた。中国を今日のグローバリゼーションと主権というディスコースの中にどのように位置付けることができるか。中国における「主権」をめぐる議論の系譜は現在の議論にどのように介入可能か。また、石井剛氏（EAA 副院長）は、高山岩男の「世界史の哲学」や、大東亜共栄圏を構想した京都学派の諸議論に言及しつつ、こうした言説に孕まれる難題をどのように回避・克服することができるだろうか、と問いかけた。両氏の問いに対する章氏の応答、また、キャラバン主宰者である國分功一郎氏（東京大学）が展開した議論は、「主権」を新たな方向性において構想する一つの道筋を示した。そこで示されたキーワードは、（とりわけ第三世界を中心とした）インターナショナルな連帯、そして「開かれ（openness）」である。王欽氏（東京大学）が指摘したように、グローバリゼーションがどれだけ展開されようと、また、どれだけ国際情勢が変化しようと、アメリカに象徴されるような超主権的国家主権の力はますます凌駕的であるように見える。張政遠



写真右上：章永楽氏
写真左下：中島隆博氏

王欽氏

石井剛氏

張政遠氏

國分功一郎氏

氏（東京大学）が言及したように、中国において中国的民主主義（Chinese democracy）とも言うべき概念あるいは実践が議論される中、一体どのような未来を構想することができるのだろうか。

今回のディスカッションを通して確認されたのは次のことである。日本も中国も、「アジア」と名指される空間のアクターである。しかし、わたしたちはこの「アジア」という空間を閉じられたものとして想定するべきではない。国民国家、あるいは主権には、影と光の両側面があるが、これらの概念に死を告げるにはまだ早く、依然として有効性を持っている。今必要なのは、内／外を強固に腑分けする「主権」ではなく、緩やかな連帯を可能とするような、いわば分有的主権（たとえば中島氏が『危機の時代の哲学――想像力のディスクール』（東京大学出版会、2021 年）で論じたような）であるだろう。こうした思想実践を真に展開していくためには、白永瑞（『共生への道と核心現場――実践課題としての東アジア』〔法政大学出版局、2016 年〕）が論じたように、沖縄・台湾・香港・済州といった、主権と主権の挟間に過酷な生を与えられている「核心現場」という主体／場所からの視座が決定的に重要であろう。そこからは、たとえば次のような問いが提示され得る――分有された主権というものが成立し得るとして、それは果たして軍事力と切り離すことが可能なものなのだろうか。この問いを徹底的に問わないのであれば、カール・シュミットが分割不可能な至高の権力として定義した「主権」を分有するという試みは、永遠のアポリアとして宙を浮遊し続けるだろう。しかし、絶対に不可能なアポリアを実現せんとする狂気にしか、変革を可能にする力は宿らないことも確かだ。思想とは、あるいは哲学とは、狂気の上に咲く花のようなものである（その花の力は底知れぬものであり、その力をどのような方向性に働かせ、次なる種を蒔こうとするかは、花を手にした者たち次第である）。今回の議論で言及された狂気の花々――シュミット、アガンベン、ネグリ＝ハート、そして京都学派の哲学や、現代中国における諸議論――の上に、新しい花を咲かせ種を蒔くことができるような思想実践の場として、東アジア藝文書院が存在し続けることができれば、と思う。

報告者:崎濱紗奈（EAA特任研究員）
写真撮影:伊野恭子（EAA学術専門職員）

『渦動する象徴――田辺哲学のダイナミズム』書評会

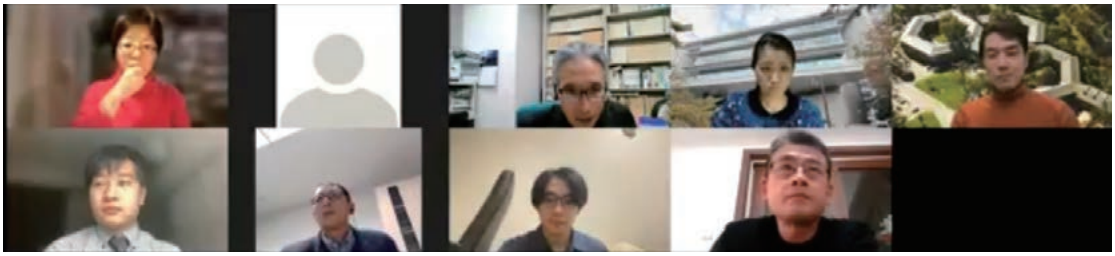
2021年12月18日

2021 年 12 月 18 日土曜日の午後、田辺元求真会と EAA の共催で、田辺元没後六十周年を記念して出版された論考集『渦動する象徴――田辺哲学のダイナミズム』（晃洋書房、2021 年）の書評会が開催された。田辺元の研究には、なかなか若手が参入しづらいという事情を汲み、今回の書評会では大学院生、若手研究者を中心にお声がけし、当日は、司会の佐藤も含め、5 名の研究者からの発表が行われた。

小林昌平氏（早稲田大学大学院博士課程）からは「死者の秘密――ハイデガー、田辺、われわれ」と題して田辺とハイデガーにおける「死」の経験不可能性から生じる死の解釈の相違について、また、そこから派生して死をどう語りうるのかという点について、田辺が用いた『碧巌録』第五十五則の「道吳の弔問」の公案から死者と共にあること（実存共同）、死から超論理、跳躍、逆説、矛盾といった概念を「死者の秘密」として受け取り、死者がその絶対性をもって我々の前に現れてくるという考察が示された。山本舜氏（京都大学大学院博士課程）からは『稼働する象徴』の「有からの創造――哲学史家としての田辺元――」と題し、『稼働する象徴』の田辺研究における立ち位置の考察に加え、田辺研究が現代において直面している課題として田辺哲学に対する硬直的な解釈を、どのように換骨奪胎できるのか、といった問いが発せられた。それは田辺と同時代の哲学者の比較哲学が可能にするものではなく、むしろ田辺の哲学に対する態度に学び、そこから田辺的な哲学を実践することによって、私たちが田辺の哲学的態度から新たな展開を導きだすことができるのでないか、といった大変挑戦的、意欲的な発表をいただいた。佐藤麻貴（EAA 特任准教授）は「生成する偶然性――有限性の超克」と題し、論考集の宮野論文に焦点を当て、九鬼と田辺の偶然性に関する書簡集や九鬼の改定論文に垣間見える田辺の偶然性についての考察につき論じた。田島樹里奈氏（法政大学）からは「還相に託された「友愛」と「希望」」、川村覚文氏（関東学院大学）からは「国家という桎梏――政治理論から見た田辺元」と題して、それぞれお話を頂戴した。詳細は、ブログ報告では割愛するが、求真会の『求真』第 27 号に、それぞれの発表者からの論考が掲載予定なので、そちらを参照いただきたい。

書評会の後半には総合討議の時間を設け、求真会の会長である廖欽彬氏（広州中山大学）、編者の 1 人である杉村靖彦氏（京都大学）、張政遠氏（東京大学）から、それぞれコメントを頂戴した。現代において田辺を読み直す意義や意味合い、また田辺の実直すぎるほどに西洋哲学を哲学史として学び自身の哲学に活かそうとした哲学的態度から学び、私たちの哲学にも実践していくことなど、暮れの押し迫る中、話題や議論に尽きず、大変楽しい書評会となった。今回は『稼働する象徴』の書評会だったため、田辺に話が集中したのだが、今後もぜひ、若手研究者を中心に、京都学派を読み直す現代的意義について、共に考えていきたいという思いを新たにした。

報告者:佐藤麻貴（EAA特任准教授／総合文化研究科）



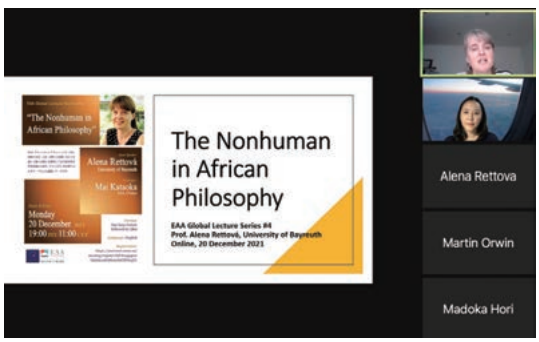
EAA Global Lecture Series

The 4th Lecture "The Nonhuman in African Philosophy"

2021年12月20日

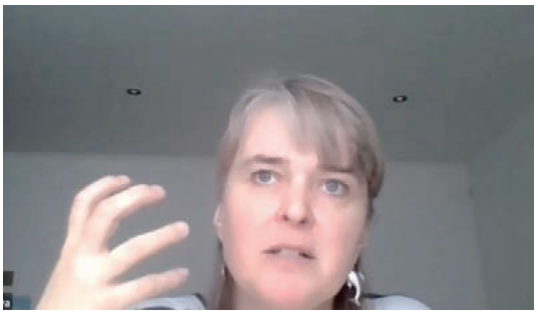
The fourth lecture for the EAA Global Lecture Series co-organised by EAA and Go Global Gateway at the University of Tokyo took place on December 20, 2021, on Zoom. The guest lecturer, Professor Alena Rettová (University of Bayreuth), gave a talk on African philosophy with a particular focus on the concept of the "nonhuman" (i.e., animals, plants, and inanimate nature).

The lecture began with her introduction to the research project that she leads as a principal investigator, Philosophy and Genre: Creating A Textual Basis for African Philosophy, hosted by the University of Bayreuth in collaboration with the University of Warwick. African philosophy is a discourse or a kind of label, she says, that describes texts that deal with African thought. However, the texts on African philosophy published thus far have been mostly written in non-African languages (e.g., English, French, Portuguese, Spanish, Italian, German, and Czech). This neither means that "philosophy" does not exist in the African languages, nor indicates the impossibility of speaking about philosophy in African languages. What problematizes African philosophy in African languages, though, she argued, is scholars' lack of familiarity with African languages and the fact that they are often blinded by a certain genre-bias. She explained that default genres of Western philosophy resulted in bias and impacted the discourse on African philosophy. This is the reason the research project explores genres other than nonfiction prose, including oral poetry, Ajami writing traditions, prose fiction, and digital texts. It takes a bottom-up empirical approach to identify and discover African languages or Afrophone expressions of African thought. Karin Barbar, a British cultural anthropologist, once argued that "to ignore genre is to ignore a text's relation to history and social context" (*The Anthropology of Texts, Persons and Publics*, Cambridge: Cambridge University Press, 2007: 44). By referring to Barbar's insistence on the need for "context-sensitive, emic understanding of non-western genres" combined with "a larger-scale comparative view of the emergence and transformation of genres in relation to changing social reality" (ibid.: 45¬–46), Rettová argued that to understand a culture—the way people in a culture thinks—it is necessary to look at a repertoire of genres, as they manifest the ways in which people express their own thoughts.



She then shared the reasons that the nonhuman in African philosophy is important. As Lewis Gordon notes, "I know of no African philosopher who has not argued that African philosophy is humanistic" (*An Introduction to Africana Philosophy*, Cambridge: Cambridge University Press, 2008: 186), a fundamental humanism is considered the basis of African philosophy. But does this preponderance of the human as the orientation of African philoso-

TANAKA Yuki (IASA, UTokyo)



Alena Rettová (University of Bayreuth)

phy mean that there is no perspective or insights on the nonhuman that would precede (or coexist with) the focus on the human in the African philosophy? These research questions and the recent "the nonhuman turn" in the Western scholarship—a move encouraged by increasingly complex problems that we face now in the twenty-first century, and scholars' growing attention to the fact that "the human has always coevolved, coexisted, or collaborated with the nonhuman" (Richard Grusin, *The Nonhuman Turn*, Minneapolis: University of Minnesota Press, 2015: ix–x)—lie at the heart of the research project.

Having described what motivated the research project, Rettová then took us through how these African thoughts are projected in precolonial texts with special reference to a Swahili poem "Al-Inkishafi." She used this text as a philosophical primer, i.e., as a source of philosophical insights about how its readers perceive the world (the "world" in this context meaning the historical and material conditions of our existence as humans, but also designating how these conditions are organized and the way the world functions; in other words, the metaphysical principles of how the world operates). Other literary works shared as case studies included *Dunia Uwanja wa Fujo* (The World is an Arena of Chaos, 1975) by Euphrase Kezilahabi, *Doomi Golo* (2003) by Boubacar Boris Diop, and *Mosuni* (2007) by Espérance-François Ngayibata Bulayumi.

The Q&A session that followed developed into a stimulating discussion involving the floor. The topics discussed included a question posed by Professor Yuki Tanaka (Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo), who specializes in Chinese philosophy, in which she asked whether such a thing as a universal concept of philosophy exists, or if it is something specific to each culture. Rettová answered that it could be both, as it is possible to find a common ground applicable to all cultures when speaking of philosophy, but you may also label it differently. She further added what "philosophy" means for her: "I use the word 'philosophy' as it expresses a certain attitude towards grappling the world or ideas."

Report by Mai Kataoka
(EAA Project Research Fellow)

第1回 EAA研究会「東アジアと仏教」

2021年12月22日

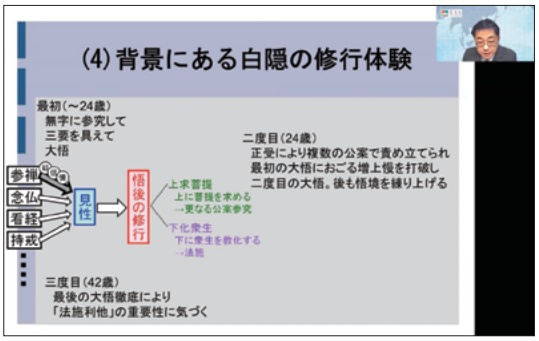
2021 年 12 月 22 日（水）日本時間 15 時より、第 1 回 EAA 研究会「東アジアと仏教」を開催した。この研究会は、人と仏教の交錯から東アジアの歴史や文化、思想、芸術などを照らし出そうとする試みである。初回となる今回は本研究会の発案者となる柳幹康（東洋文化研究所）が、「東アジアにおける仏教の展開と日本白隠禅の成立」と題して研究発表を行った。

インドで生まれた仏教は中国を介して東アジア一帯に伝播し、独自の展開を遂げた。うち 20 世紀に鈴木大拙が欧米へ発信した ZEN は、もとは白隠禅――江戸期の禅僧白隠慧鶴が確立した禅――を承ける。本発表では⑴仏教の展開を概観し、⑵白隠禅に対する従来の理解を紹介したうえで、⑶白隠が示すその実践体系の大枠と、⑷その背後にある白隠自身の実践体験について分析を加えた。

⑴仏教はインドから南方（スリランカ・東南アジア）、北方（チベット・中国・モンゴル）、東方（中国・朝鮮・日本など）へと広がり、それぞれ異なる道を歩んだ。うち東アジア一帯へと広まる東方仏教の独自の展開として、禅宗の成立・伝播が挙げられる。従来の仏教では基本的に、修行により聖者に「成る」と考えられていたのに対し、中国で興隆した禅宗において人はもとより仏（最高の聖者）で「ある」とされ、そのことに気づかせるための独自の手法「看話禅」が南宋期に確立した。これは「公案」という理解不可能な課題に参究させることで、極度の集中状態に人を追い込むもので、これにより従来の歪んだ心の働きを断ちきり、もとより仏である真の自己に目覚めることができるのだとされる。かかる「看話禅」の手法は中国から朝鮮・日本へと広まっていった。ただし中国では一つの「公案」参究により悟るというのが一般的であったのに対し、日本では複数の「公案」に参究し、突破した「公案」の数やその進度を競う風潮が現われた。

⑵これまで白隠の禅は往々にして、体系化された複数の「公案」に参じることがその特徴とされてきた。それを実践する宗門（臨済宗・黄檗宗）の指導者たる師家のなかには、「公案」の体系を公開した者が複数いる。数多くの「公案」の分類の仕方はまちまちであるが、「公案」を階層的に分類する点では一致している。また宗門の外にいる研究者は、おもに白隠の著作に基づき、その実践体系を論じてきたものの、その結論は一致していない。その見解が分かれる主な理由として、白隠自身の所説が一定しないことを挙げることができる。白隠は精緻な実践体系の構築にあまり関心がなかったと思しく、一冊の著作のなかでも異なる説がまま並存している。そこで今回はひとまず、その大枠を把握することに努めた。なんとなれば、本人も意を払わなかった細部に穿鑿を加えても得られるものはあまり多くなく、また、白隠の実践体系と彼自身の体験との対応関係を論じるには大枠の確認のみで十分であるからである。

⑶白隠が示す実践体系の大枠は、複数ある実践のうちの一つに集中することで①見性（己が仏性を見て取ること）に至り、そのうえで「悟後の修行」（悟った後の実践）に進むというものである。うち後者は、②上求菩提（複数の公案参究による悟境の練り上げ）と③下化衆生（教えを施し人々を救済すること）の両面からなり、この二つは相補的な関係にあるとされる。すなわち、②己の悟境を練り上げることによって、③他者の救済に必要な二種の力――教えの真意を見抜く力と、それを施す相手の能力を見抜く力――が養われる一方で、③他者の救済に勤しむことで我見・我執を除き、②己が悟境を高めることができるのだという。白隠自身が強調するのは、まずは①見性したうえで、この②上求菩提と③下化衆生のサイクルを永遠に回し続けることであり、白隠がとりわけ強調するのは③他者の救済なのであった。つまり、これまで白隠禅の特徴であると強調されてきた複数の公案参究（①



～②）は、その実践体系の一部に過ぎなかったのである。

⑷白隠自身の回想を見ると、彼が生涯で得た三度の大悟の体験が、実践体系を構成する三つの要素――①見性、②上求菩提、③下化衆生――に対応していることが分かる。すなわち、白隠は自ら禅の公案に参じて最初の大悟を得ており、それと同様に後進にも公案に先進し①見性を得るよう求めている。白隠は最初の大悟の後、師の正受により複数の公案で責め立てられ、それにより二度目の大悟を得た。のち白隠は師と同様に複数の公案により後進を指導し、更なる悟りを得るよう求めている。これは②上求菩提に相当する。そして白隠は三度目の大悟により、教えを施し他者を救済することが仏教の要諦であると徹見しており、これは白隠の実践体系のうち③下化衆生に相当する。つまり白隠は、自身が履践したように他の者にも正しい実践を踏み行うよう求めているのである。

①見性を得た後に、②上求菩提と③下化衆生のサイクルを回し続ける道を、白隠は仏教の開祖たる釈尊から脈々と受け継がれてきた実践だと理解していた。しかしながら、端的には①見性にいたるための手段が中国で成立した「看話禅」に求められていたこと、また③下化衆生の重要性に白隠が気づくキッカケとなったのが日本で編まれた仏教書『沙石集』を目にしたことに象徴されるように、その実践体系には中国や日本の様々な要素が含まれている。それにも関わらず、自利（自身の悟りを完成させること）と利他（他者を救済すること）の完成を目指し永遠に努力しつづけるという姿勢そのものは、インドの大乗仏教、さらには彼らがモデルとした釈尊の姿に回帰するものであった。ここに時空を越え、一定の範疇に収束する仏教者の共通性を見いだすことができるかもしれない。

今回の研究会は平日昼間の開催であったにもかかわらず、当日は約 60 名もの方にご参加いただき、発表後に様々な質問が寄せられた。たとえば、「白隠にとっての悟りとは何であったのか」「法の施しにより教化された衆生はどうなるのか」「現在宗門で行なわれている公案体系をどう理解すべきか」「白隠の禅は鈴木大拙にどのような影響を与えたのか」等々である。これらの質問に対し発表者の柳によりそれぞれ返答がなされ、活発な意見交換が行われた。その結果、当初予定していた時間よりも 30 分も超過してしまったが、多くの方々に最後までご視聴いただいた。そのことに感謝申し上げるとともに、発表者の不手際により予定していた時間内に終了できなかったことを深くお詫び申し上げあげる。

なお本研究会は目下、毎月ないし隔月に一度の割合で今後も継続していく予定である。今後とも多くの方にご参加いただければ幸いである。

報告者:柳幹康（東洋文化研究所）

第3回 EAA批評研究会

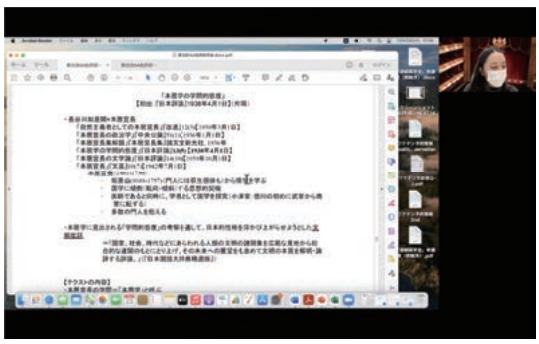
2021年12月23日

2021 年 12 月 23 日（木）、第 3 回 EAA 批評研究会「長谷川如是閑の批評――1930 年代のジャーナリズム論と日本文化論」が対面とオンラインのハイブリッド形式で開催された。本研究会は、様々な概念・事象・テクストから「批評」そのものを問い直すとともに、「批評」を広く世界史・文学・哲学の文脈に向けて開き、新たな知のプラットフォームの構築を目指す試みである。今回の研究会では、戦前から戦後にかけて論壇で活躍していた文明批評家・ジャーナリストの長谷川如是閑（1875–1969）に焦点をあて、「対立的社会感覚の表現としてのヂヤーナリズム」（『中央公論』1930 年 11 月 1 日）、「日本思想の実在主義的傾向」（『批判』1932 年 9 月 1 日）、「本居学の学問的態度」（『日本評論』1938 年 4 月 1 日）を中心に考察した。

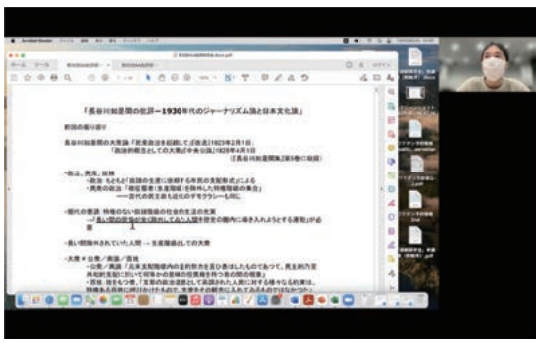
本題に入る前に、報告者（郭馳洋〔EAA 特任研究員〕）はまず竹内洋『大衆の幻像』（中央公論新社、2014 年）を扱った前回の研究会を簡単に振り返りつつ、「大衆」概念を論じた如是閑の「民衆政治を超越して」（1923 年）と「政治的概念としての大衆」（1928 年）という二つのテクストを紹介した。そこでは公共領域に現れる公衆・輿論と区別される「大衆」が社会における対立性を表す概念として析出されている。

その後、報告者は「対立的社会感覚の表現としてのヂヤーナリズム」（1930 年）と「日本思想の実在主義的傾向」（1932 年）の内容をそれぞれまとめた。「対立的社会感覚の表現としてのヂヤーナリズム」において、ジャーナリズムは「対立的社会状態」に由来する「対立的社会感覚」を表現する機関であり、そこで重要なのはいわゆる客観性や公正性よりもむしろ対立性であるとされる。そのような対立性もしくは批判性は近代資本主義社会における商業主義の侵襲で無化されようとしているが、それを取り戻すにはプロレタリア対ブルジョアの「階級闘争」が必要だと如是閑は考えた。そして「日本思想の実在主義的傾向」（1932 年）では、この階級闘争をイメージした対立性が観念主義（ブルジョア）と実在主義（プロレタリア）の対立に結びつけられている。如是閑は日本の近代化の原動力をその実在主義的な伝統に求め、さらにそれを万葉集、記紀神話および近世後期の国学（とくに本居宣長）に遡って論証しようとした。こうした如是閑の議論は 1930 年代以降における一連の宣長論の執筆につながった。如是閑のジャーナリズム論と日本文化論は、同時代におけるジャーナリズムそのものを対象化する動きや「日本回帰」という潮流に関係しつつ、明治期の国粋派ジャーナリストたちによる文明批評を引き継いだ面もあると考えられる。

続いて片岡真伊氏（EAA 特任研究員）は「本居学の学問的態度」（1938 年）の内容を詳細に整理した。如是閑は本居宣長の学問について、1.「学問を中世的ギルドの拘束から解放」、2.「伝承の非学問的方法から近代的の学問的方法へ」、3.「学問の中世的拘束からの解放によって古典を再認識」、4.「我



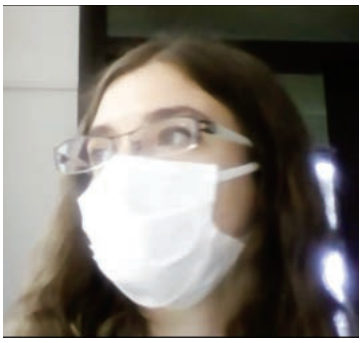
片岡真伊氏（EAA 特任研究員）



郭馳洋（EAA 特任研究員）

高原智史氏（EAAリサーチ・アシスタント）

田中有紀氏（東洋文化研究科）


ヴィクトリヤ・ニコロヴァ氏（総合文化研究科修士課程）

が国民性」の発見、5.「階級的独占の学問」から「国民的学問」への転換、という五つの特徴を挙げており、このような本居学は「古学の名を持った近代学」、「国民に対する学的関係においても近代的学問の先駆」であるという。片岡氏の考察によれば、如是閑の宣長論は中国や西洋との比較を通じて日本文化の性格を浮かび上がらせるという文明批評の手法をとっているもので、その内実は同じ年に出た『日本的性格』（岩波書店、1938年）で表明された、「かくあるべき理」よりも「かくある」ことを重んじるスタンスに通じるのである。

ディスカッションにおいて田村正資氏（EAA特任研究員）は、単なる中立性や不偏不党の標榜をせず対立的社会感覚を重視し、表面的刺激に走る近代ジャーナリズムを批判した如是閑のジャーナリズム論の射程が今日の状況まで及ぶと評価しながら、「対立」をほぼ階級闘争と同一視する如是閑の議論にはマルクス主義の強い影響が見られると指摘し、マルクス主義的なフィルターを外してもなお今日の文脈においてジャーナリズム批判として読めるか、という重要な問題を提起した。田中有紀氏（東洋文化研究科）は日本や韓国における儒教研究の視座と方法に言及しつつ、近世日本の学問に実在主義を読み込んだ如是閑の日本文化論に新鮮味があったものの、論の展開において最初に示唆された普遍史的な視点が後退してしまい、実在主義が次第に日本固有のものとして強調されるようになった点に物足りなさが感じられると述べた。

戦前日本の中国研究者を研究対象としているヴィクトリヤ・ニコロヴァ氏（総合文化研究科修士課程）は、如是閑のいわゆる「転向」およびその中国論の動機に関心を示したほか、如是閑のジャーナリズム論で語られた「普遍的」という言葉の意味、ポピュリズムとの関係が気になったとコメントした。ポピュリズムと関連して、高原智史氏（EAAリサーチ・アシスタント）は「外部」という概念を用いて如是閑の議論に興味深い理解を提示した。つまり「対立的社会感覚」とは外部への意識だとすれば、ポピュリズムの場合は外部が消えてすべての対立が内部の問題に解消されており、その意味で戦後の大衆民主主義もしくは「大衆」天皇制（大衆の天皇制化を指す竹内洋の用語）の問題点はまさに外部性・対立性の喪失にあるという。佐藤麻貴氏（EAA特任准教授）も如是閑のテクストで繰り返し説かれている対立性の問題に着目し、「A vs. 非A」でしかないような対立構造がむしろ批評を稚拙化してしまうのではないかと疑問を呈し、現在の批評はテーゼとアンチテーゼの対立にとどまり、それをより高次な段階へと止揚するジンテーゼを出せずにいる状況を批判的に見た。

対立構造のことについて、田村氏は如是閑の議論が階級的対立に基づいた二元論に帰着するが、今日における最も大きな課題は必ずしも経済的な対立ではなく、むしろ経済力の差異に還元されないアイデンティティや文化の対立であり、現在も多数発生しているそういった対立を掬い上げる可能性を如是閑のテクストに読み込めるかは一つの問題だと指摘した。一方でニコロヴァ氏から、経済的な対立は貧乏か富裕かの問題にとどまらず、社会的構造に深く関わる以上、アイデンティティなどの問題にも通底するのではないか

という意見があった。また報告者は、如是閑の論説には確かにマルクス主義に依拠した階級闘争史観が色濃く反映されているが、その目指したところは単なる「力」（武力／知力／経済力）による支配ではなく、「社会的要求を充たす」ことである点が大事だと考えた。

以上のように今回のディスカッションでは社会における対立性の把握をめぐって議論が盛んに行われた。対立性をどこからどのように読み取るかはジャーナリズムの批評性ないし批評一般にとって重要なポイントになる。おそらく対立性はただ均質的な言論空間における殴り合いではなく、そこから落ちこぼれたもの、換言すれば（前回の研究会で議論された）「大衆の幻像」に包摂されないところに現れてくるのだろう。また現代マルクス主義の中でも、例えばラクラウ（Ernesto Laclau）とムフ（Chantal Mouffe）の共著 *Hegemony and Socialist Strategy*（1985）のように、硬直化した階級闘争史観や存在論的に自己完結的な階級概念を疑問視して、労働者の闘争はジェンダーやエスニシティをめぐる複数の闘争と「節合」（articulate）すべきだという主張がなされている。では、いわゆる階級的対立は現代における無数の対立の一つに過ぎないのか、それとも数多くの対立に対してなお根本的な位置を占めるのか、はたまた社会運動の現実的な戦略として特定の対立を前面に押し出し、ほかの対立をしばらく括弧に入れるしかないのか、この一連の問いはグローバル化しつつも様々な分断を抱えている今日の世界を考えるにあたって避けて通れないものだと思った。

報告者:郭馳洋（EAA特任研究員）

第10回　日中韓オンライン朱子学読書会

2021年12月25日

12 月 25 日（土）日本時間 15 時より、第 10 回日中韓オンライン朱子学読書会が開催された。これまで同様、EAA のほか、清華大学哲学系、北京大学礼学研究中心との共催である。今回は趙金剛氏（清華大学）が司会を務め、許家星氏（北京師範大学）が、2021 年 3 月に出版した『経学与実理――朱子四書学研究』（中国社会科学出版社）について、発表を行った。

漢代や唐代の学問が経書の訓詁に偏重したのに対し、北宋の理学家たちは道を明らかにせんとして自説を創り出し空疎に流れ、朱熹もこの学風の影響を受けていたが、やがて「経学を追究することに努め、実理を推察して、初めてこれまでの人々の誤りを確信した」（『朱子語類』巻一〇四、「自論為学工夫」）という。本書は朱熹によって朱熹を解釈する。特に彼の経学の精髄である『四書集注』をとりあげる。第一章では、朱熹の四書学に関する研究をふりかえりながら、その研究史を概括する。第二章は、朱子の道統論について「十六字心法」をとりあげ、人欲と人心の関係を論じる。第三章は、経学と実理について、『論語』における「学而時習」章や「克己復礼」章の解釈、管仲の評価の問題、『孟子』「浩然之気」章の解釈、『大学』の格物・誠意の説に対する理解、『中庸』首章の解釈について分析する。第四章は、四書を通して朱熹が儒家の聖賢の人格についてどう認識していたかを論じ、孔子の弟子たちへの批判や顔回の人格に対する評価についても論じる。第五章は、朱熹の四書テキスト詮釈の方法・態度・理念についてとりあげる。第六章は、『四書集注』のテキストについて、朱子後学において、異なる版本における文字の差異が、朱熹晩年の重要な思想の理解の仕方に影響を与えたことのほか、中華書局本への疑問についても論じる。第七章は、朱子の四書学の後世への継承と発展についてである。

許家星氏は最後に、伝統的な学術それ自体にしっかりと向き合うことで、古の人々の学問に対する態度や学問の方法を理解できると強調する。しかしそれと同時に、朱熹の哲学命題や思想が、今日において

もある程度の合理性を有するのに対し、彼の採用した「注経」という方法は、今日の哲学を表現するにあたりふさわしいかどうか、常に疑問に思っていると述べた。西洋の「哲学」と、中国固有の伝統学術「経学哲学」の間には、表現という形式面においても、距離があるのだ。

そもそも朱熹や中国前近代の思想家にとって、「経を注すること」はどのような意味を持っていたのだろうか。このことに関して、たとえば垣内景子氏は「経書の注釈という形式に限定された儒者の自己表現に、大きな制約があることは見やすいところであろう」（『朱子学のおもてなし――より豊かな東洋哲学の世界へ』ミネルヴァ書房、2021年、p.200）と述べた上で、以下のような興味深い指摘をしている。「孔子のように経書を『信じて好む』という態度によってしか見えない世界があるのではないか」（同 p.201）「（経書という）枷がなければ、人の『心』は本当に自由になれるのであろうか」「今日の私たちに無条件で信じる経書が存在しないということ、そしてそもそも無条件で信じるということそのものに懐疑の目を向けてしまうということは、私たちの『心』を永遠の不安に陥れ、別のどこかに閉じ込めてしまうのかもしれない」（同 p.208）……。

学問的態度としても、自身の生活信条としても、はっきりとした自覚の上で、「何かを無条件に信じること」は、案外難しい。何かを疑い、それを自身の見識や自身の心の実感に基づいて判断することが良しとされる環境でずっと生きてきたからだろう。その一方で、「何かを無条件に信じる」人々が、私よりも自由であるように見えることがある。

たとえば朱熹はどうか。本書が具体的に論じてきたように、朱熹の「実理」は「経学」に徹底的に支えられている。「経学」は確かに朱熹にとって「枷」ではあるが、彼ほどになると、この「枷」を自覚的に利用し、自身の心の実感に確固たる基盤を与えようとした、ともいえるだろう。もちろん私たちもまた、何らかの制約のもとで自身の思考を展開している。しかし、経書のような「枷」を自覚的に自身に与えることはできない今、まず私たちは自らの思考が、不安に陥ることなく本当に自由であるかを考えてみたい。「枷」の中に自覚的に入り込み、限定された範囲の中でひたすらその作法に習熟し、それを積極的に利用する。限定された範囲の中でしか、見えないものもあるということを、中国の経学は教えてくれるのではないか。

報告者:田中有紀（東洋文化研究所）

「部屋と空間プロジェクト」シンポジウム

2021年12月27日

2021年12月27日（月）13時より、「部屋と空間プロジェクト」シンポジウムが行われた。司会は田中有紀（東洋文化研究所）が担当した。

最初に、大石和欣（総合文化研究科）氏が「詩学としての都市空間と家、そして室内空間」として基調講演を行った。本講演では『家のイングランド――変貌する社会と建築物の詩学』（名古屋大学出版会、2019年）で取り上げられなかった家や空間に関する様々な理論を紹介した。「イングランドといえばコテッジ」という表象が形成された背景には、19世紀後半頃のイギリス農業および農村風景の衰退に伴い、文学で農村を理想化して描かれるようになったこ

とがある。大石氏は、ブルデューの「構造化された構造」には含まれない、日常的な詩学としてのハビトゥス論を考える。

日常性の詩学としてのハビトゥスを考えるために、多木浩二『生きられた家――経験と象徴』（青土社、1984）も参考になる。そこに見えるのは、「生きられた」、つまり無意識でありながらも実存的に生きられた空間としての家、さらに私たちがそれをどう経験するかがトポスとして見えてくるという哲学である。この哲学を、文学や歴史、建築学の中でどう消化していくのか。家に関する「夢想」がどう私たちの思考を形作っていくかというガストン・バシュラールや、手触り・においなど感覚で構成される空間認識を論じたイーフー・トゥアンなど詩学的な空間論も参考になるが、より実存的に論じたのがメルロ＝ポンティである。彼は「空間の知覚とは、特殊なクラスの〈意識状態〉とか作用ではないのであって、そのさまざま諸相は、つねに主体の全生命を表現し、主体がその身体及びその世界をつらぬいて未来へ向かうためのエネルギーを表現している」（モーリス・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』竹内芳郎・小木貞孝・木田元・宮本忠雄訳、みすず書房、1967-74 年）と述べる。大石氏はこの「エネルギー」をめぐり、家への自身の強い興味は、幼少期に家族と過ごした家屋の匂いや感覚がエネルギーとなって、無意識に自分を動かしていたことによるのではと言及した。マルティン・ハイデガーは「空間」と「存在」について、「気遣い」という言葉で表現する。ある空間があったとき、それは単にハコモノでしかないが、そこに人が入り、手を施すことによって（＝気遣う）、空間に意味をもたらす。そして今度は空間が人に意味をもたらす（＝気遣う）。ハイデガーはこれを家にも応用し、家を建てることは、天と地の間に自分の存在を位置づけることだと考えた。

そもそもハビトゥスとは何か。もともと「持つ、所有する（habēre）」に由来するラテン語“habitus”は、『オックスフォード・ラテン語辞典』によれば、(1) 存在のあり方、状態、(2) 立ち居振る舞い、表現、態度、マナー、(3) 着こなしや生活様式、(4) 身体的性質、(5) 身体構造・体格・姿という複数の意味を持つ。また“habēre”からは、「住む、居住する」を意味する“habitāre”も派生し、英語ではすべて“habit”のなかに流れこんだ。つまり“habit”とは、存在のあり方、立ち居振る舞い、着こなしやどういう衣装をきるか、生活スタイル、体格など全てが含まれ、それは文学作品という表象の中にも現れてくるのである。そのため、空間に対置した人間の身体的性質、その性質の延長で建築物や空間を捉える必要がある。エドモンド・フッサールのいうような、心にこびりついたハビトゥスを、文学作品から、どう読み解き、言語であらわすかが課題であるが、文学は言葉によって時間・空間を著すという前提も持つ。たとえば夏目漱石の『門』が描く空間と家の構造の中には、罪悪感にさいなまれながらひっそり生きる夫婦の苦悩が見いだされる。サラ・ウォーターズの『寄宿人たち』には、19 世紀のロンドン郊外にいる女性が、確固たる生活を支えている家が崩れ、親しみのある空間が不気味な空間に変わる様子が描かれる。また、時間と空間の関連についても注意する必要がある。マルセル・プルースト『失われた時を求めて』は、11 世紀から存在する村の小さな教会の歴史性を描写しながら、主人公の過去から現在に至る想念を描き、建築物や空間にハビットとして埋め込まれたものを、フランス語ならではの繊細な時間感覚で描写する。

『家のイングランド』で論じた、多層的時間が共存する複合混成態（コングロマリット）としての空間は、ヴァルター・ベンヤミンの複合形態（コンフイグラツイオーン）という概念から借用した概念である。ヨーロッパでは古い家が好まれるが、家は手をかけることによって、前に住んだ人の時間の上に、新しい、異なる時間が積み重ねられていく。ロラン・バルト『記号の国』が描く上野の地下街は、「ローマの建築物が地方に根

大石和欣氏

付き、その土地の文化に触れてヴァナキュラーな形で変質していく」というロマネスクという語の本来の意味が示すように、表面的には西洋化している上野の地下街にいるホームレスの人々にこそ、そのロマネスクな本質が具現しており、そのヴァナキュラーな形態の中に、上野の本質が浮かび上がっている。

続いて、田中有紀が「森本厚吉の住宅論――「実行」と「信仰」の偉人リビングストンと文化アパートメント構想」として報告を行った。消費経済学者として知られ、女子経済専門学校を創立した森本厚吉（1877–1950）は、1920年に「文化生活研究会」を設立し、日本初の鉄筋コンクリート5階建ての「文化アパートメント」を建設した。彼が目指したのは、アメリカ式「文化生活」の普及であり、中流階級が、優れた技術で支えられた「能率的」共同生活を送り、社会全体を導くことだった。本報告では、森本と有島武郎の共著『リビングストン傳』（警醒社書店、1901年）を再読する。彼らはリビングストンの人生を「煉獄」「実行の苦痛多き生涯」と捉え、最終的に「信仰の生涯」へと入ったと考える。報告では、このようなキリスト教的価値観が、のち、住宅論という生活における具体的な実践として、森本の中でどのように結びつくのかを考察した。

最も身近な生活、住宅に目を向けた森本は「習慣性」が形作る人間の思考や行動に注目した。高遠な道徳、理想を語る前に、まず生活を改善することを考えた森本は、自身とリビングストンを重ねる。森本にとっての天職とは経済問題の解決であり、リビングストンにとってのそれはアフリカ探検である。仕事を全うしたのち、やっと道徳の段階に進む。森本は中流階級がリードする国民全体の福利増進を目指し、リビングストンはキリスト教伝導へと進むのである。森本が目指す生活では、「自分もなまけてはならないし、他人もなまけてはならない」。彼は中流階級にも、それぞれが天職を全うするため、合理的生活を送りつつ、日々努力を続けることを求め、それによって、社会全体の改善をはかる。彼の住宅論では、仕事の空間と家庭の空間が連続しているのだ。彼が構想する文化アパートメントでの、アメリカ式共同生活の背景には、北海道での、共同体の中にある信仰・西洋文化がある。森本の住宅論とそれを支える消費経済学には、札幌農学校時代の経験が生かされているのではないか。「家」という人間を取り囲む身近な存在から、習慣を改め、一人ひとりを目覚めさせ、世の中を改革するという理想は理解できる。しかし、札幌農学校での経験はあくまで森本個人のものであり、彼が主導した「空間」「住宅」に住んだとしても、人は「なまけ」て、「非能率的」な生活を送るかもしれない。そこでの生活では、森本の経験とは別の、新しい経験が積み重ねられていくのだろう。

前野清太朗氏（EAA）は「台湾「うた」空間の再脱日本化とノスタルジアの変容」として報告を行った。イーフー・トゥアンが『個人空間の誕生』で論じたように、近現代社会では公的生活からの引きこもりが追求され個人化が進んだ。しかし現在、世界的に引きこもることが求められる中、公ないし共への再接続の欲求が生じている。そこで注目されるのが「声」によって他者と世界を共有し、身体的に他者と共鳴することである。空間を超越する「うた」から、身体的に隔離された状況において社会的につながり続ける糸口を探ることはできないだろうか。前野氏は、国歌や唱歌など国民統合を目指す大きな「うた」に対し、小さな「うた」（俗謡）としての台湾語演歌に注目する。

日本植民地期には、伝統的な「歌仔」に対し、日本の唱歌や流行歌の影響を受け、自由律化し、音の間がつながる非歌仔風歌が出現した。戦後、1945-1950年代に国民党による権威主義的統治と弾圧が行われた際、民族融和を訴える隠喩歌が流行する。それらが緩和される1950年代中頃に、中国的台湾民謡の採集が行われた際、元来の歌仔のみならず、日本統治期の台湾語歌謡曲も混ざりこみ、1960–70年代になると最新の日本の曲を用いた台湾語カバー曲（替え

歌）が続々と発売されるようになる。また、日本の演歌の「こぶし」が取り入れられ、戦前曲と戦後曲がいずれもカバー後に「こぶし」入りとなり、日本風台湾語「演歌」が完成・定着すると、今度は祭囃子が挿入されるなど、原曲にない「日本風」を加味してカバーされていく。1970–80 年代には俗謡としてマスな TV メディアから排除されLPベースで聞き、歌い継がれていった。1990 年代以降は、戦前の「歌仔」でなく、日本風台湾語演歌がノスタルジアの対象になっていく。このような「うた」は歌謡教室や村の廟の前で行われる宴会・カラオケなど、人々が限定的ながらも身体的・主体的に参加し、日本人がいないことが前提の小さな共通性の空間で歌われ、新たなノスタルジアの対象になっていく。このノスタルジアで想起されるイメージは、「演歌」を好む田舎の父であるが、その父はもはや戦後生まれで、歌っているのも日本風台湾語演歌、さらには廟の村内放送が盛り込まれる曲もあり、もはや日本人に通じない「日本風」となっている。この戦後に生まれた「台湾語演歌」ジャンルは、国（民）歌のような「大きなうた」ではなかったが、1990 年代以降、人々のノスタルジアを伴うようになることで共通記憶的な「大きなうた」の性格をもつ曲も現れた。しかし「大きなうた」は公的空間でのみつながる孤独な個人を生み出す。「公的につながる孤独な個人」の近代的矛盾を克服するため、いまメディアツールを飼いならす必要があるのではないか。身体のあいだ（intercorporeity）が隔離された状況で身体的に「小さなうた」を「うた」いながら小さな「（共）空間」を再建する。コロナ禍のオンライン上で行われた様々な「うた」に関する試みも、この矛盾を克服するための一つの動きであるといえるだろう。

最後に白佐立氏（教養教育高度化機構）が「暮らしと住まいの「弁証法」――ある戦後台北への都市移住者の聞き取りから」として報告を行った。戦後台湾では急速な都市への人口移動が発生した。地方から大都市に移住する人びとは身一つで都市にたどり着き、寄寓や借家住まいなどを経て、自身に適した住まいを選び、整えながら定住に至った。本報告は 1930 年代に台北州深坑に生まれたある女性（ハナ）の生活史を取り上げ、彼女の住まいの変遷と暮らしの関係に着目する。彼女の住まいと暮らしの「弁証法」を考察することを通じて戦後台湾の都市移住者が都市で生き抜いてきた過程を描く。

1931 年に台北州深坑の農家に生まれたハナは、成績優秀で、国民学校卒業後さらに教育を受けることを希望したが、母の反対にあい、十代半ばに、単身台北へ移った後、ずっと台北で暮らしている。仕立を生業とし誇りをもって営んでいる。細身・小柄で、少しせっかちではあるが、陽気でおおらかな性格であり、人に借りを作ることに強く抵抗感がある。活動的で、その元気さは近所の人からも一目置かれるという。

独身時代は最低限の住まいしか必要とせず、寄寓し、部屋借りして暮らしていた。結婚後、兄と合資だが、ハナ名義の非合法建築を購入し、兄に借りを作ってしまった。そこにはリビングルームのような空間と三つの部屋と半楼（ロフト）があった。リビングのような空間には仕立屋をかまえた。2 部屋を間貸し、その収入は兄に渡した。1960 年代半ば、政府が道路を拡幅するため、非合法建築群を撤去し、そこに住んでいた人々の定住先として「整建住宅」を建設し、低金利住宅ローンで提供した。ハナは「整建住宅」である南機場アパートメントのⅡ期の竣工時（1968 年）に入居した。家族 5 人と住み込みの職人が暮らし、6.8 坪の狭い面積で仕立屋を営んだ。竣工当時、南機場アパートメントⅠ期は台湾における最大規模かつ最先端の集合住宅であり、全ての住戸に専用台所・トイレ・シャワー、各フロアにダストシュートが備えつけられていた。住戸内は間仕切りがされず、すまい方

は入居者に委ねられていた。

ハナは店の上部に半楼（ロフト）を設置し、さらにⅡ期の中に部屋を借り、家族の生活空間を確保したが、借りた部屋が店と離れていたので不便であった。店の真上の住戸が購入できるタイミングを狙いつつ、兄に借りた「情」を「返済」するために、自分の家を買い増やす前に、Ⅱ期の中の一つの住戸を田舎にいる兄の名義で購入し、兄の代わりにその住戸の貸し出しを管理した。真上の住戸の売り出し情報が入ってくると、すぐに近所や知人にお金を借りて頭金をつくり、住戸をおさえた。互助会を立ち上げ、住戸の資金を調達して購入した。2階の住戸で広い室内面積を確保するため、1階の庇を床として利用し、2階の住戸に2部屋増築し、1階の台所とトイレを撤去して店として使用できる面積を拡大した。また、スラブを抜き、1階と2階をつなぐ内階段を設置することで、アパートの共有階段を経由せず、直接店と家を移動できるようにした。増改築には近隣住民との折り合いは必要だが、ハナはしっかり自分の考えを持ち、よりよい住環境を構築できるよう不断に工夫してきたのである。人は住まいにあわせてどのような暮らしを送り、また自らの暮らしを築くためにどのように住まいを整えてきたのか、ハナの人生は我々に大きな示唆を与えてくれる。

前野氏が論じた、日本風台湾語演歌が作り出す、独特のノスタルジアが共有される小さな空間は、居住空間ではないが、大きな「うた」が作り出す空間から距離を置き、自らの意思で生まれていった、小さいながらも力強い空間である。こぶしあり、祭囃子ありの混沌とした空間は、客観的には理解しがたいが、歌謡教室や廟の前といった場の記憶とともに形成された、複合混成態としての空間といえるのではないか。また、森本厚吉が理想とした「なまけてはならない」文化アパートメントは、一見最先端の技術に支えられた合理的な集合住宅であるが、これもまた、彼の札幌農学校時代の思い出やアメリカ式生活への思いが、奇妙に絡み合って形成された混沌とした空間である。森本自身を取り囲んでいた札幌農学校の雰囲気が、彼にエネルギーを与え、お茶の水に独特の空間を生み出してしまった事例といえるだろう。そして、ハナが住んだような、近隣住民と折り合いをつけながら増改築を繰り返し、生活を展開していく狭小住宅には、一見私的な空間を築くのは非常に難しいようにみえる。白佐立氏はしかし、ハナにとっては、個人的な干渉はあったとしても、公的権力に介入されず自分の意思でコントロールできる場所であれば、それは私的空間なのであると述べる。1階の店舗と2階の住居をつなぐ階段の出来にこだわり、満足した表情を見せるハナにとって、家はまさに、天と地との間に自分自身の位置を定めていく手段であり、ハナが居住空間を気遣い、居住空間自体がハナを気遣う姿を、私たちは強く感じることができる。

このように、本シンポジウムで大石氏が提示した理論および田中・前野氏・白氏が提示した事例を関連付けてみると、特定の空間に取り囲まれている人々が、自らの生をよりよいものにするため、さらに新しい空間をかたちづくろうとするエネルギーを、無意識のうちに働かせていることに気づく。日本風台湾語演歌による小さな空間も、文化アパートメントも南機場アパートも、私たちにとってはなかなか理解しがたい、独特の空間であるからこそ、そこで人々がもがき、自らの理想を空間に託して形作り、その空間がまた自らを形作っていく様子が、よくわかる。その様子を、今度は私たちが客観的に眺めることでやっと、実は私たち自身もまた、空間を気遣い、空間に気遣われていることに気付くことができるのだろう。

報告者:田中有紀（東洋文化研究所）

第28回 石牟礼道子を読む会

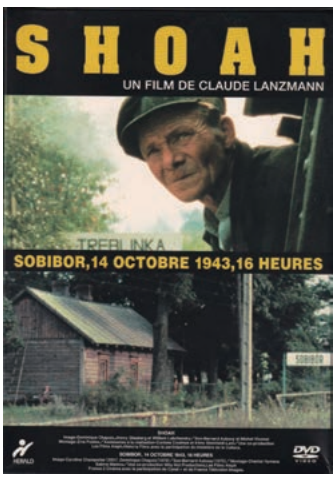
「ショア」を観る

2021年12月28日·29日

2021 年 12 月 28 日（火）、29 日（水）、共に 13 時より、EAA セミナールームにて、ホロコーストに関わる証言を集めた長編ドキュメンタリー映画『SHOA（ショア）』（1985 年）を観た。本作は第 1 部から第 4 部までの全編あわせて 9 時間半近くあるため、2 日間に分けて 2 部ずつ上映会を行った。参加者は、髙山花子氏（EAA 特任助教）と報告者（宇野）であった。

本読書会では、これまで水俣病患者を撮り続けた映画監督・土本典昭の作品をはじめとしたドキュメンタリー映画の上映会を開催し（第 10 回・第 11 回・第 26 回）、議論を重ねてきたが、今回、土本監督が対談をしたこともあるクロード・ランズマン監督の本作を観ておきたい、ということになった。年の瀬ということもあり、参加者が少なかったので、ここに報告文として備忘録を残し、後ほど会で共有できたらと思う。

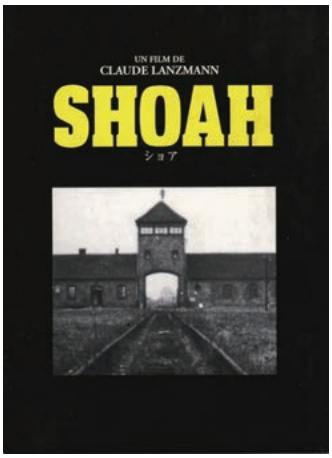
「ショア」はヘブライ語で「絶滅」を意味し、第二次世界大戦中にナチスがユダヤ人を計画的に大量虐殺した「絶滅作戦」をめぐるインタビューで構成されている（その虐殺されたユダヤ人の人数は約 600 万人にも及ぶと言われている）。ランズマンは、1979 年より本作に着手し、作品は 1985 年に公開となった。日本で初上映されたのは、それから 10 年後の 1995 年であった。



DVD ボックスの表紙

インタビューの対象は、絶滅収容所からの生還者やワルシャワ・ゲットー蜂起の戦士、そして加害側のドイツ人の元ナチス（収容所の親衛隊〔SS〕伍長等）だけではなく、傍観していたポーランド人、さらに歴史学者なども含まれ、断片的な証言や語りによって、二項対立的な見方ではない様々な立場の当時の生々しい空気を伝える。撮影は、ポーランドのいくつかの絶滅収容所跡（トレブリンカ、アウシュヴィッツ、ベウジェツ、ヘウムノ等）だけではなく、その周辺地域やユダヤ人移送経路にある駅周辺、さらに強制連行されてきたユダヤ人たちの住んでいた町や、ワルシャワの中心部にあったゲットー、ドイツに占領されたギリシアのコルフ島などに及び、いかに入念な準備の上に撮影がなされたかが窺える。言語も、ポーランド語やドイツ語、フランス語、英語の他にギリシア語など多言語であり、ポーランド語とギリシア語については通訳者の翻訳を待つために 2 倍の時間がかけられた。通訳を待つ煩わしさよりも、その翻訳過程も記録されることが重視されたのであろう。

意外に思われたのは、この映画では、9 時間半の間、怒号も泣き叫ぶ声も哀願する声も、銃声一つ響かないことである。映像においても、インタビューされる人の表情が克明に映されるほかは、廃墟と化した収容所やゲットーの跡、殺戮とその隠蔽に使われた森、近くを流れる川や収容所近隣の畑や町のたたずまい、移送に使われた貨車や中継された駅周辺を静かに映していくだけである。決して映画のために仮のセットを作って再現的な撮影をすることはしないし、BGM の演出も一切ない。すなわち、全ては時間が経過してしまって痕跡と化した風景と年を重ねた人間とで構成されているのである。しかし、だからこそ、この映画は、大量虐殺を現実にあったこととして受け止めて、何よりも「決して忘れられてはならない」「なかったことにしてはならない」「曖昧にしてはならない」という強い警告を発するものになっていたように思われる。



付録の小冊子

ランズマンのインタビューは、終始穏やかでフレンドリーな雰囲気さえ醸し出していたが、一方では、相手の発した言葉の曖昧な点や、口籠ったり、ごまかしたりした部分について、細かく突き詰めていくような態度がたびたび見られた。元ナチスの人物（絶滅収容所の SS 伍長など）に対しては、執拗にその当時の細かい過程やその都度感じたことについて問い詰めるような場面もあった。これは、無論、劇場的な見世物を意識したのではなく（むしろランズマンは、そうしたまやかしの高揚感をいかに避けるかに細心の注意を払っている）、真実はディティールにこそ表れると考えているからだと思われた。

その証言のディティールからは、いかに人間の大量殺戮を行う過程が工場の作業工程のように効率化を検討され、徹底的に遂行されていたかが、明らかになっていく。そして有名なアウシュヴィッツ以外にも様々な収容所があり、殺害や遺体の処理の方法も、収容所によって、また時期によって、さらに対象によって異なっていたことも詳細に語られていく。小さな収容所では、ガス・トラック内で移送中に殺害する方法も取られ、また効率的に移送できない老人や病人、付き添いの孫は、赤十字を装った野戦病院行きの車に乗せられて、森の中の死体用の穴の前でひそかに銃殺された。焼却施設がない収容所では、こうした死体の穴に大量の死体を遺棄していた。生還者の一人は、収容所に焼却炉ができた後に、大量の死体を穴から素手で掘り起こさせられ、そこで 4 ヵ月間地中に埋まっていた親と子供の遺体と出会った時のことを語った。死体の穴は、その後、木を植えて隠蔽された。

こうしたユダヤ人の虐殺と遺体処理の作業を収容所で強制されていたのは、移送されたユダヤ人の中から選ばれた特務班員たちで、証言をした生還者の殆どが彼等であった。例えば、トレブリンカでは、200 人ほどが収容所で働いていたというが、彼等は共に話すことは禁じられ、口をきくことは死を意味した。そもそも彼等は証言をしてはいけないがために、全員死ぬ運命を背負っていた。皮肉なことに、新たなユダヤ人の移送が途切れることも、また彼らの死を意味したのであった。この巧妙な沈黙と隠蔽の服従構造の中で、ユダヤ人にユダヤ人を虐殺させ、証拠を隠滅させる作業が日々続けられたのである（「移送」が始まったのは、1942 年秋。アウシュヴィッツがソビエト軍によって解放されたのが 1945 年初頭だった）。

しかしアウシュヴィッツ収容所では、1944 年秋頃から、ひそかに蜂起する準備も進められ、わずかだが脱出に成功した者がいた、という知られざる事実も語られた。

インタビュー中、生還者は、同胞の虐殺に加担せざるを得なかったこと、忘れなければ生きていけないと思っていたこと、あるいは想像を超える現実に自分でも理解ができないことを語る行為に対して躊躇や中断を示すことが見られた。しかし、ランズマンはそうした時にも、繰り返し続きを語ることを求めた。そうして記憶をたどりながら語りだす生還者の声の調子や沈黙、そして表情に瞬間的に浮かび上がるものこそ、真実にほかならない。このようにして人類の歴史の闇に葬り去られようとしていたものが、当人が「忘れる」ことを望んでいたとしても、決して葬り去ってはいけないものとして、この映画では表象されていた。

全編にわたって、ランズマンの編集は安易な感傷や理解を齎すことを注意深く回避しているが、しかしドラマ的な要素や映画的な美しさが皆無なわけではなかった。それは自然発生的なところがあるが、演出も含まれているように思われた。特にシモンという当時 13 歳でヘウムノ収容所に入れられた生還者に関しては、人間の悲哀と慈しみと不条理と歴史と残酷さの全てがないまぜになったような印象深いシーンとなっている。当時、足首に鎖をつけながら餓死寸前の姿で

SS に教わった歌を舟の上で歌っていたという 13 歳の少年シモンについて、ヘウムノにある教会から出てきたポーランド人の老男女に尋ねると、みな口々に彼を覚えているといい、元気でよかったと声をかけた。この教会は当時ユダヤ人たちが強制的に運び込まれ、そこから次々とガス・トラックに乗せられていった場所であった。当時は傍観せざるを得なかったという彼等の声の渦の中で、シモンは終始柔和な表情を浮かべつつも、時々平静を保とうとしてか煙草を口にやって、表情をゆがめる瞬間をカメラが捉えていた。そして、その中のポーランド人の一人が、当時ラビ（ユダヤ教聖職者）が、SS の前で、この災難をユダヤ人がかつてキリストに侵した罪の贖いとして受け止めよう、と演説したという話をした。ユダヤ人の根絶という前代未聞の政策の根底には、ホロコースト以前からの根深い反ユダヤ的な思想の歴史の層が横たわっていることが透かし見えるシーンでもあった。

このような印象深いシーンはいくつかあった。しかし、物語の断片は、決して一つの感動的な物語にまとめあげられてはいかない。そして、時間軸と場所も細切れに行ったり来たりするのである。決して「わかった」と言わせない複雑さを残し、断片の答えは用意されないままに進んでいく。

それは映画の終わりに語られた不可解な言葉にも象徴的に表れていた。ワルシャワ・ゲットーで、仲間が皆殺しになった後、たった一人生き残った戦士が「自分は最後のユダヤ人だ」と一種の安らぎを覚え、「朝を待って、ドイツ兵のもとへ行こうと思った」と語る言葉である。あの言葉は一体なにを意味するのか。この映画の中で語られたことは、何も解決していないし、回収されていない。

では、この映画体験はどのようなものなのか。先述のように、この映画は徹底して物語化が回避されたものであるが、生還者の人々の記憶をたどりながら語る声と、その表情の深い何かによって支えられており、9 時間半もあったにもかかわらず苦痛と感じることはなかった。むしろ、この映画を 2 日に分けて観たことで、1 日目を終えて、一晩寝て、次の日を迎え、続きを見るという、この長くも短すぎる時間の間、証言の内容や表情を反芻し、情景を思い返すことになった。映画には、極めて普通に生活を営む人間の姿が映されており、それによって語られた当時の出来事もまた、いかに日常の中で起こったことであったかが、むしろ深く刻まれていた。したがって、通常の非日常を体験できるような映画とは別の体験として、この映画は私の体内に残った。この映画で出会った人たちの表情や解することのできない言葉は、今もひたひたと残り続けている。そして、この映像の繊細な手触りや、言葉の不可解さにひかれて、私はまたこの映画を観るだろうと思う。

戦争の悲惨さを伝える映画は、一般に、衝撃を受け感銘を受けながらも、同時に 2 度と見たくない、と思わせるものが多い。一方で、極限状態にある人間の荘厳さや日常のかけがえのなさや人生の意味を確信できるようなドラマがあれば、もう一度見たいと思うのかもしれない。しかし、この映画は、どちらにも当てはまらない。この映画は、そもそも戦争の悲惨さという次元で理解されるべきではない問題を提示していた。

石牟礼道子は、水俣病事件について『苦海浄土』という長い小説を書いた。思えば、この長さが、読書する者において大事な体験であったはずである。そして、それが様々な立場の人たちの異質な言葉のつぎはぎによって成り立っていたことを改めて思う。さらに水俣病患者が味わった苦しみと重い澱のような日常のディティールが丁寧に刻まれていたことも共通している。また、水俣病の原因がチッソの工場排水であると内部発覚した後も、その事実を隠蔽し排水を垂れ流し続けた絶対的な悪について、利益追求する組織の誰に責任があるのか曖昧なままであった構造も、この映画が突きつけた問題と類似していた。

加害者側の元ナチの親衛隊（SS）伍長は、トレブリンカ収容所での自身の責任を決して口にせず、懺悔もしなかった。また 1941 年よりワルシャワ・ゲットーにユダヤ人を隔離し、非人道的な状況の中で街の真ん中で餓死させた責任者の一人のドイツ人は、自身に決定権はなかったと繰り返していた。アイヒマン裁判に見られた構造と同じもどかしさである。組織で行われる凶悪な犯罪は、責任の所在の曖昧さの中でなされてしまう。組織の部分と化した人間の人間性、知

性、良心とは何か、厳しく突きつけられる。

こうした類似性がみられる一方で、この映画は事実に基づくドキュメンタリーにおいて、「物語」を語ることの危うさを厳しく突きつけてもいる。その徹底したランズマンの方針は、一見『苦海浄土』と正反対の態度を示しているように見える。しかし、実際はどうであろうか。石牟礼は、「聞き書き」というフィクションに踏み込んだ時に、この問題に正面から向き合ったはずで、だからこそサブタイトルも「わが水俣病」とし、石牟礼はそれを自身の罪業としても背負うことを覚悟したのであった。有機水銀に侵された水俣病患者は、神経系が破壊されるために、うまく話すことができない。ましてや、生まれながらの胎児性水俣病患者という存在は自身で証言することもできないのである。この違いは決定的であるのではないか。そしてこの問題は、石牟礼が次第に、儀礼と身体の次元へと向かっていったこととともかかわっているのであろう。さらに言えば、「チッソは私であった」というところまで行きついた水俣病患者のように、「ナチスは私であった」というような地平を想定することは（倫理的に、そして歴史的に）可能なのだろうか。そもそも、そのような問いを立てることが許されるのか。

近々、土本監督とランズマン監督との対話も合わせて参照し、本作が喚起する問題から石牟礼の問題に立ち返って議論できたらと考えている。

報告者:宇野瑞木（EAA特任助教）

2021年度活動報告

冬●1月~3月

一高プロジェクト

ホー・ツーニェン
「百鬼夜行」&「旅館アポリア」視察

2022年1月8日

101 号館映像化プロジェクトは現在、着々とそのゴールへと前進している。 完成した作品をなるべく多くの方のご覧に入れようと思うと、どのような環境での鑑賞が可能であり、また望ましいかという問いが自然と頭をもたげてくる。 映像技術の進歩は、単に画面内の表現技法を多様化させたのみならず、鑑賞形態そのものの選択肢をも増やしている。

年が新たになり間もない 1 月 8 日、 愛知県は豊田市を訪れ、 豊田市美術館で開催中の企画展 「ホー・ツーニェン百鬼夜行」 および、 それと連動してとよたまちなか芸術祭の特別展示として企画された《旅館アポリア》 の再現展示を鑑賞した。 この訪問は、 映像を鑑賞するという経験が、まずは強制としてあるということを想起させ、 来るべき我々の映像作品の上映方法へと思考を促した。 想起させた？ そうだ。 我々を取り巻く映像環境は、 ある種の強制性を失っている。 サブスクリプション型の、 あるいは広告収入を前提とする映像配信サービスは、 定額で手に入る視聴時間の全体との兼ね合いで個別の作品を見切ることを鑑賞者に促す。 必ずしもそのような全体の時間を前提するような価値判断が差し挟まれずとも、 たとえば冒頭の数分が視聴者につまらないと判断されれば停止され、 あるいはスキップされ、 ひいては端から倍速で再生されるといったように、 作品は従来持ってきた （許されてきた） 個体性・全体性を喪失する。

こういったことを強く思い起こさせるのは、「百鬼夜行」 展が特徴的な構成をしているからだろう。 展示室は四つあり、 最後の展示室以外は、 それぞれメインスクリーンから各 16 〜 19 分ずつの映像が流れている。 まるで動く屏風のようなアニメーション《100 の妖怪》 が横長のスクリーンを通じて映し出される展示室 1 では、実際に 100 体の妖怪が代わる代わる登場する。 妖怪は一体一体がその特徴を誇示しては流れ去ってゆく。 日本のアニメに触れてきた者からすれば、 見慣れた造形も見受けられる妖怪たちの中にはしかし、 旧日本軍の軍服と思しき姿をした妖怪や、 サラリーマンのようなスーツを着た、 とりわけ風変わりというわけでもない人間の男性風情の妖怪が紛れ込んでいる。 当日は子連れ客も多かったが、 幼い子どもたちが食い入るようにスクリーンをまなざしているのを傍目に、 16 分 30 秒のアニメーションを見終えたところでただ呆然とするほかなかった。 最近では、 親がスマートフォンや

豊田市美術館と展示映像作品

タブレットで動画を見せてその子を黙らせ、育児の手をわずらわせないようにしていると伝え聞くが、これこそまさに強制の経験である。解釈の余地をその具象性において奪われたテクスチャを目でなぜるほかないという映像体験は、あるいは解像度の低い世界が幼児の眼にただ映じているという、原初的な受動性の再現なのかもしれない。

展示室2では《36の妖怪》と題された、18分45秒（本展における映像作品の中では最長）にわたる映像を観ることになる。本作では、妖怪についての解説が音声で流れてくる。そこでは、先に観た軍服姿の男が「大天狗」とのキャプション付きで説明され、あるいは鬼のような形相をした妖怪「魍魎」が1930〜40年代にはアジア各地で見られた、という解説がなされる。妖怪とはたしかに、我々が自然的な世界から被る災いの具象化という民俗学的操作の産物だった。だとすれば、遠いといってもたかが80年ほど前の災いが（この場合は決して自然的と言って済まされないものがあるとはいえ）妖怪化されることは、どれほど奇異であろうか。現在世間を覆っているらしい、いわゆる陰謀論のことを、ここで想起してもよいかもしれない。とまれ、かくて我々はまんまと「百鬼夜行」の世界をおぼつかない足取りでたどることになる。百鬼夜行とは、我々鑑賞者のことなのか。

＊　　＊　　＊

展示室3以降における作品についての詳細は割愛するものの、それらの作品は今回の訪問のもう一つの目的である《旅館アポリア》と、主題的な重なりを持っている。本作については、2020年12月の第2回ワークショップ以降、作家であるホーとともに、本プロジェクトの中で折に触れて話題とされてきた。昨年4〜7月、山口情報芸術センターにて開催された「ヴォイス・オブ・ヴォイド—虚無の声」もまた、アジア太平洋戦争における日本とアジアの関係を重点的に扱ってきた彼の一連の問題意識の中で捉え返すことができよう（今回同行した高山花子氏〔EAA特任助教〕による報告も参照）。

本作はもともと、あいちトリエンナーレ2019において発表された映像インスタレーションで、豊田市内の

喜楽亭（豊田産業文化センター内）

喜楽亭という建物を使って展示されている。喜楽亭は大正期に建てられた旅館で、いわゆる神風特攻隊に配属となった当地の青年たちが最後の宴を楽しんだ場所としても知られており、現在は豊田産業文化センター内に移築されている。「アポリア」とは、古典ギリシャ語で「行き詰まり」といった意味を持つ語で、作品名には戦地に送られた若者たちの、そしてこの国の行き場のなさが、喜楽亭という場所（トポス）の歴史を参照しつつ表現されている。歴史考証を土台としたホーの制作スタイルを体現する代表作と言えるだろう。詳細な説明は、たとえばすでに小崎哲哉氏によるレビューがあるので、参考にしてほしい。

実は「百鬼夜行」展もそうだったが、本作でも各々の映像についてのナレーション＝声が重ねられており、語りの幻想感が単なる映像の解説にとどまらない奥行きをもたらしている。この点については、大岩雄典氏がすでにいくらかの考察をめぐらしているので、参照されたいが、ここでもやはり「百鬼夜行」と同じく、四つの部屋に設置されたスクリーンに、12分の映像が7本、計84分の視聴が、訪れた者には課されている。しかも、コロナ禍という2019年の発表当時にはなかった事情により入場が厳しく制限されていたため、その受動性も一入といったところだ。各部屋には数人の鑑賞者が座布団に腰を下ろし、一斉にスクリーンに目を向ける。やおら立ち上がるわけにもいかず、映像が一区切りつくまでは離れられない。少なくとも、離れることは想定されてはいないようだった。そもそもそれは、映像インスタレーションというジャンルの特性に関

わるものであり、ホーの意図による独自の展示構成ではないのかもしれないが、単にセクションごとに分けられているだけで、まるで映画館で映画を観るという鑑賞体験をなぞっていくもののようにも思われた。あるいは逆に、本来的に映像は停止したり巻き戻したりすることは想定されていないとしても、人間の身体について勘案すべき持続の切断というものはあるから、作者がそれを考慮に入れて、20分には及ばない長さの作品を分節化された空間に配置することは、日常的には失われつつある映像の本来的な鑑賞体験を回復するという効果を持つのではないか。だとすれば、来るべき我々の作品は、どのような強制力をもって、鑑賞者をいかなる空間に招き入れるべきなのか、豊田土産として考えてみたい。ところで、ここでいう作品とは、映像に限らないかもしれないことは言い添えておこう。

報告者:日隈脩一郎(EAAリサーチ・アシスタント)
写真撮影:髙山花子(EAA特任助教)

話す／離す／花す（16）

猫の共同体と文の共同体

石井剛(EAA副院長)
2022年1月11日

COVID-19のパンデミックで日常の行動が制限されるようになって以来、健康維持のために近所を走る習慣がつきました。ランニングコースのなかには、戦後に開発されていまはすっかり老朽化してしまった巨大な団地があります。住む人も疎らになり、整然とした通りも、上品に配置された緑地も、すべてが不思議な静謐に包まれたその一帯は、まるで都会の喧噪から忘れ去られたような佇まいです。その中を走っているとしばしば野良猫に遭遇します。野良猫がいるということは、そこに人が住んでいるということでもあり、この団地の住人と覚しき人たちが餌付けしている場面に遭遇することもよくあります。

何度もそうした場面に遭遇していくうちに気づいたことがあります。それは、同じ猫をめぐって、人びとのネットワークができあがっているらしいということです。餌付けを介して知り合った人同士が立ち話をしていることもあるようですが——こういう人たちは猫に名前を付けて呼んでいるようです——、彼らが互いの素性を知っているとは限らないでしょう。一匹の猫が今日はあの人から、明日はまた別の人から餌をもらっているだけでなく、餌をやっている人同士が必ずしもお互いの存在を知っているとは限りませんし、あるいはまた、近隣同士でいがみ合っている人同士が、じつはお互いのあずかり知らぬところで同じ一匹の猫と仲良くなっているかもしれません。また、同じ一匹の猫が別々の人からそれぞれ別の名前を付けられていることもきっとあるでしょう。猫と近隣住民のこうした関係は、猫のいのちを支えているだけでなく、猫に餌をやるというその行為によって、人びとをも支えていると言うことができるでしょう。ふだんはいがみ合っている人たちも、猫を介することによって、結果的に猫を生かし、自分も生かす関係を共につくっているのであり、図らずも共生を実現しています。野良猫の存在は、開かれた緩いネットワークとして彼らが住まうヒトたちのコミュニティの平和を支えているのだと言えそうです。

わたしは、テキストを通じた開放的ネットワークのことを「文の共同体 / 共同態」と呼んでいます。テキストを読むという行為はそれ自体、誰かとの共同作業であり、わたしたちはテキストを読みながら、その向こうにいる誰か別の読者と実は呼吸を合わせているのです。テキストがわたしたちを豊かにしてくれるのは、単にわたしたちが読者としてテキストの「声」を聞いているからではなく、その「声」そのものも、別の誰かの「声」を通じているのであり、わたしたちはそうした見えない「声」によって導かれるようにテキストを読んでいます。それはまるで団地の猫によって結ば

れる緩い関係と同じような、共感なき共振のネットワークであり、そこでもまた、人びとは時代を超え、空間を超えて、テキストとその向こうの「声」によって救われているのだとわたしは思っています。

ところで、駒場キャンパスにも野良猫は出没します。「駒猫」と呼ばれるその猫たちを含む東大キャンパスの猫たちをめぐる緩やかな平和の共同体を多角的に紹介してくれる『猫と東大。』という本があります。この魅力的な本の中で、小野塚知二さんは、人間の社会は野良猫がいる社会といない社会に分けられると言います。飼い主なき不幸な猫を保護し、不妊治療（同じ名詞でも人に対して施されるのとは正反対の処置ですね）を施す社会では野良猫が根絶されるというのです。一方、野良猫は、人間の管理下での生活に飽き足らず、自立して歩き回る「自由猫」と呼ばれることもあるそうです。野良猫のいない社会は猫にとって自由なのかどうか、そして、「自由」とは結局何なのか、思わず考えずにはいられない話です。小野塚さんは野良猫のいない社会を帝国主義のあとにくるポストコロニアルな思想としての動物愛護イデオロギーと結びつけたいと述べています。

「文の共同体／共同態」に関しても似たようなことは当てはまることでしょう。今文経学の歴史が明らかにしているように、テキストは制度として認められた出版システムのなかでのみ再生産されるものではありません。「文」は、いや文化全般は、そのような制度や経済のしくみごときで飼い馴らされ、消滅するほど柔なものではなく、もっと自由なものであり、その自由を支えているのは、人びとの文に対する渇望、文の向こうにある「声」を聞こうとする欲望にほかなりません。武田泰淳が戦火に焼かれた中国の公園で「焼け失せるともなお自己の「文化」をだきしめている身一つが残ったらそれでよいではないか」という感慨に至ったのも、そうした「文」の自由と、そして、その根柢にある本源的な共同性に対する信頼であると思われます。

2021年はわたしにとっては正直辛い年となりました。それは、人と人、国と国の間があちらこちらできしむような音を立てて緊張し始め、それをほぐすための言葉を見つけるために必要な心の余裕と想像力が作動するチャンスを奪われていると感じることが多かったからです。その傾向は今年も強まるかも知れません。しかし、わたしたちの文化はそれほど脆弱なものではありません。なぜなら、文化のおおもとにある「文」への信頼と渇望は、わたしたちの生きる希望として絶えるはずがないからです。

EAAもまた、宇宙的に広がる「文の共同体／共同態」の一部として、「文」への希望を育てる場所として、引き続き発展していくはずです。今年もまたみなさまの温かいご支援とご協力をお願いいたします。

写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

悦びの記＃2

石井剛（EAA副院長）

2022年1月14日

EAAユース第3期生の募集ガイダンスが連日のように行われています。やむを得ぬ事情がない限り、対面で学生さんにお会いしたいので午前中から大学に来ていますが、今日はEAAオフィスに入ってまもなくして、第1期生の学生、金城恒さんがたまたまやってくる場に遭遇しました。現役のユース生の中でもEAAの活動に積極的に関わってくれている一人ですが、オンライン授業が多い現状ではなかなかキャンパスで会うチャンスはありません。聞くと、ついいましがた卒論を提出してきたその足で寄ってくれたのだということで、オフィス勤務の高山さんと共にたいへんうれしい気持ちになりました。

学部の卒業論文は、ほとんどの学生さんにとって初めて執筆するまとまったモノグラフですから、そのプレッ

シャーは相当なものであるはずです。悪戦苦闘したあげく無事に完成して提出した後の解放感にもひとしお特別のものがあることでしょう。わたしも最後の一晩をほぼ徹夜して、窓外が明るくなり始め鳥のさえずりが聞こえ始めたころに何とか完成させたことを思い出します。

彼のことは2年生の後半に授業でごいっしょして以来、さほど近くはなかったとは言え、ずっと見守ってきておりましたので、この2年あまりの間にぐんぐん伸びているようすに、わたしはただひたすら驚いていたのです。若さゆえのそうした成長のエネルギーが発揮されるさまを横で見ることができるということだけでも、教員とはなんと幸せな職業であることかと感じずにはいられません。卒論執筆というのは、きっとそういうエネルギーが一気に迸り出るような荒々しさに突き動かされて行われることにこそ、他の論文にはないであろう尊さがあるのではないかとわたしなどは思ってしまいます。金城さんをこの場で再度祝賀したいと思います。

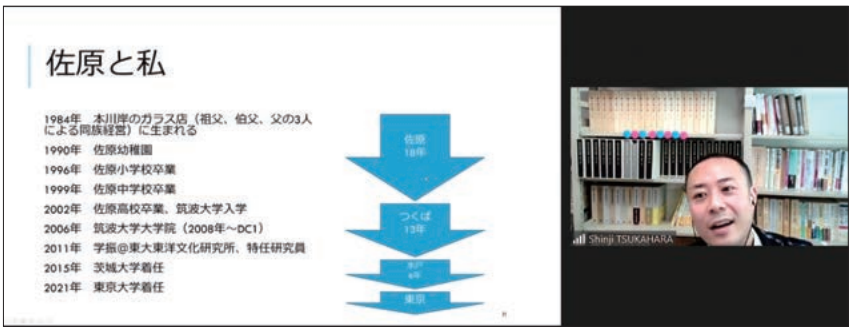
また、彼がこうしてふらりと立ち寄ってくれたことに対しても、感謝したいと思います。EAAは、学生さんたちがいつでも立ち寄ってくれる場であることに自らの存在意義を見出しています。駒場の一角、かつて特設高等科の生徒が学んでいたこの特別な建物の一室は、〈学問の友情〉に向けていつも開かれていますので、どうぞ皆さんふらりとお越しください。

石井剛（EAA副院長）

第3回 EAA「民俗学×哲学」研究会

2022年1月14日

2022年2022年1月14日、第3回EAA「民俗学×哲学」研究会がオンライン上で開催された。今回は昨年10月に本学に着任された塚原伸治氏（東京大学）をゲストスピーカーにお迎えし、「郷土の研究者はいつまで同郷人でいることができるか？――アカデミック民俗学者にとっての地元について」と題して報告を行っていただいた。本研究会の第1回は山泰幸氏（関西学院大学）による、研究者と地域の広義の協働をめぐる問題についての報告であった。今回の塚原氏の報告では、山氏の報告と通じるテーマについて「地元出身の知識人」としての立場からアプローチしていただいた。塚原氏は千葉県の佐原（さわら、現・香取市）ご出身の研究者として、佐原および福岡県柳川・滋賀県近江八幡にて商家の「老舗」をめぐる民俗学研究に取り組んでこられた。下総の在郷町として発展してきた佐原では、山車を用いた大規模な祭礼（佐原の大祭り）が毎年開かれている。大祭りの運営のため、佐原の各区域には「町内」とそれに附属する年齢別組織が存在してきた。佐原育ちの出身者にとって祭りはライフイベントと密接に関



塚原伸治氏（東京大学）

わっており、地元進学し地元就職してこの祭りに長くかかわり続ける。

巨大なキーパーソン・柳田國男のもとに立ち上がった（日本）民俗学は、一つには旅人の学＝外部者の学として、もう一つには同郷人の学＝自己研究の学として長らく展開してきた。一方、戦後日本において、そうした旅人の学・同郷人の学が、徐々に大学において学ばれる学問となっていったことも別個の事実としてあった。現在、大学・大学院において学問として民俗学を学び、プロの研究者となるルートは民俗学者の主要なキャリアパスの一つである。ところが大学・大学院を経てプロ研究者となることは、ローカルな社会にあって全く普通のライフコースではない。このことは、佐原での塚原氏においても同様であった。各「町内」がもつ組織は、大学・大学院を出てプロ研究者になるキャリアを想定していないので、院生やポスドク身分のままでは学校を出て職のあることが前提の年齢別組織の正規メンバーとなることができない。やや強引かもしれないが、ローカルな社会にあって「普通でない」者が、同郷人としての立場から同郷人の学としての民俗学的記述を行うことができるのか、との問いを今回の報告の主題としてまとめることもできよう。

塚原氏自身も話す通り、この問題に明確な答えがあるわけではない。出身者と外部者の「あいだ」にいる者として（両者のいずれか乃至同時に属する者としてではなく）立振る舞うことは、問題に対する有力なオプションの一つである。その上で、まこと僭越ではあるが、非・民俗学者のフィールド研究者としての報告者（前野）の私見を最後に簡単に附記しておきたい。金沢出身とは名ばかりの村方育ちの報告者が、都心に住まうようになって10年余がたつ。長い住まいとはいいながら、率直なところいまだ東京的な文化の型を報告者が身に着けたとは思えずにいる。10年余の暮らしを共にしてなお理解できないのであるから、研究者として訪れる台湾の村方のことは余程理解しがたいものに違いない。ところが奇妙なことに、都会人でないその生い立ちゆえ、報告者はソフィスティケイトされた台北人たち「いけ好かない都会人」を除いた会話のなかに紛れ込むことができる。もちろん同様な行いをいくら繰り返したからといって、報告者が台湾「ネイティブ」の立場を手にする日はやって来ないであろう。話題が「いけ好かない外国人」の話になれば、報告者の持っている特権はたちまち消えてなくなるからだ。だが、ここにはある立場（性）を多次元的にとらえるヒントがあるように思われる。そもそもある人の持つ立場（性）とは拭いがたい性質のものである。けれども、人とはもとより一身に複数の立場を兼ね備える存在ではあるまいか。自らの存在を因数分解しつつ、諸々の他者の持つ因数＝立場からの省察を行う、そうした哲学 - 民俗学的想像力とでも呼ぶべきものに、学問となった、あるいは学問としての民俗学の意義を報告者は見出している。

報告者:前野清太朗（EAA特任助教）

第7回 EAA沖縄研究会

高山花子氏「知里真志保について――アイヌの複数の「うた」」

2022年1月14日

2022年1月14日、第7回EAA沖縄研究会が開催された。第5回・第6回に続き、今回の研究会も2月6日に開催予定のシンポジウム「「琉球」再考」の準備会という位置づけで行われた。シンポジウム登壇予定の高山花子氏（EAA特任助教）による発表「知里真志保について――アイヌの複数の「うた」」をもとに、参加者が自由にディスカッションに参加した。

周知の通り、知里真志保は北海道出身のアイヌ語学者である。アイヌという出自を持ち、アイヌ語を研究したという知里は、沖縄出身者として琉球諸語を研究

した伊波普猷に通じる経験を持つと言えよう（ちなみに知里は第一高等学校、伊波は第三高等学校を経て東京帝国大学の言語学科を卒業している）。さらには、伊波が「おもろ」をはじめとする古謡の探究に向かったように、知里もまたアイヌの「うた」について多くを書き残している。

なぜ知里は（そして伊波は）「うた」の探究へと向かったのか。その問いへの一つの手がかりとして、高山氏は知里の次の言葉に触れた――「歌は楽しみのためにあるのではなく、生きるための真剣な努力なのである。すきだから歌うというのではなく、歌わざるを得ない事情にあったから歌うのである。」（知里真志保『知里真志保著作集 2 説話・神謡編 II』平凡社、1973 年、7 頁）。ここには、「歌」といってもそれは、現代において我々が想起するようなものではなく、共同体を営むために必要不可欠な行為としての「うた」が描かれている。さらに知里は「うた」が「歌謡」となる以前の「うた」の姿を明らかにする必要がある、と主張する（ここから先は、2 月 6 日の高山氏の発表「歌謡以前に向かって――知里真志保からみるアイヌの〈うた〉」をお聞きいただきたい）。

ここで当然、『国文学の発生』に代表されるように、「うた」と共同体の関係性について論じた折口信夫が想起される。実際、アイヌの「うた」（とりわけ「神謡」）についても、折口に多大な影響を受けた金田一京助の説が通説とされてきた。知里は自身の歌謡論を展開するために、まずこの通説に挑戦しなければならなかった。

伊波の場合も、やはり折口学に深い影響を受け、そしてそこからの離陸を試みることによって伊波独自の歌謡論を展開したという背景がある。折口信夫という知の巨人を介して、はからずも交錯した琉球・沖縄とアイヌの「うた」の世界に知的好奇心を刺激されたひとときであった。

報告者:崎濱紗奈（EAA特任研究員）

第29回 石牟礼道子を読む会

2022年1月18日

2022 年 1 月 18 日（火）15 時より、Zoom 上にて、第 29 回石牟礼道子を読む会が開催された。年明け最初のわたしたちの集まりの目的は、改めて『苦海浄土』に立ち返り、とりわけ第 3 部「天の魚」に描かれる 1971 年の年末から 1972 年にかけての冬の時期に、石牟礼たちが水俣から東京に赴き、チッソ本社前で座り込みをした道行を辿ることである。かねてより、読書会メンバーでは水俣に赴く計画があったが、その前段階として、石牟礼たちが当時たどった東京駅周辺の地理を自分たちで歩くことができないか、というアイディア実現のための事前準備会でもあった。

発表担当の山田悠介氏（大東文化大学）のほか、鈴木将久氏（東京大学）、武田将明氏（東京大学）、張政遠氏（東京大学）、佐藤麻貴氏（東京大学）、宇野瑞木氏（EAA 特任助教）、宮田晃碩氏（東京大学大学院博士課程）、建部良平氏（東京大学大学院博士課程）、サラ・ニューサム氏（カリフォルニア大学大学院博士課程）、徐嘉熠氏（清華大学大学院博士課程）、それから報告者の高山花子（EAA 特任助教）の合計 11 名が参加した。

山田氏は、主に『苦海浄土』第 2 部「神々の村」と第 3 部「天の魚」を参照し、1969 年から 1972 年に石牟礼周辺で起こった出来事を時系列に丹念に整理して提示した。長らく未完のままだった第 2 部の最後に描かれているのは、1970 年 11 月 28 日に大阪でチッソの株主総会が行われた際に、水俣からの巡礼団が御詠歌を歌い、その翌日に高野山へ向かった一同の姿である。それを踏まえた上で、山田氏が整理したのは、翌年の 1971 年 11 月 1 日に、患者の川本輝夫のグループがチッソの水俣工場前に座り込みをはじめ、ほとんど同時期に、東京農業大学のメンバーがチッソ東京本社前に座り込みを始めたこと、さらに

（Google map で 1 ～ 4 のルートを検索。）

（時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」（(C)谷　謙二）により作成。）

山田悠介氏の発表資料より

その後、翌 12 月初旬に川本たちが水俣を出発し、12 月 6 日に東京駅に到着してチッソ本社に赴き、社長と対面し、1973 年 7 月 12 日まで断続的に座り込みを続けた経緯が、第 3 部に描写されるエピソードの時期と重なっていることである。

そして、当時をたどる道のりとしては、東京駅丸の内南口から、当時のチッソ本社、すなわち現在の東京ビルディングを経て、皇居前広場を通過し、桜田門に行き、社会文化会館や日比谷公園に抜けるルートが可能性として提案された。

山田氏は、当時の朝日新聞での座り込みを取り上げる記事や、今昔マップといった地図、それから気象情報も紹介すると同時に――コンクリートに座るには厳しい寒さで、1972 年 1 月 1 日は満月だったという――、「天の魚」でいかに東京駅周辺を歩き回る水俣の人たちの姿が描かれているのかを、距離感と歩く時間感覚の推定とともに、50 年前の歩行の姿を克明に示してくれたと言えるだろう。

議論では、明治 100 年に向けての節目でもあった 1968 年の時代性や、その頃の東京がある種の「舞台」として機能していたのではないか、といった話題が上がった。1980 年代に入っても、いまと風景は異なれど、明治以来の荘厳な建築が並んでいた様子が圧巻であっただろうことや、たとえばそれが水俣から出てきた人たちの目にどのように映ったのか、意見が交わされた。また、現在のように交通網が整備されていない中で、車中泊を含んで水俣から東京まで移動した一行の旅路の過酷さについても言及された。

『アサヒグラフ』
1970 年 6 月 12 日
特集・水俣病

議論を聞きながら思いだされたのは、1970 年 6 月 12 日付の『アサヒグラフ』の水俣病特集で、石牟礼道子が「悪相の首都・東京」と題したテクストの最後に、次のように書いていたことである。

> この現代の穴居都市、東京の、そのまた小穴ぐらめく暗がりでいわれると、この深い奈落の入口はどこであったろうとおもえてくるのだ。
>
> 日比谷公園の緑したたる皇居のあたりに、落し穴が仕かけてあって、そこが迷路の入口で、わたしはそこからまた、見知らぬ億土に墜ちてきたのではあるまいか。
>
> 出口にみえている人工的な光の世界には、悪相の人口が過密だったから、どこかへもどってゆきたいけれど、わたくしはもどってゆくところがなくて、出口にふさがっている東京を憎悪する。（同号、24-25 頁）

これまでも、石牟礼にとっての「東京」のイメージについては、その空が故郷の空や海と重ねあわせられていること、さらにはそうした描写の中にも公害問題が見え隠れすることが議論されてきたが（第 8 回）、今回の山田氏の発表を受け、東京の知っているはずの土地周辺の時空間では、石牟礼だけではなく、東京にやってきた何人もの人々の視点や声や感情が交

差していたであろうし、それらが第3部にしっかりと織り込まれていることが痛感された。テクストを細やかに読むことで、知っているつもりになって通り過ぎていた見知らぬ風景が立ち上がってくる――。どのような形になるかわからないが、2月に東京駅に訪れたときに、自分たち自身がなにを見、感じるのか、楽しみに待ちたいと思う。

報告者:髙山花子(EAA特任助教)

悦びの記#3

石井剛(EAA副院長)
2022年1月19日

EAAの活動は教員や研究者だけが行っているのではなく、学生もまたその中心的な主体です。研究だけではない、身体性と社会性を伴った生活をも含めて「学問」であると考えるわたしたちにとって、こうした活動の参与者はみな一様に「学者」と呼ぶのが相応しいでしょう。来るべき書院における学問はかかる意味での学者たちの共同作業にほかなりません。EAAでは、学生として「学者」の一翼を担うグループのことをEAAユースと呼んでいます。

EAAユースが発足したのは、新型コロナウイルス感染症の影響が中国で広がり始めているときのことでした。2020年2月に計画されていた北京大学の学生たちの訪問は、中国政府が1月27日付ですべての団体海外旅行を禁じたことでキャンセルされ、急遽、東大の学生だけで行う2日間のセミナーに切り替えられたのが、ユース生の活動の始まりでした(このとき「ユース」という名称はまだありませんでしたが)。しかし、その後の状況に関しては誰もが知るとおりで、今日に至るまでキャンパスでの活動は著しく制限されています。

こうした歯がゆい状況の中でも、ユースの活動はオンライン・ベースで盛んに行われています。サマー・インスティテュートは2年連続で開催できましたし、オンライン読書会やYouTube企画、海外研究者を招いたセミナーといった、ユース生が自ら企画して組織する活動も多く行われています。また、今年度は月に1回、教員とユース生が集う定期ミーティングも行われるようになりました。昼休みの1時間弱を利用して開かれるミーティングでは、「3分間トーク」と題して、毎回1名のユース生が自由に話題提供をします。互いに何を考えながら日々を過ごしているのかに触れることのできる貴重なチャンスであり、さまざまな意見が飛び交い賑わっています。

去る1月18日には今年度最後のユース・ミーティングが開かれ、熊木雄亮さんから *What I Wish I Knew When I Was 20* の読後感から、20代を生きること、かつて20代を生きたことに関してどのように感じ、どのように考えるかについての話題提供がありました。

学部の3年生や4年生の彼らにとって、20代最初の数年は人生選択のだいじな時期であり、人生の先輩である研究者たちの経歴や業績をインターネット上で探りながら、自らの人生設計のヒントを求めているという声もありました。すべてが未決のままにあるモラトリアム状態から卒業後の進路選択を迫られる過渡期へと歩みを進める彼らには希望よりも不安の方が大きいのだろうと思います。わたし自身もそうでしたから。「僕の前に道はない　僕の後ろに道は出来る」と高村光太郎が唱ったのを思い出しますが、実際に人生の道とはきっとそのようなものなのだろうと思います。

道に迷い悩んで先輩たちの歩んだ道を垣間見てみたい場合にわたしが皆さんにお勧めしたいのは、宮本久雄先生の歩まれた道です。ここでは敢えてそれが

どのような道であったのかは申しませんが、その教え子であった中島隆博先生との間で交わされた美しいダイアログの内容が、EAA ブックレットとしてウェブ上で全文公開されているので、関心のある方はぜひご覧ください。きっと宮本久雄という一人の学者のスケールの大きさに圧倒されるにちがいありません。そして、肝心なことは、宮本先生の学問が、つきつめれば「歩く」ことに発しているということです。歩くことが学問の根源であると言えるなら、人生もまた歩いて行くほかないものであるかぎり、その道のりそのものが遠大な学問の途であるということができるでしょう。どのように歩くのか、決まったセオリーはどこにもありません。しかし、わたしたちが歩いた後には、きっと道ができているはずです。

ユース生の皆さんの道は EAA という場で交錯していますね。それが一人ひとりの将来にとってかけがえのない経験であることを願うばかりです。ゆっくりと、踏みしめる足下の感触を確かめながら歩き続けていきましょう。

写真撮影:立石はな(特任研究員)

鵬程万里05

RA任期を終えて

高原智史

2022年1月19日

高原智史氏

個人と大学院教育の可能性を拓く

2019 年春から 2 年間務めてきた EAA の RA ももう終わりかと思っていると、特定のプロジェクト付の RA として、さらに務める話が舞い込み、3 年目となった。

特定のプロジェクトとは、藤木文書アーカイヴと、101 号館映像制作プロジェクトとである。前者は、これまでの RA 業務からの継続、後者は新規プロジェクトとして進められた。それぞれについての概略は、「藤木文書アーカイヴ」プロジェクト始動や、第 1 回 101 号館映像制作ワークショップの記事をご覧いただきたい。

さて、前回の離任エッセイでは、「書院」としての EAA につき、場所性ないしは人的つながりの観点から書いた。今回は「事業」として EAA の活動をとらえ、それと EAA が掲げる(東アジア発の新しい)リベラルアーツとの関わりについて述べたい。

まず、藤木文書アーカイヴから始めよう。前回の離任エッセイでも、藤木文書の作業は、思想史研究者として資料を「読み込むのに比べて、歴史研究をしている「感じ」が強くしたのを覚えている」と書いた。その「感じ」は、「出土」した資料を分類整理したにとどまっていた当時から、資料についての関連研究を進め、博物館での展示を準備している最中という今現在に至って、「手ごたえ」にまで高まってきている。

資料を読み込み、論を立て、記述するというのも、一つの制作には違いない。筆者の遂行している思想史研究では特に、そうした制作は、文字資料を読み込み、文字に落とし込む、言語によった制作ということが中心になる。藤木文書アーカイヴのプロジェクトでは、表現内容以上に、物的な資料への対応が必要となった。いわゆるテクストの資料操作とは別の心得が必要となり、慣れないうちは苦労もした。しかし、資料の「手触り」に慣れてくることを通じて、資料を情報としてしか見られていないうちには得られない、上述の「手ごたえ」が出てくるのだと思う。

以上の「手ごたえ」が、資料を読むことからのもの、インプットのそれであるとすれば、展示を準備するうち

に得られるのは、アウトプットのそれである。物として、また情報としての資料を、実際の空間にいかに配置するか。それにはやはり、論文の構成をどうするか、どの論点をどのように組み上げるかという、言語制作上のそれとは異なる心得が必要となる。

電子データがWeb上にある論文でも印刷して読む、そうして鉛筆で線を引くという、なお「アナログ」な人間である筆者であるものの、思想を相手に研究をする上で、どうにも、情報としての思想に傾斜して、それを載せている物、媒体には目を向けてこなかった憾みがあった。藤木文書アーカイヴに携わることで、ただ文献を読み、論文を書くという通常の研究をしているだけでは得られなかった、上述のような「手ごたえ」を得ることができた。それは、思想を、そうして歴史の「息吹」を感じ、現在に「受肉」させることにつながるのではないだろうか。

続いて、映像制作プロジェクトについて述べる。本作の予告編をそろそろ公開できるだろうという段になっているが、今回の映像は、現代において一高を研究しようとしている大学院生と、歴史的な一高生の生活の二つのパートが二重写しになる形で構成されている。この構図は、EAAの一高プロジェクトに関わり、自身の研究対象も一高に置いている筆者に特に合致するが、通常の研究活動では、研究者のパーソナリティの部面は隠される。

自身の遂行している研究の意義というのも、自分にとってというのは、少なくとも表向きは問われず、または捨象され、学界や社会への貢献など、社会的ないし公共的な部面のみが問われるのが普通である。職業研究者であれば、そうあるべきかもしれないが、リベラルアーツとしての学びにおいてもそれでよいのだろうか、というのがここでの問いである。また、職業研究者であっても、自己の内的な欲求の面と、社会公共に訴えんとする面とが実際には、折り重なっているのではないだろうか。

有用性や明確な指標で研究の価値が問われることが多くなっている現在、自己の実存にとっての自分の研究の価値というのは打ち出しにくくなっている。しかし、逆に、それが十全に打ち出せてこそ、「新時代のリベラルアーツ」という理念を押し出すことにつながるのではないだろうか。

また、本作はメイキング映像の制作、公開も予定されている。通常、論文はそのものとして評価され、執筆過程は評価されず、そもそも表に出ないことが普通である。映像作品となると、それがメイキングという形で（それを特に残そうとする意欲と努力が必要だが）十分に残せることになる。研究に関して、「有用性や明確な指標で研究の価値が問われることが多くなっている」としたが、そういう結果にばかり目が行きがちな状況の中で、過程に目を向けてもらうという点において、映像制作というプロジェクトは、学術活動の評価軸の転換を社会に対して訴えるという点において、ふさわしい営みであると考える。

以上、二つの、文献を読んで論文を書くという通常の研究とは異なる研究事業に携わることを通して、筆者の通常の意味での研究にも幅や厚みが出てきたと思う。大学院教育の意義、特に職業研究者になるのではなく経済社会に出ていく場合のその意義につき、懐疑的な意見も多々見られる中で、EAAで展開されているこのような事業に携わることは、その先どのような世界に進むにせよ、有効でありまた必要なリベラルアーツを得られるものであると強く感じる。EAAの試みは、一人の学生の幅を広げ、また大学院教育の可能性をも広げるものだと考える。第二期へと続いていくEAAが（あるいはEAAとはまた別の形に昇華して）、そうした、幅や可能性を広げていく「制度」にまで高まっていくことを願って、二度目のRA離任のエッセイを擱筆したい。

写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

EAA連続ワークショップ「中国近代文学の方法および射程」

第1回 張潔宇氏講演 「魯迅の雑文をどのように理解すべきか」

2022年1月24日

2022年1月24日（月）、張潔宇氏（中国人民大学文学院）による講演「魯迅の雑文をどのように理解すべきか」がオンラインで行われた。本講演は今年のEAA連続ワークショップ「中国近代文学の方法および射程」の第1回目に当たる。

魯迅（1881-1936）は、日本でも広く名を知られた中国近代文学を代表する作家であり、膨大な量の研究が今に至るまで途切れることなく積み重ねられてきたが、近年は魯迅の作品の中でも、「雑文」と呼ばれる独特の形式が特に大きな注目を集めている。今回、張氏は魯迅研究と雑文研究との密接な関係について強調したうえで、文体概念としての雑文および実践としての雑文という二つの観点から、魯迅の雑文を理解する方法について非常に丁寧な分析を行った。

魯迅によって書かれた雑文は分量的にも多く、特に後期の魯迅にとってはほとんど唯一の形式であったと言っても過言ではない。そして、魯迅がそこまでの熱量を以て雑文を執筆したことの根底には、行動の美学という魯迅自身の文学観が存在した。ただし、魯迅は文学の芸術性ないし審美性を放擲し、それに取って代わる新たな文学的基準を提出したというよりも、文学に対する新たな概念を示すことによって、単なる芸術至上主義や審美主義に限定されがちな文学性そのものを問い直し、突破しようとしたのだと言え、この点において、私たちは魯迅の雑文の文学性というものを改めて考え直す必要があるのだと張氏は主張する。

「青年必読書――『京報副刊』の要求に応じて」において、魯迅は中国の本よりも外国の本を読むべきだと主張したのだが、それは読書とは畢竟「人」の問題であり、「生」の問題であると魯迅が考えていたためだった。なおこの「生」の問題は、散文詩集『野草』においても、重要なテーマの一つとなっていた。そしてそのうえで、魯迅は同文において、今の青年に必要なのは「言」ではなく「行」であると述べている。ここからは、文章の創作はそれが行動であって初めて意味を持つという考えを、魯迅がこの時点で既に有していたことが伺えるが、これは行動的な文学創作という後の考え方へと繋がってゆくものだった。

魯迅のこのような、単なる審美主義に限定されない、もう一つの美的価値の追求は、彼が直面した中国の歴史的現実に対する判断に基づくものであった。言い換えれば、魯迅は目の前の現実に対して、文学という形でどのように応答すべきなのかということを考えていたのであり、その結果の一つが雑文であったということである。古典文学や感傷的な浪漫主義文学とは異なる文学性を備えたものとして雑文という形式を打ち出した魯迅はしかし、従来のそうした美的基準に完全に取って代わるものとして雑文を提出したというよりも、

当日スライド

張潔宇氏（中国人民大学）

寧ろ美的基準が画一化している現況に対して補足を加え、それを相対化するための契機として、雑文の文学性という観点を提出したのだと言える。

それでは、このような意義を持つ魯迅の雑文が備える芸術的特徴とは、一体如何なるものだったのだろうか。この点について、張氏は「花なきバラ」、「砂嵐の中の傷跡」、「情のある諷刺」、「堅固な筆致」という魯迅自身の言葉を用いながら分析を試みた。魯迅には「花なきバラ」という題の文章があるが、魯迅は自身の雑文についても、同文で言及されるような、花のなく棘しかないバラに比していたのだと考えられる。また「砂嵐の中の傷跡」は『華蓋集』の題記に登場する言い回しで、この表現も、現実に根差した、生きた真なる美の追求という魯迅の姿勢を示したものであると言える。一方、「情のある諷刺」とは「情のない冷笑」に対置される概念である。魯迅は「諷刺」という概念自体を、単なる罵倒に近い「遣責」とは異なる婉曲的でありながら深い批判性を讃えたものとして考えていたのだが、このような諷刺性も魯迅の雑文の重要な特徴の一つである。また「堅固な筆致」は魯迅が小品文について言及した際のキーワードであるが、これまでに確認してきた魯迅の雑文の核心を念頭に置いて考えるのであれば、雑文と小品文の違いは技術的なものであったというよりも、寧ろ精神的なものであったと考えることができる。

以上のように、魯迅の雑文という形式はある種の行動上の美学であり、また既存の美的価値ないし文学的基準に対する読み直しの実践でもあった。それは張氏が講演の最後に引用したように、魯迅自身の文章において明確に示されている。「雑文は、その「詩史」的な雄心、「情のある」姿、世事の「雑」と「真」への洞察と拘泥、および「鋭く適切な」「堅固な筆致」によって、「私たちがこのような場所で生き、私たちがこのような時代に生きる」ために「証拠を示す」という目標を実現したのだ」（『且介亭雑文』附記）。

魯迅の雑文という、近年注目されているテーマに正面から向き合った本講演の内容は、以上のように極めて明晰なものであった。講演後に設けられた質疑応答の時間では、中期の魯迅における散文詩という形式と後期の魯迅における雑文という形式の違いに関する質問や、昨今の若者が当時の文脈を捨象する形で魯迅の文言を引用し、自身の主張の補強とするという興味深い現象についての指摘、更には雑文という形式は魯迅にとって一種の仲介物であり、文学から現実への橋渡しを担う存在だったのではないかという重要な指摘が提出され、講演は盛況のうちに幕を閉じた。

報告者:田中雄大（東京大学大学院博士課程）

一高プロジェクト

映像制作メモランダム（11）

2022年1月25日

昨年の初秋より、駒場を舞台にした『籠城』という作品に、声の出演者の一人として参加しています。教養学部に進学した私は、本郷に移ることなく、4年間を駒場で過ごしてきました。『籠城』制作への参加を通して、思い出の多くあるこの駒場キャンパスに、あらためて深く関わることができました。卒業を前にした4年生の秋学期に、このような巡り合わせがあったことをとても嬉しく思っています。

『籠城』の制作過程で特に印象的なのは、1号館と101号館、そして駒場博物館を繋ぐ地下道に入ったことです。10月の終わり、ある重要なシーンの撮影が地下道でありました。地下道は埃っぽく、1号館と101号館の間に位置する、小さな広場のようなスペースに行くと、突然の来訪者に驚いた鼠が、大急ぎで壁に開いた穴のなかに潜りこんで行きました。水道管や電気系統の配線の点検に施設管理者の方が入る

以外は、地下道には誰も立ち入らないそうです。その日は気持ちのいい秋晴れでしたが、地下道は肌寒く、何人かで一度上着を取りに戻りました。

実は、駒場に地下道があるということは、1年生の頃から知っていました。地下道への入口を探して、友達と1号館を探検したこともあります。入口は見つけましたが、扉は南京錠で施錠されており、入ることはできませんでした。しかし、以後も、駒場に人知れず広がる地下道の存在はずっと気になっていました。地下というのは不思議な場所です。文学作品では、非常に重要な役割を果たすことがあります（村上春樹の『ねじまき鳥クロニクル』では、主人公は井戸の底に潜ります）。今回、念願かなって地下道に入ることができました。驚いたのは、地下道は1号館と101号館、駒場博物館を繋ぐだけでなく、さらに銀杏並木の下にまで続いていたことです。銀杏並木の下には水道管が通った細く長い地下道があり、8号館や7号館、5号館といった銀杏並木沿いの建物を繋いでいました。

駒場にある教養学部には、文科系、理科系どちらの学科もあり、各学科内でも専攻はバラバラ、専門とする領域は様々です。ですが、駒場キャンパスには不思議な一体感があります。これは、各学部が独立して存在している本郷にはないものです。このような一体感の形成には、もしかしたら地下道の存在が関係しているのかもしれません。地下という意識の一つ下層の、無意識の領域において、ひょっとしたら駒場に居る人々は何かを共有しているのかもしれません。少なくとも駒場の建物は地下道で繋がっていました。撮影のために地下に降りた日、目の前に広がる地下道を見ながら、このようなことを考えていました。

10月の初め、初秋の頃より『籠城』制作に参加してから、駒場キャンパスの美しさに、あらためて気づきました。まだ晩夏のような汗ばむ陽気だったのが、次第に銀杏並木が黄色く色づき、やがて落葉もなくなり冬が訪れる様子を、つぶさに眺めていました。今回、4年間を過ごしたこの駒場キャンパスを、映像として記録する『籠城』という作品に参加できたことを、とても嬉しく思います。数年後、数十年後に作品を見返したときに、自分が学生時代に考えていたこと、感じていた駒場の匂い、質感、肌触りがよみがえってくるはずです。『籠城』の完成は3月を予定しています。とても待ち遠しく思います。

報告者:金城恒（EAAユース）

EAAシンポジウム

仏教と哲学の対話

2022年1月26日

2022 年 1 月 26 日（水）日本時間 15 時より、EAA シンポジウム「仏教と哲学の対話」を開催した。このシンポジウムは仏教と哲学の双方に通じ、独自の新たな研究をなさっている守中高明氏（早稲田大学）と下田正弘氏（東京大学）のお二人をスピーカーにお招きし、馬場紀寿氏（東京大学）の司会のもと開催されたものである。

守中氏はフランス現代哲学・詩学の研究者であり、ジャック・デリダやジル・ドゥルーズなどの思考を援用しつつ仏教における他力・浄土の教義に深く切り込んだ『他力の哲学』『浄土の哲学』を出版されている。

下田氏は大乗経典を研究する仏教学者であるが、その起源の分析にあたってジャック・デリダの哲学を導入し、新たな議論を展開しておられ、『仏教とエクリチュール』を出版されている。

それぞれご自身のなかで仏教と哲学の対話を重ねておられるお二人をお招きし、このシンポジウムにおいて新たな対話をしていただき、さらには聴講に来ていただいた参加者も交えながら議論を深めたいという企図のもと、本シンポジウムが企画された。

当日はまず守中氏より、「「本願」の構造と力：称名念仏・時間錯誤・パフォーマティヴ」というタイトルでご講演いただいた。それは今日も日本で行われている称名念仏（口に仏の名を称える実践）をとりあげ、その行いが背後に秘めた高度に錬成された論理――人々を常に別なる生へと解放する現実的効果をもつ論理――の構造と力を分析するものであった。

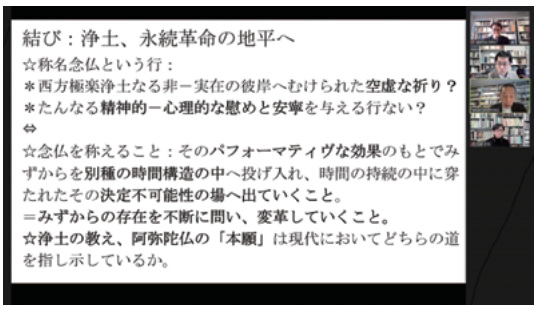
「南無阿弥陀仏」と称えることで、末法を生きる誰もが西方極楽浄土へ往生できるとする「称名念仏」は、中世の法然が提唱した教えであり、それは仏教を歴史的にも思想的にも大きく変革するものであった。

歴史的にみればそれは一種の宗教的階級闘争であり革命的な力を及ぼした。浄土教の平安的パラダイムでは、戒律を守り厳しい修行ができる僧侶や、経済力を背景に仏教を外護する貴族など一部の人にのみ救済の道が開かれていた。それに対し法然の「称名念仏」は、ながらく排除されていた数知れぬ庶民たちをも平等に解放する教えであった。

また思想的にみればそれは、以下の 2 点で劃期的であった。

第一に、「称名」に行を集約した点である。従来の「念仏」には、仏の十種の名を心に強く思う、瞑想において諸仏の顕現を得る、雑念を払って仏の姿を観察するなど様々な実践があったのに対し、法然は中国の道綽・善導の解釈を承けつつ、「念仏」を「阿弥陀仏の名を称すること」へと組み替え焦点化した。

第二に、阿弥陀仏の「本願」に基づき救済の理路を確立した点である。法蔵菩薩は悟りを開いて阿弥陀仏となる前に四十八の誓願を立てたが、それらはすべて「たとえ私が仏になることができたとしても、～ならば私は正しい悟りを得た仏にはなるまい」という構造をしている。そして法然が中心にすえた第十八願はこの条件と仮定を「私の名を称することわずか十回であっても、もし浄土に生まれることができなければ」

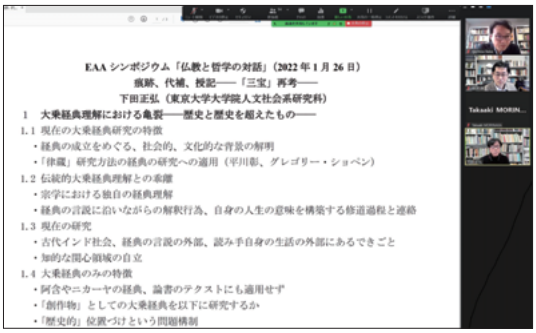


としている。しかるに、かつてこの誓いを立てた法蔵菩薩がすでに悟りを得て仏となっている以上、この誓いは実現しており、それゆえ念仏する衆生の救済もまた、つねにすでに約束されていると法然は説いたのである。

この法然の「称名念仏」による救いは、前近代的の神話的物語に還元されるものではなく、現実的な出来事であるという。このように言える理由として守中氏は以下の2点を挙げた。

第一に、「南無阿弥陀仏」、すなわち「南無：帰依」＋「阿弥陀仏：無限者」＝「帰依 - 無限者に」という一句は、パフォーマティヴな発話である。それは、そのつど1回かぎりの状況を遂行的に産出する。「帰依 - 無限者に」と口に称えることは、帰依しているという「事実」を確認しているのではなく、帰依という行為そのものを発話によって遂行しているのであって、無限者への帰依という場面をそのつど新たに作り出す。「称名」とは、法蔵菩薩の誓願を範例として、それを自身も反復することにより法蔵菩薩と同様に仏となることを願う言表である。そのとき「衆生」は法蔵菩薩＝過去の阿弥陀仏の分身となる。称名念仏する者は、社会的属性・能力・資質など一切の差異と関係なしに、その言表の行為体として「平等」となるのだという。

第二に、称名念仏により一種の時間錯誤、すなわち「未来完了」という特異な構造が開かれる。「未来完了」とは、「それは - あった - ということに - なるだろう」ということを示す時制であり、みずからの成仏を仮定のもとに約束する法蔵菩薩の誓願の時間構造は「私は - 仏となった - ということに - なるだろう」という「未来完了」に他ならない。称名念仏を実践する者は、「過去において“いまだ”仏となっていない」と「未来において“すでに”仏となった」という二つの時のあいだに宙づりにされる。このような「いまだ」と「すでに」のあいだに刻まれる「現在」を欠く決定不可能な時とは、「生ける現在」がそこから派生してくる前 - 起源的な「痕跡」ないし「間隔化」とデリダが呼んだ場面であり、その時刻を告げる「南無阿弥陀仏」とは「決定不可能命題」（ゲーデル）であると言ってよい。しかし、決定不可能な場面に身を投げ入れ生



きることは、曖昧な無力さにとどまることを意味しない。根源的な時間の変容を引き受け、閉じざる未来完了という別種の「無限」を生きることは「革命的な決定の場」（ドゥルーズ&ガタリ）を産み出すことを意味する。称名念仏の反復によってこの経験領域を不断に押し広げていくことこそが、この穢土を浄土へと生成させていくことであり、「往生」とはそのようなリアルな出来事なのだという。

以上の議論を踏まえたうえで、守中氏は以下のように話を結ばれた。「称名念仏という行を、西方極楽浄土なる非実在の彼岸へ向けられた空虚な祈りだと理解し、たんなる精神的・心理的な慰めと安寧を与える行いと捉えるか。それとも、念仏を称え、そのパフォーマティヴな効果のもとでみずからを別種の時間構造の中へ投げ入れ、時間の持続の中に穿たれたその決定不可能性の場へ出て行くことによって、みずからの存在を不断に問い、変革していくか。浄土の教え、阿弥陀仏の「本願」は現代において、果たしてどちらの道を指し示しているでしょうか」。

つづいて下田氏より「痕跡、代補、授記：「三宝」再考」というタイトルでご講演いただいた。

まず最初に、仏教研究に対する危機意識を述べたうえで、講演の趣旨説明がなされた。大乗経典をめぐり、近代仏教学は伝統的理解と乖離しており、両者の間には亀裂がある。大乗経典に対する伝統的理解とは、おもに各宗派で継承されてきたものであり、それは自身の修道と連関する形で、経典を解釈するものである。それに対し近代仏教学は、大乗経典を歴史的に位置づけることを目的とし、その社会的・文化的な背景の解明に傾注してきた。近代仏教学では経典を読み手自身の生活の外にあり、自身の生き方に関

わらない、古代インドの歴史に限定された過去のものと見るのに対し、伝統的理解ではそれを自己の人生の意味を構築するもの、今も意味を産出しつづけるものと見る。これは、思想と歴史の研究態度に関わり、近代以前と近代以後の狭間に現われた重要な差異であって、ここにポストモダンの思想家たちの思索を参照すべき所以があるという。

このような問題設定の後に、歴史において「起源」を問うことの問題に考察が加えられた。テクストの聖典として幾世紀にもわたり発揮してきた役割とその歴史的特性に注目するウィルフレッド・キャントウェル・スミス、「遅れて」の解消不可能性というフロイトの発見を論じるジャック・デリダの議論を参照したうえで、聖典というテクストの起源は、それが誕生した歴史的状況の光景に求められないことが指摘された。そのうえで、「無意識のテクストはすでに純粋な痕跡、差異によって織りなされている。そこでは意味と力とが一体化しており、これはつねにすでに転記であるような複数の古文書によって構成された、どこにも現前しないテクストであり、起源的な版画である。すべては複製によって始まる。換言すれば、つねにすでにまったく現前したことのない意味の貯蔵庫である。というのも、この意味が指し示す現在は、つねに遅れて（nachträglich）、事後に、代補として再構成される」というデリダの議論を踏まえ、大乗経典が常に新たに産出されつづける起源は、釈迦仏という「充実した起源」や「現前する起源」にあるのではなく、その起源を否定しつつ「代補」する「差延」という作用にあると述べられた。

下田氏によれば以上の痕跡・代補・差延は、大乗経典の理解に留まらず、三宝という仏教の核心の問題理解に深く関わる。三宝とは「仏」（ブッダ）、「法」（ダルマ）、「僧」（サンガ）という仏教を構成する三つの宝であり、その重要性は各地に展開した仏教において一貫して承認されてきた。近代仏教学、具体的には仏教全体の歴史を描いたヘルマン・オルデンベルクの『ブッダ――その生涯、教理、教団』（1881年）以降、仏が生まれ、彼により説かれた法が出現し、それが弟子たち、僧に伝えられたことで仏教が成立したという、仏から僧までの直線的な展開による三宝理解が定着している。これは三宝の意義の起源を、釈迦仏という歴史的な「充実した起源」に求めるものである。ところが古代から継承されてきた仏典では、三宝をめぐり、これとは異なる精緻な考察がなされている。そこからは、三宝のそれぞれが、差延を起源とし、時間の中ときどきに代補として展開してきていることが明らかになるという。

たとえば教団の規則全体の「起源」を記したとみなされる、パーリ律蔵「大品」の冒頭は、三宝の出現と展開という観点から解釈されるという。この「起源」は「仏の悟り」にある。仏は悟った当初、悟りの経験を自身のうちで無言のまま享受しており、この段階では悟る主体の仏と、悟られる対象の法とは一体となっている。「梵天の勧請」に応答して仏が法を説いたとき、仏と法とは個別化されると同時に、法は所証法（悟るべき対象としての法、真理）と所説法（語るべき対象としての法、教説）とに分岐する。このうち所証法は仏の体験として存在する「法の内部」であり、所説法は衆生・僧に言語をとおして接する「法の外部」である。たしかに、法が内外へと分岐したとき、仏と僧とは成立している。けれども、ここで法を二方向に分岐せしめた「起源」は、仏と僧を同時に発現せしめた「起源」でもある。すなわち、三宝のいずれの宝も、自立したものでも、時系列をなして展開するものでもなく、差延による代補として成立している。

かかる三宝は、仏の入滅を経て、更に複雑化する。その現われは、三宝のうちいずれを中心とするかによって異なる「起源」の様相を呈する。仏を中心とすれば、釈迦が入滅しその肉体が失われた後、法・律の教法（法身）と、その身体の痕跡（遺骨）を納めた仏塔（色身）がそれに代わる。そこにおいて、仏という、歴史に実在する起源と見えていたものは、いま現に存在する教法や仏塔から事後的に再構成される代補である。また、法を中心とすると見えるものに、法こそが仏を生み出す根拠であると主張する経典がある。けれどもその経典の法は、仏によって説かれつつ出現するものであり、説いている仏の事後的な代補としての起源となっている。最後に、僧を中心とすれば、釈迦の入滅により、仏と法が僧に移譲されたことで、以降、仏と法は、見かけのうえで僧に包摂されているため、僧

左から順に守中高明氏（早稲田大学）、馬場紀寿氏（東京大学）、下田正弘氏（東京大学）

の歴史の「起源」が仏教の歴史の「起源」となる。けれども僧の存在意義は、あくまで仏と法の実現にあるのであって、歴史上のいかなる僧も、仏と法からの差延として、それらの代補としての起源となっている。

仏教の「起源」を問う際、近代仏教学はそれを釈迦という歴史的人物にのみ求めてきたが、それは、しばしば現前する歴史的事象に展開した歴史全体を還元する過ちを犯す。そこでは、「起源」からの歴史はいまも連続しているという視点が落ちてしまう。そのような視点から「起源」を問うにあたり重要となるのが、上述の三宝の展開、および「仏」の誕生に関する「授記」であるという。授記とは、仏が修行者に対して「将来の成仏の確約」（記）を「与えること」（授）であり、釈迦もまたはるかなる過去世において修行者であったころ、燃灯仏という仏により将来仏になるという予言を受けたとされる。これによれば仏教の起源は、過去において釈迦が他者より「未来に仏になる」と開き示されたところにあり、釈迦が悟りを開いて「仏」となったのは、この過去における授記という行為の、未来における完成なのである。

三宝により織りなされてきた仏教の歴史は、この授記を視野に収めることで、その起源、差延、代補として現われてくるのだいう。また下田氏は最後に、仏教を理解する基盤が文献学であることは過去も未来も変わらないが、「それにより何がどう読み取られていくのか」という問題を明らかにしていくこと、研究対象とともに研究者の意識をも分析することが必要であり、そうすることによって、資料に厳密に向き合うことの意味が、歴史の事実に根を下ろしながら明らかになってくるという見方を示された。

以上の両氏のご講演の後、馬場氏の司会のもと、未来の成仏を過去に決定する「授記」の動態的な時間構造や、その構造の反復により織りなされる時間と、近代仏教学が前提とする歴史的な時間との相違、その二つの時間にどのように向き合うのかという問題を巡って守中・下田両氏の対談がなされた。また参加者からは授記（開かれた未来に対する言及）と無記（世界などの起源について言及しないこと）の関係や、未来完了という特殊な時間構造に人を投げ込む称名念仏の理路などについて質問が寄せられ、活発な意見交換がなされた。

シンポジウムは平日の昼間に開催されたものであったが、幸いにして90名以上もの方々にご参加いただけた。素晴らしいご講演をいただいた守中先生と下田先生、司会をご担当いただいた馬場先生、貴重な時間をさいてご参集くださった皆さまに心より感謝申し上げます。

報告者:柳幹康（東洋文化研究所）

岩津航『レトリックの戦場――加藤周一とフランス文学』公開合評会

2022年1月26日

2022 年 1 月 26 日（水）、岩津航氏（金沢大学人間社会研究域）の新著『レトリックの戦場――加藤周一とフランス文学』（丸善出版、2021 年）の公開合評会が、「加藤周一おしゃべりの会・羊の談話室」（仮称）との共催によりオンライン開催された。

同会は、名称が確定していないことからもわかるように結成まもない組織で、三浦信孝・半田侑子・片岡大右の 3 人を発起人として 2021 年夏に立ち上げられたばかりだ。加藤周一に関心を抱く研究者間の、とはいえいわゆる「研究会」よりも気軽な議論と情報交換の場を志向する集まりとして非公開の会を重ねる一方、21 年 12 月 4 日（加藤の命日のイブに当たる）に「加藤周一と 21 世紀の社会主義？　戦後日本思想と現代」と題する最初の公開オンラインイベントを開催しており（講演者：片岡大右）、本合評会は、公開イベントの第二の試みとなる。以下、片岡が登壇者のひとりとして開催報告を行う。

司会の伊達聖伸氏（東京大学大学院総合文化研究科）は本合評会の始まりに当たり、鷲巣力氏の著書『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか――『羊の歌』を読みなおす』（岩波書店、2018 年）に言及した。長く平凡社で加藤周一の担当編集者を務め、その没後に立命館大学の加藤周一文庫開設に尽力した鷲巣氏（現在、同大学加藤周一現代思想研究センター顧問）の著作は『羊の歌』読解の試みであるが、表題に示されたこの問いをフランス文学との関係に的を絞って探究し、豊かな成果を上げた著作として、伊達氏は岩津氏の新刊を紹介した。

岩津航『レトリックの戦場――加藤周一とフランス文学』（丸善出版、2021 年）

最初に報告した三浦信孝氏（中央大学名誉教授・日仏会館顧問）はまず、岩津氏（1975 年生まれ）の研究を、加藤（1919 ～ 2008 年）の孫世代に当たる相対的な若手によってなされた例外的な仕事として祝福した。三浦氏はまた、岩津氏の研究・関心領域の驚くべき広さを強調し、プルースト研究から出発しつつも福永武彦の比較文学的研究に進み、多様な翻訳の傍らルーマニア出身のシオランやバンジャマン・フォンダーヌ、イラリエ・ヴォロンカをも論じるという広角的な仕事と並行して加藤論に取り組んだ事実を、「非専門化の専門家」を自称した加藤の研究にはふさわしいことであると評した。

1945 年生まれの三浦氏が加藤を真剣に読みだしたのは遅く、ベルリンの壁崩壊とフランス革命 200 周年を経た 1990 年代になってからのことだが、その際に支えとしたのは、加藤とそれぞれのやり方でつながり、同じ 1934 年生まれの、海老坂武、樋口陽一、大江健三郎、西川長夫の 4 氏だったという。ただし彼ら「1934 年生まれの世代」のうち西川氏は、1988 年に自ら立命館大学に招聘した加藤を欧化と日本回帰の問題を考える比較文化論の先達として仰ぎつつも、その仕事に両義的な眼差しを注いでいたと三浦氏は指摘する。西川氏は初期の評論「日本におけるフランス――マチネ・ポエティク論」（1967 年）では欧化主義の極として加藤を批判していたし、アジア重視のポストコロニアル思想に傾いた 90 年代には、加藤のヨーロッパ中心主義の限界を強調するようになった。

伊達聖伸氏

三浦信孝氏

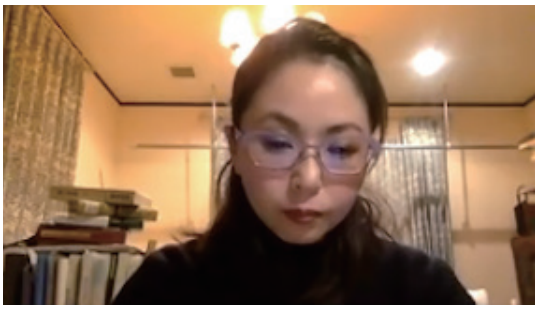
続けて三浦氏は、同じ1934年生まれの人類学者、川田順造氏にとって、加藤は（三浦氏によれば、川田氏の「文化の三角測量」のアイディアは加藤の仕事に通じるものを持っているにもかかわらず）アカデミックな評価の対象ではなくジャーナリスティックな評論家とみなされるにとどまったこと、若干年少のフランス文学研究者、二宮正之氏（1938年生まれ）や、三浦氏と同世代の比較文学研究者、大久保喬樹氏（1946年生まれ）が加藤の仕事にしかるべき敬意を払わなかったことを確認したうえで、以後の大学人がおおむね加藤の冷遇に傾いたことを惜しんだ。

フランス文学研究の分野について言えば、「象徴主義的風土」（初出1947年）は東大仏文の学生だった渡邊守章、阿部良雄、菅野昭正、清水徹といった諸氏に大きなインパクトを与えたものの、それぞれのクローデル、ボードレール、マラルメ、ヴァレリーの精緻な研究によって、加藤の論は乗り越えられた先達者の仕事とみなされるようになった。加藤がフランスから帰った1950年代後半以後、フランス文学論をほとんど書かなくなったことも大きいだろうが、彼が論じた対象自体、ロマン・ロランは読まれなくなり、ジャン＝リシャール・ブロックやジャン・ゲエノは忘れ去られてしまう。また若い研究者世代の関心がブランショやバタイユ、さらにはフーコー、デリダ、ドゥルーズといった哲学者に移ったこともあり、サルトル止まりだった加藤は顧みられなくなったと三浦氏は述べ、こうした状況を「加藤周一の孤立」と表現した。

そんななか、海老坂氏（『戦後思想の模索――森有正、加藤周一を読む』〔みすず書房、1981年〕、『加藤周一――二十世紀を問う』〔岩波書店、2013年〕）に続き、その関西学院大学での教え子である岩津氏が著した新たな研究では、加藤が読んできたフランス文学の諸著作が精読され、加藤がそれぞれの作家になぜ、どのように注目したのか、それぞれの作家から何を引き出したのかが、フランスの時代状況と加藤が抱える問題関心に照らし、時系列に沿って明らかにされている。『加藤周一著作集』『加藤周一自選集』所収作品であっても初出主義を心がけ、さらには多くの未収録著作に当たっている点も重要だ。ヴァレリー研究から出発した三浦氏は、岩津氏がデビュー直後の加藤の理性重視を強調しつつ、それをヴァレリー解釈にも結びつけているのには異論があるとしつつも、学術書としては薄手の『レトリックの戦場』の濃密な成果を称えた。

第二の報告を担当した半田侑子氏（立命館大学加藤周一現代思想研究センター）は冒頭で、岩津氏の著書によって加藤の初期著作の暗黙の典拠の一つを教えられたことを感謝した。『1946・文学的考察』（真善美社、1947年）所収「知識人の任務」を締めくくる、「優れた、しかし少数の知識人にとって、任務はただ一つ、嘗て人類の教師がティベリアドの湖畔に叫んだ如く、来れ、我に従えと、云う以外にあろうか」という一文は、これまで唐突なものと感じられなくもなかったのだけれど、『レトリックの戦場』を読むことで、この文がジャン＝リシャール・ブロックの言い回しを踏まえたものだと知ることができたというのだ。ブロックが1931年に国際連盟の招待講演で行った知識人への呼びかけに倣い、加藤は戦後日本の知識人に向けて訴えたのだった。

岩津氏が戦後数年間の著作における言及を重視するブロックは、加藤が1937年から1942年にかけて記した「青春ノート」においても大きな位置を締めてい


半田侑子氏

片岡大右氏

る。加藤周一文庫において加藤の未公開資料の整理に従事してきた半田氏は、岩津氏の著書が新たな光を当てた論壇・文壇デビュー後の加藤の仕事を、終戦以前の修行時代からの連続性において捉えなおすべく、この「青春ノート」の世界へと聴き手を誘った（なおその抜粋は半田氏と鷲巣力氏の共編で、人文書院より刊行されている）。

岩津氏が著書の表題とした「レトリックの戦場」という言葉は、「青春ノート」VI「覚書」（1939年10月3日）の一節から取られている。この「覚書」では、ジイドやヴァレリーが参照されながらも、冒頭では小林秀雄が引かれ、日本という東アジアの一国で、日本語で創作することへの決意が表明されている。「日本語で詩はかけぬとさえ誰かの云ったレトリックの戦場で僕は之から戦おうと思う」。「レトリック」という言葉は、同じ「青春ノート」VIの「立原道造論序」（1940年2月12日）にも見られる。半田氏は、芥川―堀―立原という師弟関係を論じた中村真一郎を参照し、「東京の下町生れで、その文学的傾向は西欧文学と我が古典との融合を目指した」（中村『芥川・堀・立原の文学と生――ひとつの系譜』〔新潮社、1980年〕）とされるこの3人から連なる系譜のなかに加藤を位置づけて、彼は1950年代半ばに定式化することになる「雑種文化」のなかを、青春期においてすでに生きていたのだと示唆した。

このことは、対米開戦後の加藤が、「レトリックの戦場」での戦いをいかに戦ったのかを見ても明らかだという。太平洋戦争開戦前夜から、「青春ノート」には詩の実作がほとんど見られなくなり、代わって評論や随筆が圧倒的に多くなるけれど、半田氏によればこの事実は加藤が詩や小説に見切りをつけたことを意味するのではなく、死の切迫感のなかの思考を言葉にしようというこうした努力もまた、1939年に宣言した時に自ら予想したのとは異なったかたちで、「レトリックの戦場」での戦いを実践したものとみなすことができる。やがて開始される「マチネ・ポエティク」の活動がとりわけ範としたのは、フランス象徴詩だった。無謀な戦争を遂行し日本の古典文芸の精神を歪曲する国家に反対しながらも、自らの生きる意味を求めてのことだ。

戦中の経験は、加藤に「日本的なるものへの呪詛」（樋口陽一「加藤周一は「洋学紳士」か、それとも「日本人論」者か？」『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』〔水声社、2020年〕）を唱えさせることにもなった。けれども、「青春ノート」VIIIでは対米開戦前夜に源実朝の『金槐和歌集』が論じられており、このノートは『1946・文学的考察』所収の「金槐集に就いて」の原型とみなしうること、さらにまた、実朝の師である藤原定家を西欧の現代文学との関わりで論じた「藤原定家――『拾遺愚草』の象徴主義」を1946年に発表していることなどを思えば、加藤の文学的旅路は当初から、西欧の文芸と日本の伝統詩歌が同居するなかで歩まれていたと考えるべきだろう。岩津氏の『レトリックの戦場』は、こうした大きな枠組みのなかで、加藤周一がフランス文学をいかに読んだかを詳しく分析することによって、加藤の歩んだ道筋をたどりなおそうとする読者の視界に明かりを灯してくれる著作だと半田氏は結論づけた。

最後に報告した片岡大右（批評家）は、まずは丸山眞男と加藤周一という時に並び称される2人の知識人の死後の受容状況が、とりわけ大学という場ではむしろかなりの程度非対称的であることを確認した。姜

尚中氏はかつて、「加藤さんほど、洋の東西を問わずいろいろな大学で教えながら、しかしアカデミズムの住人ではなかった人は、なかなか探すのが難しいのではないか」と評したけれど（菅野昭正編『知の巨匠　加藤周一』〔岩波書店、2011年〕）、東京帝国大学医学部に学んだ元内科医でありながら「非専門化の専門家」を志し、多様な領域にまたがる言論活動を展開した加藤が、そのためにかえって、大学におけるどの分野の専門家からも扱いかねる存在となってきたことは否定しがたい。

こうした現状を思うと、終戦後間もない時期の加藤が医師業の傍ら文系の一分野、すなわちフランス文学の事実上の専門家のように振る舞い、一般読者に歓迎されるばかりか、東大仏文科の院生たちをはじめとする未来の研究者にも真の影響力を行使していた事実には驚くべきものがある。とはいえ、学問的インパクトを与えた仕事は「象徴主義的風土」に代表される象徴主義重視の文学史観に立つものにほぼ限定されており、また今日の一般読者の多くにとっては、この分野の加藤の仕事としてはサルトル紹介の功績が記憶されているにとどまるだろう。岩津氏の『レトリックの戦場』の意義はなにより、三浦・半田両氏も触れたブロックへの言及を始め、今日では――しばしば論じられた対象ともども――半ば忘れられた仕事を含む加藤のフランス文学論の全容を視野に収めて、それらの論考の持つ意味を、対象となった作品を読み込んだうえで探究することで、多くの発見をもたらしている点にある。

そうした発見の一つとして、1940年代後半の加藤のフランス文学論が、理性重視を基調とするあまりに、しばしば参照元の文脈に無頓着になっていることの指摘を挙げることができるとして、片岡はいくつかの例を紹介した。ここでは1点だけ取り上げよう。加藤はジャン＝リシャール・ブロックのエッセイに拠りつつ「我々も亦、我々のマンドリンを持っている」（『1946・文学的考察』所収）を著し、戦後日本が旧弊な伝統を打破して合理性重視の表現へと向かうことを望んだ。ところがブロック自身は、同胞に向けて「デカルトの遺産の愚直な礼賛とも、礼節とも簡潔さとも、縁を切ろうではないか」と呼びかけ、古典主義的均整への志向を克服することで民衆の現実に近づくことを唱えていたのだった。

こうした啓発的な指摘を通して、岩津氏は加藤の初期の理性重視の姿勢を強調する。片岡はそのことを評価しつつも、合理主義的志向は若き日の加藤においてもその一面をなしていたにすぎないとして、同じブロックからの、同じく本来の趣旨に反する別の引用を取り上げた。「青春ノート」VIII「鴎外・ブロック・ポール・ヴァレリー」（1941年）の加藤は、ブロックから「思考のアナーキー」という言葉を引いている。ブロックにとってこの言葉は、新しい世俗的な信仰の共有によって乗り越えられるべき思考の混乱状況であるにすぎない。ところが加藤はそれを、デカルトやヴァレリーのタブラ・ラサの経験、すなわちあらゆる思考を可能にする潜在的な環境を指し示すために用いているのだ。文脈に無頓着な引用という点では同じでも、方向性は正反対であって、これら二つの例を比べることでわかるのは、加藤が最初から、理性的秩序への志向性と同時に、それを支える潜在的な、より豊かな何かへの関心を抱いていたということだろう。したがって加藤の思想を論じるにあたっては、展開と同時に連続性を見ていく必要があると片岡は主張した。

最後に片岡は、加藤のシュルレアリスム評価の問題を取り上げた。『抵抗の文学』（岩波書店、1951年）においては、シュルレアリスムから出発したアラゴンのような詩人が、レジスタンスに参加するなかで、民衆にもわかりやすい詩を書くようになったことが高く評価される。文学者・知識人と民衆の両者が共有しているはずの理性への信頼が、晦渋ならざる詩への志向性を帰結しているわけだけれど、日本の現代詩におけるシュルレアリスムの影響の大きさを思えば、この文学

岩津航氏

運動に対する加藤の扱いは、例外的なまでに冷淡だと言える。そのことをどのように評価すべきかはともかく、こうしたわかりやすさへの志向は、理性を分有する人びとからなる集合性の希求の一側面であり、「レトリックの戦場」で戦うという課題との関係で捉える必要があるだろうと片岡は結んだ。

続いて岩津氏が著者としての応答を行った。自分にとって今回の著作は、福永武彦やジョゼフ・チャプスキやバンジャマン・フォンダーヌに関する仕事とともに、「外国人にとってのフランス文学」という問題関心の一環をなしている。デビュー当時の加藤は、医師でありながらフランス文学を読む理由を、それが「役に立つ」からだと述べていた。では、どのように役立てたのか。フランス文学者としての加藤周一をめぐる回想はいくつかあっても、詳細な研究はまだ少ない。海老坂武『加藤周一』も、初期のフランス文学論については軽く触れているにとどまる。先陣を切って論じることで、加藤のフランス文学理解の変遷を描き出すことにはある程度成功したのではないかと考えていると岩津氏は述べた。

加藤のシュルレアリスムに対する「感度のなさ」を改めて取り上げつつ、岩津氏は、加藤はこの文学運動の試みを理解しつつも、無意識を重んじ理性から離れていくという方向性への警戒があったのだろうと指摘した。同じように、加藤は文明や文化といった理念を尊重し、原始的なものへの接近といった主題にも関心を示さなかったという。理性の軽視こそが軍国主義のプロパガンダの成功要因だとみなす加藤は、文学においては知的な方法論の自覚を説き、マチネ・ポエティクで自ら押韻詩の実験を行った。その一方、理性の共有の主題は、すでにその行使のすべを心得ている知識人が大衆を教えるという啓蒙の身振りを導き出す。けれどもそうした「上から」の姿勢の限界――知識人の孤独を帰結せずにはいない――を加藤自身も自覚することから、文学者が自ら危険に身を晒しつつ大衆と言葉を分かち合うというレジスタンス文学の経験に感動し、その紹介を行ったのだろう。

そのように説いたのち、岩津氏は、3人の報告者によって強調されなかった論点として、コミュニスムとの関係という課題を、カトリックへの並行的な関心ともども取り上げた。「神を信じたものも――信じなかったものも」で始まるアラゴンの詩（「薔薇と木犀草」）に典型的に見られるように、両者はレジスタンスの経験のなかで結びついていたが、加藤はさらに、当時のカトリックの労働問題への取り組みにも大いに注目し、さかんに論じており、こうしたカトリック左派の運動への関心が、サルトルの無神論的実存主義に接近する際の下地となっていたようにも思われる。こうした点からすると、フランス留学を経た1950年代後半に加藤が最初期の紹介者となったシモーヌ・ヴェイユについて、工場労働の証言的価値を重視する一方、彼女のカトリック的側面への関心が感じられないのは不思議だと岩津氏は述べた。

『レトリックの戦場』では加藤の小説を批評として読むという姿勢を採用したが、この点で岩津氏は、「香港逃避」（1956年）や『神幸祭』（講談社、1959年）への言及を含む片岡の研究（「非ヘーゲル的な夕暮れへの招待」、前掲『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』）からヒントを得たのだという。加藤という作家の思想を論じる上で、フィクションとノンフィクションの区別にとらわれずに読むというこうした姿勢は、非フィクション的なものも文学だと言い続けた加藤自身に通じるものでもあるが、日本では両者は分けて論じられがちだ。加藤の小説作品は必ずしも傑作ではないが、その時々の批評の問題意識と照らし合わせた時に意味が出てくる。こうした観点に立つことで、『羊の歌』――雑誌掲載時は「連載小説」と称されていた――をそれまでの小説の集大成として読むこともできる、という仮説を示すことができた。

最後に岩津氏は、伊達氏が冒頭で触れた「加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか」という鷲巣力氏の命題に立ち返った。フランス文学だけが加藤を構成する柱ではなく、たとえば美術、たとえば社会主義といったテーマについても初期からの変遷を跡づけることができるはずだ。そうした読解を総合することで、加藤周一の全貌が見えてくるのではないか。自分の研究がその礎の一つになることができたら、と岩津氏は締めくくった。

総合討議の時間はそれほど残されなかったが、そこでも意義深い議論がなされた。ここでは、半田氏が

加藤の創作の自伝的性格を強調しつつ、彼が鴎外の史伝を将来の新たな小説形式の模範とみなしていたことに言及し、その実践として中村真一郎の作品を示唆したこと、三浦氏が、「青春ノート」の加藤がヴァレリーを「アナーキー」の主題との関係で論じていたという片岡の指摘に関し、ヴァレリー自身が両大戦間期に残した手記『純粋および応用アナーキー原理』（恒川邦夫訳、筑摩書房、1986年）を紹介したこと、片岡が、ヴェイユのカトリック性への加藤の無関心をめぐる岩津氏の問いに応答し、労働条件の変わりがたさを前提に美的感情による救済を説くという彼女のヴィジョンが、コミュニスムとカトリックを集合性構築の課題において結びつけるという加藤の関心から外れていた可能性を示唆したことを取り上げておくにとどめる。

視聴者からの応答としては、シュルレアリスムに対する無理解という論点に関し、それを加藤の文学観における「決定的な問題点」とみなす澤田直氏のコメント（それは文学の有用性、という岩津氏が強調した論点の意義にも関わる）、また、加藤は精神の外在化という発想で造形芸術を捉えていたように思われるが（岩津氏の著書で大聖堂の記述に関して指摘されているように）、それは加藤の文学観にも当てはまるのかという宮代康丈氏の問いかけがあった。

精神とその外在化という発想をめぐる宮代氏の問いは、事後に同氏が補足されたように、ロマン主義の問題と関わっている。片岡が以前指摘し（「1950年前後の加藤周一――ロマン主義的風土の探究と日本的近代の展望（上）」2015年）、岩津氏の著書でも多少とも言及されているように、ヴァレリーを範として戦前に象徴主義重視の文学史観を形成した加藤は、留学直前の数年間にロマン主義の再評価を試みていた。

この点を含め、本合評会で展開できなかった主題は数多い。とりわけ、事前の「概要」で加藤が「東アジアとりわけ中国との歴史的関わりを重視し、晩年には東北アジア諸国を結ぶ共同体構築を展望していた」ことを指摘し、「フランス文学史の枠組みの参照と中国の文化伝統の重視が交錯する」という『日本文学史序説』（筑摩書房、1975-80年）の眼目に言及していながら、岩津氏の著書でも取り上げられたこの論点を議論できなかったことは、東アジア藝文書院という場を考えるならいっそう惜しまれる。それでも、限られた時間のなか、いくつもの重要な問題に光が当てられる充実した会となったことを喜びたい。

報告者:片岡大右（批評家、東京大学非常勤講師）

第4回 EAA批評研究会

2022年1月28日

2022年1月28日（金）、第4回EAA批評研究会がZoomにて開催された。今回の研究会では、江藤淳（1932-1999）著『アメリカと私』（文藝春秋、1991年：初出：1965年）を取り上げ、「異文化体験と批評」をテーマに、様々な角度から議論が交わされた。

研究会前半は、田村正資氏（EAA特任研究員）による『アメリカと私』に関する発表に始まった。このテクストは、江藤がロックフェラー財団の研究員としてプリンストン大学に渡米し、その後、同大学の東洋学科で日本文学史を教えた約2年間の記録である。異なる言語・文化環境下で同一性を保つための「異質の手続き」、さらに自らを気化させることなく学問を営み続けるため、アメリカを理解するための「焦点」を獲得しようと模索し、葛藤する江藤の軌跡が綴られている。

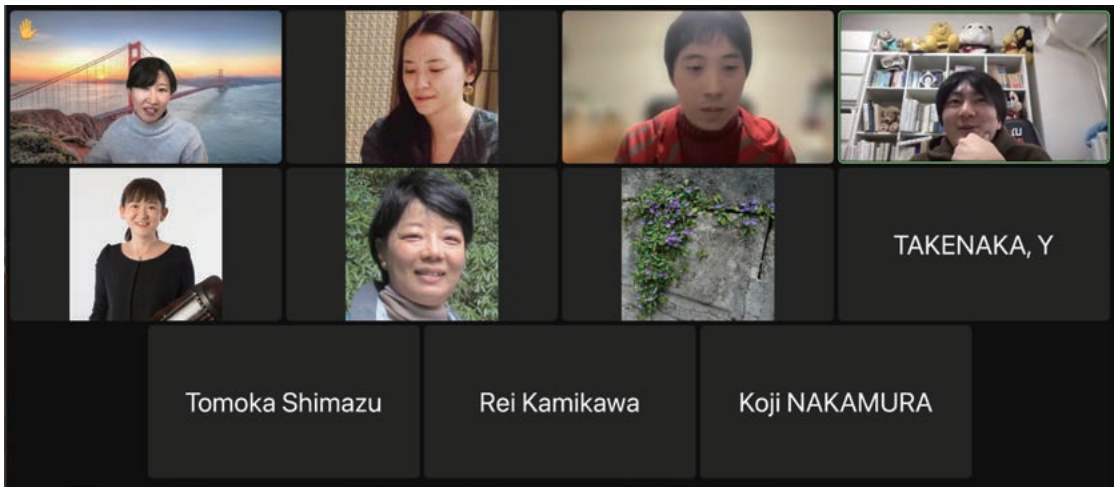
著者の略歴・テクストの概要に続き、「異文化体験」と「批評」とのかかわりを考えるうえで重要となるテクストのポイントが共有された。異なる文化・風土の国で生活するという環境の変化は、同じもの（日本人）であり続けるために「異質の手続き」を身につけなければならないという逆説を江藤に突きつけることになったと田村氏は解説する。この手続きの際に必要と

なるのが、異文化圏の「知識」と、その意義を見極め位置付ける際に必要となる「焦点」である。『アメリカと私』には、江藤が作家ウィリアム・ディーン・ハウエルズの孫との出会いを振り返り、その出自が自身にとって特段感動を催すものでなく、あくまでも「知識」にとどまるものであり、むしろ求めていたものは「知識に焦点をあたえてくれる「発見」ともいうべきもの」(p. 61) であったと述べる箇所がある。田村氏は、この時の江藤の感覚が、私たちの生活と知識の結びつきについて一つの洞察を与えてくれると説明した。私たちは日常生活において、「単なる情報」と「魅力的な知識」とを分ける焦点の存在をほとんど問題にしない。同じレベルの知的階級や共同体においては、「情報」と「知識」の棲み分けの指標は暗黙の了解であり、通常はそれが前景化することはない。だが、アメリカという言語・歴史・文化が大きく異なる環境に身を置いた江藤には、この焦点の不在が痛切に感じられたのだろう。江藤のテクストは、私たちが生活において重要視し知ることに悦びを感じるもの、そして広く知識として扱うものを成立せしめている「焦点」そのものを相対化してくれるという点で、大きな示唆を与えてくれるという。

さらに田村氏は、これらの要素の繋がりから得られる示唆を、自身の関心の一つである競技クイズの場合を通して浮き彫りにした。クイズは、自らが見つけた魅力的な情報を知っているか否かを相手に問いかける営みであり、情報の魅力や意義深さの理解が共有されていることが前提条件となる。そこで問われるのは決して純粋無垢な意味での森羅万象についての情報（「知」）ではなく、問う者と問われる者とが属する共同体固有の「焦点」を通して浮上する「知識」であり、私たちが森羅万象をどのような体系として理解しているかを問うものであると述べる。また、国・文化・風土により変質し得る「問われるもの」を観察することが、「焦点」の多様性をも浮かび上がらせる可能性を指摘すると共に、「焦点」を容易に持ち得ないマイノリティとしての経験を考えるための一つの視座にもなり得ると述べた。

研究会後半では、田村氏の発表や参加者各々の留学先での体験や異文化体験談を起点とし、「異文化体験」と「批評」とのかかわりについて様々な観点が共有された。田中有紀氏（東洋文化研究所）は、江藤のテクストに書かれた同一性の模索に触れつつ、博士課程在籍中、北京大学に留学先で経験した「読み」の根本的な差異について紹介した。ある程度確立されたテクストの読み方に対するこだわりのようなものを、中国の北京大学の哲学系の読み方とどう調整するかというところで悩んだという。現代中国語で相当な文量に目を通し、その後のディスカッションに注力する授業形式と、それまで日本の大学で積み重ねてきた、テクストの一部を丁寧に読み込み、思考を深めたうえで授業に臨むスタイルとの齟齬を振り返り、その調整・模索の経験を共有した。その発言を受け、郭馳洋氏（EAA 特任研究員）もまた日本での留学経験で実感したテクストの読みの差異に触れると共に、研究者間の問題意識にもまた違い（たとえば、中国における中国研究者と、日本における中国研究者との問題意識の差異）があることを指摘した。郭氏の発言を受けて、田中氏は、異文化で経験した彼らが大切にする問題意識の存在や、自身の慣れ親しんだ問題意識

報告者の田村正資氏（EAA 特任研究員）



参加者の様子

とは異なるその知識体系の差異に対する認識こそが、異文化体験の大きな収穫であったとつけ加えた。

アメリカのイエール大学において留学・指導経験を持つ佐藤麻貴氏（EAA 特任准教授）は、自身が身を浸したアメリカの価値体系を共有すると共に、むしろ帰国後に逆順応するのに苦悩した経験ついて語った。「読み」の差異に葛藤した経験に加え、佐藤氏は、『アメリカと私』で江藤が描き出したアメリカ像とその実像との違いについても指摘した。一口にアメリカといっても、様々な地域性・大学の特色があり、江藤の描いた構図では捉えきれない実像があるという。沖縄研究を専門とする崎濱紗奈氏（EAA 特任研究員）は、海外でのワークショップに参加した際に感じた英米圏と日本の史学分野における作法の違いに触れ、その狭間で自身のスタンスを模索し、異なる立場を行き来する難しさを共有した。さらに田村氏の言及したマイノリティ問題を考えるうえでの、一つの視座としての「焦点」の可能性に触れ、沖縄におけるアイデンティティの複雑性を紹介すると共に、江藤が覚えたような「焦点」を共有できない疎外感・浮遊感などは、それを意識するか否かにより会得されるものだと指摘する。マイノリティだからその立場がわかるとは限らず、「焦点」というものが自分の中で、批評精神として意識され得るものになっているか否かが、大きくかかわっているのではと、発表を受けて考えさせられたという。その他、政治学を専門とする具裕珍氏（EAA 特任助教）からの、『アメリカの私』に綴られた体験が、その後政治的文脈における江藤がアメリカを眼差す際に与えた影響についての質問など、異文化体験と批評との関わりを考える上で切り離すことのできない多岐にわたる問題が取り上げられた。

コロナ禍において渡航を諦めざるを得ない状況が続く中、異なる言語圏・文化圏を現地で体験する機会が遠のいている。だがその距離ができたからこそ、こうした異文化体験が私たちに及ぼし得る力・価値について、また人が移動することで生じ得る内的変化やその後の自己の再編成について改めて振り返り、その価値を強く認識する機会に恵まれたように思う。参加者それぞれの分野や実体験に根ざした観点・意識の共有そのものが刺激となり、異文化体験が批評にもたらし得る可能性や力について、様々な角度から再考・議論することのできた充実した回となった。

報告者:片岡真伊（EAA特任研究員）

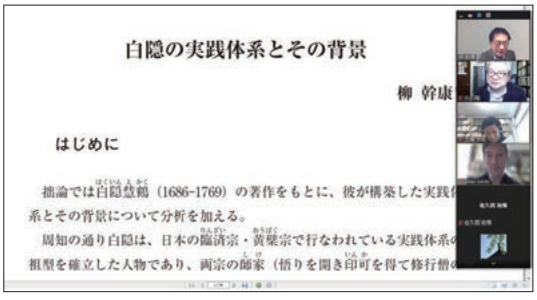
第7回 東アジア仏典講読会

2022年1月29日

2022 年 1 月 29 日（土）日本時間 14 時より、第 7 回東アジア仏典講読会を開催した。この読書会は、禅を中心に仏教の研究を行っている日本・中国・韓国・フランスなど各国の研究者が集い、文献の会読や研究発表・討論を行うものである。今回は柳幹康（東洋文化研究所）より白隠の実践体系について報告がなされた。

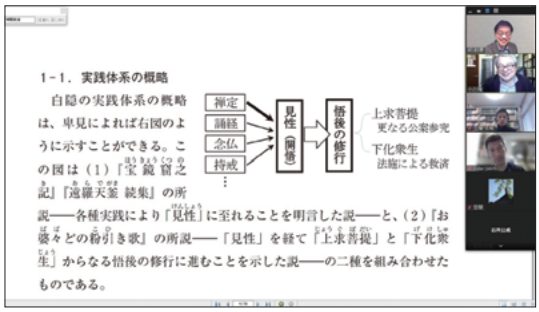
白隠は日本臨済禅中興の祖と尊称される江戸期の禅僧であり、今日の臨済宗・黄檗宗で行われている実践体系の祖型を確立した人物である。その体系とは「法身・機関・言詮・難透・向上」の五層を基本とするもので、この各層に配される無数の公案（禅の課題）を解いていくことで、悟りの完成にいたるものと一般に認識されている。

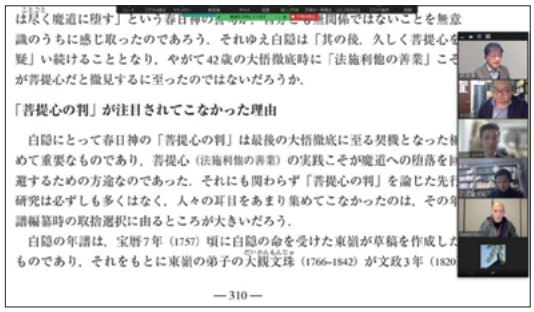
それに対し柳は先行研究を踏まえつつ、白隠の著作を読み解くことで主に以下の 4 点を指摘した。(1) 公案の細かな階層化や範疇の名称は白隠の著作には見えず、精緻な体系を樹立しようという意欲も白隠には認めがたいため、今日言われるような公案体系は恐らく、白隠の後にその門流で整理された可能性が高い。(2) 複数の公案を解くことは白隠の実践体系の一部にすぎない。白隠が構築した実践体系は、三つの要素――見性（最初の悟り）、上求菩提（公案参究による悟境の練り上げ）、下化衆生（法施による他者の救済）――から成っており、うち白隠が最も重視するのは最後の下化衆生である。(3) 白隠が下化衆生を最重要視する理由は、他者の救済を実践しない限り、迷いの根源である我執を断つことができず、それゆえ自己の救済もあり得ないと考えていたことによる。(4) 白隠の世界観の根幹となっているのが輪廻説であり、それが白隠の実践観に独自の緊張感をもたらした。それは、他者の救済を怠るのであれば、それは我執が残っている証拠であり、その時点ですでに悪い生まれへ転落するプロセスに入ってしまっているという考え方によるものである。



これに対し参加者より様々な質問がなされ、活発な意見交換が行われた。提起された質問は主に以下の七つである。(1) 白隠が見性（最初の悟り）の重要性を強調するのは何故か。(2) 見性に到る道として白隠が現実的に認めていたのは、公案（禅の課題）の参究のみに限定されるのか。(3) 白隠は公案を坐禅のなかで行うべきものと考えていたのか、それとも坐禅以外の時も参究すべきと考えていたのか。(4) 白隠にとって理想的な坐禅とはいかなるものであったのか。(5) 当時の日本・中国の仏教について白隠はどのように理解していたのか。(6) 白隠の世界観の前提となっている輪廻について、白隠がそれをリアリティをもって受けとったのは何故か。(7) 白隠の禅がその後の日本臨済禅を席巻した理由、その教団がもっていた生命力の源泉とは何であったのか。

以上の質問に対し柳により、白隠の著作中に見える発言や墨跡・禅画などを踏まえつつ、一定の回答が為された。ごく簡単にまとめると以下の通りである。(1) 白隠が見性を強調するのは、それが一連の実践を起動するうえで不可欠な要素であり、それがなければいかなる救済もあり得ないと考えているからであろう。(2) 公案参究以外の実践（念仏や持戒など）でも見性に到れると述べる一方で、現実的には公案参究こそが最も見性しやすい理想的な実践と見ていた。(3) まずは坐禅するなかで公案に参究し、その集中状態を坐禅以外のあらゆる時に押し広げていくのが正しい実践のあり方と考えていたことが白隠の著作から読み取れる。(4) いかなる雑念も交えず常に公案に参究する極度の集中状態こそが、初心の修行者にとっ





参加者の様子

て理想的な状態であり、それにより見性が得られるとしている。（5）一連の理想的な実践（見性から上求菩提・下化衆生に到る流れ）は釈尊以来の正しい実践であるが、それが中国・日本のいずれにおいても廃れてしまっていたので、それを自分が復興したと理解していた。ただしそのような実践は実際のところ、白隠がインド・中国・日本の各種文献を読みつつ、自身の修行体験を踏まえて新たに構築したものであった。（6）白隠がリアリティをもって輪廻説を受け止めたのは、地獄の話を聞き恐怖した幼児期の体験に始まり、その後も輪廻を前提として様々な事象を理解し、そのリアリティが耐えず刷新されたものと思われる。（7）自身が受け止めた世界観のもと自身が正しいと信じた道を真摯に実践したことによる求心力に加え、見性した者にそれを証明する竜杖払子図を発行したことにより新たな共同体を生み出したことなども、その禅が広まった理由であろう。

上述７点以外にも様々な観点から意見が提示され、大いに議論が盛り上がったことで、事前に準備していた資料の全てを読み切ることができなかった。そのため残りの分は、次回に持ち越されることとなった。予定通り進行しなかったのは主催者でもある柳の不手際であり反省するところであるが、当初予期していなかった活発な議論により新たな気づきを得られたことは、研究会の醍醐味だと言えるだろう。

報告者:柳幹康（東洋文化研究所）

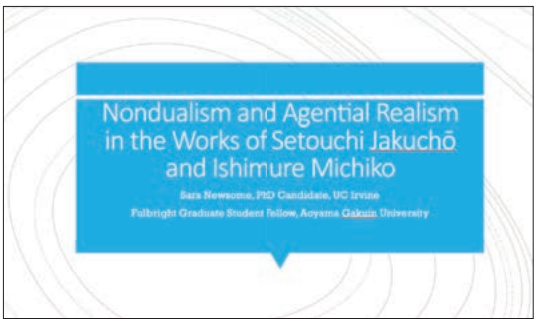
第30回 石牟礼道子を読む会

2022年2月2日

2022年2月2日（水）15時より、第30回石牟礼道子を読む会がZoom上で開催された。今回の発表担当者は、現在、青山学院大学に留学中のサラ・ニューサム氏（カリフォルニア大学大学院博士課程）である。ほかに、宇野瑞木氏（EAA特任助教）、佐藤麻貴氏（EAA特任准教授）、宮田晃碩氏（東京大学大学院博士課程）、池島香輝氏（東京大学大学院博士課程）、徐嘉熠氏（清華大学大学院博士課程）、報告者の髙山花子（EAA特任助教）が参加した。

ニューサム氏は、”Nondualism and Agential Realism in the Works of Setouchi Jakuchō and Ishimure Michiko”（「瀬戸内寂聴と石牟礼道子作品における不二（非二元論）とエージェンシー的現実主義」）と題して、瀬戸内寂聴（1922-2012）の小説『花に問え』（1992）と石牟礼道子（1927-2018）の小説『天湖』（1997）に見られる不二／非二元論の思想について英語発表を行った。

作品分析の前にまず参照されたのは、一遍上人の思想である。次に理論的に依拠する概念として、カレン・バラッド（1956-）のagentical realismが紹介された。ニューサム氏によると、バラッドの認識論は、仏教の無我に類似しているという。瀬戸内寂聴による感覚と仏性の認識についての指南にも言及した後で、具体的には、たとえば『花に問え』において、主人公の女の愛人であったとして回想される、晩年に一遍聖絵の模写をつづけていた修復師の亮介が一遍の想いを



大地から感じる場面や、『天湖』において登場人物の克平が手術の最中にみずからがしだれ桜になったと感じる場面が、不二のあらわれとして取り上げられた。

瀬戸内寂聴と石牟礼道子の関係については、これまで何度か話題にのぼっていたため、今回、このように両者の作品を突き合わせるかたちで、仏教的な要素の描写や叙述の構造について比較しながら、議論できた意義は大きかったと思う。

質疑応答では、生命のないとされる人工物と仏性の関係、和辻哲郎の「無」、バラッドの理論そのものの文学研究での応用状況、仏教の宗派による身体をめぐる思想の異同、性愛描写の目立つ寂聴と石牟礼の差異など、日本語と英語が混ざる形で、とめどなく意見交換がなされた。個人的には、おなじく『梁塵秘抄』や中世を題材に創作をしながら、今様のような庶民的なほうにおりてゆく傾向が強い石牟礼に対して、寂聴が絵図のように権力と結びついた表象装置を主題にしているという違いが浮かび上がってきたことがおもしろかった。そして、それではどのようにして、人間と人間でないもの、現在にあるものと現在にないものとのあわいが結ばれる契機が生まれるのか、作品にもとづいてもっと知りたい想いに駆られた。

わたしたちは今年度に入ってから、石牟礼の新作能について鑑賞と勉強の機会を多く持っていたが、瀬戸内寂聴も「夢浮橋」（2000年3月3日、4日初演、国立能楽堂）という新作能をつくっており、原作を読み、鑑賞を試みるのもためになるのではないかと思う。何度か議論されてきた古のモチーフを取り入れた現代文学の翻訳可能性や困難さについても、別の作家とともに見ることで得られる知見が多いだろうと気づかせてくれる佳き時間だった。

報告者:髙山花子（EAA特任助教）

「部屋と空間プロジェクト」研究会

第6回「死者を祀る空間」のコスモス

2022年2月3日

2022年2月3日（木）16：00より、第6回「部屋と空間プロジェクト」研究会が行われた。今回は柳幹康氏（東洋文化研究所）が「死者を祀る空間――先祖祭祀の民俗学的研究」として、『葬儀と仏壇』（ヨルン・ボクホベン、岩田書院、2005年）をとりあげ報告を行った。司会は田中有紀（東洋文化研究所）が務めた。

「日本ではなぜ身内の者が死ぬと、仏壇を購入してそこに死者を祀るのか」という問いに基づき、筆者は仏壇の背景に関わる研究を進める。仏壇の前の儀礼だけでは、その機能と意味が理解できないと考えた筆者は、祭壇と墓の関係を問題として認識し、葬送儀礼（死者が出てから、位牌を仏壇に納めるまでの流れ）を見る必要があると考えた。本書の第一部は「葬送儀礼と墓の歴史と現在」すなわち仏壇に入るまで、第二部は「仏壇の起源と機能」すなわち仏壇についての考察である。

第一部で検討するのは「奈良市阪原町における葬送儀礼」の事例である。筆者は、奈良市の北側にある阪原町を調査した。「垣内」と呼ばれる隣組が互助会として機能し、葬儀の実務を担当する。遺体に触れるのは家族の役割であり、遺体は土葬して、故人の髪と爪は壺に収め祭壇に安置し、家族は自分の爪を切って棺に入れる。祭壇に安置された髪・爪は、一周忌の法要後に寺に納めるという。ここからわかるのは、死穢を忌避せず死体に触れる家族、そして葬儀に参与するが死体に直接触れない隣組というように、作業が明確に分担されていることである。

もう一つは「奈良市街における葬送儀礼」の事例である。市街地の葬送儀礼は病院と葬儀社によって行われ、死を忌避する傾向がより顕著になっている。もともと遺族が行っていた遺体の湯灌は、病院の看護婦による清拭に置きかわり、遺体が棺に納められた後は葬儀社に任せられた。家族も弔問者もほとんど死者に手を触れない。火葬が行われ、遺骨の半分は火葬場に残されることから、筆者は日本人が重視するのは遺骨そのものではなく、死者に成仏・往生をもたらす「遺骨の正しい処理（管理）」であると指摘する。柳氏はさらに、肉体を腐敗させることなく処理できたこと、最終的な到達点である「白骨」への移行を確認できたことによる安心感についても言及した。

第二部では、島根県簸川郡斐川町を調査し、位牌が仏壇に安置された後の死霊・先祖の祭祀を分析する。仏壇の形態は、宗派別の相違というより、購入者の希望によって装飾に違いが生じていると考えられる。仏壇を設置する際は僧侶が儀式を執行するが、祭祀の執行にあたっては、宗派の教義よりも家の作法のほうが往々にして優先される。仏壇からは、霊魂に対する「恐怖」と「愛着」の「両義性」が読み取れる。仏壇を適切に取り扱いきちんと儀礼を行わなければ「罰が当たる」と考え、扉・欄干・水引を設け「他界の流出」を防ぐ装置を置き、仏壇そのものが、普段家族があまり寄りつかない部屋に置かれていることが多い。それと同時に仏壇は、死者との交流を可能とする場であり、それにより「心の拠り所」ともなっている。

柳氏は、死により分かたれた生者と死者（死霊）の関係をどう取り結ぶかが、葬送儀礼・先祖祭祀の核心であると指摘する。それまで共に生活してきた死者に対し、残された生者は「愛情」を覚える一方で、死穢をまとう死者に「恐怖」の念を抱く。その死穢を除去し死霊を浄化する行為である「儀礼」において、

「死者」は遺体の処理（土葬・火葬）により「死霊」となり、のち供養・年忌法要により死穢が浄化され「先祖」となる。また、死者を二つの「空間」に閉じ込め管理、共存する。筆者が指摘するように、「仏壇」は「位牌」（浄化された家族の魂の依代）のみが祀られる場所で、死穢とは無縁であり、先祖とつながるミクロコスモスである。一定の距離をとりつつ家の中に設置され、死者との交流が日々なされる場と捉えられる。「墓地」は「死体」が葬られる場所であり、死穢とは無縁ではいられない場であり、共同体とつながるマクロコスモスである。一定の距離をとりつつ共同体の中に設置され、基本的には年に一度家族が訪れる。このように「儀礼」による浄化をすすめる過程で、「依代」的にも「空間」的にも不吉な死を遠ざけていく形になっている。「依代」は当初、肉体に由来するものと、そうでない白木の位牌が用いられるが、やがてともに処理・処分され、不吉な死と無縁の黒塗りの位牌のみが残る。「空間」に着目すれば、位牌は「仏壇」という、家の中にはあるものの生活の場からは一定の距離がある特別な「空間」に閉じ込められ、適切に取り扱われる。肉体が処理される「墓地」は家の外にあり、年に一度しか訪問されない。すなわち、二重三重に死穢を遠ざけたうえで、浄化された家族・先祖の霊とのみ安全かつ有益に交流する仕組みを構築しているのである。また柳氏は、本書の課題として残された、葬送と僧侶の関係について複数の先行研究を紹介しながら、自身の専門である禅宗の僧侶の事例も含めて、僧侶たちがいかに死穢のタブーを乗り越えていったかについて補足した。

質疑応答で繰り広げられたテーマは多岐にわたるが、そのいくつかをふまえながら、報告者が考えたことを書きたい。

一人の人間の死をめぐり、ミクロコスモスとしての仏壇とマクロコスモスの墓地という二つの空間が形成される。人々はこれらと適切に距離をとりながら、生活を続けてきた。今回は特に日本人の、「死をめぐる空間」形成の微妙なあり方に注目したが、参加者の発言から考えると、おそらく中国でも、あるいはほかの国々にも、死者との距離の取り方にはそれぞれの作法があり、葬送儀礼をめぐる様々な空間のあり方から読み取れるのだろう。

それを念頭においた上で、あえて日本的な葬送儀礼についてもう一度考えてみると、そこには、「私はこうしたい」という遺族の強い思いが、様々な伝統的な作法に一定の注意を払いながらも、常に優先され、遺族の周囲にいる人々にもまた、それを許容する態度を見出せるのではないか。こうした強い思いは、「死者は私にこうしてほしいと思っているはず」という強い信念の裏返しでもある。この信念は、柳氏が引用する、「他者がなにを見、なにを知り、どう感じ、なにを信じ、なにを意図しているかについて推論する」力（Bering, Jesse 著、鈴木光太郎訳『ヒトはなぜ神を信じるのか――信仰する本能』化学同人、2012 年）を、人間が「実際には心をもたないモノ」である死者にまで、最大限発揮してしまうことによって生まれるものであろう。悲しみとどう向き合うかという個人の気持ちを最大限尊重して、無理に押さえつけずにどう消化していくかを考えるのは、中国の思想家荀子が論じたような、欲望を適切に養い、調節していこうとする儀礼の精神にもつながる。

ところが、時には僧侶の助言を無視してまで行われる「こうしたい」という個人の思いは、周りの説得により、通常の儀礼へと引き戻されていく。儀礼の「空間」「時間」をめぐるセンスは、社会の中で培われ、ある程度共有されているのである。そこからしばらく逸脱することは許されながらも、再びその共有された枠組みの中へと戻っていく。家族の遺骨を墓に納めず、ずっとそばに置いておきたいという気持ちは尊重されるべきだが、やはり墓に納めるべきだと説得するのが友人である。儀礼にまつわるこうしたセンスこそが、「悲しみ」という感情が過度に増長しないように、感情を「適切」な「空間」「時間」によって区切ることで、再び人間が「日常」へと戻れるようにするための装置として、働いているのではないか。

報告者:田中有紀（東洋文化研究所）

EAA沖縄研究会シンポジウム：「琉球」再考

2022年2月6日

2022年2月6日、EAA沖縄研究会シンポジウム「「琉球」再考」が開催された。本研究会は2021年4月に発足し、張政遠氏（総合文化研究科）と報告者（崎濱紗奈〔EAA特任研究員〕）を中心に月1回のペースで活動を行ってきた。この度のシンポジウムは、1年間の活動の集大成として企画されたものである。

シンポジウムは2部構成で、第1部では二つの基調講演、第2部では四つの研究発表が行われた。第1部では大変幸いなことに、尚衛氏（尚本家第23代当主、一般社団法人琉球歴史文化継承振興会代表理事）と尚満喜氏（臨時聞得大君、一般社団法人琉球歴史文化継承振興会代表副理事）にご登壇いただくことが実現した。尚衛氏には「尚本家玉陵清明祭について」というタイトルで、首里の玉陵での御清明祭が復興されるに至る経緯や、実際に執り行われた御晴明祭の様子を仔細にお話いただいた。尚満喜氏には「沖縄神社について」というタイトルでご講演いただいた。戦前、官幣小社であった波上宮にて神職を務め、また、首里城を本殿として建立された沖縄神社の設立に関わった杉谷房雄宮司が遺した手記（二見興玉神社所蔵）を繙きつつ、臨時聞得大君というご自身の立場から、現代における琉球の祭祀のあり方について常に問い返す必要性に触れた。

第2部の研究発表では、多岐にわたる問いが提示された。「伊波普猷の王権論――1920年代の著作を中心に」（崎濱紗奈）、「トランスユーラシアの言語拡散と東北アジアの農耕民移住――「三角測量」の死角を南島の視点から考える」（張政遠氏）、「テクストと無文字の民俗――台湾における樹木信仰の事例から」（前野清太朗氏、EAA特任助教）、「歌謡以前に向かって――知里真志保からみるアイヌの〈うた〉」（高山花子、EAA特任助教）という四つの発表は、必ずしも全てが「琉球」あるいは「沖縄」を対象とした研究発表ではなかった。しかし、石井剛氏（EAA副院長）が閉会の辞で指摘したように、第2部で扱われたテーマ――琉球／沖縄、台湾、アイヌ――は、奇しくも帝国日本において「周縁」「辺境」「植民地」として位置づけられてきた場所に関わるものであった。

上段左から崎濱紗奈、張政遠氏
下段左から前野清太朗氏、高山花子氏

また、それぞれが接近を試みたトピック――王権と「政治」の起源、稲の移動と「民族」、信仰におけるエクリチュールの特権性、〈うた〉以前の〈うた〉を聞き取ろうとすること――は、聞き漏らされてきたざわめきあるいは雑音めいたものを、敢えてもう一度拾い上げようとするものであった。

開会の辞で中島隆博氏（EAA 院長）が強調したように、東アジア藝文書院は「東アジアから新しいリベラルアーツを創造・発信する」ことを目標に掲げている。言い換えればこれは、「東アジア」という概念について、固定的・本質的なものではなく、普遍的（文字通り、至る所に遍在し得る）問題系を思考するための地場として捉え直す試みである。EAA 沖縄研究会もまた、「沖縄」という概念あるいは場所を、特定かつ個別的なものとして理解するのではなく、次のような問いを重要視してきた。「沖縄」という地場／磁場を出発点としたとき、どのような普遍的な問いが見えてくるだろうか。その問いを思考するために、どのような知的実践が必要となるだろうか。

移り変わる時代の中で、「沖縄」あるいは「琉球」という名の下に、その「固有性」はときに貶められ、ときに称賛されてきた。しかし、そのような枠組みのもとに回収しきれないはみ出しにこそ、「沖縄」をめぐる問題群は存在しているのである。また、そうしたはみ出しこそが、沖縄を普遍的思考（ここではこの行為について、絶対的権威を付与された正統なものとしてではなく、この世界に遍在する問いをめぐるきわめて実践的な思考として捉えたい）へと接続し得る鍵を握っている。本シンポジウムの構成は一見、まとまりを欠いており、一貫性がないようにも思えるかもしれない。しかし本研究会（少なくとも私自身）は、そうしたある種の奇妙さ、すわりの悪さが必要であると考えた。なぜなら、それによって、「沖縄」あるいは「琉球」をパッケージ化しようとする輪郭線に傷が刻み込まれ、その枠の中に押し込まれたものがドロドロと流れ出し、見えないようにされていたはみ出しが少しでも可視化されることを願ったからだ。

2022 年は、1972 年から 50 年という節目の年である。1972 年 5 月 15 日、沖縄をめぐる施政権がアメリカ軍から日本政府に返還され、いわゆる「祖国復帰」が実現した。そして、石井剛氏が言及したように、その 4 ヵ月半後の 9 月 29 日、日中共同声明により日本と中華人民共和国の国交が結ばれた。東アジアという地場を動かす「地政」というものは、この 50 年でどのように移り変わっただろうか。あるいは「地政」をめぐる言説それ自体が持つ意味や力は、どのように変化してきただろうか。忘れてはならないのは、「地政」とは、決して天から与えられる運命ではなく、意思／意志が関与しながら形成されるものであるということである。それがどれほど複雑に交錯していようと、その発端は、わたしたち一人ひとりの手に握られているものでもあるのだ。1972 年より遡ること 50 年、1922 年に伊波普猷は『古琉球の政治』（郷土研究社）を出版した。それは、第一次大戦後に沖縄を襲った「蘇轍地獄」という未曾有の経済危機に際して、伊波が、諦めや怒りの中でもがき苦しみながらも、自らの手に握られた可能性の発端を手放さないために書かれた。100 年が経過した今も、伊波の葛藤は決して過去のものではない。それどころか、それは世界各地においてより進化／深化した形で表出している。「東アジア」を批判的に思考／志向しなければならない所以である。

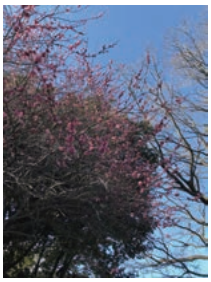
※本シンポジウムは、多くの方々のご支援によって実現しました。とりわけ、ご多忙の折、基調講演をご快諾くださった尚衛氏・尚満喜氏に、衷心より御礼申し上げます。また、シンポジウム実現のためにご尽力くださっただけでなく、貴重なお時間を割いて毎回の研究会にもご出席くださった井上信一郎氏・今野敬太氏にこの場をお借りして深謝申し上げます。さらに、日頃 EAA の活動の基盤を支えてくださっているダイキン工業株式会社に、改めて感謝申し上げます。そして、本企画の実現のために併走してくださった先生方、EAA スタッフの皆様に、心からの「ありがとうございます」を申し上げます。

報告者:崎濱紗奈（EAA特任研究員）
写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

悦びの記#4

石井剛（EAA副院長）

2022年2月6日



冬季オリンピックが北京で始まりました。中国第5世代映画監督として世界的に知られた張芸謀が2008年に続いて今回も開会式の演出を務めたのですが、主会場の一つである河北省の張家口は、彼の作品『あの子を探して』（1999年、《一个都不能少》）の舞台でもありましたので、この二十数年間で中国が遂げた経済発展の大きさには深い感慨を覚えざるを得ません。

その開会式で、出場国・地域の名を集めた雪の結晶が聖火台となり、その中央に聖火リレーで使われてきたトーチがそのまま取りつけられたことは多くの人を驚かせたようです。朝日新聞は、環境保護と低炭素社会の実現を願ったという張氏のコメントを掲載しています。一方、中国国内のメディアでは、テレビの実況中継が発した「“微火”虽微,永恒绵长,生生不息」という解釈が伝えられました。「“微かな火”は、微かではあるけれど永遠に途切れることなく続き、生成して止むことがない」と直訳できるでしょう。わたしはこれを、かけがえのない生命に対する讃歌であると理解しました。雪の結晶を象ったオブジェは世界と人類そのものであり、それらがたった一つの「微火」を祝福されているのです。「微火」を消さないための智慧を、わたしたち人類は普遍的な課題として求め続けなければならないということなのでしょう。

いまわたしは、「「琉球」再考」と題するシンポジウムが終了した直後にこれを書いています。たいへん光栄なことに、このシンポジウムでは、かつての琉球王国の王家であった第二尚氏の後裔である尚本家第23代当主尚衛さんと、尚家の祭祀を司る臨時聞得大君の尚満喜さんにお越しいただき、それぞれから基調講演を賜ることができました。尚衛さんが「沖縄県祖国復帰50周年の年を迎えて」と題して年頭のあいさつをインターネット上に寄せられていることに、わたしは閉会の辞で言及しましたが、そこで紹介した部分を抜粋したいと思います。

昔琉球國があり、私共の祖先は琉球民として生きたが、新たに日本人として生きる選択をした、と言うのが現在までの歴史であります。その選択は琉球民が持つ「平和を愛し争いを好まない」と言う誇りに基づいての選択だったのかと思います。

「平和を愛し争いを好まない」という誇りに基づいた選択は、同時に、日本もまた平和を愛し争いを避けるべき国家であるにちがいないという期待と信頼の表れであり、50年前に復帰が果たされたことによって、この誇りは、琉球民のものであると同時に、日本という国家に住まうわたしたち一人ひとりにとっての誇りへと昇華したと言うべきでしょう。この復帰を共に祝福するのであれば、そうした誇りをわがこととして引き受けることが必要です。つまりわたしたちは、今日の日本が「平和を愛し争いを好まない」ことを誇りとするに足る国であるのかどうか、この「復帰」が沖縄の平和を本当に増進するものになっているのかどうかを厳しく問いつづけなければなりません。

今回のシンポジウムは、「琉球」を考えなおすことを主題としていましたが、個々の研究発表は、稲作伝播と北東アジア文化の遺伝学的関連、台湾の樹木信仰、アイヌ人学者の歌謡研究など、琉球とは別の地域に関するものが多数でした。その事実はわたしを粛然とさせるものでした。なぜなら、「琉球」を相対化し、そこからある種の普遍性に触れようと企図したこのシンポジウムは、とりもなおさず、日本が明治以降第二次世界大戦に至る近代化の過程で拡張し、領土

化し、植民地化し、さらには「共に栄える」地域秩序を築こうとした、かつての帝国の欲望をそのままプログラムとしてなぞりあげるものだったからです。「東アジアからのリベラルアーツ」は東アジアの地域性（「indigeneity」のことだと思います）に立脚した普遍性を求めるものなのだと中島隆博さんは冒頭のあいさつで述べました。この普遍性と、今日のシンポジウムが求めようとした普遍性とは、いったいどこまで相互に重なり合うものでしょうか？　日本の帝国主義が西洋近代に代わる新しい普遍であろうとする企てでもあったことをわたしたちは忘れることはできません。琉球、台湾、アイヌ、北東アジア。これらのフィールドを対象とする発表が、「東アジアからの普遍」というアジェンダの下に設定されたことにどのような意味が託されるべきなのか、それを繰り返し問い直さなければなりません。

平和を愛することは、自分たちの生活圏がその内部で調和を保つことだけを希求することであってはならないはずです。平和を愛するとは、必然的に世界の平和を愛することであり、それはまるで、今もきっと北京のスタジアムを飾っているはずのあの雪の結晶が「微火」を祝福するのと同じように、全人類が同じくする願いであるはずです。東アジアからのリベラルアーツとは、したがって、東アジアの伝統と文化をただ見なおすというプロジェクトではないのです。それは、「平和」への期待と信頼が内部での差別や抑圧のみならず外部への途方もない暴力へとすり替わってしまった現実の歴史に対する反省を出発点とすることによってのみ、初めて可能となる新たな学問の試みです。

このシンポジウムで主役を務めたのは、日ごろEAAを支える若い研究者たちでした。彼らもきっとこの出発点を共有してくれるであろうとわたしは願っています。わたしたちが民族の誇りと共に今日に続く歴史を選び取った琉球の人びとの過去からの声に応答し、未来に向けて共に歩んでいくためには、きっとそれ以外にないのですから。

写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

オンライン連続講座「知の継承（バトン）」

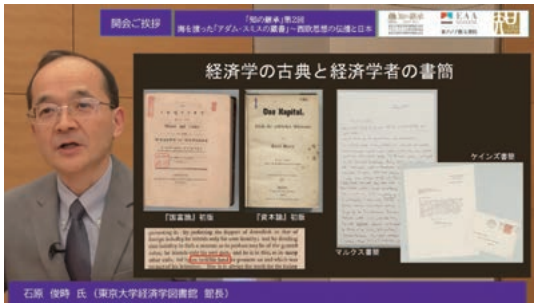
第2回　海を渡った「アダム・スミスの蔵書」～西欧思想の伝播と日本

2022年2月7日

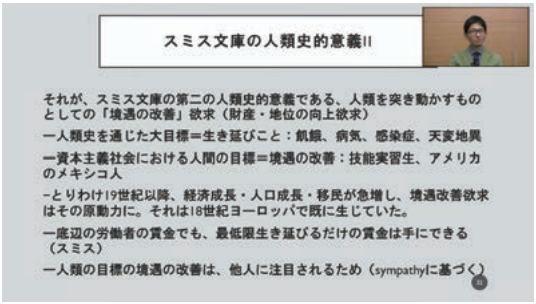
2022年2月7日（月）19時から、東京大学東アジア藝文書院（EAA）、東京大学経済学図書館・経済学部資料室、（一社）読売調査研究機構の三者主催によるオンライン連続講座「知の継承（バトン）」の第2回が開催された。前回講座の「紙の誕生と伝播から見る「記録媒体の世界史」～東洋から西洋へ」に対し、今回の講座は逆の西洋から東洋へのアプローチについて、東京大学経済学図書館架蔵のアダム・スミス文庫が取り上げられた。

登壇者は、石原俊時（東京大学経済学図書館長）、野原慎司（東京大学大学院経済学研究科准教授）、矢野正隆（東京大学大学院経済学研究科助教）の3氏である。プログラムであるが、石原氏による開会挨拶の後に野原氏によるプレゼンテーション「旧蔵書から見るアダム・スミスの知的世界」がなされ、それを受けた野原・矢野氏によるトークセッション「近代における西欧思想の伝播の歴史～アダム・スミス文庫が私たちに伝えるもの」が行われ、最後に質疑応答があった。

プレゼンテーションに先立ち、石原氏により前回同様に本連続企画についての説明がなされた。次に東京大学経済学図書館架蔵資料のうち、アダム・スミス『国富論』初版をはじめとする経済学の古典とカール・マルクスなど経済学者の書簡、山一證券資料な



石原俊時氏（東京大学経済学図書館長）

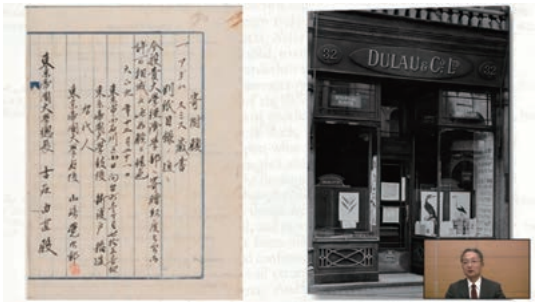


と企業・博物資料、古札・古貨幣コレクションや山城国西法花野村浅田家文書などの古文書・博物資料が紹介され、経済学部の設立とアダム・スミス文庫について説明が行われた。最後に、東京大学経済学部図書館の周年記念行事の一環として本日公開された東京大学経済学図書館・経済学部デジタルミュージアム「アダム・スミスからの知の継承」（https://lib-dm.e.u-tokyo.ac.jp/）について、「第Ⅰ部　アダム・スミスの書棚の世界」、「第Ⅱ部　スミスが生きた時代：ウィリアム・ホガースのまなざし」、「第Ⅲ部　海を渡ったスミス：スミスの思想の東アジアへの波及」の内容が詳しく説明された。本講座に深く関わる内容であり、ぜひともご覧いただきたいと思う。

野原氏のプレゼンテーション「旧蔵書から見るアダム・スミスの知的世界」は、アダム・スミスが資本主義社会をどう捉えたかについて、アダム・スミスの蔵書分析から論を説き起こされた。全世界のスミス蔵書は、経済学・政治学・道徳・法学のみならず、文学、詩、芸術、旅行記、博物誌など多岐にわたっており、資本主義社会を初めて捉えた経済学者スミスの広範な知の世界、経済学の非経済学的起源を知る手がかりになることを述べられた。次にスミス文庫の人類史的意義について、(1) 人間・社会・世界を解明する学問と、都市化を背景とし人間の生き方にかかわる宗教との役割分担という近現代的決着の形成過程の謎に迫る一助であること、(2) 庶民の欲望の追求が原動力となる資本主義社会における、人類を突き動かすものとしての「境遇の改善」欲求（財産・地位の向上欲求）の 2 点を述べられ、その起点としてのトマス・ホッブズ『リヴァイアサン』についても言及された。非常に密度の濃い 15 分間であった。

野原氏のプレゼンテーションを受けて、矢野氏とのトークセッション「近代における西欧思想の伝播の歴史～アダム・スミス文庫が私たちに伝えるもの」が行われた。まず矢野氏から、新渡戸稲造がイギリスの古書店から購入した 141 タイトル 303 冊のアダム・スミス文庫の管理について、1781 年当時 2,300 冊にのぼる蔵書の各所への伝来、1924 年の関東大震災時の同文庫の救出、1945 年の戦時疎開、1955 年の大河内一男教授が厳命した「原形保持」による本格的修復のプロセスが、当時の修復作業の記録をもとにスライドでわかりやすく述べられた。なお修復作業の記録とその考察について、森脇優紀・福田奈津子校注、小島浩之解題「1950 年代のアダム・スミス文庫

矢野正隆氏（東京大学大学院経済学研究科助教）



左から順に野原慎司氏、矢野正隆氏

に関する覚書」校注（『東京大学経済学部資料室年報』9、2019 年、15 ～ 38 頁、東京大学学術機関リポジトリ https://doi.org/10.15083/00079148 より公開）、森脇優紀「1950 年代日本における西洋稀覯書の修復技術とその方針：東京大学経済学図書館所蔵「アダム・スミス文庫」を事例として」（同 10、2020 年、12 ～ 23 頁、同リポジトリ https://doi.org/10.15083/00079156 より公開）に詳細に述べられているので、ご覧いただけると幸いである。

矢野氏は次にアダム・スミス文庫の公開と利用について、1951 年刊行の矢内原目録（A Full and Detailed Catalogue of Books which belonged to Adam Smith : Now in the Possession of the Faculty of Economics, University of Tokyo, with Notes and Explanations, Tokyo: Iwanami Shoten, 1951）、1976 年の「国富論」刊行 200 年記念アダム・スミス文庫公開展示会、2013 年の東大 OPAC からの西洋古典籍デジタルアーカイブからの書誌及び画像データの公開（矢野正隆「「西洋古典籍デジタルアーカイブ」特徴と利用法」、同 4、7 ～ 11 頁、同リポジトリ https://doi.org/10.15083/00047475 より公開、国立国会図書館運営のジャパンサーチからも画像の閲覧が可能）を紹介しながら詳細に述べられた。アダム・スミス文庫の各蔵書が、資料の利用と保存という相矛盾するニーズを両立させるため、蔵書の原形をできるだけ尊重しながら、高精細画像による世界各地からの利用を実現したことは高く評価されよう。

最後の質疑応答では、アダム・スミスの思想研究における蔵書の位置付け、アダム・スミス文庫を用いた思想研究、デジタル画像公開利用の現在におけるオリジナルのモノ資料がもつ意味、アダム・スミスと道徳との関係、アダム・スミスが生前に原稿を全て処分した理由、AI 技術を用いたアダム・スミス研究の新たな可能性など、さまざまな質問が行われた。その中で矢野氏が強調されたのは、資料の複製の可能性と不可能性についてである。技術次第で資料のテクストや図像などのいわばコンテンツ情報は複製が可能であるが、伝来や物的組成といったいわばコンテクスト情報は複製が不可能であり、原形を保持して修復が行われ、画像データによる公開利用が可能になったアダム・スミス文庫は、モノとしての蔵書から読み取れる情報は何かを考える格好の素材と述べられたことが印象に残った。ラテン語のアウラ（aura）という言葉は、ある人や物のあたりに漂っている独特の雰囲気、オーラの意味であるという。資料の保存と利用に携わる私たちが、モノ資料がもつアウラを後世の人々にいかに伝えることができるかについて、改めて考えさせられた今回の講座であった。

なお本講座の申込者数は 548 名あった。公開講座の模様は YouTube（https://youtu.be/63taUaqnn3U）でも公開されているのでぜひご覧いただきたい。

報告者:冨善一敏（東京大学経済学部資料室）

一高プロジェクト

映像制作メモランダム（12）

2022年2月7日

映像制作プロジェクトに関わるようになったのは去年の8月なかばのことだ。2022年3月完成を目指す映画制作の撮影を担当してもらえないかという連絡があり、そのすぐあとの8月末には撮影が始まった。撮影開始から7ヵ月が過ぎもうすぐ一つの映画作品として『籠城』の制作行為が象られようとしている。

撮影の現場に立ち合った者として映画『籠城』ができ上がるまでの過程を振り返ってみようと思うのだが、今もっとも不思議に感じられることは、当初は制作者たち自身でさえ作ろうとしている作品の全貌を摑みきれていなかったそのものが、数ヵ月の制作期間の過程で次第にかたちを現し、今や一つの映画作品として世に提出されようとしているという事実だ。私は確かに撮影の現場にいたにもかかわらず、いつどの時点で作品が今のようなかたちを持つに至ったのかを確定することはとても難しいと感じる。おぼつかない手つきで、手探りで、制作を進めていくうちに、いつのまにか作品がかたちをもって私たちの前に現れはじめた、という言いかたの方がよりこの数ヵ月の制作経験に合致するのではないかと思う。あらかじめ結論の見えている、収まるべき完成地点の予測できている、定められた範囲内でそつなくこなすべき間違えようのない安全な設計プランのある、『籠城』の制作はそのような映画制作ではなかったと思う。そして私は、このような映画制作のあり方はとても研究らしいものだった、と感じている。

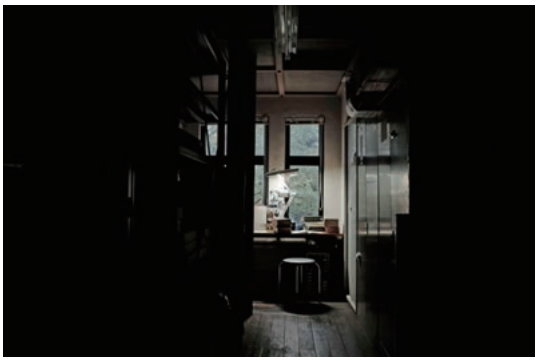
映画制作は最初、小手川将さんと高原智史さんの脚本の共同執筆、制作全体を記録する日限脩一郎さん、そして進行を管理するプロデューサーの髙山花子さんという4名の主要メンバーによって、映画の主題となる一高の歴史を調査する入念なワークショップを重ねながら進められていた。そこに撮影者の私が加わり、声の出演者の金城恒さん、安原由佳さん、永澤康太さん、新田愛さん、宮城嶋遥加さんが加わり、身体の出演者の乙幡亮さんが加わった。そして音楽の久保田翠さん、福田貴成さん、サウンドデザインの森永泰弘さんと、制作に参加する者が増えるたびに主題に対する議論が積み重ねられた。映画制作においてなされた議論の多くは、旧制一高に培われた閉鎖的な規範意識、それによって醸成された歴史を現在時に生きる私たちがいかに継承していくのかという問いのために割かれた。新しい参加者はこれまでなされたものとは異なる意見を提出したし、監督と脚本を担当する小手川さんはそのたびに深く再考し脚本を書き換え、こうした過程ゆえ映画はもはや誰か一人だけの思考や判断によって形成されたものではなくなっていった。

制作のための多くの時間は、対象に眼差しを向けること、声をきくこと、その声を頭の中で反芻すること、自分や周囲との対話によって生まれる思考のゆくえを見つめ、注意深く目の前にそれを並べてみること、として費やされた。たとえば8月当初、脚本は、主人公「わたし」の声を2名の男性の声が互いに自己の分身に語りかけるようにモノローグで語るという設定で書かれていたが、議論の末、声の出演者は男女の限定なく募集することになった。応募者18名の声を聞いた結果、制作チームは男性3名女性3名の声の出演者を選んだ。一人の男子学生の内省的な語りを男女混成の声で聞かせる手法をとることで、形式や規範

8月の駒場博物館でのテスト撮影時

に否応なく囚われてしまう社会的属性としての男性の弱さ、というこれまではっきりとは見えていなかった旧制一高を取り上げるうえでのもう一つの論点が、輪郭を持ちはじめることになった。読み合わせや撮影が行われるたびに、作品は当初持っていたかもしれない仮の輪郭を捨てながら、変形しつづけた。そして制作者たちは、一高の歴史を継承するあり方を問うこの映画の主題の延長線上に自らを歴史継承の当事者と捉えながら、研究者は研究において研究対象と向き合うことと個人の実存に向き合うことは極限的には分かつことができないものではないか、という問いさえも共有した。このような方法で『籠城』制作にかかわった者たちが行ったことは、たんに一本の映画を制作したのではなく、それぞれの研究領域で異なる問いを抱えた研究者たちを包摂する共同研究だったのだと思う。

映画制作という研究実践には、成果物が映像化されるという最大の利点があるだろう。『籠城』制作に関わった者たちの多くは映画制作に関してほとんど未経験であり、だから一般的な商業映画制作の作法から言えば撮影を当初の脚本通りに進めないという時点でありえないような失態を犯しているのかもしれないのだが、しかしその一方で多くは現役の研究者でもあった。この映画制作は、うまく形作られた映画作品を完成させることを至上命題としたのではなく、むしろ一つの映画を共同で作るという営みをとおして異なる領域の者たちが対話を繰り返すという、これまで試したことのない研究方法の探究でもあっただろうし、探究のなかで発見されるものによって前進する共同研究のためのプラットフォームとして実装されてもいただろう。だからこの研究実践においては、制作過程で「対話」によって編まれた時間の軌跡が像を結び映画作品となっていくのであり、それゆえこの映画にはその下層において研究の過程が記録されるのだと思う。



11 月の駒場博物館での本撮影時

報告者・写真撮影:一之瀬ちひろ
（東京大学大学院博士課程）

The 9th EAIHN Online Seminar

2022年2月8日

On 8th February 2022, the East Asian Intellectual History Network (EAIHN) hosted a talk by Annick Cossic (Université de Bretagne Occidentale, Brest, France) and Emrys Jones (King's College London), who presented the recently published book *La Représentation et la reinvention des espaces de sociabilité au cours du long XVIIIe siècle* ("The Representation and Reinvention of Sociable Spaces in the Long Eighteenth Century (Paris: Le Manuscrit, 2021)").

After opening remarks by the chair, Prof. Cossic, then Dr Jones presented the collection of essays and discussed its main features and results. Their talk was followed by a discussant's comments and questions, the presenters' response to them, and a lively discussion among the conference participants. The abstract of the paper is as follows:

Prof. Cossic presented the book series Transversales, which has run to 7 volumes to date, with an eighth volume in preparation. It stemmed from a regional research programme on eighteenth-century

sociability, which progressively opened up to scholars from many European countries (including Germany, Poland and Italy) and obtained EU funding. The peer-review process, the multidisciplinary aspect embedded in all volumes, and the increasing breadth of the international network of specialists, all ensure the highest level of expertise. Prof. Cossic also presented the "Sociable Spaces conference" which took place in Brest in 2019, which stemmed from this EU-funded programme on sociability and yielded scientific results that were partly published in *La Représentation et la reinvention des espaces de sociabilité.*

The book relies on notions of dynamic space and fixed place, a dialectic found in French theorists De Certeau and Deleuze (but questioned by some papers in the book). On that theoretical basis, the book examines the sociable identities constructed by, and performed in, sociable spaces such as theatres, public houses, coffeehouses, private houses, etc., meshing individual and collective dimensions. The eighteenth century, especially in Britain, was a period of reinvention of sociability, an aesthetic of novelty and the ideal of an open society pervading the influential cultural programme of Addison, Steele and other commentators. The book also discusses the ways in which new forms of sociability addressed class and gender, asking to what extent they opened up emancipatory vistas or reproduced and reinvented disciplinary structures.

Dr Emrys Jones proceeded to summarize the general findings, reviewing each chapter in turn. He warned in his introduction that there is no single, unified thesis to the book, and that sociable spaces were shot through with irony and contradictions. This was a way of announcing the variety of matters and treatments that render the book difficult to summarize but exciting. The different chapters comprise, among other topics, analyses of theatricality and performativity at the court in Versailles, in private (but in fact semi-public) theatres in England, and in the ritual of the *levée*, a much criticized but favourite practice in eighteenth-century London. A section on leisure practices insists on the re-creation of sociable places, and their negotiation by various social groups. Masonic sociability and homosocial spaces in Brighton raise issues of gender, while transactional forms of sociability at home gave some agency to élite women performing strategies to assert their identity. Other discussions bear on walking and spa sociability, which involved new practices born of the expansion of leisure time in urban centres. The third part of the book examined "transgressive sociable places: models and counter-models", in particular utopia as a space for the elaboration of counter-models of gender and class relations.

The presentation was extremely well prepared (underpinned by lively, efficient PowerPoint presentations) and the discussion energetic. Questions and remarks pertained, among other topics, to the possibility of real (non-utopian) spaces of counter-sociability, the Rousseauvian critique of alienating sociability, and aspects of perceptions of national models, including remarks on Adam Smith and sociability in Southern France.

Report by Rémy Duthille
(Université Bordeaux Montaigne, France)

連続公開イベント（全3回）

第1回　フランスにおけるジェンダー論争

2022年2月8日

2022 年 2 月 8 日、連続公開イベント第 1 回「フランスにおけるジェンダー論争」がオンラインで開催された。フランスの宗教社会学者セリーヌ・ベロー氏を招いた全 3 回のオンライン連続公開イベントの初回である。ベロー氏は社会科学高等研究院（EHESS）の教授で、フランスのカトリシズムを専門としている。EHESS は高等研究実習院（EPHE）に並ぶフランス宗教学の拠点の一つ。EHESS の宗教社会学者でカトリシズムの専門家といえば、ダニエル・エルヴュー＝レジェ氏の名前が日本でも知られているが、ベロー氏はエルヴュー＝レジェ氏の後任で、現在のフランス宗教学を牽引している人物である。

本連続公開イベントは、第 1 回が増田一夫氏（東京大学名誉教授）の科研（基盤 B「結婚の歴史再考――フランスの事情からみる（ポスト）結婚、生殖、親子、家族」）、第 2・3 回が伊達聖伸氏（東京大学准教授）の科研（基盤 A「西洋社会における世俗の変容と「宗教的なもの」の再構成――学際的比較研究」）の主催で開催され、EAA は全 3 回で共催を務めた。第 1 回ではベロー氏が「みんなのための結婚から生殖補助医療へ――2010 年代のフランスにおけるカトリックの「反ジェンダー」的動員の分析」と題して講演し、小門穂氏（神戸薬科大学准教授）と鈴木彩加氏（大阪大学招へい研究員）がコメンテーターとして登壇した。

ベロー氏はまず、2010 年代のフランスにおけるジェンダー論争を分析した。フランスでは 2013 年 5 月 26 日法で同性婚が合法化された。その前後には、同性婚の合法化に賛成する左派運動「みんなのための結婚」に対抗して、合法化に反対する右派運動「みんなのためのデモ」が組織され、カトリックが大きな役割を果たした。その後、ジェンダー論争は学校での生命倫理教育を舞台に繰り広げられた。そして近年では生命倫理法の改正に伴い、生殖補助医療を独身女性や女性同士の同性カップルに拡大することが、「父なき子」を生むとして右派の抵抗運動を巻き起こし、ジェンダー論争の新たな焦点になったという。

同性婚の合法化が焦点だった頃、カトリックはかなりの組織力を発揮していた。ベロー氏によると、このときカトリックの活動家たちは、カトリックに限らず、プロテスタントやムスリムを含め、同性婚に批判的な立場をとるさまざまな人びとを動員するとともに、右派の政治家との連携を強めることに成功していた。また、「子どもの権利」や男女の「自然」な結びつきを守るといった一見世俗的な大義名分を掲げて、みずからの言説のカトリック色を薄め、信仰者に限らない広範な人びとから支持を得られるようにしていた。さらに、カトリックの内部にも本来多様な意見があるが、カトリックの活動家たちは保守的な教会関係者と協力して、表面的には統一性のある右派運動を作りあげることができていたという。

だが、生殖補助医療に焦点があたった頃、カトリックの組織力は以前に比べて小さくなったとベロー氏は指摘する。実際、同性婚が焦点だった頃には、数多くの政治家や聖職者がデモ隊に加わったが、2019 年 10 月 6 日に企画された大規模デモに、そうした面々はほとんどみられなかった。ベロー氏は、カトリック信徒間での「みんなのためのデモ」に対する失望や、ジェンダー論争を扱うことに対する疲れがその背景にあると主張する。運動組織としての「みんなのためのデモ」は、同性婚が合法化されてからは次第に硬直化していたし、カトリック教会の現場では、ジェンダー論争が信徒間に軋轢を生じさせていた。さらに、同性婚や生殖補助医療の拡大に強く反対する一部の聖職者が性的スキャンダルに関与していたことも、カトリックの「反ジェンダー」運動が求心力を失った大きな要因であるという。

現代のフランスにおけるカトリシズムの実態について、これらの事例からは何がわかるのだろうか。ベロー氏はまず、フランスのカトリックはたしかにマイノリティ

化しているようにみえるが、それでも比較的特権的な社会的地位にあり続けていると指摘する（カトリックのマイノリティ化については第3回の報告を参照）。実際、カトリックはジェンダー論争のなかで、フランスで長年培ってきた活動のノウハウや人的繋がりを利用して、有力な社会的アクターとして存在感を発揮することができた。不確実性に悩む現代社会において、カトリックは確実性、伝統、アイデンティティなどの担い手として立ち現れているという。

次にベロー氏が指摘するのは、カトリック内部の多様性である。同性婚に関する2012年から2013年の論争では、保守的なカトリックが動員力を発揮したために、カトリック内部の進歩的な勢力の存在がみえにくくなっていた。生殖補助医療をめぐる2019年前後の議論では、カトリックの保守的な動員力が衰えたようにみえるが、これはカトリックそのものが衰退したからというより、進歩派のフランシスコ教皇が生まれたことも手伝い、カトリック内部で進歩派の声が大きくなったからであるという。現代のフランスのカトリックは決して一枚岩ではなく、その内部に多様性を抱えているというのがベロー氏の主張である。

コメンテーターの鈴木氏は、日本の事例として、2000年代以降の「バックラッシュ」現象を紹介した。鈴木氏によれば、日本では1990年代から、「慰安婦」問題や選択的夫婦別姓をめぐり、すでに「反ジェンダー」の潮流が生じていた。だが、それがバックラッシュと呼ばれる社会現象に発展するのは2000年以降のことだという。きっかけとなったのは、1999年に制定された男女共同参画社会基本法で、男女の社会的平等を目指すこの基本法に対して、右派は「男女の性差をなくそうとしている」「家庭の崩壊につながる」などとしてネガティヴ・キャンペーンを張った。さらに、このバックラッシュは教育の場にも影響を与えており、とりわけ避妊方法などを教える性教育がバッシングにさらされているという。

続いて、コメンテーターの小門氏は、日本における生殖補助医療の現状を詳しく紹介したあと、生殖補助医療における「自然」という言葉の使われ方についても注意を促した。小門氏によると、日本では生殖補助医療に対して「自然」でないという批判が向けられることがある。だが同時に、男女のカップルの場合、子どもができることが「自然」とされる。ここには、子どもができることが「自然」とされながら、そのための生殖補助医療が「自然」ではないと批判されるというねじれがある。小門氏はこのように、生殖補助医療やジェンダーに関する日本の言説では、「自然」という言葉が論者の価値観によって、その内実をさまざまに変化させながら、ある種のレトリックとして用いられる傾向にあることを指摘した。

以上、2月8日の連続公開イベント第1回「フランスにおけるジェンダー論争」の様子を簡潔に報告してきた。社会が目指す理想としてのジェンダー平等と、それに抵抗する「反ジェンダー」的言説の対決は、遠いフランスだけの話ではなく、現代の日本がまさに直面していることでもある。ベロー氏の議論からは、このアクチュアルな問題を通して、当該社会の宗教状況を社会学的に分析する方法を学ぶことができた。鈴木氏、小門氏との講演後のやりとりからは、日仏での論争のあり方の異同や同時代性もみえてきた。残る第2回「フランス・カトリック教会と性的スキャンダル」と第3回「フランスにおける宗教的状況の特殊性」の報告も、併せてEAAのホームページにアップされる予定である。全3回の連続講演会における議論はどれも有機的に繋がっているため、併せてご覧いただきたい。

報告者:田中浩喜（東京大学大学院博士課程）

話す／離す／花す（17）

断片の詩学、反響する声、高揚の効用

若澤佑典（EAAフェロー）

2022年2月8日

かれこれ10年以上、「文」と「声」に携わる世界で生きている。30歳を過ぎた今でも、毎年、鮮やかな驚きがある。それは「おお、こんな本が世界にはあったのか！」だったり、「おお、こんな視点でものを語れる分野があるんだ！」でもあり、さらには「おお、こんなことを一緒に考えられる／話せる人が、他にもいたんだ！」という遭遇の喜びである。コロナの状況下ではあるが、図書館で本棚の前に立つたび、研究棟で同僚と話すたび、そして教室で学生さんの言葉を受け取るたび、「これまで世界に存在していたはずだが、昨日まではまったく気づいていなかった」こと・ものに、度々ハッとさせられる毎日である。日々、何かしらに驚いているので、血圧は高めだ。

新たな場で研究を始め、そろそろ1年である。文学部で「リベラル・アーツ」を担当するという、なかなか不思議な仕事であるが、その自由闊達な空間が私の性に合っている。（専攻を決める前の）学部1年生さんたちと、一緒に英語を読んでいく。文学部という学びの場を、授業テクストの選択、そして読みの実践から、どう俯瞰的に体験してもらうか、1回1回の授業が勝負である。また、英語リーディングから各専門分野にいたる道をたどりつつ、専攻分野に分かれる前の「文学部まるごと」って何なのか、俯瞰的に探っていく作業は、もはや「ことばの森の探検隊」の気分である。本職のなかで、以下のことを自己規範・理念としている。

（1）シラバス、そして授業タイトルが、私と学生さんをつなぐ最初の窓である。だからこそ、シラバスは「未来へのお手紙」だと思い、一筆入魂する。また、せっかくの場なので、シラバス文はどこか愉快に、文学部の楽しさが伝わるようなものに。情報の入れ物や要約であることを越えて、授業タイトルは「こんな授業なのかな〜」と学生さんを想像に誘う、チャーミングなものを「頭を振り絞って」ひねり出す。

（2）英語の授業を、単純作業を反復させる「苦役の場」にしない。テクストを読むことは、テクストと考えることであり、思考すること（への傾き）は押し付けの作業では不可能だ。私ができることは、教室で私自身が「あーでもない、こーでもない、これ何なんだ？？」と、テクストを前にして、あたふたする姿を見せること、そして学生さんのウィークリー・コメントを目を皿のようにして読んで、「ここ、とっても面白い！あなたのこの論点について、もっとここを聞いてみたい」と、一緒に「面白がりながら」問いを発することである。一言で言えば、英語の授業教室を「協働探求の場」にしていく、ことである。

（3）読むこと（もっと言えば「ガクモンすること」）を、日常生活のなかへと放り込む。「動いて」読み、「歩いて」考える。必要があれば教室で地図を広げ、文章のイメージを絵に描き、英文にBGMやキャッチコピーを付け、課題作成で舞台やドラマにリメイクしてもらった。「英語授業とはこういうものだ」という固定観念を、適度にユサユサしてみる。「こうではない、別のやり方があるかもしれない」という視線を一緒に探ってみる。英語授業とは、それ自体が「創作」行為である。

（4）私自身が「答え」をもたないこと、これから考えたいことを、授業の素材とする。そのために、私自身が英語のフロントラインで呼吸するような、そういった研究者として生き続けられるよう、日々励む。学生さんたちにとって、「難しいこと・わけわからないこと」が「理解できないから、オモシロい」に変換されるような糸口を、絶えず探していく。学生さんとの会話で新たなテーマと遭遇したら、関係する本棚のコーナー、

出版サイトにチラッと目を通す。ハッとするような授業内の「偶然」を呼び込むためには、必然を情熱的に尽くしきらねばならない。

上記の四か条は、春に「よし、これからこの命法で行くぞ」と決めたというより、授業をやりながら「自分が大事にしているものって、なんだろう」と考えながら、内なる衝動を半年ほどかけて言葉に彫刻していったものである。ちなみに、学生さんに話す際は、「ウィトゲンシュタイン・ティーチング」という妙な命名をして、上記の説明をしている。ウィトゲンシュタイン（研究）の関係者からは、「ウィトゲンシュタインと関係ないぞ」と怒られるかもしれないが、ナポリと関係ないスパゲッティ・ナポリタンという命名もあるので、どうかお許しください。学部時代に読んだ、ノーマン・マルコムの『ウィトゲンシュタイン：思い出の記』が大変印象的だったのです。

実際に私の授業がどんなものであったか、学生さん一人ひとりの受け止め方があるだろうし、「一緒に学期末にたどり着いたぞ！」という共有体験は、第三者に向けて客観的に書こうとすると、「本当に大事な部分」がスルリ、スルリと逃げ出していく。振り返らずに、2022年度へと進んでいくことにしたい。教室の一人ひとりが何を考えていたのか、どんな感じを持っていたのか、究極的には分からない。学生さんは、他者という謎と秘密の源泉（？）なのだから。ともあれ、私自身はおおいにインスピレーションをもらい、教室の中で飛んだり跳ねたりしながら（比喩ではなく、ソーシャル・ディスタンスを維持しながら、実際に動き回って授業をしていた）、あれこれ一緒に考えることができ、授業メンバーの一人ひとりに感謝している。果たして5年後、10年後に自分がどういった研究者になっているのか、予想はつかないが、2021年に感じたことを、どこかみずみずしく「大事に大事に」保っていきたいと思っている。シラバスが「未来の学生さんへの手紙」であるとするならば、この文章は「未来の私に対する檄文」とでも言おうか。

ブログ・コーナーのタイトルになっている「離す」だが、味わい深い言葉である。大学のキャンパスは悠久の時が流れているようで（実際、そういう部分もあるし、それが良さであるところも大だが）、いろんなことが流動変化している。「私」自身も「今の私」を離れて、未知へとさらに分け入っていかなければならない。離れることで「自分の心のひきだし」に眠っていたものが、ハタと目覚め、新たな輪郭をなして「花」していく。「水曜どうでしょう」のテーマソングではないけれど、そんなふうに、そんな風に生きていきたいものだ。こうした自己の中の断片を、場の引力の中で並べつなぎ合わしていく営み、これを「断片の詩学」と私はよんでみたい。破片の中に未来があり、それを拾い集める「私」自身が、反響する声たちの過渡的な生成物なのだから。

子供たちの声が響き渡るキャンパスから、
101号館という静かな山に向けての「ヤッホー」を込めて

写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

Winter Institute Day 1, Prof. Maria Adele Carrai (NYU)

2022年2月9日

Professors from the University of Tokyo, New York University, and the University of Bonn delivered a series of special lectures on February 9-10, 2022 on the subject of “Value Values, Social, Humans” in the field of East Asian liberal arts.

The first speaker was Professor Maria Adele Carrai from New York University. The title of her presentation was “The Rise of China and Values and Values

Professor Maria Adele Carrai (NYU)

in the International Community." Her analysis of values was characterized not from the perspective of the individual, but from the perspective of the society/state as a whole. Through her examination of the many types of dominant values throughout history (e.g., nationalism in the 1910s, fascism in the 1930s, communism and liberalism in the 1960s), we are impressed by several facts. First, there are no values that can be shared by all individuals in any era, which means that each value is extremely limited and that the dominant value is merely the result of the universalization of a particular restricted value. Second, values are constantly changing and evolving. For example, Raymond Aron claimed in 1966 that the most important value was "living together relatively well" as "the minimum conditions for coexistence," while Hedley Bull noted in 1977 that certain common goals included "national and social protection," etc.

It seems that we cannot talk about values without a specific context. Moreover, in addition to the content of values, the question of who determines international values is very much at the core of the exploration of the nature of values. The important element in this respect is the power of the state/society, which has a decisive control over values and the hierarchy between different values. Is it then still possible to discuss the meaning of values per se? As Professor Takahiro Nakajima's conceptualization of the relationship between value and power shows: on the one hand, value is undoubtedly supported by power, yet on the other hand, it should overcome or transcend power and achieve its own process of universalization. In this sense, therefore, we can acknowledge the intrinsic meaning of value. This so-called autonomy of values also provides the possibility of treating them as a philosophical problem.

In current international relations, because China is a rapidly rising power, China's values have become one of the focal points of international attention. It is recognized that China is now transforming its values into a sort of superior model of democracy, emphasizing public satisfaction. It is worth noting, however, that this shift is not an entirely new transformation, but rather a relativization of existing values. Furthermore, when talking about existing Chinese values, especially Confucian values, we should not reduce them to a few key words (e.g., benevolence, righteousness, *wangdao* 王道), as it has had a number of variants in the Chinese historical tradition. In trying to establish the values of a state or society, "soft power" (as opposed to "hard power," e.g., military, violence) is often mentioned. What kind of culture, rather than K-pop, can truly represent a country and exert a profound impact on international relations is a task we need to think about, which is also the open-ended question raised at the end of this talk.

Report by DING Yi (EAA Research Assistant)

Winter Institute Day 1, Prof. Noburu Notomi (UTokyo)

2022年2月9日

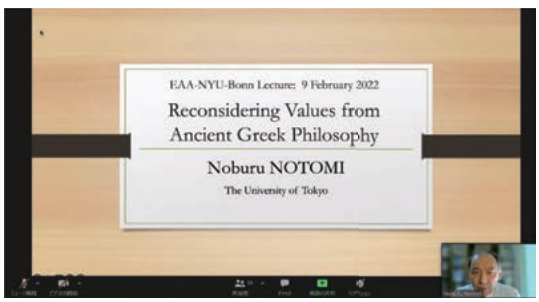
"Value, Values, Social, Humans: Reconsidering Values from Ancient Greek Philosophy"

On February 9 and February 10, 2022, the two-day lecture series "Value, Values, Social, Humans" was held online. In the second period of the first day, Professor Noburu Notomi (University of Tokyo), a specialist in philosophy and Western classics, talked about the values that existed in Ancient Greek philosophy.

Modern and ancient notion of "values"

Today, we think about values in various terms: social, ethical, political, economic, and so on. From the modern perspective, values are subjective and culturally or individually relative. However, according to Professor Notomi, values in ancient civilization were different from today's. Values at that time were real, objective, absolute standards. In Ancient Greece, "good," "just," and "beautiful" were three major values.

How did the Ancient Greek philosophers discuss values? Professor Notomi gave four examples of Greek philosophers: Socrates, Plato, Aristotle, and the Stoics. Socrates and Plato basically believed that goodness, justice, and beauty are intrinsic values, like medicine for the soul. But Aristotle tried to treat values against Plato. Aristotle thought that values have different meanings and are judged differently in each field. Namely, values are not transcendent, but inherent in particular things. Based on this, he categorized various values.



Professor Noburu Notomi (UTokyo)

What can we learn from ancient thought?

In conclusion, Professor Notomi presented five notable features of classical thought: 1) Values are not separate from reality and facts: they are a real part of the world; 2) Internal values are more important than external values and objects; 3) Relative, temporal, and contingent things are based on unchanging, absolute, and necessary things; 4) There is a hierarchy of values: more fundamental values ground other values, and God is the basis of all values; 5) Human values and happiness are embedded in nature and the universe. These features of ancient thought are differed from our modern perspective, but some are very suggestive for thinking about the various values in today's society.

Implications for modern society

In the Q&A session, the lecturer and students discussed some essential topics related to Ancient Greek philosophy's implications for modern society. How can we understand others? And how is our notion of values historically formed?

Report by Moeka Ishii (EAA Research Assistant)

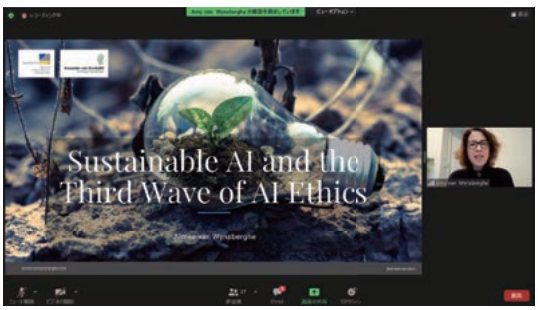
Winter Institute Day 1, Prof. Aimee van Wynsberghe (UBonn)

2022年2月9日

The lecture by Professor Aimee van Wynsberghe, "Sustainable AI and the Third Wave of AI Ethics," provided an overview of existing issues related to ethics and artificial intelligence and new issues to be considered. It informatively introduced currents in AI ethics and provided deep insights into issues that we should all consider, based on Professor van Wynsberghe own experience.

Professor van Wynsberghe sees ethics as "resources." She originally studied cell biology but was faced with the problem of introducing robots into the medical field. This would significantly affect patients, nurses, and doctors, which prompted her to study ethics. Her motivation was to "translate" ethical and philosophical concepts for practical use, rather than discuss them in the abstract. "Ethics should be useful" is her motto.

After showing her understanding of ethics in general as the study for a good life, Professor van Wynsberghe introduced the waves of AI ethics. The first wave was concerned with "AI as super-intelligent." People saw AI as a monstrous invention and feared for the future of humankind. The second wave was more subtle, focused on AI's detailed design and application. It encompassed the ethics of collecting and labeling data, privacy, transparency, and trustworthiness in AI. The discussion in this wave regarded ethics not as an afterthought, but as part of design.



Professor Aimee van Wynsberghe (UBonn)

As the title of her lecture indicated, the third wave was Professor van Wynsberghe's main focus. This wave has examined "sustainable AI" in two senses: AI *for* sustainability and sustainability *of* AI. Since AI has become a social infrastructure, we should use it to preserve social sustainability *and* pay attention to *sustainably* using it. For example, scholars and policymakers used AI for forecasting and preventing forest destruction at the recent United Nations Climate Change Conference. It is, of course, effective. However, running AI to make such big predictions consumes a massive amount of energy and emits lots of CO2. As such, it is not self-evident that we can develop and run AI to its fullest extent: we must consider the cost of using AI. This problem also encompasses labor exploitation in mining minerals for AI, land and sea pollution, and waste from machines. More and more of enterprise is involved with developing and using AI, and there is not enough concern about its cost. The vocabulary surrounding AI is often ethereal and fantastic, but we must also pay attention to its physical conditions.

The discussion with the students covered a wide range of issues such as national security, democracy, and "translating" concepts. Professor van Wynsberghe answered these carefully and in an encouraging way.

The lecture recognized the many issues we have to tackle, but Professor van Wynsberghe seemed confident that this was possible if we work together. Such an attitude may well be related to her view of ethics.

Ethics is never a checklist but concerns the process of our lives and society. We live together, and we can pursue a better life. This fundamental hope may be the keystone of ethics.

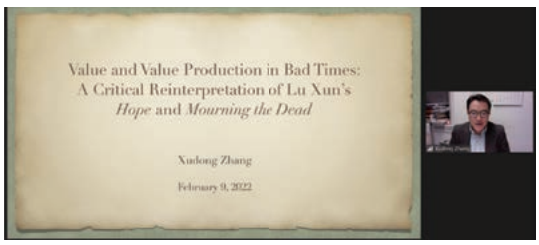
Report by MIYATA Akihiro
(EAA Research Assistant)

Winter Institute Day 2, Prof. Xudong Zhang (NYU)

2022年2月10日

On February 10, 2022, the second day of lectures on the theme of value and values, we welcomed Professor Xudong Zhang from New York University. Using Lu Xun's works "Hope" and "Mourning the Dead," both written in 1925, Zhang reinterpreted value and value production in bad times from a unique perspective.

The period from 1923 to 1927 was a time of crisis and transition in Lu Xun's literary creation. During that period he consciously turned to the essay, thus starting his second literary life. "Hope" as a prose poem and "Mourning the Dead" as a short story are both, in Zhang's opinion, essays by Lu Xun, which means that what Lu Xun said through the mouth of the narrator was actually his own voice. Lu Xun's depiction of darkness and emptiness in these two works hints at his attitude towards hope and hopelessness. Actually, what Lu Xun wanted to convey is not so much about hope or hopelessness, but about the "shield of hope" as vanity. And the conception of hope by Lu Xun was contrasted by Zhang with Hegel's definition of the world and Kafka's definition of hope. They all coincidentally recognize that "darkness" and "emptiness" is the general state of being.



Professor Xudong Zhang (NYU)

So how does this relate to value? Zhang argues that the mixture and duality of the two genres and styles create the allegorical space in which the value of Lu Xun's writing resides and the production of value operates and sustains its own creative and critical energy. It can be said that writing is Lu Xun's reasonable response to the unreasonable circumstances. Zhang also adds that the decision to engage with darkness and emptiness, to stay in the fight, defines Lu Xun's writing as a literature of hope, albeit constructed negatively, which exists in the here and now and is something attainable in this life as a living value and active production of value vis-à-vis hopelessness and worthlessness.

In today's world of value diversification, people's understanding of value moves to a higher spiritual realm. Zhang goes further in this line by pointing out that value production is more important than value itself, as value production is active, an action that sustains value and values.

At the end, Zhang summarizes Lu Xun's literary creation in the light of Hegel's philosophy of world history. Lu Xun's way to fight against emptiness and hopelessness was to keep writing. Writing itself does not bring happiness, but it was not happiness he chose but exertion, conflict, and labour in the ser-

vice of his end. And even when he reached his goal, peaceful enjoyment and happiness was not his lot. His action was his entire being.

In the face of the coronavirus epidemic, it is inevitable to move towards a situation of vanity and hopelessness. Zhang offers us a valid way of living, which is to continue to "step into a new life," "re-invent the way, " and strive strenuously—even "at all cost."

Report by TENG Shujun
(EAA Research Assistant)

Winter Institute Day 2, Prof. Takahiro Nakajima (UTokyo)

2022年2月10日

On February 10th, Professor Takahiro Nakajima delivered an online lecture titled "The Light and Shadow of Democracy and Capitalism."

Professor Nakajima began the speech with a review on the pandemic. According to him, one major impact of the pandemic is that it makes people reflect on the traditional dichotomy of democratic and non-democratic states. The bad performances of most so-called democratic countries during covid cast doubts on the advantages usually attributed to this modern system. However, Professor Nakajima reminded us of the short-sightedness of dividing countries according to simple binary oppositions. In the case of Japan, while it is a mature democracy, democratic practices by the people in recent years are far from satisfactory with low voter turnouts and malfunctioning local self-governance. This is caused by a variety of reasons such as the division of local districts and the overall design of the voting system. To make things worse, new challenges have emerged especially in the field of internet. Big IT companies, represented by GAFA, control public information but do little to contribute to the public interest. Not everyone enjoys the same right of access and people's democratic rights are thus infringed. Based on these observations, Professor Nakajima a new understanding of capitalism and democracy that takes into consideration the actual needs and desires of each individual.

Professor Takahiro Nakajima (UTokyo)

This speech resonates with current academic trends that try to find new ways to analyze capitalistic societies. In Japan in particular, researchers like Kohei Saito with his concept of "Das Kapital im Anthropozan" inspired a lot of discussion. Their main argument is that attempts to create more eco-friendly ways of production could not completely change the current situation. What we need is to transform the capitalistic system. Ideas like growth and marketization should be given new interpretations as the first step toward the realization of that vision. Professor Nakajima in his speech pointed out a practical aspect. He reminded us that we need to pay more attention to the inter communications of disciplines as

well as the cooperation between universities and the business community, for this is the only way to challenge the established boundaries and make a difference in the real world.

Due to the limited time of the event, Professor Nakajima could not cover all aspects of this issue. For instance, in his discussion of big IT companies, his main concern was how they restricted people's access to the public sphere. However, in recent years, we also witnessed the rise of internet populism. In this case, the problem seems not to be the lack of citizens' participation in politics but their excess, especially those based on mis information. What roles should the IT industry play and how they could bring about the future envisioned by scholars are questions that deserve further consideration. We should not only aim for a return to normal after the covid pandemic, but also question what and look for new possibilities.

Report by HUANG Qiuyuan
(EAA Research Assistant)

Winter Institute Day 2, Prof. Markus Gabriel (UBonn)

2022年2月10日

On February 10, 2022, Professor Markus Gabriel (University of Bonn) gave a lecture online as the last session of this year's EAA Winter Institute. Based on his current project in "The Foundations of Value and Values" program at the New Institute, Hamburg, the lecture centered around the idea of "ethical capitalism." Professor Gabriel addressed various questions relevant to this idea: What would an ethical capitalism look like? What sort of social activities are required for it? What kind of value commitment does it involve?

Professor Gabriel began by pointing out that our social activities are not just complicated in the sense of being incomputable and unpredictable, but also complicated on a higher level because of the multifarious meshwork of value systems—what he calls "normativities"—in which they are situated. We cannot reduce the complexities of normativities, because a recourse to a simple normativity, as is typical in populist politics, would itself end up adding to those complexities. History is an open-ended proliferation of normativities, and there is no value-neutral point of view to address social issues and changes.

Professor Markus Gabriel (UBonn)

Taking these complexities seriously, however, does not force us to be skeptical about the meaning of being committed to any value, or any theory of values whatever. On the contrary, Professor Gabriel moved on to sketch his theory of "new moral realism," building on the distinction it made between value representations, such as moral judgments, and values themselves, with which we discern "correct or incorrect executions of capacity."

With this realism of values and recognition of val-

ue complexities, Professor Gabriel emphasized that we can think of an "ethical capitalism," in which social activities are committed to doing good, but that we need a heuristics to find objective values we should cherish. Here he finds an essential role for humanities and social sciences: to bring their knowledge about humans, or human becoming, to form value-laden ethical perspectives on social complexities.

Active discussions concerning various topics followed the lecture. Professor Wang Qin (University of Tokyo) raised a question about the uneasy relationship between politics and values, and one student asked how we can philosophize values and yet avoid being politicized, or used for political purposes, when conflicting normativities are always being politically mobilized. Professor Gabriel, while fully recognizing the problem, suggested that we should understand the relationship between philosophy and politics not in terms of traps and dangers, but in terms of an ongoing dance and entanglement. Philosophy cannot be entirely free from politics, but can always seek to step back and find a universal ground from which to rethink the situation. This image of a "dialectic" dance of philosophy and politics might be, as I take it, an important suggestion for philosophy in East Asia with all its political conundrums.

The lecture was followed by a brief wrap-up session in which each participant from Peking University and the University of Tokyo one by one expressed their thoughts and feelings on finishing the two-day program. Finally, Professor Nakajima concluded the EAA Winter Institute with one simple message: keep thinking.

Report by UEDA Yuki
(EAA Research Assistant)

EAAシンポジウム

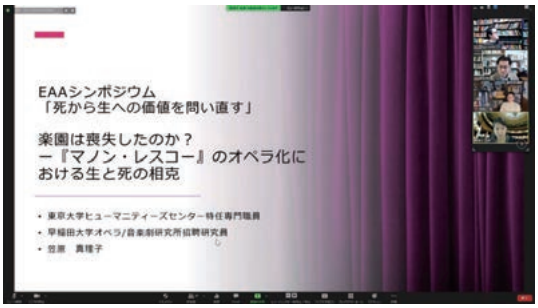
死から生の価値を問い直す

2022年2月11日

2022 年 2 月 11 日（金）日本時間 15 時より、EAA シンポジウム「死から生の価値を問い直す」を開催した。これは人間の生と死に焦点をしぼり、その「価値」についての再考を試みるものである。当日は三浦隼暉氏（日本学術振興会特別研究員）と笠原真理子氏（東京大学ヒューマニティーズセンター特任専門職員、早稲田大学オペラ音楽劇研究所招聘研究員）のお二人をスピーカーにお招きした。

三浦氏はライプニッツを中心に近世哲学や生命思想史を研究されており、「生きた宇宙の鏡はいつ滅

三浦隼暉氏発表スライドより



笠原真理子氏発表スライドより

上段：左から柳幹康氏、三浦隼暉氏
下段：左から一色大悟氏、笠原真理子氏

びるか？：ライプニッツ的世界における生と死の可能性」という題目でご発表いただいた。三浦氏の発表は、今日力を持つ死の語り――科学技術的に人の死を判定すること――からこぼれ落ちた語りが存在するのではないかという問いに端を発するものである。三浦氏はまず、今日的な死の語りの背後に「死の私的所有」という観念が存在していると指摘したうえで、その観念が19世紀初頭に先鋭化するまでの流れを概観した。それは死を身体的側面のみに即して語る流れであり、その過程で失われた魂を含む死の語りを掘り起こすことで、今日とは異なる死の語りが探究できる。そこで三浦氏はライプニッツの議論を参照し、彼が強調する三人称的同一性（他の人々により規定される同一性）に着目したうえで、一人称的ではなく他者に開かれた道徳的な死の語りの可能性を、科学技術的なものに局限された死とは異なる側面として描き出した。

笠原氏はオペラ、ミュージカルを研究されており、「楽園は喪失したのか？：『マノン・レスコー』のオペラ化における生と死の相克」という題目でご発表いただいた。『マノン・レスコー』は悪女小説の先駆と称されるもので、1731年に初稿、1753年に決定稿が出版された。早くから大反響を呼び、今日にいたるまで戯曲・オペラ・バレエ・映画など様々なジャンルにおいて約50もの作品が制作されている。笠原氏はこのうち原作、およびオペラ作品1点（1884年マスネ作曲）を取り上げ、以下のように指摘された。すなわち、原作ではマノンの悪女・聖女としての両面性が描きだされており、オペラはそれを継承しつつアレンジを加えている。そのアレンジのうち注目すべきものとして、女性の社会進出にともない流行したファム・ファタール（男性に悲劇をもたらす運命の女）のイメージがオペラに採り入れられていること、原作では新大陸アメリカが理想郷として描かれていたのに対し、フロンティア消失が間近に迫った19世紀末のオペラ作品では楽園アメリカの話が削除されていること、オペラではマノンの死が自ら望んで得た救済とされていることなどがある。以上の指摘をしたうえで笠原氏は、その後のオペラ作品を複数紹介し、宗教的救済を示す必然性が薄れる現代においては、「救済」そのものの必要性を疑ったり、その新たな意義づけを模索するなどの新たな動きが見えると論じられた。

以上のご発表の後に、コメンテーターの一色大悟氏（東京大学大学院人文社会系研究科助教）より、以下2点のコメントをいただいた。

第一に、2氏の発表の内容を要約・架橋し、「死から生の価値を問い直す」というテーマのもとでともに議論する一つの場を構築していただいた。一色氏は、三浦氏の発表を「「死の私的所有」に対置される「死の共有」の可能性を理論の次元で示したもの」、笠原氏の発表を「劇場という場において「死の共有」が行われている具体例を示したもの」とまとめたうえで、「人間には、公共の次元において一定の価値をともなって生き、死ぬという語りがありうること、そしてそのような公共的な生死は、現代において生物としての科学的生死によってしばしば覆われてしまっているとし

ても、今なおすくい取られるべき意義があり、かつすくい取られてきた」と述べられた。

第二に、近代日本における仏教の事例を導入することで、両氏の発表を東アジアへと更に架橋してくださった。一色氏は仏教教理における死を3種類――(1) 特定の個体が迎える死、(2) 輪廻において次の生につづく死、(3) 輪廻から解脱する覚者の死――に分類したうえで、近代日本の仏教学において輪廻の忌避にともない第二の死の語りが力を失ったことが、戦時教学の死の語り――国のために自己を擲つ軍人の死を (3) 覚者の死と結び付ける説――の成立につながった可能性を指摘された。

その後、一色氏および聴講者の方々から寄せられた数多くの質問・コメントをめぐり、非常に活発な議論がなされた。その詳細については後日、別に機会を設けて紹介できればと愚考している。また当日は司会の柳の不手際で、予定の時間を大幅に超過してしまったが、それにもかかわらず多くの方に最後までお付き合いいただいた。この場をかりてお礼とお詫びを申し上げます。

報告者:柳幹康(東洋文化研究所)

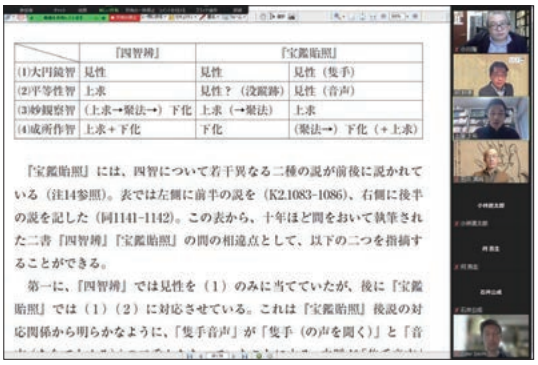
第8回 東アジア仏典講読会

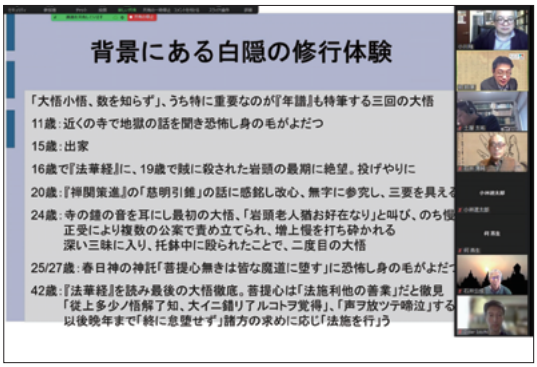
2022年2月12日

2022年2月12日(土)日本時間15時半より、第8回東アジア仏典講読会を開催した。この読書会は、禅を中心に仏教の研究を行っている日本・中国・韓国・フランスなど各国の研究者が集い、文献の会読や研究発表・討論を行うものである。今回は前回に続き、柳幹康(東洋文化研究所)より白隠の実践体系について、以下の2点の報告がなされた。

第一に、白隠にとって自利(自身を利すること)と利他(他者を利すること)は相補的な関係にある。まず利他のために自利が必要となるのは、自身の悟境を高めることによって、他者に施すべき教法の真意を見抜く力と、他者の機根を弁別する力が養われるからである。一方、自利のために利他が必要となるのは、他者の救済に邁進することで、迷いの根源である我執を除くことができるからである。利他を助ける自利と、自利を助ける利他との双方を倦まず弛まず行い続けていくことこそが、白隠の考える理想的な実践である。

第二に、白隠の実践体系を構成する三つの要素(見性・自利・利他)は、白隠がその生涯で得た三種の悟りと密接な関係にある。すなわち、(1) 白隠自身は24歳の時に無字の公案に参究したことで最初の大悟を得ており、後進の指導に当たっては無字に参究することで見性(最初の悟り)を得るよう求めている。(2) 白隠自身は24歳の時に師の正受に複数の公案により責め立てられて2度目の大悟を得ており、後進の指導に当たっては同様に複数の公案により自利(悟





参加者より様々な質問が提起され、活発な意見交換が行われた

境を更に練り上げる上求菩提）に進むよう求めている。(3) 白隠自身は42歳の時に3度目の大悟を得て法施（教法により他者を救済すること）の重要性を徹見しており、後進の育成に当たっては、利他（教法により人々を救う下化衆生）に邁進するよう求めている。つまり白隠が構築した実践体系とは、自身が歩んだのと同じように人々にも正しい実践の道を歩ませようとするものなのであった。

これに対し参加者より様々な質問が提起され、活発な意見交換が行なわれた。ここではそのうち白隠の思想の独自性を考えるうえでも、また仏教思想の展開を考えるうえでも重要となる「自利と利他の関係」に関する議論を取り上げたい。今日の仏教においては、自利と利他は鳥の両翼、車の両輪のような関係で、双方を兼ね備えるのは当然のことであると言われるが、かつてシュミットハウゼン氏が論じたように両者の関係はそのような単純なものではなかった。仏教の開祖たる釈尊は、己の苦を克服するために出家修行し、悟りを得た当初は、その体験を他者に伝えることに消極的であったと伝えられる。後には釈尊の目的は最初から一切衆生を救済する利他にあったという伝承も生まれ、そのために修行に勤しむ釈尊の開悟前の姿を模範にとる大乗仏教ではとりわけ利他行が重視・強調されたが、自利と利他の関係を整合的に説明したものは殆ど見当たらない。そのようななか白隠は独自の探究を続け、その果てに次のような独自の理解に行き着いた。すなわち、「利他の実践によってのみ迷いの根源である我執を除くことができ、それによって始めて自利が完成する。利他を行なわないのであれば、それは“自分さえよければよい”という我執に執われている証拠であり、その我執を除去しない限り人は輪廻を繰り返し苦しむこととなる」というのである。

現代において「輪廻」の説は必ずしも皆に是認されるものではないだろう。しかしながら、「他者のために尽力すること以外に我執を克服する道はなく、我執を除かない限り人は幸せになることができない」という白隠が到った結論は、今日もなお傾聴すべき重要な問題に関わるものであるように思われる。

報告者:柳幹康（東洋文化研究所）

EAAワークショップ

女性のいない民主主義と「K-フェミニズム」文学の越境

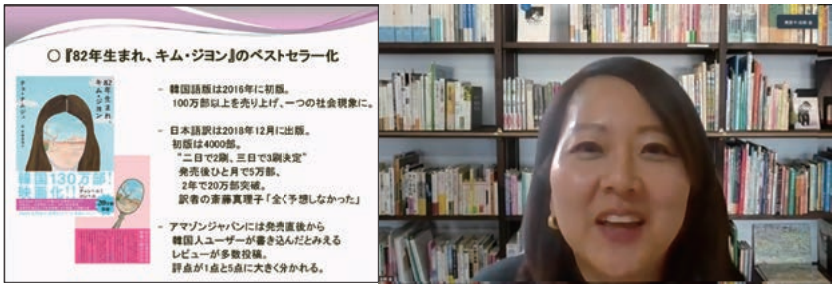
日本における『82年生まれ、キム・ジヨン』の翻訳受容現象を中心に

2022年2月17日

2022 年 2 月 17 日、EAA オンラインワークショップ「女性のいない民主主義と「K- フェミニズム」 文学の越境――日本における『82 年生まれ、キム・ジヨン』 の翻訳受容現象を中心に」 が開催された。 現代社会における重要なテーマの一つであるジェンダーイシューについて EAA としてどのように考えることができるのか、 その問いを問うための糸口を模索するために企画された。 第一弾として、金志映 （キム・ジヨン、淑明女子大学校） 氏と高榮蘭 （コウ・ヨンラン、日本大学） 氏をお招きし、表題の現象を考える時間を持った。

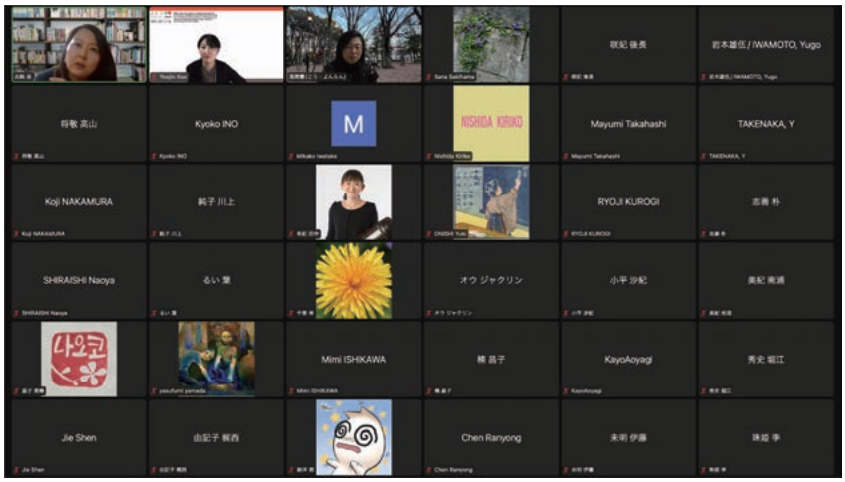
まず、 金志映氏による講演が行われた。「女性のいない民主主義」 と指摘されてきた日本政治・社会に対して、 金氏はその現状を紹介した。 政治領域において政治家や高級官僚のうち女性の占める比率が極端に低い （2021 年衆議院選挙結果、 女性議員の割合は 9.9%、「クリティカル・マス」 と言われている 30%をはるかに下回っている） ことから政治権力が男性に極度に集中している現象や、 社会領域において #KuToo 運動やフラワーデモ、 男女共同参画推進などが行われているにもかかわらず、 メディアによる報道不足や右派によるバックラッシュなどでその力が分散されている現状などが挙げられた。

こうした現象を背景にして、金氏が注目したのは『82 年生まれ、キム・ジヨン』 のベストセラー化と雑誌 『文藝』「韓国・フェミニズム・日本」 特集号が増刷されたことである。 政治・社会において行き詰まっているように見えたジェンダーイシューが文学しかも翻訳文学という窓口を借りて噴出しているのではないか、と指摘された。こうしたブームの要因は出版業界のロジックなどでも説明できるが、 金氏は 「日常の言葉で女性の生きづらさや違和感を表現する」 文学の言葉への「共感」 が、政治・社会現象として見えにくかったジェンダーイシューへの再認識のツールとして働くことに繋



金志映氏

高榮蘭氏



がったのではないかと論じた（本作品の読者の反応として「韓国女性は怒り、日本女性は泣く」といったように、「共感」の表れが日韓で異なることも印象深かった）。しかも、それは韓国小説の翻訳を通して行われたことが興味深い。そこで金氏は翻訳文学の位置付けや役割の拡大が見られると指摘した。

こうした議論は、「K-文学/フェミニズム」をキーワードとして日韓の「連帯」や「平凡」な女性たちの「共感」を育み、日本の民主主義やその議論において新たな示唆と推進力を与えるのではないかと、金氏は結論づけた。

日本の民主主義論からフェミニズム運動、そのバックラッシュ、文学、翻訳文学、日韓比較まで幅広い濃密な議論を受けた後、高榮蘭氏による討論が行われた。高氏は、『82年生まれ、キム・ジヨン』のベストセラー化に代表されるブームの中で下手すると見逃してしまう領域が生じうると、虚を衝く問いを投げかけた。『82年生まれ、キム・ジヨン』に共感する「普通」の女性に属さない人たち、日本に浮き彫りになっている女性による右派運動、外国人差別問題など、ブームという光が明るくなるにつれて、こうした領域に暗闇がより落とされるのではないかと、高氏は指摘したのである。これは結局のところ、「居心地のよい（？）フェミニズム」をもたらしかねないとの示唆である。

密度のある講演と討論で予定した時間は超過し、より多くの方々を巻き込む議論はできなかったが、報告者自身を含め、参加された多くの方々がそれぞれの問いを持ち帰ることができたのではないかと思われる有益な時間であった。

参考文献

김지영（金志映）「혐오시대의 번역문학：일본이 읽는 'K-문학'에 관한 단상（ヘイト時代における翻訳文学――日本人が読む「K文学」に関する断想）」『문학인（文学人）』2022年

高榮蘭「《小特集　ナショナリズムの現在》文学の路上を生きる――在留資格から考える「日本語文学」という落とし穴――」『日本近代文学』第105集、2021年

前田健太郎『女性のいない民主主義』岩波新書、2019年

申瑣榮「書評：前田健太郎『女性のいない民主主義』（岩波新書、2019年）」『年報政治学2020-I』日本政治学会編、2020年

山口智美・斉藤正美・荻上チキ『社会運動の戸惑い――フェミニズムの「失われた時代」と草の根保守運動』勁草書房、2012年

鈴木彩加『女性たちの保守運動――右傾化する日本社会のジェンダー』人文書院、2019年

報告者:具裕珍（EAA特任助教）

悦びの記#5

石井剛（EAA副院長）

2022年2月18日

京論壇という息の長い活動をつづけるサークルに招かれて、その成果発表会でコメンテーターをしてきました。わたしがコメントを依頼されたのは、「権力とディスコース」に関する研究発表に対してでした。学生さんの議論はディスコースを生み出す権力、したがって自分たちから外在的であるがゆえに、往々にして自分たちでは制御できない、ともすれば抑圧的ですらある権力のほうに集中していたようでしたが、わたしはディスコースそのものが不可避的に内包する権力（power）について考えるべきではないかと思いましたので、少しアクロバティックに話題をずらして話を展開してみました。

『老子』の「名可名, 非常名」（名が名づけられるならば、それは常なる名ではない）はあまりにも有名です。これは結局のところ、名指すものと名指されるものの間に埋めがたいギャップがあることを示しています。一方、孔子は、これもまた有名ですが、「必也正名乎!」（必ずや名を正すことだよ!）と述べて、両者の乖離が甚だしくなったときには「名を正す」ことが必要であるのだと強調しました。孔子において、「正名」とは政治の始まるべきポイントであり、したがって、名に随伴する「ずれ」は政治の条件にほかならず、同時に、そこには権力（power）が生じる隙が提供されることになります。ここで大事だと思われるのは、かかる「ずれ」は権力をある種の暴力として現前させる可能性をもたらすと同時に、いや、それ以上に、わたしたち自身に力を与える（empower）チャンスであるともとらえられるということです。少なくとも、「正名」には、そうした政治の可能性がかけられています。

そうすると、わたしたちは、届きたいと願いながらも届くことのかなわない彼岸を求めて互いに常ならぬ名を駆使しながらコミュニケートすることを通じて、実は、互いに力を与えあっているということになります。そこでいう力とはとりもなおさず、名を与えることによって自らと世界を別様のものへと変成しようとする言語の想像力のことにほかなりません。

京論壇の学生さんたちは、東京大学と北京大学の双方から集まり、共通のテーマについて徹底的な議論を交わすことを活動の中核に据えているのだそうですが、このことから言えるのは、彼らのそうした徹底的な議論そのものが、実は新たなディスコースを形成するために相互に力を与えあっている、いや、共にその力を生み育むプロセスであるということだと思います。そうした経験を振り返ったときに、自らと自らを取り巻く世界のありようが少し変わって見えるようになっていれば、それは、言語を共に鍛え上げるプロセスの中で遂げられた成長の証であるにちがいありません。わたしたちの未来はそうして少しず変化を繰り返しながら、よりよい方向へと導かれていくはずですし、言語への信に頼ったコミュニケーションは本来そうであるべきものだと思います。ディスコースは与えられるものではなく、わたしたち自身が生み出していくものなのです。

実は、東アジア藝文書院が目指す学問のあり方もこれに通じています。中島隆博さんはEAAの発足以来、しばしば「社会的想像力」という言葉に言及します。EAAは概念の吟味と組み替えを通じて、社会的想像力を豊かにしていくのだというのです。それが可能になるのは、名が有する必然的なずれ（ジャック・デリダの言う「差延」でしょう）、名と名指されるものとの間にある空隙において、わたしたちが善たろうとする努力を、人と共にあることの悦びをもって継続する限りにおいてだと思います。それは、学問の名において初めて可能となるとわたしは考えています。逆に言うと、そのような努力と悦びの繰り返しこそが、学問の名で呼ばれるべき何かであるとわたしは思います。EAAが書院を名乗っているのは、そうした意味での学問をする場を生み続けることを目指しているからです。

京論壇の皆さんの集まりはすばらしいものになりました。長引くCOVIDパンデミックによって、互いに会って話す機会は完全に失われ、すべてがオンラインで

遂行されたのですが、もしかするとそのせいで生まれた距離のもどかしさが、彼らをしてより大きく成長する力（driving force）となったのかもしれません。きっとそれは、未来に本当の対面を果たす日に対する渇望に支えられていたのでしょう。まだ粗さと幼さを隠すことのできない若い皆さんの明日を心から祝福したいと思います。そしてこれは同時にEAAの未来に対する祝福であり、さらに、学問を通じて紡がれるはずの未来のよりよい世界に対する祝福でもあるのです。

連続公開イベント（全3回）

第2回　フランス・カトリック教会と性的スキャンダル

2022年2月22日

2022年2月22日、セリーヌ・ベロー教授連続講演会の第2回「フランス・カトリック教会と性的スキャンダル」をオンラインで開催した。ベロー氏は、社会科学高等研究院の教授で、現代フランスのカトリックを専門とする宗教社会学者である。この連続講演会の概要については、第1回の報告がすでに2022年2月8日に開催されているのでそちらをご覧いただきたい。

現代西洋のカトリック世界は、聖職者の性的スキャンダルで大きく揺れている。フランスではとりわけ、ベルナール・プレナという神父が過去に長年にわたって小児性愛の行為に手を染めていたことが被害者たちによって2015年に告発されて以来、一大社会問題となっている。2021年秋には独立第三者委員会によるソヴェ委員会報告書が提出されたが、そこでは1950年からの70年間でカトリックの聖職者から性暴力を受けた子どもの数は21万6,000人にのぼるという衝撃的な数字が発表された。

ベロー氏はこの問題について、『性的スキャンダルという試練とフランス・カトリック教会』（Fayard）という著作を2021年に刊行している。ベロー氏はまず、この著作の刊行に至る経緯を説明した。きっかけは3年前、パリの教区のある司祭から、性暴力についての意見交換会に誘われたことにあるという。カトリックの専門家なので出席を承諾したが、辛い経験を聞くことになるかもしれないと思いながら出かけていった。すると、そこでは性暴力の経験よりも、むしろ聖職者と一般信徒の関係、教会における女性の位置、結婚している男女が聖職者になることの可能性などが話し合われていた。カトリック教会における権威の様態や分業体制は自分の博士論文以来のテーマでもあり、この問題はフランス宗教界の変化を知り将来を占うのに適したテーマだと思うようになったとのことである。

この問題を扱うに際して、ベロー氏は「スキャンダルの社会学」という理論枠組みを用いている。フランスにおける聖職者によるスキャンダルの最初の波は2000年代初頭に認められるが、このときはまだ、聖職者の性暴力はあくまで特殊な個人の問題としかみなされていなかった。しかしながら、2018年から2019年にかけてフェーズが変わり、聖職者の性暴力はカトリック教会の「システム」そのものに関わる構造的な問題とみなされるようになったという。被害者たちによる告発がなされ、大々的な報道がなされ、人びとが動員される一連の動きは「スキャンダル」と呼ぶにふさわしい。ベロー氏はこのようなスキャンダルに社会変化のモーメントを読み取ろうとしている。

ベロー氏がインタビューをしたカトリック信徒たちは、改革への期待を口にしたという。改革案として出てきたのは、性暴力の再発防止、権威の用い方の見直し、聖職者と俗人信徒との新しい役割分業の確立などである。しかしながら、懸念材料もある。たとえば教会当局は、独立委員会として設けられたソヴェ委員会の

最終報告書の提出を待たずに、自分たちで対策案をまとめた文書を公表した。これは、性的スキャンダルの問題を、社会の問題としてではなく、教会の問題として教会が処理しようとした振る舞いとも受けとめられる。とはいえ、一般信徒たちがそのような動きに反対して、「シノダル」という教会関係者会議を開き、垂直軸ではない水平的な運動を作り出していることも注目に値する。

コメンテーターを務めたのは三木メイ氏である。三木氏は同志社大学の講師であり、日本聖公会京都教区の女性司祭でもある。自身が所属する教区で実際に起きた聖職者による性暴力事件の対応に当たった経験を持ち、2006年から現在に至るまで教区のハラスメント防止委員会のメンバーとして活動を続けている。そのような観点から三木氏はまず、性的虐待という出来事を取り扱うことの難しさや、ハラスメント防止委員会が設置されるきっかけになった事件の経緯について説明した。また、日本聖公会の教会の体質やその問題点について分析を加えたあと、ジェンダー平等に向けた改善が進められている様子も紹介した。

そのうえで、三木氏からベロー氏に、三つの質問がなされた。第一に、フランスのカトリックでは性的虐待を受けた被害者が相談する窓口はあるのか。あるとすれば、それは実際に機能しているのか。第二に、フランスのカトリック教会では、ジェンダー平等に向けてどのような組織的取り組みがなされているのか。第三に、フランスのカトリック教会の改革の可能性について、どのような展望を描くことができるのか。

ベロー氏は、第一の質問に対しては、教会で問題が起きたときには市民社会の裁判所に自動的に通知が行くような改革がなされていること、また教会内部でも被害者のケアを加害者の死後も続けられる仕組みが作られつつあることを指摘した。第二の質問に対しては、男性聖職者が不在の状況では、俗人信徒の女性が、資格を持っていなくても、神父やチャプレンの役割を果たすことができるかどうかが広く議論されるようになったと回答した。第三の質問に対しては、カトリック教会では、説教の刷新は検討されても、制度から構造を変えるのはなかなか難しいと答えた。水平的に議論する「シノダル」の精神も、当局に参考意見を言うことができるにすぎず、教会運営の実権は高位聖職者に握られたままだという。

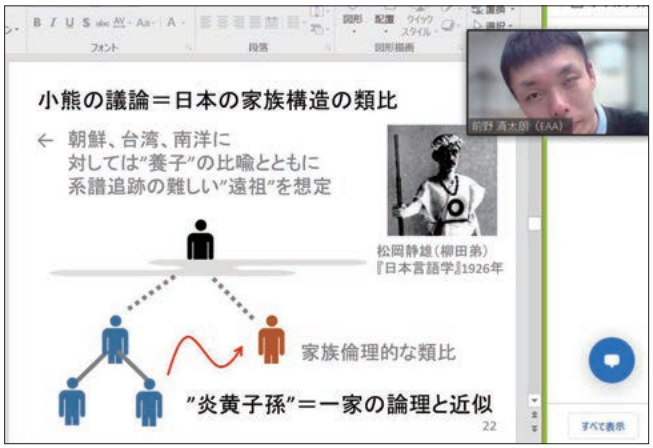
講演会全体を通して少しずつ浮かび上がって見えてきたのは、フランス・カトリック教会における聖職者による性暴力は社会全体を巻き込む一大スキャンダルとなっているのに対し、日本の場合は宗教界の性暴力は厳然たる事実として存在していても社会で広く共有されるような問題とはなりにくいということである。一方、聖職者による性暴力への対策として、日本聖公会では再発防止のための制度改革などが比較的機動力のある形で進められているのに対し、カトリック教会はローマを総本山とする巨大組織であって、制度改革の提唱もしばしば保守派に阻まれるという対照性も見えてきた。

報告者:伊達聖伸(東京大学)
田中浩喜(東京大学大学院博士課程)

第4回 EAA「民俗学×哲学」研究会

2022年2月25日

2022年2月25日、第4回EAA「民俗学×哲学」研究会がオンライン上で開催された。今回は執筆者(前野)が「エスノ・ナショナリズムの一類型としての混合民族論」と題して報告を行った。コメンテーターは崎濱紗奈氏(EAA特任研究員)である。本報告は、第2回研究会の張政遠氏(東京大学)報告「トランスユーラシアの言語拡散と東北アジアの農耕民移住――「三角測量」の死角と民俗学の視点」に着想を得て構成した(第2回研究会〔https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/20211217-report/〕)。



前野氏の発表

第2回研究会では、ドイツの言語学者マーティン・ロベーツ（Martine Robbeets）氏らのグループが2021年に発表したユーラシア諸言語の起源ならびにその話者の拡散についての論文が取り上げられた。研究リーダーのロベーツ氏は、メディアインタビューに対して「ナショナリスティックな意図を持つ人々にとって不愉快な真実は、アジアを含め、言語も文化も人も混じりあっているということだ」とコメントしている（ロイター“Japanese-Korean-Turkish language group traced to farmers in ancient China”〔https://jp.reuters.com/article/us-science-language-idCAKBN2HV2IN〕）。果たしてロベーツ氏のこのコメントは正確なものだろうか。

1980年代以降の日本において、私たちはたびたび「単一民族」的な言説を耳にしてきた。けれどもそれと同様な程度に、日本人が異なる地域からの流入者にルーツを持つ「混合」的民族であるとの言説を耳にするようにもなっているはずだ。かなり通俗化された形で流布される縄文系と弥生系の区分についての理解などは代表的なものだろう。シュメル、タミル、レプチャなどに遠いゆかりを求める言説も、もしかするとここに含まれるかもしれない。実のところ、日本における「単一民族」的な言説は、しばしば民族起源の多元性とその同化力を誇る論調が入り混じった存在であって、「混合的単一民族」論とでも呼ぶべきロジックを持っている。こうした日本における「混合民族」論の構造と「単一民族」論の戦後社会での定着を、歴史社会学的になぞってみせたのが、小熊英二氏の力著『単一民族神話の起源――「日本人」の自画像の系譜』（新曜社、1995年）であった。

小熊氏の議論においては、明治期から戦中にかけ一般的であった「混合民族」論を、日本特有のイエ構造に由来するロジックとしている。しかし近代の中華民族論を再構成する形で提示された費孝通の「多元一体」民族論とその継承者たちの20世紀末の議論に見られるとおり、「遠祖」から続くサブエスニックグループ間の血と文化の相互混淆を現在のネイションの統合基盤と捉えようとする言説は日本以外にも存在している。類似の議論は、近代以来の中華民族論からの離脱を模索してきた台湾イデオロギーの側にも見て取れる。1990年代から2000年代にかけ広まった、漢化した原住民族＝平埔（へいほ）族的なルーツについての通俗的理解と、原住民族の血の元に融合した移民社会とのイメージがそれである。執筆者（前野清太朗）にとっていまだ専門外であるが、東アジア以外の、「純血」を歴史上の前提としがたいロシアやメキシコ等の地域にあっても、こうした「混合的単一民族」論に似通った議論は見出せるように思われる。小熊氏が前掲書中にあってすでに指摘していることだが、「混合民族」論の提示は「単一民族」論への対抗言説には必ずしもならない。時に人々にとって、遠いルーツの多「源」性はむしろ自らの遠祖を誇りうる根拠とさえなるのだ。

当日のフロアからは「単一民族」「混合民族」の2種の神話を乗り越えた先にいかなる展望があるのか、とのコメントを頂戴した。このことは、構造機能主義から構造主義を経てポスト構造主義への展開を実見

してこられたベテラン研究者の方々と、「ポスト」であることが当たり前の学風の中で研究の道に進んだ私たちの世代が、今より真摯に取り組まねばならない大きな問題提起であるように受け止めている。もちろん、反・反相対主義の不断の闘争のように答えることも一つの回答であろう。もしくは呉叡人氏など近年の台湾の論客が提示するように、エスノ・ナショナリズムから市民的ナショナリズムへの移行を試みることも一つの戦略だろう。あるいは、やはり台湾のオードリー・タン氏がよく言及するデジタル民主主義論のように、ピープルとネイションの間の信託の問題を、（技術および社会の）システムによってつくりかえる選択肢も見えてくるかもしれない。ここにおいて、「民俗」的なテーマは、大いに「哲学」的なテーマと交わっていくだろう。

報告者:前野清太朗（EAA特任助教）

一高プロジェクト

リベラルアーツとしての映画制作とは？

東京大学東アジア藝文書院『籠城』制作チームトーク:QWSアカデミア（東京大学）

2022年2月27日

去る2月27日（日）に渋谷QWSにて開催された「リベラルアーツとしての映画制作とは？――東京大学東アジア藝文書院『籠城』制作チームトーク：QWSアカデミア（東京大学）」の報告文を、登壇者でもあった主要制作メンバー、EAAリサーチ・アシスタント3名よりお送りいたします。イベント開催にあたり並々ならぬご尽力をいただいた皆さんに厚くお礼を申し上げます。

小手川将（監督）

2022年2月27日（日）、わたしたちは作品の公開に先立って、映画『籠城』がいかにつくられたのか、その制作プロセスを語る機会に恵まれた。渋谷駅直結の、ガラス張りの高層ビルに所在するSHIBUYA QWSという施設でのことで、いよいよ公に『籠城』について知っていただける段階に入ったのかという緊張感もあったが、それよりも喜びの気持ちが強かった。映画を共につくりあげてきた人々と本イベントの準備のために制作プロセスを振り返っては吟味して、声の出演者たちは画面内に顔は見えないけどそれぞれ個性が際立っていて、これは「声の映画」だったよね、などとオンライン上で話し合ったことの幸福が、いまも心中に残っている。こんなふうに、クレジットされている役職に縛られず、積極的かつ継続的に、出演者および制作スタッフが作品について自由に、ときに厳しく言葉を交わし合ってきたことが、本作品の制作プロセスの重要な点であり、それをイベントで伝えられたとしたらとても嬉しい。

思えば、制作を通じて、さまざまな人々に出会うことができた。わたしの個人的なイメージを共有しながら、多くの言葉をもらって、応答し、作品の構想がどんどん変化していった。そのつど正確な結論を出してきたという自信はまったくないが、コロナ禍下でオンラインを活用して言葉の応酬を続けてきたことを省みると、今回、全員ではないにしても制作チームが会場に集まって、直接、肉声を交わす場を共有できたというのも感慨深いものがある。

しかし、こんなふうにセンチメンタルに振り返ってばかりいても仕方ない。まだ作品は公開されていない。リベラルアーツとしての映画制作という行為そのものに意義があるのは確かだが、結果が伴わなければ、その制作プロセスは絵空事を描き続けてきた空転として無視されてしまうだろう。作品を世の中へと示して評価を受けていくのはこれからの話である。『籠城』を終わらせないために、動き続けなければならない。

最後に、どのような人々が『籠城』という作品に参加していたのかを広く知らしめる本イベントで、十分に

触れることができなかったが、一人、この制作プロセスにとってかけがえのない役割を果たしている方について触れたい。モデレーターを務めていた、プロデューサーの高山花子さんである。制作プロセスの全体を常に支えてくれたというだけではない。芸術についての、創造することへの深い理解と洞察を持ったプロデューサーだった。たとえば、二人の男性の声で物語を紡いでいくという構想が男女混声のポリフォニーに変わったのは、彼女の直観的なアイディアを受けてのことだった。『籠城』は高山さんなしには決して実現しなかった映画であることはいくら強調してもし足りない。

多くのエッセンスが凝縮された議論のすべてを的確にまとめ、整理された言葉で会場に伝えていた高山さんの凄まじさに、どれほどの方が気づいてくださっただろうか。そのことをイベント内でわたしがはっきりと伝えられなかったのが悔やまれるが、この場を借りて、多大な感謝とあわせて報告させていただきたい。

高原智史（原案・共同脚本・声の出演）

本作では原案・共同脚本と、声の出演を務めた高原は、第1セッションから第3セッションにかけて登壇した。第4セッションまで、すべてのセッションに登壇した小手川氏に次いで多くのセッションに登壇したことかと思う。制作チームと出演者を兼ねたゆえのことである。

制作チームが登壇した第1セッションでは、「旧制一高をいかに研究してきたか」と題してお話しをした。官僚になることを志して東京大学に入学したこと、しかし志望が叶わず大学院へ進んだこと、そうして一高に研究関心を向けていったことと、そのいきさつについて書いた「独白録」が本作の原案となっていること。「独白録」では、必ずしも前面にあらわれていなかった「記録する」というテーマが、小手川氏との共同作業を通じて紡ぎ出されたこと。自分自身も大学時代、流行り始めていたSNSに文章を書き綴っていたこと。一高生の書くことということと、アイデンティティとの関わり、その複層性について。

すべてのセッションが終了した後での質疑応答において出された質問の中で、EAA東アジア教養プログラム修了第1期生である孔徳湧氏から、一高生のアイデンティティのありようについて、質問をいただいた。

アイデンティティのありようは閉じてはいけないのではないかという孔氏の質問の趣旨に対して賛同しつつ、一高生が一高生らしくしようとして（ひとまず、エリートであろうとして）、「我々はエリートである」という志向と、「エリートは我々である」という志向がありうるとしたうえで、両者の違いについて論じた。前者は、すでにあるエリートという枠に自らを当てはめていこうとする点で受動的なこと。後者は、みずからがエリートの範型たらんとする点で積極的なこと。高原自身はかつて前者の姿勢でいたのが、一高生を研究するうちに、後者へと転じようとすることになった。一高生が物を書く態度は、自らの記述が歴史に残ると強く意識しているか、もはや意識もしないまでに当然とされているということで、このアイデンティティの志向のあり方と、書くということはつながっているとした。

「エリートは」「我々は」の二つの定式については、高原と小手川氏との間で何度も話題に上がったが、必ずしも意見の一致は見なかったことを話した。

またそこから、個人の欲望を社会的な規範とすり替えてしまう男性の弱さという本作のテーマの一つにもつながったことが言われた。

実は、このことは、話が振られれば話しておきたいと、セッションの間に思っていたことである。孔氏が話につながるような質問を投げかけてくれたことは、おそらく、こちらの話したいことと、あちらの聞きたいことが、重なったということで、イベントの中での伝達がうまくいったことの証なのだと思う。

そうして、まずは3月末の、おそらくは桜も咲き出しているであろう駒場キャンパスにお運びいただき、今度はいよいよ、映画『籠城』をご鑑賞いただきたい。

日隈脩一郎（記録）

映画は言うまでもなく、完結した、一つの作品である。とはいえ、必ずしもこの作品にはならなかった可能性、別の作品たり得た可能性を考えることができる。記録としてその制作過程に目を向けたときに、そこには多くの（往々にして制御不能な）要素が介在する、思えば当たり前の、しかし新鮮な事実に目を見開かせられることが多かった。いかにミニマルな映画でも、そこにはカメラマンがおり、被写体（それは当然人間でなくともよいが）が必要だ。

本作『籠城』では、声の出演者が重要な役割を果たした。イベントで上映されたワークショップの風景、声の録音風景の記憶がここで蘇る。唯一、詩業を営む永澤康太氏を除いて、声を発することを専門的な仕事としない人ばかりだった本作では、録音工程に入る前に数回のワークショップを重ねた。オーディション時に、漠然としたボイスデザインの構想はあったものの、ワークショップでは監督の指示を受けつつも各人の創意工夫が光り、そして相互に聴き入り、批評を厭わない、貴重な機会があったことは、一応は想定されていた声の用い方に重要な変更を加え、当初は誰もその完成形を予期しなかった方向へ、作品を進めることになった。その航海は、全く異なる海へ、港へ、漂泊する可能性があったわけである。

誰に言われるでもなく、制作風景を撮影・録音していた私はある時、小手川氏に「メイキング映像の監督」を仰せつかった。このことは、自らの役割を自覚する契機であったとともに、少なからざる違和感をももたらした。今思えば、それは前述の、別の場所への漂白可能性が、「メイキング」に覆い隠されてしまうのではないかということへの危惧だったのかもしれない。メイキングはしばしば、でき上がった作品を一つの必然的帰結とみなし、その過程をも必然化してしまうのではないか。ただ撮り溜めた制作風景の記録、そして来るべき目録作業によるアーカイブ化は、そうした別の可能性、異なる風景に開かれている、そしてそれは自由と呼べるのかもしれない、と。しかもその可能性は、他でもない、『籠城』という作品、あるいは映画というジャンルそのものの境界を変容させうるかもしれない。質疑応答の場を借りて、そのようなことも述べた。

当日は、望外の晴天に恵まれたものの、イベント中は黒いカーテンにより、せっかくの摩天楼上層階からの眺望が許されなかった。しかし実は、窓外には何も見えなかったかもしれないのである。

報告者:小手川将（EAAリサーチ・アシスタント）
高原智史（EAAリサーチ・アシスタント）
日隈脩一郎（EAAリサーチ・アシスタント）
写真撮影:立石はな（EAA特任研究員）

連続公開イベント（全3回）

第3回　フランスにおける宗教的状況の特殊性

2022年3月1日

2022年3月1日、連続公開イベント第3回「フランスにおける宗教的状況の特殊性」がオンラインで開催された。この連続公開イベントの詳細については、第1回の報告ですでに紹介している。第2回の報告もこのウェブサイトにすでにアップロードされているから、そちらと併せて参照されたい。第3回のイベントでは、フランス宗教社会学を牽引するセリーヌ・ベロー氏（社会科学高等研究院教授）に、とりわけカトリックに注目しながら、「近年のフランスにおける宗教状況の変容」を論じていただいた。コメンテーターを務めたのは、近世のフランス神秘主義を専門とする宗教学者の渡辺優氏（東京大学准教授）である。

ベロー氏はまず、現代フランスでは「カトリックからの離脱現象」が起きていると指摘する。これはたとえば、カトリックに帰属意識を持つ人が減っていることからもわかる。カトリック信徒を自称する人の割合は、1981年の調査では約70%だったが、2018年の調査では約32%に激減している。帰属だけでなく実践の低下も、カトリックからの離脱現象を物語る。ミサに出席するなど、宗教実践を定期的に行うカトリック信徒の割合は、1981年の調査では17%だったが、2018の調査では7%に現象している。近年のコロナ禍とカトリック教会の性的スキャンダルは、この実践率の低下にさらなる拍車をかけているという。

実践に関する詳しいデータも報告しておこう。性差については、とりわけ60歳以上の女性に高い実践率がみられる。階級差については、管理職に就く人びとの方が、労働階級の人びとよりも実践者に占める割合が大きい。そして興味深いことに、地域差については、都市部（15%）の方が、地方（13%）よりも実践率が高い。都市部では「脱キリスト教化」が進むというのが通説だったことを思うと、これは意外である。これは、都市部にはたくさんの教会があり、供給が需要に追い付いているのに対して、過疎化に悩む地方では教会の数が足りなかったり、高齢者の自宅の近くに教会がなかったりすることによるという。

このカトリックからの離脱現象は、フランスの宗教状況一般にどのような効果をもたらしているのだろうか。ベロー氏が第一に挙げるのは、無宗教の増加である。無宗教を自称する人の割合は、1981年の調査では約27%だったが、2018年の調査では約58%に倍増している。ただし、無宗教が増えているからといって、無神論者が増えているわけではない。むしろ、神を信じると回答する人の割合は、2018年の調査では約50%にのぼり、なんらかの宗教に属していると回答する人の割合（約42%）より高い。ここには、イギリスの宗教社会学者G・ディヴィが「帰属なしの信仰」と呼ぶものをみることができるという。

ベロー氏が第二に挙げるのは、宗教的多元化の進展である。現状では、なんらかの宗教に属する人が100人いるとすると、そのうちカトリック教徒は77人でムスリムは14人であり、カトリックは依然優位にみえる。だが経年的にみれば、カトリックの割合が減り続けているのに対してムスリムの割合は増え続けており、若者世代ではこの傾向はより顕著になる。かつてはフランスの宗教状況は均質的なものとされていたが、イスラームの登場によってフランスは新たな宗教的多元状況に直面している。ただし、病院や監獄での教誨制度をみると、カトリックは他宗教に比べて、ある程度特殊な地位を保ち続けているという。

カトリックからの離脱現象をフランスの宗教状況一般に照らして考えたとき、みえてくるのはカトリックのマイノリティ化である。ベロー氏は、カトリック内部にはこのマイノリティ化に対する2通りの反応があると指摘する。一つは、被害者意識を増大させるパターンである。たとえば同性婚や生殖補助医療に関して、カト

リック的な価値観がないがしろにされていると感じる人びとがいる。もう一つは、マイノリティ化を教会や宣教のあり方を改革するためのチャンスと考えるパターンである。ベロー氏によれば、近年のフランスにおける宗教状況の変容はこのように、カトリックにも内的多様化をもたらしている。

講演のあとには、渡辺氏からいくつかの重要な問いが投げかけられた。とりわけ議論されたのは「脱文化化」と「スピリチュアリティ」についてである。渡辺氏によると、近年のフランスでは、宗教が教会制度としてだけでなく、文化的な価値や記憶としても存在感を失っており、フランスの宗教社会学者D・エルヴュー＝レジェは、これを「脱文化化」と呼んでいる。フランスの宗教状況に関するベロー氏の現状理解は、エルヴュー＝レジェのいう「脱文化化」に重なるのか。そして、そうした現代の宗教状況を記述する際、フランスの宗教社会学では「スピリチュアリティ」の語は用いられるのか。これが渡辺氏の問いである。

ベロー氏はまず、「脱文化化」に関するエルヴュー＝レジェの議論を大枠として認めながらも、そこにはニュアンスが必要であると論じた。ベロー氏によると、この概念は現在、フランス社会からカトリック文化の影響が完全に消滅したことを指すとみなされている（ただし、エルヴュー＝レジェ自身は、よりニュアンスに富んだ議論をしているという）。だが実際には、脱文化化は現在も進行を続ける未完のプロセスであり、その進行度は分野によって異なるというのが、ベロー氏の見方である。カトリックが制度的影響力を失っているとしても、アイデンティティや伝統の拠り所としての存在感はいまだ小さくないという。

次にベロー氏が答えたのは、「スピリチュアリティ」についてである。渡辺氏がいうように、日米の宗教社会学では、個人化され脱制度化された宗教のあり方は「スピリチュアリティ」と表現され、これを学術概念として用いた研究成果が数多く重ねられている。これに対して、ベロー氏によると、フランスの宗教社会学では、過去数十年にみられる宗教状況の変容は、どちらかというと「宗教的なものの脱制度化」や「信仰の脱宗派化」などの枠組みで理解されてきたという。ベロー氏と渡辺氏の対話からは、フランスにおける宗教状況の特殊性に加えて、フランスにおける宗教社会学の特徴も浮かび上がったように思われる。

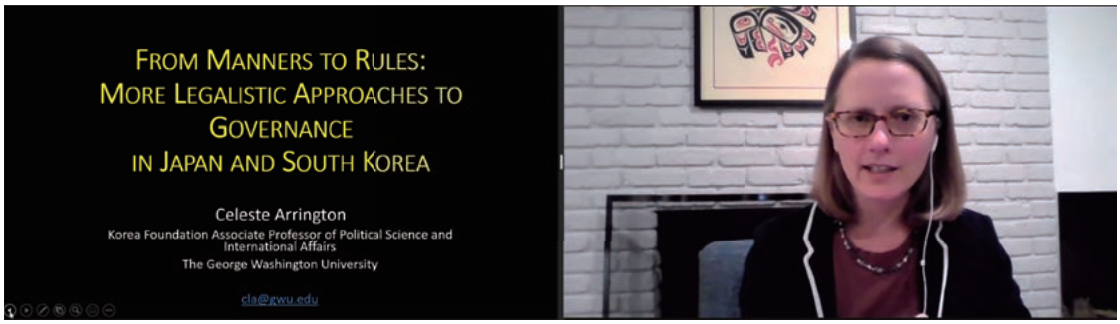
報告者：田中浩喜（東京大学大学院博士課程）

EAA Workshop “From Manners to Rules: Explaining More Legalistic Approaches to Governance in Japan and South Korea”

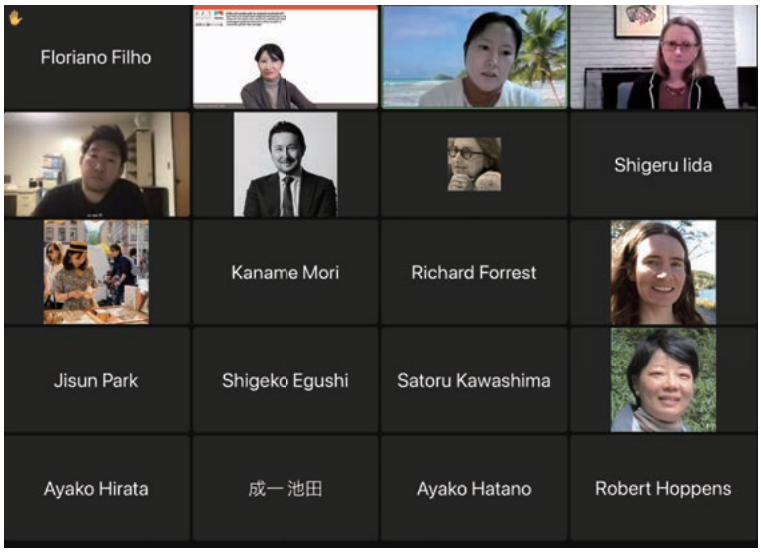
2022年3月3日

The EAA held a virtual workshop with Professor Celeste Arrington (George Washington University) on March 3, 2022. Professor Arrington is one of the leading scholars on law and social change, legal mobilization, and comparative studies of Japan and Korea. She gave a talk “From Manners to Rules: Explaining More Legalistic Approaches to Governance in Japan and South Korea,” about her current book project, which examines changing approaches to law and regulation in the two countries.

Professor Arrington’s impetus to start this project was the shift toward more formal rules and enforcement mechanisms, including through the courts, in Japan and Korea, given that the two countries historically had informal, cooperative, and bureaucratic approaches to regulation, in contrast with the adversarial legalism of the United States. With this, the existing literature tends to focus on the top-down pro-



Professor Celeste Arrington (George Washington University)



cess in which political elites take the initiative. But Professor Arrington argues that civil society actors (activists and lawyers) in both countries also play a significant role, which shows the bottom-up drivers behind more legalistic approaches to governance.

To what extent and why are Japan and Korea adopting more legalistic modes of governance? How are civil society groups contributing to this legalistic turn in the regulatory style? Professor Arrington examined these research questions by laying out six mechanisms—brokerage, framing, strategic litigation, normative change, information subsidies, and shaming—behind this increased legalism. With examples recent reforms related to secondhand smoke prevention in Japan and Korea, she articulated the legalistic shift in governance and the crucial role played by civil society actors as a driving force in this.

Following Professor Arrington's talk, the discussant, Professor Hye-Won Um (Sogang University), noted potential issues about the case selection: namely, why Japan and Korea? Why tobacco control regulation? In response, Professor Arrington clarified the significance of comparing Japan and Korea as a paired comparison by directing attention to their similarities, as opposed to their differences that are often accentuated, and plans to bolster her argument with further cases such as accessibility for people with disabilities. The participants also engaged in the discussion by raising questions regarding the necessary conditions for the six mechanisms, other issue (or policy) areas (e.g., environmental issues) that demon-

strate the trend toward increased legalism, different civil society foundations in Japan and Korea that create differences in governance, and so on. It was a thought-provoking discussion, exploring whether the legalistic shift in both countries ushers in more opportunities for civic participation in the policy-making process.

Report by Yoojin Koo
(EAA Project Assistant Professor)

文運日新 02

離任にあたって

前野清太朗

2022年3月3日

前野清太朗氏

いと忘れやすきひと

このたび 2021 年度末の任期満了をもって退職し、重ねて東京大学を離れることになった。個人的な思い入れからいえば、この教養学部のキャンパスには 15 年近くお世話になった。実の故郷に次ぐほどに馴染んだ場所から立ち去るに際しては、やはり何かしらの感慨なしにおれない。キャンパスの中の細い抜け道はたいがい頭に入っているし、各専攻や研究室所属の図書室もあらかた訪ねてしまった。おそらく新しい世界に移る潮時なのであろう。東アジア藝文書院に着任したのは 2019 年 10 月であったから、現在の駒場オフィスにお世話になったのは都合 2 年半である。お世話になった日々は決して短くはない。さりとて長いということもできない。2 年半の任期のなか、まことさまざまな業務を経験させていただいた。大学の大きな組織がもつ組織規律のありようを垣間見ることができた。学生身分であったころ、見えなかった事務職員の方々の熱意や底力には、ひたすらに頭が下がる。私個人の能力・経験の至らなさゆえに指導を頂いたことも決して少なくはなかったが、実践的な業務に触れた経験は確かに私の糧となった。

2 年半の記憶の糸を行きつ戻りつしていくと、途中に一つ、忘れがたい記憶の束がある。2020 年度の秋学期に、教養学部前期課程において開講させていただいた全学自由研究ゼミナール「人文 - 社会科学のアカデミックフィールドを体験する」がそれだ。教養教育高度化機構の中村長史先生とのコンビで運営したこの授業では、5 人の院生・ポスドクの方々のお力を借りて、長らく温めていた新しい授業スタイルを実践した。いわゆるオムニバス講義とは、各回を異なる講師が受け持ち、それぞれの専門分野について講義する形の授業形式である。異なる専門の講義を 1 学期内に聞くことができるので、学生からの人気は高い。欠点は、各講師の受け持ちが単独回であるため、講義内容の学生からのアウトプットの機会を設けにくい点である。そこで全学自由研究ゼミナール「人文 - 社会科学の〜」では、担当講師に 2 週連続の「1 セッション」を受け持ってもらうこととし、1 週は講師からのレクチャー、もう 1 週は学生司会によるディスカッションとの構成をとった。第 2 週目のディスカッションで、学生の意見を相互にシェアしつつ、議論の交通整理スキルも高めてもらおうとの狙いだ。大規模な授業ではなかったが、これまで面識のなかった院生・ポスドクの方々と知遇を得、受講してくれた学部生たちからは毎回の熱心なコメントを受け取った。小さな授業で得たささやかな成功は、私の大きな誇りだ。講師役の機会を通じて知遇を得た院生・ポスドクの方々とは、今でも各種のイベントでお世話になっている。

業務と教育の思い出は尽きないけれども、研究の話に筆を移そう。着任から満1年ばかりは、ひたすらに職務へ励むあまり全般的な記憶が定かでない。1年ほどたって、少しずつ周囲に研究上のアンテナを張り広げることができていったように記憶している。東アジア藝文書院と連携する先生方、および同僚たるスタッフの方々からは多岐にわたって研究上のインスピレーションを頂戴したのはいうまでもない。ただ、最も大きく影響を受けたのは、私の研究活動における「柱」の部分であったかもしれない。はじめ私はミクロな歴史学を志し、結果フィールドワークに依拠した社会学的な農村研究にたどりついて現在に至る。業界の外の方々からすれば、何とも理解しがたい事柄であろうが、歴史学と社会学とでは、同じような対象を扱っているように見えても、研究の起点も終点もずいぶん異なっている。過去を見つめる学問と、現在より後を見据える学問との間にあって、私は長らく揺れ動いてきた。

東アジア藝文書院での私の任期のほとんどは、悪疫とともにあった。あるときはこの悪疫にまつわるイベントのサポートに入り、あるときは自身が報告者として、語り・聞き・考えるなかで、記憶の継承ということを、私は自身の研究の根源の「柱」として次第に見出すようになった。この2年間における国内外の集団的な対処の状況は、今でも日時刻みの年表で細かに辿ることができる。ところがその日時刻みの年表の一瞬一瞬で感じ来った自身の喜怒哀楽の心を、私は一向に思い出すことができない。同じように11年前の今頃、関東壊滅の危機に怯えながら、ラジオを付けて友人同士眠ったあの夜の記憶は私のなかに残っているが、そのときの心情は口に出した瞬間突然に抽象的な単語に変わってしまう。このようなことも、東アジア藝文書院のコミュニティのなかにあって考え続けてきたゆえに、ようやくに思い当たり、かつ思い出すことができたのだ。

途切れ途切れな2年半の記憶を振り返ってみれば、どうやら私のなかでは、教育と研究の二つの要素がますます深く結びつけられたようだ。社会学の古典が指摘してきたとおり、教育とは「社会化」の一形態である。同時に、自由かつ民主的な社会にあっては、「社会化」を担う社会そのものを変えていくのは社会の構成員に他ならない。だからこそ、今からここから、長い時間をかけなくてはならない。私たちが余生を投じるだけの、価値はそこにある。

鵬程万里06

RA任期を終えて

丁乙

2022年3月3日

中国美学の研究を志してから、しばらく自分の居場所を探していた。

美学はそもそも十八世紀ドイツで哲学の一部門として成立した学問であった。美や芸術、感性について概念や命題、図式によって形而上的に解明しようとする分野である。そのようにして発生した美学は、十九世紀末から二十世紀に東洋にもたらされた。しかし他方で、たとえば中国には長らく芸術論の伝統があり、詩話のような断片的な芸術批評が有力であった。芸術をある種のアプリオリなものの外面的な記号として捉えた西洋の芸術伝統と異なり、中国では芸術とはそれを通して目指す内容そのものでもある。かけ離れているように見える東西の芸術的思想をいかにして同等に考察するのか、それは十九、二十世紀以来問われ続けている問題である。

大まかに言えば日本は早くから西洋美学を受け入れ、日本・東洋美学の発展に注力してきたが、少々西洋の論題や手法に束縛されているところが見受けられる。対照的に、一九八〇年代以降思想界の大論争を経た中国では、西洋と異なる自らの美学の系統を打

ち出そうとしている。それは前近代の直観的感想に基づく芸術批評や文学論に近い性質のものではないかと感じ取れる。それに対し、私は西洋美学の手法を本格的に用いて中国のテクストを捉え直そうと考えていた。

ところが、修士課程から学会での口頭発表などでは苦労していた。カントやヘーゲルを扱うならば、なぜカントやヘーゲルを研究するか、彼らを研究する意義は何か、といった質問はまず出ないが、銭鍾書という中国二十世紀の人文哲学を代表する人物を扱う際には、その意義や位置について頻繁に質問された。日本の美学研究において、中国近代美学の領域を切り開かなければならないと痛感しつつも、落ち込んでいた。そうした中、EAA の RA の面接では、中島隆博先生から、銭鍾書の『管錐編』は難しいよね、とコメントをいただき驚喜したものである。またオリエンテーションの日に、石井剛先生から、銭鍾書の『囲城』（日本語訳『結婚狂詩曲』〔岩波書店、1988 年〕）は抑圧の時代（日中戦争の前夜）における知識人の生存の描写が苦くて堪らないよね、という感想をいただいた。中学時代から『囲城』の言葉の諧謔や洒脱、そして背景に透ける圧倒的な教養の深さに惹かれていたが、改めてその基調となる人生像に関する普遍的な悲哀について考えるきっかけとなった。何より銭鍾書の話ができたことが嬉しかった。

中国前近代の哲学、文学、芸術論を素材とし、さらに西洋思想の影響によって成立した中国美学を考えるために、EAA ほど適切な場はないのではないかと考えている。リベラルアーツを目指す EAA において、美学のほか、社会学、経済学、政治学、人類学といった分野に広く触れる機会にも恵まれ、さらにまだ研究テーマを絞っていない学部生たちの、大胆な発想と質疑に常に刺激を受けた。

そこで、哲学のあり方について考え直した。それまで集中していた「哲学」の研究は、基本的にテクストに向かって、誰が・いつ・どのような文脈で・何を言ったかを解明するようなものである。哲学や美学は理想の探究に従事する学問であり、過去にあったことや、現在進行中のこと、未来に起きる（であろう）ことに無関心で、（社会学や経済学と異なって）現実世界と離れたレベルで検討するものであると思っていた。しかし、それと異なり、現実世界を目の前にし、人間の生き方や世界のあり方を直接問いかけようとする哲学もある。つまり、私が以前テクストとして扱った論者の思想と同等なものを産出するような哲学である。先行する哲学者の思想を資料として分析するほか、その思想を自分の武器に改めて世界を直接考えるという哲学のやり方に開眼した。EAA 生活でよく耳にし口にした言葉として、「人新世」がある。人類がこの世界に決定的な影響を与えるようになった時代に、人類社会／世界の働き方に関して、社会学、経済学、政治学、環境学のほか、哲学的にいかにアプローチすべきかも課題である。一見実用と無縁の人文系の学問で磨いた思考力によって、この世に何か貢献できればと思う。

学問の内容のほか、学問への態度について多く教わった。とりわけ教員たちの、若手研究者や若者の好奇心や未熟さへの寛容さに感心していた。これに関して講義の TA として直接関わる機会の多かった佐藤麻貴先生と張政遠先生には大変お世話になった。「私を踏み台として、ぜひさらに広い世界へと飛び込んでください」という佐藤先生の言葉は今後も耳に響くであろう。

EAA の RA を離任するが、今後も関われることを期待している。とはいえ、一旦この機会を借りて、RA の同期、助教や特任研究員の先輩、教員やあらゆる講義で出会った研究者の皆様に心より感謝の意を申し上げる。「山高水長」の深い恩情に感謝し、それぞれの分野でのご活躍、そして EAA 全体のご発展を願っている。

東京大学GSIキャラバン·プロジェクト「群島と太洋の思想史――太平洋のグローバル·ヒストリー」

第11回 研究会 ――Greg Fry氏（オーストラリア国立大学）

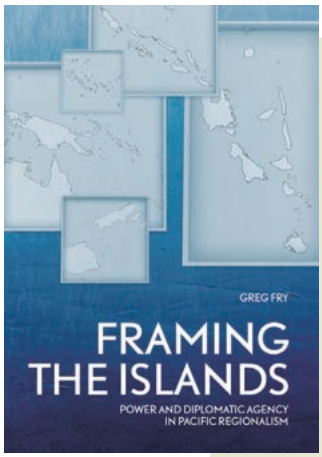
2022年3月4日

2022年3月4日（金）、EAA共催のもとGSIキャラバン・プロジェクト「群島と太洋の思想史――太平洋のグローバル・ヒストリー」第9回研究会が開催された。馬路智仁氏（東京大学）を研究代表者とする本キャラバンでは、「太平洋」というイメージ／表象／意味体系がどのように構成されてきたのかという問いに対して、思想史という観点からアプローチすることを目的とし、過去10回研究会を重ねてきた。第11回となる今回は、Greg Fry氏（オーストラリア国立大学）をお迎えし、“Norms and Representations of Pacific/Oceanian Regionalism: Reading Greg Fry's *Framing the Islands* (2019)”というタイトルで講演いただいた。

キャラバンメンバーの他に、第9回研究会で講演くださった小林ハッサル柔子氏（立命館大学／オーストラリア国立大学）、井上彰氏（東京大学）、そして乙部延剛氏（大阪大学）にもご参加いただいた。

講演では、Fry氏が著書 *Framing the Islands* (ANU Press, 2019) を執筆するに至った問題意識や、「太平洋地域（Pacific Region）」という一つの地域概念が形成されてきた歴史的過程、およびその形成過程に関与した政治・経済・文化事象についてお話しいただいた。帝国主義時代、いわゆる西洋列強諸勢力によって見出され、組織されたこの地域は、第二次世界大戦後、脱植民地化の波の中で、この地域に住まう人々自身によって再定義されてきた（思想史という文脈においては、本研究会でもたびたび取り上げてきたフィジーの哲学者・文学者Epeli Hau'ofa（1939-2009）の業績が際立っている）。興味深いのは、こうした再定義の試みと、脱植民地化のプロセスの中で生じる国民国家の建設という営みが同時並行でなされてきたことである。一見相対するこの二つの試みが、必ずしも衝突するものとしてではなく、むしろ両立しうるものとして展開されてきたことが、現在の「太平洋（Pacific）」を形作る重要な要素となっている。

講演に続いて、ディスカッションの時間が設けられた。先述したようなテーマ（太平洋地域という一つの地域としての総合体と、その内部に位置する国民国家の主権との関係性）に関わる質問をはじめ、日本および東アジア地域と太平洋地域との関係性、あるいは「インド太平洋」「太平洋」概念の相違について等々、必ずしも専門を等しくしない参加者からの、バラエティに富んだ質問の数々に、Fry氏は丁寧に時間をかけて応答してくださった。



Framing the Islands by Prof. Greg Fry

Prof. Greg Fry (ANU)

COVID-19 が終息した暁には駒場にて再会することを互いに願って、会を終了した。

報告者:崎濱紗奈(EAA特任研究員)

文運日新 03

離任にあたって

田村正資

2022年3月4日

2021 年 3 月をもって、任期満了で特任研究員を退職し、学術的な研究機関から離れることになった。震災の年に入学してから 11 年間、東京大学（とりわけ駒場）にお世話になった。高校生のころは、もう小学校の 6 年間を超えて同じ機関に所属することはないだろうと思っていたが、振り返ってみれば小学校を 2 周できるくらい長い時間を過ごしたことになる。これといった将来の展望もないままに入学したが、哲学や思想をただ学ぶのではなく研究するという生き方に出会い、ひとたび魅了された。博士課程に進学し、EAA で研究員として働くことになった。そして、2 年間の任期を終えて研究を生業とする生き方からひとたび離れることにした。

EAA には 2020 年の 4 月から 2 年間、研究員として在籍した。この 2 年間のあいだ、EAA の業務に携わりながらも、のびのびと自分の研究に打ち込むことができた。この機会を提供してくださった EAA のみなさんには、あらためて感謝したい。

EAA の業務として印象深いのは、2020 年度の学術フロンティア講義「30 年後の世界へ」やちくま新書の『世界哲学史』シリーズの刊行を記念して行われた一連のシンポジウムの運営に携わったことだ。ほかにも、各種シンポジウムや書評会など、自分の考えを発表する機会も数多くいただいた。自らの専門であるフランス哲学やメルロ＝ポンティの研究をしているだけでは出会うことのなかった人々や主題にふれることができた。人類史上稀に見る疫病の流行によって学術的な成果を発表する場がオンラインに移行したことも、未知の分野を広く浅くみわたそうとするときには利点となった。

個人的にもっとも大きな成果となったのが、EAA で刊行されるブックレット『偶然と実存』の執筆である。同書では、偶然性というテーマを軸に、九鬼周造、メルロ＝ポンティ、メイヤスーの 3 人について論じた。そのなかでも取り上げたが、九鬼周造は「偶然性」を「独立した二元の邂逅」と表現している。そのような意味で、このブックレットは筆者と EAA が邂逅したことによる偶然の産物である。東アジア藝文書院という場に恵まれたことで、それまでフランス哲学の研究に閉じこもってきた筆者がその外に一歩踏み出すことができた。この実り豊かな出会いを著作のかたちで残すことが出来たのは、研究者として幸福なことであった。

これからの 1 年間は、研究機関ではないところに所属しながら博士学位請求論文をまとめていかなければならない。EAA からも研究機関からも離れる道を選択した理由はいくつかあるが、この 2 年間のあいだに自分自身が置かれた偶然的な状況から伸びた芽がどのように花を開くのか見届けてみたくなったからである。大学のなかで業務に携わりながら研究に従事する道も、研究から完全に離れて別のことをやる道も自分には選べなかった。そうして過ごした博士課程より後の 5 年間を振り返ってみたとき、他の人からは中途半端に見えるかもしれない道が自分にとって理の通ったものなのではないか、と思うようになった。

大学でなければ研究に従事できないのではないか、という思い上がりを捨て、研究でなければ熱中して打ち込むことができないのではないか、という不見識を拭い去ること。借り物の執着に身を委ねず、自らの偶然性にしっかと向き合うこと。EAA で過ごした 2 年間

は内省の2年間でもあった。

筆者がEAAに在籍した期間、オフィスへと出勤したことは数えるほどしかない。自分の部屋のなかに閉じこもっているあいだ、世界の秩序はあらゆる意味で大きく組み変わってしまった。目まぐるしく移り変わる状況は、このあいだまでアクチュアルなものだと感じられた思索を一瞬にして陳腐なものに変えてしまう。状況に翻弄された思想は、情勢に即応するべく整えられた表情を引き剝がされ、その地金を晒すことになる。そうした趨勢を目の当たりにしながら人文学研究に携わったことは、今後の筆者にとって本質的な経験になるだろう。

鵬程万里07

RA任期を終えて

小手川将

2022年3月4日

小手川将氏

始まりは2020年11月のことだった。EAAの駒場オフィスが位置する101号館が、旧制第一高等学校時代、中国人留学生のために建てられた学び舎だったという歴史的な巡りあわせから2019年春に生まれた一高プロジェクトの、その充実した研究成果をもとに、101号館という建築を映像作品にするという企画が動き出したときである。「101号館映像プロジェクト」と銘打たれたその制作に、リサーチ・アシスタントとして参加してから1年余りの月日が流れた。短いあいだに紆余曲折を経て、映像プロジェクトは『籠城』というタイトルの一つの映画作品に結実しつつあり、わたしたちの眼前にまもなく誕生する。また、ぐるぐると制作が混迷していた昨年7月頃に「藤木文書アーカイブ」プロジェクトにも参加することになり、こちらも今年3月22日から開催される展示「もうひとつの一高——戦時下の一高留学生課長・藤木邦彦と留学生たち」にて、その集大成を示していくことができるだろう。要するに、EAAでのわたしの営みはこれから花開いていくのであって、何らかの果実が自分から離れていくという感覚はまだないのだが、今年度末でリサーチ・アシスタントという任を離れることになる。そういうものだろう。社会と生のリズムがわたしを通り過ぎていく。

しかし、それにしても、あの頃の自分は、旧制一高をテーマに映画作品を監督することになるなんて予想だにしなかったはずである。ひたすら何かを作りたくて、作らずにはいられなくて、おこがましくも多くの人を巻き込んで、無茶な考えを実現しようと躍起になるわたしの散乱する欲望に、辛抱強く、具体的な制作の場を与えていただいたEAAと関係者の方々には感謝してもしきれない。謝意を述べようとすれば次から次に顔が思い浮かんで際限ないので、ここでは、「101号館映像プロジェクト」にわたしを誘いかけて、いま一区切りがつこうとしている1年余りの冒険のきっかけをつくってくださったEAA特任研究員の立石はなさんに、特別のお礼を申し上げたい。

季節は春めいて、101号館前に見られる白梅の蕾も開いてきた。昨年2月、旧制一高についてほとんど何も知らなかったわたしは、駒場博物館に所蔵されている関連資料を読み漁っていて、寮日誌のなかに、日中両国生徒の親睦融和を目的とした棣華会の議事録を見つけた。「棣華」とは梅花のことだと知り、咄嗟に、いまのうちにこの象徴的な花を撮影しておかなければならないと思った。結局、そのときの映像が『籠城』に使われることはなく、風にそよぐ梅木と101号館の外観という何てことのない風景が、わたしの意図とはまったく無関係に記録されているのみである。そして、時間は巡り、同じ場所で、わたしは梅の旬を迎

えている。

柔らかな陽光に照らされて先々のことをぼんやりと思案しながら梅の撮影をしている当時のわたし自身を、いま思い浮かべてみる。振り返ってみれば、たいして昔でもないのに随分と遠い出来事のように感じ、それなりに変わることができたかなとほくそ笑んではみるものの、自分の変化を少しでも事細かに語ってみようと試みると、たしかに生きてきたみずからの過去を感傷的に飾り立てる愚行を犯してしまうように思う。そもそも、曲がりくねったここまでの道程にいったい何の意味があったというのだろうか。それはわたしの回想にではなく、わたしたちの映画作品と展示のなかで現れてくるものだろう、そうなるように願っている。

いつからかあまり自分の過去を顧みることがなくなった。もとより物覚えは悪いほうで、思い出せないことが増える年頃になっただけのような気もする。何かを作りたいと欲するようになったのがいつのことなのか、まったく定かではない。いつまでこの自分の生が続いていくのかも当然わからない。この先、わたしはどれほどの仕事に着手して、いくつの区切り線を引き、このように生の道筋を振り返っては自分を継ぎ接ぎにする機会を得ることになるのだろうか。知る由もないが、しかし、少なくとも、先へ、もっと先へと生き続けなければならない——そのように、わたし自身に言い聞かせるように記して、筆を擱くことにする。

写真撮影:立石はな(EAA特任研究員)

鵬程万里 08

RA任期を終えて

宮田晃碩

2022年3月4日

この1年間、RAとしてお世話になりました。3月末をもって任期を終えるとともに、5年間の博士課程を終えることにもなります。リサーチ・アシスタントとは言いながら、何より学びの機会をいただいており、それにどう報いるべきかということを考えるためにも、いささかこの間のことを振り返りたいと思います。「哲学」に携わる者としてどういう景色が見えているのか、そのことを自分のためにも確認しておきたいと思います。

思えば多くの自由を駒場で享受してきました。学部には理系で入学しましたが、自分で考えるということを突き詰めたいという理由で、新設された駒場の「現代思想コース」に進学しました。中島隆博先生の演習でデリダやレヴィナスを（翻訳ですが）読んで議論したり、石井剛先生の授業で戴震の思想と哲学に触れたりしたことをよく覚えています。卒業論文では「問い」について書きました。自由に考えてよいという気風において、これほどの場所はなかったと思います。修士課程からは主専攻に加えてIHS（多文化共生統合人間学プログラム）というプログラムでも様々な経験と学習の機会をいただきました。そこからの繋がりで、地球研（総合地球環境学研究所）でインターンシップをさせていただいたことも大きな経験でした。そうした恩恵と一続きになって、EAAでの活動があります。すべてが網の目のように連なっていて、まだ私も見通せていない広がりのなかの結び目の一つに、いま立って考えているような次第です。

RAとして具体的に携わったのは、いくつかのイベントや授業の報告書の執筆と、学部生向けの「東アジア教養学」の授業のTAでした。またRA着任以前から、「石牟礼道子を読む会」に参加させていただいておりました。

報告書を書くというのは些細な作業のようで、存外多くのものを背負っている、というのは恥ずかしながら最近気が付いたことです。それはもちろん講演の内容やイベントの模様を正確に伝えねばなりませんが、同時にその読み手を想像する作業でもあり、そのなかで

自らの態度を文体に反映させる作業でもあります。話を大きくするならば、世の中には既に多くの書物があり研究があり営みがあるわけで、それを「伝える」というのは何か新たなことを「論ずる」というより根底的なことなのかもしれません。「聞き書き」的なものへの関心が自分のなかに育ってくるにしたがって、また情報の伝達がますます容易になる様を見るにつけても、伝えるというのは謙虚さを必要とする重要な営みであると思われてきます。

TAとして参加した佐藤麻貴先生、張政遠先生の授業では、受講生の皆さんと、また先生方と「共に考える」という貴重な機会に与りました。単に一定の知識を伝授するというのではなく、毎回が受講生、先生方、そしてRAにとっての挑戦という趣きで、十分に役割を果たせていたかは甚だ心許ないのですが、幅広い問題をいわば「例題」としてではなくまさに自分たちがそこに身を置く問題として見据えながら、それぞれに自らの知識を試し、なお学ぶべきことを明らかにしていくというあの時間は、他に代えがたいものだったと思います。ただそれだけに、なかなか同じ場所に集まれなかったのは心残りです。互いの考える姿、語り合う姿をもっと間近に感じられればと強く思ったものでした。それでもこの縁は再びどこかで、何かの形で繋がるものと思います。

「石牟礼道子を読む会」は高山花子さん、宇野瑞木さんを中心に企画され、2020年6月から様々な形で実施されてきました。『苦海浄土』3部作とそれに関わる論文を読むことから始まり、文章に留まらず映画や能などにも触れながら続けられ、シンポジウム形式のワークショップは3回開催されました。鈴木将久先生が「オアシスのような」といつか表現されたように、テクストや思想を通じて、心を深い水脈に通わせるような会だったと思います。もともとパンデミックに際して何ができるかと企画された会で、学ぶことも多くありつつ、私にとっては「文」そのものが既に実践であり人を生かすものであると思わせる会でもありました。これも感謝が尽きません。

学ぶべきことの多さをあらためて知る1年でした。これは己の至らなさや課題を知るということでもありますが、私一人のみならず「学ぶ」ということ自体が追求され墨守さるべき営みなのだと感得することでもありました。学ぶことの根幹には、何かを大切にするということがあります。学者が文字通り「学ぶ者」であるとすれば、その成熟とは、ますますよく学びうる者になることであろうと思います。たとえば具体的な話として、私はハイデガーという哲学者のテクストを一次資料にして研究をしていますが、その研究が学問として今日性を持つためには、ハイデガーの「理論」を様々に「応用」して新たな「説」を立てるのではなく、むしろハイデガー的な問いを携えて世界に臨むなら私たちは何を（ハイデガーにではなく）世界に学びうるだろうか、ということを考えねばなるまいなどと思います。それがハイデガーという哲学者への誠実さであろうとも思います。

つねに途上にあらざるを得ない「学ぶ」という営みを支え続けるのは容易ならぬことで、私の認識しきれない大きな支えが内外にあってEAAは成り立っており、その一翼を拙くも担わせていただいたことは大変な光栄です。この場を借りて改めて、お世話になった皆さまに感謝申し上げるとともに、今後益々の学問の豊穣を祈りたいと思います。誠にありがとうございました。

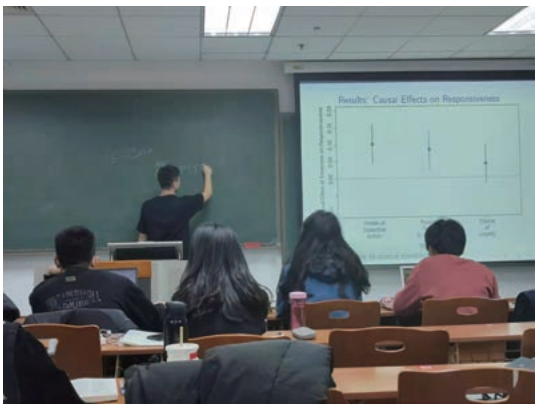
2021 Autumn Semester PKU Exchange Report

My unforgettable memories in *Beida* and why I found them memorable

2022年3月7日

My dear reader, my half-a-year exchange at Peking University turned out to be great, in fact, it was greater – greater than what I could have ever expected from any exchange experience. Over the course of several months that seemed all too short, many things have come to wonderful fruition – my studies, friendships, and self-reconciliations. Now, if you allow me a moment, let me try my best to explicate.

Arriving with no high hopes of living a 'decent and happy' life as I was well aware of the 'notoriety' of PekingU's almost 'inhumanely' demanding intellectual training and a somewhat visceral fear in the face of possible cultural shock, I was, completely out of the blue, immediately welcomed by my lovely roommates of 250 in Building 35, whom I enjoyably spent the rest of my semester with. Now in retrospect, our encounter turnt out to be something I cherished dearly during and after my stay. Our companionship played some key role in helping me adapt and adjust. It helped me to transform myself from a *Todai* running-around-headless-chicken to an old school *Beida Sheng* (PekingU Student) from day one with that typical *Beida* swagger who gallivants around the landmarks of Weiming Lake and Jiayuan Canteen every now and then. The friends I met at PekingU grabbed me to go on refectory hopping, shuttlecock smashing, and from mediocre to hardcore statistical puzzles solving, none of which seemed like the kind of harmonious collective-life I would have belonged or desired – all felt surreal and a tad too splendid. It is thanks to their lovely company now that I finally came to realise the contrastingly lonesome life that I used to live (said only semi-jokingly).



Classes here at PekingU are often taught by inspiring teachers (and co-taught by aspiring students), and by often, I am subtly insinuating the possibility of falling into the hands of few professors who are recognised by students as more of storytell-ers than proper profess-ors. "Professor A only talks about random episodes that are irrelevant to any of the classes so don't take his class!"; "Professor B is the same!", at the end of the day, when local students warn you in such a demanding tone, you'd better show some compliance, and that's what I did. Now judging from my experience, it seems safe to conclude that I did not get much of the storytelling! Let me be more specific about the classes I took here. I like social sciences research. I find the research methodology fascinating because they are powerful, intricate, and rigorous; likewise, I like the substantive political science enquiries as they are imperative and fun. I enjoy learning all sorts of things that include conflicts, government responsiveness, political behavior, bureaucratic promotion etc., as well as how we can

make better causal inference to update the extant understandings in these fields. For the record, I have taken classes on survey methodology and conducted a collaborative project that deployed university-wide list experiment to investigate the impact of Marxist school society on student's political opinions. I have also taken classes on the more theoretical side of things, i.e. intermediate econometrics and political game theory. Besides the undergraduate courses, I have also infatuated myself with two graduate level seminars – political analysis and politics of development – of which we attended the seminars with our heads and hands full of notes, knowing that there would be intense but fruitful debates taking place each week. I have also cherished every interaction with the professors and teaching fellows. In particular, I developed good relationships with Prof. Ma Xiao and Prof. Liu Yanjun from the School of Government as I learnt a ton from them about authoritarian politics and political methodology. I still find much joy discussing various academic ideas with them till today.

I also used my Peking time to (learn how to) heal and self-reconcile. Getting good at juggling multiple tasks takes time, hence life can be a little taxing before you get there. Besides all the schoolwork, on Sundays I have been meeting (virtually) with my generous mentor, collaborator, and friend Connor (whom I fortunately got to know from a *Todai* class) to talk about research and learning progress. I also attempted preparing for my graduate school applications on top of all the things, although it did not proceed quite as I wanted in light of various reasons (and one of them was Covid). Nonetheless, what I did eventually manage to get a slight hang of was the ability to learn by easing and making peace with my mind, rather than stressing, hurting, and forcing. Even though self-talk on self-care can sometimes seem like nothing short of a cheesy, trivial, and empty statement, I do genuinely believe the power of these little mental breakthroughs will take me a long way.

No longer tucking myself in that typical PKU bunker bed, now that I am typing and thinking my memorable *Beida* days in my faraway home, I know for a fact that I received lifelong companionships, solid but forefront social science training, and a little bag of remedies I collected along the way that now and hereafter keep my body and mind productive and relaxed. I believe PekingU has made me a much better scholar, friend, and person. I herein thank everyone who has helped me to have the privileges to have been on this ride. And these are the reasons why my *Beida* memories are unforgettable.

PS: I developed a hobby of journaling/blogging in Chinese while staying at PekingU and you are more than welcome to take a glimpse at what I jotted down there. If you are interested, please visit https://xiaolong-yang.com/post/2021/09/10/ 北大小记 /. I thank you for visiting.

Report by Xiaolong Yang (EAA Youth)

文運日新 04

離任にあたって

佐藤麻貴

2022年3月7日

安禅不必須山水　（『碧巌録』第四十三則より）

今春で、博士課程入院から数えて 9 年間（2013 年 4 月～ 2022 年 3 月）在籍した東京大学を離れる。この間、学生、教務補佐員、研究員、助教、准教授と、様々な役割を担わせていただいた。一つの区切りとはいえ、まだ道半ばだと自覚し、自らが探求の試みの只中にいる者が、退任にあたり所感を述べるのは大変おこがましいことと思う。こうした機会を頂戴することに深く感謝すると同時に、この所感は所詮、愚者の戯言であることを、まずは明記しておきたい。

私事になるが、東京大学とは、なんとなく、ものごころついた頃から縁を感じている。陸蒸気に乗って上京し、銀時計を携えて兵庫に帰郷した曽祖父をはじめ、東京帝国大学時代から、身近な親族の中に東京大学と縁のある者がいるからだろう。私個人は東京大学を横目に、学部と修士は慶應義塾大学で 6 年間を過ごした。然しながら慶應でも、指導を受けた教官の大半は東大卒であった。学部時代は、衛星画像分析や地理情報システムの指導教官 SK に連れられて、本郷の空間情報基盤センターや当時は六本木にあった生産技術研究所に足しげく赴いた。修士時代は、指導教官 YK が退官まで本拠地にされていた本郷の工学部三号館をはじめ、弥生門を通り抜けて学生のタコ部屋研究室があった浅野キャンパスへと、毎日のように通ったことを思い出す。当時はキャンパス内には女子トイレというものが大変少なく、男子トイレを失敬しては、諸兄方を驚かせていたことが懐かしい。

社会人になって暫く社会の荒波に身を委ねていたが、ヘルマン・ヘッセの『デミアン』（1919 年）の一節にあるように、「私は、自分の中からひとり出て来ようとしたところのものを、生きてみようと欲したにすぎない」という動機から文転し、東京大学大学院総合文化研究科に哲学、思想を試みる者として入院する。この試みは、振り返ると、大変刺激的であったと同時に大変困難な道を自らが選択し、自らに課すことでもあったように思う。文系的な世界は、世界の理不尽や非合理的な混沌をそのまま内包し、包括的に体現している。それは、自らが論じる世界をシステムとして切り取り出し、システムを構成する各構成要素を自らが再定義することで、それらの振舞を客観的に理解しようという検証可能性を担保した科学的なアプローチとは、随分とアプローチ手法を異にする。しかしながら哲学や思想に戸惑う私の傍には常に、忍耐強い先生方と心優しい友人たちが、伴走して下さった。

今の私は入院前と比すと、哲学や思想を、それなりに理解し、サブスタンスとして目には見えない概念の連関を把握し、その中から未来へと繋がる新しい概念や考え方の糸口を探り出そうとしている者になっていると自覚する。自覚はするものの、今の私は、やはり、文系的思考に対する、釈然としないものを常に抱え、おろおろと試行錯誤している。つまり、私は知的に成長したことを自覚するが、それは知識を蓄えたに過ぎず、まだ智慧にまで昇華しきれていない過渡期にあると言える。それはつまるところ、物事を断言したり、言い切ることができないという、もどかしい見地に逆戻りしたということでもある。深く広く物事を知るということは、人から、言の葉を奪うというパラドックスがあるようだ。しかし、敢えて、そのパラドックスに留まり、額に汗しながらも言葉を紡ぎ出していこうとする作業が、文系的研究の醍醐味でもあるだろうと思う。加えて、自らが紡ぎ出した言葉が構成していく概念、それらを導出していていくための日常における思考的態度を、自らが客観的、反省的に、文字として再帰的に読み返すという作業をしていない、あるいはそうした作業から離れた人間は、既に、学を志す場にいながらにして、学を志す者ではないのだろうということも、容易に推測されるに至った。このような見地に立つと、

古代から現代に至るまで、本質的に物事を論じている人間が如何に少なく、希少であるのか、ということに気付かされる。と同時に、巷にありふれたゴミではなく、珠玉に触れる機会を保つべく努力することが、自らが課した知の探求の品位を保つ手段でもあろうと思う。

東京大学を去ることは、一つの区切りである。しかし、それは次の側面へ移行するだけのこと。私にとっては、東京大学とは一つの通過点に過ぎず、哲学、思想を探求する者としての御免状を獲得した場所である。東京大学という場は、たくさんの良い思い出と、心温まる素晴らしい出会いをもたらしてくれたと同時に、苦々しく腹立たしい経験をさせられたことに加え、人間のみじめで、くだらない側面を、実にまざまざと間近で観察させられた場でもあった。『碧巌録』の「安禅不必須山水」という言葉は次第に私の座右の銘になった。東京大学に在籍した9年間、様々な役割を与えていただき、それらの役割に応じて東京大学に関わらせていただいた中で強く思うのは、東京大学を形作るのは、人生の一時の間、この場に集う、何ものにも代えがたく掛け替えのない、一人ひとりの人材である。一人ひとりが宝であり、そこには本来、学生、教員、職員、有期雇用、無期雇用、年齢、ジェンダーの差異など一切無いはずだ。ある友人が、人間を深く失望させるのも教育の一環だと教えてくれたが、学を志す場というのは失望を誘うのではなく、大学への関わり方や大学での立場に関係なく、己己円成—個々人が美しい花を咲かせること—を相互扶助する場であるべきと思う。東京大学の学生、職員を経て教員になった一番の喜びは、真剣に智と向き合おうとしている学生から、逆に私が教えられることの愉快さと、彼らが未来へと繋いでいってくれる希望に触れられたことでした。

私はこの春、この場所で得た種々様々なことを胸に刻み、この場所から解き放たれ、新たな未知に向けて旅立ちます。長い間、お世話になりました先生方、陰ながら支えて下さりました職員のみなさま、私の授業にお付き合いいただいた学生諸君、お一人おひとりに、この場を借りて心から御礼申し上げます。大変得難い、貴重な学びの機会を頂戴し、誠にありがとうございました。

文運日新 05

離任にあたって

片岡真伊

2022年3月7日

EAAの特任研究員に着任したのは、コロナ禍で1年以上都市封鎖が続いたロンドンから帰国した後のことだった。高校卒業以来、博士後期課程を除いて学究生活の大半をイギリスで過ごした私にとって、EAA、そして駒場での日々は、いままで触れたことのない異なる文化や観点、言語・言葉との出会いの連続だった。日本の学術環境、テクストの読みの作法の違い、東アジアの文脈に関わる研究やパースペクティヴなど、新たな他者との出会いや刺激に満ちた日々を送ることができた。

EAAでは「学術フロンティア講義」、「現代作家アーカイヴ」をはじめ様々なイベント・サポートに携わり、それらの業務を通して、教育・研究企画の舞台裏を垣間見る機会を得た。また、「部屋と空間プロジェクト」、「批評研究会」では、今まであまり交流の機会のなかった分野の先生方から、異なる分野の多様な観点を学び、自分自身も多元的な見方の重要性に気づくことができた。

この1年で特に印象深かったのは、EAAグローバル・レクチャーを企画・運営したことだった。この企画は、複数の文化・言語・分野との接触・交わりを通して様々な問いを探究してきた研究者を海外から招き、ゲストが「今何を問いかけるのか」をテーマにしたものである。学生や研究者たちが、対話を通じ

て異なるパースペクティブに出会い、新たな可能性を切り拓く機会になればという思いから企画した試みであった。お招きした先生方は、様々な分野・言語・文化・学術環境を経験したことのあるユニークな経歴の持ち主ばかりである。

充実した講演内容はもちろんのこと、私が何よりも刺激を受けたのは、企画の準備段階などで聞き知ったゲストの先生たちの研究者としてのこれまでのあゆみや底しれぬ探究心、そしてその原動力だった。とりわけ業績リストには書かれていない彼らの自分史を知ることができたのは、EAA の企画があってこそ初めて知り得た姿であり、博士学位論文提出後、今後何年、何十年先の自分を支えていくような軸を模索し続けている私にとって、先生方の研究者としてのゆき方そのものが大きな刺激となった。今振り返ると EAA で過ごしたこの 1 年は、これまでの自分自身、現在の「私」を見つめ直すとともに、これからの自分が学究人としてどう在り、どうしていきたいのか様々に考えを巡らせる大切な期間であったように思う。

コロナ禍という未曾有の危機は私たちに様々な課題を突きつけた。だが一方で、EAA という豊かな学術環境との出会いに恵まれ、また未だ断続的ではあるものの徐々に取り戻しつつある対面の場や時には時差・距離を超えたリモート環境において、研究や学問について語り合い、学びを分かち合うことの悦びや素晴らしさを噛み締めることができたように思う。

EAA で過ごした時間により、私が見渡す風景は確実に変わった。この 1 年で得た経験や出会いを糧とし、異なる言語・文化・学術背景を持つ研究者や学生たちの架橋となれるよう、力を尽くしていきたい。最後に、このような充実した時間を与えてくださった EAA のメンバーの方々、そして EAA に関わる皆様に心から感謝したい。

鵬程万里09

RA任期を終えて

日隈脩一郎

2022年3月7日

日隈脩一郎氏

あまり時間への感性（というよりも、感性全般）が鋭敏ではないので、過ぎ去りゆく早さであるとか、まるで沈滞でもしているかのような鈍い遅さであるとかが実感されることはない。

コロナ禍とともに幕を開けた博士課程 1 年目は、どうにも倦んでいた。何かがしたいと思っていた。手当たり次第に物色した。そんな矢先、2020 年 10 月にツイッター上で見つけたのが、「101 号館映像プロジェクト」と後に呼ばれ、映画『籠城』に結実する企画への RA 募集の案内だった。

大学に入学して、ある友人――彼はいまフランスで研究だか飲酒だかをしている――の影響で都内の名画座やミニシアターに足繁く通うようになった私は、映画への臆見を解きほぐしていった。大学院でその研究をしようとまで思い募った、映画への憧れは、けれども一旦は自分のなかで後景化してゆくことになる。

好機は突然訪れるものである。迷わず応募した。映画への憧れは、実は駒場、駒場的なるものへの憧れでもあった。（今でもそうだが）平凡な高校生だった私は、文学や芸術など一顧だにしなかった。気の利いた暇潰しの手段ていどに思い、人間にはもっとやるべきことがあると考えていた。

それが駒場に来て一変する。詳細を記すと本稿の趣旨と離れてゆくからおくとして、とまれ駒場は、玩具箱のような場所であり、活力源だった。自分の専門が何なのかさえ、わからず震えていた私にとって、だから駒場に来ることはほとんど必要ですらあったのだと思う。震えは駒場という遊び場で駆け回る動力に転化した。2021 年夏には、「藤木文書アーカイヴ」の RA も兼任し、ますます遊びの幅が広がった。地下に潜っ

たり、貴重な生の史料に触れたり、学部1年時の語学の先生に研究会でお会いしたりと、2度目の前期教養学部を体験したようだった。

しかし、無軌道に遊んでばかりもいられない。関わる人が増えれば増えるほど、遊びはルールに準じたものになる。そのルールをしばしば反故にしてしまった。足掛け3年、多くの人にご迷惑をおかけし、年甲斐もなく色々な人に叱られた。いや、叱っていただいた。叱られるまでが、遊びだったのかもしれない。

ところで、駒場時代の二十歳そこらの私に哲学の火をつけた先生に、RAとして駒場で再会したことも特筆すべきエピソードとして思い出される。先生いわく「駒場は普通、ずっといるところじゃない、通り過ぎるところだ」と。あたうかぎり遊んだと思う。そろそろ家に帰らなければならない。あるいは、家を出なくてはいけないだろうか。

写真撮影:立石はな(EAA特任研究員)

The 10th EAIHN Online Seminar

2022年3月8日

On 8th March 2022, the East Asian Intellectual History Network (EAIHN), through the auspices of the EAA (East Asian Academy) at the University of Tokyo, hosted a review session by Tomohito Baji (University of Tokyo), Michael Ratnapalan (Yonsei University) and Hanno Terao (Waseda University). After opening remarks by the chair, Shinji Nohara (University of Tokyo), Baji introduced his recently-published monograph, *The International Thought of Alfred Zimmern: Classicism, Zionism and the Shadow of Commonwealth* (Palgrave Macmillan, 2021). His talk was followed by two reviewers' comments and questions. The abstract of the seminar is as follows:

Dr. Baji briefly summarized the key aspects of his book. As the first, comprehensive analysis of Zimmern, the monograph offered his international thought, as well as an intellectual biography, including his views on the British Empire and Commonwealth. Zimmern was particularly influenced by Edmund Burke's idea of reconciliation of 'private' and 'public' virtue. Among contemporary historians and political theorists, he was also untypical in being sceptical of the Anglo-centric views on the international order, even though his idea was still somehow Euro-centric. Zimmern was also highly interested in democracy and cosmopolitanism so as to propose 'a Euro-Atlantic' community. Later, after world war two, he also put forward the idea of 'federal-republican oneworldism'. In the next part of the session, two reviewers, Dr. Ratnapalan and Dr. Terao, commented on aspects of the book. Ratnapalan asked a few questions relating to Zimmern's concepts of race, culture, and religion, including their sources which Zimmern chiefly relied. Terao also commented and asked with regard to Zimmern's 'Burkean liberalism', internationalism (or multiculturalism) and imperialism. The response from Baji and a floor discussion followed.

Report by Sora Sato (Toyo University)

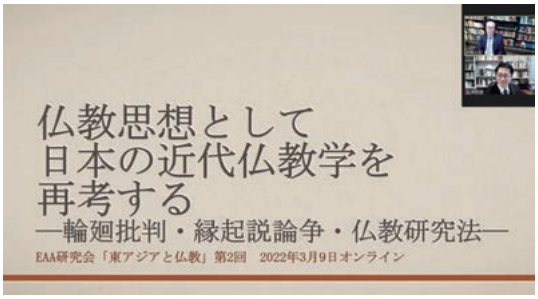
第2回 EAA研究会「東アジアと仏教」

2022年3月9日

2022 年 3 月 9 日（水） 日本時間 15 時より、第 2 回 EAA 研究会「東アジアと仏教」を開催した。この研究会は、人と仏教の交錯から東アジアの歴史や文化、思想、芸術などを照らし出そうとする試みである。第二回となる今回は一色大悟氏（人文社会系研究科）が、「仏教思想として日本の近代仏教学を再考する：輪廻批判・縁起説論争・仏教研究法」と題して研究発表を行った。なお司会は柳幹康（東洋文化研究所）が務めた。

一色氏は「アビダルマ」と呼ばれるインド仏教の解釈学を専門とする仏教学研究者であり、近年では日本の近代仏教学を仏教思想として考察する研究を進めておられる。氏によれば「アビダルマ」の理論体系と近代仏教学とは、仏教の初期経典を資料とする解釈学としての側面を共有しており、「アビダルマ」と同様に近代仏教学も仏教思想の一種として考察することが可能であるという。そのような企図のもと今回は、近代日本において、多くは僧侶でもあった仏教学者たちが、西洋から伝来したインド学という新たな知識体系を参照しつつ、どのように仏教思想を近代的に再解釈しようとしたか、あるいはどのように仏教聖典を読みこなすことで再解釈が可能になると考えていたかを分析していただいた。その内容は大きく以下の二つ――(1) 明治期に仏教学においていかなる課題が生まれていたのか、(2) 仏教の再解釈が問題となる大正期においていかなる理解が示されたのか――である。

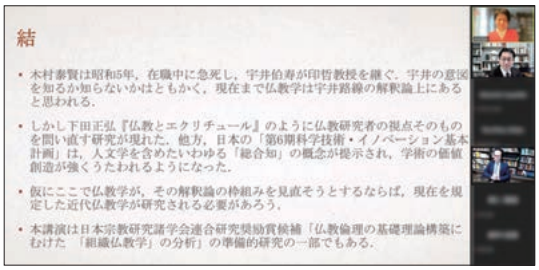
(1) 明治期に仏教学が直面した課題として氏が着目するのが聖典解釈論（仏教研究法）と輪廻批判の二つである。仏教では伝統的に輪廻説をその前提とし、聖典の増加・多様性を認めるものであった。それに対し西洋由来の文献学では、文献の比較により教説の真偽を見極める、文献の新旧の弁別を通して仏教本来の姿を求めるなどの削減の論理を有していた。また死んだ後に新たな生を得るという輪廻説は、一生涯という期間に限定された人間に経験されえない事柄であり、その論拠は古来聖典に依存していた。西洋由来の聖典削減の論理が広まった明治 20 年代を分水嶺として、輪廻説も非科学的なもので真理ではないと批判され、やがて知識人・研究者により語られることがなくなっていった。かくして、聖典・輪廻の 2 点において伝統的な仏教観とは大きく異なる近代仏教学が成立するにいたったのである。



(2) このような「科学的」な仏教研究に対し、大正期になると複数の仏教学者から疑問が呈され、伝統的な仏教教理の再定位が試みられるに到る。一色氏はそれを行った重要な人物として木村泰賢と宇井伯寿の 2 人を挙げる。両者は帝国大学印哲研究室の 2 代目・3 代目教授であり、ともに曹洞宗の禅僧であった。

木村は業と輪廻、あるいは行為が人生をいかに変えるかというテーマを生涯にわたって問い続け、伝統的には輪廻を前提に解釈されていた「十二縁起」を、「生きようとする意志」に端を発する人間形成の過程として新たに解釈した。また木村は輪廻を、積極的な人生を可能たらしめるものと解釈する。すなわち木村によれば、人は輪廻を「確信」することによって、「運命に安んじながらも喜んで善と正義とに固執して、人のために尽くすこと」ができるのだという。一色氏はこれを菩薩道の観点からの輪廻説、聖典解釈論とみる。

一方、宇井は文献学的手法によりその限界を示すことで、自身の信じる「仏陀の根本思想」を語る余地を生み出している。すなわち仏教の原点たる仏陀自



身の思想を知るための根本資料となるのが原始仏教の経（仏陀が語った教え）と律（仏陀が制定した規則）であるが、そのいずれも不足しており、その原点に文献学的に遡ることはできない。そこで宇井が採用する手法が、不足している経・律に加え、仏陀の重要な事蹟と当時の一般的な思想とを合わせ見ることで、「最も確実にして何人も疑わない」ような「仏陀の根本思想」を推論するというものである。このような宇井の戦略について一色氏は、禅宗の「教外別伝」（教えの外で別に伝えるという）説の影響の可能性を見る。文献学の手法を教（経・律）に限定し、それを超えた真理を推論に委ねることで、学術領域の客観性と自身の信念を両立させようとしたのではないかと考えるのである。

以上の分析ののち、人文学を含めたいわゆる「総合知」の概念が提示され、学術の価値創造が強くうたわれる昨今の日本学術界の動向を参照したうえで、「仮にここで仏教学が、その解釈論の枠組みを見直そうとするならば、現在を規定した近代仏教学が研究される必要があろう」と述べ、講演を結んだ。

その後、参加者より様々な質問が寄せられた。たとえば、「木村の十二縁起の解釈と輪廻への確信はどのような関係にあるのか」「宇井に見られるような禅的な解釈が木村にも認めうるのか」「西洋の仏教学の同時代的な影響はあるのか」「仏教学者の学説を批評する際に、その出自に注目することは適切なのか」「そこに近代の文脈だけでなく、研究対象である古代インドの文脈も合わせて見る必要があるのではないか」などである。これらの質問に対し一色氏によりそれぞれ返答がなされ、活発な意見交換が行われた。

当日は平日昼間の開催であったにもかかわらず、貴重な時間を割いて約30名もの方にご参加いただきました。この場をかりて改めて篤く御礼申し上げます。

報告者:柳幹康（東洋文化研究所）

〈現代作家アーカイヴ〉文学インタヴュー

第24回 川上弘美氏

2022年3月9日

2022年3月9日、飯田橋文学会、東京大学東アジア藝文書院（EAA）、東京大学ヒューマニティーズセンター（HMC）、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属共生のための国際哲学研究センター（UTCP）の共催による「〈現代作家アーカイブ〉文学インタビュー」の収録の模様がZoomにて同時配信された。第24回を迎える今回のゲストには、小説家である川上弘美氏をお迎えし、聞き手を木村朗子氏（津田塾大学）が務めた。インタビューでは、川上氏の自選作『真鶴』（文藝春秋、2006年）、『大きな鳥にさらわれないよう』（講談社、2016年）、『ぼくの死体をよろしくたのむ』（小学館、2017年）を中心に話が展開された。さらに、作品世界内外にわたる様々なエピソードも織り交ぜ、川上氏の創作活動の歩みが紡ぎ出された。

インタビューは、川上氏が執筆活動を本格的に開始するまでの経緯にまつわる話に始まった。創作を始めた頃の川上氏は、前の世代が蓄積した豊穣な創作成果に圧倒されると同時に、男性作家の小説や戦争を描く小説といった、当時の日本文壇を支配した小説と自分の描きたいものとの齟齬を痛感し、「何も書くことがない」という思いに長く憑きまとわれていたという。

左から順に川上弘美氏（小説家）、木村朗子氏（津田塾大学）

だが、多和田葉子の『犬婿入り』（講談社、1993 年、同年芥川賞受賞）に触れた際、川上氏は「この感じを描きたい自分がいる」ことを意識し、それに突き動かされ、執筆活動に精力的に取り組むようになった。

インタビューでとりわけ興味深かったのは、作品世界における「瞬間」の捉え方をめぐる川上氏の見解である。川上氏が紡ぎ出す、「漲って滲み出し、ついに散っていく」ような、移ろいやすく、不確かさに満ちた作品世界は、様々な瞬間の感覚を切り取ろうとする氏の意欲から生み出されるという。「消えてしまう瞬間のものを見せようとする」創作の姿勢に対して、氏は、福岡伸一の著作を参照した。そこに記される、身体を構成する分子が、一定不変に見えるものの、実は絶え間なく入れ替わり、瞬時に変わりゆくものであるという生物観と、氏の創作をめぐる意識には通底するものがあると語った。すなわち、一見すると変化のない全体像の中で、移ろい変わり続ける瞬間を掴もうとする意識こそが、川上氏の作品世界に色濃く刻印され、滲みあふれるものである。

こうした「瞬間」に対する執着は、川上氏の創作方法にも波及している。短編小説を好んで書いた氏にとって、短編小説とは、ある瞬間のことを細部まで見極め、その瞬間の変化を切り取るものである（これを川上氏は数学の「微分」に喩えた）一方、長編小説とは、全体像を巨視的に積み上げ、時間の流れの積み重ねを表現する方法（こちらは「積分」に喩えられる）である。それ故に川上氏は、短編小説を書くことを通して、書くことの喜びを噛み締めることができる一方で、長編小説を書くことに対しては、やりにくさを感じていた。この創作をめぐる葛藤に関して、氏は、単独の短編を何十章も重ねることで長編小説を編み上げるという、長編小説が書けるようになるまでの創作秘話を詳らかにした。

さらに、木村氏から投げ掛けられる、川上氏の小説における語りの主体をめぐる問いも、川上氏の創作の本質に迫る興味深いものであった。氏の作品世界において、「私」という一人称の語り手は常に、作者の実人生と同一化することのできない、摑みどころのない存在である。また、デビュー作の「神様」における「私」のように、男性と女性というカテゴリーの制約を振り捨てる語り手を、氏は意図的に創る。それは一方で、ジェンダーなどの区分に囚われない小説を書きたいという、氏の創作意識に由来するものであるが、他方ではまた、しばしば女性作家たちが、物語内容と実生活を恣意的に結びつけられ、性的な視線や誹謗中傷を被ることに対して、氏が抱いていた不安や抵抗から生じるものでもある。換言すれば、こうした作家の私的な要素を押し出さない創作意識こそは、氏が、女性作家を取り巻く差別的な状況から脱するために、辿り着いた方策であると言えよう。

とはいえ、近年の川上氏は、実在の作家像と折り重なる語り手を描き出すようになった。このような創作意識をめぐる変容に対して、木村氏にその理由を問われると、川上氏は、「年を取ると、やはり自意識が強くなくなってきて」、「自分に拘る感じがなくなった」と答えた。川上氏のその答えは、まさに「私」に沈潜し、「私」を追及することに始まる日本の「私小説」という概念から自身の作品を引き剝がし、「私小説」の閉鎖性を打破する見解であると言えよう。

インタビュー本編では、川上氏の創作の内実が次々と詳らかにされてゆく。たとえば、『大きな鳥にさらわれないよう』と地下鉄サリン事件との関係や、『神様 2011』に描出されている、東日本大震災後の日常に揺蕩う不穏な空気をめぐる発言から、氏の作品に底流する、現実社会からの影響関係が明らかにされた。さらさらとして、淡く、あり触れた日常を描き、現実社会の重苦しさから浮遊しているようにしばしば感じられる氏の小説空間には、しかしながら、常に日本の社

会問題に対する絶え間ない思索や関心が込められていることが、インタビューを通してより一層はっきりとした。

また、『真鶴』をめぐる議論を通して、川上氏の文学世界に色濃く憑きまとっている死者との交信や交感は、過去や記憶といったテーマと向き合おうとする氏の創作意識と密接に結びついていることが明かされた。『大きな鳥にさらわれないよう』をめぐる議論では、愛と生殖、宗教と祈りといった氏の作品に繰り返し現れる問いに触れ、氏の作品世界の内実により迫ることができた。さらに、川上氏は小説を書く際、常に作品が載せられる媒体の性質を強く意識し、それに合致するテーマを構想するなど、様々な創作秘話も明らかにされた。

インタビューの終盤では、川上氏が今後の創作活動について述べた。氏は、63歳の自身と等身大の語り手にまつわる小説を繰り広げたいと感じている。それは、年寄りでもないし、若者でもないという存在の時間を描く小説が、滅多にないからだという。

その他に、『大きな鳥にさらわれないよう』の冒頭を、川上氏自身が朗読する様子も配信された。

報告者:魏韻典(東京大学大学院博士課程)

人文社会科学系組織連絡会議 共同シンポジウム「人文社会科学の構想力」

2022年3月9日

2022年3月9日、人文社会科学系組織連絡会議共同シンポジウム「人文社会科学の構想力」が開催された。本シンポジウムは東京大学において近年相次いで発足した、人文社会科学に関係する新たな教育・研究組織から成る「人文社会科学系組織連絡会議」によって企画された。

ヒューマニティーズセンター(2017年7月設立)、東京カレッジ(2019年2月設立)、東アジア藝文書院(2019年3月設立)、現代日本研究センター(2020年7月設立)、アジア研究図書館(2018年4月設立)、以上5つの組織からそれぞれ齋藤希史氏(ヒューマニティーズセンター機構長)、ハチウス・ミハエル氏(国際高等研究所東京カレッジ准教授)、石井剛氏(東アジア藝文書院副院長)、白波瀬佐和子氏(現代日本研究センター長)、河原弥生氏(アジア研究図書館准教授)が登壇した。モデレーターとして佐藤岩夫氏(東京大学執行役・副学長)、司会としてケネス・盛・マッケルウェイン氏(社会科学研究所教授)、さらには第2部のディスカッションには太田邦史氏(東京大学執行役・副学長)、佐藤健二氏(東京大学執行役・副学長)がパネリストとして参加した。また、開会・閉会の挨拶はそれぞれ藤井輝夫氏(東京大学総長)、

左から:齋藤希史氏、ハチウス・ミハエル氏、石井剛氏、白波瀬佐和子氏、河原弥生氏

上段：左から順に佐藤岩夫氏、ケネス・盛・マッケルウェイン氏、
太田邦史氏、佐藤健二氏
下段：左から順に藤井輝夫氏、齊藤延人氏

齊藤延人氏（東京大学理事・副学長）から頂戴した。

本シンポジウムを通してあらためて確認されたのは、「人文社会科学」と呼ばれる領域の研究・教育活動を振興する重要性である。いわゆる「理系」と比較した際に、社会に対する還元度・貢献度が見えづらいという理由から、昨今「文系」とりわけ「人文社会科学」に対する風当たりが強くなっていることは周知の通りである。しかし、地球規模で刻一刻と進展する諸問題（気候変動、経済格差、紛争・戦争等々）に対応するためには、いわゆる理系／文系という二分法によってはもはや対応が不可能である。近代の幕開けに「博物学」が誕生したのは偶然ではない。今の時代に必要とされているのは、細分化された知を再統合する「総合知」の構想である。

この度のシンポジウムは、上記のような構想を実現するべく、これまで「人文社会科学」の中で培われてきた潜勢力を言語化する作業であったと言えよう。その中で浮かび上がってきたのは「言語」そして「翻訳」というキーワードである。「人文社会科学」とは、何をおいても第一に「言語」を扱い、「言語」によって世界を記述する学問態度である。それは、複雑化してもはや全体像など捉えることが不可能な現状をなんとか解きほぐそうとする格闘の一環として行われる試みである。こうした試みを皆で共有するために必要なのが「翻訳」という行為である。これは、単にある言語から別の外国語への翻訳を意味するものではない。そうではなく、「翻訳」は異なる認識態度の間に行われるべきものである。複雑な世界を理解しようとする方法は、当然、一つではなく無数に存在するし、存在するべきである。「人文社会科学」と呼ばれる方法は、そのうちの一つに過ぎない（「自然科学」と呼ばれる方法もまた然りである）。したがって、「総合知」を構想するために必要なのは、そのいずれが優れている（役に立つ）かを議論することではなく、異なる認識態度が各々の蓄積を相互に翻訳し合うことである。

まだ緒に就いたばかりのこの構想が今後花開くためには長い年月を必要とするだろう。しかし、例えば100年後（100年とは決して遠い未来ではなく、近い未来として想定すべきものだろう）、東京大学が世界水準の学府として存在するためには、必要な道のりであるはずだ。

報告者:崎濱紗奈（EAA特任研究員）

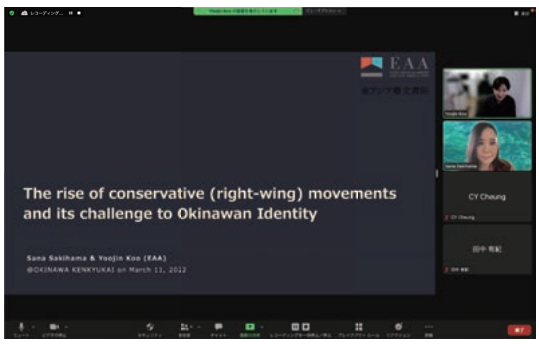
第8回 EAA沖縄研究会

2022年3月11日

2022年3月11日、第8回EAA沖縄研究会が開催された。発表者は具裕珍氏（EAA特任助教）と本ブログ報告者の崎濱紗奈（EAA特任研究員）で、具氏と崎濱が共同執筆する論文の構想をもとに、沖縄における「保守」あるいは「右傾化」というテーマについて発表を行った。

具氏はこれまで、日本における「保守市民社会」の活動について、社会科学的見地から研究を積み重ねてこられた（詳しくは氏の新著の『保守市民社会と日本政治――日本会議の動員とアドボカシー：1990-2012』〔青弓社、2022年〕をぜひ参照されたい）。今回の発表では、2010年に再燃したいわゆる「尖閣問題」以降、沖縄においてどのように「保守市民社会」の運動が展開されてきたのか、具氏がこれまで収集したデータに基づき検討を行った。崎濱は、沖縄という場所において「保守」あるいは「右傾化」について語ろうとするとき、それは必ずしも日本本土における「保守」「右傾化」と一致せず、そのことを理解するためには沖縄の複雑な近代史・現代史に十分目を配る必要があると指摘した（たとえば、『戦後沖縄の政治と社会――「保守」と「革新」の歴史的位相』〔平良好利・高江洲昌哉編著、吉田書店、2022年〕を参照）。

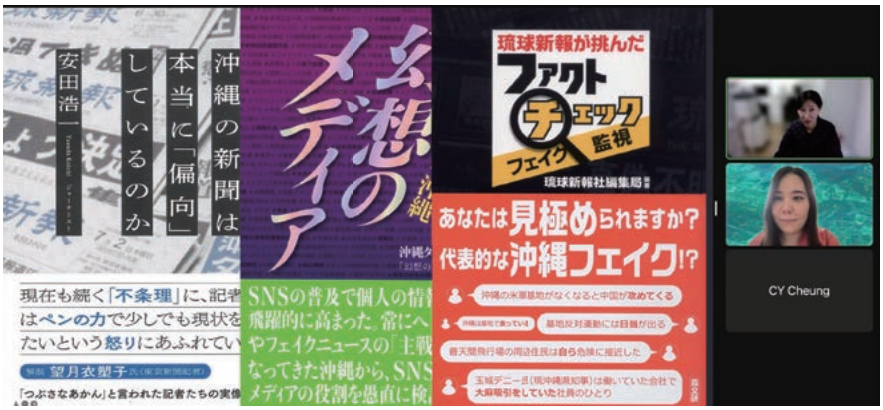
軍事基地への反対運動に象徴されるように、沖縄は一見「左派の島」だと目されることが多い。このような認識は間違ってはいないし、沖縄においてこのような運動が長年展開されてきたことは、沖縄出身の芥川賞作家・目取間俊の表現を借りれば、この島がずっと「戦後0年」とも言うべき状況に置かれてきた歴史を如実に反映している。だが、日本という国民国家において配置されている軍事基地、とりわけ米軍専用施設について言えば、その約70%が沖縄に集中しているという事態をめぐっては、左派的な文脈においてのみ語られてきたわけではない。「尖閣問題」以降、南西諸島をめぐる安全保障問題が再燃し、普天間基地移設問題がいよいよ膠着化すると、沖縄が日本の防衛において“果たすべき役割”を喧伝する右派的な言説が目立って登場してきた。基地の過重負担という現状について、これを数字上のイメージ操作であるとして「70%というのは数字のマジックだ」とする指摘が、昨今右派的な言説において登場していることは象徴的である（ただし、こうした言説が主張するように、日米が共同利用する自衛隊基地等の施設を含めた場合においても、日本列島において占める琉球諸島の小さな島々の面積を考えれば、日本全国の約25%が沖縄に配置されているという数字は依然として大きく、過重負担を示すには十分であるのだが）。



具氏発表スライドより

上記のような、ディスコースとしての左右対立以外にも、現状をめぐる認識の対立は沖縄における日常生活においても進展している。近年地元新聞2社が相次いで上梓した『幻想のメディア――SNSから見える沖縄』（沖縄タイムス社編集局「幻想のメディア」取材班編著、高文研、2019年）、『琉球新報が挑んだファクトチェック・フェイク監視』（琉球新報社編集局編著、高文研、2019年）には、2018年の沖縄県知事選や2019年に行われた辺野古米軍基地建設のための埋立ての賛否を問う県民投票など、選挙時に「フェイクニュース」がSNSを通して投票者に与える影響について、一つひとつの事例に基づき事細かに検証されている。

ますます複雑化する現状は、人々に大きな苛立ちを与える。丁寧に言語化する余裕も与えられず、突き



動かされた情動が全面化し、現状を突如として思わぬ形で変えていく（こうした状況は各地に遍在しているのであって、現在進行形で展開されている戦争は決して対岸の火事などではない）。SNS 上のフェイクを含む情報が沖縄のごくごく普通の人々に大きな影響を与え、その先に何が起こるだろうか、ということを想像するとき思い出さずにはおられないのは、かつて沖縄が経験した「沖縄戦」の記憶である。それは単に天から降ってきた災いでは決してなかった。

いよいよ戦争の足音が聞こえてきた 1930 年代以降展開されたのが、生活改善運動という名のもとに実施された「同化」推進運動であった。本土出身官僚と、沖縄の人々とが一体となって、この運動を推進した。そこには沖縄出身労働者や入隊者が本土において差別されないように、という配慮もあったであろう。あるいは、沖縄の土着的な信仰のあり方を国家神道の制度下において再編成しようという試みが展開されたのもこの頃であった。御嶽や拝所に鳥居を立てるというこの計画でさえも、当時の計画推進者からしてみれば、沖縄に対する不当な差別への防波堤としてこの計画を位置付けたという意識があったという。だが、そこにいかなる「善意」が存在していたとしても、結果として「同化」の道は、沖縄戦において、国家へと命を投げ出した人々の多大な犠牲を産んだのである。

このときの状況と現在とでは、大きく事情も異なるし、昨今の現状を見るに、かつて来た道が再来する可能性を想起してしまう、というのはあまりに短絡的かもしれない。しかし、敢えて短絡的に比較して事実を抽出するのであれば、沖縄はすでに、自発的かつ強制的に「同化」という道を選び、自らを犠牲にする道を歩んだ経験を持っている、ということである。こうした望ましくない可能性を閉ざし、別の未来を開くために、いますぐ着手すべき実践はまだ数多く残されている。報告者にとって具氏との共同研究は、こうした実践の一つである。なぜ、「保守」的あるいは「右派」的言説が SNS 上で歓迎されるのか。「反知性主義」というレッテルを貼って切り捨てるのではなく、その背景をデータ分析、テクスト分析、あるいは可能であれば別の方法も複数駆使しながら、正面から検討する必要がある。

報告者:崎濱紗奈（EAA特任研究員）

東京大学GSIキャラバン·プロジェクト「「小国」の経験から普遍を問いなおす」

国際ワークショップ ——O. A. ウェスタッド氏（イェール大学）

2022年3月16日

2022年3月16日、東京大学GSIキャラバン・プロジェクト「「小国」の経験から普遍を問いなおす」ワークショップ“Small States in International Affairs since the End of the Cold War”が開催された。本キャラバンでは、過去4回のワークショップ・シンポジウムを重ねてきた（詳しくはGSIウェブサイトを参照されたい）。5回目となる今回は、O.A.ウェスタッド氏（イェール大学歴史学部）をお招きした。早朝8時からの開始にもかかわらず、40名以上の参加者が集った。

18世紀以降のグローバル・ヒストリーを専門とするウェスタッド氏はこれまで、冷戦期の中ソ関係および米ソ関係、また、冷戦期におけるアジア・アフリカ・カリブ海地域等におけるポストコロニアルな状況など、実に多岐にわたる研究を展開してきた。氏の邦訳著書である『冷戦——ワールド・ヒストリー』（上下巻、岩波書店、2020年）の訳者の一人である小川浩之氏（東京大学総合文化研究科）が本ワークショップを企画し、当日司会進行を務めた。

講演の中でウェスタッド氏が焦点を当てたのは、冷戦期とポスト冷戦期における「権力（power）」のあり方の変容である。冷戦期においては米国やソ連といった大国の「普遍的権力（universal power）」のもと「主権（sovereignty）」が制限されていたが、冷戦の崩壊により世界は「多極的世界（Multi-polar world）」へと変容を遂げた。こうした状況下においては、小国（small states）は自国の防衛を自ら担わなければならず、必然的に主権が強化される。このような状況下における小国の運命は、小国間の連合を形成し集合的権力を再構成できるのか、また、大国との関係性の結び直しがどのように可能となるか、といった複数の条件に左右される。

講演に続くディスカッションでは、キャラバン主宰者の伊達聖伸氏、キャラバンメンバーの張政遠氏、鶴見太郎氏、土屋和代氏（いずれも東京大学総合文化研究科）をはじめ、フロアからの質問が相次いだ。“Small nation”と“small states”の違いや、ウェスタッド氏が提唱する“righteous nation”という概念の詳細や、明朝・清朝における朝貢貿易・冊封体制の有効性、さらには昨今のウクライナ情勢など、さまざまなトピックに関する議論が交わされた。印象深かったのは、冷戦時のような状況に世界は逆戻りするだろうか、という問いに対して、ウェスタッド氏は否と答え、むしろ、現在の状況は19世紀後半から20世紀初頭の状況に近似している、と答えたことだ。

図らずも本キャラバンが主題とする「小国」は、時勢を反映した最先端のテーマとなった。今後ますます不透明化する世界を見通し、記述するために、ウェスタッド氏が実践しているようなグローバル・ヒストリーという方法はますます重要性となるだろう。

報告者:崎濱紗奈（EAA特任研究員）

O. A. ウェスタッド氏

小川浩之氏

2021年度活動報告

資料編

2021年度EAA開講科目リスト

2021年度プログラム生属性リスト

2021年度EAAメンバーおよび連携教員リスト

EAA刊行物リスト

EAAラジオリスト

EAAメディア関連リスト

RESEARCH UNIT別INDEX

TOPIC別INDEX

2021年度EAA開講科目リスト

開講	開講科目名	講義題目	担当講師
S1	東アジア教養学理論Ⅰ(1)	東アジア教養学概論	佐藤麻貴
S1	東アジア教養学理論Ⅱ(1)	東アジア教養学概論(TA Session)	佐藤麻貴
S2	東アジア教養学演習Ⅰ(1)	東アジア教養学概論	佐藤麻貴
S2	東アジア教養学演習Ⅱ(1)	東アジア教養学概論(TA Session)	佐藤麻貴
A1	東アジア教養学理論Ⅰ(2)	東アジア教養学理論	張政遠
A1	東アジア教養学理論Ⅱ(2)	東アジア教養学(TA Session)	張政遠
A2	東アジア教養学演習Ⅰ(2)	東アジア教養学	張政遠
A2	東アジア教養学演習Ⅱ(2)	東アジア教養学(TA Session)	張政遠
S1S2	世界哲学と東アジアⅠ(1)	和辻哲学に触れる:『倫理学』を中心に	佐藤麻貴
A1A2	世界哲学と東アジアⅡ(2)	读《孟子字义疏证》	石井剛
A1A2	世界哲学と東アジアⅢ(2)	西田哲学を理解する:「叡智的世界」論文を中心に	朝倉友海
A1A2	世界哲学と東アジアⅢ(4)	中国禅宗概説	柳幹康
S1S2	世界歴史と東アジアⅠ(1)	Media and Modernity in Japan	前島志保
A1A2	世界歴史と東アジアⅠ(2)	Critical Approaches to East Asia	ジョシュア・バクスター
S1S2	世界歴史と東アジアⅠ(3)	The Politics of Space: An Urban History of Tokyo	ジョシュア・バクスター
S1S2	世界歴史と東アジアⅡ(1)	東西文明学	李彦銘
S1S2	世界歴史と東アジアⅢ(1)	「小国」論の観点から「日本」を読む	伊達聖伸
S1S2	世界文学と東アジアⅠ(1)	Fact, Fiction, and Everything in between: Autobiographical Prose in Modern Japan (and Beyond)	イリナ・ホルカ
A1A2	世界文学と東アジアⅠ(4)	Language, power, and identity in contemporary Japanese literature	イリナ・ホルカ
A1A2	世界文学と東アジアⅠ(6)	Eros: Between Literature and Philosophy	王欽
A1A2	世界文学と東アジアⅡ(2)	文学で知る中国の古典と現在	鄧芳
S1S2	世界文学と東アジアⅢ(1)	中国現代文学史論	鈴木将久
S1S2	社会・環境・健康と東アジアⅠ(1)	Politics and international relations in Southeast Asia	鈴木早苗
A1A2	社会・環境・健康と東アジアⅠ(2)	East Asian and Transnational Cinemas	Mark Roberts
A1A2	社会・環境・健康と東アジアⅡ(2)	東西文明学II(言語と歴史3)(後期TLP授業)	白春花
A1A2	社会・環境・健康と東アジアⅡ(4)	东西文明学II(国际社会科学2)	菊池真純
A1A2	社会・環境・健康と東アジアⅡ(6)	ライフストーリーから読み解く戦後台湾都市生活史	白佐立
A1A2	社会・環境・健康と東アジアⅢ(2)	スピノザ研究 ——エチエンヌ・バリバールのスピノザ論を読む	國分功一郎
A2	東アジア教養学特殊講義(4)	価値について考える	中島隆博
A2	東アジア教養学特殊演習	The Non Disclosure Act	エリック・カズデン
	インターンシップ		開講せず
A1A2	東アジア教養学実習(4)	Summer Institute 2021 “Value and Value-ing: Visiblizing (the) Invisible”	佐藤麻貴

任意科目

S1S2	高度教養特殊講義 (東アジア教養学)	30年後の世界へ——学問とその“悪”について	石井剛

2021年度プログラム生属性リスト

	学部		性別		入学月	
第一期生	教養学部 文学部 法学部 経済学部	5 2 1 1	男性 女性	8 1	春入学 秋入学	7 2
第二期生	教養学部 法学部 経済学部	6 2 1	男性 女性	7 2	春入学 秋入学	5 4
2020年度	東アジア教養学プログラム修了者	1				
2021年度	東アジア教養学プログラム修了者	3				

2021年度 EAAメンバーおよび連携教員リスト

https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/about/members/

氏名	所属・職名	リサーチ・ユニット
朝倉 友海(ASAKURA Tomomi)	総合文化研究科准教授	RU-P
張 政遠(CHEUNG Ching-yuen)	総合文化研究科准教授	RU-P
伊達 聖伸(DATE Kiyonobu)	総合文化研究科准教授	RU-H
丁 乙(DING Yi)	EAAリサーチ・アシスタント	
深田 めぐみ(FUKADA Megumi)	EAA事務補佐員(総合文化研究科)	
郭 馳洋(GUO Chiyang)	EAA特任研究員(総合文化研究科)	RU-P
羽田 正(HANEDA Masashi)	EAA学術顧問、東京カレッジ長	RU-H
橋本 英樹(HASHIMOTO Hideki)	EAAアカデミック・コミッティ、医学系研究科教授	RU-S
日隈 脩一郎(HIGUMA Shuichiro)	EAAリサーチ・アシスタント	
星野 太(HOSHINO Futoshi)	総合文化研究科准教授	RU-P
黄 秋源(HUANG Qiuyuan)	EAAリサーチ・アシスタント	
伊野 恭子(INO Kyōko)	EAA学術専門職員(東洋文化研究所)	
犬塚 悠(INUTSUKA Yū)	EAAフェロー	
石井 萌加(ISHII Moeka)	EAAリサーチ・アシスタント	
石井 剛(ISHII Tsuyoshi)	EAA副院長、EAAアカデミック・コミッティ、総合文化研究科教授	RU-P
片岡 真伊(KATAOKA Mai)	EAA特任研究員(総合文化研究科)	RU-L
國分 功一郎(KOKUBUN Koichiro)	総合文化研究科准教授	RU-S
具 裕珍(KOO Yoojin)	EAA特任助教(東洋文化研究所)	RU-S
小手川 将(KOTEGAWA Sho)	EAAリサーチ・アシスタント	
前野 清太朗(MAENO Seitaro)	EAA特任助教(総合文化研究科)	RU-H
前島 志保(MAESHIMA Shiho)	総合文化研究科准教授	RU-L
宮田 晃碩(MIYATA Akihiro)	EAAリサーチ・アシスタント	
森 貴志(MORI Takashi)	EAAフェロー	
中島 隆博(NAKAJIMA Takahiro)	EAA院長、EAAアカデミック・コミッティ、東洋文化研究所教授	RU-P
野原慎司(NOHARA Shinji)	経済学研究科准教授	RU-S
納富 信留(NOTOMI Noburu)	人文社会系研究科教授	RU-P
マーク・ロバーツ(ROBERTS Mark)	EAA特任研究員(総合文化研究科)	
崎濱 紗奈(SAKIHAMA Sana)	EAA特任研究員(東洋文化研究所)	RU-H
佐藤 麻貴(SATO Maki)	EAA特任准教授(総合文化研究科)	RU-P
鈴木 将久(SUZUKI Masahisa)	EAAアカデミック・コミッティ、人文社会系研究科教授	RU-L
高田 康成(TAKADA Yasunari)	EAAシニアフェロー	
高原 智史(TAKAHARA Satoshi)	EAAリサーチ・アシスタント	
高山 花子(TAKAYAMA Hanako)	EAA特任助教(総合文化研究科)	LU-L
武田 将明(TAKEDA Masaaki)	EAAアカデミック・コミッティ、総合文化研究科准教授	RU-L

氏名	所属・職名	リサーチ・ユニット
田村 正資(TAMURA Tadashi)	EAA特任研究員(東洋文化研究所)	RU-P
田村 隆(TAMURA Takashi)	総合文化研究科准教授	RU-L
田辺 明生(TANABE Akio)	総合文化研究科教授	RU-L
田中 有紀(TANAKA Yuki)	東洋文化研究所准教授	RU-P
立石 はな(TATEISHI Hana)	EAA特任研究員(総合文化研究科)	
滕 東君(TENG Shujun)	EAAリサーチ・アシスタント	
上田 有輝(UEDA Yuki)	EAAリサーチ・アシスタント	
宇野 瑞木(UNO Mizuki)	EAA特任助教(総合文化研究科)	RU-L
若澤 佑典(WAKAZAWA Yusuke)	EAAフェロー	
王 欽(WANG Qin)	総合文化研究科准教授	RU-P
渡辺 理恵(WATANABE Rie)	EAA学術専門職員(総合文化研究科)	
八幡 さくら(YAHATA Sakura)	EAAフェロー	
柳 幹康(YANAGI Mikiyasu)	東洋文化研究所准教授	RU-P
趙 斉(ZHAO Qi)	EAAフェロー	

RU-P: 世界哲学と東アジア/RU-H: 世界史と東アジア/RU-L: 世界文学と東アジア/RU-S: 未来社会と環境・健康

EAA刊行物リスト

既刊と併せ、EAAブックレットは下記のサイトにて全ページ閲覧可能になっています。
https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/publications/

	タイトル	内容	ISSN	刊行日
1	EAA Booklet 9　EAA Forum 4	感染症の哲学	2435-7863	2021.4.20
2	EAA Booklet 10　EAA Forum 5	アーツの再定義		2021.5.28
3	EAA Booklet 11　EAA Forum 6	テクノロジーの時代における人間の学問		2021.7.30
4	EAA Booklet 14　EAA Forum 8	東アジア音楽思想における「和」		2021.8.10
5	EAA Booklet 16　EAA Dialogue 7	Tsuyoshi Ishii × Ching-yuen Cheung		刊行時期未定
6	EAA Booklet 17　EAA Forum 10	Identity and Movements		2021.10
7	EAA Booklet 18　EAA Forum 11	コロナ危機と未来社会		2021.7.09
8	EAA Booklet 19　EAA Forum 12	感染症――歴史と物語とのはざまで		2021.10.15
9	EAA Booklet 20　EAA Forum 13	30年後の被災地		刊行時期未定
10	EAA Booklet 21　EAA Forum 14	朱子学の過去と未来		近日発刊予定
11	EAA Booklet 22　EAA Dialogue 8	Hisao Miyamoto × Takahiro Nakajima		2021.11.25
12	EAA Booklet 23　EAA Forum 15	中国现当代文学研究的方法及其射程		刊行時期未定
13	EAA Booklet 24　EAA Dialogue 9	Tetsuya Takahashi × Takahiro Nakajima		2022.1.25
14	EAA Booklet 25　EAA Forum 16	座談会●5「人間」を価値化する		刊行時期未定
15	EAA Booklet 26　EAA Forum 17	一高中国人留学生と101号館の歴史		2021.3.17
16	EAA Booklet 27　EAA Forum 18	朝日会館と〈コドモ〉文化（1926-1935）――メディア、家庭、社会教育		2022.3.28
17	EAA Booklet 28　EAA Forum 19	フランスから見た＃MeToo運動――ラファエル・リオジエ『男性性の探求』をめぐって		2022.3.18
18	EAA Booklet 29　EAA Forum 20	石牟礼道子を読む2 ――世界と文学を問う		2022.3.20
19	EAA Booklet 30　EAA Dialogue 10	Koichiro Kokubun × Qin Wang		刊行時期未定
20	EAA Scholars Collection 1	悬而未决的决断――论卡尔·施米特及其他	2436-7699	近日発刊予定
21	EAA NOZOMI Collection 1	日本統治初期台湾の漢文地方志編纂活動		近日発刊予定
22	EAA NOZOMI Collection 2	偶然性と実存：九鬼、メルロ＝ポンティ、メイヤスー		近日発刊予定
23	2020年度年次報告書　*のぞみを灯す*			2021.4.26
24	Summer Institute			2021.2

	タイトル	ISBN	刊行日
25	私たちはどのような世界を想像すべきか　東京大学 教養のフロンティア講義	9784798701806	2021.5.25

1

2

3

4

6

7

8

11

13

15

16

17

18

23

24

25

EAAラジオリスト

https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/media-library/category/radio/

	放送内容	日付
第41回	1957年から1966年頃まで、駒場で植樹運動が展開されていた	2021.3.03
第42回	シンポジウム「30年後の被災地」の感想	2021.3.10
第43回	シンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」の感想	2021.3.17
第44回	宮沢賢治「春と修羅」朗読	2021.3.24
第45回	2020年度の振り返り、旅行の話	2021.3.31
第46回	EAAプログラム第1期修了生の孔さんとのおしゃべり(1)	2021.4.07
第47回	EAAプログラム第1期修了生の孔さんとのおしゃべり(2)	2021.4.14
第48回	ホー・ツーニェン「「ヴォイス・オブ・ヴォイド」の話	2021.4.21
第49回	一高机到来、糖質0g麺でつくるパスタ	2021.4.28
第50回	超儒教的メンタリティー、荘子の鶏について	2021.5.12
第51回	時代錯誤社、おすすめのピアノ三重奏曲	2021.5.19
第52回	ラジオネーム・メイさんよりパリの音楽話	2021.5.26
第53回	駒場のアップルミント、パリのミントティー、ラオス料理	2021.6.02
第54回	駒場の前期課程、後期課程の授業で見た映画の話	2021.6.09
第55回	大阪の朝日会館	2021.6.16
第56回	國分功一郎先生スペシャルインタビュー5,000回超	2021.6.23
第57回	1号館の近くにあるビワの木に集まる鳥の声の録音	2021.6.30
第58回	宮沢賢治「星めぐりの歌」の朗読と演奏	2021.7.07
第59回	大江健三郎のエセー、鳥エピソードについて	2021.7.14
第60回	加藤周一たちが参加していたマチネ・ポエティーク	2021.7.21
第61回	南フランスのソルグの画家リモンの思い出	2021.7.28
第62回	室伏鴻アーカイブ、蔵書について	2021.9.01
第63回	ムスカンのマトンカレー、羊	2021.9.08
第64回	アトリエシムラで染め物と織り物を体験	2021.9.15
第65回	デラックアの田園詩「ヴィラネル」の朗読	2021.9.22
第66回	Zoomの音、音楽の陰り、闇の深さや静けさについて	2021.9.29
第67回	ラジオネーム・りぽっとさんより、無駄や余白について	2021.10.06
第68回	島への親近感、火山、洞爺湖、ヤギの頭突き	2021.10.13
第69回	島や海の話、未決定であることについて	2021.10.20
第70回	スティーヴ・ライヒの音楽がいい	2021.10.28
第71回	新しいしりとり、メルカリ、Zoomしながら音楽を聴く	2021.11.10
第72回	駒場15年目の感慨	2021.11.17
第73回	鍋の話	2021.11.24
第74回	アトリエシムラで染め物と織り物を体験	2021.12.01
第75回	宮沢賢治「よだかの星」朗読(1)	2021.12.08
第76回	宮沢賢治「よだかの星」朗読(2)	2021.12.16
第77回	宮沢賢治「よだかの星」朗読(3)	2021.12.23
第78回	お正月にガストで4人席を立ち入り禁止にしていた女の子	2022.1.13
第79回	北大路魯山人「夜寒に火を囲んで懐かしい雑炊」紹介	2022.1.19
第80回	忘れられない展示や美術館	2022.1.27
第81回	與謝野文子先生の『美と略奪』における「空間」の話	2022.2.02
第82回	ラジオネーム・りぽっとさんより、新年の抱負について	2022.2.09
第83回	武満徹が亡くなる前々日にラジオでバッハを聞いていた話	2022.2.16
第84回	今年の東大入試の国語と英語で芸術に関する出題があった	2022.3.02
第85回	学部生の頃パスタを作っていた話、最近のパスタ	2022.3.09
第86回	3月の合格発表シーズン雑感、麻雀について	2022.3.17

EAAメディア関連リスト

https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/media-library/

内容	日付
The 4th EAIHN Online Seminar	2021.2.10
EAAオンラインシンポジウム「三十年後の被災地」 高橋哲哉氏基調講演「3.11に何を問うのか――パンデミックのただ中で」	2021.3.10
EAAオンラインシンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」 太田邦史氏「開会の辞」	2021.3.17
EAAオンラインシンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」 大里浩秋氏基調講演「中国人日本留学の歴史に思うこと」	2021.3.17
EAAオンラインシンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」 汪婉氏基調講演「駒場での留学体験――東大は開かれている」	2021.3.17
The 5th EAIHN Online Seminar “Trans-Pacific Perspective on the British Empire”	2021.3.31
EAA YouTube企画　國分功一郎先生スペシャルインタビュー 第1部:『暇と退屈の倫理学』を読み直す	2021.4.13
EAA YouTube企画　國分功一郎先生スペシャルインタビュー 第2部:コロナ禍から考える「暇と退屈の倫理学」	2021.4.13
EAA YouTube企画　國分功一郎先生スペシャルインタビュー 第3部:大学から考える「暇と退屈の倫理学」	2021.4.13
第2回 学術フロンティア講義 未来社会2050――学問を問う(佐藤麻貴)	2021.4.16
第3回 学術フロンティア講義 地球上の生命と人類は30年後にどうなっているか(太田邦史)	2021.4.23
第4回 学術フロンティア講義 近代日本哲学の光と影(中島隆博)	2021.4.30
第5回 学術フロンティア講義 香港、そして被災地(張政遠)	2021.5.07
第6回 学術フロンティア講義 悪をめぐる三つのパラドックス(朝倉友海)	2021.5.21
第7回 学術フロンティア講義 真実の終わり？――21世紀の現代思想史のために(星野太)	2021.5.28
第9回 学術フロンティア講義 人種・民族についての悪い理論(鶴見太郎)	2021.6.11
<<企画>>座頭と瞽女の説経(節)の語り――兵藤裕己氏をお迎えして	2021.6.15
第10回 学術フロンティア講義 私たちの憲法“無感覚”――竹内好を手がかりとして(王欽)	2021.6.18
第12回 学術フロンティア講義 清末中国のある思想家の憂鬱――章炳麟の「進化」への回顧と、そして将来への展望(林少陽)	2021.7.02
第13回 学術フロンティア講義 たたかう「文」――言語の暴力と希望について(石井剛)	2021.7.09
The first workshop of the GSI caravan project “The Conditions of Sovereignty”	2021.7.24
第5回 EAA座談会「「人間」を価値化する」	2021.8.05
EAAシンポジウム「明治日本における東アジア哲学の起源」 佐藤將之先生基調講演「「東洋哲学」誕生の契機としての東京大学と明治中期」	2021.9.14
The third workshop of the GSI caravan project “The Conditions of Sovereignty”	2021.11.19
オンライン連続講座「知の継承(バトン)」第1回 紙の誕生と伝播から見る「記録媒体の世界史」――東洋から西洋へ	2021.11.26
映画『籠城』予告編①	2022.1.29
オンライン連続講座「知の継承(バトン)」第2回 海を渡った「アダム・スミスの蔵書」――西欧思想の伝播と日本	2022.2.07

RESEARCH UNIT別INDEX

該当頁	活動内容	日付
RU-P: 世界哲学と東アジア　World Philosophy from East Asian Perspectives		
30	連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」 第2回 世界における日本哲学を再考する	2021.3.25
65	連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」 第3回 哲学の領域横断的対話を求めて	2021.4.30
101	連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」 第4回 中世と近世のあわい	2021.5.31
135	EAA Workshop “Cinema and Ideology”	2021.6.26
169	連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」 第5回 世界哲学における「尊厳」概念	2021.7.22
226	EAAシンポジウム「明治日本における東アジア哲学の起源」	2021.9.14
243	EAA Workshop “From Input to Asset: Human Capital Revisited”	2021.10.14
257	EAAシンポジウム「コロナ禍における藝術の理論と実践」	2021.11.04
268	中島隆博『危機の時代の哲学――想像力のディスクール』書評会	2021.11.13
276	日本におけるスピノザ受容をめぐるワークショップ(2)	2021.11.20
278	連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」 第6回 世界哲学と宗教	2021.11.22
299	EAAワークショップ「再興する書院――アジアからの新たなリビング・ラーニング・コミュニティ」	2021.12.07
304	From *Seele* to Mind: A Sociological Study of Knowledge On the Rationalization of Psychoanalysis	2021.12.10
310	Why do we hate each other? ――Understanding hatred through historical perception gaps	2021.12.15
320	『渦動する象徴――田辺哲学のダイナミズム』書評会	2021.12.18
352	EAAシンポジウム「仏教と哲学の対話」	2022.01.26
388	EAAシンポジウム「死から生の価値を問い直す」	2022.2.11
	シンポジウム「書院内部の学問と芸術」	2022.3.16
	「価値と現代社会――価値を問い直す」座談会	2022.3.17
	『東アジアにおける哲学の生成と発展』書評会	2022.3.29
	未来哲学研究所 第4回シンポジウム オンライン開催 霊魂論の未来――情念・鎮魂・他者	2022.3.30

RU-H: 世界史と東アジア　World History from East Asian Perspectives		
26	第9回 痛みの研究会	2021.3.21
176	連続討論会――ラファエル・リオジエ『男性性の探究』をめぐって	2021.7.22,26
252	文庫化記念公開シンポジウム『近代世界の公共宗教』再読	2021.11.01
356	岩津航『レトリックの戦場 加藤周一とフランス文学』公開合評会	2022.1.26
378	連続公開イベント 第1回 フランスにおけるジェンダー論争	2022.2.08
395	連続公開イベント 第2回 フランス・カトリック教会と性的スキャンダル	2022.2.22
401	連続公開イベント 第3回 フランスにおける宗教的状況の特殊性	2022.3.01

該当頁	活動内容	日付
RU-L: 世界文学と東アジア　World Literature from East Asian Perspectives		
47	第22回〈現代作家アーカイヴ〉文学インタヴュー：松浦寿輝氏	2021.4.12
194	第6回 ジャーナリズム研究会	2021.8.14
274	第23回〈現代作家アーカイヴ〉文学インタヴュー 町田康氏	2021.11.19
349	第1回EAA連続ワークショップ「中国近代文学の方法と射程」 張潔宇氏講演「魯迅の雑文をどのように理解すべきか」	2022.1.24
419	第24回〈現代作家アーカイヴ〉文学インタヴュー 川上弘美氏	2022.3.09
	第2回 EAA 連続ワークショップ「中国近代文学の方法と射程」 程凱氏講演「“社会史視野”如何深入一部作品——以柳青的《种谷记》为例」	2022.3.11
	第7回 ジャーナリズム研究会	2022.3.20

RU-S: 未来社会と環境・健康　East Asian Initiative for Future Society and Health Sciences		
28	EAA Wokrshop “Identity and Movements”	2021.3.22
35	The 5th EAIHN Online Seminar	2021.3.31
185	The 6th EAIHN Online Seminar	2021.8.02
197	近世ヨーロッパの文化と東アジア研究会 東アジアへの西欧の知の伝播の研究 2021年度第1回 公開研究会	2021.8.23
251	The 7th EAIHN Online Seminar	2021.10.21
283	第1回 オンライン連続講座「知の継承（バトン）」	2021.11.26
296	近世ヨーロッパの文化と東アジア研究会 東アジアへの西欧の知の伝播の研究 2021年度第2回 公開研究会	2021.12.04
297	The 8th EAIHN Online Seminar	2021.12.06
372	第2回 オンライン連続講座「知の継承（バトン）」	2022.2.07
376	The 9th EAIHN Online Seminar	2022.2.08
392	EAAワークショップ 女性のいない民主主義と「K-フェミニズム」文学の越境 ——日本における『82年生まれ、キム・ジヨン』の翻訳受容現象を中心に	2022.2.17
402	EAA Workshop “From Manners to Rules: Explaining More Legalistic Approaches to Governance in Japan and South Korea”	2022.3.03
417	The 10th EAIHN Online Seminar	2022.3.08
	近世ヨーロッパの文化と東アジア研究会 東アジアへの西欧の知の伝播の研究 2021年度第3回公開研究会	2022.3.11
	EAAワークショップ「政府と与党の関係における日韓比較 『立法前協議の比較政治——与党内不一致 と日韓の制度』（木鐸社、2021年）を手がかりにして」	2022.3.28

TOPIC別INDEX

該当頁	活動内容	日付
EAA 座談会		
188	第5回 EAA座談会「「人間」を価値化する」	2021.8.05
	EAA 座談会「時代の危機と哲学――回帰する亡霊に向き合う」	2022.3.31
学術フロンティア講義		
46	第1回 学術フロンティア講義	2021.4.09
51	第2回 学術フロンティア講義	2021.4.16
58	第3回 学術フロンティア講義	2021.4.23
71	第4回 学術フロンティア講義	2021.4.30
75	第5回 学術フロンティア講義	2021.5.07
89	第6回 学術フロンティア講義	2021.5.21
96	第7回 学術フロンティア講義	2021.5.28
110	第8回 学術フロンティア講義	2021.6.04
119	第9回 学術フロンティア講義	2021.6.11
127	第10回 学術フロンティア講義	2021.6.18
133	第11回 学術フロンティア講義	2021.6.25
144	第12回 学術フロンティア講義	2021.7.02
149	第13回 学術フロンティア講義	2021.7.09
東アジア教養学「世界歴史と東アジアⅢ」		
64	東アジア教養学「世界歴史と東アジアⅢ」中江兆民『三酔人経綸問答』を読む	2021.4.27
79	東アジア教養学「世界歴史と東アジアⅢ」幸徳秋水『廿世紀之怪物帝国主義』を読む	2021.5.10,17
125	東アジア教養学「世界歴史と東アジアⅢ」鶴見俊輔『戦時期日本の精神史：1931～1945年』を読む	2021.6.15
129	東アジア教養学「世界歴史と東アジアⅢ」 伊波普猷「古琉球の政教一致を論じて経世家の宗教に対する態度に及ぶ」を読む	2021.6.21,28
EAA Summer Institute 2021		
211	EAA Summer Institute 2021 Day 0	2021.9.05
212	EAA Summer Institute 2021 Day 1: Prof. Maki Sato and Ms. Meng Tianyu Lectures	2021.9.06
213	EAA Summer Institute 2021 Day 1: Prof. Naoko Ishii Lecture	
215	EAA Summer Institute 2021 Day 2: Student Presentations	2021.9.07

該当頁	活動内容	日付
February Online Intensive Course		
381	Winter Institute Day 1, Prof. Maria Adele Carrai	2022.2.09
383	Winter Institute Day 1, Prof. Noburu Notomi	
384	Winter Institute Day1, Prof. Aimee van Wynsberghe	
385	Winter Institute Day 2, Prof. Xudong Zhang	2022.2.10
386	Winter Institute Day 2, Prof. Takahiro Nakajima	
387	Winter Institute Day 2, Prof. Markus Gabriel	
The EAA Global Lecture Series		
192	EAA Global Lecture Series The 1st lecture “Approaches to researching Somali poetry” By Dr. Martin Orwin	2021.8.12
239	EAA Global Lecture Series The 2nd lecture “Interactive Analysis, Language Barriers and Medical Consultations” By Dr. Shuangyu Li	2021.10.05
303	EAA Global Lecture Series The 3rd lecture “Green with Milk & Sugar: When Japan Filled America’s Tea Cups” By Dr. Robert Hellyer	2021.12.09
321	EAA Global Lecture Series The 4th lecture “The Nonhuman in African Philosophy” By Prof. Alena Rettová	2021.12.20
EAA ブックトーク		
147	第6回 EAAブックトーク	2021.7.08
220	第4回「部屋と空間プロジェクト」研究会＆第7回 EAAブックトーク	2021.9.10
	第7回「部屋と空間プロジェクト」研究会＆第8回 EAAブックトーク	2022.3.29
「藤木文書アーカイヴ」プロジェクト		
20	EAA国际研讨会〈一高中国留学生与101号馆历史〉	2021.3.17
43	藤木成彦氏インタビュー:「藤木文書」調査へ向けて	2021.4.06
113	「藤木文書アーカイヴ」プロジェクト始動——歴史に直に触れることから	2021.6.08
131	藤木文書アーカイヴ・レクチャー 丹羽みさと氏「駒場博物館の一高資料の整理とその活用法について」	2021.6.24
153	田仲一成先生へのインタビュー:一高から教養学部への過渡期について	2021.7.10
159	工藤康氏へのインタビュー:昭和23年、一高最後の入学生として	2021.7.13
186	「藤木文書アーカイヴ」共同発表会	2021.8.04
202	旧制高等学校記念館「第25回夏期教育セミナー」	2021.8.28
225	藤木文書アーカイブ・東大文書館訪問:森本祥子氏の手引きのもとに	2021.9.13
	【展覧会】もうひとつの一高 ——戦時下の一高留学生課長・藤木邦彦と留学生たち(〜6月24日)	2022.3.22

該当頁	活動内容	日付
101号館映像制作プロジェクト		
41	YCAM訪問記 ホー・ツーニェン「ヴォイス・オブ・ヴォイド――虚無の声」	2021.4.02,03
83	映像制作メモランダム(1)	2021.5.17
104	映像制作メモランダム(2)	2021.5.31
105	映像制作メモランダム(3)	2021.6.01
108	映像制作メモランダム(4)	2021.6.04
115	映像制作メモランダム(5)	2021.6.10
167	映像制作メモランダム(6)	2021.7.19
168	映像制作メモランダム(7)	2021.7.21
279	『conception -こもり-』上映会	2021.11.24
282	映像制作メモランダム(8)	2021.11.25
287	映像制作メモランダム(9)	2021.11.26
293	映像制作メモランダム(10)	2021.11.30
338	ホー・ツーニェン「百鬼夜行」&「旅館アポリア」視察	2022.1.08
350	映像制作メモランダム(11)	2022.1.25
375	映像制作メモランダム(12)	2022.2.07
398	リベラルアーツとしての映画制作とは？ ――東京大学東アジア藝文書院『籠城』制作チームトーク	2022.2.27
	映画『籠城』上映会	2022.3.26,27, 30,31

該当頁	活動内容	日付
石牟礼道子		
54	第15回 石牟礼道子を読む会	2021.4.17
63	第16回 石牟礼道子を読む会	2021.4.27
84	第17回 石牟礼道子を読む会	2021.5.18
94	第18回 石牟礼道子を読む会	2021.5.25
121	新作能「沖宮」視察――石牟礼道子原作の能舞台を見て	2021.6.12
123	第19回 石牟礼道子を読む会	2021.6.15
139	第20回 石牟礼道子を読む会	2021.6.29
146	第21回 石牟礼道子を読む会	2021.7.05
146	第22回 石牟礼道子を読む会	2021.7.12
190	第23回 石牟礼道子を読む会	2021.8.10
205	第24回 石牟礼道子を読む会	2021.8.31
205	第25回 石牟礼道子を読む会	2021.9.14
234	第26回 石牟礼道子を読む会	2021.9.28
248	第27回 石牟礼道子を読む会	2021.10.19
269	EAA国際ワークショップ「石牟礼道子を読む――世界と文学への問い」	2021.11.14
290	石牟礼道子を読む会・寄り道編「染めと織りのワークショップ」	2021.11.29
333	第28回石牟礼道子を読む会	2021.12.28,29
344	第29 回石牟礼道子を読む会	2022.1.18
366	第30回 石牟礼道子を読む会	2022.2.02
「部屋と空間プロジェクト」研究会		
18	第1回「部屋と空間プロジェクト」研究会	2021.3.16
106	第2回「部屋と空間プロジェクト」研究会	2021.6.03
181	第3回「部屋と空間プロジェクト」研究会	2021.7.29
220	第4回「部屋と空間プロジェクト」研究会＆第7回 EAAブックトーク	2021.9.10
294	第5回「部屋と空間プロジェクト」研究会	2021.12.02
328	「部屋と空間プロジェクト」シンポジウム	2021.12.27
367	第6回「部屋と空間プロジェクト」研究会	2022.2.03
	第7回「部屋と空間プロジェクト」研究会＆第8回 EAAブックトーク	2022.3.29
EAA 若手研究者研究会		
108	第1回 EAA若手研究者研究会	2021.6.04
199	第2回 EAA若手研究者研究会	2021.8.26
	EAA NOZOMI Collection 刊行記念若手研究者座談会	2022.3.24

該当頁	活動内容	日付
EAA 沖縄研究会		
87	第1回 EAA 沖縄研究会	2021.5.21
116	第2回 EAA 沖縄研究会	2021.6.11
183	第3回 EAA 沖縄研究会	2021.7.30
241	第4回 EAA 沖縄研究会	2021.10.05
273	第5回 EAA 沖縄研究会	2021.11.19
307	第6回 EAA 沖縄研究会	2021.12.10
343	第7回 EAA 沖縄研究会	2022.1.14
369	EAA 沖縄研究会シンポジウム:「琉球」再考	2022.2.06
423	第8回 EAA 沖縄研究会	2022.3.11
EAA「民俗学×哲学」研究会		
286	第1回 EAA「民俗学×哲学」研究会	2021.11.26
316	第2回 EAA「民俗学×哲学」研究会	2021.12.17
342	第3回 EAA「民俗学×哲学」研究会	2022.1.14
396	第4回 EAA「民俗学×哲学」研究会	2022.2.25
	第5回 EAA「民俗学×哲学」研究会	2022.3.11
	第6回 EAA「民俗学×哲学」研究会	2022.3.26
EAA「批評」研究会		
209	第1回 EAA批評研究会	2021.9.02
265	第2回 EAA批評研究会	2021.11.12
325	第3回 EAA批評研究会	2021.12.23
361	第4回 EAA批評研究会	2022.1.28
	第5回 EAA批評研究会	2022.3.09
東アジア仏典講読会		
78	第1回 東アジア仏典講読会	2021.5.08
122	第2回 東アジア仏典講読会	2021.6.12
151	第3回 東アジア仏典講読会	2021.7.10
223	第4回 東アジア仏典講読会	2021.9.11
246	第5回 東アジア仏典講読会	2021.10.16
308	第6回 東アジア仏典講読会	2021.12.11
364	第7回 東アジア仏典講読会	2022.1.29
390	第8回 東アジア仏典講読会	2022.2.12
	第9回 東アジア仏典講読会	2022.3.19

該当頁	活動内容	日付
EAA研究会「東アジアと仏教」		
323	第1回 EAA研究会「東アジアと仏教」	2021.12.22
418	第2回 EAA研究会「東アジアと仏教」	2022.3.09
日中韓オンライン朱子学読書会		
25	第5回 日中韓オンライン朱子学読書会	2021.3.20
91	第6回 日中韓オンライン朱子学読書会	2021.5.22
164	第7回 日中韓オンライン朱子学読書会	2021.7.16
203	第8回 日中韓オンライン朱子学読書会	2021.8.28
230	第9回 日中韓オンライン朱子学読書会	2021.9.25
327	第10回 日中韓オンライン朱子学読書会	2021.12.25
東京大学GSIキャラバンプロジェクト		
178	GSI Caravan Project “Conditions of Sovereignty” The 1st Workshop	2021.7.24
244	東京大学GSIキャラバンプロジェクト「主権の諸条件」第2回 ワークショップ	2021.10.16
260	東京大学GSIキャラバンプロジェクト「主権の諸条件」第3回 ワークショップ	2021.11.06
289	東京大学GSIキャラバン・プロジェクト 「群島と太洋の思想史――太平洋のグローバル・ヒストリー」第9回研究会	2021.11.27
318	東京大学GSIキャラバンプロジェクト「主権の諸条件」第4回 ワークショップ	2021.12.18
407	東京大学GSIキャラバン・プロジェクト 「群島と大洋の思想史――太平洋のグローバル・ヒストリー」第11回研究会	2022.3.04
425	東京大学GSIキャラバン・プロジェクト 「「小国」の経験から普遍を問いなおす」国際ワークショップ	2022.3.16

編集委員
具裕珍（主幹）　石井剛　張政遠
田中有紀　高山花子　伊野恭子

編集協力（五十音順）
宇野瑞木　郭馳洋　片岡真伊　崎濱紗奈
田村正資　前野清太朗　渡辺理恵

イラスト
山口潔子

のぞみを開く
――東京大学東アジア藝文書院 2021 年度報告書

発　行　日　　2022 年 4 月 25 日
発　行　者　　東京大学東アジア藝文書院
制 作 協 力　　一般財団法人東京大学出版会
デ ザ イ ン　　株式会社 designfolio ／佐々木由美
印刷・製本　　株式会社真興社

© 2022 East Asian Academy for New Liberal Arts, the University of Tokyo

EAA | 東京大学東アジア藝文書院
EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS, UTokyo